

HITMAN 2 『世界線を超えた先に』

ふもふも早苗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「HITMAN2」のエージェント47が色んなところへ仕事をしに行く短編小説集。

HITMAN 『世界線を超えて』 (<https://syosetu.org/novel/166215/>) の続編になります。

前作をご覧になられてからこちらを閲覧するのを推奨しています。

アンチ・ヘイトにはならないようにできる限り気をつけているつもりですが、元ネタが元ネタなのでターゲットはそれなりに悪役になりますのでご容赦ください。

今作では別アプローチは作成しません。読まれた方が各々別アプローチを想像して楽しんでいただければ幸いです。

現実世界を舞台にした作品に行く場合は、舞台となる場所は実際に存在する場所なことがほとんどですが、勿論現実の団体、施設、組織とは一切関係はございません。

2019/08/19 追記：なんとなくタイトル変更しました。

2019/09/24 追記：タグには仲間になったメンバーの作品のみ記載することになりました。

現在までのクロスオーバー作品一覧（ロケーションの登場のみの場合あり）（2019/11/15）

ゼロの使い魔 ポケットモンスター SPECIAL 艦隊これくしょん ゲート

自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり ヨルムンガンド 東方Project 名探偵コナン 荒野のコトブキ飛行隊 絶体絶命都市2

目次

HITMAN 2 『ワールドセーフティ』

1

HITMAN 2 『ポケモン達の戦場』

18

HITMAN 2 『季節は変わっても人は

変わらず』

37

HITMAN 2 『暗殺者のお得意様』

59

HITMAN 2 『無色の諜報員』

75

HITMAN 2 『深淵の森』

95

HITMAN 2 『黒と無色の人』

108

HITMAN 2 『深海からの暗殺者』

127

HITMAN 2 『警察庁への挑戦』

145

HITMAN 2 『受領』

165

HITMAN 2 『自縄自縛』

188

HITMAN 2 『凍てつく熱波』

207

HITMAN 2 『災厄の地』

222

HITMAN 2 『怒りの理性』

241

HITMAN 2 『調停者』

260

HITMAN 2 『躰』

287

H I T M A N 2 『復讐の亡霊』	—	300
H I T M A N 2 『感情のハザマで』		
	317	
H I T M A N 2 『暗躍』	—	343
H I T M A N 2 『鉄紺の疑惧』	—	366
H I T M A N 2 『相思相愛』	—	388
H I T M A N 番外編『シヨーストッパー』	—	
	404	
H I T M A N 番外編『明日の世界』		
	430	
H I T M A N 番外編『黄金の鳥籠』		
	453	
H I T M A N 2 『奇跡の暗殺劇』		
	664	
H I T M A N 2 『アサシネーション・レポート』	—	471
H I T M A N 2 『デイザスター・レポート』	—	508
H I T M A N 2 『エスケープ・レポート』	—	526
H I T M A N 2 『地獄への直行便』	—	551
	585	
H I T M A N 2 『頼れる仲間』	—	602
H I T M A N 2 『けじめ』	—	638
H I T M A N 2 『地底を揺るがすモノ』		

- HITMAN 2 『ディープレクラウド』 688
 HITMAN 2 『収集作業』 705
 HITMAN 2 『大洋を翔けた男』 728
 HITMAN 2 『亡霊の長い手』 744
 HITMAN 2 『萌芽』 764
 HITMAN 2 『亡霊のしっぽ』 789
 HITMAN 2 『深撃』 814
 HITMAN 2 『探偵の御膳立て』 832
 HITMAN 2 『見捨てられたアメリカ』 849
 HITMAN 2 『窃盗犯は誰?』 871
 HITMAN 2 『奇妙な日常』 888
 HITMAN 2 『2020年式電子精霊群』 913
 HITMAN 2 『世界の中枢から』 943
 HITMAN 2 『終幕の世界 I』 973
 HITMAN 2 『終幕の世界 II』 1008

- 1134 HITMAN 2 『不幸な研究者』
- 1117 HITMAN 2 『調査を止めろ!』
- 1097
- 1090 HITMAN 2 『もつともつと大きく!』
- HITMAN 2 『とある日の47』
- 1066 HITMAN 2 『独立』
- 1039 HITMAN 2 『終幕の世界 III』

HITMAN 2『ワールドセーフティ』

『ヴァリエール家へようこそ。47。』

『トリステイン王国でも有数の大貴族であり、王家にも繋がりを持つ公爵家の家は、周辺の森や山などの敷地を含めれば、私達の世界で言うルクセンブルグとほぼ同じ面積があるわ。』

『家自体も大きく、内部には100人以上のメイドや使用人が居るようね。それでも家自体が広いからあまり多くの人数がいるようには見えないかもしれないわ。』

『メイド長は今日一日この館内で過ごすことがわかつてる。執務室の方は3階の東端の部屋よ。もちろん警備はそれなりにいるでしょうから注意して。』

『季節は夏。魔法学院も最後の休暇ともあって、主要人物であるルイズ、サイト、キュルケ、ギーシュも来ているわ。タバサも来ているけれど、今回は主要人物たちと共に行動してもらおう。こちらの作戦は伝えていないから注意して頂戴。』

『健闘を祈っているわ。』



くくく

森を抜けた先に中世の古城のような館が見えた。あそこがヴァリエール家の本邸だろう。私は森の向こう側の空き地にへりでやってきた後、ココまで約10キロほど森の中を歩いてきた。

手始めに館の手前に広がる噴水付きの大庭園に忍び込んだ。家の敷地の外周には高めのフェンスがあり、門の部分には警備兵が立っていたが、そもそも大貴族の家に忍び込む輩などほとんど居ないのもあり、館自体の警備はそれほど厳重ではないようだ。

生け垣の向こう側で庭師が二人会話しているのが見えた。私は生け垣に隠れながら近くまでより、耳をそばだてる。

「えーつと・・・ギーシュ・ド・グラモン様。」

「うん。」

「キュルケ・アウグスタ・・・なんだっけ?」

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。しつかり覚えなないとどやされるぞ?」

「でもよお。ツエルプストーって言ったらヴァリエール家の天敵みたいなもんじゃない

か。それが何だってここに?」

「そんなの俺が知るかい。聞いた限りだとルイズ様が招待されたらしいが・・・。」

「おかげでメイド長も大慌てで準備に奔走してるじゃねえか。仕事増えまくりだろ。」

「まあメイド長はそこまで苦にはしてないっほいけどな。むしろ嬉しそうだったぞ。」

「まあたしかにな。さつきも、私自慢のパイを作って差し上げるの”って嬉しそうに厨房へ行ったしな。」

「ああ、あの出てくる時は必ず1切れ2切れなくなってるパイな。あの人パイ好きだからなあ。」

###アプローチ発見###

「まああんなパイは他では味わえねえしな。ルイズ様も大好物みたいだし。」

「ツエルプストーのお嬢さんにも食べさせるつもりなんだろうか?」

「まあおそらくな。」

~~~~~

『メイド長のカサブランカ・メリーはパイを作るのが得意みたいね。提供する時は数切れなくなるところから考えておそらく我慢しきれずに自分で味見をしてみよう。あなたならもつとおいしくなる隠し味を提供できるんじゃないかしら?』

私は話し続ける庭師を尻目に庭の中を進んでいった。館の庭はサッカー場よりも広く感じられ、実際おそらくそのくらい広いだろう。庭師も確認できるだけで先程の二人を含め10人ほどが働いているのが確認できる。

私は館に比較的近く、生け垣の密度が高い場所で一人作業をしている庭師に目をつけた。慎重に背後から忍び寄り、周囲の庭師がこちらを見ていない時を見計らって後ろから羽交い締めにして地面に引きずり下ろし、そのまま首を絞めて気絶させた。

気絶させた後はいつものように服装を借り、生け垣のなかに気絶した庭師を隠した。私は庭師の格好で館の外壁沿いにある花壇の手入れをするふりをしつつ、館内部の人員配置を窓から確認して回った。幸いにして庭師のリーダーのような人物は居ないらしく、この格好でうろついていても誰も気にもとめなかった。

外周を回っていると厨房と思わしき部屋を見つけた。中を覗くと中央のテーブルで何かを混ぜ合わせている初老の女性が居た。

~~~~~

『アレがメイド長、カサブランカ・メリー。彼女に罪も恨みもないけれど、我々の渡界機

検証のために協力してもらいましょうか。』

~~~~~

現在時刻は午後2時過ぎ。昼食の後片付けも終わった後ということ。厨房にはターゲット1人しか居なかった。ここからシルバーボーラーで撃ち抜くことも出来たが、それでは事故に見せかけることは出来ず、館に來ているサイトあたりは銃創を見た瞬間にこの世界の銃ではないことくらいは見破るかもしれない。

現在ターゲットは各種粉を混ぜ合わせている段階。パイを作っているとすればまだ時間はおかると予想されるので、一旦その場を離れて少し先にあつた農具小屋に向かつた。

農具小屋の中には様々な園芸用の器具と様々な薬品が置かれていた。おそらく魔法で除草剤や農薬、肥料などを調合して使用しているのだろう。私はその中から札に“除草”と書かれた瓶を取つた。中には白い粉のようなものが入つていた。訓練施設でありとあらゆる有毒物質を学んだからこそ見分けがしたが、おそらくこれはパラコートと同じものだろう。

私はその粉末を近くにあつた空の瓶に少量移し、小屋の外にあつた水瓶の水で溶かした。厨房に戻ると、ターゲットは牛乳などを混ぜ合わせる作業に入つていた。私は厨房

裏の勝手口のドアをノックした。ノックに気がついたターゲットは作業を中断して扉の方へ来た。

「はい？どうしました？」

「すみません。表の庭のほうでトラブルが合ったようです。すぐに来てほしいと。」

「あら、どうしたのかしら。何かわかります？」

「私はこの周辺を担当していたので詳しくはわかりません。この言伝も表の庭から掛けてきた別の方から聞いたもので。」

「そうですか・・・わかりました。ご苦労さまです。」

「では私は作業に戻ります。」

「はい。お願いしますね。」

勝手口が閉められ私は近くの生け垣で作業をするふりを始めた。厨房をチラチラと覗くと、製作中のボウルを冷蔵庫と思われる特徴的な戸棚に入れてターゲットが小走りで厨房から出ていったのが確認できた。

私は勝手口に掛けられた鍵をロックピックで素早く解錠すると内部に侵入。戸棚を開け、中のボウルを取り出した。パラコート溶剤を中に入れて流しに置かれたヘラで軽くかき混ぜる。パラコート溶剤は無色透明なため特に違和感なく混ぜた。若干異臭がしているが、戸棚の中には様々なものが一緒に置かれており、それらの匂いと誤認さ

せることもできるだろう。牛乳やその他の食材を入れてしまえば匂いもそこまで気にならなくなるはずだ。それを戸棚に戻し、私は厨房から館内へ侵入した。

###アプローチ完了###

~~~~~

『よくやったわ。これで味見をしたターゲットは中毒を起こすでしょう。この世界だと水メイズに治療される可能性があるけれど、必ずしも殺害が必要なわけではないから今回はこれでいいわ。あとは執務室の破壊よ。』

~~~~~

流石に庭師が館内で歩いていれば不自然に思われるので見つからないよう慎重に進む。曲がり角の先で2人の執事服を来た男性が居た。なにか話をしているようだが遠すぎる上、かなり小声で話しているようで聞き取るのは不可能だった。

そのうち話が終わったのか一人がこちらにやってきた。私は柱の陰に隠れそれをやり過ぎると、通過した執事を後ろから羽交い締めにした後首を絞めて気絶させた。近くの部屋を開けて中に誰も居ないことを確認すると、その中へ気絶させた執事を担ぎ入れ、服装を借りた後、部屋のクローゼットに押し込んだ。

館内を歩いていると大ホールの2階部分に出た。そこには階下のホールで談笑する見覚えのある集団が見えた。談笑の声は大きく、ココまで聞こえてくる。

「じゃあ今日こそはしつかり聞かせてもらいましょうか。」

「な、何をだよ。」

「そりやあ勿論・・・ねえ？」

「・・・まあ僕も興味が無いわけではないな。ミス・モンモランシーといずれはそういう仲になるわけだし・・・。」

「タバサも気になるでしょう？そういう話。」

「特に。」

「だーかーら。特に話すことなんて何も起こってねえつてーの!」

「ほんとにいい？もうキスは済ませたんでしよう?」

「キッ!」

「まあサイトは一応サモン・サーヴァントのときに一回やつてるだろうけども。」

「それはノーカンよ。愛もへったくれもないじゃないのあんなの。」

「あ、愛つて・・・。」

　　どうやらサイトがキュルケにルイズとの関係を弄られている最中のようだ。当人であるルイズの姿が見えないが、大ホールの真ん中でかなりの音量でする話ではないと思



うのだが。

するとそこにホールの奥の扉が開かれ顔を真赤にしたルイズがやってきた。

「キ、キ、キュルケ！あんた大きな声でなんてこと話してんのよ！」

「あら、ルイズ。おかえりなさい。」

「おかえりなさいじゃないわよ！そういうのはするならもつと小声でしなさい！隣の部屋にまで筒抜けだったわよ！」

「まあこのホールはそれなりに声が反響するようだし。無理もないな。」

「俺はしたくてしたわけじゃねーぞ!？」

「別にいいじゃない。ご家族への挨拶も済ませたんでしよう？」

「そ、そりゃあ形式的なものは済ませたけど・・・。」

「ところでルイズ。我々はいつまでココに居ればいいんだい？」

「ああ、そうだったわ。お父様がもうすぐ執務が終わってこちらに来るから。こっちの応接室で待つようについて。」

#####

「おお・・・ヴァリエール公爵に会うのはいつぶりだろう。いつも緊張するよ。」

「あら、私は緊張なんてしないわ。むしろやっと会えるって感じ。公爵ともなるとやっぱり色々忙しいのね。」

『執務室の主であるヴァリエール公爵の執務はもうすぐ終了するようね。人的被害を出さずに執務室を破壊するには願ってもないチャンスじゃないかしら。』

~~~~~

彼らはルイズに連れられてホール奥の扉から隣の部屋へ入っていった。タバサが一瞬こちらを見たが、その後あたりを見回していたところを見るに私には気が付かなかつたようだ。

私は大ホールからそのまま奥の3階へ上る階段を上り、執務室へたどり着いた。執務室の扉の前には警備兵が2名立っており、気づかれずに侵入するのはかなり難しいだろう。外壁の窓からの侵入も難しい。先ほど外に居た時に確認したが、この屋敷は貴族の屋敷にしては装飾が少ないのだ。ヴァリエール公爵が質実剛健な人物なのが影響していると思われるが、少なくとも外壁に足場や手すりになりそうな突起は殆どなかったのを確認している。

しばらく様子を見てみると部屋の扉が唐突に開いた。

「旦那様。」

「今日の執務は終了だ。ルイズはどこに居る？」

「はっ。1階の第2応接室にてご友人方とお待ちになられているかと。」

「うむ。では出向くとしよう。」

「警備は我々にお任せください。」

警備兵が二人留まっていると内部に侵入できない。私がどうしたものかと思案しているところ……。

キヤー！

「む？何だ今の悲鳴は。」

「わかりません。いかが致しましょう？」

「1名を残し様子を見にいけ。私も行こう。」

「了解しました。」

~~~~~

『観測班によると、ターゲットのカサブランカ・メリーがどうやら中毒症状で倒れたようね。近くにいた別のメイドが気がついたみたい。』

~~~~~

思わぬ所で先に処理をしたターゲットが発見されたことで警備兵が1名まで減った。ヴァリエール公爵と警備兵1名は揃って奥の階段を降りていった。私はそのまましばらくその場に留まり、10分ほど経過したところで残る警備兵に向かって走っていく。「む、お前は。」

「旦那様から言伝を伝えにまいりました。1階で緊急事態のため館の正面ホールに集まるようにと。」

「何？しかしこの警備は……。」

「すべての兵に伝達するようにと言われています。私も伝達した後向かいます。」

「そうか……わかった。すぐに行く。」

「では私は他の方へ伝えにいけます。」

私は元来た道を戻り、廊下の曲がり角で様子をつかがう。警備兵は扉を施錠した後、奥の階段から足早に降りていった。私はすかさず扉の前に戻り、施錠された扉をロックピックで素早く解錠。執務室に入った。

#####

~~~~~

~~~~~

『執務室に侵入できたようね。上出来だわ。あとはそこを破壊するだけね。公爵や警備兵が戻ってくる前に手早く片付けましょう。』

~~~~~

執務室は書斎も兼ねているようで、部屋の壁は一面本棚になっていた。窓も半分以上本棚に覆われており、外壁に手すりなどがあっても侵入することは出来なかつただろう。

私は持参したC4爆薬を執務室の中央にあつた机の上に乱雑に置いた。破壊目標はこの部屋自体であり、すぐに爆破する予定なので置き場所も対して重要ではないためだ。そのまま踵を返し部屋を出る。階段を急いで駆け下りて見つからないようにそのまま1階へ。厨房とは別の勝手口まで到達すると爆弾のスイッチを押した。

ドガアアン！

キヤー！

ナ、ナンダア!?

~~~~~

『執務室での爆発を確認。窓は爆風で吹き飛び、そこから確認できる内部は扉も机も本

棚も粉々になったようよ。これですべての目標完了。帰還して頂戴。』

~~~~~

屋敷内の色々なところで大慌てになっているが、気にせずそのまま勝手口から外へ出た。屋敷の外でも庭師が爆発音を聞きつけて執務室のすぐ外周の庭に殺到している。私は反対側の庭を通って最初の気絶させた庭師のところまで戻ってきた。戻ってきた理由としては私のスーツを回収するためだ。私の痕跡をできる限り残さないでおきたかった。

置いておいたスーツに着替え、そのまま生け垣に身を隠しつつ最初の森の中へ戻り、指定の回収地点から脱出した。

~~~~~  
 ~~~1時間後~~~~~  
 ~~~

「もう大丈夫です。しばらく安静にしていれば明日には回復するでしょう。」

「はーよかった・・・。」

「よかったわねルイズ。でもなぜ彼女が毒なんか・・・。」

「結局何が混じってたのかわからねえのか？」

「それなんです、どうやら除草剤が混じっていたみたいですね。」

「除草剤？」

「除草剤でこんなになるものなのか。」

「非常に毒性の強い部類のもですね。水メイズが調合して生成するため平民は使わな
いのですが。」

「ということは・・・犯人は貴族？」

「その除草剤自体は外の農具小屋にもあるものです。おそらくそこから調達したのでは
ないかと。」

「ううむ・・・わかったご苦労であった。下がって良いぞ。」

「はい。」

「・・・。」

「除草剤を盛られたというところまでは話しました。おそらくそこから先はこの世界で
は特定できないかと。」

『でも意外に早く対処できたわね？本来そこまで手早く処置できるものなのかしら？』

「本来はもつと時間がかかります。どんなに早急に対処しても一週間近くは寝たきりになるはずですよ。今回のような初動が遅れた場合ですと、後遺症も残りまともに話すこともできなくなるはずですよ。やはり治癒力が異常に高まっていると思われる。」

『そう。これもワールドセーフティの力かしらね。』

「もう一つ。爆破された執務室ですが、机は粉微塵でしたが中の書類は奇跡的にほぼ無傷で回収されたそうです。」

『ふうん．．．あの爆発で無傷．．．。やはり．．．。』

「ええ。ワールドセーフティの力かと。」

『．．．実験は成功。ということかしらね。観測ご苦労さま。』

「いえ。引き続きヴァリエール家に潜伏します。」

『ええ。お願いね。』

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~  
 ~~~~~

・「命を刈り取る」

【+1000】『除草剤を使ってターゲットを攻撃する。』

・「失敗は成功のもと」

【+5000】『ターゲットを殺害しない。』

・「エキスプロージョンの特徴」

【+3000】『執務室を爆破する。人的被害を出さない。』

・「サイレントエージェント」

【+3000】『タバサに発見されない。』

HITMAN 2 『ポケモン達の戦場』

『カナズミシティへようこそ。 47。』

『この街は科学と自然の融合をテーマに開発されていて、デボンコーポレーションの本社があることでも有名ね。そして会場であるカナズミバトルコロッセオはそのデボンコーポレーションのすぐそば、すぐ東隣に作られてるわ。カナズミジムとは116番道路を挟んで向かい側になるわね。』

『今日のカナズミシティはお祭り状態で各地で露天や路上パフォーマンスが行われている。なのであなたが持っていたjaguarも今回はギターケースに収めておいたわ。これで町中も背負ったまま歩けるでしょう?』

『ターゲットは既に会場入りしているとインフォーマントから情報があつたわ。シルバーも既に会場入りしている。トーナメントの組み合わせ抽選はこちらで操作したから、ターゲットとシルバーは2回戦で対決することになるわ。もっともシルバーが1回戦で負けなければだけれど。』

『そうそう、インフォーマントから気になる情報があつたわ。マサラタウン出身のサト

シという少年がこの大会に参加しているようよ。抽選操作時には気にもとめてなかったから彼がどこに入るかは不明だけれどそこまで気にかける必要はないでしょうね。』
『大会自体を中止に追い込むのも忘れずに。試合は常時TV生中継されてるからくれぐれも暗殺の瞬間に発見されないように気をつけてね。健闘を祈ってるわ。』

~~~~~

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

ワーワーワー

信号煙火が打ち上がり間もなく大会が開始されることを告げている。兎にも角にもまずは大会の流れを把握しておきたい。私は迷わず大会本部のあるカナズミバトルコロッセオへ向かった。

会場の前にはすでに多くの人ばかりができており、会場内に入れなかった人は外周に設置されている大型モニターで観戦するようだ。アメリカのメジャーのようにモニター前の駐車場にキャンピングカーを停めてそこでバーベキューをしているやつまで居る。皆思い思いにこの大会を楽しんでいるようだ。

私はひとまず会場内に入り、入口正面の受付へ向かった。

「こんにちは！カナズミバトルコロッセオへようこそ！」

「この大会のパンフレットのようなものはないか？」

「はい。ございますよ。・・・はい！どうぞ！」

「ありがとう。参加者に知り合いがいるのだが会うことはできるだろうか？」

「申し訳ありません。参加者の方は既に控室におりまして、敗退するか大会が終わるまで会うことは基本的に出来ません。」

「そうか。・・・控室というのはココのことか？」

「はい。そこになります。ですが関係者と出場者以外は立入禁止となっています。」

「わかった。ありがとう。」

私はパンフレットを貰うと一旦会場を出ることにした。正面扉を出ると扉の近くで男が二人が興味深い話を話していた。私は近くでパンフレットを見るふりをしつつ聞き耳を立てた。

「大丈夫なんだろうな？今回は。」

「まあデボンも社長の肝いりで警備強化してるって言ってたし大丈夫だろ。」

「でもよお。デボンにマグマ団が侵入したのってつい先週じゃねえか。この大会でもなにかあったらいいよ管理能力疑われて大会どころじゃなくなるよな。」

#####プローチ発見#####

「そりやあまあ少なくともこの大会は一回こっきりになるだろうけどもな。」

「それだけで済んだら御の字だぜ。デボン本社の方にもかなりのダメージ行くだろ。」

「セキュリティ用品作つてたもんな。売れなくなりそう。」

~~~~~

~~~~~

『デボンコーポレーションは先週マグマ団の襲撃を受けて会社内部のデータのいくつかを盗まれているみたい。セキュリティ情報とかは念の為すべて入れ替えたみたいだけれど、また同じようなことがあつたら危機管理能力に疑問符がついてもおかしくはないわね。47はマグマ団よりはスマートにやれるわよね?』

~~~~~

~~~~~

私はその場を離れ、今一度デボン本社ビルとコロッセオの位置関係を確認する。コロッセオは天井がなく、4本の照明塔によって照らされるスタジアムだ。コロッセオから片側二車線の幹線道路を挟んでデボン本社がある。本社ビルはこの周辺では特出して高い建造物であり、コロッセオを見下ろせるのはこの地上15階建てのビルだけだ。私は喧騒を離れて一路デボン本社ビルへ向かった。

本社ビル正面は流石に警備員が常駐しており、丁度交代のタイミングだったようだが、常にツーマンセルで行動しているようで隙を見て侵入することも難しそうだった。私は社屋の裏手に回り込んだ。

デボンコーポレーションはそれ自体は町外れに立地していて、裏手はすぐ森になっていた。窓がいくつかあつたが、その中に裏口を見つけることが出来た。当然のように鍵はかかっているが、ロックピックをつかえば何のことはない。社内に侵入したところで通信が入った。

「こちらシルバー、47聞こえるか？」

「聞こえている。そちらの状況は。」

「今主催者から大会の流れについて説明があつた。それによると、テレビ中継は基本的にポケモンをメインに映していてトレーナーは交換を行うときくらいしか試合中は映らないらしい。」

「ふむ。」

「だけど、勝利者インタビュウの時は顔をアップで映すみたい。時間にして2〜3分。」

「ではその時に行動を起こせばいいな。不自然じゃないように負けることは可能か？」

「出来なくはない。やりたくはないけどね。」

「ではターゲットに勝利させる。インタビュウ中に暗殺する。」

「了解。中継中にポケモンが盗まれることは偶にあっただけど、トレーナーが殺される瞬間の中継は初めてだろうな。」

「大会イメージにも大ダメージを与えられるだろう。」

「でもできることなら試合前にやってくれ。わざと負けるのは気分がいいものじゃない。」

「わかった。試合形式と第一試合まで所要時間は？」

「試合は1匹のみで行われる勝ち抜き戦。ターゲットは3試合目、時間にして30分弱。」

「了解した。」

私はデボンコーポレーションの最上階を目指す。屋上からなら狙撃もしやすいだろう。社内を歩いていると外の会場から司会の前口上が聞こえてきた。どうやらそろそろ第一試合が始まるようだ。一気に会場の歓声が大きくなり、爆発音などが響き始めた。流石にトレーナーの声などは聞こえないが。

エレベーターは途中で社員と鉢合わせする可能性もあるので、非常階段を上がっている。非常階段が一番会場に近い位置に設置されており、踊り場部分には消防隊進入口の窓もあるため、会場の様子は断片的には把握できる。非常階段を登りきったところで一度第一試合が終わったようだ。

非常階段を一番上まで登ったところで問題が発生した。このビルは屋上が無いのだ。正確には屋上に行くための通路や階段が存在していない。幸いにしてイベント期間ということもあり最上階のオフィスは誰も居なかった。オフィス内から狙うことも考えたが、ちょうど会場の方角だけ窓が少なく、うまく狙えない。

私は一旦他の面の窓を開け、上に登れそうなところを探した。すると会場とは反対側の壁面に排水用の配管が通っており、近い場所の窓から登ることができそうだった。私は早速窓から壁面の出っ張りや窪みなどを利用してつつ配管に到達し、そのまま屋上へ上がることに成功した。

屋上はエアコンの室外機すら無く、中央に向かって山になっている三角屋根だった。しかし縁の部分は雨水を受け止め、配管を通して下に流しているため人の通るスペースはあった。

試合の方はこれから第二試合が始まろうとしていた。試合会場を見るにあたってまた新たな問題が発生した。会場のステージはこのビルに対して直角になっており、こちらからでは一方のトレーナーの姿しか見えないのだ。ターゲットがこちらから見える位置に来るまで待たねばならない。

第二試合が始まった。しかしこちらからでは試合の半分程度しか把握できず、位置取りなどを確認している間にいつの間にか試合が終わっていた。どうやら一方的な試合



だったようだ。

「第3試合！戦ってくれるのは〜！キナギタウンから参戦のマキシドオ！」

ワーワー

「対するは〜！エンジュシティから参戦のロローラ！」

ワーワー

〜  
〜  
〜

『あのスクリーンに映ってるのがターゲットのマキシド。余裕たっぷりな顔つきだけれどどこまでその余裕が見れるのかしらね。』

〜  
〜  
〜

第3試合になり、ターゲットの番となったが、生憎と見えるのはもう一方の対戦相手の方だけであった。これでは狙えないため、ターゲットには勝ち進んでもらいたいものだ。

試合は意外にもターゲットが劣勢のようだ。スクリーンに投影される中継映像ではマキシドのバクオングと呼ばれるポケモンが相手のロローラのゴマゾウとやりに機動

力で翻弄されているようだ。このままではターゲットが敗退して暗殺の機会を失ってしまう。私は jaguar7 を構えた。バクオングは騒音ポケモンと言われているだけあり、相当な音量の音波を武器にしているようなのでその音に合わせて・・・。

バシユン！

チュンツ！

ゴマア!?

周りを高速で回っていたゴマゾウの足元に着弾させた。その瞬間ゴマゾウがつんのめるようになって速度が落ち、そこへ・・・。

ガアアアア!!

ゴマー！

「ゴマゾウ！戦闘不能！バクオングの勝ち！」

ワーワー

その音圧の攻撃をもろに食らったゴマゾウ会場の外壁まで吹き飛ばされそのまま試合は決した。なんとか勝ってくれたようだ。

「47。今なにかしたかい？」

「……。」

「隠さなくていい。ゴマゾウの動きが明らかにおかしかったからね。直撃させない辺り流石だよ。」

「ターゲットが勝ち進んでくれないければ狙撃も出来ないからな。」

「つと、僕の出番だ。幸運を祈ってるよ。」

「それはこちらのセリフの気がするな。」

流石にシルバーには見破られたようだ。近頃観察眼が目に見えて向上していて頼もしい限りだ。もしかしたらそのまま戦闘でターゲットを事故に見せかけて殺害できるかもしれないな。

スクリーンにはトーナメント表が映っている。第2試合と第3試合の結果を見るに、トーナメント表の順番で立ち位置が変わるようなので、次のターゲットの試合ではほぼ確実に私から見える方へと来ることになる。

「第4試合！まずはコガネシティからやってきたシルバー！」

ワーワー

「そして対するはー！マサラタウンからやってきた！サトシ！」

ワーワー

『47. 情報部からの情報よ。今シルバーが戦おうとしている少年。あの子はこの世界における主要人物の一人だから間違っても傷つけないようにね。』

ここにきて主要人物と出くわすとは……。しかも使用ポケモンは伏せられていたためシルバーも対策ができなかったようで、サトシ少年はピカチュウを出しているのに対し、シルバーは電気が苦手なオーダイルを出してしまっている。

しかし作戦を遂行するためには是が非でもシルバーに勝ってもらいたい。だがどうしたものか……。

そうこうしている間に試合が開始された。案の定劣勢で、オーダイルは開幕の一撃を避けられてからというものの、ピカチュウのでんこせつかと10万ボルトを躲すので手一杯という印象だ。しかしこちらから手を出すにしてもなかなかタイミングが取れない。そうして手をこまねいていると……。

「ピカチュウ！ボルテッカー！」

ピカピカピカ！

ドオオオン！

ワーワー

「オーダイル！戦闘不能！ピカチュウの勝ち！」

「やったぜピカチュウ！」

ピッピカピー！

試合が決してしまつた。計画を変更する必要が出てきたかもしれないな。サトシ少年へのインタビューが行われているときに、控室へ戻つたシルバーから通信があつた。

「……すまない。試合に負けてしまつた……。」

「致し方無い部分もあるだろう。別方向からのバックアップを頼む。」

「……了解。」

「気落ちしている暇はない。会場を出てデボン本社の警戒状況を調査してくれ。」

あとでフォローを入れておかねばならないだろうか。ブルー辺りに連絡しておこう。

その後も試合は進み、2回戦が始まつた。2回目ともなると相手が出すポケモンを知っているのもあつて知力が問われており、勝負が長引く傾向にあるようだった。実際、1回戦は最長でも15分ほどで決着がついていたのに対し、2回戦第1試合は20分かかつた。

そして第2試合、ターゲットとあのサトシ少年の試合になつた。私はこの時間を利用

して自らの弾丸にいくつか即興で改良を加えた。簡易的な改造を施す工具はケースに備え付けられているので問題はなかった。

「2回戦第2試合！東はキナギタウンのマキシドオ！西はマサラタウンのサトシィ！」

ワーワー

「バクオング、出撃。」

「いけ！ピカチュウ！」

「試合開始！」

ワーワー

試合は拮抗している。バクオングの手当たり次第と思える爆音攻撃でピカチュウは翻弄されているが、ピカチュウの方も時折10万ボルトで相手に反撃を加えている。次第にフィールドは割れた地面が隆起して山岳地帯のような様相を呈してきた。しばらく技の打ち合いが続いた後、ターゲットが窮地に陥る。

ターゲットのバクオングが乱発した攻撃によって砂煙が発生し、ピカチュウを見失ったのだ。一方ピカチュウはそれを好機として岩を利用して空高くジャンプした。

「今だピカチュウ！かみなりだ！」

ピーカーシュー！

バクオングは気が付いたが時すでに遅し、バクオングが口を開ける前にかみなりが直

撃するだろう。//横槍が入らなければ。//

バシユン

バチチ

「何!？」

ピツカ!?

「っ！バクオング、はかいこうせん!」

ガー!!

ドゴオオオン

「び、ピカチュウ!!」

私が放った特製の弾丸はピカチュウのかみなりを誘電し、狙いを外させた。その隙を見逃さず、すかさずターゲットが指示、バクオングの破壊光線が空中に居て避けることの出来ないピカチュウにもろに直撃した。

「ピカチュウ! 戦闘不能! バクオングの勝ち!」

ワーワー

なんとかターゲットが勝利してくれた。さあ、ファイナーレと行こうか。インタビュアーがターゲットへ駆け寄っていく。会場のスクリーンもマキシドのインタビュアーをアツプで流し始めた。私は通常の弾丸を装填しターゲットの顔に狙いを定め、そのまま

引き金を引いた。

「マキシドさん！また今回はギリギリの戦いで・・・」

バシユン！

ザシユツ

「・・・え？」

ドサツ

キャアアアア!!!

ナ、ナンダ!?

ダダレカー！

~~~~~

『ターゲットダウン。素晴らしい腕前ね。全国生中継で狙撃されるトレーナー。これで大会も続けられなくなるわ。任務は完了。帰還して頂戴。』

~~~~~

会場は阿鼻叫喚の悲鳴や叫びに包まれている。私はすばやくその場を片付け、来たと



きと同じ配管をそのまま一番下まで降りることにした。滑るように配管を降り、地上に降り立った後は一旦森のなかに入り、115番道路に合流した後、再度カナズミシティに道なりに入った。

会場周辺には既に警察のパトカーや救急車などがやってきていた。救急車の数が多い気がするが会場が混乱したせいで観客に負傷者でも出たのだろうか。

「47。」

「シルバーか。デボンのほうはどうなっている?」

「何も動きは無しだ。侵入されたことにすら気が付いていないんじゃないかな。」

「よし。では離脱するぞ。」

「了解……。つと、こちらはダメだ。」

「?」

「あれ。」

シルバーが指し示した先には、サトシ少年とその一行が居た。ジュンサーと話をしていようだ。目撃されたわけではないので問題はないが念には念を入れるべきだろう。私とシルバーはサトシ少年が居た116番道路方面を諦め、104番道路から離脱した。

~~~~~1週間後~~~~~

『今回の任務で大会は正式に中止、今後の開催も未定だそうよ。よくやったわ。』

「なんでも警備体制とか避難誘導とかで問題が指摘されたみたいね。私もテレビで見ただけどそりゃあもうシツチャカメツチャカだったもの。」

「姉さんも見てたんだ？」

「ええ。見てたわよ。シルバーが負けるところもしつかりとね♪」

「うぐっ！」

「デボンコーポレーションの方はどうなっている？」

『そちらも警備体制の不備や、捜査の過程で本社ビルが狙撃に使われたことが発覚したおかげで公式に捜査の手が伸びることになったみたい。今日のデボンの株価は大暴落して取引停止よ。』

「概ね想定通りということか。」

『まあそういうことになるわね。』

「それにしても、今回みたいなポケモン大会を狙った銃撃事件は過去に例がないから、今後の規制が厳しくなりそうね。」

「仕方ないよ。大会を潰すのも目的だったんだから。」

「もうちよつと事故に見せかけるのも・・・そうだわ！」

「姉さん？」

「47もポケモンを持てばいいのよ！」

「それコガネシティでも言ってたね。」

「・・・。」

「ポケモンはいいわよ！今度捕まえに行きましょう！」

「いや、私は・・・。」

『あら、良いじゃない。手札は多いに越したことはないわ。』

「でしょー！」

「・・・。」

「そうと決まれば何を捕まえるか吟味しないとね！ちよつとポケモン凶鑑持つてくるわ
！」

「ね、姉さん・・・。」

「・・・。」

『47。いい機会だから行ってきなさいな。』

「・・・善処する。」

HITMAN 2 『季節は変わっても人は変わらず』

『北ノ沢村にようこそ。47、ブルー。』

『眼の前にあるのが北ノ沢ダムよ。このダムは以前一度テロ攻撃にあっついていてね。爆破されて決壊し、下流にある街を押し流しかけたことがあるのよ。』

『でもその時は奇跡的に犠牲者は出なかった。何故だと思う？そう。例の少年探偵、工藤新一もとい江戸川コナンの活躍によるものよ。彼はすぐ近くの斜面で人為的に雪崩を起こして濁流の流れを変えたんですって。かなり無茶を試みたみたいね。』

『テロがあつてから修復作業が行われ、つい最近修復が完了したようね。折しもここ一週間結構な雨続きでダムの水はほぼ満水に近いわ。でもダム湖の周りはコンクリート製の壁になつていて管理施設からしか出られないから、ダム湖に飛び込んで逃走というのはできそうにないから気をつけて頂戴。』

『それと、情報部からの報告では毛利小五郎、毛利蘭、江戸川コナンの3名が今日同じくこのダムを訪れているそうよ。注意して頂戴。』

『くれぐれも見つからないように。スマートに仕事をしましょう。』

~~~~~

チチチチ

緑豊かな森の中から小鳥のさえずりが聞こえてくる。季節は春。新緑の季節だ。

私は今ブルーと一緒にダム横にある遊歩道を歩いている。近くの駐車場までは来るまで来ることができたが、ダム自体へは別ルートを通らねば車では向かえない。

「気分がいいわね！仕事じゃなければポケモンたちを外に出して遊ばせたいところなんだけど。」

「まだターゲットの位置も特定していない。それにこの世界にポケモンは居ない。目立つのは良くないだろう。」

「はい、わかってますよ・・・つと47。」

「むっ。」

ブルーが指し示した先には遊歩道の途中に設けられた木陰のベンチに座る一人の男

性だ。その顔には見覚えがあった。

「ふいっ……つたくなんで俺まで来なきゃなんねえんだ……。」

「こんにちわ！」

「こんにちは。」

「うえ？ああ、どうも……。」

この男は毛利小五郎。ココに来ていると情報はあった。駐車場に止まっていたセダンは彼の車だろう。ということとは……。

「もう！お父さん！早く！早く！」

当然そのほか2名も居る。道の先から毛利蘭と江戸川コナンがやってきた。毛利蘭の方はこちらに気がつくと軽く会釈をしてきたが、その脇にいる少年の方は驚愕の表情を隠せていない。だが彼ら2人にさとられまいと警戒心をむき出しにしてはいるが、何もアクションは起こす気はないようだ。

「こんにちは。お二人もダムに？」

「ええ。新しくなったダムを見に行きたいって彼がね。」

「・・・ああ。」

「へえ。」

「そちらは？ご家族ですか？」

「うおっほん。私は私立探偵をしております、毛利小五郎と言います。」

「まあ！あの有名な『眠りの小五郎』の！」

「フッフ、いかにも！」

「じゃあ今日もなにか事件ですか？」

「いえ、今日は北ノ沢村へ旅行に来たついでにというところでして。」

「あら、そうなんですかー。あ、私は青梅です。こっちが・・・。」

「サンダーランドです。」

「私の義理のおにい・・・お父さんで！」

ブルーが淡々と会話を続けていく。青梅とはブルーにつけた偽名だ。私は今回はサンダーランドという偽名を使っている。道後温泉で使った偽名を使うと関わったことのある人物と思われる可能性を考慮した。少年には関係なかったようだが。



会話を楽しんでいる用に振る舞いつつ、周囲に目を光らせるのも忘れない。そんなわたしたちの動向を少年は逐一注意深く観察している。明らかに怪しんでおり、これからなにか事件を起こすのではないかと疑っているようだ。

他愛のない雑談をしながら我々は揃って歩を進めていき、ダムof端の部分まで到着した。管理センターのような部分があるが、今回のターゲットは管理者でもダム自体でもないのをおそらく入ることはないだろう。その管理施設の下で誰かが管理人と思わしき人となにか言い争っている。その髪型や少しだけ見える横顔から判断するにおそらくターゲットだ。

~~~~~

『あれが染谷竜也。ダムの資料を集めに来たみたいだけれど、残念ながらその資料を活かす機会はなさそうね。』

~~~~~

こちらに気がつくくと最後の押しと思わしき問いかけをした後、それが無駄だとわかりターゲットはがっくりと肩を落とした。そのままボトボとダムの方へ歩いていく。毛利小五郎が管理人に話しかける。

「どうしたんだ？」

「え？ああ、いや大したことじゃないんです。お気になさらず。」

「そ、そうですねか・・・。」

「何か言い争ってみたいだけど？」

「こ、コナンくん？」

「いや、なんでも水位計測塔を見学させてほしいって言ってるね。」

#####

「水位計測塔？」

「ほら、あのダムの本真ん中くらいに建ってる塔のことさ。」

ダムの弧の外側中央付近に小さな塔が建っていた。どこからも通路らしきものも船着き場のようなものも見当たらないことから、おそらく水面下でダム本体とつながっているのだろう。同じ箇所の上には小さな建物があり、おそらくそこから入るのだと推測できる。

~~~~~

『ターゲットは水位計測塔に入りたいみたいね。入らせてあげれば信頼されて近づ

チャンスも増えるかもしれないわね。』

~~~~~

毛利一家と話していた管理人は再び管理棟の中へ戻っていった。ガチャリと音がしたのでおそらく施錠していったのだろう。私達は歩いていったターゲットを追ってダムの中央部へ向かった。

ターゲットは中央部の欄干から水位計測塔の写真を撮っていた。我々が近づくと、こちらに気が付いて近寄ってきた。

「ああ、さっきの……。」

「あの塔を見学されたいとかで？」

「そうなんです。最近のダムでああいう塔と一緒に建設されることはあまりないもので珍しくて……。」

「そうなんですか。」

「ええ。あなた方は観光ですか？」

「ええまあ。」

私達が話しているとダムの向こう側から一人の女性が駆け寄ってきた。

「社長！こんなところにいたんですか！」

「ああ、三城くん。私のことを心配してくれたのかい？なんて優しいんだ！」

「もう、冗談を言ってる場合じゃありませんよ。早く社に戻りましょう。」

「何を言っているんだ。もう少し資料を集めたいんだ。もうちよつと居るよ。」

「もう……。」

「あの……。」

「ああ、すみません。私は染谷と言います。東京で建設会社をやっています。でこちらが……。」

「秘書の三城です。社長がなにご迷惑をおかけしませんでしたでしょうか？」

「いえいえ、とんでもない。建設会社の社長さんでしたか。ダムも作るのです？」

「いやあ作ってみましたありますが、まだまだ若輩者なもんで。今回は勉強に来たんですよ。いつか作る時がかならず来ると思っていますね！」

「そうなんすか、勉強熱心ですなあ。」

「いやあ、それほどでも！ははは！」

「……すみません。社長、すこしかっこつけたがりなところがありました……。」

###情報を入力###

「というわけで私はまだここに居るぞ。」

「はあ……わかりました。私はこちら側の駐車場で待っていますので。」

「私達も行くこう?」

「私達はもうちよつとここにいるわ。ねえ、おに・・・おとうさん。」

「ああ。」

~~~~~

『情報部の調査でもターゲットは結構な気取り屋らしいことがわかってるわ。それもヒーロー願望にも近いレベルの。なにか悪事を働けば積極的に止めようと近寄ってくるかもしれないわね。』

~~~~~

私達は毛利一家と別れ、ダム中央部に残り周りを探索し始める。無論周りからはあたる景色を見ているようにしか見えないだろう。少年は毛利蘭に手を引かれながら時折こちらを見ているが、それも次第に見えなくなるほどに遠くなった。

ダム中央部には放水口があり、その反対側にはグローリーホール、所謂“ダム穴”があり、その横には先程の水位計測塔が建っている。

その場に残った私達を気にすることもなく写真を取りまくっている。毛利一家が見

えなくなつたのを確認し、水位計測塔へ入るための入り口を見る。扉は南京錠で施錠されている。私は管理棟から見えない様にブルーに立つてもらいながら南京錠をロックピックで外した。ブルーに会話を合わせるように目配せをしてから、何気ない風を装つて会話を始める。

「この施設は何の施設なんだろうか。」

「さーあ、物置なんじゃないの？」

「ん？ああ、それはあっちにある水位計測塔に入るための通路の入口ですよ。」

「そうなんですか。入っても良いのだろうか？」

「さっき私も入る許可をもらいに管理棟へ行ったんですけど門前払いされてしまつて……。」

「でもこの扉、開いてるみたいよ？」

「なんですって？……本当だ……。不用心だなあ。」

「入ってみましょ！」ガチャ

「あ！こら！勝手に入ってはいけないよ！」

「大丈夫大丈夫！うわあ、中ってこうなってるんだあ！あ！階段がある！」

「あちよ、ちよつと！」

「済まない私の娘が・・・。」

「いえ、早く追いかけてみましょう。水位計測塔はその性質上、手すりのようなものがないんです。急がないと湖に落ちてしまうかも！」

#####

「それは大変だ。急いで追いかけてよう。」

~~~~~

『水位計測塔は計測の他に水質調査や目視調査なども行っているようで、外に出る扉がある割に手すりがついていないみたいね。ターゲットをうまくおびき出してそこから湖に落とすこともできそうよ。』

~~~~~

ターゲットがブルーを追って中へ入って行き、私もそれに続く。その際、内開きの扉の前に近くにあったロッカーを倒して塞ぐ。

薄暗い通路を掛けていき、ブルーが水位計測塔の外周扉をいきよよく開け放つ。と同時にターゲットがブルーに追いついた。

「ダメじゃないか！勝手に入ったりしたら！」

「う、ごめんなさい……。」

しよぼくれたような演技も様になっている。私も追いついたところでこつそりとターゲットの足元に近場に合った消火器を転がした。

「うわ！」

「……あぶない！」

ターゲットは中に連れ戻そうと一歩足を踏み出したところで消火器に足を取られそのまま湖に落下……とはいかなかった。

ブルーが咄嗟にターゲットの手を握って一緒に落ちたのだ。正確には足場の縁に片手で何とか捕まってる状態になった。私はブルーが何故ターゲットを助けようとしたのか一瞬疑問に思ったがダムの上を見てその理由を把握した。

「大丈夫ですか!？」

ダムの上にはいつの間にか戻ってきていた毛利蘭と江戸川コナンが来ていた。私は咄嗟に状況を把握し、さも急いでやってきたかのように振る舞いつつブルーに手を伸ば



した。ブルーは私が駆けつける瞬間に縁に捕まっていた手を離し、それを私が落下中に何とか掴み直すという構図になった。不安定な体勢で掴んだせいで、私も一緒になって縁から片手一本でぶら下がる形になってしまったが。

「!!大変!おとうさーん!」

「くっ!」

少年が近くを見渡している。そのうち反対側に走っていった。おそらく入り口を見つけたのだろう。ブルーが話しかけてきた。

「お父さん!持ち上げられない?!」

「まってる。・・・くっ、2人は重すぎる!」

「!・・・」

私は呼びかけに応じてブルーを掴んでる手を引き上げようと試みる。重量的には問題なく縁のところまで引き上げられるがさも重すぎて上がらない風を装う。

そのまま少ししてから毛利小五郎と秘書も一緒になってやってきた。

「社長！」

「なんてこったあ！蘭！管理人さんに知らせるんだ！」

「わかった！」

「おっちゃん！この扉、中でなにか支えてて開かないよ！」

「なんだとお!!？」

上は大慌てだ。はたから見れば今にも落ちそうな危険な状況に映るだろう。下は湖ではあるが、すぐ近くにグロリーホールがあり、そこへ吸い込まれば無事では済まないだろうから。

ブルーはターゲットを持ち上げようとするも重くて持ち上がらないというアピールをする。

「・・・くつ。だめ、もう手に力が・・・。」

「あきらめるな！青梅！」

「・・・。いや、無理だ。」

「え？」

「何？」

「サンダーランドさん。一人なら持ち上げられるのか？」

「あ、ああ。おそらくは。」



~~~~~  
~~~~~

ドゴオン!

ターゲット死亡の報を受け、私はブルーを塔の足場へ引き上げた。それとほぼ同時にダムの上の方で金属がへしゃげるような大きな音がした。おそらく毛利蘭が扉を蹴破ったのだろう。あの扉は鋼鉄製だったはずなんだが……。

私も程なくしてブルーに引き上げられ、一息ついたところへ管理人と少年たちがやってきた。それからすぐに警察も到着し、私達はダムの上で事情を聞かれることになった。

「社長!何故!しゃちよおおお!!」

「染谷さんは今警察が搜索しています。大丈夫ですから。落ち着いて……。」

「それで、あなたがたは、なぜ、あのような、場所に?」

「あ、えつと……私が鍵が開いてるのを見つけて……。ちよつと中を見てみたくなっちゃって……。」

「通路の中ほどで私達は引き返そうとしたんですが、染谷さんはせつかくだからと塔まで……。」

「なるほど。それで、あの塔の、上で、何が、あつたんですか?」

「私が戻るように説得しに行つて、染谷さんも応じてくれたんですけど、その時足を踏み外しちゃつたみたいで……。」

「咄嗟に手を掴んだが青梅の力では引き上げるどころか逆に引つ張られてしまったようだ。」

「それで駆けつけてくれたお父さんまで巻き込んであんな状況に……。」

「あんな、状況、とは？」

「あ、それは私から説明します。私とコナンくんが駆けつけた時にはもう三人とも手をつないだ状態で宙吊り状態になってました。ね、コナンくん？」

「え、あ、うん……。」

「それで、サンダーランドさんが引き上げようとしてたみたいですけど、重すぎて無理だったみたいで。」

「それで私、手がしびれて力が入らなくなってきちゃつて……それで……。」

「染谷さんが、お二人を、助けるために、自ら、手を振りほどいた、と？」

「そうです……。」

この刑事はやたら喋りが遅いが、大丈夫なのだろうか？ 結局この事情聴取によつて導き出された結論はターゲット自身の不注意による事故で、我々はそれに巻き込まれた。ということになった。ある程度落ち着いた秘書の証言、ターゲットのヒーロー願望も決

め手の一つになったようだ。

程なくして下流からターゲットの遺体が発見されたと報告があり、我々は後日任意聴取するという事で開放された。もつとも、警察に申告した住所はICAの用意した偽の住所ではあるが。この間、少年は塔や色々などを嗅ぎ回っていたようだ。それでも例の「あれれー？」や「眠りの小五郎」が発動していないということは、事件性を証明する証拠を発見できなかったのだろう。

私達は2人で駐車場に戻る。その道中に尾行する気配を感じたのでブルーを一旦離した。

「ねえ。」

「……。コナン君だったかな。」

「よしてよ。知ってるでしょ。米花町でも、道後温泉でも会ったよね。」

「……。」

「どうやったの？」

「何がだ？」

「染谷さんを事故に見せかけて殺したんでしょう？」

「何故そう思う？」

「前科があるからね。それに、扉にロッカーが倒れて塞がれたのも妙だったし。」

「警察にも説明したが、アレは私がぶつかってその拍子に倒れたんだ。」

「……今回は証拠がないから見逃してあげる。でも……いつか必ずお前を捕まえてみせる。」

「……運が悪ければな。」

「……。」

「こなーん君。」

「!?」

「フフフ。彼に目をつけるとはお目が高いわね。これからが楽しみだわ。」

「青梅さん……あ、あはは……。」

「ふふ、じゃあね！江戸川コナン君！……ああ、間違えた。工藤新一くん！」

「!!」

ブルーがなにか少年と話していたがよく聞き取れなかった。まあ目的は既に達成しているのでさっさと離脱するに限る。

私達は駐車場に停めてあった車に乗り込んで北ノ沢村を離脱した。

~~~~~  
 ～～離脱中車内～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
 ～～～～

「あー疲れたー・・・。」

「見事な演技だった。主演女優賞物だな。」

「ありがと。でもしばらくは演技しなくても良い仕事がしたいわね。疲れちゃう。」

「水位計測塔から落ちそうになった時、本当に落ちていたらどうするつもりだったんだ？」

「この子よ。」ポントツ、ガー

「それは？」

「ドンカラス。シルバーに借りたのよ。この子が飛び出てきて私を助けてくれる手筈。」

「なるほど。しかし、この世界に居ない生物が公の場で急に現れれば騒ぎになるな。」

「そこは私の命と引換えなんだから勘弁してほしいわね。」

「・・・。」

「そういえばどうだった？」

「何が？」

「一応、47のことお父さんってことにしておいたけど、お兄さんの方が良かった？」

「・・・。」

「年齢が離れすぎてるからお兄さんはちよつと無理があつたかなつて思ったんだけど。」
「特に。」

「そう？ちよつと目尻がピクついてたみたいだけど？」

「・・・。」

「フフフ。まあそんなもんよね♪次からはお兄さんにしてあげるわね！」

「・・・好きにすると良い。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

・「高所作業中」

【+2000】『ダムの上でターゲットを暗殺する。』

・「カフェイン摂取」

【+1000】『毛利小五郎を眠らせない。』

・「正義のヒーロー」

【+5000】『ターゲットに自ら命を絶たせる。』

・「ホームズもお手上げ」

【+5000】『コナンの目の前でターゲットを暗殺する。暗殺の証拠を掴ませない。』

## H I T M A N 2 『暗殺者のお得意様』

『シンガポールへようこそ。 47。』

『フラートンホテルはダウンタウンの中心地に位置していて、有名なマラーライオンの直ぐ側にあるわ。 ドーリア式の円柱が特徴的な神殿のような雰囲気の高級ホテルよ。』

『建築自体が文化財になっているみたいで、歴史的価値も高く、目の前の通りの名前にもなってるわ。 8階建てで部屋数400室。 人気のホテルだから人も多いことに注意して頂戴。』

『ココ・ヘクマティアルは最上階のロイヤルスイートに滞在しているわ。 既に北側の博物館と南のオフィス街からは別グループが来ていて、秘密裏に銃撃戦が行われているわ。』

『うまく潜入してココ・ヘクマティアルを守りつつ、ターゲットを排除して頂戴。』

(((((

「いらつしやいませ。ご予約はされていきますでしょうか？」

「フォード・セブルスで予約している。」

「かしこまりました。少々お待ちください。．．．はい。フォード・セブルス様ですね。ようこそフライトンホテルへ。お部屋にご案内します。」

私は今、観光客の一人としてホテル内に侵入した。部屋に案内され、荷物を置き、早速ホテル内を散策という名の調査に出かける。

流石に銃声などは聞こえないが、独特のピリピリした雰囲気は5階のこのフロアにも伝わってくる。おそらく殺し屋は既にホテル内に最低でも一人はいるようだ。私はエレベーターホールの館内図を見る。しかし、この階を含めた通常の部屋のフロアしか書かれていない。スイートルームはセキュリティ上の問題で記載されていないようだ。

私はひとまずエレベーターで最上階へ向かった。最上階に着くと、1フロア貸切になつているのか人の気配がほとんどしない。廊下の右側の部屋からは人の気配がするが、左側やその他の部屋には客は入っていないようだ。ということはおそらくあの一番奥の部屋がココ・ヘクマティアルの宿泊部屋なのだろう。エレベーターの直線状には窓があるがその先には高層ビルが立っており、見晴らしはいいとは言えない。見たところ

このフロアには侵入感知用の仕掛けが色々あるようだ。私はそのままエレベーターで下の階に降りた。

3階へやってきた私は、シート交換用のカートを押している一人のコンシエルジュを見つけた。さり気なく後をつけ、従業員用のエレベーターに乗ろうとしたところを後ろから首を絞めて気絶させた。そのままエレベーターに乗り、コンシエルジュの服装を借りると、気絶したコンシエルジュはカートの中に隠した。私は5階に戻り、自分の部屋に戻った。

自分の部屋に置いておいた荷物の中から釣り竿用のケースを取り出す。無論中身は釣り竿の他に *Jaaguar* が入っている。それを持ってきたカートの中に隠し、代わりにコンシエルジュを引きずり出して部屋にあったシートをロープ代わりにして軽く縛ってクローゼットに押し込んだ。そのまま部屋を出る。ドアノブに「睡眠中につき訪問不可」の札をかけるのも忘れずに。

廊下を回り、情報を集める。エレベーターホールの隅で立ち話をしている男性観光客が居た。近くにカートを止めて作業をしている風を装って聞き耳を立てる。

「だからさ、お前チラツとでいいから見てくださいよ。」

「やだよ。あぶねーやつだったらどうすんだよ……。」

「俺らはただの一般人の観光客だぜ？俺らを殺しても数千ドルくらいにしかならねえだ

ろ。」

「わかんねじゃねえか。ビルから狙撃しようとしてたら顔なんてわかんねえんじゃねえのか?」

#####

「だから、狙撃しようとしてるかなんてわかんねえだろ?ただの覗きかもしれねえ。」

「そんなに言うならお前が見てくればいいじゃねえかよ。」

「いやあ、俺は・・・あつちの窓日差しがきつくてなあ・・・。」

「あつちは西向き、今は昼前、直ぐ側はビルで日差しなんかねえだろうが!」

~~~~~

『どうやら西の窓の向こう側に怪しい人影が居るみたいね。衛星で確認したところ、確かに隣のビルの屋上に不審な人影が居るわ。高さは丁度このホテルの8階と同じくらいね。』

~~~~~

私はカートを押しつつ西の窓際に向かった。確かに向かいのビルの中層部分に長も  
のを持った不審な人影が見える。おそらくターゲットかもしくはココ・ヘクマティアル

の私兵のどちらかだろう。私は小型望遠レンズで顔を確認する。あの顔は．．．私兵部隊のリストには載っていないかったな。そんな時丁度良く知らせが入った。

『47。情報部が殺し屋の情報を入手したわ。スマートフォンに送るから確認して頂戴。』

スマートフォンには顔写真付きの情報が記載されていた。どうやら男女2人組の殺し屋らしい。そのうちの男の方の顔はたった今さつき見たばかりだ。

『あの屋上にいるのはターゲットである殺し屋“ファイナルフォックス”のメンバー、コウ・スーチェン。元人民解放軍の狙撃手でライフルの扱いに長けている人物。気をつけてね。』

ファイナルフォックス。確か報奨金400万ドルが掛けられている有名な殺し屋だ。主にイギリスで活動していると聞いていたが、地球の反対側まで出しゃばつてくるとはよほど高額で雇われたのだろうか。私はもうひとりのターゲットの行方を探すことにした。2人が連絡を取り合っていたとしたら殺害するときのタイムラグはできるだけ小さい方が良いだろう。私はひとまずエレベーターに乗った。

（ココside）

「ココ、外にスナイパーが一人。ガッツリこつちを狙つてるぜこりや。」

「あの位置だと廊下に出た瞬間に打たれかねないっすね。」

「ぐぬぬぬ．．．。」

殺し屋に狙われるのはいつものことだけど今日は多すぎでしょ！なんなの!?!殺し屋3グループ総勢30人って!?!そのうち13人と16人の2グループはこつちをふたチームに分けて対処してるから直に終わるだろうけど、あのワンマンアーミーまで相手にしなきゃならないなんて！

「どうするね、ココ。この部屋はエレベーターからもっとも遠い。階段からもだ。逃げ



るには西側のテラスかエレベーターホールを通らにやらねえ……。」

「今考えてるの!ぐぬぬ……。」

「二応、エレベーターホールには赤外線センサーを設置したので誰かが来ればわかりますけど……。」

「来たとしても誘き出してスナイパーの前に引きずり出す役って感じだろうな。じゃなかったらとつくに突入しててもおかしくねえ。」

「ですな……むっ!」

「ん、おいでなすったか。」

「そのようです。ココさん、バスルームに隠れていてください。」

「了解。はあ……なんでこうなるかなあ……。」

私がバスルームに隠れてすぐに扉が乱暴にこじ開けられる音がして、直ぐ様サプレツサー付きの銃撃音が出た。おそらくレームの先制攻撃だと思うけど……。何も反応がないってことは手応えがなかったわけか。

そのまましばらく沈黙があったあと、バスルームの換気扇から金属音が出た。

「!レーム!」

「!チツ!そう来やがったか。」

プシュー

「ぐつ、これは催涙ガス！」

「まずいなコレは・・・。」

「レームさん、ココさん、俺が突破口を開きます。その隙に！」

「わかった。死ぬんじゃねえぞ。フラッシュバンの後3カウントで廊下に出る。ココ、行くぞ。」

「わかってる！ゲホゲホ」

「行くぞ、3！」

「私が左いきます。」

「2！」

「1！」

ボオン！

「!?待った。何だ今の音は。」

「爆発音・・・？」

「誰かが戻ってきてくれた？」

「いや、こんな早く戻ってこれるわけがねえ・・・。だとするとなんだ？」

〈 47 side 〉

最上階でサブレッツサーの銃声が聞こえたので、カートを非常階段側に置いたまま階段を上がり、最上階の非常扉の先の廊下の曲がり角へ向かい、コンシエルジュが身だしなみ確認用にとっていたと思われる鏡を使って廊下の先を覗いた。廊下を曲がった先で換気ダクトに何かを投げ入れているターゲットを発見した。ターゲットはフルフェイスのヘルメットをしており、拳銃弾では致命傷が与えられるかわからない。しかしターゲットは手榴弾をベルト付近につけているのが確認できた。

ターゲットがなにかに気が付いたようにこちらを見た。私は既の所で鏡を引つ込めた。かなり感覚が鋭いターゲットだ。私は距離を慎重に計算する。ああも警戒心が強くては身を乗り出して撃つたのでは対応される可能性がある。私は再度鏡で確認したのち、廊下の向こう側からシルバーボーラーを壁に向かって撃った。

パシユン

チユン！

ボオン！ガラガラガラ

壁にあたって跳弾した弾は計算通りターゲットの腰の手榴弾に直撃。弾け飛んだ。腰で手榴弾が炸裂したことでおそらく内蔵は破片でズタズタにされたことだろう。その上爆発の衝撃で天井のパネル材と思われるものがターゲット付近に崩れてきた。この廊下は通れなくなってしまうた。

『殺し屋「ファイナルフォックス」のレン・シンエンの死亡を確認。素早い仕事ね。後はスナイパーのコウ・スーチエンだけよ。』

私はそのまま下の階に戻りカートを押してエレベーターへ向かった。

くココsideく

「ちっ！ガスが室内にまで充満してきやがった。なんだか分からねえがココに居るのはまずい。フラッシュバンと同時に廊下に出るぞ。」

「了解。ココさん、私に隠れて居てください。」

「わかった。」

「じゃあ改めて行くぞ、3」

「2」

「1」

シユカンカラカラ…バシユン!

「GO—」

私達は勢いよく廊下へ出た。同時にレームがスナイパーに向かってM4で制圧射撃を行う。私とウゴはそれを背にエレベーターホールへ向かった。

エレベーターホールは廊下の直線状。そして非常階段が左側に…つて!廊下ふさがってんじゃないのよ!

「レーム!階段は使えなくなってる!」

「何だとお?!ちっ!一旦ホールの横に隠れる!」

「了解!」

制圧射撃を行いながら移動している。が、そろそろ弾倉内の弾が尽きる。弾が尽きた瞬間、レームもホール脇に隠れた。その時向こうも撃ってきたけど何とか当たらずに済んだ。

「さあて、これからどうするかね…」

「もうフラツシユバンは残っていません!」

「階段は使えず、エレベーターは2機ともスナイパーの射線上。どうしたもんかねえ…」

「ルツ達が帰ってくるまでここで待ちますか?」

「それしかねえが、その間にやつその他の仲間がエレベーターから来たら終わりだな。このホールは隠れるところがねえ。」

「アイツらの仲間か俺達の仲間、どちらが先にくるかですか……。」

「そういうことな。」

その時、エレベーターが動き出した。一つ下の階で止まったあと、そのままこの階へ来るようだ。時間的に早すぎる。ルツ達ではない……万事休すか……。

エレベーターが到着し、扉が開く……と同時に扉の中から銃声が轟いた。

バシユン

〈47 side〉

エレベーターに乗った私は行き先を押す前にカートから jaguar7 を取り出した。それをカートを土台にして扉が開く瞬間に撃てるようにする。カートの裏側に隠れつつ最上階のスイッチを押した。

エレベーターはゆっくりと動き出し、最上階に止まる。扉が開いた瞬間に予め照準しておいた jaguar7 でターゲットを狙撃した。

バシユン

既に割られていた窓を通過してそのまま吸い込まれるように弾丸はターゲットの脳幹部分に直撃した。ターゲットは構えていたライフルを取り落とし、そのままビルの縁に倒れ込んだ。

~~~~~

『コウ・スーチエンの死亡を確認。素晴らしい腕前ね。任務完了よ。撤退して頂戴。』

~~~~~

私はココ・ヘクマテイアル達があつげにとられているうちに、すばやく5階のボタンを押して扉を閉めた。向こうからはおそらくエレベーターの扉が開いたと思ったら中から銃弾が飛び出して、そのまま扉が閉まったようにしか見えないはずだ。

私はそのまま自分の部屋に帰ると、クローゼットの中で気絶しているコンシエルジュに服を着せ、自分は愛用のスーツに戻った。コンシエルジュをカートの上に寝かせ、廊下に誰も居ないことを確認して、廊下にカートを放置した。そのままj a g u a r 7のケースだけを持ち、エレベーターで1階へ向かった。

「急げ！お嬢と連絡が取れなくなってからもう30分も経つー！」

「わかってる。今ヨナ達の方とも連絡が取れた。無事に向こうも制圧できたっぽい。」

「そりゃいい、レームのおっさんが簡単にやられるとは思えねえが、手数は多いほうが良い。お！丁度エレベーターが来てる。乗るぞトージョー！」

「あいよ。」

ホテルの玄関を通り過ぎる際に私兵部隊の2人とすれ違った。確かルツとトージョーと言ったか。後始末は彼らに任せればいいだろう。私はそのままホテルの前に停まっていたタクシーで郊外のセーフハウスへ向かった。

~~~~~3時間後~~~~~

~~~~~

「結局何者だったの？その殺し屋は。」

「ファイナルフォックスっていう2人組の殺し屋だよ。主にイングランドで活動してるはずなんだけど東南アジアまで出しゃばってくるとはね。結構厄介でね。基本的に顔を見せるほど近くには来ないで、メインとなるスナイパーのレンジまで誘き出して仕留めるっていうやり方だ。そのスナイパーは元人民解放軍のエリート部隊出身で、腕前だ



「けならルツより上だよ。」

「ふうん。レームとウゴだけでよく対処できたね。」

「あー・・・それがね、ヨナ。」

「俺とウゴはほとんど何もしちゃいねえ。」

「え？じゃあココがやったの？」

「私がやれるわけ無いでしょ・・・。なんかよくわかんないうちに2人共殺されてたんだよねえ。」

「はあ？」

「おっさんがやったんじゃないのか？」

「ルツ。お前アイアンサイトのM4で500m咄嗟に狙撃できるか？」

「あ、無理っすね。」

「エレベーター内から誰かが狙撃した。それが誰なのかを今調べてるところ。」

「わかるの？」

「監視カメラ映像は入手したからねえ・・・。んん??」

「どうしましたココ。」

「バルメ、この人見覚えある？」

「うーん・・・見覚えありませんね。パラミリか何かではないのですか？」

「パラミリがわざわざコンシエルジュの格好するう?」

「変装してることとは用意周到なやつてことだろ。でもなら何故ココじゃなくて殺し屋の方を狙ったんだ?」

「癪だけどHCL I本部にも問い合わせてみるか。今後敵にならないとも限らないし。」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~
 ~~~~~

・「HOTELMAN」

【+1000】『コンシエルジュに変装する。』

・「語学の賜物」

【+3000】『ターゲットの手榴弾を誘爆させる。』

・「上へ参ります」

【+3000】『エレベーター内からターゲットを狙撃する。』

・「すばやく、静かに、徹底的に」

【+3000】『ココ・ヘクマティアルとその私兵に姿を見られない。』

## HITMAN 2 『無色の諜報員』

『横浜へようこそ。47。』

『ここは横浜みなどみらい地区にある赤十字病院よ。かなり大きめの総合病院で、横浜港湾部の救急搬送の担当でもあるわ。』

『この病院には現在102名の患者と43名の医者、83名の看護師と看護婦が所属しているわ。あなたはこれらの人々に紛れつつ、死体安置所に居るターゲットを生き返らせ、我々の組織に連れ帰ってもらうことになる。』

『当然人目に全く触れずにというのは困難を極めるわ。院内には監視カメラも多数設置されてる。それらの合間を縫うのはほぼ無理。カメラの記録消去も行わなければならぬわね。』

『あなたならそれくらいできるわよね?・・・ああ、そうそう。交渉に失敗して我々ICAに加わる気がないというのであれば、残念だけれどもう一度死んでもらって頂戴ね。』  
『健闘を祈ってるわ。』

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ピンポーン

「受付番号213でお待ちの前田様。第2診察室へお越しください。」

病院という場所は、医療関係者以外大多数が何らかの体調不良を患っており、私の行動を阻害したり妨害したりできるほどの体力があるものはあまり居ない。その意味ではやりやすいように思えるが、この国では医療関係の設備や人員が根本から足りておらず、病院といえれば待合席は常に混雑しており、常にいたるところに患者がいる。衆人環視の状態で任務を遂行するのは非常に難しい。

私は今、病院の研修医の一人という名目で白衣を着ている。無論、責任者クラスにはバテてしまう可能性が高いが、一般の看護師や警備員を騙すのにはもってこいの服装と言える。

病院の施設図は公式ページに載っていたためブリーフィングの段階で簡単に把握することができた。それによると、死体安置所は2階の北側の端にあるようだ。私はひとまず病院裏手の救急外来入口の真上の廊下で外を確認しつつ待った。今のうちに死体安置所の職員に成り代わることもできるが、救急車で運ばれてくるターゲットに警官が

付いている可能性が高く、危険と判断した。

しばらく身を隠しつつ待っていると、サイレンを鳴らさずに救急車が入ってきた。周りの人間も落ち着いているところから見て、一般の救急ではなさそうだ。私は窓の位置を変えつつ、運ばれてきたものを確認する。救急車から降りてきたのは布にくるまれた死体だ。そのそばに居るのは・・・警察官・・・ではないな。だが明らかに遺族という感じでもない。脇に拳銃を隠し持っているところからみて、おそらく公安警察だ。

私は死体安置所の近くへ移動する。部屋の前では術衣に身を包んだ職員が2名待っていた。程なく近くのエレベーターが開き、先程確認した遺体が運ばれてきた。随伴してきたスーツの男が職員と話をしだした。私は少し離れたところからそれに聞き耳を立てる。

「先程連絡しました。公安の高安です。こちらの遺体の司法解剖をお願いいたします。」
「了解しました・・・。っとまたこれは派手に・・・。ここまで損壊していると身元の特定は困難を極めますよ。」

「それは聞いています。できる限りで構いません。」
「わかりました。やるだけやってみます。」

「それと、一応これは公安の案件なので警察が来ても遺体には触れさせないでください

い。」

「わかってますよ。そのあたりのことは慣れっこです。」

「ではよろしくおねがいします。何かありましたら・・・ここまで。」

「はい、了解しました。ご苦労さまです。」

一通り受け渡し作業が行われた後、公安の人間は帰っていき、遺体は安置所の中へ搬送されていた。私はタイミングを見計らって安置所の中へ潜入した。

安置所の中はこの白衣では不自然であり、服を着替える必要が出てくる。私はひとまず近くの事務室のような部屋に身を隠した。事務室には本日搬出作業が行われる遺体のリストが個人情報と共に置かれていた。そしてそのリストのバインダーに追加で挟む形でメモ書きが挟まっていた。

#####情報を入力#####

~~~~~

『このメモによると、運ばれてきた遺体は公安の管轄である旨と、その遺体だけ特別に警戒が敷かれることが書かれていたわ。遺体は安置所最奥のG-5ブロックの0070番のボックスに收容されるようね。』

~~~~~  
~~~~~

収容場所がわかったのは好都合だ。私は一通りのプランを立てる。

まず、安置所の職員から衣服を借り、その衣服で安置所を閉鎖。その後にはリザレクター2で生き返らせた後、交渉して我々の組織に引き込む。交渉決裂の場合は止む終えないが再び死んでもらう。その際の騒音を考慮しての安置所閉鎖である。交渉がまともればそのまま安置所を脱出、1階にある警備室の防犯カメラのシステムを破壊して離脱だ。スムーズに事が運ぶとは到底思えないため、時間指定は設けないほうが良さそうだ。臨機応変に対応していかなければならないだろう。

少しした後、奥から職員が帰ってきた。私は更に隣の部屋に身を隠す。職員はそのまま事務所に入ってきた後、机に座って何かを書き始めた。向かい合う形になっているため片方を気絶させればもう片方に気が付かれてしまう。私は部屋の中にあつた消火器を手にとるとそれを地面に放り投げた。

ガンツ！カラカラカラ：

「な、なんだ？今の音は？」

「さあ、なんか落ちたような音だったけど。」

「オイオイ、あつちの部屋は色々薬品が置いてあるんだぞ。ちよつと見てくる。」

「ああ、頼む。」

職員の一人在が部屋の中に入ってきた。私は近くの物陰に隠れつつ期を伺う。転がった消火器に気が付いた職員は私には気が付かず通り過ぎ消火器に向かった。私は彼を後ろから首を絞め気絶させた。

服を借りた後、近くのロッカーに押し込み、私は一旦廊下へ出た。廊下から大回りで再び事務室へ向かい、今度はもうひとりの職員を背後から殴り倒した。この職員は安置所の鍵を持っていたようで、その鍵を使って正面の扉を施錠した。そのまま安置所の奥へ進んでいき、先程メモにあったG-5ブロックの0070番のボックスを開く。

中には布にくるまれたままの遺体があった。布をどけると黒焦げになった人形のかがかがあった。顔は完全に焼け落ちている上にか大きな力が加えられたのか顔の半分近くがへしゃげていた。ボディラインからして女性と思われるということ以外はほとんど何もわからない。手足は炭化しており、その大部分は欠損している。

以前タバサに使ったりザレクターでは欠損部位が多いと正常に復活できないということだったが、今回技術部は新たな成分を追加しており、空気さえあれば体の50%が欠損していても問題なく修復できるようになったらしい。前は薄紫だったが今回は薄い黄緑色といったところだ。私はそれを遺体にむかつて振りまいた。



まんべんなくかかったりザレクターは、黒焦げに炭化した遺体を見る見るうちに人間のそれに戻していく。欠損していた足も根本から骨が植物のように生えてきて筋肉や血管などが生成され、数分で元通りの人間の足になった。

・・・つと。しまった。黒焦げになった服装のことをすっかり失念していた。流石に大人の女性が全裸で歩き回るのは不自然にも程がある。何か他の服装を探さないといいないだろう。私は近くの他のボックスを手当たり次第に開ける。様々な死体が入っていたが、その中に成人女性の遺体があった。好都合なことにまだ服を着ており、胸部に血の跡がある以外は機能面では問題なさそうだ。私は失礼して遺体から下着だけを剥ぎ取り、丁度修復が9割ほど終わったターゲットの横に置いた。下着以外は先程の事務室の職員の服でいいだろう。

炭化していた体は完全に女性のきめ細やかな肌に戻っていた。半分へしやげていた頭も美しい銀髪とともに元通りになっている。ターゲットもとい、元組織のエンジニアト「キュラソー」は完全に元通りになった。

「うぐ・・・。」

「気が付いたか。」

「・・・ん、ここは・・・地獄にしては殺風景だけど・・・。」

「残念ながら地獄ではない。君は現世に戻ってきた。」

「お前は・・・?」

「エージェント47。そう呼ばれている。好きに呼べ。」

「私は・・・東都水族館で・・・観覧車に押しつぶされたはず・・・。」

「そうだ。そして重機の爆発に巻き込まれ炭化するまで焼かれた。覚えているのか?」

「押しつぶされる直前までは。なるほど、組織はまだ私をこき使おうつてのね・・・。」

「我々は君の所属していた組織とは違う。」

「何?」

「組織は君が死んだことを完全に把握している。君は組織から完全に逃れることに成功したと言える。」

「馬鹿な。なら何故私はここに居る。」

「我々が生き返らせたからだ。君をスカウトするために。」

「スカウト? 私を? 組織を裏切つて組織から狙われるであろう私を? あなた達痛い目を見るわよ。」

「そうだろうか。」

そこで私は情報部から手に入れた確度の高い情報を耳打ちで彼女に伝える。彼女の目はみるみるうちに驚愕の表情になっていく。

「な・・・何故それを!」

「我々をあまり舐めないほうが良い。信頼する気になれたか？」

「・・・。わかったわ。あなたたちについていく。でも一つだけ頼みがある。」

「聞こう。」

「子どもたちに・・・。あの時会った子どもたちに一言お別れとお礼を言いたい。」

「・・・少し待て。」

~~~~~

『上級委員会に確認したところ、江戸川コナン、灰原哀の両名以外への面会ならば許可されたわ。両名が居るもしくは合流してきた場合は速やかに撤退してもらおうことになるけどそれでも良いなら。』

~~~~~

「江戸川コナンと灰原哀以外の子どもたちへの面会は許可された。」

「・・・やはりあの二人は・・・。」

「丁度時間的には阿笠邸に帰宅している頃だ。今から向かうが良いか？」

「了解。じゃあ・・・これからよろしく。エージェント47。」

「ああ。」

『仲間引き込めたようね。組織の上層部にはこちらから手出しさせないように圧力をかけておくわ。あなたはそのささやかな願いを聞き届けたら速やかに帰還して頂戴。』

~~~~~

その後、適当な服装に着替えたキュラソーは病院を抜け出した。安置室の入口で警備をしていた公安の人間2人を、目にも止まらない速さですばやく首元への一撃で昏倒させたのには驚いた。おかげで大した騒ぎにもならず、1階の警備室の制圧も難なくこなし、監視カメラシステムを破壊した後、堂々と正面玄関から脱出することが出来た。私達は乗ってきて駐車場に停めてあった車に乗って一路阿笠邸を目指した。

私は白衣から車に積んでおいたいつものスーツに着替えていた。キュラソーには同じく積んでおいた亡くなる直前の服装と同じものを渡して着替えさせた。

高速道路を走りながらキュラソーが話しかけてきた。

「私が逃亡することは考えないの。」

「逃亡できると思ってるのか？」

「まあ無理でしょうね。あのお方の居場所すらリアルタイムに把握している組織相手じゃね。」

「任務に忠実であれば一般の生活もできる。私が言うのも何だが、あの組織より福利厚生はしつかりしていると思うぞ。」

「はっ、福利厚生ねえ……。」

「本部に戻ったら同僚を紹介しよう。適性試験と必要訓練の後、しばらくは私と一緒に任務を行うことになるだろう。」

「一応、これでも身体能力には自身があるのだけれど。」

「それでもだ。」

私達は都内に入り、阿笠邸のある米花町へ向かった。阿笠邸の前まで来たときには既に日付が変わりかけていた。すると家の中から子供達が出てきた。

「結局こんな時間になってしまったのお。」

「しゃーねえさ。色々ありすぎたからな。」

「じゃあ哀ちゃん！また学校で！おやすみー！」

「ええ。おやすみ。」

「おやすみなさい、灰原さん。」

「あー疲れたぜ……。」

灰原哀はそのまま阿笠邸に残ったが江戸川コナンのほうが少年達に付き添ってしまっている。引き剥がしたいところだが……。

『47。バーンウッドよ。今情報部が近くの中継車から探偵バッジの回線に割り込めな
いか探つてるから、そのまま尾行して頂戴。』

「わかった。ココからは徒歩のほうが良いだろう。」

「……。」

私は江戸川コナンに気が付かれないようにかなり遠距離から尾行を行う。少年たちの家まで中ほどといったところまで来ると、少年たちが突然立ち止まった。

「ん？阿笠博士から……？」

ピッ

「どうした博士？」

「おお、新……コナンくん。ワシのところ忘れ物が見つかったぞ。」

「え？別に何も忘れてないはずだけど？」

「とにかく一旦戻ってくるんじや。」

「あ、ああ、わかったよ。」

ピッ

「というわけだお前ら。ちょっと俺は戻る。お前らだけで帰れるか？」

「大丈夫ですよ。いつも通ってる道ですし、それなりに明かりもあります。」

「じゃあココでさよならだね。また学校で！コナンくん！」

「ああ、じゃあな！」

「じゃあなー。」

『技術部が開発した声紋擬態装置はなかなかの性能ね。』

「あの少年を騙せるのは凄い性能だな。だが長くは持たないだろう。」

「ええ。じゃあ行ってくるわ。」

キュラソーは少年たちのもとへ向かっていった。私は車を回してくるとしよう。

「・・・あれ？あのお姉さんじゃない？」

「ええ？お！ホントだぜ！おおい！」

「元太君！もう夜も遅いんですから・・・。」

「また会ったわね。」

「お姉さんも米花町に住んでたんだ！」

「いえ、私はここには住んでないわ。」

「記憶が元に戻ったんですね？」

「ええ。おかげさまでね。」

「で、ねーちゃんこんなところで何してんだ？」

「私はね、これから遠いところへ行かないといけなくなっちゃってね。お別れと、お礼に来たのよ。」

「えー！じゃあもう会えないの？」

「そんなの悲しいです！」

「なんでだよ！」

「ごめんね。でもコレは仕方のないことなの。君たちのおかげで記憶も取り戻せだし、なにより……。」

「……？お姉さん？」

「君たちと遊んだことで大切な何かを思い出せた。だから君たちには本当に感謝してるわ。ありがとう。」

「えへへ……僕たち大したことはしていませんよ。」

「結局遊んじやってたしな。」

「歩美たちも楽しかったよ！」

「うん。私も、本当に楽しかったわ……。」

「?!な!何?!」

「っ!」

「あ、コナンくん!」

「遊園地であつたお姉さんがお別れを……。」

ダッ

「あれ?ねーちゃん!」

「ごめんね!彼とは会つてはいけない決まりなの。それじゃ!」

「ま、まて!」

やはり少年が異変に気がついて全速力で戻ってきたようだ。例のスケボーを持っていないのは好都合だろう。

私は彼女たちが話していた路地のすぐ向こう側の十字路に車を走らせた。キュラソーが駆け込んでくるタイミングで車を急停車させる。

「乗れ。」

「(イ)めんなさい。」

「いゝ。」

「待ちやがれ！」

キキツ キイイイン

「はあー」バシユー

少年よ、子どもたちが見ているところでサツカーボールを蹴り込まないでほしいものだ。私は窓を開け、キュラソーに向けて飛んでくるボールをシルバーボーラーで狙撃した。ボールはキュラソーに当たる前に空中で破裂した。

それに驚いている少年を尻目にキュラソーを回収した私は、車を急発進させ、米花町を脱出した。

~~~~~

『結局江戸川コナンにはバレてしまったわね。残念だけれど彼らの記憶は、今晚インフォームメントが彼らの家に忍び込んで記憶処理を施すことになるわ。任務は完了よ、帰還して頂戴。』

~~~~~


「!・・・何故貴様がその携帯を。」

『別に携帯を奪ったわけじゃありませんよ。通信回線を少し捻じ曲げてつないでるだけですわ。それよりも、我々はあなた方にお伝えすることができましてね。』

「今はだめだ。後にしろ。」

『ええ、あなたは今、“あの方”とお食事中ですものね。でもそちらにも聞いてもらいたいことですので。』

「!・・・。」

『あなた方の組織に所属していたキュラソー、彼女転職しましたのよ。我々ICAのエージェントとして働くことになりましたわ。』

「・・・キュラソーは死んだはず。」

『我々に不可能はありません。何なら今すぐそちらに派遣しましょうか?』

「・・・。」

『ICAに所属するにあたって通告いたします。既にキュラソーは我々の所属ですので今後手は出さないようにお願いしますわ。』

「それを我々が許すだけでも?出来ない相談だ。」

『相談?フフフ。』

「何がおかしい。」

『左の窓の外をご覧ください。』

「?。」

ドガアアアン!

キヤー!クルマガバクハツシタゾー!

「……!」

『昨今の乗用車はスマートキーとI O Tのおかげで、爆発物を設置しなくとも遠隔操作で爆発させられるのですから楽ですわね。それはともかく、我々はいつでもあなた方に報復することができません。繰り返ししますわ。キュラソーには今後手を出さないよう願います。あとこれは「相談」ではなく「命令」ですわ。』

「……。」

『今後共I C Aをよろしくおねがいますわ。暗殺依頼はいつでもどうぞ。では。』

プツ

プープープー

「……。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

・「白衣の中の暗殺者」

【+1000】『白衣を着てミッションを開始する。』

・「後遺症なし」

【+1000】『気絶させる人数を5人以下にする。』

・「異世界のスナイパー」

【+3000】『江戸川コナンのサッカーボールを狙撃する。』

・「死者：ー1」

【+2000】『一人も殺すことなくミッションを終える。』

## HITMAN 2 『深淵の森』

『魔法の森へようこそ。 47。』

『この森は普通の森とは違って魔法的な成分、私達の技術部でもいくつか解析不能な成分が、森の大気中に含まれているわ。でも特製のガスマスクで防げることは確認済みだから安心して。』

『地面には様々な種類の植物やきのこ類が生えているけれど、決して食べないように。人間には有毒なものが殆どで、幻覚作用を起こすものが多いから。』

『森は昼間でも薄暗く、その中の一部を切り開いて霧雨邸とアリス邸は作られているわ。どちらも洋式の一軒家で内部を探るのはそれほど苦労はしないはず。』

『ふたりとも魔法使いで感覚は鋭いわ。でもターゲットはただの人間。調査の結果外の世界に居た頃は普通の一般商社勤めだったよね。感覚はそれほど鋭くはないと思うわ。』

『くれぐれも魔法使い二人には見つからないように。相手はまだあなたのことを覚えていると思うから。健闘を祈ってるわ。』

~~~~~  
~~~~~

ピーピー

キュキュキュ

この森はよくある森林地帯と言うよりはジャングルに近いものになっている。縦横無尽に這い回る木の根や蔦に足を取られそうになることもしばしばあった。

私は今ジャングルのような鬱蒼とした森、通称「魔法の森」の中を進んでいる。ブリーフィングでみた位置情報だともうそろそろアリス邸が見えてくるはずだが……。

「ふんふーん♪……あら?」

「!」

「あなた人間ね?こんなところまで来るってことは魔理沙かアリスのところによろがあるのかしら?」

「……まあそんなところだ。君は?」

「私はエタニティラルバ。アゲハ蝶の妖精よ!」

「そうか。君はアリス・マーガトロイドの家を知っているのか?」



「ええ勿論。ココは私の庭みたいなものだからね！案内してあげるわ！」  
「助かる。」

不意に現れた背中に蝶の羽を持った少女がアリス邸まで案内してくれるようだ。所謂妖精というべき存在なのだろうが、この世界の妖精はいたずら好きとの情報が入っている。むやみに信頼するのは本来は憚られるのだが、丁度迷いかけていた上、進む方向は一応ブリーフィングでの所在地情報の方角とだいたい一致する。何か有れば適当に気絶させて放置でいいだろう。もしかしたら、この妖精もターゲットのことを知っている可能性がある。聞いてみよう。

「もう一つ質問いいだろうか？」

「あら？なあに？」

「坂東貴一という人間を知っているか？」

「・・・ごめんなさい、よくわからないわ。人間の名前は複雑で覚えにくいわよね。」

「このくらい背丈の男なのだが。私と違って町人の服装をしていると思う。」

「もしかしてあの人かな？最近良く見かけるの。」

「本当か？」

「ええ。名前は知らないけどたしかにそんなくらいの背の男の人。最近魔理沙の家にちよくちよく行ってるみたい。アリスの家にもよく行ってるよ。」

「実はその人を探してココまで来たのだが、今どこにいるのかわからないか？」

「うーん：：多分今の時間ならアリスか魔理沙の家のどつちかにいるとおもうけど：：。」  
「そうか。会えればよいのだが。」

「まあ多分会えるよ。最近よく見かけるもん。：：。つと着いたよ！」

話をしてしていると森のなかに突如として開けた場所が現れ、そこには三角屋根の洋風の建物があつた。蝶の妖精はそのまま家の窓を覗き込んだ。

「うーん：：。今は居ないみたい。どうする？」

「ココで待たせてもらうさ。ちなみに霧雨魔理沙の家は近いのか？」

「私は近いと思つてるけど人間にとってはどうだろう：：。」

「どちらの方角にある？」

「えーつと：：。こつちかな？」

「わかつた。ありがとう。しばらく待つて帰つてこなかつたら行つてみる。」

「多分大丈夫だと思うけどこの森にも妖怪はいるから気をつけてね。じゃあ私友だちと遊ぶ約束してるから！」

「ああ。世話になつた。感謝する。」

「じゃあねー。」

そういうとふわふわ浮かび上がつて森の上を飛んでいってしまった。鱗粉のような

ものを撒き散らしながら飛んでいったが防毒マスクはちゃんと機能しているようだ。

私は周囲を見渡し、人や妖怪、妖精などがないかを確認する。幻想郷に何回か出入りした関係である程度は妖怪や妖精の気配も探れるようになった。回りに誰も居ないことを確認し、私はアリス邸の扉をロックピックでこじ開けた。

家の中は至って普通の洋風の住宅だった。やたら所狭しと人形が並べられている以外は。早速手がかりがないかを探す。いくつかの部屋を回った後、作業部屋と思わしき部屋にたどり着いた。

作業部屋には人形を制作する作業台があり、そこには作りかけの人形が放置されていた。

・・・と、その横に和紙のメモ書きが置かれていた。

#####アプーチ発見#####

~~~~~

『メモによるとターゲットの坂東貴一は午後4時頃に魔理沙邸からこちらへやってくるよね。道はほぼ一本しか無いみたいだから待ち伏せするには良い機会なのではないかしら。』

~~~~~

現在時刻は午前11時過ぎ。時間はたっぷりとある。私はなにか使えるものがないかを探した。すると本棚に更に別のメモ書きが挟まっているのを発見した。どうやらターゲットの借用書のようなものだ。

### 情報を入手###

『坂東貴一はアリス・マーガトロイドにそこそこの額のお金を借りているみたい。支払期限は1週間後になってるわね。見知らぬ土地で生活するには何かとお金があるものだからね。』

もしかするとこの情報は使えるかもしれない。私は頭の中で色々とプランを立てた。そしてそれを実行するべく、一旦アリス邸を出た。アリス邸の裏手に回ると、裏にはガーデンング用と思われるシャベルが立てかけてあった。人間用と人形用の2種類ある。人間用を拝借し、魔理沙邸との間にある獣道を進んだ。

アリス邸が木々に隠れて見えなくなる程度まで進むと、道の脇に若干ではあるがス

ペースを見つけた。私はそのスペースの一部を掘る。3mほど掘ったので底に大きめの石を適当に敷き詰め、その上に草や細かな小枝などをのせて穴が空いていないように見せかける。即席の落とし穴だ。その落とし穴の上に持っていたコインを3枚置く。1枚は道を歩いても見える位置に、もう一枚は誘導路に置いておく。

後はひたすらにここで待ち受けるだけだ。私は掘り返した土を木の裏などに隠しつつ、ターゲットが来るのを待つことにした。万が一ターゲット以外が来た場合はこちらから話しかければいいだけだ。・・・誰かが来た。

ザツザツザツ

「・・・あら？こんな所にお金かしら？」

む、まずい。やってきたのは通路笠をかぶった少女だ。彼女はターゲットではない。私は急いで出て話しかけた。

「こんにちは。」

「うわあ！びっくりしたあ・・・。あ、こんにちは・・・？」

「ココはよく通るのか？」

「いえ、この道を通るのは私と最近良く見かける男の方くらいですね。アリスさんも魔理沙さんも空を飛ばますし。」

「そうか。そのコインは私が落としたものだ。探してくれて感謝する。」

「あ、そうなのですか。はい。どうぞ。もう落とさないようにしてくださいね。」

「ああ。気をつける。」

「ところでこんなところで何を？人間の方はここ森は危険だと思えますけど・・・。」

「大丈夫だ。私はこの森の空気にも耐性がある。今日は森にきのこを探しに着ている。」

「そうなのですか。毒性のあるきのこも多いですから気をつけてくださいね。」

「わかった。ところで急いでいたのではないのか？」

「ああ！そうでした！じゃあ私はこれで・・・。」

「ああ。そちらも気をつけて。」

少女はこちらを時々振り返りながら道を進んでいった。私は少女が見えなくなると再び地面にコインを置き、ターゲットを待つことにした。少女の話では少女以外はターゲットしかこの道は通らないようだ。

再びしばらくその場で待つ。万が一コインに気が付かず通り過ぎた場合は、止む終えないのでシルバーボーラーで背後から射殺する他ないだろう。弾丸等はあまり残したくはないので使わないに越したことはないのだが。日がだいぶ傾いて陽の光が木々の間から断片的にしか届かなくなった頃合いで、奥から一人の男が歩いてきた。

~~~~~

『彼が坂東貴一。管理者に目をつけられたプレイボーイ。彼がどんな目的で彼女たちに会っていたのかはわからないけれど、どのみちもう会うことは無いでしょう。』

~~~~~

「ふんふん……ん？あれは……。」

ターゲットがコインに気がついた。近寄ってコインを拾い上げるとみるみるうちに顔が笑顔になっていった。

「これはゴールドか!? こっちにもあるんだなこういうの……でもなんでこんなところに……お！ あっちにもあるじゃないか！」

ターゲットは誘導路に撒かれたコインを目ざとく見つけるとそれを拾い集め始めた。そして3枚のコインにも気が付き、それを取ろうと手を伸ばしたその瞬間。

バツサー

「うわわわわあ！」

ドシン

ゴッ

ターゲットはものの見事に落とし穴に落ちた。落ちた時に頭を石にぶつけたようで

そのまま伸びてしまっていた。私は一旦気絶したターゲットに駆け寄り、コインをすべて回収する。回収し終わると穴から出て木の裏に隠していた土を再び穴に埋め戻していった。ターゲットは生き埋め状態になり、それから数分後には完全に埋め戻せた。念の為掘り返したところがわからないように木の葉と小枝をかぶせておく。

~~~~~

『坂東貴一の生体反応の消失を確認。埋めたせいで検知ができなくなったただけだけれど問題は無いでしょう。ご苦労さま。帰還して頂戴。』

~~~~~

もしかすると鼻の効く妖怪などには所在がバレる危険性もあるが、バレたところで既に死亡しているだろうから問題は無いだろう。私はシャベルを返すためにアリス邸へ向かった。

アリス・マーガトロイド自身は既に帰宅しているようで、家の煙突から煙が出ていた。中には人の気配があり、私は気配を悟られないよう慎重に家の裏手に回り込み、元あった場所にシャベルを戻した。

ガチャツ



「……? 誰か居たような……?」

「……? ……!」

「上海もなにか感じたわよね? 坂東さんかしら……?」

「……まあいいわ。上海。坂東さんを迎えに行ってもらえるかしら?」

「……! ……♪」

「あ、ちよつとまつて。外出用の服を新調したのよ……。」

ボタン

あぶないところだった。中から人が出てくる気配がしたので、私は既の所で家の影に隠れることが出来た。感覚が鋭いのは情報として知っていたが、壁に立てかけたときの僅かな音に反応するとは。できる限り静かに立てかけてたつもりだったのだが。

私は忍び足で家を離れ、森の中へ入るとそのまま大回りですりへ向かい、以前から使っているセーフハウスへ帰還した。

〜1週間後〜

~~~~~

「こんにちわ。」

『・・・前にも言ったと思いますけど、唐突に目の前に現れるのは・・・』

「あら、失礼。でも今回は上出来ですわ。アリスも魔理沙も気がついていませんし。」

『ありがとうございます。幻想郷とは今後共いい関係を築いていきたいので。』

「そういうならば隠し事はなしにしていただきたいですわね。」

『隠し事?』

「あなた達、またなにかやっていますか?」

『・・・申し訳ありません。私には情報は降りてきていませんね。』

「ふうん・・・まあいいわ。まだ実害は出ていないから不問にしましょう。」

『・・・』

「いずれまた仕事を頼む時が来るかもしれませんわ。もしかしたら私の友人からも。」

『友人・・・ですか?』

「ええ。古くからの友人ですわ。」

HITMAN 2 『黒と無色の人』

『ウラ・ビアンカへようこそ。47。』

『ココは特地最大の勢力を誇る通称“帝国”と呼ばれている国家の首都。100万人あまりが住む特地最大級の城塞都市よ。』

『今回は悪所街と呼ばれているスラム街の外れにセーフハウスを設置したわ。ここは首都の南東部に位置していて、スラム街なのもあって警備も薄いわ。ターゲットの居ると思われる王宮までは直線距離で3kmほど。そこまで遠い距離じゃないわ。』

『王宮は流石に警備がかなり厳重ね。それでも同盟関係になつたとはいえまだ日本国自衛隊の手が入っておらず、警備方法は中世の城そのもの。突破はそれほど難しくはないと思うわ。でも数だけはいから注意して頂戴。』

『あまり時間はないわ。健闘を祈ってるわね。』

~~~~~

どこの世界のどの町でもスラム街は大抵似たようなものになる。劣悪な衛生、いたる

所で起こる暴力行為、昼間からうろつく娼婦。ありふれた光景と言えるだろう。私は今そのさなかをスーツで歩いているにもかかわらず、あまり目立っているように感じないのは自衛隊のおかげなのだろうか？

横には今回からICAの実働部隊として実践訓練が開始されるキュラソーが居る。彼女も世界中のスラム街を見たことがあるようでこの状況にあまり動揺などは見られない。

しかし全くの無防備で歩いている訳にはいかない。こんなスラム街でも偶に自衛隊員と思われる迷彩服を着た人物を見かける。流石に日本国関係者以外でスーツを着ている人物を職務質問しないわけがない。我々はできる限り目につかないようにスラム街を首都中心部方面に脱出した。

「47。あれ。」

「ん、あれか。」

キュラソーが指し示した先、街路の隙間からひととき大きな建造物が見えた。山の一部を切り崩して立てられているそれはおそらく王宮だろう。その横の高台には神殿のような佇まいの建造物が建っている。情報が正しいならばあそこが元老院議事堂だろう。

「まずは王城内に入らねばならない。キュラソー、やってみろ。」

「わかった。」

王都と王城は高さ10mほどの高い城壁によって隔てられている。その内部に侵入するには城壁を登るか門に居る警備兵を無力化するか騙すかして入らなければならぬ。幸いにして今日の前にある城門は、入り組んだ場所にあるのもあり人目に触れておらず、それを利用してキュラソーは警備兵を制圧するつもりのようなのだ。キュラソーは真正面から警備兵に近づいていく。

「生まれ！ココより先は王城である！許可なきものは通すことは出来ない！」

「・・・フツ。」

チラツ

「ん？・・・」

ゴツ！ガツ！

「ぎゃあー！」

「ぐわー！」

ドサツ

「制圧完了。どうかしら？」

「なるほど。流石だな。」

キュラソーは警備兵二人を前に明後日の方向に注意を向け、それに一瞬気を取られた

警備兵の背後を目にも留まらぬ速さでとったかと思うと、的確に後頭部を殴打して2人共気絶させた。見事な手前だ。しかし……。

ヒュッ

「ぐあー！」

ドサッ

「多少ツメが甘いな。死角はできる限り無くせ。相手がエージェントならばやられていた。」

「……！……わかった。」

彼女から丁度死角になる位置、城門の扉の向こう側に一人だけこちらを見ていた兵士が居た。キュラソーが背後に回り込む段階ではまだ顔を出していなかったので気が付かなかったようだ。しかし明らかに動揺しており、そのまま放置すれば増援を呼びにいられることは容易に想像できたので、私がさり気なく立ち位置を移動して、彼の直ぐ側に回り込んで同じく後頭部を殴打して気絶させた。

キュラソーが気絶した衛兵を見てなにかもの思いにふけているが、時間はあまりない。

「行くぞ。」

「……いいの？」

「何がだ？」

「こちらの正体を見られているが。」

「我々はそこまで機密性が高いわけじゃない。どこぞの組織みたいに証拠隠滅のためにやたらと爆薬を使ったりもしない。」

「……。」

「こいつらが起きて我々のことを喋ったとしても、それは男女二人組が衛兵を気絶させた程度の話でしか無い。それが知れ渡る頃には我々は既にこの世界から脱出している。」

「……なるほど。」

「わかったら行くぞ。時間はあまりない。」

私達はそのまま城内を進んでいく。城内は場外とあまり変わらない町並みが広がっていたが、幾分こちらのほうが小奇麗だ。おそらく住んでいる階級が違うのだろう。

町を縫うように進みついに王宮の側までたどり着いた。王宮は古代の神殿のような佇まいであったが、ところどころに見られる造形は中世のそれだった。窓枠もそのひとつで、王宮の外壁に見える窓はそれぞれ精巧な彫刻が掘ってあった。おかげで我々が侵入するための足場にはあまり困らず、2階部分の窓から侵入することが出来た。ちなみにガラスは高級品なようで、一般住宅はおろか王宮の外壁の窓にもつけられていない。



2人で周囲を警戒しつつ王宮内部を進んでいく。すると前方に身なりの良い老人と作業服と思われる格好をした男数人が話しているのを発見した。我々は柱の陰に隠れつつそれに聞き耳を立てる。

「どうするのだ。今日の午後には裁判が執り行われるのだぞ？」

「とはいいますが、色つきガラスは数が少なく、あの位置ですと設置も大変で・・・。」

「言い訳は聞きたくない。なんとか間に合わんのか？」

「状況的には絶対無理です。ガラスはどんなに早くても明日になるかと・・・。」

「うぬぬ・・・裁判が行われる玉座の間が吹きさらしとはなんたる・・・。」

#####

~~~~~

『裁判が行われる玉座の間は先の自衛隊との戦闘の結果、玉座の背面にあるステンドグラスの一部が欠けているようね。補修用のガラスが無いため修理は今日中には行われ
ないみたい。』

~~~~~

~~~~~

「お前たち。どうした。」

「へ、陛下!？」

「畏まらずともよい。何があった。」

「は、はいそれが玉座のガラスの修繕が今日中には終わらないと申ししております。…」

「申し訳ございません!」

「ふむ・・・いつ頃治る予定だ?」

「明日中には必ず!」

「そうか。まあ今日はそこまで風も強くない。今日の裁判には間に合わんが、仕方ない。」

「申し訳ございません・・・。」

「よい。ジエイタイが来てからというもの、色々とゴタゴタしていたからな。」

「ありがたきお言葉でございます。して陛下はこのようなどころで何を?」

「ああ。そうであった。裁判のときの形式だが、中央に証言台。妾と被告の間に横一列に陪審員という形にしようと思う。」

#####

「はあ・・・さようでございますか。しかし何故そのような?」

「日本の裁判はそういう形になっていると伊丹から聞いてな。試してみようと思うのだ。」

「承知いたしました。」

~~~~~

『ターゲットは玉座の間の中央に座らされるみたいね。ステンドグラスの穴は先の戦闘において自衛隊が狙撃を敢行するのに使ったらしいことが情報部の調べでわかっている。その方法を踏襲してみるのはいかがかしら?』

~~~~~

「どうやらステンドグラスが割れている以外にも、“被告”つまりはターゲットが中央に座る形になるようだ。ターゲットの位置がどの方向からでも狙える位置になるのは好都合と言える。私達は一旦その場を離れ、廊下の隅の袋小路でキュラソーに作戦を伝える。」

「聞いてのとおりだ。ターゲットは玉座の間の中央に座ることになる。その時を狙って狙撃を敢行する。」

「周りのものに気が付かれるのでは?」

「十中八九気が付かれるだろうがあまり問題ではない。我々が行ったということだけ知らなければそれでいい。」

「なるほど。で、私は何をすればいい？」

「狙撃は玉座の外から行う。周囲の確認と、万が一自衛隊が出しやばってきたときの対処だ。」

「了解。」

「ではまずは彼らが使った狙撃位置を探すとしよう。」

狙撃位置を探すのはそこまで苦労しなかった。玉座の位置はブリーフィングで把握していたし、そこから見える位置の高所は限られていた。玉座の背後には高台があり、その高台の頂上には元老院議会がある。おそらくその高台から狙撃をしたのだろう。距離は800m強。自衛隊のスナイパーは優秀なようだな。

私達はできる限り人に見られないよう高台へ登った。元老院議事堂は現在修復作業中であり、概ね外観は出来ているが、まだ彫刻などが終わっていないようで、自衛隊の協力の元、金属製の足場が周りに設置されていた。この日は作業は休みのようで作業員はおらず、入口付近の警備兵をかわせば中はほぼ無人だった。

「キュラソー、狙撃完了後は速やかにこの場を離脱する必要がある。脱出経路の確保は任せる。確実かつ早く脱出できる経路を考えてみる。」

「これも訓練ってことね。わかった。」

「それと、万が一音に気がついて衛兵が着たときの対処もやってみる。殺すなよ?」

「わかっている。こいつは威嚇用にしか使わない。」

私はキュラソーに脱出経路の確保と周辺警戒を命じた。小走りで建設現場の内部を調査しに行ったキュラソーを見送りつつ、私は狙撃位置を見極める。玉座の間は……あそこか。

玉座の間の中央から直線上にある足場に登り、背負っていた jaguar7 のスコップで位置を微調整する。位置が決まれば後は待つのみだ。しばらくその場で待機しているとキュラソーが帰ってきた。

「ルートは確保できたか？」

「2つプランが有る。プランAは議事堂の向こう側に降りられそうな崖がある。そこから静かに降りるルート。崖の向こう側は森林地帯で、遅いが静かで目立たない。」

「ふむ。」

「プランBは建設現場の事務所と思われるプレハブ小屋の横に自衛隊の車両が一台放置されていた。エンジン始動まで確認済み。これで坂を駆け下りて正面から逃走するルート。騒ぎになり自衛隊が出しゃばる可能性があるが一番早い。」

「なるほど。我々は速さは求めていない。撤退はプランAで行う。」

「了解。」

そのまましばらく待機する。流石に組織の重鎮とは言え数時間に及ぶ沈黙は耐えき

れなかったようで、キュラソーは唐突に話しかけてきた。

「ねえ。」

「……。」

「あなたはいつもこんな調子なの？」

「こんな調子とは？」

「ただただひたすらに人を殺して。あなたはそれでいいの？」

「任務に疑問を持ったことはない。私は任務のために生み出された。」

「……なんというかその……。」

「やりたい放題テロ活動を行っている組織に居た割には一般人のようなことを言うな？」

「……あの子達のおかげかしらね。」

「……少年探偵団とやらか。」

「あの子達のおかげで……私は暗黒の呪縛から逃れることが出来たのかもしれないわ。」

「あなたにも……そういう人達がいるといいわね。」

「……間に合っている。」

若干日も傾き始めた頃合いで玉座に動きがあった。私はスコープで内部を覗く。ステンドグラスで見えづらいが、玉座にピニヤ・コ・ラーダ皇太女が座つたのを確認した。その前には机に座る老若男女の裁判官と思われる人々。すべての準備が完了すると奥の扉、つまりは玉座の間の扉が開き、鎖に繋がれた一人の男が衛兵2名に連れられて入室してきた。

~~~~~

『アレがターゲットのクルツよ。ほぼ有罪が確定している身ではあるけれど、依頼は極刑。私達が代わりに執行してあげましょう。』

~~~~~

ターゲットはそのまま中央の椅子に座らされた。裁判が始まったようだ。その時、玉座の間の端の方に見慣れた迷彩柄の服装の人物が立っているのを確認した。自衛隊の隊員だろう。主要人物でなければいいが、もしそうならば逃走は多少厄介なことになる可能性があるな。

私は丁度割れているステンドグラスの穴からターゲットの頭部に狙いを定める。裁判は罪状を読み上げる段階のようだ。私はうつむき、それを黙って聞いていたターゲット

トの脳天を弾丸で貫くべく、引き金を引いた。
ダーン！

く伊丹sideく

なんかピニヤ殿下が日本の裁判を参考にしたとか言い出したので、俺はこうして栗林と黒川と一緒にその裁判とやらに参加している。ちなみにあのスパイを捕まえたのは非番中の栗林だった。

「・・・以上が被告人、クルツの罪状である。被告人、なにか相違は・・・」

ダーン！

ズシャー！

「うわ!？」

「何!？」

「な、何だ?!」

「狙撃だ!!!物陰に隠れろ!!!」

いきなり目の前の被告人の頭が撃ち抜かれた！自衛隊の作戦じゃねえ、一体誰が!?

「伊丹殿！これは・・・！」

「ピニヤ殿下、すぐに窓から離れてください！狙撃される可能性があります！」

「!!わ、わかった！」

「栗林！スナイパー確認できるか?！」

「無理ですよ！下手したらこっちが撃たれかねないし、それに今日は拳銃しか持つてきてません！」

「そうだった。黒川！被告人は!?!」

「ダメです！眉間を撃ち抜かれていてもう息はありません！」

「クソっ！至急本部に連絡だ！栗林はピニヤ殿下をお守りしろ！黒川！本部のついでに倉田に連絡して高機持つてこさせろ！」

「はい！」

「了解！」

この世界で狙撃ができるのは自衛隊以外には居ない。だがスパイ容疑の被告人を暗殺する理由は自衛隊にはない。だとしたら一体誰が・・・。

『ターゲットダウン。相変わらずいい腕前ね。さあ、自衛隊が来る前にそこを脱出して頂戴。』

自衛隊が側に居たのは想定外だった。これは急ぐ必要が出てきた。

「キュラソー、作戦変更。プランBで行く。」
「了解。」

キュラソーはそう言うともものすごいスピードで足場から足場へ移動し、3階程度の高さももろともせず地面に降り立つと事務所の方へ走っていった。私も急いで下に降りる。

私が下に降り、城下町へ続く道へ出たところでキュラソーが自衛隊の軽装甲車両で戻ってきた。私はそれに飛び乗り、急発進して坂を駆け下っていった。

丁度王宮の目の前を通り過ぎるところで別の軽装甲車両とすれ違った。すれ違う時に車両に乗り込もうとしていたのは、ブリーフィングで名前が上がっていた最重要主要人物の伊丹耀司だ。悪い予感当たったものだ。

そのままその車両は急発進でこちらを追いかけてきた。ほぼ同じ車両なので引き離すのは難しいだろう。

「できる限り路地を使え。」

「速度が落ちるぞ?」

「構わん。」

「了解。」

彼女の片手には端末が握られており、そこからICAの無人偵察機からの道路情報を受け取っているようだ。私はj a g u a r 7に再度弾を込め、後部座席へ移動した。

彼女の運転テクニックは相当なものだ。車一台分しか無いような狭い路地を猛スピードで抜けていく。そうこうしているうちに南西城門までやってきた。城門は開け放されており、警備兵がこちらに気が付いたが打つ手が無いのか啞然としているのか、何もアクションを起こすこと無くそのまま門を通過できた。

「ここから先、入れそうな路地がない。直線になる。」

「わかった。やむを得ない。追手を攻撃するか。」

私は直線に入った瞬間に後方扉を開けてj a g u a r 7を構える。後ろの軽装甲車両のフロントガラスは防弾仕様の可能性が高いため、おそらく貫通は難しいだろう。だが視界を奪うくらいならできる。

ダーン！

バリン！

私のはなった弾丸は追手のフロントガラス中央に命中。案の定フィルムが張ってあつたらしく貫通は出来なかつた。しかし弾丸が食い込んだことでフロントガラスのひび割れが全体に広がり、かなりの視界不良になつたと思われる。それを裏付けるかのように明らかに相手の速度が落ちた。

私達はそのまま郊外のセーフハウスへ帰還した。が、向こうも意地になつているのかフロントガラスが割られたままそのままついてきてしまった。私達は急いでセーフハウス内に入った。

「どうする？ 付いてきちやつたみたいだけれど。」

「しかたない。君の元いた組織流のやり方を行うか。」

「組織流？」

私達はセーフハウスに常備されていたC4爆薬の爆破タイマーをセットし、そのまま渡界機で脱出した。その十秒後、C4爆薬が爆発し、警戒して遠くから観察していた自衛官たちの目の前でセーフハウスになつていた小屋は木っ端微塵に吹き飛んだ。

~~~~~  
3 時間後 ~~~~~  
~~~~~

「伊丹殿！賊は!?!」

「すみません、ピニヤ殿下。取り逃がしてしまいました・・・。」

「そうか・・・大きな爆発音がしたから心配したのだぞ。」

「相手が何者かはわかりませんが、逃げ込んだ小屋が爆発してしまつたおかげで何も手がかりがつかめてません。我々の世界の者なのかこの世界の者なのかすら・・・。」

「ううむ・・・まあなんいせよ無事で良かった。被告人は射殺されてしまつたが。」

「・・・念の為に申し上げておきますと・・・。」

「ああ、良い良い。わかつている。自衛隊は疑つていない。あの者を暗殺しても自衛隊に何の得もないことは私を含め皆わかつている。」

「よかつたです。我々は犯人究明に全力を尽くします。」

「妾としては、ほぼ死刑が確定していたスパイの刑の執行がちよつと早まつた程度に考えているんだがな・・・。」

「そうはいつでも、我々以外に狙撃銃を使える輩がいると言うだけで十分脅威です。調

べないわけにはいきませんから。」

「そうか。まああまり根を詰めすぎないようにな。妾としても伊丹殿に倒れられては困る。」

「肝に銘じます。」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~  
 ~~~~~

・「怪しい下男下女」

【+1000】『城門から城内に侵入する。』

・「自衛隊は甘すぎる」

【+3000】『ターゲットを裁判中に狙撃で暗殺する。』

・「実践演習その3」

【+1000】『キュラソーに脱出プランを作らせそれを実行する。』

・「爆弾魔」

【+1000】『セーフハウスを爆破して証拠を隠滅する。』

H I T M A N 2 『深海からの暗殺者』

『大湊へようこそ。47。』

『ここ大湊第13警備府は山の一部を切り開いて作られている関係で周囲から隔絶された施設という印象を与えているわ。でもこの第13警備府の提督はその辺りもよく心得ているようで、頻繁に地域交流の催しを開いているの。』

『今日はその催しの一つ、"大湊マグロ祭り"の開催日。県内外から多くの観光客がやってきて賑わっているわ。人目は多いけれど普段警備が嚴重な軍事施設に合法かつ簡単に侵入できるいい機会ね。』

『大本営からの提供情報によると駆逐艦満潮の病棟は警備府の一番外れにあるみたい。無論一般公開領域からは外されているわ。発見されればたちまち警備兵、または艦娘が飛んでくるから注意してちょうだいね。』

『健闘を祈っているわ。』

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ガヤガヤガヤ

「手荷物検査です。ご協力お願いします。お荷物はございますか？」

「いや、手ぶらだ。」

「ポケットの中などになにか入ってはいませんか？」

「これくらいだな。」

「えーつと・・・キーホルダーに・・・この瓶は？」

「持病の薬だ。」

「なるほど。はい。大丈夫です。ご協力感謝いたします。」

「ご苦労さま。」

私は簡単な手荷物検査を通過し、場内に入った。施設内に銃火器を持ち込むことが出来ないわけではないし、インフォーマントに設置してもらうことも出来たが、今回は銃火器は使わないことにした。無駄に疑われる代物を持つ意味はあまりない。それに相手は一般人、銃など無くてもいくらでもやりようはある。

まずは人の流れに乗って施設内奥に入っていく。いたるところに露店が出ており、マスコットという題目の通り、魚系の屋台が多いようだ。よく見るといくつかの店舗では艦娘が店員をやっているところもある。そのまま流れに沿って進んでいくと、広場に出



た。元々は駐車場だった所にステージを設営して艦娘の歌謡ショーが開かれている。現在軽巡洋艦「那珂」のステージが行われており、ファンと思われる集団がステージ前で歓声を上げている。

ステージの右側には電源車や衣装や小道具などを入れておくためと思われるワゴン車が停められていた。いい感じに死角が多くなっており、何か全員の注目が集まるようなことでも起きれば、そこからバックヤードに侵入できそう。私は注意を引く方法を探した。するとバックヤード入口とは逆方向に位置している屋台が目にとまった。ここでは艦娘が交代でサンマを焼いているようだ。今は12月なのでおそらく今年の秋に獲ったものだろう。

「浦風！サンマの追加を持ってきてぞ！」

「磯風。ありがとう。そこ置いておいて……あつ。」

「ん？どうしたんだ？」

「一緒に出すスタチが切れてもうたわ。ちよつち取ってくるから火見といて！」

「ん？ああ！任せろ！」

店舗で焼いていた浦風と呼ばれた艦娘が、サンマの入った箱を持ってきた磯風と呼ばれた艦娘と交代した。しかし、彼女は明らかに料理をしたことがないと見える。なぜなら、「火を見ておいて」と言われて文字通りそのまま火を凝視している。火力調整など

は一切やっておらず、案の定……。

「……なんだこの匂い……っ!!」

「ちよ、ちよつと!うらか……じゃない磯風!サンマサンマ!」

「なんか焦げ臭いの……って磯風!サンマが燃えておるぞ!!」

「ん?ああ!火を見ておいてほしいと頼まれたからな!」

「それはそういう意味じゃな……ああ!火が!火が!」

「水!消火器!バケツ!誰か持ってきて——!」

「高速建造材ならあるぞ!」

「アホか——!」

脂の乗ったサンマは容易に燃え上がり、屋台の一部を焦がし始めた。周りもそれに気がついたのかステージの演出すら止まっている。屋台の周りはもうてんやわんやだ。

私はその混乱に乗じてバックヤードに侵入を試みた。もとより偶にはあるが艦娘以外の人間も出入りしているためそれほど不自然にならずに侵入できた。侵入と同時に物陰に身を隠しつつあたりの様子を探っていく。周囲に人が居ない時を見計らって私は更に奥へと進んでいった。

艦娘の大半は哨戒任務または催し物に駆り出されているのか、奥に行けば行くほど人の気配はなくなっていく。目的の病棟を探している最中、レンガ造りの建物を見つけ

た。表の表札に“司令部”と書かれていたのでおそらくココが司令本部だろう。私は引き続き周囲に気を配りつつ内部に侵入していった。

「松輪ちゃん！はやく！」

「待つてよ択捉ちゃ・・・あつ！」

「！」

「あのえつと・・・。」

「どうしたの松輪ちゃ・・・あら？業者の方ですか？」

「そんなところだ。執務室を探しているのだが。」

「執務室ならあそこの階段を上がって3階に行ってもらって、すぐ右側にあります！」

「ありがとう。感謝する。」

「どういたしまして！お仕事頑張ってください！」

「が、がんばってください！」

「行こう、松輪ちゃん。」

「うん。」

タツタツタツ

途中何度か小学生とも思える小さな艦娘達に出くわしたが、全員が私を催し物の業者かもしくは本部のお偉いさんと勘違いしていたようで、出会うたびに敬礼か挨拶をされ

た。私も挨拶し返せば特に不思議に思われることもなくやり過ぎることが出来た。終いには扨捉と松輪と呼ばれていた2人から執務室の場所まで聞き出すことに成功した。この軍事施設の情報管理が少し心配になるが、得てして日本人というものは目に見えないものに関してはかなり管理がずさんな民族だ。

扨捉に聞いた情報通り、階段を上がって右側を見ると執務室があった。私は試しに扉をノックし、反応がないのを確認すると扉を開けて内部に侵入した。・・・何故この部屋は床が砂浜になっているのだろうか。そして今は12月だというのに全くそれに不釣り合いな海の家のような屋台とかき氷機があった。あまりの状況に一度部屋の外に出て執務室であることを確認したほどだ。

廊下側の壁には普通に本棚があったので調べる。いくつかの資料と作戦指令書、その他雑多な書類の中に目的の書類は混じっていた。

###情報を入力###

~~~~~

『駆逐艦満潮についての資料を手に入れたわね。資料によると満潮は更に南側の艦娘病棟にほぼ軟禁状態みたいね。常にターゲットが寄り添っていて、ターゲットが満潮から離れるのは満潮が寝静まった後だけみたい。』

ターゲットは常に満潮の側にいるのは厄介だ。現在時刻は丁度正午。夜まで待つて
 いれば怪しまれる可能性もあるし、先程会った艦娘たちから司令官や警備兵に情報が行
 く可能性もある。私は更に資料を探していると、屋台と思っていた部屋中央の物体は、
 そう見えるように加工がなされているだけの机であることが判明した。机の裏側には
 普通に引き出し各種があり、私はそこも調べることにした。2段目の引き出しには艦娘
 一覧があつた。

情報を入手 # # #

『所属艦娘リストを見る限り満潮以外の第八駆逐隊は、まだこの警備府には配属されて
 いないようね。気の知れた仲間が居ないことも精神状態に負荷がかかる要因になつて
 いるとみられるわ。』

かの駆逐隊は戦力的にも重要で、これほどの規模の警備府が持っていないのはなにか

訳がありそうだが、少なくともこの司令官はそれを是正しようとしているようだ。横にあつた出撃申請書類にかかれてある目標には他の三名の発見が明記されていた。

部屋の中の書類や本をほぼ全てひっくり返したがその他にめぼしい収穫はなかった。ターゲットの位置と行動原理がわかっただけでもよしとするべきだろうか。私はひとまずターゲットを確認するために室内を片付けた後、司令部を出た。

病棟は司令部から更に奥にあり、ほぼこの警備府の南端に位置していた。南端と言ってもそこまで遠くはなく、司令部と病棟の間には宿舎があるだけだ。宿舎の横を通り過ぎようとしていた所、宿舎の中で艦娘が話をしているのが聞こえてきたので、側の茂みの中に隠れ聞き耳を立てることにした。

「満潮ちゃんにも持つていつてあげなくちやね。」

「愛宕。」

「ああそれと！木村ちゃんにも持つていつてあげなくちや！彼女ずつと寄り添ってるからお祭りにもいけないから！」

「愛宕！」

「木村ちゃん遠慮してたけど行きたいオーラ満々だったじゃない？だから色々持つていつてあげれば彼女もきつと・・・」

#####

「愛宕!!」

「・・・もう高雄つたら・・・聞いてるわよ・・・。」

「聞いてるなら今すぐその大量の焼きトウモロコシと綿菓子とイカ焼きを置きなさい! そんなに持つていっても食べきれないわよ?」

「だ、大丈夫よ・・・甘い物は別腹だつて言うし・・・。」

「限度があるでしょう。それに、満潮と木村さんにかこつけてあなたが食べたいだけじゃないの?」

「・・・ソナコトナイワヨ?」

「目を見て話しなさい。愛宕。」

~~~~~

『ターゲットは今回の催し物に参加したがっていたみたいね。うまく参加できる状況を整えてやれば彼女を満潮の病室から引き剥がすことができるかもしれないわね。』

~~~~~

「ほら、イカ焼きは2つで良いでしょう? 綿菓子も。焼きトウモロコシは2つだと多すぎるから片方は満潮のために半分におきましょう。」

「じゃあ残りは私が……。」

「愛宕？」ゴゴゴゴ

「じよ、冗談よ……そんな怖い顔しないで……」

「全く……つて愛宕！イカ焼きのタレが服に付いてるわよ！」

「あらほんと！大変！」

「ほんとにもう……ほら、早く着替えてらっしゃいな。」

「はい。」

愛宕と呼ばれた金髪の艦娘が部屋を出ていく、それとほぼ同時にもう一方の高雄と呼ばれた黒髪の艦娘も部屋を退出していく。私は宿舍の扉をピッキングで素早く解錠し中に侵入。満潮用にと言っていた半分にはされた焼きトウモロコシに満遍なく持参した睡眠薬をふりかけた。痕跡を残さないように注意しつつ、宿舍から出て再びターゲットの居る病棟を目指した。

病棟は地上2階建ての質素なもので、部屋数もそこまで多くはないようだ。おそらく大抵の艦娘は損傷を受けても入渠ドックで修復が可能なため、病棟という存在自体が必ずやらないのだと推測できる。つまりはこの施設は満潮のためだけに作られていると言っても過言ではないのだろう。

私は周囲を観察し、どの部屋にいるのか当たりをつけることにした。しかし、周囲を

観察してもどの部屋も小奇麗にされており、外からの判別は難しかった。仕方ない。やはり内部に入り調べるしかないか……。しかし、いざ内部に侵入しようとした矢先、先程の高雄と愛宕が来てしまった。手には半分に切った焼きトウモロコシをちやんと持っている。そちらのプランが上手くいくならばココで待っていても大丈夫だろうが……。私は影に隠れて観察することにする。二人はそのまま中に入っていた。

く病室内く

コンコン

「はーい。どうぞー。」

ガララッ

「失礼します。おすそ分けに来ましたー。」

「おすそ分け?」

「・・・?」

「はいこれ!」

「これは・・・イカ焼き?」

「・・・焼きトウモロコシ?」

「そう！満潮ちゃん、まだ外に出るの辛いんでしよう？だからちよつでもお祭りの気分を味わってもらおうと思つて！」

「ホントは愛宕が食べたいだけだったみたいだけどね。」

「そう・・・ありがとう・・・。」

「ありがとうございます。わあ！いい匂い！」

「あとこれね。わたあめ！お祭りと言つたらこれよね！」

「・・・。」

「愛宕。」

「え？ああ・・・。ちよつと騒ぎすぎちゃつたわね。ごめんなさい。」

「え？いや、良いのよ。もとはと言えば私が・・・。」

「満潮ちゃん。大丈夫よ。みんなわかつてる。だから自分を責めないでね。」

「・・・はい。」

「愛宕、そろそろ・・・。」

「そうね。じゃあ私達は行くわね。なにか欲しいものがあつたら遠慮なく無線飛ばし

ちやつてー！」

「ありがとうございます。」

「・・・ありがとう。」

「じゃあね。」

ガララバタン

「じゃあ満潮ちゃん。食べよつか！」

「・・・うん。」

モグモグ

「うん！このイカ焼きおいしい！」

「焼きトウモロコシおいしい・・・。・・・あれ？」

「ん？どうしたの？」

「・・・ごめん。なんだか眠くなってきたわ・・・。」

「あらそう？じゃあ残りはしまっておくわ。今はゆっくり休みましょう。」

「・・・私が寝たら・・・お祭り・・・行ってきたいから・・・。」

「そう？大丈夫？」

「大丈夫・・・寝ればみんなには会えるから寂しくない・・・。」

「そう・・・じゃあお言葉に甘えちやおうかな。おやすみ、満潮ちゃん。」

「ん・・・。」

スウスウ・・・

「ああら、完全に熟睡モード。疲れてたのかな？」

「・・・さて、じゃあお言葉に甘えて、私もお祭り行つてこようかな。」
 「じゃあね満潮ちゃん・・・。」

↳ 47 side ↵

目的の病室は思ったより近場にあつたらしく、病棟入口からすぐのところにあつた病室に入つていった。しかし、高雄のほうが病室の入口に立ち止まつており、そこからだと病棟に侵入する際に視界に入つてしまう。私は仕方なく病棟の入口の外で待ち構えることにした。

しばらくした後高雄と愛宕が出てきて、そのまま小走りに会場へ向かつていった。私の中には入ろうかどうか思案していると、病室の扉が再び開いた。想定通りトウモロコシを食べた満潮が眠つたらしく、ターゲットが一人で出てきた。私は周囲を確認し、病棟を出てきたターゲットを後ろからワイヤーロープで首を絞めた。突然のことに声を上げようとしたターゲットだったが、即座に首を絞められたおかげで声を出すことも出来ず、そのまま段々と動きが鈍つていき、そして動かなくなつた。

~~~~~

『ターゲットダウン。これで目が覚めた満潮は周囲に誰も居ない状況になり、精神的に安定になって終いには……。任務は完了よ。帰還して頂戴。』

私は絞殺したターゲットを茂みの中に隠すと、再びもと来た道に戻った。唯一の問題は、どうやって怪しまれずに一般エリアに戻るのだが、それもあまり問題にはならなかった。

「ちよ、ちよつと！あなた！そんなところで何をしているの?!」

「私か?」

「そうよ！ここは関係者以外立ち入り禁止よ!」

「そうなのか。済まない。道理であまり人が居ないわけだ。」

「ほらついてきて。暁が案内してあげるわ!」

「感謝する。」

小学生くらいの艦娘に誘導されて私は一般エリアに戻った。怪しまれないようにそのまま適当に時間を潰し、他の一般人が帰り始める頃合いで私もその流れに乗って施設を脱出した。

~~~~~5時間後~~~~~

~~~~~

「ん．．．。」

「お、起きたか。」

「ん．．．司令官．．．？」

「ああ。俺だよ。満潮。」

「どうしてここに．．．木村さんは？」

「っ！．．．彼女は実家で急病人が出たらしくてね。帰還させたよ。」

「．．．え？」

「彼女はもうここにはいない。」

「．．．なん．．．で．．．。」

「なんで帰したかって？それはね。彼女たちが見つかったからだよ。」

「??？」

「入っっておいで。」

「．．．あっ！」

「満潮！」

「満潮ちゃん！」

「あらあら・・・聞いてたより深刻そうかしらあ？」

「先程の出撃で朝潮、大潮、荒潮が見つかったんだ。もう、一人じゃないんだよ。」

「あ・・・ああ・・・!!」

「満潮。今まで待たせてたみたいね・・・。ごめんなさい・・・。でも！これからは！」

「大潮も着任です！満潮ちゃんももう寂しくないよ！」

「第八駆逐隊。全員揃ったってわけよお。」

「ああ・・・みんな・・・。」

「・・・よかつたな。満潮。」

「・・・うん！みんな！遅いじゃないのよ！待ちくたびれたわよ!!」

「良かつたのですか？司令。本当のことを伝えなくて。」

「せっかく仲間が発見されたんだ。真実を伝えて絶望させるわけにはいかないよ。」

「あきつ丸さんにも調査してもらっていますが、やはり何者かが侵入した痕跡があるようです。」

「一体誰が・・・。何のために・・・。」

「わかりません。外部犯なのは確かですが・・・。」

「一応秘密裏に調査は続けてくれ。頼めるか？」

「お任せください。大淀、最善を尽くします。」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~
 ~~~~~

・「スパイ大作戦」

【+1000】『手荷物検査を受ける。』

・「ファイヤーワークス」

【+1000】『屋台の火災に乗じて立ち入り禁止区域に侵入する。』

・「傷心の眠り姫」

【+3000】『駆逐艦満潮を眠らせる。』

・「彼の世への錨」

【+3000】『ターゲットをワイヤーロープで暗殺する。』



## HITMAN 2 『警察庁への挑戦』

『永田町へようこそ。』

『ブルーは警察庁の地下にある拘留施設に軟禁されているようよ。どんな仕打ちを受けているかはわからないけれど急いだほうが良さそうね。』

『警備状況は多くもなく少なくもなく。外から見れば通常配置と言えるわ。でも内部までは流石にわからないから注意して頂戴。』

『公安当局の介入が予想されているわ。今回は銃火器による制圧も許可されている。派手に行くか隠密に行くかは任せるわ。』

『インフォーマントの情報が保存されているのは4階のサーバールーム。ココに侵入して書き換えるか、もしくは盛大に吹っ飛ばすか。何れにせよデータは削除する必要があるわ。』

『任務を達成したらできる限り急いで東京湾岸の指定の場所まで来て頂戴。そこが今回の脱出ポイントで、沖合にはICAの潜水艦を潜ませているから。それ以外の方法は隠密に事が運んだ場合のみ使えるから注意して。』

『幸運を祈っているわ。』

~~~~~  
~~~~~

ガサガサ：

私は今、警察庁の裏側、海上保安庁舎側から侵入に成功したところだ。正面は監視カメラと常駐の警備員が数名居たため、比較的警備の薄かったこちらから侵入したというわけだ。裏手は立体駐車場になっており、私はその中をカメラに映らないよう注意しつつ庁舎へ向かっていく。

庁舎の裏手は死角が多く、時刻はすでに深夜1時ということもあり、隠れつつ進むのはそれほど苦労はしなかった。進んでいくと立体駐車場のすぐ脇に室外機のある空間を発見した。室外機は明らかに地面よりも下に設置されており、この空間だけ半地下のようになっているらしい。その側面に地下1階へ降りられるとみられる扉を発見した。駐車場に居たときから見えていた扉には監視カメラがしっかりと張り巡らされており、見つけからずに入るのは困難だったが、こちらの扉は周りが塀に囲まれているからなのか、鍵は掛けられているものの監視カメラはなかった。

鍵をロックピックで解錠し、中に侵入する。中は空調設備の機械類が所狭しと並べら

れていた。そのまま奥に進み、扉を慎重に開けて廊下へ出る。まずは地下へ潜入成功だ。ブルーを探さねばならない。

バーンウツドはブルーが救出できない場合は排除しろと言っていたが、私はそんなつもりはサラサラ無い。静かに救出出来なかった場合はアサルトライフルで強引にでも突破して確保するだけだ。必要ならば館内の警察官全員を射殺してでも連れ帰るつもりだった。私は静かに足を進め、丁度庁舎の真下に当たる部屋までやってきた。

部屋は資料室のようだった。その奥の方に男が一人、机に資料を広げて何かを調べているのが見えた。ちょうど両側を本棚に挟まれており、死角ではあるが、その席を背後から撮るようにして監視カメラが壁に設置されていた。

私は一刻も早く情報を聞き出してブルーの居場所を特定しなければならぬ。発覚する可能性が高いがやむを得ない、私は監視カメラを死角から叩き落として破壊した。

ガシャン

「ん？何だ今の音は？」

調べ物をしていた男が顔を上げてあたりを見渡し始めた。そのうち背後に監視カメラが落下して壊れているのを見つけると、不思議そうに近寄ってきた。

「なんで落ちた？金具が錆びてたのか？」

スタスタ

「んー、これは報告しておいたほうが良いよなあ・・・。」

独り言をブツブツとしゃべっていると、私を私は背後に回り込み、TAC-4のコツキングレバーを引き、同時に後頭部に銃口を突きつける。

カシヤ

「なっ!？」

「動くな。動けばあの世行きだ。」

「き、貴様、何者だ！」

「あんまり大きな声を出しても引き金を引くぞ。」

「ぐっ・・・。」

「答えろ。拘留施設はどこだ。」

「何?・・・そうか!あの女の仲間か！」

「答えろ。」

「こんなことをして、見つかったらただじゃすまないんだぞ！」

「3つ数えるうちに答えろ。答えなければ・・・。」

「くっ・・・！」

「3。」

「・・・。」

「2。」

「・・・くっ・・・。」

「1。」

「わ、わかった！言う。言うから命だけは・・・。」

「ゼ・・・」

「!!ここ、拘留施設はこの部屋の前の廊下を右に行った突き当りだ！ほら！言ったぞ！」

###情報を入手###

「・・・。」

「お、おい・・・？頼む、命だけは・・・。」

「ありがとう。しばらく寝ている。」

ゴツ

「うぐっ！」

バタッ

『うまく情報を引き出すことに成功したようね。廊下の右に行つた突き当りに拘留交流施設があるみたい。窮屈な思いをしているブルーを早く開放してあげましょう。』

後頭部を殴打して気絶させた男をその場に放置して廊下に出る。そのまま足速に廊下を進み、男が言つていた突き当りまで来た。突き当りの部屋は中に更にいくつかの部屋に分かれていた。拘留者から回収した持ち物を保管しておく部屋と、鉄格子扉を挟んだ先に鋼鉄製の扉が6箇所。その中すべてが独房のような作りになっている部屋がある。

私はまずブルーの持ち物を回収することにした。持ち物は手前の部屋にあるが、その部屋の中には一人の職員とみられる男が何やら書物をしていた。私は静かに扉を開け、背後に近寄ると後頭部をTAC-4で殴打して気絶させた。男の体を調べると、右の腰の部分に鍵束が入っていた。私はそれを取ると、ブルーの持ち物であるモンスターボール6個と一緒に独房へ向かった。

鉄格子の鍵を開け、独房ののぞき窓から一つ一つ中を調べていく。持ち物置き場を見

てだいたい察していたが、この拘留施設には現在ブルー以外に収監されている人間はいないようだ。ブルーは一番奥の部屋に居た。ベッドに仰向けで寝ているのが確認できたので、私はのぞき窓を閉めて鍵束を使って扉を開ける。

カチャカチャ…ガチャ

ギイ…

「ふっ！」 シュッ！

「！」 パシンツッ！

「防がれた?! ……って47！ 助けに来てくれたのね！」

「随分な歓迎方法だ。」

「仕方ないじゃない。脱出の方法を考えたら、開けられた時に急襲する他なかったんだものー！」

「お前の持ち物は回収してきた。」 トサツ

ブルーはモンスターボールを受け取ると恐る恐るといったふう聞いてきた。

「ありがとう。…その…47？」

「なんだ。」

「怒ってない？」

「何故だ。」

「私ハマして捕まっちゃって・・・47にもICAにも迷惑かけて・・・。」

「私はともかく、ICAは救出が出来ない場合は抹殺せよと命じていたがな。」

「ちよっ!?!ひどくない!?!」

「機密事項は喋っていないだろうな?」

「もちろん。何聞かれてもファクションの話しかしてやらなかったわ!」

「そうか。では脱出するぞ。」

「そうは行きません。」

「!」

「げっ!?!」

不意に第三者の声が聞こえたので振り返るとそこには金髪色黒の男が立っていた。

~~~~~

『47。その男の名前は降谷零。安室透、バーボンなどの偽名・コードネームで活動している公安警察よ。主要人物だからくれぐれも殺さないように。』

~~~~~



「バーボン、ということは例の組織に潜入しているスパイということか。厄介な人物に見つかったものだ。」

「どうして僕がココに居るのかって顔してますね。答えは簡単。隠し監視カメラにあな  
たの姿がバッチリ映っているからですよ。」

「……。」

「……どうする?」

「作戦変更だ。プランBと言うやつだな。」

「おっと、抵抗はしないでいただきたいのですが。その後ろに背負っているものを使わ  
れると厄介なもので。」

「ブルー、これを。」

「なにこのケース……ってこれは……。」

「そういうことだ。」

「そういうのは得意じゃないんだけどなあ……。」

公安警察の背後にはすでに数名の警官がこちらに拳銃を向けている。しかし我々  
はお構いなしに装備を整える。しかししびれを切らしたのか、

バキーン!

キンツ!

「動くな!」

「・・・。」

降谷零が威嚇射撃を行ってきた。そろそろ堪忍袋の緒が切れかけているのか。私は一拍の間の後にブルーと一緒に独房内に転がり込んだ。

ドンツ

「何!?!」

ドサツ

「ちょー47!?!」

バタンツ

「自ら独房に入ってくれるとは。ある意味手間が省けたかもしれないかもしれませんがね。しかし鍵がそちらにある以上意味はないので一旦出てきてもらいますよ。オイ。」

「はい。」

別の警官がのぞき窓を覗こうと窓を開ける。と同時に私はその窓に向かってTAC—4を単発打ちした。

ダアンバリン!

ドシユ

弾は見事に覗いた警官の眉間を撃ち抜いた。同時に扉を勢いよく開けて扉の中から外へ向かってT A C - 4で制圧射撃を行った。

ダダダダダダ!!

「くっ！一旦引け！」

「ブルー！」

「わかつてる！頼んだわ！カメちゃん！」ガメー

「カメちゃん！ハイドロカノン！」

バシユー

「うわああ！何だこの水は!!」

「くっぞー！」

ブルーのカメックスのハイドロカノンによって鉄格子の外で待機していた警官たちを壁越しに押し流した。私は水の流れを避けつつ鉄格子に近づいた。

鉄格子は凄まじい水の勢いに押され若干へしゃげていた。壊れた格子扉をくぐり抜け、すかさず両脇に転がっていた警官の脳天を順に撃ち抜いていく。降谷だけは更に部屋の外に退避しようだった。

ビービービー

室内があらかた制圧できたのでそのまま部屋の外にも出ようというところで警報が

なった。おそらく降谷が自分一人では対処できないと踏んで応援を呼んだらしい。

「ブルー、サーバールームの場所はわかるか。」

「任せて！こつちよ！」

急がなければ警官たちが大量に押し寄せてくることになる。そうなれば弾が足りなくなってしまう。私達は急いで階段を駆け上がった。

4階につき、サーバールームまで走る間にも駆けつけた警察官が静止してきたが、その都度眉間に弾丸を食らわせることで対処した。サーバールームの扉には鍵がかかっていたが、こちらにはマスターキーがある。

「やれ。ブルー。」

「カメちゃん！メガトンパンチ！」ガメー

バゴオン！

「そのまま出口で待機しろ。誰が着ても容赦するな。」

「それは主要人物でも？」

「できれば気絶に留めろ。だが万が一の時は容赦するな。」

「了解！」

私はブルーを入口に残し、手近な端末を操作する。ICAのインフォーマントリストを探し出し、それらをすべて三重消去していく。削除している間、サーバールーム内の

いたる所に爆薬を設置する。この部屋全体が粉微塵になるように、今回使う爆薬は技術部の特製であり、今までとは比較にならないほど強力だ。およそ500gほどの爆薬を満遍なく仕掛け終えた辺りで削除が完了した。

「ブルー。爆薬の設置と削除が完了した。行くぞ。」

「わかったわー！いま道を作る！カメちゃん！ハイドロカノン！」

カメックスのハイドロカノンやTAC-4の制圧射撃、ブルー自身に渡したEnramHVの乱射などで強引に道を作ると、建物の北側の窓に向かって走った。ちなみにサーバルームへ入る扉は出る時にカメックスに力づくで手前に引かせたため、ドアが完全にへしやげており開けるには溶断器が必要になるだろう。

窓際まで到達するとそのままTAC-4とEnramHVで窓を破壊し、そのまま外へ飛び出した。

「ぷりりーおねがいー」プリー

ボヨン

プクリンのおかげで4階から飛び出しても、地面と激突すること無く降りられた。そのまま近くに止まっていたパトカーに駆け寄る。

「まてー！」

後ろから降谷の制止の声が聞こえるが、私は窓に向かって銃撃することで答える。

「やっぱり鍵かかっているわよ。やっちゃっていい?」

「やれ。」

「はーい。そおーい!」

「バリーン!ピーピーピー」

盛大に運転席のガラスを割って鍵を開ける。そのまま適当にガラス片を払った後、ブルーが運転席、私が後部座席に乗り込んだ。訓練施設で習ったため、ブルーは手慣れた手付きで電気回路を弄ってエンジンを掛けた。

建物の1階から数名警官が出てくる。車は急発進し、私は後部座席から銃撃を加えて牽制すると同時に爆薬のスイッチを入れた。

「ドガアアアン!!」

「きやあー!」

「ぐっ!」

「ちよつと!47!爆破するならするって言ってよね!」

「すまない。」

新型の電子励起爆薬とやらは凄まじい威力を発揮した。技術部はまた一つオーバーツを開発したようだ。爆発のあつた箇所だけでなく、ドアからの圧力で4階部分の窓ガラスはほぼ吹き飛んでいた。サーバルームがあつたと思われる箇所は外壁ごと吹

き飛んでいる。

「とにかく行くわよ！しっかり掴まって！」

そのままバーが降りていた駐車場の出口を強引に突破して逃走を開始する。早朝近いうちということもあり、都内とは思えないほど道は空いていたため逃走は容易だった。南に走り、虎ノ門2丁目を左折。汐先橋を右折して首都高に入った。後ろからは数台のパトカーがついてきている。

「どうするのよ！だいぶ追手が来てるみたいだけど!？」

「そのまま回収地点まで走れ。後ろはなんとかする。」

そのまま首都高を南下し、芝浦ジャンクションでレインボーブリッジ方面へ入る。直線部分で1台が一般車をかき分けて近づいてきたので、銃撃を運転席に食らわせる。縦手が居なくなつたパトカーは橋手前のカーブでそのまま外壁を突き破つて下に落ちていき、爆炎が上がる。しかしすぐに橋の上で3台のパトカーが近寄つてきた。私は冷静に一番近い車両のタイヤをパンクさせた。パンクしたパトカーはコントロールを失いスピニングしながら後方の別のパトカーに激突し、こちらも凄まじい音を立てながら大クラッシュし、爆発炎上した。

有明ジャンクションを左折、湾岸道に入ると道が広くなつたおかげで距離を取りつつ横に並ぼうとしてきた。そのまま走ると見せかけ、新木場インターで強引に車線変更の

後高速を降りた。その際に割り込まれたトラックがバランスを崩して横転し、パトカーを何台か巻き込んだ。しかしまだかなりの量のパトカーが追従してきており、振り切るのは難しいだろう。私は本部に支援を要請することにした。

「私だ。聞こえるか。」

『良好よ。支援が必要かしら？』

「ああ、頼む。」

『了解。後続のパトカーを振り切らせてあげるわ。』

新木場交差点で右折。そのまま南下していく。東京ヘリポートの前には警官が多数陣取っていた。おそらくヘリで逃走すると考えたのだろう。その結果、対向車線はから空きだったので対向車線に移って警戒線を突破した。この辺りは道も広く、直線で見通しも良いため、ブルーも遠慮なく車両の性能限界までアクセルをベタ踏みしている。後ろのパトカーも何台かそれに追隨してきているが、今までの行いから若干引いている車両が多数だ。

ゴルフ場の横を通過し、東京ゲートブリッジに差し掛かった。

~~~~~

『戦術AIです。ドミネーター後部VLSハッチ開放。モード“対地”。目標“東京

ゲートブリッジ”。発射シーケンス完了。発射まで3, 2, 1, 』

~~~~~

ゲートブリッジから左手のまだ薄暗い海上から一本の火柱が上がる。上がった火柱の先はそのままこちらに近づいてくる。ブルーも気がついたようで更にパトカーのスピードが上がる。我々の乗るパトカーが中央部を通過した直後、

ドガアアアン!!

通過したばかりの橋の中央部分にミサイルが弾着した。橋は轟音を立てつつ崩れ始め、こちらも若干バランスを崩しかけたが、なんとか崩れた中央部分から逃れられた。後続のパトカーは一部が止まりきれずそのまま海に転落していくのが見える。残りの大半のパトカーは手前で停止し、呆然とこちらを見送るしか無いようだった。

そのままコンテナ埠頭を経由し、新海面処分場の先端までたどり着いた。回収ポイントではこちらを待っていた人物が居た。私達はパトカーから降りて駆け寄る。

「あら、タバサちゃん！久しぶりじゃない！」

「(コクン) 早く乗って。」

「急いだほうが良さそうだ。別働隊がこちらに来ている。」

「じゃあ感動の再開は船の中ね。行きましよう。」

我々三人は用意されていたゴムボートに乗って、さきほど火柱が上がった地点へ向かい、そのまま潜水艦で東京湾を後にした。

~~~~~  
10分後~~~~~
~~~~~

「取り逃がしました・・・。」

「・・・くそっ!」

「どうします降谷さん。警察庁の被害も甚大です。サーバールームは跡形も無く吹っ飛びました。その他高速道路や一般道での警察車両の爆発炎上、死者も50人を超えています。」

「・・・ココまでの被害は隠せるものじゃない。隠せる部分は全てかくして、後は報道機関に圧力をかけて報道する期間を短くさせるしか無い。」

「わかりました・・・。」

「風見、お前は拘留した女についてももう少し調べてくれないか。ここまでして奪還しに

来るということはそれなりに重要人物だったのかもしれない。」

「わかりました。降谷さんはどうするんです?」

「今回のことに組織が関わっていないかどうか調べるつもりだ。おそらく白だと思いがな。」

「何故です?」

「組織はもつと穏便と言うか……ここまでのことはやらない。爆破するのは奴ららしいが。」

「なるほど……。ですが救出に來た男は顔を晒しているのでしょうか?」

「それどころか、前に一度あったことがあるよ。」

「なんですって?」

「ポアロで働いていた組織の構成員が殺された事件があっただろう。そのときにな。」

「じゃあ今回もその男の組織が……。」

「可能性は高い。おそらくICAだ。全く厄介な相手だ……。」

「ICA……。それはどういう組織なんですか?」

「国際的な暗殺組織だ。本来ココまで大胆にはやらないんだが……。それほどにまであの女が大切だったということか……。」

「……。最優先で調べます。」

「頼む。ひよつとしたらこの国の存亡に関わる可能性もある案件だ。慎重にな。」  
「はい。」

~~~~~  
~~~~~

・「忍び寄る影は救世主かそれとも・・・」

【+3000】『ブルーと合流するまで誰にも見つからない。』

・「完全隠滅」

【+3000】『サーバールームを完全に破壊する。』

・「警察だ！」

【+1000】『パトカーで脱出地点に到達する。』

・「ロンドンブリッジ」

【+5000】『最低一つの橋を爆破する。』

## HITMAN 2 『受領』

『イケスカへようこそ。47。』

『イケスカ動乱やその後に起きたイサオタワー爆撃事件の影響で、町の治安部隊はかなりピリピリしているようね。ちよつとのことでも飛んでくる可能性があるから注意して頂戴。』

『町には動乱以降、自警団と呼べるものが組織されては分裂してを繰り返しているわ。今一番影響力がある戦闘航空団が、評議会に雇われたコトブキ飛行隊だというのが皮肉な話ね。そういうわけだから空に上ったら彼女たちがやってくる可能性が高いわ。むしろ空に上る前でも町中でのいざこざに駆けつけてくる可能性すら今の町の状況ではあり得るわ。』

『報酬を渡して文書を受け取るだけなのだからスマートに行きましょう。』

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

私は今、イケスカの繁華街とも呼べる地域に來ている。イケスカはこの世界ではかなりの大都市に分類されるようで、高層ビルが立ち並ぶ姿はマンハッタンを連想させる。しかしどの建物もどこか日本風だ。それも日本の風景というよりは、他国の人間が想像した日本と呼べるような歪な構造をしている。ほとんどの高層ビルの屋上が天守閣のような三角屋根になっているのが最たる例だろう。

繁華街は人が多く、人口もかなり多いことがわかる。そのうちの一軒の中華料理屋が今回の協力者とやらとの接触場所だ。入り組んだ路地の中にあり、片側3車線ある表通りと違ってこちらは一人一人がすれ違うのがやつと云った感じだ。私は目的の中華料理屋に到着した。

ガララ

ラツシャイマセー

「待ち合わせだ。名はクリタ。」

「クリタ様ですね。こちらです。」

クリタは相手の偽名だ。協力者は裏稼業であるためこうした偽名をたくさん持っているようだ。

「おお、あなたがシジヨウさんだな。」

「そういうあなたがクリタさんか。」

「フフフ、まあ座れや。おい！親父！ビールを一本もってこい！」

「私は食事するつもりはないのだが。」

「まあまあ、固いこといわなさんな・・・おお、きたきた。」

ハイビールオマチ！

「さて、本題だが。」

「ああ、そうだったな。こいつがその文書だ。こいつを手に入れるのにだいぶ苦労したぜ・・・。」

「確認したい。」

「おっと、その前に報酬だぜ。」

「・・・良いだろう。このケースだ。」

「どらどら・・・ほほう・・・これはこれは・・・全部で？」

「1万ポンド。」

「ふうん・・・。足りねえなあ。」

「何？」

「俺様の働きに対して額が足りねえって言っただよ。そうだな・・・5万ポンドなら渡してやってもいいぜ？」

「・・・最初の要求と差異があるようだが。」

「あのときやあまだ仕事する前だったからな。ココまで大変な仕事になるとは思ってたなかつたんだよ。で、どうすんだ？5万出してくれるなら渡してやってもいいぜ。」

「・・・少し待て。」

~~~~~

『上級委員会の方針ははじめから決まっているわ。値段の吊り上げには応じられない。』

~~~~~

「値段の吊り上げには応じられない。1万だ。」

「じゃあご破産だなこの話は。実を言うところの文書を欲しがってるのはおたくらだけじゃないんだよ。」

「・・・。」

「そいつらはこの文書を4万で買うと言ってきた。普通に考えりやどつちに売るかは自明だよなあ？」

「・・・売る気はないと？」

「5万出せば売ると言ってたんだよ。1万じゃ話にもならねえな。」

「そうか。わかった。では5万だそう。だが今は残りの4万はない。後日再度受け取りに来る。」

「お！やる気になってくれたみたいで嬉しいねえ！わかった！じゃあ明後日だ。明後日まで5万用意したら売ってやるぜ！」

「わかった。では今日はこれで。」

「おいおい、まだビールしか来てねえぞ？なんか食ってけよ。奢るぜ？」

「この後も別の仕事が入っている。失礼する。」

「けっ、そうかい。わかったわかった。じゃあな。」

~~~~~

『実を言うとこの状況になるのは想定されていたわ。だからあなたを派遣したわけ。上級委員会から通達よ。任務更新、協力者ターゲットを暗殺し文書を手に入れよ。上級委員 No. 5からの勅令よ。』

~~~~~

私は一旦店を出る。この店が路地裏にあると言ってもそれなりに客足がある。しかもわざわざ人目につきやすいカウンター前のテーブル席を指定した辺り事を起こされ

ないように警戒しているのだろう。それならば一旦引くのが得策だ。

私は周囲の状況を確認する。路地裏はだいぶ奥まで続いており、周囲が高層ビルなのもあって昼間だと言うのにだいぶ薄暗かった。だが高層ビル自体が整然としていて余計な出っ張り、室外機などの付属物、外付け階段などは一切見られないため、劣悪な立地条件にもかかわらず環境自体はそれほど悪くない。だが、暗殺を実行する上ではこれ以上無くやりづらい場所と言える。

しかし地面に目を向けると、他の世界の路地裏と同様色々とごちゃごちゃしている。どうやって入ってきたのかわからないトラックや、スクーター、ゴミ箱やビール箱がそれなりに整頓はされている状態で置かれている。

私はその中でスクーターに目をつけた。この世界でのスクーターは前時代の三輪バイクであり、この世界でどういうふうに進化したのかは知らないが、東南アジアなどによく見かけるトゥクトゥクのような形をしている。トゥクトゥクなら以前暗殺に使用した経験があるので、今回もこいつにお世話になることにしよう。

表通りから少し入った所に中華料理屋があり、そこから更に奥に進んだ所にスクーターがある。ターゲットは裏稼業の人間なので無意識的でも表通りは通らないはず。中華料理屋の店員の対応を見るにそこまで常連というわけではなさそうだった。つまり裏口などを使わせる可能性は少なく、それらを総合するとターゲットは帰る時には必

ずこの道を通るはずだ。

私はトウクトウクの燃料タンクを調べた。下側には燃料を排出させるための弁があった。周りで見ている人間がいらないことを確認して弁を開ける。燃料は軽油のようだが、着色されていない。おそらくこの世界では燃料に着色する施設がないと推測される。おかげで燃料が漏れ出して道に水たまりを作ってもただの水たまりにしか見えな。私はそのまま少し離れたところでターゲットを待ち構えた。

アリガトウゴザイマシター

「ふー。食った食った……。」

ターゲットが出てきた。ターゲットに会った時、服からタバコの臭いがしていた。おそらくヘビースモーカーだ。そういう人間が禁煙の飲食店で食事をして出てきた後にすることと言えば……。

シユボツ

「ふー……。」

予想通りタバコを吹かし始めた。そのままタバコを啜えたまま予想通りこちらへ歩いてくる。手には先程の文書を入れたカバンを持っている。軽油が漏れている箇所

ターゲットが差し掛かる。それほど時間は経っていないため唾えタバコ程度で引火するほど揮発していない上、この路地はビル風によつて常に若干風が吹いている。その御蔭で軽油の匂いにも気が付かずターゲットはこちらへ歩いてきた。軽油の漏れている箇所差し掛かった時、私は持っていた報酬用のアタッシュケースをターゲットのカバンに向かつて投擲した。

シユツ

バシン！

「ぐあー」

寸分たがわず当たったアタッシュケースはカバンをはるか後方へとはじき出した。突如として襲った衝撃に思わず声を上げてしまったターゲット。口には今の今まで啜えていた火の点いたタバコ。下には漏れ出した軽油溜まり。どうなるのかは文字通り火を見るより明らかだった。

ポオオウ!!!

「うわー！うわわー！ぎゃああ!!あじいい!!」

またたく間に炎に包まれたターゲットはたまらず転げた。しかしそんな事をすれば下に溜まった軽油に自ら飛び込むようなものだ。必然的に助けを呼ぶこともままならないままターゲットは完全に炎に包まれた。

~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~

『ダーグルの死亡を確認。我々を舐めた報いね。さあ、文書を確保して頂戴。』

~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~

「何事ですの!?!」

「うげ!?!誰かが炎に包まれてるよ!!」

「キリエ! 消火器を! 早く!」

表通りから騒ぎを聞きつけたのか通行人が野次馬として集まってきた。私はそこま
 で広くないこの通りを野次馬に紛れるようにターゲットが落としたカバンに近寄る。
 カバンは数m先の地面に落ちていた。その更に先、表通りの方にアタツシユケースは
 あった。

「あら? これは……。」

「消火器持ってきたよ!」

「早く消火を!」

バシユウウウウ……

「ふ……うっ……この匂い……。」

「人の焼ける匂いですわね……。」

「ん？エンマ。そのカバンは何？」

「ああこれですか。ココに不自然に転がっていたんですわ。」

つと、アタツシユケースのほうは野次馬と一緒に来ていたコトブキ飛行隊の二人に回収されてしまった。致し方ない。中身はただの金なので回収する必要も薄いだろう。今のICCAにとって1万ポンドは端金のようなものだ。あの紙幣は技術部が偽造したものだと言われたのは作戦終了後のことだ。

ターゲツトのカバンを回収し、再び野次馬に紛れるようにしてその場を後にする。一旦別の場所でカバンの中身を確認する必要があるだろうか。

くコトブキsideく

「これは……！」

「えっ！なにこれ!？」

「お金ですわね……。しかもかなりの額。」

「それが焼かれた人の近くに落ちてたってことは……。」

「無関係ではないでしょう。」

「ちよつと君たち。それはなんだい？」

「ああ、自警団の方ですか？」

「ああ・・・って君たちはコトブキ飛行隊の?!」

「キリエだよ！」

「エンマともうします。このケースはココに落ちていました。おそらく焼かれた方の遺留品かと。」

「なんだって!ちよつと良く見せてくれ。」

「あ、結構重いですわ・・・。」

バサア

「ああ、言わんこつちやない。」

「な!かなりの大金だ!ということは金銭絡みの抗争か・・・?」

「それならば肝心の現金がここにあるのが腑に落ちませんわ・・・。あら?」

「どうしたの?エンマ?」

「・・・キリエ。すぐにみんなの所に戻りますわよ。」

「え?え?どういうこと?」

「すみませんが自警団の方。後を頼みますわよ!何かあったらオウニ商会へ!」

「あ、ああ・・・わかった。」

「ちよ、ちよつと!エンマ!?!」

「ど、どうしたのきエンマ！ハアハア：何もそんな走らなくても！」

「カバンからお金がばらまかれて中が見えたんですの！そこに見覚えのあるマークが！」

「マークう？」

「あれは・・・あのときの・・・！」

（ 47 side ）

そう言えばあのアタツシケースはICA純正品。中の金だけ渡す予定だったのでアタツシケース自体は回収する予定だった。支給品ではあるが特に目新しい機密や機能があるわけではないので問題はないだろう。

私は別の路地でカバンの中身を確認した。中には目的の文書以外にも色々入っていた。なかでもイジツの重要人物に関するメモ帳は、帰還後情報部に回されることになるだろう。

私は町の南の外れにある第6格納庫へやってきた。格納庫の扉を持ってきていた鍵で開ける。かなり大きい格納庫の中には既に発進準備がほぼ完了していた巨大な飛行船があった。

『これがシャドウレディ型空中航空母艦その4番艦にあたる“デュープシスター”よ。他の世界でも運用できるように各種迎撃装置や特殊機構が満載されているわ。この飛行船自体も渡界機の機能の発展型を搭載していて、この飛行船ごといろいろな世界にジャンプすることができるの。NBC対策も万全だからセーフハウスの役割も十分に果たしてくれる。我々ICAの新たな時代を象徴する画期的な船よ。』

飛行機よりも先に発明された飛行船が新たな時代を象徴するとはなんとも皮肉だが、見た所その言葉に偽りはないようだ。上部2門だけだったCIWSは上下左右いたるところに増設されており、その一部はどうかやら高出力レーザーに換装されている。下側にあつたはずのゴンドラ部分も内部に格納されているらしく、搭乗口はデッキから直接胴体に入る形になっている。

私は諸手続きを済ませ、カバンを片手に飛行船に乗り込んだ。内部はCIICのようになっており、外を見渡せる窓はなく、すべてカメラ映像で運用されているようだ。

ちなみに、2番艦“フロントムガール”と3番艦“ゴーストクイーン”はそれぞれ既

に別の世界に配備が完了しているらしい。前者はハルケギニアに。後者は艦娘たちの世界に派遣されていることを同乗の技術部職員から聞かされた。この機はどこへ向かうのかはまだ決まっていないらしい。

ほどなくして発進準備が完了。正式に現地建造業者から受領し、係留ロープが解かれ、処女航海へと出発した。ゆつくりと格納庫からスライドするように外に出ると、完全に格納庫を出たところで上方へ上昇を開始した。以前乗った一番艦は飛行船そのものの浮力で上昇していたが、この艦は側面のターボプロップエンジンが向きを変えることで上昇する仕組みなのだそうだ。技術者の一人がアニメ映画を見て発案したと。あとブタのヒツメがどうか言っていた。

ピーピーピー

「対空レーダーに感あり！」

「来たか。」

上昇を開始し、周りの高層ビルよりも高くなったところで対空レーダーに機影を補足することが出来た。数からしておそらくコトブキ飛行隊だ。そこまで時間は経っていないはずだがお早い到着だな。しかし、我々は曲がりなりにも正規の手順を踏んでの飛行船を建造し受領している。攻撃されたり拿捕されるいわれはないはずなのだが。そ

のあたりも含めて無線で聞いてみようとした矢先、向こうから回線をつないできた。

「こちらオウニ商会所属コトブキ飛行隊！第6建造所から発進した飛行船、直ちに停船せよ！」

「こちらインターコンフォートアカデミー所属、ディープシスター。停船勧告の理由を述べよ。」

インターコンフォートアカデミーは建造に際し設立させたペーパーカンパニーだ。流石にICA本体を建造主にする訳にはいかないからな。

「貴艦には先程市街地で発生した殺人事件の重要参考人が同乗している可能性が高い。直ちに停船し、臨検を受けられたし。」

「正式な書類がなければ停船に応じることは出来ない。我々はこれより南南西方面へ市街地を離脱する予定である。進路を開けられたし。」

「できない。停船に応じられない場合、強制的にでも停船させることになる。繰り返す。直ちに停戦せよ。」

この声はおそらくリーダーのレオナだろう。意地でも停船させるとなると攻撃して上部の排気弁を狙ってくると思われる。幸いにしてコトブキ飛行隊以外には敵機は見当たらず、彼女らを退ければそのまま離脱することができるだろう。

~~~~~

『47。わかっていると思うけれど彼女たちの誰一人として殺傷することは許可されていないわ。攻撃する場合は十分気をつけて頂戴。』

~~~~~

無論殺傷する気はサラサラ無い。まずは威嚇から入るとしよう。

「停船には応じられない。我々に危害を加えるつもりならば正当防衛として貴機らを撃墜する。」

「くっ……。」プツン

「警告を行う。炸裂弾頭発射用意。」

『戦術AIです。空中炸裂弾発射シーケンス開始。目標、周辺空域。弾種、空中炸裂型巡航ミサイル“ニンバス”。発射3秒前。2、1、発射。』

バシユシユシユ

ボオオオン!!!

飛行船の周りに発射された炸裂弾頭は飛行船の周りを焼き尽くすように拡散した。まだ完全に張り付いていなかったコトブキ飛行隊の眼前に炸裂した形になり、映像を見る限り全機回避に成功したようだ。

そのうちレオナ機とザラ機がツーマンセルで攻撃を仕掛けてきた。上部排気弁に向かって挟撃を敢行、しかし近くのC I W Sによる弾幕によって攻撃可能位置に到達する前に離脱した。

私は砲撃手に指示を飛ばす。新兵器の性能を試すでしょう。

くコトブキsideく

ケイトから報告を受け、すぐにマダムに出撃許可をもらい、急いで駆けつけてきたものの、無線による交渉は決裂。攻撃を行おうと私とザラで挟撃を仕掛けたが、いとも容易くあしらわれてしまった。

「なんて弾幕だ。近寄れないぞ。」

「どうでしょうか・・・。」

「一箇所にも多方面からの同時攻撃ならあるいは。」

「なるほど。迎撃する暇を与えないわけですね。」

「よし、それでいこう。ケイトは直上、チカとキリエは右舷から、私とザラは左舷、エン

「マは後方からだ。」

「了解！」

「ケイト機、直上に移動する・・・」ボオン！「!?」

「ケイト!? エンジンが！」

「謎の攻撃を受けた。弾は飛んでこなかったがエンジンがいきなり発火した。」

「整備不良？」

「あきらかに外的要因。おそらく新兵器。」

「そんな厄介なものまで持つてるの?!」ボオン！「うわあ！」

「チカ！くっ！全機一旦散開！」

「了解！」

「なんだ、何が起こっている。味方のエンジンが次々に発火している。飛行船からの攻撃なのか？弾が出ていた様子はない。焦れば焦るほど不可解な事象はより理解しがたい物になっていく・・・。」

「レオナ！前！そのままだと敵の射程内よ！」

「!!しまった！」

急旋回したが時すでに遅し。飛行船の防空銃座の射程圏に入って・・・。

・・・?撃ってこない?どうということだ?

ボオン「きやあー！」

「レオナ！エンマもやられた！このままじゃ全滅だよ！」

「くっ、全機一旦引け！体制を整えるんだ！」

わけがわからない。今まで戦ってきた常識が通用しない。私には引いて体制を立て直す指示を出すのが精一杯だ……。

〈 47 side 〉

新型のレーザー砲台は的確に細く高出力のビームを出し、敵戦闘機のエンジン部分を発火させている。フツ化重水素レーザーは目には見えないため、相手からすればいきなり発火したように見えることだろう。それでも散開したということはこちらの攻撃であること自体は見破っているようだ。

「そのまま一機ずつエンジンだけを壊していけ。」

「了解。」

彼女らの使う機体は旧日本軍の機体だ。旧日本軍の機体は防火装置が貧弱で、燃えやすいことで有名だ。真偽はともかく一式陸上攻撃機などはワンショットライターなどと揶揄されたこともある。光速で飛ぶレーザービームをもってすればエンジンを発火

させるくらい造作もなかった。

ただレーザー砲の欠点としてある程度の距離が離れると威力が出ない事が挙げられる。現に今現在、かなり遠距離に散開したコトブキ飛行隊に対して、レーザー砲は照準こそ合っているものの今までのように即座に発火させることが出来ずに居る。砲弾による迎撃は不慮の事故が発生する可能性が高いためできることならば使いたくはない。かといってレーザーは射程が足りない。ミサイルはもつての外だ。

お互いに手をこまねいていると、技術部から通信が入った。

「渡界機の準備が完了しました。いつでもジャンプできます。」

「了解した。迎撃を中止し、渡界機で脱出する。」

私は即決し、一度この船を我々の世界にもっていくことにした。その数分後、渡界機が作動し、ディープシスターは、まばゆい光を放ちながらイジツから姿を消した。

~~~~~3時間後~~~~~

~~~~~

「うん、おそらくその組織だね。僕に接触してきたのは。」

「やつぱり……!」

「どういうこと?」

「ICA。暗殺を専門に行う組織で、僕の研究に興味があったみたい。」

「聞いたことある!というかこの前一緒に仕事した!」

「やつぱりやべー組織だったんじゃない!」

「でも断った。」

「そういうこと。そしたらいつぞやの博愛連合みたいに僕の部屋に押し入って研究ノートを盗んだみたいだね。」

「でもノートは帰ってきたんでしょう?」

「ああ。そして最後のページの余白にこう書かれてた。//ありがとう。高く売らせてもらう//と。」

「売る? 売るためにそのICAって組織が欲しかったわけ?」

「多分押し入った人間とICAは別なんじゃないかな。そいつがICAに高く売りつけるために盗み出して複製したんだ。」

「……あつ! もしかしてあの燃やされた男!」

「おそらくその押し入った男だろうね。何らかの理由で話がこじれてICAに抹殺されたってところだろう。」

「でも現場にはお金しか落ちてなかったよ？」

「おそらく写しは彼らが持ち去ったんだろう。」

「それで飛行船で逃げたのね。」

「そういうことか……。それで、研究ノートには何か見られたらまずいものが書いてあるのか？」

「いんや、特には。この世界の成り立ちやこの世界の仕組みについて色々研究したことが書かれてるだけだよ。ほとんどは憶測だしね。」

「じゃあなんで写してあげなかったの？」

「恥ずかしいじゃないか。なんか。」

「ええ……。」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~  
 ~~~~~

・「仰せのままに」

【+1000】『ターゲットの提案を受け入れる。』

・「トウクトウクリベンジ」

【+3000】『ターゲットをスクーターを使って暗殺する。』

・「世の中金じゃない！」

【+3000】『報酬入りアタッシュケースを投げてターゲットに当てる。』

・「博愛主義」

【+1000】『コトブキ飛行隊に死傷者を出さない。』

HITMAN 2 『自縄自縛』

『リガへようこそ。47。』

『ここはリガの中心地からほど近い展示場よ。今日はここで国際的な兵器の展示会が行われているわ。建物では主に携行武器や弾薬の展示、外のスペースでは陸上兵器の展示が行われている。ターゲットはロシア製の小銃の契約を行っているため、今回は建物内部に居るわ。』

『暴発・爆発防止のために展示物自体は本物だけれど実弾や炸薬は入っていないわ。暗殺に使うのは厳しそうよ。参加者はパリのときほど多くはないけれど、全員軍人上がりかその関係者だから事が起きたときは注意して頂戴。』

『健闘を祈っているわ。』

~~~~~

あちらこちらで兵器の売買契約や紹介が行われている。7割スーツ、3割軍服といっ

た感じで、我々の服装はそれらにうまく溶け込んでいると言える。しかし・・・。

「・・・視線を感じる。」

「ああ。」

タバサの青い髪はコスプレ会場とかなら問題なかっただろうが、この場では少なくとも浮いている。髪を染めさせたほうが良かっただろうか。ともかくターゲットを見つけ、プランを練らねばならない。多少目立ってはいるがみな軍人かその関係者ともあつて、見た目で判断するようなことはないらしい。むしろこのような場にそんな髪の色の少女が来ていることに逆に警戒心を与えているようだ。

「・・・別行動。」

「・・・それがいいだろうな。」

結局別々にターゲットにアプローチすることにした。私は展示会参加者に混じってターゲットを探し、タバサは一旦外に出て屋根の上からターゲットを探す。展示場内はそれなりに広いが人はそれほど多くはない。ターゲットとH C L I 一行は意外とあっさり見つけられた。

~~~~~

『アレがチュニコフ。周りを私兵がガードしているけれど数が足りないみたいね?』

~~~~~  
~~~~~  
ターゲットのチュニコフとココ・ヘクマティアル、東條、バルメ、ルツ、ヨナが見える。レーム、ウゴ、マオ、ワイリが見当たらないが外で待機しているのだろうか。私はもう少し近づいて話している内容を探った。

「・・・いやあ、今回はあなた方がいてくれて助かりましたよ。」

「いえいえ、こちららも仕事ですので。」

「まあそうですね。お約束どおり。30%オフでご提供させていただきますよ。」

「あとはトルコ陸軍の中将殿との会談ですね。そのあとはどうするんですか？ホテルへ帰りますか？」

「いえ、ベネズエラの将校との会談が先程急遽入りまして。それが済んでからですねホテルへ帰るのは。」

「なるほど。・・・つてもしかしてブス中佐ですか？」

「おや？ご存じなかったのですか？彼は現在K I A扱いですよ。」

「それは知っています。私が言いたいのには・・・。」

「わかっています。その取り巻きですよ。問題ありません。ブスの一派は空軍、今

「回会うのは陸軍ですから。」

「そうですか……。」

「ただ、だいぶ用心深い方でして。合うのは二人きりで個室にてということでしたので。申し訳ありませんがその時だけは護衛を外すことになりますな。」

###アプローチ発見###

「構いませんよ。部屋の周囲は固めても？」

「それは構いません。もつとも向こうも部屋の周囲は固めてくると思います。」

~~~~~

『ターゲットはこのあとベネズエラの陸軍将校と会談の予定が入っているみたいね。それも二人つきりで。該当する人物は一人だけよ。代わりにあなたが行ってあげればターゲットと二人つきりになれるわね。奇しくもその将校、あなたによく似てるわ。』

~~~~~

「大きな声では言えませんが、ベネズエラ軍よりはあなたの方がほうが頼りになりそうだと頼みますぞ。」

「お任せください。しかし……言つてはなんです、ここまで警戒される必要があるの

ですか？」

「ええ。実は……」

ターゲットはココ・ヘクマティアルに耳打ちをし始めた。流石に耳元での囁きまでは声が拾いきれない。ささやきを受けた彼女は少しだけ目の色が変わった。

「それは……確かなのですか？」

「確かです。もしかしたらこの会場内にも……」

「……わかりました。我々も個人的に彼らには用があるのである意味都合です。」

「そうなのですか？流石HCL I。暗殺組織にも顔が知れているわけですか？」

「そういうわけでは……。ただ以前我々の周りでしたかしくてくれたことがありますね。」

「なるほど。お気をつけください。彼らは凄腕集団と聞きます。狙った獲物は逃したことがないとか……」

「今回狙われているのはあなたなのですよ？もうちよつと危機感もつてください。」

「ああ、そうでした。ですがあなた方の護衛ならば安心感も間違いですよ。」

「あはは……お褒めに預かり光栄です。」

「……どうやら我々のことを若干ではあるが嗅ぎつけられている可能性が高い。私は不自然にならないよう彼らから離れた。」

送ったから見て頂戴。』

~~~~~  
送られてきた写真を受け取る。内部にいなかったということは外部、つまり展示場裏手の陸上兵器展示コーナーに居る可能性が高い。私は屋根の上をサイレントで音を消しつつ移動した。

遠見の魔法を使って展示場を見ていく。この世界では魔法はおとぎ話の世界の話。つまり対策など全くされていないのでその有効性を存分に発揮できる。その結果、展示場の最奥。レオパルド2戦車の稼働展示が行われているスペースに目的の人物を発見した。

「こちらタバサ。目的のベネズエラ軍将校を発見。屋外展示スペースブロックZ-8。」  
「了解。そちらへ向かう。タバサは私兵団の残りのメンバーを探してくれ。」  
「わかった。」

内部にいなかったのはレーム、ウゴ、マオ、ワイリの4名。どれも歴戦の兵士で特にレームと呼ばれた男はデルタフォースというこの世界の精鋭特殊部隊出身とのこと。注意深くいかなければ魔法ですら見破られかねない。私はそのまま展示スペースをくまなく搜索することにした。

（ 4 7 s i d e ）

私はタバサの情報を元に屋外の展示スペースへやってきた。土煙を上げつつ戦車が走り回っているのが見える。何グループかがそれを見守っているのが見え、そのうち1つのグループの中に目的の人物が居るのを確認した。ピエトラ少将は4〜5人の男たちと会話をしながら展示を見ている。私は近くの展示物を見るふりをしつつ、彼らの会話を聞いた。

「いかがですか？ T-72などよりも圧倒的な火力と装甲があります。」

「ふむ……。」

「貴国はAMX30を導入しておりましたね？一部の部品や整備設備が流用できるパッケージもございますよ。」

「性能は申し分ない。しかし値段がな……。」

「今は多様化の時代です。ありとあらゆる状況に対応できる事が重要です。これならば市街地・荒野、どちらも対応できます。それに中長期的に見ればすぐ陳腐化するT-72よりこちらのほうが有効ですよ。」

「ふむ……まあともかく一旦預らせてくれ。もうひとり会わねばならん人がいるので

今日のところはこれで。」

「はい。ご連絡お待ちしております。」

「つと、次の会談までまだ少し時間あるよな？ちよいと用を足してくる。」

「了解しました。お供します。」

「ヤメロよこの年になつて連れションなんか。入口で待つてろ。」

屋内展示場に移動しようとした少将は途中にあるトイレに入っていくようだ。私はトイレの裏手に回り込む。裏手の窓はすりガラスになつてはいるが、幸いにも鍵はかかつていなかった。私は少しだけ窓を開ける。中では壁の小便器に向かつて用を足している少将がいた。私は少将の注意が壁に向かつているのを確認して、静かに窓を開き、背後に忍び寄つた。少将が用を足し終えるのを見計らつて後ろから羽交い締めにして気絶させた。

気絶させた少将の服を借り、携行していたグロック17もシルバーボーラーと交換しておく。少将は個室に閉じ込めておいた。それにしてもこの男。見れば見るほど私に似ている。スキンヘッドなのは勿論のこと、目つきや鼻の高さまでよく似ている。これならば言動にさえ注意すればバレることはないだろう。

私はトイレから出ると入口で待つていた随伴の兵士に話しかけた。

「さて、会談場所はどこだったかな。」

「閣下、先ほど説明申し上げましたよ。会談は南棟の第3会議室です。」

「ああそうだったな。では行くでしょうか。」

私は連れ立って兵士2名とともに会議室へ向かった。その道中、体内通信を使ってタバサに連絡を入れておく。

「聞こえるか。」

「良好。」

「屋外展示スペースエリア2のトイレにシルバーボーラーほか私の服も置いてきた。念の為回収しておいてくれ。」

「……。」

「タバサ?」

「……わかった。」

「それと回収したらすぐに逃走用の車を用意して展示場正面ゲートに持ってきてくれ。」

「逃走用車両の準備は終わっている。すぐに向かえる。」

「流石だな。」

最近タバサもICAに慣れたようで、共に任務をこなすときはこちらの思考を先読みして行動してくれることが多くなった。非常に頼もしい限りである。あとはもう少し基地の他のメンバーとの会話が多くなればよいのだが。その寡黙さは任務をこなす

上でも、選択肢を狭める原因にもなっていると思うのだが。

「それとHCLIIの他のメンバーを発見している。全員駐車場の彼らの物と思われる車両の近く。」

「よくやった。そこならば邪魔に入られることもないだろう。」

邪魔が入らなさそうなのは朗報だ。相手の数はできる限り少ないほうがいい。そうこうしているうちに会議室前までやってきた。部屋の前ではココ・ヘクマティアル他私兵団が陣取っている。

「こんにちは、あなたがフランク・ビエトラ少将ですね。私はHCLII社のココ・ヘクマティアルともうします。」

「これはこれは。かの有名なヘクマティアルさんの娘さんですな。お噂はかねがね。」

「ご存知でしたか。光栄です。ラヴレンチ・チュニコフさんは中でお待ちです。ですがその前に軽い身体検査をさせてもらってよろしいでしょうか？」

「ええどうぞ。」

私は懐からグロック17を取り出し、それを隣りにいた東條に渡した。その後ルツに軽く体を触られ身体検査を受けた。

「OKだお嬢。」

「ご協力ありがとうございます。銃はこちらで預からせていただきます。ではこちら

へ。」

ココ・ヘクマティアルに連れられて案内された個室は中央に1m四方程度の大きさの机と資料、そして椅子があるだけだった。

「やあ、少将。久しぶりだな。」

「ああ。残念だがそんなに時間がないんだ。手早くお願いしたい。」

「うん？ああ、わかった。では・・・。」

「はい。私共はこれで。」

ボタン

#####アプローチ完了#####

~~~~~

『完璧ね。部屋は防音、カメラやマイクもなく、部屋の中にはターゲットと二人きり。これ以上無いくらいのお膳立て。さあ、仕事を片付けましょうか。』

~~~~~

ココ・ヘクマティアル以下私兵団は部屋の外へ出ていった。扉が閉じられると外の音は殆ど聞こえなくなった。どうやら部屋全体に防音処理がなされているらしい。まさ

に秘密の会場所だ。

「早速だがベネズエラ軍が今回導入を検討しているT-72の近代化改修キットだが、本当に改修キットで良いんだな？その気になればT-80UやT-90も出せるが？」

「予算が足りない。コチラとしても・・・」

無難に会話を盛り上げつつ機会を伺う。そして話が煮詰まってきたところで自然を装って席を立ち、資料を持ちながら辺りをうろつく。

「しかし今回の契約ではその点においても・・・」

「対戦車ミサイルとの抱合せとなると予算範囲に収まるかどうか・・・」

「それならばこういうプランはどうだろうか・・・」

そういうとターゲットは足元にあつたかばんからノートパソコンを取り出した。そのまま立ち上げ、資料を表示させる。その間に私はさり気なくターゲットの背後に回つた。

「こいつとこいつだ。この2つならば1セット120万ドル以内で収まる。」

「ふむ、魅力的だ。しかし私はもう一つ欲しい物が出来てしまった。」

「うん？ああ、これだろう。たしかにこの新しいUAVシステムは・・・」

「いや、ほしいのは・・・これだ。」

私は一気に彼の首を締め上げそのままの勢いで首の骨を折った。ターゲットは一瞬



パソコンから手を離れたがそのままだらんと力なく背もたれに体を預けた。

~~~~~

『ターゲットの死亡を確認。よくやったわ。後は脱出するだけよ。』

~~~~~

私はそのまま背もたれによりかからせ、腕を組ませた。そしてそのまま外に出る。

「おや？ 会談は終了ですか？」

「いや、すこし用を足したい。彼は私の提案を今熟考しているようだ。すぐに戻るよ。」

「案内は要りますか？」

「いや結構。」

扉はすぐに閉めたため覗き込まれたとしても一瞬で、誰も息絶えてるとは思わなかったようだ。私は兵士2名と共に近くのトイレへ向かった。トイレの入口で待つように言った後、トイレの窓から外へ出た。そのまま速歩きで展示場正面ゲートへ向かう。

正面ゲートの外では逃走用に用意したと思われるハマーに乗ってタバサが待っていた。助手席のドアを開け、それに乗り込もうとしたその瞬間、私は直感でタバサに飛びつき頭を下げさせた。

バアン

バリイン!

「気が付かれたか。」

「急発進する。」

突如として後方から弾丸が飛んできた。弾丸は私にもタバサにも当たらず運転席の窓ガラスを貫通していた。開いた助手席のドアはそのままにタバサがアクセルを踏んで急発進した。ゲート付近の展示物や装飾などをなぎ倒しながら道に出る。相手は撃つては来たが車はまだ用意できていないらしく、そのまま走り去ることに成功した。

~~~~~同時刻ココside~~~~~

「ちい! 避けられた!」

「トージョー! 車だ! 車を回せ!」

「無理言うな! 用意してる間に逃げられちゃうよ!」

「クツソ! 俺たちの目の前で暗殺成功させられてまんまと取り逃がすつてのによ!」

「落ち着けルツ。」

「お嬢?・・・なんか顔が怖いんですけど・・・。」

「私の仕事を邪魔するかどうか思いかけてやる・・・。」カタカタカタ

「あ、あのーお嬢?何をしてらっしゃいますので?」

「こんなこともあるのかと近くの空港に無人機を配置しておいたんだ。絶対に逃さない・・・。」

「あ、姉御?お嬢がなんか怖い・・・。」

「あら、私のココの仕事を邪魔したんですから当然報いは受けてもらわないと。」(ニッコリ)

「う、うわあ・・・。」

「よし!捉えた!今A7を南下中。追うよ!」

バアンバリリリ

ザー

「え?何?いきなり画面が・・・。・・・!撃墜された・・・!?!」

『そのへんにしておきなさい。お嬢さん。』

「?!」

「な、何だ!?!パソコンから声が・・・!」

『あなたにとつては仕事を邪魔されたのかもしれないけれど、こちらはこちらの仕事をしただけ。これ以上こちらの邪魔をするのならこちらにも考えがあるわよ?』

「あんた達・・・ICAでしよう。」

『あら御名答。よくわかつたわね。』

「あんたたちが殺したやつから聞いてたからね。それで? 考えつてのを聞かせてもらおうじゃないの。」

『それならもう来るわよ。』

「は?」

ピリリリ

「ん? 衛星電話・・・? はい。ああ、何だあんたらか。・・・え?」

「ココ?」

ブウンキキーツ

「ココさん、車持つてきましたよ。」

「・・・トージョー、追撃は中止だよ。」ピッ

「え?」

「どうしてですか? ココ?」

「本部から連絡。追撃中止しないと給料9割カットだつて。」

【+3000】『ターゲットの首を折って暗殺する。』

・「ナイトフォーティセブン」

【+3000】『HCL I から無傷で逃走する。』

ワーワーワー

私は今、鎮守府施設に隣接している看護専門学校に來ている。鎮守府施設は当然のことながら侵入防止用のフェンスが張り巡らされているが、この専門学校施設の施設の一部だけ建物の壁がそのままフェンスの代わりにしており、つまるところ今いるこの建物の窓から鎮守府施設内に入れるのだ。

学校の警備はさんなもので、外を歩いていた生徒からスリの要領で掠め取った生徒手帳を元に、手帳を届ける近親者のふりをして何の問題もなく侵入出来てしまった。そのまま施設内を進み、鎮守府と隣接している箇所窓から外に出て、鎮守府内に侵入することに成功した。まずはターゲットに関する情報を集めなくてはならない。

まずは手近な倉庫へ侵入する。事前のブリーフィングで司令部の位置は大体把握していたので、そこへ向かう。この倉庫を抜ければ司令部の隣りにある工廠施設に行けるはずだ。

「大淀ー、あつたー?」

「そんな簡単に見つかるわけ無いでしょう?」

つと、倉庫内では艦娘が何やら探しものをしているようだった。危うく身を晒してしまふところだった。私は迂回しつつ抜けようとする。

「なんだって提督はいきなり天幕なんて引つ張り出させるの？海の上でキャンプでもする気？」

「何でも今日、大本営の方が極秘に視察に来る情報を察知したんだそうよ。私にもそんな情報入ってきてないのに。」

「どこソースよそれ。」

「鳳翔さん。」

「あー・・・、じゃあ来るんだろうねえ・・・。」

「鳳翔さんの情報では彼は暑いのが苦手らしいから、車や建物の中からは出ないだろうって。」

###情報を入力###

「だから天幕で路端にあるヤバイものは隠してしまおうってことか。納得。」

~~~~~

『ターゲットの加山譲は暑さに弱いみたいね。特に今日は既に気温33度を記録する猛暑。まず間違いなく外にはあまりいないでしょうね。』

~~~~~

たしかに今日は暑い。8月は日本でもっとも暑くなる時期であり、暑さが苦手な人にとってはこの上なく苦しい時期だ。おまけに日本では周りが海なのもあり他国に比べて湿度が非常に高い。だがこの暑さも、ターゲットを誘導する手段につかえそうだ。

私はそのまま倉庫を通り抜け、工廠施設に入った。工廠の管理担当の工作艦明石は倉庫で天幕探し、そのため工廠施設は稼働しておらず、外の遠くの方で子供と思われるはしやぎ声が聞こえるくらいには静かだ。私は使えそうなものがないか一通り見て回リつつ、工廠施設を抜けた。工廠内にはいくつか使えそうな、そして涼し気なものを見つけたので後で戻って使わせてもらおう。

司令部施設は至る所に「エアコン故障中」の張り紙がしてあった。どうやらエアコンが壊れたことにして将校を追い返したいのだろう。実際館内のエアコンは動いておらず、窓はすべて開け放されている。それでも内部の人間も暑さでやられてしまつては元も子もないので、扇風機が至るところで稼働している。そんな司令部だったので暑さで外には誰も歩いていないのもあり、覚えている限りでは最も簡単な侵入だった。

「あつじー．．．なんでエアコン動かさねえんだ．．．。」

「しようがないでしょ。提督命令なんだから。」

「クツソ。提督めー．．．。」

部屋の扉も全て開け放されており、そのうちの一つの部屋の中では海防艦佐渡と択捉

が居た。潜水基地とは言え、潜水艦だけでは基地機能は保てないようで、基地周辺の警戒を行う海防艦は一定数居るようだった。

「潜水艦たちは良いよなー、こんな日でも海に入っちゃえば暑さも関係ねえもんな…。」
 「そうだね…司令が待機しろって言っただけじゃなければ私達も泳ぎに行けたんだけどね。」
 「ったくよー…。それで？その要人サマはいつ来るんだ？」

「鳳翔さんの情報だと佐世保駅からタクシーでくるみたい。」

#####

「タクシー？専用車とかじゃねえのか？」

「一応極秘訪問ってことになってるから一般人を装ってるって言ってたよ。鳳翔さんの目からは逃れられなかったみたいだけど。」

~~~~~

『ターゲットは佐世保駅からタクシーで来るみたいね。タクシーの中はクーラーも効いててさぞかし涼しいでしょう。でもタクシーって運転手と乗客を閉じ込める密室でもあるのよね。うまく利用すれば楽に暗殺ができるんじゃないかしら。』

~~~~~

良いことを聞いた。いくつか良いプランが浮かんだので私は司令部施設を出て工廠へ戻ろうとした。

「いやーあついのね!」

「だからつてその格好はどうかと思うわよ・・・。」

「あつすぎるのがいけないのね!しようがないししようがない!」

「ろーちゃんも、暑いのは苦手ですつて・・・。」

「ろーちゃんも脱げばいいのね!」

・・・なるほど。確かにこれは司令部の将校には見せられないだろう。潜水艦伊19、伊168、呂500が並んで歩いてきているが、伊19のほうは靴だけ履いてほぼ全裸だ。おまけにその横の呂500を路上で脱がしにかかっている。確かに鎮守府施設内は男性職員はほとんど居ないが、それでももつと恥じらいくらいもったほうが良いと思うのだが。私は彼女らを通り過ぎるのを待った。

「こう暑くちやてーとくとプロレスごっこもままならないのね。」

「プロレスつて・・・。あんたまた勝手に司令官とやったの?」

「はつちやんが交代制にしましようにつて言つてたですつて!」

「しようがないの。てーとくがイクをエッチな目で見てくるのが悪いのね。」

「そりゃ全裸ならそうなるでしょ・・・。」

こういう状況以外にも、ここの基地司令は艦娘との肉体関係ももっているらしい。確か情報によれば基地司令官と艦娘との間にはその手の関係を防止する条項があったはずだが、ココでは公然と無視されているようだ。大本営の将校に知られれば確かに軍法会議物だろう。そのまま艦娘たちは道を通り過ぎて離れていったので素早く道を渡り、工廠施設へ入った。

工廠内で先程見つけた“液体窒素”を回収した。取っ手がついているためそのまま持ち出すことに容易に成功した。ついでにスプレーボトルも同時に回収しておく。そのまま再び工廠内を進み、倉庫の方へ出る。今度は倉庫内には入らず、その外側の駐車スペースを進む。大型トラックの間を通り抜け、先程侵入に使用した学校のすぐ横までやってきた。侵入した窓はそれなりに高いところにあるため、こちら側から侵入するのは至難の業だ。私は学校の裏手である南側に回り込み、そこにあつた学校の寮と思われる建物の側までやってきた。無論、建物と此方側の間には有刺鉄線フェンスが設置されているが、ココで先程もってきたスプレーボトルが役に立つ。

スプレーボトルの中にもってきている液体窒素を少量入れる。液体窒素を入れても大丈夫なスプレーボトルなので問題なく噴霧できる。それをフェンスに向かって一人通れる程度の大きさの円を描くように吹きかける。1周撒き終わると、付着した部分だけ白く凍りついている。フェンスを前後に少し揺らしただけで簡単にフェンスに穴

が空いた。私は底を通って敷地の外へ出ること成功した。

私は携帯を取り出し、タクシー会社に電話をかけた。

「はい。佐世保交通です。」

「タクシーを一台手配頼む。」

「ご利用ありがとうございます。現在地を教えてくださいいただけますでしょうか？」

「佐世保の看護専門学校敷地内。少し奥にいる。」

「了解しました。直ぐに最寄りのタクシーが向かいます。」

しばらくすると、敷地内に黒いタクシーが入ってきた。私は手近な死角へタクシーを誘導する。止まったタクシーの運転手に話しかけた。

「済まないが荷物が思ったより重い。私は腰が悪いのでトランクに入れてもらえないだろうか。」

「わかりました。」

トランクが開き、タクシー運転手が荷物である地面においてある液体窒素のボトルを取ろうとかがみ込んだ瞬間、私は背後から運転手の首を絞めて気絶させた。タクシー運転手の服を借り、運転手は近くの茂みへ、そしてその場でタクシーに少しばかり改造を施す。具体的には外からは開くが中からは開かないようにだ。

助手席のシートの下に液体窒素ボトルを隠すと、私はタクシーを運転して佐世保駅へ

向かった。

佐世保駅では幸運にもあまりタクシーは止まっていなかった。停まっていた数台のタクシートの運転手には話しかけ窓を開けてきたところを首を絞めて気絶させた。傍からは眠っているようにしか見えないだろう。周りの人間もまさかタクシーを強襲している人間が居ると思わない上、少し暴れた後は直ぐにそのタクシーから離れているため気にもとめられていない。

そうこうしている間にターゲットが到着する時間になった。駅からはパラパラと人が出てくるが、皆様にバスや徒歩で別の場所へ向かっていった。そんな中、カジユアルスーツに身を包んだ若い男がタクシー乗り場までやってきた。

~~~~~

『アレが加山讓。キャリア組の中でも最近特に頭角を現してきたらしいわ。組織改革を全面に謳っていて、各方面から煙たがれている側面もあるみたい。』

~~~~~

ターゲットはタクシーを順番に覗いていくが、私より前に止まっているタクシーは皆

気絶させているので反応が帰ってこず、そのうち私のところまでやってきた。

「空いているか？」

「どうぞ。」

私は後部座席の扉を開けて招き入れる。

「助かった。前の連中はみんな揃いも揃ってこのクソ暑いのに居眠りときたもんだからな。」

「今日は暑いですからね。それで、どこまで？」

「ああ、佐世保第9潜水基地まで頼む。」

「わかりました。」

私はわざとクーラーを弱めに設定しつつ車を発進させた。しばらく走らせると案の定文句を言ってきた。

「ちよつとクーラー弱くないか？強くしてくれ。」

「すみません。今ちよつとこのクーラー不調でして。これ以上強くないんです。」

「ちつ、このクソ暑い日に限って……。」

「一応冷やす方法がありますが……。」

「何？あるんだつたら早く使いたまえ。」

「わかりました。しかしそれはトランクに入っているので一旦どこかに車を止めさせて

もらいます。」

「ちつ、仕方ない。いいだろう。」

「ありがとうございます。」

私は大通りから逸れ、近くの路地に車を向かわせる。路地の路肩に駐車して社外に出る。その際、さり気なく助手席に隠してある液体窒素ボトルの蓋を外した。私はそのままトランクの中を弄りつつ時間が経つのを待った。

「おい、なんか車内が冷えてきたぞ。クーラー治ったんじゃないか?」

「すみません。もうちよつとかかります。」

液体窒素は、その名の通り窒素が液化化されて充填されている。気化すればそのまま窒素ガスになる。そして窒素ガスが急激に気化すれば、酸素を含んだ通常の空気が外へ押し出され、車内は窒素のみになる。それはじわじわと、酸素濃度を低下させる。おそらく既にターゲットは少し息苦しい程度に感じて入るだろうが、既にもう手遅れなのだ。

ガチャガチャ

「おい、ドアが開かないぞ!」

「.....」

ドアを開けようとする力もかなり弱っており、顔面蒼白になっている。そのうち、

「どこかで道草でも食ってるんだろ。」

「じゃあ俺たちも中で待ってていいかー？ 炎天下で突っ立ってたら艦娘だって熱中症でぶっ倒れちゃうぜ。」

「そうだな。では中で待つとしよう。佐渡と択捉は間宮にいつてきなさい。はい、間宮券。」

「はーい！ やったー！」

「いくぜえ！ えと！ 間宮に突撃だー！」

タツタツタツ

「提督。知ってますよね？ 待っていても来ないことは。」

「鳳翔、いつからそこに？」

「ついさつきからですよ。確認してきました。基地から500mほど離れた路上に放置されたタクシーの中から遺体で発見されたそうです。遺体は間違いなく加山でした。」

「そうか。では心置きなく私は『職務』に戻れるってことだな！」

「……。」

「うん？ …… ああ、君も『手伝って』くれるかい？」

「……お供します。と言いたいところですが、私は今回の事件の処理がありますので。」

「ああそうだったな。すまんいつも迷惑かけて。」

「いいんですよ。彼女たちも提督の『職務』のおかげで戦果は上がっていますから。」

「ふふん。では行ってくるよ。」

「はい。いつてらっしゃいませ。」

「今回は外部の業者に頼んだと言っていました。一体何者……。証拠どころか痕跡すら残っていないとは……。」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~  
 ~~~~~

・「裏口入学」

【+1000】『看護学校の敷地内から出入りする。』

・「ラッキースケベ」

【+3000】『艦娘の裸を見る。』

・「クレイジータクシー」

【+1000】『タクシー運転手になります。』

・「冷房使用は程々に」

【+5000】『液体窒素で窒息死させる。』

HITMAN 2 『災厄の地』

『サハラによくきたな！』

『くつそ暑いだろ？そりやそうだ。今の気温は40度超えてるぞ！ぶっ倒れたりするなよ？塩飴はちゃんと支給されてるよな？』

『ターゲットは少し先にあるガロードっていう街にいるらしい。この町はもともとアディールって呼ばれてたらしいがこの前の実験体事件に伴って起こった大爆発に巻き込まれて地上構造物の殆どが吹っ飛んだらしくてな。そこに再建された都市って話だ。一体どんな爆発だったんだろうな？全くひでーことするやつも居たもんだよなあ！』

『そんな大災害の後、人間たちもこの町の復興を手伝ってるらしい。だからお前さん方人間も簡単に入れるってわけよ。』

『頑張ってこいよ！帰ったらケーキをぐちそうしてやるぜ！』

~~~~~

~~~~~

「そのケーキは嘘よ!!」

「うええ?!ど、どうしたの姉さん?」

「い、いやなんか言わなくちゃならない気がして・・・。」

私達は今、ガロードの町のすぐ近くの砂丘の向こう側に来ている。ココから先は遮るものがないから用心していかない。ウィートリーが言うには人間も居るから大丈夫って話だけれど、遠目から見た限り、町に人間の姿はない。またガセネタつかましたわねあのポンコツ!

「どうする姉さん。侵入するにはまず町に近づかないと。」

「んー・・・地下通路があるんじゃないか?」

「地下通路の存在は把握されてるけど全容まではまだ情報部は把握しきれてないみたい。」

「じゃあもう正面から行くしか無いわね。空はこの青空のせいでバレやすいし。」

「正面・・・、まあそうなるね・・・。」

「警戒されちゃう欠点があるけど侵入できないことには始まらないしね。お願い！二ドちゃん！」

「僕たちいつもこのパターンな気がするよ……。行け！ギャラドス！」

「はかいこうせん！」

ドゴオオオン!!

「今よ！」

「やれやれ……。」

私達は町の端っこの市街地の一部をはかいこうせんんで破壊した。2発のはかいこうせんは遠目からでもよく見えるくらいの大爆発を引き起こしたけど、町のはずれのどう見ても廃屋になつてる小屋めがけて撃つたから人的被害はない……。はず。大きな爆発があつた小屋に何事かと街のエルフが駆けつけている。その隙に反対側から楽々侵入することが出来た。

「さあて、街に入ることには出来たわね。これからどうしましょうか？」

「ターゲットは元老院に参加している政党の一つのトップ。だとしたらやつぱり元老院かその周辺施設に居るんじゃない？」

「それじゃあまずはその元老院を見つけるところからね。」

町は結構入り組んでいるけれど、どの建物も白く小綺麗なもので、砂漠に建てられた

とは到底思えないものばかりだった。それでも時々道端に崩れた外壁の残骸のようなものがあり、一度は破壊された街であることは容易に読み取ることが出来た。しばらく人の、もといエルフの目をかいくぐりつつ進んでいくと、中央広場のようなどころへ出た。流石に広場は見通しがいいため、近くの建物の影に隠れる。広場の向こう側には大きなホールのような建物があった。

「姉さん。アレ。あのホールの上に何かまだ建てようとしているみたいだ。」

「そのようね。建てようとしているのが情報にあった元老院議会のタワーかしら？」

「おそらく。建設中の今の時点でもアレより高い建物は周りにないからね。」

「ということはその根元のホールが議事堂ってわけね！ やつと見つけたわ！」

私達は広場を大回りで進み、議事堂へ接近した。それなりに往来はあるけれど、この世界の他の街ほどの賑わいはないので間を気が付かれないようにすり抜けるのはそこまで苦労はしなかった。

議事堂は古代ギリシアを思わせる神殿のような作りになっていた。技術部が今回貸し出してくれた

手のひら大のボール状の機械、以前47が使った試験結果を元に改良を重ねて作った装置で、魔法による検知を無効化する事ができる優れものなんですって。私はボール中央部のスイッチを押した。ボールは内部でモーター音のようなものがなつて小刻みに

震えている。とても小さな音だから気が付かれはしないでしょ。ともかくこれで安心して内部に侵入できるわね。議事堂自体はその検知の魔法に頼り切りなのか、ドアも窓も鍵すら付いていなかったから私とシルバーはらくらく内部に入ることが出来た。

赤い絨毯が敷かれた廊下を進むと奥から誰かが走ってくるのが見えた。

「姉さん。」

「わかっている。できてきてメタちゃん！木箱に偽装して私達を隠して！」

メタちゃんはほんと便利ね。最近質感にもこだわってるみたいで、触り心地すら本物そっくり。メタちゃんの後ろに隠れるようにしてやり過ぎす。相手が通り過ぎる時に会話が断片的に聞こえてきた。

「急げ！こっちだ！」

「侵入者つてのは本当ですか？」

「この周辺で侵入者検知魔法が途絶えた。この辺にいるはずだ！」

うげ、もしかして入る前からバレてた？通過した2人はそのまま私達が入ってきたところまで走っていった。またいつ戻ってくるかもわからないから私達は急いで先へ進んだ。

~~~~~

『へいへい！急いでるとこ悪いんだけどよ！さっき通り過ぎた連中の中で指揮してたやつがターゲットの一人である “アイダー” だぞ？そいつもターゲットに入ってるのを忘れんなよな！』

~~~~~

ちよ！そういうことはもうちよつと早くいいなさいよ！せめて通りすぎる前に！私はシルバーと目配せをして踵を返して戻った。まあ今回は通り過ぎる集団のメンツを確認してなかった私達にも非はあるからウィートリーに文句を言うのはやめてあげろわ。少し戻ると私達が侵入した窓の付近の床を触ってなにか調べていた。急がないと位置がバレそうね。

「シルバー、廊下をあいっらのところ、ヒザ下だけでも水で満たせる？」

「できるよ。でてこいオーダイル。」

「ありがと、出てきてピツくん。」

「どうする気？」

「フフフ・・・。こんな事もあるうかと、この間タマムシのゲームコーナーでもらったのよ。 “わぎマシン24” をね！」

「なるほど・・・。オーダイル！ “ハイドロカノン” ！」

「ピツくん！水に向かつて、〃10まんボルト〃！」

シルバーのオーダイルが作り出した大量の水が、ターゲットたちがいるところまで床を水びたしにする。ターゲットたちが突然の水に驚いている間にピツくんに覚えさせた10まんボルトが水を伝ってターゲットに直撃する。私達は近くの柱の突起に登って感電しないようにした。

「ぐわああああ!!」

「ぎゃああああ!!」

廊下に悲鳴が響き渡る。水がある分電気がよく通るわ。流石にエルフといえども10まんボルトは堪えるみたいね。でも彼らの生命力なら……。

「ぐっ……。」

「うぐぐ……。なにが……。」

案の定しびれる程度で済んでるわね。私達は素早く近づいてとどめを刺す。派手に叫んでくれちゃったから急がないと他の人が来ちゃう。

「オーダイル！その男だ！〃きりさく〃！」

ザシユツ

「うぐぐぐ……閣下……！」

「あら、あなたはお呼びじゃないわ。出てきてぶりり。〃うたう〃よ。」

プーブルループプーリー

「な、なんとということ・・・だ・・・。」バタツ

~~~~~

『おおー、首チョンパは絵面的にえげつねえな。ともあれアイダーはやれたな。あとはメインのキールつてヤロウだけだ!』

~~~~~

廊下の両サイドがにわか騒がしくなった。どうやらさっきの叫び声を聞いて人が集まってきたるみたいね。私達は素早くポケモンたちをしまうとすぐ近くの窓から一旦外へ出た。念の為眠らせた男も一緒に連れて行く。

間一髪、窓の向こう側では首から上が無くなったターゲットの死体が発見された。何やら色々騒いでいるけど悠長に情報収集している暇はなさそうね。

「行くわよシルバー。」

「行くつてどこへ?」

「こういう建物は一番おエライサンは最上階にいるつて相場が決まってんのよ。」

「そりゃあそうだろうけど・・・。」

「そのおエライサンに聞けばターゲットの位置もわかるでしょ。さあ行くわよ！おねがいぷりりー！」

「強引だなあ・・・ドンカラス！」

私達は眠らせたエルフを適当な物陰に隠すと、外壁をプリリとドンカラスで登った。目指すは最上階。まだ建設途中のタワーを除いて議事堂の最上部のドーム状になっている部分に、元老院のトップかそれに近い人がいるはず。私達はそこまで一気に登ると、そのまま窓の近くに張り付いた。

「どう、シルバー中見える？」

「こっちからだと誰も居ないように見える。気配もしない。」

「じゃあ3カウントで突入するわよ。3，2，1，GO！」

バツ

「クリア！」

「居ないわね・・・なにか手がかりはないかし・・・あら？」

「どうしたの？」

「なにかしら？アレ。」

部屋は中央に執務机があり、外周に沿って本棚が並んでいた。部屋の端に下の階に降りるエレベーターのようなものがある。その中央の机の上に明らかにこの部屋に似つ

かわしくない物があつた。

銀色の金属製のアタッシュケースだ。私は近寄つて観察してみる。表面は何のマークも記号も文字もないけれど、鍵の部分は明らかに先進的な技術で作られたと思われるカードキー式電子錠。指紋と静脈の生体認証装置まで付いている。机には様々な工具や何かしらの巻物が置かれていて、それら全てはこのケースを開けるために使われていたみたいね。

「このケースを開けようとしてみたいね。」

「でも開けられなかった。中身と思われるものがなにもないし、第一このケース自体まだ鍵がかかったままだ。」

「そりゃあこんな簡単な工具やこの世界の呪文程度じゃこの電子錠は破れないでしょうね。」

「どうするの？多分うちの技術部なら開けられるかもしれないけれど。」

「この世界じゃ作ることの出来ないアタッシュケース。調べて見る必要があるわね。一応もつて帰りましょ。」

「・・・今本部とも話をつけた。もつて帰ってきていいって。」

私達はそのケースを持って帰ることにした。中身が何であれ、この世界には必要ないし、扱えない代物だろうしね。私達は気を取り直して周囲を探索し始めた。本棚、机の

引き出し、棚、カーペットの裏。ありとあらゆるところを探した結果、本棚の隙間からメモ書きを見つけたことが出来た。

「姉さん。これ。」

「ん、なになに……。第6研究室の使用を許可する……。申請者は「キール」。」

「第6研究室つてのを見つければターゲットに会えそうだね。」

「よし、じゃあ次はその研究室を探しましょ。」

研究室の所在はすぐに見つかった。机の上に置かれていた巻物の中に埋もれるようにこの議事堂の見取り図が入っていた。おそらくまだ新しい建物だからこの部屋の主がまだ施設の配置を完全には覚えていないんでしょうね。この見取り図によると、第6研究室はこのすぐ下の階みたい。

私達はアタッシュケースを持って、エレベーターの横に見つけた扉の奥の階段を降りて下の階に行く。見取り図のおかげで迷うこと無く目的の第6研究室までこれた。研究室は腰くらいの高さから上はガラス張りで、中がよく見える。中では数人のエルフがなにか実験をしているのが見えた。

~~~~~

『お、その連中の真ん中のあの緑髪のヤツ。アイツがキールだ。何の実験してんだらう



な？俺たちも実験に参加しようぜ！爆発実験つてやつだ。』

~~~~~

「確かに持たされては来てるよ。新型電子励起爆弾。」

「じゃあ一応爆発実験はできるわけね・・・。」

でもそれだとおそらく周りの連中も一緒に吹っ飛んじやうわよね。あまり無用な被害者は出したくないのだけれど、いざという時は残念だけれど一緒に吹っ飛んでもらいましよ。私達は一旦アタッシュケースを床において作戦を練る。

「まず私が揺動するわ。その隙にターゲットの近くにその爆薬を仕掛けて頂戴。威力はどのくらいなの？」

「爆発の効果範囲はかなり広い。でも部屋の外まで誘導できれば部屋の外にいる人は助かる可能性が高いと思う。」

「ふむふむ。でも一人だけ誘導するのは多分結構大変ね。」

「無難に“うたう”で眠らせる？」

「以前技術部に言われたんだけれど、エルフや魔物みたいな生命力が高い存在には弱ってる状態じゃないと効かないみたいなのよね。」

「なるほど、だからさつきは10まんボルトを。」

「そういうこと。さて、仕方ないから地道に行く作戦で行きましょうか。」

「それしかなさそうだね。」

私達は一番確実ではあるけれど一番時間のかかる方法を取ることにした。

「でてきて！ニドちゃん！」

はじめにニドちゃんを研究室から見えない位置に出す。そしてそこで少し足踏みをしてもらう。ニドちゃんはすぐ大きくて重いから少し足踏みしただけでも容易に振動が起ころ。

「なんだ？この振動は。」

「おい、ちよつと様子を見てこい。」

「おう。」

案の定、一人が様子を見にやってきた。そのまま死角まで誘導して・・・

「今よ！」

「ん？うわ！」ゴツ

ドサツ

あとはニドちゃんにちよつと頭を殴りつけてもらえば簡単に昏倒する。普通の人間ならあのパワーで殴られたら頭蓋骨陥没もいところだけれど、まあエルフだから大丈夫でしょ。そんな調子で一人、また一人と殴り倒していく。

「アイツラ一体何をやってるんだ。全然戻ってこない上に振動は収まらねえし……。」
「どうしますか?」

「いい。俺が直接見に行く。今日の実験は中止だ。お前は後片付けをしておけ。」
「わかりました。」

2人だけになったあと、とうとうターゲットが見に来た。ターゲットが研究室を出たあとすぐさまシルバーが内部に侵入する。このまま殴り殺してもいいいやいんだけれどどうせなら……。私は二ドちゃんをボールに戻し、殴り倒した他の研究員を近くの部屋に放り込むと廊下を大回りしてターゲットを回避した。

「マニユーラ、だましようち。」 ニユラッ

「んあ?ぐわっ!」 バシッ

ドサッ

「よしつと。じゃあとりあえず……このへんでいいか。」

「シルバー、シルバー。」

「あ、姉さん。ターゲットは?」

「現場を確認しているわ。何も残してないから戻ってくると思う。」

「じゃあコイツを運び出そう。少なくとも爆発で吹っ飛ばない所に。」

「よし、じゃあ行くわよ。」

研究室内に爆薬を仕掛け、研究員も抱えて部屋から脱出する。アタツシユケースも回収して先ほどとは別の死角に2人して隠れた後、すぐにターゲットが戻ってきた。

「よし、いっちょよ派手に行きますか。」

「準備完了。いつでもいいよ。」

「まってね……ん……。」

首を傾げながらターゲットが研究室に入っていく。私はこっそりと一番近いガラス窓から中を確認する。爆薬を仕掛けた地点にターゲットが近づく。誰もおらず実験資料も器具も出しっぱなしなのを不審に思っているみたい。私は急いで死角に戻る。

「OK！今よー！」

「そりゃ。」カチツ

ドゴオオオン!!!

「うひゃあー！」

「わわわー！」

爆薬は単3乾電池1本分の大きさしか無かったにもかかわらず、研究室はほぼまるごと吹き飛んだ。ガラス窓はすべて粉々に粉砕され、爆発の威力で上の階の床と下の階の天井に大穴を開けたようだった。一番近い位置にあった外壁ももの見事にぽっかり

空いている。

~~~~~

『ボーン！たーまやー！つてな！いやー衛星映像でもはつきりと分かるでかい爆発だったぜ！もちろんターゲットのキールの生体反応は消失したぜ！』  
 『うかバラバラになつたんじゃねえかな？作戦完了だ。早く帰つてこいよ！』

~~~~~

「ちよつと予想外の威力だったわね。」

「うん、下の階に人が居ないことだけを祈ろうか。」

「大丈夫でしょ。見取り図によれば、下の階の部屋はまだ何も入ってないらしいから。」

「・・・そうみたいだね。穴から見ても瓦礫以外なものないや。」

「じゃあさつきとずらかるわよ！」

「了解。」

私達は一旦先程の最上階へ移動する。入ってきた窓から出て下を見ると、議事堂前は大騒ぎになっている。まあいきなり大爆発が起きて議事堂の一部が吹っ飛んだんだから無理もないか。今思つてみると研究室もある辺り、元老院以外にも結構いろんな施設

が入る予定なのかもしれないわね。

爆発で煙が上がっている方とは逆側からぷりりとドンカラスで降りて、そのまま市街地を人目に触れないよう気をつけながら町の外へ出た。砂丘を2つ超えた辺りでビーコンを起動して迎えのへりを呼んで脱出した。

~~~~~3日後~~~~~  
 ~~~~~

ガチャガチャ

「うむむ・・・なかなか手ごわい・・・だが・・・。」

『どう？まだ開かないのかしら？』

「ああ、バーンウッドさん。なかなか手ごわいですよ。今一応最後の詰め段階なんで、この方法があつてるならば後少して開きますよ。」

『あら、それは丁度いい時に来たわね。』

「しかしこれがハルケギニアにあつたつていうのが驚きです。こんな物あの世界じゃ絶対に作り出せませんよ。」

『そんなにすごいものなの?』

「すごいなんてもんじゃないです。見た目は生体認証とカードリーダーですが、その使用するカードがまず実体を持つような構造じゃないらしいんです。一種のホログラフイミみたいなカードを使うみたいですね。こんな構造、我々の世界でも作れません。」
『ということは我々よりも科学力が発達した存在が作ったものということになるのかしら。』

「そういうことです．．．つと開きました!」

ガチャ

「んー?これは．．．。」

『なんなの?その機械は。』

「おそらく．．．ココらへんを．．．」

ヴォン

「ビンゴ!やつぱりホログラム投影機だったか!これは．．．設計図か?」

『これは．．．銃?いや、砲かしら?』

「．．．これは．．．!」

『わかりそう?』

「．．．。」

「らっしやいらっしやい！チョコウジ名物いかりまんじゅうはいらんかね！お！そのイケメンなお兄さん！買ってかないかい？美味しいよ！」

「ふむ。3つもらおうか。」

「まいどー！」

「ちよ、ちよつと？47？まんじゅうなんて買ってる場合じゃ・・・。」

観光地特有の名産品を売る屋台があつたが、正直言つて売れ行きは良くはなさそうだ。値段や味はともかく、絶対的に人が居ない。我々3人を含めて観光客と思われる人は両手で数えられる程度しか居ない。観光地としてはかなり寂れてると言えるだろう。

「いやーお兄さんが来てくれてよかつた！」

「売れ行きは良くはなさそうだな。」

「あー・・・あはは・・・まあそうだねえ。何でも最近この近辺を荒らし回るスリがいるとかで、観光客もあんまり寄り付かないんですわ。」

「スリ？」

「ええ。何でも男女二人組だとか・・・しかもちよいと特殊なポケモンバトルをやるとか。」

「トレーナーも武器を持って戦うとか？」

「流石にそんなじゃねえけど、なんでもペルシアンやヘルガーに吠えさせて周りの野

生のポケモンを呼び集めて攻撃させるらしい。」

「……!47。」

「ふむ……。」

「まあそんな感じだからよ。俺が言うのも何だけど早めに街に戻ったほうが良いぜ。」

「忠告感謝する。では。」

「あい、まいどありー。」

「47。さっきの話。アレ、シャムとカーツの戦い方よ。」

「ターゲットの二人か。」

今回の任務は正直言って何故私がやることになったのかわからない。というのも人気がない所にいるターゲットを暗殺する。周囲は森で、暗殺自体もそうだがそのまま放置しても発覚が遅れるほどに人里離れた場所。本来ならICAに入りたての新人教育に使われそうなほどに簡単な任務だ。バーンウッドは何を思っただけでこの任務を割当てたのか。しかもそんな簡単な任務にブルーとシルバーも連れて行けと来た。確かにブルーとシルバーはターゲットと一時期行動をともしていたことは身辺調査の結果判明している。ターゲットの情報を誰よりもわかっているとはバーンウッドの話だ。しかし本当にそれだけの理由だろうか？

「47? どうしたの?」

「・・・いや、なんでもない。行くぞ。」

「あ、47。任務のことなんだけれど・・・。」

「何だ?」

「暗殺する前に。私達とターゲット2人とでポケモンバトルをしたいの。」

「姉さん・・・。」

#####

「・・・理由を聞こう。」

「私達の過去を・・・精算したいのよ。」

「・・・。」

「私達はポケモントレーナー。バトルして初めて分かることもあるわ。あいつらは昔からいけ好かない連中だったけれど、それでもバトルの腕は本物だった。」

「組織に居た頃、僕たちは彼ら二人にバトルで勝つことがないんだ。」

「今は昔と違う。私達も強くなったし、ICAで戦術も学んだ。いわゆるリベンジマツチしたいのよ。」

「・・・。」

「お願い。47。私達に、少しでもいいから機会をちょうだい。」

「僕からもお願いするよ。今回を逃したらもう機会はない。いつまでも過去を引きずるわけにはいかないんだ。」

~~~~~

『彼女たちは自分たちの幼少期を台無しにした者たちへ復讐したがっているみたいね。ここは同じ仲間の好で願いを聞き入れてあげたらどうかしら。それにポケモンバトル中のトレーナーがあまりその場から動かないのはあなたも知っているでしょう?』

~~~~~

「……わかった。」

「……ありがとう。47。」

「時間は取らせないよ。」

何故この任務を私に割り振ったのかはわからないままだが、少なくともブルーとシルバーが付いてきた理由はわかった。彼らは過去を清算したがっている。昔の忌まわしき記憶をポケモンバトルでスッキリさせたいわけだ。正直、昔の私ならば却下して早々に遠距離から狙撃していただろう。事実そのつもりで今回は jaguar を持参している。だが、私はその願いを聞き入れることにした。本来アサシンとしてはあるまじ

き行為だが、何故そうさせたのかは今の私にはわからなかった。

私達は湖を左回りで回る。途中は鬱蒼と生い茂る森に阻まれもしたが、少し迂回すれば問題なかった。森の中は迷路のようになっており、所々に道を塞ぐように大きな蔦の木が生えていた。

「まっつて、この木は『いあいぎり』で切れるわ。お願いニドちゃん。」ガー

ザシュツザシュツ

「覚えさせたんだ。いあいぎり。」

「ええ。ここに来ると知ってからね。」

ブルーのニドクインはその強靱な腕を振り回し、光る爪先で目の前の木をまたたく間に細切れにしていく。そのままこの迷路も細切れにしてくれると助かるのだが。そのまま森を更に奥へ進んでいく。2〜3度いあいぎりで木々を細切れにしたのち、森の奥に平屋の一軒家を発見した。

「あそこね。」

「……。」

「……じゃあ、行ってくるわ。」

「ああ。私は遠くから見ている。」

「……その時になったら合図するわ。」

「わかった。」

ブルーとシルバーは揃って小屋に近づいていった。隠れることも何かを警戒することもなく、まっすぐに堂々と。私は周囲の観察を開始した。彼らが彼らのすべきことがあるのと同じように、私は私の仕事をするまでだ。

くシルバースイード

「良いかい？ 姉さん。」

「ええ。」

小屋の前に着いた僕たちは中に人の気配があることを確認してドアをノックした。

コンコン

バン！

ノックした直後勢いよく扉が開かれる。それ自体は彼らの常套手段でもあるので問

題なく躲す。

「ちっ！かわされ・・・あれ？お前ら!？」

「相変わらずだな。カーツ。」

「お前らどうしてここに・・・ってブルーもいるのか。」

「なんだいなんだい、何の騒ぎだい。」

「お久しぶり、シヤム。」

「おやまあブルーじゃないか。裏切り者のあんたらが一体何のようだい。」

「過去の精算に来たんだよ。」

「なにい？」

僕たちは小屋から一歩下がり、ボールを取り出した。

「私達と、バトルしてくれないかしら。今日はあなた達と決着をつけに来たのよ。」

「はあ？あつはははは!!どうやっても私らに敵わなかったお前らが？あはは！笑つちやうね！」

「俺らにバトルを挑むってことがどういうことなのか、お前ら覚えてないはずねえよなあ？」

「わかつてる。そのうえでだ。」

「カーツ、あなたの相手は私よ。」

「シヤム、お前は僕とだ。」

「へっ、いい度胸じゃねえか、久々にボコしてやるよ！」

「カーツ！手加減するんじゃないよ。あたしらにこの期に及んで喧嘩売った罰を与えないとね！」

「行つて！ニドちゃん！」

「行け！ドサイドン！」

「お前ら行つて来い！」

「遊んでやんな！」

カーツはヘルガー、シヤムはペルシアンを繰り出した。パワー系に対するスピード系、一見不利のように見えるが、こちらにも対策は怠っていない。

「ニドちゃん！〴〵じならし〴〵！」

「ドサイドン！〴〵だいちのちから〴〵！」

相手の動きを地面を使って攻撃することで封じていく。相手も負けじと割れた地面を巧みに使ってこちらに接近しては攻撃を仕掛けてくる。

「ペルシアン！きりさく！」

「ヘルガー！ほのおのキバ！」

そこから先は一進一退の攻防だった。こちらの攻撃を躲し、仕掛けてきた攻撃をこちらも躲す。時折お互いに攻撃がクリーンヒットしてHPを削られていく……。

〈 47 side 〉

ととと……。ブルー達は本格的な戦闘状態に突入したようだが、地面を揺らす系の技はなるべく使ってほしくはないな。危うく木から落ちかけた。私は500mほど離れた地点から双眼鏡を使って戦闘の行く末を見守る。ターゲットのポケモンが戦闘不能になりボールに戻され、新たに繰り出したポケモン……。うん？先ほどと同じポケモンのように思えるが、同じポケモンを複数体所持しているのか。同時に出せない以上、戦略的にあまり意味のある行為とは思えない。案の定、対処なれしたブルーとシルバーのポケモンに先程よりも短い時間で撃破されている。

『47、聞こえるかしら？』

「聞こえている。」

『実を言うと、今回の任務は本当は別のエージェントが対処する予定だったの。』

「まあそうだろうな。」

『でも彼女らが・・・ブルー達が47と一緒に割り当ててくれと頼み込んできたのよ。』
「ほう？」

『本来ICAはエージェントの私情を任務に持ち込むことはないわ。でも彼らにとってのルーツにつながる重要な人物がターゲットになったこともあって、上級委員会はある決定を下したわ。』

「上級委員会が絡んでいるのか。」

『ブルーとシルバーは元々この世界の住人。彼らのルーツにつながる人物を暗殺した場合、彼女たちにどういう影響が出るのか。そしてそれらをワールドセーフティで抑え込めるのか。上級委員会はそれを知りたがったの。』

「有り体に言えばモルモットを安全に観察する機会が欲しかったわけか。」

『言い方は悪いけれどそんなところね。今回の任務のあと、あの二人は秘密裏にICAの観察対象に入ることになる。あなたも言動には気をつけて頂戴ね。』

「承知した。」

『さて、そろそろバトルも大詰めみたいよ。任務を早く終わらせて帰還して頂戴。』
「了解。」

くシルバースイード

「オーダー！れいとうパンチ！」

ドガア

ドサツ

「や、ヤドキング！」

「勝負ありだ。もう動けないだろう。」

「くっ……。」

「カメちゃん！ハイドロカノン！」

ドガアン

ドサツ

「マグカルゴ！……チツ！」

「炎に水はよく効くわね。これで……おしまいね。」

僕たちの勝利だ。アレだけ圧倒的だったように感じてたシヤムとカーツはそれほど

苦もなく倒せるまでになっていた。アレだけ倒しなかった相手、いざ倒してみたら残ったのは勝者の余韻でも相手に対する優越感でもなく、ただただ虚しかった。

#####アプローチ完了#####

「くっそお！」

「・・・ふん、あんたら強くなったんだね・・・。」

「まさかココまでとは・・・。」

「このブルーちゃんが負けっぱなしなわけ無いでしょ。」

「僕たちも、成長してるんだ。」

「・・・ふっ、あーあー！負けた！」

「全く・・・、で？あんたらは私らに勝って満足かい？」

「・・・正直言つて全く。でも・・・。」

「でも?」

「もう、手遅れ。かな。」

「はあ?」

姉さんはうつむいたまま声を絞り出すように言った。手足は若干震えている。その
のち右手を振り上げた。

「じゃあね。カーツ。」

「何だもう帰るのか？」

「いいえ、帰るのはあなた達。」

「はあ？」

「あなた達が殺めたポケモンたちのもとへ。帰りなさい。」

そう言つて姉さんは手を振り下ろした。

ダアーン！

ドサツ

「・・・!?カーツ!!」

~~~~~

『カーツの抹殺を完了。次はシャムね。』

~~~~~

「き、貴様ら！どういふことだこれは！」

「言つたでしよ。帰るのよ。あなた達がいるべき場所に。」

「なんだと!? たしかに我々は口ケツト団として悪事を働いてきたかもしれない! だがお前たちだつてそれは同じだろう!」

「っ!」

「姉さん!」

「ふん! 自分たちの事を棚に上げて出た結論がこれか! お前らは・・・お前らはあ!」

ダアーン!

姉さんに掴みかかろうと立ち上がつて駆け寄ろうとしたシヤムの頭部を側面から銃弾が貫いた。そのままの勢いでシヤムは姉さんの足元に転がった。もう動くことはない。しかし動かなかつたのはカーツとシヤムの遺体だけでなく、その場に呆然と立ち尽くしている姉さんも同じだった。

~~~~~

『シヤムとカーツ両名の抹殺を確認。任務完了。帰還して頂戴。・・・ブルーは後で私のところへ来て頂戴。』

~~~~~

呆然としている姉さんの側に近寄ると、姉さんは泣いていた。静かに。何も言わず。僕たちはその後どうやって基地へ帰ったか覚えていなかった。

~~~~~5時間後~~~~~  
~~~~~

『ブルーは落ち着いたわ。』

「・・・。」

『シルバー、あなたは・・・強いわね。』

「強くなんか・・・無いですよ。」

『47もご苦労さま。咄嗟の判断としては上出来だったわ。』

「掴みかかろうとするターゲットに対し、全くと言っていいほど反応していなかった。あのまま放置するのは危険と判断したまでだ。」

「ありがとう。47。無理言っついていったのに助けられてしまった。申し訳ない。」

「いい。」

『・・・ブルーから大方は聞いたけど、一応あなたからも聞こうかしら。』

「はい。・・・あの時、お前らは私達と同じじゃないか」という言葉に、言い返せなかつたんです僕は・・・。」

「・・・。」

『・・・。』

「考えれば考えるほど、カーツ達と僕と姉さんは、所属が違うだけで他に何の違いもなかった。でも僕らは殺す側、カーツたちは殺される側になった。ただそれだけのはずなのに・・・。」

『シルバー、あなたもICAに入る時に確認はしたはずね。いずれこういう事も起こりうるよ。』

「・・・はい。」

『気にするなどは言わない。でもそれで自分の意思を、下した決断を曲げてはいけない。それはわかっているわよね。』

「・・・はい。」

『・・・ハア・・・。あなたも少し部屋で休みなさいな。行っていいわよ。』

「はい・・・。」

「かなりのダメージを受けているようだな。」

『あれは精神治療が必要ね。それでも、過去を精算できたことには変わりない。必要なことだったのよ。』

「それは誰に対しての言葉だ？」

『・・・47も言うようになったわね。』

「今後はどうする？」

『ワールドセーフティは既に稼働している。これから彼らがここにいる状態でどうなるか。それを我々は観察しなくてはならない。第一次考察結果が出るまで任務は停止よ。』

「わかった。」

『考察結果は早ければ1週間以内に出るわ。それまであの二人には悩み抜いてもらいましよう。』

「・・・難儀なものだな。」

~~~~~ミッションコンプリート~~~~~

~~~~~

・「旅行の醍醐味」

【+1000】『いかりまんじゅうを買う。』

・「庭師王47」

【+1000】『いあいぎりで3回以上上木を切り倒す。』

・「最後の決め手」

【+3000】『ポケモンバトルのあとに2人を狙撃で射殺する。』

・「感情と理性」

【+5000】『ターゲットのどちらかが死亡したあとにもう片方と会話する。』

HITMAN 2 『調停者』

『ポートエリザベスへようこそ。47。』

『ここは市街地からだいぶ離れている荒野の中に建てられた工場で、何か良からぬものを隠して開発するにはもってこいの場所。ここで天田南博士は量子コンピューターを完成させようと躍起になつてゐるみたいね。』

『量子コンピューター自体はICAの技術部が作ったものより数世代前のものなので特に問題はないのだけれど、それに付随する技術の一部が我々にとつて未知の部分があるのよ。今回はそれをメインコンピューターに侵入して“借りて”来てほしいの。』

『周囲は荒野だから多少の戦闘は問題にならない。でも施設の警備兵は雇われPMCだから殺害しても問題はないけれど、天田博士の警備兵は全員準主要人物だから殺さないようにね。』

『健闘を祈っているわ。』

~~~~~

「聞いたわよ。47。ブルーちゃん達をいじめたんですって?」

「いじめては居ない。現実には直面しただけだ。」

キュラソーは最近ブルー達と行動をとものにすることが多いらしく、前回の事案も既に大方を把握していた。しかしキュラソーは何故そうなったのか、ブルーたちの感情や思考、理論を正確に把握しており、それを知った上でからかってくる。

私達は今ポートエリザベス近郊のフルンダル自然保護区にいる。この直ぐ側のR75沿いにメルヒエン社第二工場がある。工場と言ってもハイテク工場であり、黒鉛を出す煙突や高炉があるわけではない。傍から見れば新興企業のオフィスビルにしか見えないだろう。周囲は塀で囲まれてはいるが、有刺鉄線のたぐいは見受けられず、警備かスタッフかはわからないが人が偶にその塀の近くをうろついたりしているため地雷等のトラップもないと判断できる。無論監視カメラは設置されているが。

「まずは施設内に侵入しなければならぬ。監視カメラがある。通り抜けるのは難しいか。」

「そうかしら?」

「何?」

言うが早いキュラソーは塀を乗り越えてかなりの速さで施設に突撃していった。カメラが旋回してその姿を捉えるよりも先にキュラソーはカメラの真下に陣取ること

に成功した。そのままキュラソーは持参したハッキング装置を手慣れた手付きで監視カメラに取り付けた。設置が終わり、キュラソーが合図をしてきた。私はそれを見てキュラソーの元へ駆け寄った。

「どう?」

「さすがの身のこなしだな。」

「組織に居た頃は結構頻繁にやってたから。このくらいは朝飯前よ。」  
「過信は良くないがその身体能力があれば今後も楽に行けそうだな。」

この工場はほぼ全周がガラス張りになっている。一番近いガラス窓を覗き込むと、使用されていない部屋の一室が見えた。窓の上部には防犯用の衝撃センサーがある。窓を割ったりすればけたたましい警報音が鳴り響くだろう。だがこれに関しては技術部の最新の装置が役に立つ。

「・・・?それはなに?」

「技術部いわく、魔法のピッキング装置(仮)だそう。」

「魔法技術が使われているのね。」

「そういうのには抵抗はないのか?」

「組織じゃ新技術に抵抗していたら生き残れないわ。」

「そうか。」

私は装置を衝撃センサーの裏側にかざした。装置のランプが2、3回点滅したあと、ランプの色が赤から緑に変わった。これでいい。私は持参している工具で窓の鍵の部分だけ丸くくり抜き、そこから手を突っ込んで鍵を開けた。

「便利なものね。簡易的なEMP発生装置か何かかしら？」

「EMPのように対象となる機械を破壊したりはしないようだがな。ともかく内部に侵入できた。行くぞ。」

「ええ。」

工場内は工場というよりも研究機関のような雰囲気であり、廊下は殺風景でほとんどが白で統一されていた。私達は慎重に手近なドアから手分けして一つ一つ中を確かめていった。

1階には大した設備はなかった。申し訳程度の玩具製造所、休憩室、ロッカールーム、武器弾薬庫。工場に弾薬庫があるのはおかしいのかもしれないが、今回の目的からは外れている。上に上る前に地下を調べておこう。地下は機械室が多く、電源室、水道設備、空調などが部屋ごとに分けられて設置されている。そしてある意味で目的の部屋である警備室を見つけた。私はキュラソーを呼び寄せる。

「中にPMCが3名。手前1人と奥2人。」

「私が奥2人をやる。47は手前の男を。」

「わかった。3カウントで行くぞ。3. 2. 1.:GO!」

扉を勢いよく開けて私は手前の男が振り返った瞬間に鳩尾に一撃を食らわせて昏倒させた。キュラソーは扉が開くと同時に目にも留まらぬ速さで奥の2人に近づいたかと思うと、たちどころに両手で首へ手刀を食らわせ気絶させた。警備室制圧完了だ。

「制圧完了だ。」

「ん・・・これは施設図かしら。」

「のようだ。ここが警備室でここが侵入に使った部屋・・・。」

「で、目的の部屋はどこになるの？」

「天田南博士に用はない。我々が行くのはサーバールームだ。」

「じゃあ4階になるわね。かなり警備が厳重そうだけれど。」

「監視カメラが無効化できただけで上々だ。」

バシユバシユ

バキンバチバチバチ

私は警備室内にあった監視カメラの装置をシルバーボーラーで撃ち抜いて破壊した。気絶させた兵士から鍵束と無線を拝借すると、適当に縛り上げたのちロッカーに押し込む。

「47. これを。」



「これは……この施設は特殊な構造をしているな。」

#####

~~~~~

『この工場の4階部分は特殊な構造になっているみたいね。エレベーターは4階に止まらず、階段も4階部分にはドアがない。4階に行くためには専用のエレベーターでかつ暗号キーを入力しなければならぬみたい。』

~~~~~

「暗号キー自体はここにあるわ。先程の警備員がメモを持っていた。」

「警備室が制圧されればセキュリティも何も役に立たないな。」

私達はそのままその階にある専用エレベーターに乗り込んだ。通常の行き先階ボタンの下にタッチパネルがある。先程拝借したメモの通りに打ち込むとエレベーターが動き出した。エレベーターは4階で停止。私達は施設図を頼りにサーバルームを指した。つと、談話室の中から声が聞こえる。

「バブちゃん、それはそつちじゃないってー。」

「あらっ？あらららっ？」

「もーほんとに変なところで抜けてるよねー。」

「あつはつは！おつかしーんだー！」

「あんたが言うことじゃないだろうがよ．．．。」

中にいるのは女性3人。この工場のセキュリティが一番嚴重な区画にいる女性3人となると、おそらく天田南博士、エレナ・バブーリン博士、レイラ・イブラヒム・ファアイザ博士だろう。彼女らは武力に対しては無力だ。制圧は容易だと言える。しかし、情報によれば強力な護衛がついているはずだ。言葉を発してないだけで近くににいる可能性が高い。ここは避ける一手だろう。

談話室を避け、廊下を進んでいき、サーバルームに到達した。早速サーバルーム内に侵入、手近な端末を操作して内部情報を．．．。

「．．．ふむ。そういうことか．．．。」

「どうしたの？47。」

「生体認証だ。」

#####

~~~~~

『端末の操作には博士たち3名のいずれかの指紋静脈網膜の認証が必要みたいね。一人をおびき出して操作させるか、一人を気絶させて連れてくるかしないといけないわね。』

~~~~~

ドアの横にある装置は、見た所端末を刺すところも見当たらない。蓋になっっている部分もあるので、おそらく操作権が確定してから現れるのだろう。全く面倒なシステムだ。

「3人の博士のうち一人の生体情報が必要だ。アクセスするには連れてくるしか無いな。」

「さっきの部屋の中から出てくるのを待つのかしら？」

「悠長に待つて増援が来るのはマズイ。ココ・ヘクマティアルの私兵団が来たら目も当てられない。警備室に残してきた警備兵がいつ目を覚ますかもわからない。ここは襲撃する。」

「おそらくカレン・ロウも近くににいるけれど、それは私が相手するわ。」

「では私は他を制圧するでしょう。行くぞ。」

私達は各々、シルバードローパーやマグプルPDRのチェックをしつつ先程の談話室に戻った。

談話室ではまだ内部でなにか遊んでいるらしく、黄色い声が響いていた。

「3カウントだ。行くぞ。」

「いつでもどうぞ。」

「3. 2. 1. GO」

バァン

キヤア！ナニ？

カレン・ロウは扉すぐ横の壁に居た。ドアを開ける瞬間にナイフが頭の上をかすめたが、ギリギリのところを躲し、私はそのまま部屋の中ほどまで転がり込んだ。キュラソーはあろうことか振るわれたナイフを膝蹴りでへし折った。そのままキュラソーは近接戦闘に移行した。

「な、何だ貴様ら！」

「ふむ、他にも居たか。」

部屋の奥にはPMCの兵士が数人居た。カレン・ロウの動きで警戒態勢になっていたようで、こちらに銃口を向けてきている。私は中央で遊んでいた博士たちの中に滑り込みつつシルバーボーラーを放つ。

バシユバシユ

グアア！

キヤー！

博士たちにつつかるかどうかの既のところ、急ブレーキ、そのまま前方に宙返りする。そのさなか、側面に居た別のPMCの胸部に向かって弾丸を放っておく。

バシユバシユ

ギヤー！

着地と同時に前に居たPMC2人にも連続で一発づつお見舞いする。相手は銃口をこちらに向けるのが精一杯で、とても避けたり対応したりする暇はないようだった。案の定そのまま銃弾を食らい、部屋の中に居た前方3名、側方1名のPMCは全滅した。部屋に入ってからここまでおそらく5秒と経っていない。

ガキン！パパン！

キュラソーとカレン・ロウの戦闘もかなり激しくなっている。後で聞いた話だが、キュラソーはカレン・ロウの戦闘の様子を記録した映像を使って事前に予習していたらしい。そして弱点の解析も既に完璧にこなしていた。

「ふっ！まず右足！」

ザシユ

「ぐあー！」

「次に左腕！」

バシユン!

「ぐっ……。」

「最後に……。」

「キュラソー、殺すな。主要人物だ。」

「ん……ふう……わかったわ。命拾いしたわね。お嬢さん。」ペキツ バアン

「き、貴様ら……一体何物……。」

「か、カレンちゃん……。」

目にも留まらぬ速さでカレン・ロウの継戦能力を奪い、そのまま首まで狩りそうな勢いであったが間一髪止めることができた。キュラソーはカレン・ロウの得物、アーミーナイフをへし折り、銃で彼女の拳銃のスライド部分を撃ち抜いた。

「あんた達、一体何が目的？」

「天田南博士だな。少し付き合ってもらおうか。」

「……。」

「抵抗するようなら彼女、撃ち抜いちやうけど？」

「ぐっ……。申し訳ありません博士……。」

「わ、わかった。とりあえず言うことは聞くから。何をすればいいって？」

「ついてきてほしい。キュラソー、彼女たちを見張れ。」

「了解。」

私はキュラソーに見張りを頼み、天田博士と共にサーバールームへ向かった。私の前を歩く博士は人質という立場にも関わらず落ち着いている。本人の性格なのかあるいは……。

「着いたな。入れるようにしてもらおう。」

「なるほど。サーバーが目当てだったってわけね。」

「正確にはその中のあるデータだ。」

「私らのやっつてることもお見通ししてわけでしょ？ ココは怒ると思うけどなあ。」

「残念ながら目的は量子コンピュータではない。別のデータだ。」

「ふうん？ 量子コンピュータよりも重要なものなんてあったかね？」

「早く開けろ。」

「ハイハイ、せっかちだねえ。えーっと……。」

ピッピッピッ

ピー

ニンシヨウカンリヨウシマシタ

ガチャ

「ほら、空いたよ。」

「では一緒に中にはいつてもらおう。」

「ええ？空いたんだからもう良いでしょ？」

「良いから入れ。」

「やれやれ、何でこんなことに・・・。」

私は博士とともにサーバルームに入った。

#####

~~~~~

『サーバルームに無事入れたわね。増援が来る前にさっさと仕事を済ませましょうか。』

~~~~~

私は博士を隣に立たせ、端末を操作する。ちなみに銃口などは向けていない。向けたところで殺すつもりもないし、博士もこちらには敵わないとわかっているのかおとなしくしている。私は端末にメモリーカードを挿し、技術部が欲する情報を抜き出す。端末



を挿した時点で検索、展開、ダウンロードまで自動で行うので私は特に何もすることは  
ない。暇そうにしていると博士が目まぐるしく動く画面を見つつ話しかけてきた。

「・・・ふうん。あの情報が欲しかったのか。」

「知っているのか？」

「そりや私の研究所だよここは。私が知らなくてどうするのさ。」

「どこで手に入れた情報なんだ？」

「さあ。素因数分解アルゴリズムを制作している時にいつの間にか中にはいつてたんだ  
よ。」

「何？あなたが入れたのではないのか？」

「私はそんな物興味なかったし、量子コンピュータのことで手一杯だったからね。容量  
を圧迫しているわけでもなかったから一応ウイルスじゃないか確認してから放置して  
た。」

「セキュリティ・コンプライアンスも何もあつたもんじゃないな。」

「そんなもん。量子コンピュータに何か恩恵ある？」

「・・・。」

「そういうことさ。わたしや量子コンピュータが完成させられれば何でも良い。その他の  
ことなんてどうでもいいのさ。・・・と、終わったみたいだよん。」

見るとダウンロード完了の文字が画面に出て止まっていた。私はメモリーカードを回収すると博士を連れて談話室へ戻った。

「あら、おかえり47。早かったわね。」

「ドクター！ご無事で！」

「大丈夫大丈夫。カレンちゃんのおかげこそ大丈夫？」

「この女が応急処置をしたので・・・。」

「暇だったし、博士を人質にとってるならむやみに暴れたりはしないでしょ。死なれると色々困るし。」

「賢明な判断だ。キュラソー、目的は達成だ。撤退するぞ。」

「了解。」

「天田博士。我々はこれで撤退する。決して追ってこようとか仕返ししようとは思わな  
らうぞ。」

「わかっているわかってる。」

「では行くぞ。」

「じゃあね。お嬢さん方。」

「はてさて無事に帰れるかな？ぶくく。」

廊下に出てそのままエレベーターに乗る。1階まで降りたあと、最初に侵入した窓から外に出た。警備室は制圧済みのため監視カメラを気にしなくて良いのは楽だ。念の為カメラのハッキング装置と窓ガラスのハッキング装置を回収したあと、施設の扉を乗り越え、外に止めてあった車に乗り込み走り出す。

「アウディね。いい趣味してるじゃない。」

「……。」

「どうしたの？」

「誰かが後ろからついてくる。」

「……あら、ほんと。黒のBMWのSUV。襲撃者としては最適の車両ね。」

「一応迎撃準備。」

「了解。」

キュラソーは後部座席に移動し、備え付けのサーマルゴーグルを取り出す。これならばスモークガラスでも問題なく内部がわかる。

「中には3人。一人は狙撃銃つぼいの持つてるわね。もうひとりアサルトライフル……あれはACR系かしらね。」

「ココ・ヘクマティアルの私兵団の標準装備だ。感づかれたか。」

「どうする？先制攻撃する？」

「・・・撃つてきたらでいい。狙撃には気をつけろ。」

「わかつてる。」

「飛ばすぞ。」

~~~~~

『47。そのまま空港へ向かって頂戴。ICAが色々援護してあげるわ。援護内容は・・・お楽しみということ。』

~~~~~

援護がお楽しみとは。随分と余裕だ。彼らはそこまで余裕の相手ではないと思うのだが。私は速度を上げつつR75を南下する。速度を上げたのに気がついたのか向こうも速度を上げた。

「撃つてきそうよ。」

「狙撃か。」

「そういうこと。あの向きは、おそらく左後輪。」

「わかった。先制攻撃を許可する。」

「ふふん。結局はそうなるのね。」

どうやら車内からフロントガラス越しに後輪を狙撃するつもりのようなのだ。だが、狙いとタイミングが分かかってしまえばどうとでもなってしまうものだ。キュラソーはマグプルPDRを持ってルーフを開けて外に乗り出した。

くここsideく

ダダダ

「オイ撃ってきたぞ！」

「ちっ！オイトージョー、そんな動かしたら狙いつけれねえよ！」

「ふざけんな！アイツら結構正確にこっち狙ってきてんだぞ！避けなきゃクラッシュか運転手の俺の頭に風穴が開いてるっての！レームのおっさんならそれでも撃ってるぞ！」

「うっせえ！どこの警察がカーチェイス中の車内から狙撃するってんだよ！やったことあるわけねえだろ！」

「二人共。喧嘩するなら今すぐ降りてください。トージョー、近くに付けれますか？」  
「かなりきついな。今は撃つてきてないがこれ以上近づくとタイヤを撃ち抜かれる。」  
「ついでにいうと俺が構えたらそれでも撃つてくる。こりやお手上げだな。相手サーマルゴーグルかなんか持つてるだろ。」

「大人しくレーム達を待ったほうが良さそうですね。ココ、聞こえますか？」

通信機の向こうからバルメの声が聞こえる。私たちは近くで取引をやつてる最中、モコエナさんとマリーンさんのSOSコールでここに急遽駆けつけた次第だ。私とウゴとヨナはウゴの運転で工場へ。バルメ、ルツ、トージョーは車両で追跡。レーム、マオ、ワイリは待ち伏せするために先回りしている。

「ああ、聞こえてるよ。」

「そつちはどうですか？博士は無事ですか？」

「ミナミは無事。他の二人も。でもカレン・ロウ中尉が右足と左腕を刺されたり撃たれたり。当分護衛はできそうにないね。」

「そうですね。まあ博士たちが無事なら良かったです。それでターゲットですが、我々だけでは厳しいですね。相手の狙いが思ったより正確です。」

「そう。わかった。・・・レーム！聞こえてるよね！」

通信は衛星を介した全体通信なのでレームたちにも呼びかける。

「ああ。聞こえてるぜ。今狙撃ポイントに着いた。よく見える。」

「もうすぐそつちにターゲットが行くよ。確実に仕留めてね。」

「ああ。任せな。．．．ん？なんだありやあ？」

「うん？」

ダダダダダ

「うおお！」

「わわわ！」

バァン！バァン！

「ど、どうした！レーム！マオ！ワイリ！」

「．．．。」

「返事をしろ！」

「ココさん！聞こえますか！襲撃を受けました！」

「被害は！」

「あーあー、乗ってきた車両が穴だらけにされて炎上中。俺達3人は高架橋の下に隠れて無事だ。だが上で狙ってやがる、外には出れねえぞ。」

「上から？何が．．．。」

「戦闘ヘリですね。それにどうやらアレは無人機。無人の戦闘ヘリです。」

「無人戦闘ヘリ!？」

どこの国、いやまず東西問わずどのメーカーも無人攻撃ヘリはまだ試験段階で販売はおろか初飛行したという報告もない。偵察用としてはいくつか販売されているし私も取り扱ったことがあるが、戦闘用は姿勢制御や状況把握の面で無人にするには技術的ハードルがまだ高い上、一番の理由として単純にUCAVで事足りるためにニーズがないためだ。

「ありやコマンチでしょうか? そんな見た目つすね。」

「コックピットのガラス部分が装甲板に覆われている以外はコマンチだな。」

「とにかく俺らの攻撃は無理だ。身動きが取れねえ。ちよつとでも外に出ようとするとすぐ撃たれる。それに高度を下げた横薙ぎにされたらおしまいだ。」

「ちっ! 一体なんなんなのよもう!」

苛立ちばかりが募るがあいにくと無人攻撃機は用意していない。一番近いところでもケープのエイステールプラトだ。出撃はおろか滑走路使用の許可をとつてる間に逃げられてしまう。

「なあ、お嬢。コイツはやべえ組織な気がするぜ。」

「どういうことですかルツ。」

「なんかよ。この前の兵器展示会でのヤツ? あれの組織が関わってんじゃないの? そんな



な匂いがするぜ。」

「ICAが？」

「ちよつとまつて、いまミナミに聞いてみる。」

思わぬことを言い出したルツ。だがこの手際とあの謎の攻撃ヘリ。可能性としてはなくはない、いやむしろ高い。前回のとき、ICAのエージェントの一人の人相は把握できていた。スーツ姿のスキンヘッド男。そして何よりも後頭部にバーコードのような入れ墨。私はそれらの特徴をミナミに伝える。

「あー、そういやそんな感じだったな。たしかに後頭部にバーコードみたいなのがあったわ。」

「やっぱり……！」

予感的中した。だとしたらルツ達だけで対応させるのはマズイかもしれない……。ミナミ達も施設の被害は窓ガラスが割れた程度で済んでるって言うてるし……。仕方ない。非常に不本意ではあるが……。

「みんな聞いて。攻撃を中止して速やかに撤退して頂戴。」

「諦めるんですか？ココ。」

「相手は何をやってくるかわからない上にかんりの武装を持っている。みんなのことを考えて身を引くことにした。施設も無事みたいだしね。」

「まあ今回は俺もココさんの言うことに賛成だな。時折前から撃つてくるあの女。やたら狙いが正確だ。そこらの軍人以上の練度がある。」

「じゃあ俺らはあの無人戦闘ヘリに睨まれながらここで待つてるぜ。」

「多分追撃をやめてここを通過したらそれを護衛するように動くと思いますし、私らもうじき動けるようになるでしょう。」

「・・・みんなごめん。」

「ココさんが謝ることじゃありませんよ。」

「そうだけお嬢。気にすんな。」

「帰ったらいっぱい慰めてあげますよ。ココ。」

「みんな・・・ありがとう。じゃあ改めて・・・総員退却！」

〈47 side〉

「む、速度を落とした。そのまま高速を降りたわね。」

「ようやく諦めたか。」

『技術部の開発した新型の無人戦闘ヘリは役に立ったみたいね。そのまま護衛するわ。』  
「ずつと後ろを追跡してきていたSUVは離れて高速を降りていった。その数分後、それなりに低空を飛んでいるヘリコプターの下を通過した。ヘリコプターはそのまま追

随するように動き、護衛してくれている。

我々はそのまま車を走らせ、ポートエリザベス国際空港に用意してもらったICAのチャーター機で帰還した。

~~~~~3日後~~~~~

『失礼します。報告に参りました。』

「ああ、バーンウツドくん。待ちかねたよ。」

「それで結果は？」

『はい。先の南アでの作戦により奪取した放射線物理学の資料を元に解析した結果、あの設計図にかかれていた兵器の詳細が判明しました。』

「結局何の兵器だったんですの？」

『まずあの兵器は、当初縮尺が間違っているのではないかと疑われましたが、各所の機構から考えて縮尺が正しいことが判明しました。その結果、あの兵器の砲身長は全長約40 km。砲口径は約900 m。全体の直径は約120 kmに及ぶことがわかりまし

た。』

「途方も無い大きさだな。大砲にしては。」

『この大きさであることと、砲の後部に光子エンジンと思われる装置があることから、これは砲ではなく、“艦船”であることが判明しました。それも海上用ではなく宇宙空間用です。』

「宇宙戦艦なのか？」

「設計図は一応見させてもらいましたが、戦艦と言うよりはドーナツ型のコロニーのような形でしたけれど。」

『中央の部分は砲であることに変わりはありません。その砲から放たれるのは非常に高出力の中性子レーザー光線であることが判明しました。』

「中性子レーザー？放射線ということか。」

『はい。出力は450ペタシーベルト。この世に存在するありとあらゆる放射線よりも強力です。』

「そんな高出力の放射線レーザー砲、何に使うのだ。」

『この出力になりますと、すべてのものは完全に貫通します。艦船の大きさや砲口の形状などから推察したところ、この砲は距離1400万キロメートルで地球型惑星全域をレーザー光線内に収めることが可能です。この場合、惑星全土に超高出力の中性子レ-

ザーが降り注ぐことになり、惑星上の生命体を数秒で死滅させることが可能です。』

「ちよつとまで、ということとはつまり……。」

「その兵器は……!」

『はい。この兵器は対惑星用の民族浄化レーザー兵器です。おそらく銀河規模の国家が使う決戦兵器と思われれます。』

「なんとということだ……。」

「何故でそのようなものが……。」

『いかが致しましょう。ちなみにICCAの技術力ですと、今現在建造は不可能です。諸研究に数十年単位で時間がかかるかと。また建造自体にも概算で23年かかります。』

「うむむ……とりあえず機密文書クラスAにカテゴリーしろ。こんな物作れるわけがない。」

「お蔵入り決定ですな。」

「バージニアのセクター14に設計図と一緒に保存しておけ。メインネットワーク内の関連データはすべて完全消去しろ。」

『承知いたしました。』

「上級委員会No. 1からNo. 4までの連名で通達する。この案件は「カテゴリー・ディアボ」とする。現刻より上級委員会の許可なく閲覧することを例外なく禁止する。」

HITMAN 2 『躰』

『人里へようこそ。47。』

『イジツから転送してきた“ディープシスター”が今回のセーフハウスになるわ。高高度を巡航しているから地上または低高度にいる住人には気が付かれる心配はないから安心して頂戴。地上には簡易転送装置で降りてね。』

『初期調査の結果、ターゲットは人里のメインストリートから外れた住宅地区によく出没するそうよ。悪魔の特徴は1，通常より強い生命力、2，鬼や天狗ほどではないが十分に強力な筋力、3，人を騙すのに長けたコミュニケーション能力、4，簡易的ながら魔法も使う。この4点よ。』

『真正面から戦って倒すことも出来くはないけれど、返り討ちに合う可能性も高いからあまりお薦めはできないわ。できるならば静かに確実に仕留めたいところね。』
『幸運を祈っているわ。』

~~~~~

何度目かになる人里である。そこまで大きな街ではないが、私の仕事では毎回行動範囲が限定的になるため、未だに街のすべての地区へ足を踏み入れたというわけではない。私は町外れの廃屋の裏手に簡易転送陣で降り立った。今回は静かに事を済ませたいので、注射形式の即効性神経毒を持参した。念の為濃度を通常よりも上げており、人間は勿論のこと、ターゲットである悪魔に対しても効果が見込めるだろう。

私は住宅街と呼べる路地裏に入った。このあたりは表通りよりもだいたいぶ人氣が少ない。この世界では電気がなく、家に居てもやれることは少ないため日中は外に出ている関係で住居には人があまり居ないのだろう。だが全く居ないというわけではなく、時折飛脚のようなものが狭い路地をすり抜けて走っていったり、住宅と住宅の間の路地で子供が遊んでいたりと、全くひと目がないわけではない。路地裏の子どもたちがなにか話している。

「そーいやおまえんとこどうなつたんだよ？」

「なにが？」

「アレだよ、なんだつけ・・・サギ？だつけ？あつたんじゃないの？」

「ああ・・・確かに騙されはしたけれど、特に何か取られたわけじゃないからとーちゃんも気にしてなかったよ。」



「なんだ、じゃあ騙されただけだったのね。」

「心配して損したぜー」

「うそつけ、お前心配なんかしてなかっただろ。」

「ははは。バレたか。」

「で、その騙したやつはどんなやつかわからなかったの?」

「なんか俺らよりちよつと大きい子供だつて言つてた。」

「子供に騙されたのかよーしょうがねえなー。」

「騙された時は大人の男に見えたつて言つてたぞ。巫女様の御札に振れた瞬間に子供になつたつて。」

#####

~~~~~

『ターゲットは普段は成人男性になりすましているようね。御札に振れた時に解除されたということは魔法か何かで変装しているのかしら。』

~~~~~

「そういうのもちゃんと巫女様に言つたんだよな?」

「そりや言つたさ。だから・・・ほら。」

「なんだそれ？」

「巫女様の御札。怪しいやつが居たらそいつに触れさせろつてさ。」

「ふーん・・・ちよつと貸してみろよ！」

「ああ！ちよつとまでよ！・・・ああ!!」

バツサー

「あーあー、ばらまいちやつた・・・。」

「もう何やつてんのよ！ほらさつさと拾い集めるわよ！全部で何枚あるの？」

「えーつと・・・10？8だったかな？」

「わかんないのかよ！」

ヒラヒラヒラ

ばらまかれた御札の1枚がこちらにやってきた。私はそれを手に取ると、子どもたちに気が付かれないように懐にしまい、その場を離れた。この御札があればターゲットの力を制限することができるかもしれない。

私は住宅街の端にある自警団の詰め所にやってきた。あちらこちらで人を騙したり悪事を働いているのだとしたら自警団に把握されていないわけではない。何かしらの情報があるはずだ。

自警団の事務所は他の住宅と大差のない瓦屋根の一軒家だった。当然鍵らしい鍵もついていないので容易に中に侵入できそうだ。電気もないので監視カメラや各種セキュリティもあるわけがない。案の定、事務所の玄関の鍵はかかっているところか、そもそも扉自体が完全には閉められていなかった。不用心にもほどがあると思うのだが。

事務所の中は誰も居なかった。壁にかけられていた巡回表を見ると今の時間は全員町内の巡回に出ているようだ。つい最近巡回が強化されたことも同時にわかった。私は近くの机から虱潰しに探していく。3つ目の机の上に町内の地図があり、ピンで印が刺されていた。

#####

~~~~~

『この地図によるとターゲットは、南東地区、南地区、南西地区とだんだんと場所を移動して悪事を働いているみたいね。その流れで行くと次は西地区ね。あの地区は路地が入り組んでいるけれど、建っている家はすべて平屋で、家と家の間もかなり近い小道も多いわ。こつそり後ろから近づくには良い場所かもしれないわね。』

~~~~~

くくくくくく

目撃場所が記されているその地図を見る限り、人気が特になさそうな狭い路地の奥によく出没しており、人目のつくところでは殆ど見かけられていないようだ。更に、出現する状況や周囲の道路形状などにも一定の法則が見られる。これらのことから総合して考え、私は次の出現位置をおおよそ絞り込むことに成功した。

隣の机に新聞が置いてあった。文々。新聞と書かれているので射命丸文の新聞だろう。そこにはターゲットと思わしき人物の写真が掲載されていた。しかしそれなりに遠くから撮ったようで顔までにはつきりとはわからない。しかし服装の特徴などを確認するのには十分だ。私はその新聞を持ち、出現位置へ向けて出発した。

私は西地区の住宅街の路地裏にやってきた。やはり日中だと言うのに人気がほとんど無く、先程の路地ではまだ子供が居たから人目があると言えたが、こちらは子供すらおらず全く人気がない。予想ではおそらくこのあたりの路地に出現すると思われるのだが……。

「すみません。ちょっとよろしいですか？」

不意に後ろから声をかけられた。そこには20代前半の男が立っていた。気配も感じさせず後ろに回り込んできたということは普通の人間ではなさそうだ。そして新聞

の写真の人物の特徴そのままの格好をしていた。

「はい。何でしょう。」

「見た所お困りですか？道に迷われたとお見受けしますが。」

「まあ、そんなところですよ。」

「やはり。では私がお教えしましょうか？」

「お願いできますか。」

「わかりました・・・この地図をもつて行ってください。詳しく書かれていますよ。」

「はあ・・・。」

「それでどこへ行きたいのですか？」

「そうですね・・・このあたりですね。」

「ほほう・・・それはそれは・・・。」

私は近くにある奥まった袋小路を指し示した。ここからあまり離れておらず、何なら既にその入口はここから見えている。

「では案内いたしましょう。付いてきてください。フフフ・・・。」

「よろしくおねがいします。」

男はその路地とは別の方向へ歩き始めた。そのままついていくと、近辺の路地を一周

したのち、目的の袋小路までやってきた。わざわざ遠回りをしたところから見ても普通の町人ではない。私は後ろから静かに距離を詰める。御札の内側に注射器を忍ばせ、まずは御札が先に触れるようにその男の背中に押し付けた。

スツ

「ん・・・っ!!」

ボウン

「ふむ。やはりか。」

男は札に触れた瞬間に煙とともに15歳位の少年に変わった。若干耳が長い以外は人間の子供と大差ない見た目をしていたが、目の前で御札を押し付けたら変化したということはこいつがターゲットだ。

~~~~~

『そいつがアレーブスね。やっと見つけたわ。変化が溶けたその姿が本来の姿よ。変化が溶けたことに対して混乱している間に仕事を済ませてしましましょう。』

~~~~~

私は御札をそのまま完全に押し当て、その内側に隠してあった注射器を背中に刺した。一気に内容物を注入したあと、御札をテーピング代わりにしつつ注射器を抜いた。

「うぐつ！な、何が・・・あ、あれ？」

「安心しろ。直に収まる。」

「あ・・・あ・・・体が・・・息が・・・。」

「・・・。」

「カフツ・・・」

ドサツ

ターゲットはそのまま前に倒れ込んだ。背中の中の御札の部分から注射された神経毒が全身に回り、手足、肺、心臓、そして脳の機能を停止させる。ターゲットは抵抗するまもなく口から泡を吹いて動かなくなった。

~~~~~

『ターゲット、アレーブスの死亡を確認したわ。任務完了。誰かに見つかる前に帰還して頂戴。』

~~~~~

周りには誰もおらず、ここが袋小路につながる通路だということのもあって誰か来る気配も全く無い。私はそのままその場にターゲットの死体を放置してその場をあとにした。表通りに戻る際に巡回中の自警団と見られる一団を発見した。自警団の一団は上白沢慧音と話をしており、私はその側を通行人として通り過ぎる。

「それでは巡回開始します。」

「ああ。お願いします。」

「慧音先生はどうするので？」

「私はその詐欺師というのはまだ会ったことがない。会つてもわからないだろう。」

「いざという時は鐘を鳴らすんでその時はよろしくおねがいますよ。」

「わかった。」

自警団はこれから巡回を開始するようだ。流石に巡回警備をされればあの場所も見つかることだろう。時間的に結構危なかったのかもしれない。私は見つからないように横を通り過ぎて指定された転送装置の場所へ移動した。

「・・・ん？」

「どうしました？先生？」

「いや、何か見覚えのあるやつが居たような・・・。」



~~~~~2時間後~~~~~  
~~~~~

「霊夢！居るか！霊夢！」

「何よ騒々しい……。つて慧音じゃない。珍しいわねあんたが。」

「お前だろう！人里の住人に除霊札配ったのは！」

「え？あー、面白いや配ったかも。」

「なぜそんな事をしたんだ！」

「だって、なんか最近いたずらする妖怪が居るって聞いたから。めんどかったし御札渡して自衛させたのよ。それがなんだってのよ。」

「そのせいでその妖怪が死体となつて発見されたぞ！」

「ええ？そんなまさか。御札は普通の人間が扱つても大丈夫なように弱い効果しかついてないわよ。その妖怪がそこらの妖精以下の存在ならわからなくもないけれど。」

「だが実際に人里で死体が発見されたんだ！ともかく来てくれ！」

「はあ……。全くしようがないわね。」

「それでほんとにあの御札は妖怪を殺す程の力があるものではないんだな？」  
「当たり前前よ。それに殺すっていうのがそもそもおかしいわ。力を減衰させるだけなんだから。」

「ううむ・・・では一体なぜ・・・つと、あそこだ。」

「あ、慧音先生と巫女様！」

「ほらほら、どいたどいた。それで？コイツがその妖怪つてわけ？」

「そうだ。この背中に張つてある御札はお前の所のだろう？」

「・・・確かにうちのだわね。」

ビリッ

「うーん、御札に特に変わったところはないわね・・・。」

「・・・！霊夢！御札が貼つてあつた場所！」

「・・・これは・・・穴？」

「おそらくここから何かを刺されたんだ。ということは毒物か？」

「誰にもさとられずに妖怪を毒殺・・・これはもしかして・・・。」

「・・・あいつらか！」





「後部ハッチ開放。降下30秒前。」

「〃鳥になつてこい〃とでも言ったほうが良いですか?」

「いや結構。」

HALO降下は久々だ。ケベックの訓練施設で訓練を受けたが、実際に任務で使用するのはこれが初めてだ。エージエント訓練過程の一つに入っているのでタバサもこなしたのだろうが、タバサの場合は魔法を使えばパラシュートすらいらなそうだ。

「降下10秒前。」

「幸運を祈ります。」

「・・・ああ。エージエント47、降下する。」

私は2人の搭乗員に見守られながら空へと飛び出した。昼間ではあるが幸いにして今日はかなり低い高度に雨雲があり、地上から見られる心配はさほどない。もつとも、こちらも地上目標が確認できないが。そのあたりはGPSと機内からの誘導に頼ることにする。

ほどなくして雲を突き抜け、高度280m地点でパラシュートを開き、ほぼ正確に浄

水場の北部の雑木林の横の平地に降り立った。降り立ったあと、雑木林にパラシュートを隠していると人が近づいてくる気配を感じた。見るといつもの長い杖を持ったタバサが居た。

「この周辺は問題ない。150m先の基地建物に敵性勢力あり。数名は既に制圧済み。」  
「ご苦労。さすがの仕事の速さだな。」

見るとレビテーションで数名の武装した男を後ろに浮かばせていた。皆一応に頭部または胸部に氷の矢が刺さっている。抜いたり消したりしないのは本人曰く血が流れ出てくるのを防ぐためだそうだ。それでも若干滲んで垂れてはいるが、少量であれば辺り一帯に降る雨が洗い流してくれるだろう。

「建屋への侵入方法が私にはない。」

「その点については問題ない。私が到着したら本部が遠隔で開けることになっている。」

『そのことなのだけれど。47。』

「・・・問題発生か。」

『ええ。正面扉のロックシステムが改竄されている。ハッキングすれば開けられるで

しょうけど、少し時間がかかってしまうわ。』

「わかった。一応ハッキングを試みてくれ。我々は別ルートを探す。行くぞ。」

「了解。」

ひとまず建屋を目指し移動を開始する。建屋は地上2階、地下1階の建物に見えるが、内部の隠し通路と昇降機で地下1200mまで降りるとセクター14がある。兎にも角にも内部に入れないことには始まらないので、建屋の周囲をくまなく観察していく。

建屋の後ろには外階段があり、その先には金属製の扉があった。勿論生体認証のロックがされているが、この扉は長らく開けられていないらしく、扉の各所にサビが浮いていた。これならばもしかすると……。

「タバサ。この扉を開けるぞ。」

「生体認証パッドに“アンロック”の呪文は効かない。」

「“鍵”を開けようとするな。“扉”を開ける。」

「……！やってみる。だけど大きな音がする可能性がある。」

「さきほどお前が浮かばせて運んでいた死体には通信機がついていた。おそらく定時連

絡は行っていたはずだ。その連絡が途絶えた時点で追手が来たと向こうもわかってい  
るだろう。」

「わかった。扉から離れて。」

私は階段の下に移動してそこから見守る。タバサは階段の中腹辺りから呪文を詠唱  
し始める。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウインデ…」

〃ジャベリン〃

ドゴオン!!

いつもより大きめに形成された氷の矢は見事に鉄製の扉を貫いた。貫徹力も最初の  
頃に比べて上がっているようだ。ただ予想されたとおり、盛大にあたり響く大きな音  
が発生してしまった。雨音でもこの音は消せそうにないだろう。早急に事を済ませる  
必要があるな。

「よし、急ぐぞ。」

「了解。」



内部には扉の近くで伸びている兵士が一人いた。すかさずシルバーボーラーで眉間を撃ち抜いておく。どうやら我々がここから入ってくるのを見越して警備していたようだ。このような強攻策に出るとは思っていなかったようだが。

『内部に入ったわね。ハッキングが思ったより手間取りそうだったからちようどよかったわ。』

「内部の情報がほしい。」

『わかっている。こちらから誘導するわね。』

本部の誘導に従って内部を進んでいく。とある部屋の本棚の奥に隠されたスイッチを押して隠し扉を開け、内部にある昇降機に乗り込んだ。

「タバサ。敵は昇降機が動き出したことを察知しているはずだ。扉が空いた瞬間に銃撃を受ける可能性が高い。到着と同時に扉ごと吹き飛ばせ。」

「わかった。詠唱を開始しておく。」

昇降機は結構なスピードで降りていく。5分ほど降りたあと、昇降機の動きがゆっくりになり始めた。そろそろ到着だ。

「ラグーンズ・ウォータール・デル・ウインディ…」

ゴウウン・・・チーン！

〃アイス・ストーム〃

ドゴオオオオン!!!

「撃て…うわああ!!」

ギャーワーワー

案の定、扉の前で出待ちをしている敵部隊がいたようだ。私は扉の横のスペースでアイス・ストームを躲しつつ、収まったところで扉の向こう側に向けてシルバーボーラーで一人ひとり頭を撃ち抜いていく。相手が前線にしようとした即席バリケードを逆に利用して前に出る。魔法を撃ち終わったタバサも直ぐさまバリケードに張り付く。・・・つと、バリケードの横で転がっている兵士の死体には閃光手榴弾が腰の部分にくくりつけられていた。拝借しておこう。

タバサのウインディ・アイシクルで近場の敵を。私のTAC—4で遠目の敵を各個狙

撃して排除していく。10分もすると最初の通路はあらかた制圧できた。最初のアイズ・ストームでだいぶ混乱していたようだったから制圧が思いの外うまく行った。転がる死体を見て気がついたことをタバサに伝える。

「タバサ。この兵士たちは全員腰に閃光手榴弾を携帯している。利用しろ。」

「了解。こちら側の部屋の制圧は任せて。」

「では私はこちら側を。行動開始。」

2人同時に通路の左右の部屋の扉の中を攻撃していく。私は閃光手榴弾を投げ入れて混乱したところをTAC-4で撃ち抜いていく。1つの部屋には2〜3人が居ることがほとんどだが、偶に10人以上の大人数が大部屋に居ることがあった。そういう場合は相手を物陰に隠れさせてからその場所に向かって手榴弾を投擲するだけだ。

タバサの方とは言うのと、扉をエアハンマーでぶち破り、内部をカッタートルネードで内部の調度品もろとも全てを切り刻んでいる。度重なる任務で“スクウエア”に再昇格できたと言っていたが、これがそのスクウエアとやらの力なのかもしれない。偶にこちらの方にまで敵の死体を放り投げってくるのは、少なからず驚くので控えてほしいところだ。あの様子だと閃光手榴弾はいらなそうだ。

そうしてすべての部屋をくまなく制圧したあと、最後にサーバルームである一番奥の部屋にたどり着いた。デンバーにあったサイト2もそうだったが、ICAはサーバルー関連施設は一番奥に設置することが義務付けられているようだ。私は反対側のタバサに目配せをして慎重に扉を開ける。

バアン！キンツ！

「つと。」

「内部でこちらを見ていると思われる。」

「じゃあこいつの出番か。」

私は閃光手榴弾を内部に投げ入れる。

シュツ

バアン！バシユン！

「ぐっ！」

閃光手榴弾が迎撃されてしまった。相手はどうやら結構な手練のようだ。だがこれまでの兵士たちの対応や装備を見る限りこの世界の人間だ。そういう人間たちにはタバサの魔法がこの上なく効果を発揮する。

「仕方ない。タバサ。」

「わかった。」

「イル・ウオータル・スレイプ・クラウドイ…」

“スリープ・クラウド”

スリープクラウド、化学防護服を着けていても貫通するエアロゾル化された睡眠薬だ。防ぐにはICA技術部の作った特殊防毒マスクが要る。彼らに防ぐ手立ては無いと言っている。案の定中では少しの間があったあと、人が次々と倒れる音がした。倒れる音がしなくなつたあと、タバサのスリープクラウドを解き、内部に慎重に侵入を試みる。内部には床に置かれたサーバーの上に覆いかぶさつたりもたれかかるようにして眠っている敵兵が10人は居た。一人ひとりをくまなく見ていき、その一番奥に居た男の肩に大尉の階級章を見つけた。私はそれ以外の9人の眉間を撃ち抜いたあと、男が起きるのを待った。タバサ曰く、即座に起こすことは出来ないらしく、本来数時間は眠つ

ているものを数分に短縮するくらいしか出来ないらしい。意外なところで不便なものだ。

「うつ．．．ううん．．．」

「気がついた。」

「．．．。」

「うぐ．．．私は何を．．．。」

「目が覚めたか。」

「な!?こ、ここは．．．手が縛られ．．．!」

「お前がリーダーだな。誰に雇われた。」

「．．．誰が言うか。」

「ふむ。」

パシユン

「ぐあああああ!!!」

「早く言ったほうが良いと思うぞ。次は左足だな。」

「うぐぐぐ．．．。」

「タバサ。お前がやってみるか?」

「……………」

タバサは男の前に立つと無言で股間を全力で踏みつけた。

ガツ

「ぎゃあああああ!!」

「早く言つて。」

「く……………くっそお……………」

「……………」

ガツ

「ぐわあああ!!」

「早く。」

「ぐうう……………」

タバサは何故か執拗に男の股間を足蹴にしている。踏みつけ、蹴り飛ばし、杖先での刺突。確かに男性への拷問の場合そこを狙うのは常套手段ではあるのだが……………。その顔はいつもの無表情から愉悦が混じった顔になっている。訓練施設でどんな方法を

習ったのか……。

「わ、わかった……言うから……言うからもうやめてくれ……。」  
「早く。」

「め、メールだよ。」

「メール？」

「メールで依頼されたんだよ。ここに施設があつて、そこから文書を奪取してくれて……。」

「そんな訳のわからないものに応じたのか？」

「最初はいたずらだと思つたさ。でもその後すぐにうちの構成員の一人の生首が宅配で送られてきてよお……。」

「……。」

「それで、依頼主は。」

「わからねえ。L, Kとしか書いてなかつた。」

「L, K……それだけか？」

「それだけだよ！嘘じゃねえ！」



~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『L, K・・・イニシャルかもしれないわね。調べて見ないことには始まらない。とりあ
えずその施設の奪還作戦を完了して頂戴。』

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「わかった。」

「ほっ・・・。頼むよ、言ったんだから助けてくれ・・・。」

「タバサ。」

「ん。」

「やれ。」

「了解。」

“ワインデイ・アイシクル”

脳天に氷の刃が刺さった男を尻目に部屋を出る。そのまま他の部屋も再度確認し、息

がある兵士にとどめを刺していきつつ、我々は昇降機に乗って施設を出た。

~~~~~1週間後~~~~~

~~~~~

『47、あの施設に居た男の自宅や組織の事務所をくまなく搜索した結果、たしかにL、Kという人物からメールと小包が届いていることが確認できたわ。』

「それで、L，Kという人物が誰なのかわかったのか？」

『それが……。』

「……?どうした。」

『発信元をたどったら意外にあっさり住所が割れたのだけれど、L，Kという人物は本名

「リアン・カーキンス」という名前であることがわかったの。』

「リアン・カーキンス……まさか……。」

『そう。あのドナルド・カーキンスの娘。あなたが水酸化ナトリウムの海に沈めたあの

娘よ。』

「どういふことだ?誰かが偽造しているということか?」

『発信元はこちらもあなたが襲撃したドナルド・カーキンスの自宅。でもあそこは既に

ICAが買い取って更地にした。もう訳がわからないわ．．．。」

「その発信元情報はあっているのか？」

『あつてるわよ。でもたどってみるとその地域の中継局がその家の番地の回線から発信された情報というところまでしかつかめなかったの。何も無い更地からメールが送られてきたのよ。』

「番地の電話回線を現地でつなげて使用したという可能性は。」

『無いわ。そもそも電話回線は更地にした時に解約しているし、物理的な回線も他にながっている家がなかったのもあつて電信柱ごと撤去されてる。』

「ならば．．．、一体どうやって．．．。」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~
 ~~~~~

・「裏口入社」

【+1000】『正面扉を通らずに施設に侵入する。』

・「閉所恐怖症」

【+1000】『昇降機の扉を破壊する。』

・「Tシャツで十分！」

【+3000】『銃弾を一度も食らうこと無く任務を完遂する。』

・「そして誰もいなくなつた」

【+3000】『敵性勢力を完全無力化する。』

## HITMAN 2 『感情のハザマで』

『アルヌスについたな!』

『そこら中に日本の自衛隊員が居るだろ? あいつら現地では“緑の人”って呼ばれてるらしいぜ。そのまんまなネーミングセンスだよな。』

『この町はこの世界の他の街と違って現代的な町の設計がなされてるんだ。ハルケンギニアとか幻惑郷みたいな町並みとは違うだろ?』

『ターゲットの嬢ちゃんはこの町のどっかにある店で働いてるらしい。どこの店かは・・・あー・・・資料がなくなてな。決してなくしたとかじゃないからな! 資料が俺の許可も得ずに勝手にバカンスに行きやがったんだ。』

『頑張つてこいよ! あと・・・そうだ、元氣出せよ!』

~~~~~

私達はアルヌスの町の路地裏に居る。前回の任務から色々カウンセリングは受けた

けれど、医者の方は良くなっていると云っていた。だが私自身の感じとしてはあまり変わっておらず、今もだいたい気分が沈んでいる。

「姉さん……。大丈夫かい？」

「ええ、大丈夫よ。ちやつちやと任務終わらせて帰りましょ。」

シルバーが心配そうに話しかけてくれる。不器用ではあるけれど心優しい自慢の弟だ。シルバーのためにも私がしつかりしなくてはと思うのだけれど……。やはりどうにも気分は沈みがちだ。ともかく任務は任務。例によってポンコツAIのウィートリーはターゲットの働く店の名前を紛失したという。いつもなら文句の一つでも飛ばしてるところだけど、その気すら起きないということはだいたい参ってるわね私。

私達は手近な店を一軒一軒訪ね歩き、地道にターゲットを探すことにした。誰かに聞いても良かったのかもしれないが、今のこの状況だと負担が大きいの言つてシルバーが止めてきた。時間制限はないから気長にやろうとも言つてくれた。ウィートリーも『いんじゃないね？タイムリミットはどこにも書いてねえからな！』と言つていた。ポンコツAIにまで気を使われてるわね……。

はじめの店は雑貨店のようだ。店の中は現地民と思われる中世から近世にかけての

服装の人たちと緑の迷彩服の自衛隊員とでそれなりに賑わっている。カウンターの中には赤毛のケモミミ娘が店番をしていた。

「シルバー、アレ。」

「まっつて。・・・うーん、違うみたいだ。ターゲットはもつと耳がシーズー犬みたいにふわふわした垂れ耳。あれは立ち耳だ。」

「そう・・・。なかなか居ないもんね。この店は他に従業員は見当たらないし次に行きましょ。」

「というか姉さんもターゲットの姿はブリーフィングで確認しただろうか？」

「ごめん・・・。あんまり頭に入ってなかったかも。」

「・・・まあ、無理もないさ・・・。僕が覚えてるから大丈夫。」

次の店はちよつとしたカフェのような店だった。店にはいると店員が席に案内してきた。従業員を見に来たというわけにもいかなないのでそのまま指示に従って席についた。

「姉さん。せつかくだから少し休んでいこうか。」

「・・・そうね。」

私達はそのままそのカフェで小休止することにした。アイスコーヒーを注文して待っていると店内が混み合ってきた。いつの間にやら店内は満席になっていた。肝心の従業員のほうはというと、この店の従業員は普通のヒト種のように、ケモミミどころか赤毛の女性すら居なかった。そのうち注文したアイスコーヒーが来た。店員の申し訳無さそうな顔と共に。

「申し訳ありません。店内が混み合っております。相席をお願いできないでしょうか？」

「相席ですか？」

「はい。女性のお一人様です。」

「わかりました。どうぞ。」

「ありがとうございます。」

私達は相席に応じる。元々アイスコーヒーを飲んだら直ぐに出るつもりだったので問題はないと判断したためだ。相席にやってきたのは見覚えのある青い髪の少女だっ

た。

「失礼する。」

「あっ……、どうぞ。」

「……ちよつと僕はお手洗いに行ってくるよ。」

「わかったわ。」

いつだったか魔術に詳しい協力者を探す任務で出会ったレレイ・ラ・レレーナという魔道士の少女だ。もつとも、あの作戦の後彼女を含めた協力者たちは全員記憶処理を施されており、彼女はこちらのことは覚えていないでしょうね。

彼女はどことなくタバサちゃんに似た雰囲気を感じるけど、彼女の髪はタバサちゃんのように幾分淡い色をしている。そういえばタバサちゃんも元は別世界の住人。聞くとところによると元王族で、元暗殺部隊のメンバーという異色の経歴持ちだったわね。彼女はこういう感情にはどういった割り切りをしてるのかしら……。

「……飲まないの?」

「え?……ああ。飲むわ。ボーツとしちゃって、ぼやぼやしてたら冷めちゃうわね。」

「アイスコーヒーは元々冷たい。冷めるといふより温くなる。」

「あ、あははは・・・。」

「・・・悩み事を抱えている顔をしている。」

「えっ・・・。」

「力になれるかわからないけれど、話すことで気が楽になることもある。」

「・・・そうね・・・。」

その時の私は色々精神的に参っていたのが原因なのか、それとも気の迷いなのか。後になってもよくわからなかったけど、その時はこの聡明な魔道士さんにこの悩みのタネを打ち明けてもいいかという気分になった。私はぼつりぼつりと語り始める。今になって思うと結構ギリギリの告白だった気がする。ICAの守秘義務に引っかかる寸前のところだ。でも結果としてそれが功を奏した事になった。彼女はしばらく考えた後ゆつくりと口を開いた。

「あなたはどうしたいの？」

「え？」

「その人達がこの世を去った後、あなたはまだ生きています。どうあがいても前に進むし

か道はない。」

「それはそうだけれど……。」

「あなたは……その人達のようにはなりたくなかったのでは？」

「！」

「あなたは犯罪行為を繰り返すその人達のようにはなりたくなかった。私利私欲のためだけにあらゆる悪事を働くその人達が許せなかった。だから決別した。違う？」

「それは……。」

「でも結局悪事を働く組織に入った。私はそれは結局は避けられない運命だったのだと思う。あなたの口ぶりから推測すると、避けられない運命である根拠も持っていそう。」

「……。」

「運命をはねのけるのは常人には無理難題。あなたはその無理難題に直面している。ほとんどの人はそれに押しつぶされる中、あなたはそれを内包しようとしている。だから無理が生じている。」

「……。」

「内包する必要はない。その運命に抗うことは出来ないけれど、その運命の先を変えることはできる。あなたは抗えなかった。でもこれからその運命を変えるチャンスが必ず巡ってくる。」

「・・・そうね。」

「あなたに今できることは、未来を変える努力をすること。過去に囚われたり、過去の過ちを悔いるのももう終わりにしたほうが良い。それは何の意味もないし、唯自分を苦しめるだけ。」

「・・・わかったわ。そうね、そうよね。彼らに操られた人生をこれからやり直して再起するチャンスをこの組織でもらったんだわ。」

「それは今の組織に入った時に感じたものなのでは?」

「そうよ!あの時私は確かに何かを変える力というのを感じた。これからの未来に確かに希望が持っていた!何故忘れていたのかしら。」

「無理難題に直面した人は視野が極端に狭くなる。解決策はその視野を広げるだけでいい。」

「・・・ありがとう。ちよつと気が楽になったわ!そうよ、いつまでもくよくよしてるなんてブルーちゃんらしくないわ!」

「役に立てたようで良かった。」

くシルバースィード

あの女性はレレイとか言った魔道士だ。魔術を使うものは総じて人心把握を得意とするものが多い。もしかしたら2人きりにすることで姉さんの悩みも少しは軽くできるのではないかと、俺はこうしてかなり長めのトイレ休憩となっている。だがそろそろいい加減トイレの中で用も足さずにうろつくのも怪しまれ始めたな……。仕方ない。違うところから姉さんたちを観察するとしよう。

トイレから出て、気配を出来る限り殺しつつ、店内を歩く。丁度姉さんの席から一番遠い位置に当たたる窓際までやってくると、そこからテラスに出て外の景色を眺めるか外の空気を吸うかしに来たように見せかける。姉さんは彼女からなにか助言を受けているようだ。今戻るのは色々マズイ気がする。どのくらい待てばいいだろうかと思案している。個人通信が入ってきた。

『よお、お前の姉さんの様子。どんなもんだ？』

「ウイートリーか。カウンセリング中だよ。」

『カウンセリングねえ。一体どんな？』

「それはわからない。会話が始まる前に席を立ってしまったからね。」

『まあその方が良さだろうな。作者だって精神関連に関する会話は書けねえからな。』

「作・・・なんだって？」

『おっと、こつちの話だ。気にすんな！それはそうと、情報を手に入れたぜ。』

###情報を入力###

~~~~~

『やつと資料を見つけたぜ。ターゲットは今いるカフェから北に500mほど行ったところにある。『ボルゴ・パイソン』とかいう料理屋で給仕をしてるらしい。早速向かってみ  
てくれ！』

~~~~~

「やつと資料を見つけたのか。というかほんとに資料なんてあつたんだな？」

『なんでえなんでえ！俺様の言うこと信じてなかつたな?!』

「そりやあまあ・・・五分五分？」

『半分しか信じてねえってことじゃねえか！・・・ったく。とにかくカウンセリング終
わつたら任務に戻ってくれよな。そろそろあのオペレーターのネーチャンはぐらかす
のも限界だからよ。』

「わかった。そろそろ話も終わるだろうから戻るよ。それと・・・ウイートリー。」

『あ？なんだ？』

「・・・ありがとう。」

『へっ、なんだなんだ？明日は暴風雨か？気にするなっ。じゃあな！頑張れよ！』

通信を終えて店内に戻る。席に戻ると姉さんは何故か天を仰いでいた。

「ただいま。姉さん？何してるの？」

「・・・ふう！」

「??？」

「少しは緩和できたかもしれない。」

「そうね。前よりはだいぶ気が楽になったかしら。ごめんねシルバー心配かけたみたいで。」

「あ、ああ。調子に戻ってきたみたいで何よりだよ。そろそろ仕事に戻ろうと思うのだけれど。」

「そうね。・・・あ、シルバーそのアイスコーヒー飲まないなら貰うわね！」

パツ　ズズズ

「あ！・・・あー・・・まあいいよ。あげる。」

「ふうー！ごちそうさま！じゃあ私達は行くわ。レ・・・お姉さん。ありがとうね。」

「いっ。」

「ではこれで。」

アリガトウゴザイマシター！

「やっぱり二人は名コンビ。あのおときも・・・。」

くブルースideく

レレイさんに話を聞いてもらったらいふ気分が軽くなったわ。そうよ。私は我が道を進むだけ。私が立ち止まってたらそれこそアイツらと同じになっちゃおうわ。私にできることをしっかりやる。今私にできるのはそれだけよ！アイツらが叶えられなかったことも私が引き継いでやるわよ！

幾分気分が落ち着いたところで本来の任務といきましょう。シルバーが言うにはさつきウイートリーから連絡があつて、ボルゴパイソンとかいう店で働いてるらしいと


~~~~~

なるほど。ペルシエという名前はペルシャ猫から取ったのね。写真では分かりづらかったけれど実際に見てみると確かにペルシャ猫の雰囲気があるわ。

私達が適当に注文して待っている間に隣の席の会話が聞こえてきた。迷彩服を着ていて、おそらく自衛隊員だろう。

「最近はこのケモミミが増えたよなあ。」

「『キャット・ピール』とかいうらしいぞ。伊丹の部隊の誰かがそんな事話してた。」  
「へー、やっぱ猫みたいな習性あるのかな？」

「全員がそうじゃないらしいが大多数はそうみたいだぜ。だからこの世界にはマタタビは持ち込み禁止なんだとき。」

#####

「そういや伊丹の部隊のやつが持ち込もうとして陸将に大目玉食らってたっけか。」  
「アイツラも懲りねえよなあ。」

~~~~~


「まあ任せなさいって。そうと決まればさっさと出るわよ。」

私達は一応怪しまれないように運ばれてきた料理を一通り平らげてから店をでた。

路地裏を抜けて一旦街の端に出た。町の外側にはちよつとした森があり、いろいろな植物が生えている。少しばかり歩き、目的のものを探した。しかしそんなに簡単に見つかるなら苦労はしないわよね。

「うーん、無いわねえ・・・マタタビ・・・。」

「姉さん。これ。」

「うん？これは？マタタビじゃないわよね？」

「うん。だけどこれもネコ科を興奮させる成分が含まれてるんだ。『イヌハツカ』って言うみたい。」

「へー。よく知ってるわねそういうの。」

「こつちの世界に来るときに一応知識の一つとして調べておいたんだ。使えそう？」

「たぶんね。もつと量はある？」

「あるよ。あつちに群生してる。」

「よっしや。じゃあ大量に集めちゃいませよ！」

ポケモンたちにも手伝ってもらい、両手に持ちきれないほどの量を集めると、その場で適当にすりつぶして団子にした。ニドちゃんのパワーのおかげですりつぶすのにも特別な道具がいらなかったのは幸いね。ちよつと湿つてる団子だから投げれば狙ったところに張り付いてくれるでしょ。そんな団子を5、6個作ったら準備完了。近くの小川で一応手を洗つておいて、いざ町へ！

街につくと、既にすれ違う獣人がちらちらこちらを振り返つてくる。一応適当な袋に密封しているのだけれど、それでも反応するつてことは期待できるわね。ボルゴ・パイソンに戻つてくると、今度は私一人で店内にはいる。シルバーは心配してくれたけれどもう大丈夫。任務に従事していく過程でだんだんと霧が晴れてきている気がするくらい。店内は相変わらずそれなりに客がおり、先程の自衛隊員もまだのんびりと酒を酌み交わしていた。

「いらつしやいま・・・あら？ さっきの。どうしたんですか？」

「さつきはちよつと急用が入つてすぐに出てしまったのよ。今度はゆっくりしたいわ。」

「そうなんですか。ではこちらへ。」

イチメイサマゴアンナイデース！

私は給仕の中にターゲットが居るのを確認して外から見ているシルバーに目配せをする。シルバーはその合図とともに店の目の前の道に袋に入っていたイヌハツカ団子をすべてぶちまけた。

フワアアア!!!フギャー!

ナ、ナンダア!ワーワー!

「こ、この匂いは!...だめだ!抗えない!!」ダッ

「ちよ、ちよつと!どこいくの店員さん!」

#####

~~~~~

『やったな!街中のケモミミ連中が大騒ぎで寄ってきてきてるぜ!すげえな!砂糖に群がるアリだつてここまで激しくねえよ。さてさてターゲット様は...ほほう...これはこれは。』

~~~~~

濃縮イヌハツカ団子の効力は絶大で、道行く獣人は勿論、店の中に居た獣人の客や店員も軒並み外に駆け出していった。ターゲットだけはその場でぼかんとしている。怪訝そうに隣の席の自衛隊員が話す。私はそこに情報を提供していく。

「なんだ？ どうしたんだみんな？」

「事件か？」

「どうやら外でマタタビ系の何かがばらまかれたらしいですね。キャット・ピープルの人たちはみんな行ってしまいました。」

「ああ、この微妙なハーブっぽい匂いはそれか。」

「あら？ 店員さん？ あなたもキャット・ピープルではないのですか？」

「えっ!？」

「ん？ そういえばそうだよな。何で君は大丈夫なんだ？」

「え、えーつと．．．それは．．．が、我慢！ そう。我慢してるんですこれでも！」

「えー？ でも我慢できるようなものなんですか？ この強烈な匂いでも？ みんな我慢できてないみたいですけど？ それに店員さん結構平然としますよね？」

「あ、あーつと．．．。」

「なんか他の子とは違う感じするよな君。」

「うーん．．．？ それになんだか他のキャット・ピープルともちよつと違うような．．．。」

「あ、ああ！そうだ！ちよつと用事を思い出してしまいました！ちよつと失礼します！」
タツタツタ

思惑通り、ターゲットには催眠効果は効かなかった。それを自衛隊員に教えることで自衛隊員にも不自然に思われその視線に耐えきれなくなったターゲットは店の奥に引っ込んでしまった。後は頼んだわよ。シルバー。

くシルバースイデ

俺は団子を道にばらまくと、すぐさま袋も捨て、その場を離れた。案の定、町の至るところから獣人が出てきて道の上で狂喜乱舞している。その混乱は俺の行動を隠すのもってこいだった。

俺は人混みを避けつつ、店の裏手に回った。裏は薄暗い路地で表通りと違って全く人がおらず、まさに“犯罪者の巣窟”という雰囲気だった。店の裏手に回り込んでから少し経った後、店の裏口の扉が開かれて中からターゲットが出てきた。

「ふう．．．ちつ、こんなことでバレかけるとは思わなかったわ．．．。とりあえずほと

ぼりが冷めるまでどこかで時間を潰さないと・・・。」

俺は背後にゆつくりと忍び寄り、ワイヤーロープを素早く後ろから首にかけてそのまま背負い込んだ。

「~~~~~」ジタバタ

「・・・!」

「~~~~!!」ジタバタジタ・・・

「・・・。」

「~~~~」ピクピク

ターゲットはしばらくジタバタしていたが次第に抵抗する力が弱まり、そして動かなくなつた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『ターゲットの生体反応の消失を確認したぜ。お疲れさんつと。ブルーの方も調子戻つたみてえだし今回は大成功だな！早く帰ってこいよ！快方祝で焼肉と行こうぜ！』

~~~~~

焼肉つて・・・ワイトリーは食べられないだろうに。相変わらず変なところで人間臭いAIだ。ともかく、動かなくなつたターゲットを近くのダストボックスの中に放り込む。証拠も隠滅し、表通りに戻つて店にはいる。

「姉さん。迎えに来たよ・・・。つて何食べてんの。」

「んー？いやさ。ここんところろくに食事も喉を通らなかつた可愛そうなブルーちゃんはお腹が減つて大変なことに気がついたわけよ。」

「ああ・・・そう・・・。」

「大丈夫よ。もう食べ終わるから・・・ふう！ごちそうさま！」

「あーあ。でも残念だな。」

「え？」

「ワイトリーが焼肉パーティーするつて言つてたんだけどな。」

「ええ?!ちよ、それもつと早く言つてちようだいよ!」

「姉さん通信聞いてなかつたの?」

「通信なんて着てな・・・あ、そういえば切ってたの忘れてたわ・・・。」

「姉さん・・・。」

「あ、あはは・・・まあともかく帰りましょ。私達の“居場所”に。」

「・・・そうだね。帰ろう。」

僕たちは店を出てまだ大通りを賑わせているキャット・ピープルたちを横目に町の外へ出て指定された回収地点へ向かった。

「ねえ、シルバー。」

「ん？なんだい？姉さん。」

「ふふふ・・・ありがとうね。色々と。」

「・・・ふふ。どういたしまして。」

~~~~~1週間後~~~~~

~~~~~

「はい。良いですよ。経過は良好ですね。もう大丈夫でしょう。」

『良かったわね。』

「はい。色々お騒がせしました。」

『本当に。あなたが腑抜けている間は色々大変だったのだから、早く取り戻して頂戴。』

「すみませんでした。ちゃんと取り返しますとも！」

『それから47にもちゃんとお礼を言っておきなさい。』

「そうですね。だいぶ任務を変わってもらったみたいで……。」

『それだけじゃないわ。あれでも結構心配してたみたいよ?』

「へえ? 47が? 私を?」

『見かけによらずね。虚空を見つめる時間が多くなつてたし。経過観察を定期的に確認したり。』

「ふーん……それはそれは……。」

「姉さん。」

「あら、シルバー。あなたも来たの?」

『ふふふ。うちの男衆はみんなあなたのことが心配だったのよ。』

「え? ああ……まあそうだね……。」

「あらあら! 愛されすぎて困っちゃうなブルーちゃん!」

『まあ、浮かれすぎないようにね。ところでシルバーは何故ここに？見舞いというわけじゃないでしょう？』

「ああ。忘れてた。技術部の人がバーンウッドさんを呼んでいましたよ。何でも気になることがあるとかで。」

『あら、何かしら。じゃあちよつと行つてくるわね。ブルーは自室に戻つて待機して頂戴。』

「はい。」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~  
 ~~~~~

・「魔女の相談所」

【+1000】『レイ・ラ・レレーナに会う。』

・「彼女はそれに抗えない」

【+1000】『マタタビ団子を撒く。』

・「愛の形の裏返し」

【+3000】『ターゲットを絞殺する。誰にも見られてはいけない。』

・「偶には療養も必要」

【+5000】『ブルーの体調を回復させて帰還する。』

HITMAN 2 『暗躍』

『秩父へようこそ。47。』

『この山深い中にぼつんとある元米軍施設が今回の舞台。元々、ベトナム戦争中期に日本国内に秘密裏に設置された、対ロシア・中国用の中距離弾道ミサイル基地だったの。設立と建設にはそれなりの苦勞をしたようだけれど、ニクソン政権の時にこの施設は秘密のまま破棄されたわ。』

『その後、紆余曲折あった末に日本のある企業がこの施設を買い取ったの。最初は保養施設か何かにする予定だったようだけれど、社長の独断で対アメリカ報復基地に生まれ変わった。元ミサイルサイロには中国の東風31が装填され、アメリカ西海岸に今まさに核弾頭を搭載したそのミサイルが放たれようとしている。江戸川コナンもとい工藤新一はそれを阻止しようとしているみたいね。』

『今回の任務は殺害は不許可。たとえミサイルが発射されたとしても、クライアントである江戸川コナンが拘束されたとしてもそれは徹底されるわ。我々にとってはこの世界の合衆国がどうなろうと知ったことではないからね。』

『幸運を祈っているわ。』

~~~~~

ブロロロロ…キキーツ

ガチャ

「ふん。よく来たな。エージエント47。」

「依頼だからな。そっちもあの子供に随分肩入れしてるな。赤井秀一。」

秩父の山中にある林道。その途中にあるちよつとした路肩スペースに赤井秀一が愛車のシボレーと共に居た。私が乗ってきたアウディも同じ場所に止める。この林道自体、入り口に目新しいロープが張られており、我々以外に入ってくる者も居ないだろう。この場所は接触してきた女性FBI捜査官から指定されてきた場所であり、ここから二手に分かれて少年が突入する施設を南北の両サイドから援護するのが今回の任務というわけだ。

「これを渡しておこう。」

「これは…強化ゴム弾か？」



「ぼうやに言われただろうか？ 誰ひとり殺すなど。」

「依頼内容に入っている。だが怪我をさせるなどは書かれていなかった。」

「まあお前の腕なら足や手を意図的に狙うことは造作も無いだろうが、それでも一応保険として持っておけ。」

「……」

手を打てば無力化できるだろうと踏んでいた私は、非殺傷の思わぬ徹底ぶりにこの者たちが誰ひとり傷つけること無くことを済ませようという信念が伺える。その信念が枷にならなければ良いのだがな。

私達は二手に分かれた。私は北側、赤井は南側だ。赤井によると少年はあと10分ほどでこちらに到着するらしい。3分ほど車を走らせた後、施設北側の山の中腹に陣取った。比較的大きな木の上に登り、施設を見渡す。施設は西側から兵士詰め所、車両駐車場、兵器庫、ミサイルサイロの順になっている。その他の様々な施設はおそらく内部だろう。そういえば我々は外からの援護しか命じられていないが、内部の援護は別に当てがあるのだろうか？

~~~~~

『47。まもなく工藤新一が施設に到着するわ。これより専用回線情報を通達するわね。以降はそれを使って彼らと連携を取って頂戴。』

~~~~~

専用回線。どうやら例の探偵バッジとやらの回線と同じものらしい。赤井秀一も通信機を持っており、それで連携を取るらしい。早速赤井が通信を投げてきた。

「47。聞こえるか。」

「良好だ。」

「詰め所の屋上にいるスナイパー。片方はこちらでやれるがもう片方がタンクの裏にいて狙えない。そちらからならどうだ。」

「こちらからならどちらも狙える。タンクの近くに居る方は私がやろう。」

「では3カウントだ。3. 2. 1. シュート。」

バシユン

その後も屋上や哨戒をしている兵を中心に気絶させていく。ゴム弾も正確に狙える

のであれば頭部に当てて気絶させるくらいはできる。合計で10人ほど気絶させた後、通信が入った。

「赤井さん！僕だよ！状況は!？」

「ふむ。屋上にいるやつは全員処理したが、サイロ周辺はまだだ。」

「了解。それと……。」

「……。」

「聞いてるんでしょ。ICAの暗殺者も。」

「今回は協力者なんだがな。」

「俺は反対したんだ。でも灰原が……。ともかく援護頼むぜ。」

「ふむ……?」

灰原が。つまりは灰原哀も我々のことを知っているとということだ。記憶処理をしたと聞いたのだがどういふことだろう?そんなことを疑問に思っていると今度は本部から通信が入った。

『47。聞こえる?』

「ああ。」

『今回の任務とは直接関係のないことなのだけれど、最近ICCAの記憶処理を施した人間がICCAに関する記憶を持っている事象が続いていてね。上級委員会で対応を検討していたのだけれど、今回の任務でそれらも同時に調査してもらったことになったわ。』

「同時に調査。どうするのだ？」

『工藤新一に直接接触して頂戴。彼の反応とできることならば以前の任務のことも聞き出して頂戴。どの程度まで記憶処理がなされていて、どの程度まで記憶を維持しているのかを調べるわ。』

「了解した。．．．しかし記憶処理に不備があったということか？」

『まだ原因はわからないわ。記憶処理は戦術AIが処理する記憶を選定して、それを職員が最終チェックしたのち、特殊電磁波で脳内の記憶媒体を改竄するものなのだけれど．．．。』

「職員のチェックをすり抜けたと？」

『キャララインはそこまで無能ではないのだけれど、一応調査はしているわ。ともかく、現状を把握するためにも工藤新一と接触して頂戴。』

「わかった。」

『衛星スキャンの結果、まだ施設の西側には3個大隊規模の兵士が残っているわ。十分気をつけてね。』

施設の西側は建物が入り組んでおり、地上付近はほぼ狙えないと言っている。大半の監視役の兵士は既に気絶させたので今なら比較的簡単に施設に侵入することができるだろう。私は手前側、つまり北側の門の近くの壁に設置してある監視カメラを実弾狙撃で撃ち抜いた。その後、様子を見に来た兵士2名を赤井と共同で気絶させた。気絶させた後、私は木を降りて北側の門へ向かった。

「47。何をしている。」

「粗方援護は終わった。少年の援護にはもう少し近くに行かねばならない。外は任せた。」

「む……まあいい。わかった。ぼうや。暗殺者がそちらに向かうぞ。」

「え!?! ……ああ、あいつか。わかった。こっちは今誰にもバレずにミサイルサイロの近くまでこれたんだから頼むぜ。」

私は北側の門をよじ登って乗り越えると、近くの建物の影に隠れる。先程気絶させた兵士から施設図を拝借すると、それを頼りに施設内を進んでいく。幸運なことに、施設図には大まかではあるが他の部隊の配置も記されていた。しかし、ようやくミサイルサイロの隣の部屋まで来たところで問題が発生した。

ドゴオオオン!!!

「な、何!」

「赤井。今の爆発音は何だ。」

「施設東側で大規模な爆発があったようだ。お前がやったんじゃないのか?」

「今は隠密行動中だ。そんなことはしない。」

ビービービー

「警報が鳴ったな。」

「くっそ!ともかく早くコントロールルームに行かねえと!」

「援護しよう。まだ殺傷禁止は継続するか?」

「できる限り継続!赤井さんも!」

「ぼうやの頼みなら仕方あるまい。」

~~~~~

『47。聞こえるかしら?施設東側から所属不明勢力が接近中なのを衛星が捉えたわ。アサルトライフルや各種爆発物で武装してる。この装備は正規軍並ね。接敵する可能

性があるから注意して頂戴。』

~~~~~

「東側から所属不明勢力が来ているようだ。赤井、確認できるか？」

「こちらからでは断片的にしか見えない・・・うおっ！」

「!?どうしたの！赤井さん!？」

「赤井。何があった。状況を報告しろ。」

「・・・。」

「・・・少年。いよいよ腹をくくる時が来たようぞ。」

「くっそお！」

赤井と通信が途絶した。あいつのことだろうから恐らく死にはしないだろうが、戦力としては見れなくなっている可能性が高い。ともかく今は目的を果たすのが先決だ。

基地はだいぶ混乱しており、兵士が先程から大量に東側に向かって走っていくのがわかる。所属不明勢力がどのような規模かはわからないが、かなり分が悪いのではないだろうか。すぐに鎮圧される可能性があるとは言え、施設全体が警戒態勢に移行したのは

確かだ。

私はミサイルサイロを抜け、その奥の倉庫へたどり着く。そこで壁の影に膝立ちで隠れる子供を発見した。私はすかさず背後につけ声をかける。

「少年。」

「うお！・・・つと、あんたか。」

「施設は混乱している。突入するなら今だろう。」

「この先に昇降機が。でもそこに兵士が2人立ってて近寄れねえんだ。」

「任せろ。」

「お、おい！殺すのは無しだぞ！」

バシユバシユ

私は壁から少しだけ乗り出し、ゴム弾を装填したシルバーボーラーで彼らの顔面を狙撃した。鼻っ面に直撃したゴム弾によって兵士は大した声を上げることなくその場に崩れ落ちた。

「安心しろ。気絶させたただけだ。・・・おそらくは。」

「まったく・・・もつと穏便なやり方はないのかよ。」



「ではその麻醉銃で眠らせるか？ 一発しか打てないその麻醉銃で。」

「・・・はっ、こつちの手の内は丸見えつてことね。」

~~~~~

『47。所属不明勢力はかなりの手練よ。人数は4人だけだけれど、配備されてた3個大隊の内、既に1個大隊が壊滅したわ。片っ端から兵士を撃ち殺していつてまつすぐコントロールルームに向かつてる。急がないと鉢合わせするわよ。』

~~~~~

「少年。先程の爆発を起こした勢力はかなりの手練らしい。しかもコントロールルームを目指しているようだ。」

「げっ。急がねえと！」

そのまま昇降機に乗って更に下を目指す。コントロールルームは地下4階にあるらしく、施設図によればそこまではほぼ一本道だ。昇降機に乗りながら少年と確認していると通信が入った。

「・・・つつ。ぼうや。47。聞こえるか。」

「赤井さん！」

「生きていたか。」

「ああ。ものの見事に狙撃された。愛用のライフルも銃身に花が咲いて使い物にならん。」

「狙撃で負けたの!?!」

「ああ。不甲斐ないことにな。」

「シルバードレットすら負かす腕前が混じってるってことか。厄介だな。」

「顔は見えなかったがかなりの手練なのは間違いない。でなければ滑り込んでる最中に800m先の狙撃手の銃身を打ち抜けたりはしない。」

「・・・私でも太刀打ちできなさそうだな。」

ドゴオオオオオオ!!!

話していると凄まじい轟音が施設内に響き渡った。先程の爆発などとは比べ物にならないくらい大きなものだ。

「何だ今の!？」

「坊や! 47! ミサイルだ! ミサイルが発射された!」

「何!？」

「とうとう撃ったか。」

~~~~~

『こちらでも2発の弾道ミサイルの発射を確認したわ。弾着予想は・・・アメリカ西海岸ね。予想死者数も同時に算出できた。死者数は概算で4000万から4500万人よ。これが着弾すれば間違はなく世界大戦ね。ちなみにアメリカの早期警戒衛星はその全てが現在オフラインになつてゐるわ。おそらくハッキングされたのね。』

~~~~~

「やべえ! 早く行かねえと!」

「赤井。安全なところまで退避しろ。後はこちらに任せるんだ。」

「わかった。死ぬなよ。」

「・・・運が悪ければな。」

昇降機が地下4階に到着し、すぐさま近くの物陰に隠れつつコントロールルームを指す。兵士が何人も行き来していたが、幸いにも気が付かれずに済んだ。しかし、すぐ上階で再び爆発音が響いてきた。その後連続した銃撃音も。いよいよ追いつかれつつある。私達は互いに目配せをしてコントロールルームに突入した。と言つてもすぐ近くの端末の影に隠れたため誰にも気が付かれては居ない。

「どうするのだ少年。」

「まずは司令官だ。・・・あいつだな。アイツを眠らせて・・・。」

ドガアアアン！

少年が時計型麻醉銃で司令官を撃とうとしたその時、凄まじい轟音とともに部屋の端の天井が崩れ落ちてきた。どうやら連中、上の階から直接コントロールルームに降りてくるつもりようだ。

瓦礫と土煙のさなかから弾丸が発射される。私は咄嗟に少年の首根っこを引つ掴んで後ろに下がった。そのまま彼らは部屋の中に待機していた兵士数十人をまたたく間に殲滅し、司令官も足を撃つて行動不能にしたのちにクリアリングを始めた。



達成も何も私は何もしていないが。彼らは手早く残りの端末に爆弾を仕掛けていつている。これは早い所ここを脱出しなければ爆発に巻き込まれる。

「少年。強行突破するぞ。」

「まじかよ……。」

私は彼らがこちらから目を話した隙に少年を抱えて元の扉から脱出を試みた。

「！コンタクト！」

ダダダ

チツ

「ぐっ！」

神速といえる速さでこちらの動きに気がついた彼らのうちの一人がこちらに発砲。私の左腕二の腕付近を弾が貫通した。

「おい、おっさん！」

「二手に分かれるぞ！とにかく走れ！」

少年を離すと、そのまま昇降機まで障害物を使って攪乱しつつ走る。しかしあの反応の速さと射撃の正確性は一体何者だ。グリーンベレーでもあそこまでではない。昇降機の近くまでこれたが、昇降機の入り口は通路から丸見えだ。私はシルバーボーラーで牽制を試みるが、まるで怯む様子がなく、むしろこちらの武器を射撃で弾き飛ばそうとしてくる始末だ。

「おっさん！突破口を開く！その隙に中に！」

「わかった。だがどうする気だ。」

「こいつをこんなところで使うとはね……。」

少年は腰のベルトの真ん中のつまみを回し、ボールを射出する。ボール射出ベルトであるが、サッカーボールで何をしようというのか。彼はそのままボールを奴らの方へ向かって蹴り出した。明後日の方向に飛んでいるため彼らは見向きもしていない。数秒後、ボールが炸裂した。

ドォーン！

「うおわ！」

「今！」

タタタツ

まさかボールが花火になるとはな。狭い室内で炸裂した花火はあたり一面に火花を撒き散らし、強烈な光で相手の目をくらませたようだ。その僅かな隙をつかって私達は昇降機に飛び乗って扉を締めた。昇降機が動き出す瞬間に扉を銃撃されたが、そのまま昇降機は上に登っていった。

「間一髪つてとこだな。」

「ああ……。もう二度とゴメンだこんなの。」

「同感だな。」

私はこの一息ついた時にもう一つの任務を思い出したのでこなししてしまうことにした。



「こんなのはいつ以来だろうか。松山以来か。」

「ああ、そうだな。あの時は警官総出で追ったのに捕まえられなかった・・・って、そーいやあの潜水艦！アレなんなんだよ！」

「企業秘密だ。」

「企業で。」

やはり松山のことも完璧に覚えている。私は更にカマをかけてみる。

「松山もそうだがあの事件の時は更に生きた心地がしなかった。お前もそうだったろう？」

「はっ、あの時は俺はお前らの施設で遠くから見守ってるだけだったけどな。でもヤバさではどっこいどっこいだよ。」

「そうか。」

実験体事件の事も完璧に覚えている。これは一体どういうことだろうか・・・。

~~~~~

『やはり工藤新一はI.C.Aのことを完全に覚えているわね。これは由々しき事態。すぐさま上級委員会で対策を練らないと・・・。ともかくこれで任務は達成よ。後は速やかにそこを脱出して頂戴。あの連中のことは今情報部が調べているわ。』

昇降機で地上に出た私達は待ち構えていた赤井のシボレーで施設を離れた。どうやら例の連中は地上に居た3個大隊を全滅させたようで、ミサイルが発射された時には既に地上に生きた人間は居なかったようだ。私は途中で降りしてもらい、彼らと別れた。愛車のアウディまで戻り、車に乗ってこの地域を脱出した。車を出した数分後、施設の方向から大きな爆発音が聞こえた。

〳〳〳3日後〳〳〳

~~~~~

『おはよう。47。傷は癒えたかしら?』

「まだ完全ではないが任務に支障はない程度には。」

『そう。よかった。ブルーやタバサも心配していたのよ?』

「そうか・・・。」

『さて、じゃあ報告よ。先の施設を壊滅させた謎の不明勢力。今現在も調査は継続中だけれど今の所所属は判明してないわ。』

「ICAの諜報能力を持つてしても見つけれられないのか?」

『ええそうよ。どこから来たのか、何の目的なのか。どこへ消えたのかも一切不明。』

「まるで幽霊だな。」

『・・・幽霊ねえ・・・。つい最近そんなやつを見かけた気がしないでもないけれど。』

「・・・。」

『ともかく、わかってることは、彼らの装備は西側基準の現代装備。それも特殊部隊のね。』

「ならばどこかの国の特殊部隊なのでは?」

『勿論調べたわ。グリーンベレー・スベツナズ・G I G N・S A S、モサドや利剣まで。』

でもどこにもそんな部隊は所属していなかった。少なくともあの世界では。』

「あの世界では……?」

『装備品のラインナップがSASに酷似していたわ。その点においてSASをくまなく重点捜査したけれど、何も見つからなかった。』

「ならばSASを真似たテロ組織か?」

『それにしても練度が違いすぎる。あの部隊はたった4人で数百人をももの40分で壊滅させたのよ。正規軍ではないとは言えそれなりに訓練を受けたフル装備のPMC数百人を。』

「ならば……一体何者だと言うんだ。」

『わかっていることがもう一つあるわ。』

「ほう?」

『あの4人の司令室での会話。断片的だけれど録音ができていたわ。』

『彼らの一人は確実に、 “キャプテン・プライス” と呼ばれていたわ。』

~~~~~ミッシェンコンプリート~~~~~

~~~~~

・「いい夢を」

【+3000】『10人以上を気絶させる。』

・「目潰し」

【+1000】『施設の監視カメラを破壊する。』

・「なりゆきの英雄」

【+5000】『ミサイルの着弾を阻止する。端末を操作してはいけない。』

・「忘れられない思い出」

【+3000】『工藤新一の記憶を確認する。』

## HITMAN 2 『鉄紺の疑惧』

『シドニーへようこそ。 47。』

『その目の前にある石はミセス・マクアリーの椅子と呼ばれてる幸運を呼ぶ石なんですって。任務前に座って見るかしら？ 湾を見て左側に見えるのが有名なオペラハウス。まあ今となっては残骸しか残ってはいないけれど。そして反対側に見えるのが目的地である。ポート・ナンヨウよ。』

『半島全体が基地になっていて、司令部は一番先端。入り口はもつと南になるわ。大きな造船施設もあつて、そこを艦娘用に改造したものを使用しているみたいね。』

『ターゲットはこの基地の工廠部分、つまり半島の南側半分のどこかに居ることが予想される。陸路で行くのが早いでしょうけど、外側から侵入するのは以外に難しいわよ。なにせこの基地以外で一番近い人のいる場所が700キロ南西のメルボルンにある泊地なのだから、人が外から陸路でやってくるということ自体がおかしいこと。潜入方法はよく吟味して頂戴。』

『幸運を祈っているわ。』



だ。しかし既に建設が完了していた栈橋はそのまま残り、その結果入渠ドックへと続く栈橋がやたら小綺麗でデザイン性の高いものになっている。

「それで？ どうやって侵入するのかしら？」

「まずは周囲を観察だ。侵入経路は意外なところに転がっているかもしれない。」

私達は、湾に沿って歩き始めた。元々公園だったのもあって一応申し訳程度には整備されていて、道も雑草が生えてきてはいるがまだレンガ畳は残っている。対岸の施設は主に工廠施設になっているが、ところどころに大きな倉庫のようなものもある。

「あれは……。」

「……ボートだな。」

少し先に行ったところに岸壁に引つかかっている小型の手こぎボートがあった。通常は湖などで使われるものだが、戦火の余波でどこからか流れてきたのかもしれない。見た所大した損傷はなく、オールも中に2本乗ったままだ。



「使えるんじゃない？アレに乗っていけば……。」

「いや、ここでは目立ちすぎる。」

ここから対岸へ渡ろうとした場合、港湾施設に直接乗り付ける形になる。工廠施設には換気のためなのか窓も多く、見られる危険性が高いと言える。しかし、少し離れた所に水路の一番奥の部分から伸びる護岸が見える。残骸から推測しておそらくボートの係留所だったようだ。あの護岸に一度渡り、タイミングを見て港湾施設に渡れば危険性は少ないだろう。

「一旦あそこへ行く。そこからタイミングを見て渡るぞ。」

「そうね。その方が良いけどどうやってあの護岸の対岸まで持つていくの？」

「乗るわけには行かないが……む。アレを使おう。」

公園内部にあつた廃材置き場のようになつていた場所に、太めのロープを見つけた。私は近寄つてそれを取ると、護岸に引つかかつていたボートにくくりつけ、引つ掛かりを取つた。そのまま水路沿いにロープを引つ張つて誘導していく。ときたま護岸にボートが衝突していたが、そこまで速い速度ではないので問題はないだろう。

私達はボートに乗り込み、一度ヨットハーバー跡へ向かう。もつとも近寄ってみてわかったが、ここはヨットハーバーというよりシヨッピングモールのようなところだったようだが。そのまま護岸に隠れつつ、施設の窓から誰も見ていないことを確認して静かに且つ急いで船を漕いで渡りきった。

渡った先は工廠施設の隣りにあった倉庫の裏だった。護岸はそれなりに広がったが、波打ち際に多くの瓦礫が散乱していたことから、護岸としては利用されておらず、あるのは元々あった建物の瓦礫のみだった。有刺鉄線すら無い申し訳程度のフェンスを乗り越え、私達は施設内に侵入した。

「む、47。南側から誰か来る。」

「一旦その車の裏に隠れる。」

「んー？何だこのボート・・・どっからか流れてきたのか？」

「ああ、そのボート見覚えがあるわ。確か対岸に引つかかっていたような。」

「ふうん？係留されてたのか？」

「いんや。どっかから流れてきたのがそこにたどり着いてたって感じだったな。」

「じゃあこいつも流れてきただけか・・・。提督には報告しなくていいよな？」

「いいんじゃない？めんどくさいし。」

アレは軽巡洋艦 天龍と軽空母 隼鷹だ。艦娘と思わぬところで接敵しかけた。そのままやり過ぎそうかと思つたが、そのままこちらに歩いてきそうなのを見てキュラソーが先手を打つた。

「こんにちは。」

「うお！こ、こんにちは。一体どこから・・・？」

「私は小梅さんに言われて最近ここに来たのだけれど、道がわからなくなってしまつて。小梅さんは今どこにいるかしら？」

「小梅さん・・・？誰だい？そいつは。」

「おま、覚えてねえのかよ・・・ってそーいや隼鷹はアイツが来た時は機動作戦中だったな。」

「ということはお前さんは知ってるのか？」

「ああ。あいつなら今日は入渠ドック増設の手伝いするって言ってたぜ。」

###情報を入手###

「ということは入渠ドックに居るのね。助かったわ。」

「送っていいこう、と言いたいところだがこつちも巡回警備中だからな。ルート外れると妙高さんにどやされちまう。」

「一人で行けるかい？」

「ええ、大丈夫よ。ありがとう。」

「おう、じゃあな！」

~~~~~

『ターゲットは入渠ドック増設作業に駆り出されてるらしいわね。ドック建造には結構な労力がかかるらしいけれど、周囲に人や艦娘が大勢いると思うから気をつけてね。』

~~~~~

「なかなか無茶をするな。」

「でも情報は手に入ったでしょう？」

「確かに。入渠ドックの位置は衛星映像で確認済みだ。行くぞ。」

私達は足早に倉庫群を抜けて入渠ドックへ向かった。入渠ドックは元々あつた乾

ドックを改造して使用しているらしい。そのため、入渠ドックは本部・通信施設・宿舍などの間に挟まれるようにして設置されている。しかも元々の乾ドックが大きいため、入渠ドックだけやたらゆったりと広く豪華になっている。現在、3箇所ある入渠ドックを4箇所に増やす工事を今行っているようだ。

建設現場まではそもそも人が居なかったり、瓦礫、資材、建設に使う重機などが所構わず置いてあり、楽に建設現場まで到達できた。何より侵入する者すらいなくなっているため監視カメラを含めた警備体制という点では今までのどの施設よりも手薄だ。何ならそこらのハイスクールのほうがまだ警備に気を使つてると言える。

ドックでは建設用のクレーンが動いていた。その下では艦娘が数人設計図とにらめっこしながら作業にあたっていた。土木作業員すら人員不足ということだろうか。また建設作業中の集団も離れたところにもう一団居た。

「二手に分かれましょう。私はあつちの集団を調査してくるわ。」  
「わかった。では私はこちらを。」

キュラソーは素早い身のこなしで資材の間をすり抜けながら集団に近寄って行った。私はこちらの集団のすぐ近くまで重機に隠れながら進み、耳をそばだてることにする。

「・・んー・・こりやどうしたもんかな？」

「どうするのよ？こつちを先に作ったらこつちが作りづらくなるわよ？」

「でもだからといってこつち先に作ったら今度はあつちが・・。」

「同時進行ですすめるしか無いんじゃないかしら？」

「人員が足りるかどうかわからないねえ・・。」

明石、大淀、夕張の三名が設計図と現場を見比べながら建設工程を話し合っているようだ。

「とりあえずできるところから先に進めて、後から同時進行で集中投入って感じにする？」

「そうね。とりあえずそろそろあつちの作業も終わっちゃいそうだし、次の指示出さないと。」

「じゃあボイラー室の拡張作業を先にやっちゃいましょう。」

「賛成。それだと資材は・・クレーンでもう一回運ばないとね。」

「じゃあ大淀。小梅さん呼んできて。どの資材を運ぶかのチェックしてもらわないと。」

#####

「わかったわ。クレーンは誰が動かすの？」

「・・・その時その場に居た適当な人に任せるってことで！」

「適当ねえ・・・。」

~~~~~

『建設現場では資材をクレーンで乾ドック内部に入れる作業をするようね。そしてその作業を側でチェックするのがターゲット。これはもう彼女の作業を手伝ってあげるしか無いんじゃないかしら？』

~~~~~

大淀が別の方向に走り去り、明石と夕張がそれぞれ別々の作業現場へ出向いていった。同時にキュラソーが戻ってきた。

「向こうの子たちは色々話してたわよ。ターゲットはどうやら基地内では色々噂が立つ

てるみたいね。」

「噂？」

「深海棲艦の回し者という的を得ているものから、大本營の監査官だとか、提督の隠し子説、果ては人類を滅ぼしに来たエイリアンとも。」

「深海棲艦もある意味エイリアンのようなものだと思うがな。」

「あとそのクレーンについても話していたわよ。下方方面の視界が悪くて誰も乗りたがらないんですって。そのせいかわからないけれど、今日クレーンを操縦する予定だった操縦手が無断で欠席しているらしいわ。」

「それは好都合だな。」

「ふうん？」

「私はこれからクレーン操縦に志願する。ターゲットが資材搬入をチェックするようだから、お前がそれを見て誘導してくれ。」

「ふん。資材でぐしゃつと行くわけね。了解。」

キュラソーは足早にターゲットを探しに、私は近くの作業小屋を目指した。作業小屋の扉は鍵がかかっていたが、簡単な錠前なのでロックピックで簡単に解錠できた。室内の壁には作業服一式とヘルメットが置いてある。私は素早くそれらに着替えると、ク





立派な深海棲艦よ。我々が把握した情報では新型の艦級、“音測ヒ級”と言うらしいわ。おそらく音響測定艦が元なのでしょうね。深海棲艦の音響測定艦は、忍び寄る死神の足音は探知できるのかしらね?』

~~~~~

軽巡大淀がターゲットである小梅 雨と話している。大淀は泊地内でもまとめ役と言っている地位にいる艦娘。できることならば目にとまるようなことはしたくない。ここはしばらく待ってターゲットが一人になるのを待つ一手だ。

「それじゃあ、小梅さん。よろしくおねがいますね。」

「了解しました!」

話が終わり、建設現場の方に駆け出し始めたターゲット。その後をつけて、資材置き場にたどり着くかどうかというところで声をかけて呼び止める。

「小梅さん、ですか?」

「え？あ、はい。そうですね？」

「良かった見つかった。今回の資材搬入に際してチェックのお手伝いを仰せつかった者です。」

「そうですね？そんな話は大淀さんからは聞いてませんが……。」

「あら？大淀さんにも伝えると提督はおっしゃっていたのですが……どこかで行き違いがあったようですね。」

「提督の許可は取られているんですね。じゃあ報告は終わった後でもいいですかね。」

「そうですね。クレーン操縦者の方は先にクレーンに登って準備しているそうです。」

「話が早いですね。早速仕事を始めましょう！」

「ええ。」

私は資材置き場の端に近い位置で、ターゲットは運ばれる資材のすぐ近くでチェックリストにチェックを入れつつ資材搬入を行う。ターゲットは資材置き場の作業台に置かれていた無線機を使ってクレーン操縦者、47にテキパキと指示を送り始める。

「クレーン操縦者さん、聞こえますか！」

「聞こえている。」

「では今から作業を始めますので指示された資材の上にフックをもってきてください！」

「了解した。」

47が操縦するクレーンが動き出す。ゆっくりとした動きではあるが、クレーン自体がとても大きいため、先端部の速度はかなりのものになっている。ガントリークレーン方式のため、ドック建設予定地のすぐ横に置かれた資材を釣り上げてはドック内においていく作業を繰り返すことになる。クレーンが動き出すと、ICAの専用回線の方から通信が来た。

「キュラソー、6番目のH鋼でやるぞ。準備しろ。」

「了解。」

5番目のステンレス板を運び終わると、次の資材、4本の長さ15mほどのH鋼を運ぶ。重量にして軽く見積もっても10トンはある。直撃すればひとたまりもないはずだ。しかし相手は深海棲艦。念には念を入れるために私は彼女の側に近寄る。

「はい、じゃあ次はそのH鋼を17番ブロックに。」

「了解。」

ゴロゴロゴロゴロ

「・・・ん？そっちは19番ブロックですよ？」

「おっと間違えてしまった。済まない。すぐに戻る。」

ピッ

ガコン！

「え？」

ガシャーン!!

釣り上げられた鋼材の金具が空中で外れ、ものの見事にターゲットの頭上に降り注いだ。完全な不意打ちだったため深海棲艦といえど逃げることは出来なかったようだ。それが音響測定艦ということで機動力はないのかもしれない。私は被害を確認するふりをつつターゲットの居た場所に駆けつける。

「うぐぐぐ・・・一体何が・・・」

「あら、やっぱり生きてたのね。」

「えっ……どういう……。早く助けを……。」

「こんなものが直撃して死なないってことは深海棲艦って話は本当みたいね。」

「!!」

「まあ想定はしていたわ。そのために私が居るのだから。」

チャキ

「……愚かな。ただの銃で殺せるものか。」

「残念。これは対深海棲艦用の特殊徹甲弾よ。貫通すると中で弾がバラバラに分裂するんですって。」

「!!」

ダイジョウブカー！ナニガアッター！

「もうちよつとお話したかったけれど潮時ね。それじゃ。」

「……くつそお！」

パシユン

~~~~~



路地裏や瓦礫資材重機の間を縫うようにして走っていた。建設現場からだいぶん離れたのでもう急ぐ必要はない。周囲に気を配りながら進んでいく。しかし、角を曲がった直後……。

ドンツ

「きゃー！」

「おっと、済まない。急いでいたもので。怪我は？」

「パズディプロブレム。大丈夫ですわ。」

「良かった。それでは。」

「……あの方、どこかで見たような……？」

アクシデントはあったものの、無事に停泊所についた。小型の飛行艇が止まっていたのでそれに乗り込む。多少古い年式の飛行艇だがそれが功を奏した。難なく電子機器をいじりエンジンを掛けることに成功した。そのまま飛行艇を操縦して、この地域を脱出した。



~~~~~5時間後~~~~~  
~~~~~

「陸奥、龍驤。犯人の目星はついたのか？」

「犯人つて。まだ殺人かどうかも確定しとらんやで？」

「そうよ提督。もしかしたら不慮の事故だったのかも。」

「事故なら何故クレーン操縦士が居ないんだ？」

「それは・・・責任を追求されるのが嫌で逃げたとか？」

「まあそれこそ、こんな廃墟しかない土地でどこに逃げるんやちゆう話ではあるんやけどな。」

「ともかく、事故か殺人かは検死の報告次第か。」

「さつきやつと鋼材を取っ払えたからな。もうすぐやろ。」

「ボンジュール、検死の結果を持ってきました。」

「おおテスト。ご苦労、待ちわびたぞ。」

「どうぞ。」

「・・・むう。やはり殺人事件のようだな。」

「うちにも見せてや。・・・うわあ、こりやダムダム弾とかいうやつやろ？えげつないわあ。」

「今はどこも製造はしてないはずよね。一体どこから・・・。」

「あら？アーミラウ？これはなんですか？」

「ん？ああ、それは作業小屋に放置されていた服だよ・・・待てよ？もしかしてそれが犯人の！」

「かもしれないわね！至急鑑識に回すわ！」

バツ

カランカラン

「あら？なにか落ちましたよ・・・」

バチツ！

「キヤア！」

「テスト！」

「コマちゃん！大丈夫?!」

「え、ええ・・・ちよつと痺れただけ・・・あつ。」

「ど、どしたん？」



## HITMAN 2 『相思相愛』

『迷いの竹林へようこそ。 47。』

『この竹林は、大昔に大津波によつて流されてきたという言い伝えがあるんですつて。昼間でも薄暗く、また湿気が多いからなのか常時霧が立ち込めていて視界が悪い。さらに竹の成長速度の速さも相まって、足を踏み入れるたびに景色や道が変わってしまうことから、“迷いの竹林”と呼ばれているわ。人間はおろか、妖精や妖怪ですら迷うことがあるみたいね。』

『でも特に特殊な術がかけられているわけでもないただの視界不良の広大な竹林と云うだけだから、GPSを持っているあなたは迷うことはないはずよ。本来は最奥にある永遠亭という家の住人くらいしか正しい道順では抜けられないらしいけどね。』

『相手はかなり強敵よ。戦闘能力なら今まで戦ってきた中でも随一。十分に気をつけて頂戴。幸運を祈ってるわ。』

~~~~~

私は今、竹林の中を歩いている。試しに永遠亭の方向へ向かって何も見ずに歩いてみているが、まだ歩き始めて30分と経っていないがどうやら迷ったようだ。やはり迷いの竹林と言うだけはある。既に右も左も同じような竹林に囲まれており、縦横無尽に生い茂る竹は行く手を阻みつつ、方向感覚を絶妙に狂わせる。

私はとりあえず一旦GPSを見ることにした。幸いGPSを見ることにしたの障害になるような磁気を発する岩石などはなく、私の現在位置を正確に表示してくれた。それによると、私は真つすぐ進んでいたつもりだったが、地図上では東方向に2キロほどズレてしまっている。これではたどり着くことは不可能だろう。私はGPSを頼りにはずは元の最短ルートへ戻ることにした。

しばらく歩き、そろそろルート上に戻ろうかというところで前方に人影が見えた。人影は段々と濃くなっていき、霧の中から姿を表した。現れたのは頭に耳の生えた子供だった。

「あれ？おじさん人間？」

「君は・・・？」

「私は因幡てゐ。おじさんもしかして迷い人？」

「・・・ああ。永遠亭に行きたいのだが。」

「案内人もなしにかい？おじさん結構無茶するねえ。よしわかった。私が案内してあげるよ。」

「いいのか？」

「いいよ。お師匠のお客つぽいし。」

「ありがとう。この道はみんな通る道なのか？」

「んー、まあ私や里の蓬莱人はよく通るかな。」

#####

「そうなのか。それ以外に通ることは？」

「めったに無いね。ああでも鈴仙は里に薬売りに行く時にたまに通るかな。まあもつぱら空飛んじやうけど。」

「そうなのか。」

~~~~~

『里の蓬莱人というのはおそらく藤原妹紅のことね。彼女が通るということはここで待ち伏せていれば彼女に会えるということ。向こうからやってくるのを待つのも一手



することはできる、だがおそらく駄賃はもらえないと思うがな。私は永遠亭の外壁に沿って侵入できそうなところがなかった。裏口などは見当たらなかったが、塀自体は竹製であり高さもそれほどではないため乗り越えることはできるだろう。一応常備している手鏡で塀の向こう側を確認した後、一気に乗り越えた。乗り越えた瞬間に魔法検知妨害装置が動き出したところから見て、見かけによらず防犯対策は万全のようだ。

屋敷は純粋な日本家屋で、一見すると防犯意識は低いように見えるが、至るところにトラップが仕掛けられていてもおかしくない雰囲気はある。私はできる限り慎重にかつ誰にも見つからないように移動した。念の為靴は脱いで縁側の下に隠し、忍び足で室内にはいる。まだ侵入が発覚していないためか各種防犯用の装置は作動していないようだ。

いくつかの部屋に聞き耳を立てた所、一つの部屋の中から何やら電子音が聞こえてくる。私は慎重に扉を開けると……。

「ちよ?!そこでそれはチートでしょ!?!」

「ああ!あんたはそこじゃない!あっちの敵倒しなさいよ!」

「ああ!やられた!だから言ったじゃないの!あんた馬鹿でしょ!?!」



・・・・ターゲットと思わしき女性が茶と煎餅を手に寝っ転がりながらテレビゲームに興じていた。

~~~~~

『アレがターゲットである、蓬萊山輝夜よ。信じられないかもしれないけれど一応月のお姫様らしいわ。傍目から見るとただのだからけた現代人にしかみえないけれどね。』

~~~~~

まあ、ターゲットがどういう人物かは元より関係無いが、こういう相手は初めてだ。だがゲームに熱中しててこちらが覗いていることにも気がついていないのには非常にやりやすいと言える。後はどうやって暗殺するか。背後から首を絞めるにしても術や体術で抵抗される可能性が高い。やはりこいつを使うしかなさそうだ。

私は懐から致死毒入りの小瓶を1つ取り出した。この小瓶は形を香水の瓶に似せており、実際香水の容器としても使用可能だ。だが今回は中には入っているのは香水ではなく特製の神経毒だ。

「あー！もう！なんでもうまく行かないのよお!!」ジタバタ

ゲームの調子が悪いのか軽い痙攣を起こしている。床をバンバン叩きつけて振動が起きているのでその振動に乗じて彼女の近くに香水の瓶を転がして襖を閉めた。

「ううう・・・まったくもう・・・ってあら？こんなにあつたかしら？」

「香水・・・？どんなのだったかしら・・・。気分転換が必要ね。ちよつと試してみましよう。」

プシュ

「んー？なんの匂いもしないじゃない・・・足りないのかしら？」

プシュプシュプシュ

「あら・・・息が・・・！なに・・・これ・・・。」

バタツ

~~~~~

『ターゲットダウン。とりあえず蓬萊山輝夜は暗殺できたわね。後は藤原妹紅よ。蓬萊山輝夜の方は直ぐにリザレクション、生き返るはずだから早めにその場を脱出したほうがいいわね。』

~~~~~

私は隣の部屋にあつた紙を一枚拝借し、簡単に礼を書くとその襖の隙間から部屋の中に滑り込ませる。その後は比較的急いで屋敷の外に出る。まだ誰にも気が付かれては居ないため、それ用の術も追つてもない。屋敷のすぐ横におそらく庭の手入れ用の用具入れを発見した。扉が空いており、中のこぎりがあるのが見えた。竹を切る時に使えるかもしれないので拝借していくことにする。そのまま最初に乗り越えた扉を乗り越え、竹林にはいる。

竹林の奥に入り、建物が見えなくなったのを確認すると、今度は藤原妹紅の暗殺にシフトすることにする。まずはよく通ると聞いた道、GPSのマーカールの位置へ向かった。

マーカールの位置につくまでにプランを考える。シルバーボーラーで狙撃するのも出

来なくはないだろうが、その後復活した時にこちらの位置が悟られやすくなってしま  
う。幸いにして致死毒の香水瓶はまだ残っている。これを使ってトラップを仕掛ける  
ことにした。

まず手近な竹をのこぎりで伐採。割ったり切断したり組み合わせたりなどして、簡易  
的ではあるが感圧板式のブービートラップを制作した。感圧板を踏むとロックが外れ、  
竹のしなりを利用してバネのように先端を鋭利にした竹が横から襲いかかるとい  
う法である。だがこれだけではただ傷を負わせるくらいしか出来ないだろう。そこでこ  
いつの出番だ。

GPSのマーカの位置まで来た。周りには誰も居ないが、地面には近くまでこない  
とわからない程度にうっすらとではあるが獣道が出来ているのがわかる。その獣道に  
沿って先程のブービートラップをセットする。あとはターゲットが来てくれるのを待  
つばかり。そのまま少し離れて待機することにする。

10分ほどした後、竹林の外の方向から誰かが歩いてきた。先程の因幡てるとは違  
うもつと長身の女性だ。

「ふんふん♪今日はたくさん売れたなあ・・・。」

・・・まずい。ブレザーの制服のような格好と長いウサギ耳。明らかに藤原妹紅ではない。別の人物だ。このままで要らぬ被害が発生してしまうだろう。私は呼び止めようと身を乗り出そうとした瞬間気がついた。こんな竹林のど真ん中で偶然を装って出会うのはあまりにも不自然だ。十中八九なにかしていたと思われる。どうしたものかと思索した結果、私はシルバーボーラーで仕掛けたブルービートラップの近くの地面を撃った。

パシユン

ガサツ

「ん？今なにか音がしたよう・・・って！なにこれ!？」

「危ないなあもう・・・。よいしょつと。」ガシヤ

「これでよしつと。こんなものを仕掛けるなんて、またてゐね！戻ったら覚悟しときなさいよ！」

スタスタスタ：

先ほど出会った因幡てゐは相当ないたずら好きと認識されているようだ。あのトラップは完全に殺傷用なのでいたずらどころでは済まないと思うのだが。ともかく私

は彼女が過ぎ去って見えなくなったのを確認した後、トラップを仕掛け直し、撃った弾丸も念の為回収した。

また隠れ始めてさらに10分ほど経過した時、また外側から人影が近づいてきた。先程とあまり変わらない背丈ではあるが、今回は髪の毛が白髪であり、赤い袴のような格好をした人物だ。

~~~~~

『アレが藤原妹紅よ。炎の使い手を巧みに操って相手を燃やし尽くすのを得意としているみたいね。あなたは会ったことはないかもしれないけれど、シルバーたちは一度会っているわ。ICAは一応記憶処理は施したけれど、依頼を行ってきたということは記憶処理が不完全である可能性が高い。接触はできる限り避けてちょうだいね。』

~~~~~

今度はシルバーボーラーを撃つたりせず、そのまま成り行きを見守る。地面は竹の葉の落ち葉で覆われており、よほどのことがなければ計画通りに事が運ぶはずである。彼

女はそのまま道を少しにやけた顔で進んできた。

「ふふふ．．．私が送り込んだ暗殺者によつて今頃アイツは．．．ククク。」

「でもあの町人、なんだつて凄腕暗殺者の連絡先なんか知つてたんだらうなあ．．．」

カチツ

ヒュン

「むー」 シュツ！

バアン！ ガシャン！

「ふん、輝夜め。こんな初歩的なトラップで私を殺そうなど．．．」

「．．．うっ!?なんだこれ．．．体が．．．うぐ．．．」

バタツ

~~~~~

『ターゲットの死亡を確認。とりあえず任務は完了ね。お疲れ様。彼女が復活する前に

撤退して頂戴。』

~~~~~





「ハイハイ二人共。私に言うことあるわよね？」

「ありがとう。永琳。」

「ありがとう。永琳。」

「よろしい。私がすぐに駆けつけなかったら他の因幡達にも被害が出てましたよ。」

「で、でも私は永琳がすぐに駆けつけてくれたから3回死んだだけですんだし！」

「うぐ！」

「妹紅ちゃんは？何回死んだんだっけ？」

「・・・6回。」

「あらあら？」

「仕方ないだろ！毒はあたりに滞留してたし、鈴仙がくるまで動けなかったんだから！」

「でも良かったわ。見つけたのが鈴仙で。ワーハクタクでもあの毒にやられたらひとた

まりもなかったわよ。」

「そんな強力な毒だったの？」

「ええ。私も一度死にかけましたからね。」

「そんな者どこで手に入れたんだ一体・・・河童は薬物作らないし・・・。」

「永遠亭でもあんな毒は置いていないわ。」

「となると・・・あいつね。」

「……あいつか……」

「……」

「(八雲紫はそんな面倒なことではない。ならば誰が……。ちよつと調べてみましょうか。)」

「とりあえず私が3回。妹紅が6回死んだんだから今回は私の勝ちね!」

「う〜! くつそお!」

「(……まずはこの二人にお灸をすえるのが先ね。あとてゐも。)」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~
 ~~~~~

・「幸運の白兔」

【+1000】『因幡てゐに会う。』

・「セルフ人体実験」

【+5000】『ターゲットに自ら毒を使用させて暗殺する。』

・「つくつてワクワク」

【+3000】『ブービートラップを作成する。』

・「透明化の秘薬」

【+3000】『ターゲット二人に存在を検知されない。』



「失礼いたします。チケットを拝見します。」

「はいどうぞ。」スッ

「・・・確かに。ようこそおいで下さいました。楽しいひと時を。」

私達は正門から堂々とチケットを渡して会場内に侵入した。至るところに人がごつた返っていて、ポケモンを出すことすらままならなそう。

「さて、これからどうしましょうか?」

「まずはターゲット2人を見つけよう。どこにどういう状況で居るのかくらいわからな  
いと。」

「そうね。・・・そういえば正確な名前、わかった?」

「ああ・・・、男のほうがヴィクター・ノビコフ、女のほうがダリア・マーゴリスだね。」

「まったく・・・ターゲットの名前くらい正確に伝えなさいよね、あのポンコツ・・・。」  
「とりあえずターゲットは二人。僕らも二人なんだ。二手に分かれてそれぞれターゲット  
トをやるのが良いと思う。」

「そうね。片方を葬った後にもう片方に感づかれたらまずいから手早くやらないと。」

「じゃあどつちがどつちをやる？」

「私はあのノビコフとかいうオヤジをやるわ。シルバーは女の方をお願い。」

「了解。」

お互いに目配せをして私はそのまま正面から会場の中へ、シルバーは中庭の方へ向かっていった。

くシルバー side く

まずはダリア・マーゴリスの居る上層階へ向かう方法を考えなければならぬ。

正面向かって右側の中庭に入る。右側の駐車スペースからの侵入を試みるが・・・。

「おっと、にいちゃん。すまんがここから先は立ち入りできないんだ。」

駐車スペースの警備員に止められてしまった。柵もなにもないので強行突破自体は可能だが、変に騒ぎを起こすのはまずい。だけどおとなしく引き下がるわけにも行かぬ

いので中庭の中に入り込んで迂回できないか探っていく。．．．っと、車の近くでボディーガードと思われる二人が話しているのがみえる。彼らの裏の生け垣に回り込み会話を聞いてみることにした。

「ノビコフって男は天才だな。パピリオンで秘密の取引をするんだって？ 相手は？」

「FSBのマックスデッカーとか言う男だ。冷戦時代のベテランだとさ。」

###アプローチ発見###

「ショーの合間に時間をとるなんてよほど重要な取引なんだな？」

~~~~~

『あのおっさん、FSB?とかいうとこのエージェントの“マックスなんとか”ってやつと会う約束になってるみてえだな。これはチャンスだ。密会現場ついたら誰も居ないのがセオリーだからな!。暗殺にはもってこいだぜ!』

~~~~~

なるほど。喧騒に紛れてこつちも聞取引つてことか。姉さんに伝えるべき情報だなこれは。

「姉さん。聞こえる？」

「どうしたの？情報？」

「ああ。マックスデッカーというFSBのエージェントがノビコフと合う約束をしているらしい。」

「FSBのエージェント相手とはまたまた……。どこで会うかはわからないかしら？」

「そこまでは。調べようか？」

「いいえ、こつちで調べてみるわ。シルバーは女の方に注力して。」

「わかった。」

ひとまず会話の内容は置いておくとして、内部に侵入する必要がある。中庭を更に奥へと進むと、柵の向こう側に小さな物置小屋があった。物置小屋は柵のすぐ向こう側だし、警備員はみんな客が集まっている方を向いていてこちらを見ていない。これはチャンスだね。



「でてこい、ドンカラス。」カア!

ドンカラスを使つて柵を素早く越えたと即座に小屋に張り付く。と、小屋の中で物音がした。裏手に回つて空いている窓から中を覗き込む。すると、中にはサボリなのか休憩なのか、ウエイターが一人タバコを吸つていた。・・・此処から先ウエイターの格好の方がやりやすいかもしれない。ちょうどよくあのウエイターの背丈や体型は自分とよく似ている。

「出てこい、マニニューラ」ニユラ!

「マニニューラ、その箱の影に隠れてろ。おびき出したら後ろから “だましようち” だ。」ニユラ!

マニニューラは言われたとおりゴミ箱の後ろのダンボールの中へ巧妙に隠れた。隠れるのを見届けた後、窓のすぐ近くにあった鉄パイプを適当にその場に放り投げた。

カランカラン

「ん? 誰か居るのか?」

中のウェイターが不審な物音に気が付き、正面扉を出て大回りで小屋の後ろへやってきた。地面に転がる鉄パイプを発見し、不思議そうに眺めている。その瞬間、ダンボールの中から躍り出てきたマニョーラがウェイターの首元へ向かってだましようちを敢行した。

ニョーラ！ガツ

「うぐっ!？」

バタツ

ガチャン

「よくやったぞ。マニョーラ。」

ニョーラ!…ウニャ!?

「ん?どうしたマニョーラ…。」

「…ああ、そういうことか。とりあえずボールにもどれ。その中は大丈夫だから。」  
バ  
シュー

どうやら隠れるところの選択をミスったせいでマニョーラが近寄りかかったよう

だ。今後はもうちょっと考えてやる必要がありそうだ。ともかく、ウェイターを気絶させることに成功したので服を借りる。身ぐるみを剥いだウェイターは軽く拘束して近くのゴミ箱に隠しておく。今から俺はフアッションショーのウェイターだ。

そのまま表にでる。小屋のそばに立っていた警備員は少し不思議そうな顔をしたが、こちらが気にせず近づいたので軽く挨拶を交わした程度ですんなりと中に侵入できた。駐車場には様々な高級車が並んでいた。その高級車の脇をすり抜け、そのまま更に奥にある会場のラウンジへと足を踏み入れた。

「ミスター・ノビコフ。デッカーです。ショー会場につきましたよ。」

おっと、ラウンジの端で男がターゲットと電話で話している。デッカーと言っていたところから見ておそらくこいつがマックス・デッカーだ。咄嗟に近くの階段の近くで立ち止まり、その会話に聞き耳を立てることにした。

「ラウンジで、了解です。」ピツ

「・・・問題でも?」

「ノビコフは忙しいらしい。手が空いたら手下のボディガードが案内するんだとさ。」

「場所は言っていましたか？」

「パピリオン。北西にある庭だ。人目を避けられるらしい。」

###情報を入力###

~~~~~

『ラウンジでデッカーがノビコフの護衛を待っているみたいだぜ。デッカーを待ち合わせの場所まで案内するんだってよ。』

~~~~~

これはだいぶ都合が良い。先程からちらほら見ている護衛と思われる黒服男たちは、それぞれアサルトライフルを装備している重武装の護衛達。背丈も人種もバラバラなので自分が変装したとしてもばれないだろう。早速姉さんに連絡して・・・。

「あら？シルバー？」

「！姉さん？」

後ろから不意に声をかけられた。見るとそこにはシャンパングラスを持った姉さんが居た。

「何してんのよそんなところで。てかその格好は？」

「姉さんこそ。変装もせずになんな所に。」

「あら。ここは招待状持っているならドレスコードさえ守っていればどんな服装でもOKなのよ？ しらなかつたの？」

「な・・・なんだって・・・。」

じゃあわざわざ裏から回ってウェイター気絶させて着替える必要なんてなかったじゃないか。・・・い、いや。ウェイターの服装は客でも入れないところにはいるのに有効だし。前向きに捉えよう。

「それよりも姉さん。ちよつと。」

「ん、なになに。」

先程聞いた情報と自分の意見を合わせて姉さんに小声で伝える。プランとしては、自

分が護衛の格好でデッカーとノビコフを北西の庭まで誘導して、そこで待ち伏せしていた姉さんがノビコフを仕留めるといふ寸法だ。

「わかったわ。でもマーゴリスのほうはどうするのよ?」

「中庭に案内したらすぐに最上階に上がるよ。」

「中庭にも警備員は居るのよ。気をつけてね。」

「わかってるさ。」

お互いに目配せをした後、それぞれ行動を開始した。とりあえずそのままラウンジを通り抜け、北側の庭園に抜ける。庭園はほとんど客がおらず、中央にはヘリコプターが止まっているところから要人用のスペースなのだろう。

そのすぐ脇の生け垣の向こう側に、2人のボディガードがうろついているのを発見した。念の為誰にも見られないように生け垣の向こう側の庭園、北東部分の庭園内に身を隠す。一人は庭園の端をウロウロしていて、もうひとりには庭園の南側にある小屋の周囲も巡回ルートに入っているようで時折姿が見えなくなる。

「マニキュラ、また頼む。」ボウン ニュラ!

今度は純粹にタイミングを見計らって北側に居る一人を辻斬りのように気絶させに行くことにする。南側の奴が踵を返し、小屋に向かって歩き始める。その瞬間、セーヌ川の方を向いている北側のやつの後ろから目にも留まらぬ速さでマニユーラの“でんこうせつか”で攻撃が行われた。

シユン ドゴオ

「うぐっー」ドサッ

「よくやったぞマニユーラ。」

気絶させたボディガードを素早く近くの木箱に隠し、そのままそこでボディガードの服を借りた。落としていたライフルも拾い上げ、ついでにそいつがかけていたサンングラスも借りていく。そこまで済んだところで南側の巡回が戻ってきた。ヘリポートになっっている中庭中央を通りつつ、ラウンジへと戻った。

くブルー side く

シルバーはいい感じにノビコフをおびき出せそうなので、私はひとまず北西のパピリオンとやらにはいる方法を探っていた。

ちなみに今居る北西の庭のすぐ南側のエリアは立入禁止エリアになっているので、ドレスのままの私は隠密行動中。何回か見つかりかけたけど、その度にメタちゃんのおかげで難を逃れている。

北西の庭園は周りを高い金属の柵に囲まれていて、2つある入口のうち一つは閉まっている。もう一つは開いているけど入り口にボディガードが警備していて近づけやしない。さてどうしましょうか……。

「思案しているとふと横を流れるセーヌ川が目に入った。私はあることを思いつき、セーヌ川に身を乗り出して庭園の方を見る。……やっぱり。庭園の川に面した箇所には柵はないみたいね。そういうことなら！」

「でてきて、ぷりり。」プリー

「川辺にそって庭園に侵入するわよ。念の為メタちゃんも。私達をできる限りでいいから隠して。」

流石に川の上を移動する物体で適当なのが見つからず、妥協案として全体を護岸と木





『アレがノビコフってヤローだ。この紙によると、サンギーヌのオーナーでI A G Oの首謀者だそうだ。すげえ経歴だな。』

~~~~~

東屋の中央で秘密の会合が始まる。さあ、ショータイムと行きましょう。こつそりと庭木を隠れ蓑に東屋の近くに近寄った。

「ぷりり。うたう」よ。あの東屋周辺にいる連中まとめてね。」プリ！

プーププープープリー

「んお、なんだ・・・なんだか眠く・・・。」

「な、なん・・・だ・・・。」

ドサツドサツ

「やーりい！あとは・・・。」

ゴキヤツ

「これでよしつと。一応水葬してあげましょうか。」

~~~~~



似たようなことはやっていたため特に問題にはならない。問題なのは今のこの格好だ。さてどうしたものか……。

コツコツコツ

外から誰かが歩いてくる音がする。咄嗟に部屋の中を見渡すと、窓の近くにロッカーがあった。急いで窓のカーテンを閉め、ロッカーの中に入り込む。

ガチャ

「ふん、ふん、ふん……つと。」

入ってきたのはウェイターだ。青い服を着ているところから見てもこの上階担当だろう。そのまま通り過ぎようとしたので静かにロッカーから出ると、そのまま後ろから羽交い締めにして首を絞めて気絶させた。

服を交換してウェイターはロッカーへ。自分はそのまま階段のあるフロアへ出た。事前に調べてあった見取り図によると、このすぐ脇の扉が屋根裏に続いている。扉の前には別のウェイターが居たが、目を離している隙に素早く扉を開けて中にはいった。

屋根裏に來た理由は、中央の吹き抜けを挟んですぐとなりがダリア・マーゴリスの私室になっているからだ。周囲に監視の目がないのを確認しつつ、吹き抜けを懸垂で伝い、一旦マーゴリスの私室の隣のバスルームに入り込んだ。ここまで来てしまえばあとはもう相手がやってくるのを待っただけだ。ターゲットがやってくる前に部屋の中にいるボディガードを片付けなければならないな。

「でてこい。オーダーイル。」

オーダーイルを脇に控えさせ、洗面台の脇においてあったハサミを手取る。扉を少しだけ空けて、ボディガードとは反対の部屋の隅に向かってハサミを放り投げた。音に気がついたボディガードは首を傾げながら扉の前を横切つてハサミの方へ向かおうとしている。

「今だー!」ガチャ

ゴガアアバシン!

「うぐっ!?!」

ドサツ

すかさず扉を開け、オーダイルのなんの技でもないただのパンチがボディガードに炸裂した。一撃で昏倒したボディガードをそのまま私室のロッカーの中に隠す。ハサミを回収して再びバスルームでターゲットを待つことにする。

しばらくして、ターゲットを含む2人が隣の私室に入ってきた。一人余計だ。一人こっちのバスルームにおびき寄せて倒してしまふ必要があるな。

バスルームの洗面台の上にラジオを見つけた。音量をMAXにしてラジオを付ける。大きな音でラジオが流れ始めたのを不審に思って、ターゲットではない付き人の方がラジオを消しに……。

「何なのよ一体。」

「わからん、どうやらラジオが勝手についたみたいだ。」

……ターゲットの方まで一緒に来てしまった。仕方ない。こうなったらスピード勝負だ。

ガバッ

「むぐう!?!」

ゴガア! ドガツ!

「ぐわ!」

「むー!」

「これで終いだ。」

ゴキヤ

後ろからついてきたダリアマーゴリスを羽交い締めにしてそのまま首を折る。もうひとりの方は同時にオーダイルがパンチを食らわせて気絶させた。なんとか大した音も出ずにことが済ませられた。

~~~~~

『いい仕事だぜシルバー。ちよつとあぶなかつたけどな。これでターゲットの二人はどつちも殺せた。後は脱出するだけだ! 早いとこずらかろうぜ!』

~~~~~

2人共、つてことは姉さんの方はもう終わってたのか。待たせることになっちゃった

な。先程気絶させておいたボディガードの服を借りて一旦部屋の外へ出た。ウエイターの服を借りた部屋まで戻り、赤いウエイターの服。つまりは下階のウエイターの服に着替えるとそのままベランダに出た。ベランダから外壁を懸垂で伝い、配管を使って1階まで降りた。ここまですぐに帰ればもうこつちのものだ。

「遅かったわね。」

「?!と姉さんか。脅かさないですよ。」

「ごめんごめん。」

「ここまですぐに帰れたね?」

「トイレに入ったときに上のオークションの招待券を見つけてね。それで通してもらったのよ。」

「そんなところに招待券があったのか。とりあえず、目標は達成できたから脱出しようか。」

「そうね。・・・あ。そうだ。」

「?」

「どうせならド派手にかつ優雅に帰りましょうか!」

「騒ぎを起こすのはまずいんじゃない?」

「大丈夫よ!いい考えがあるわ!」



そういうと姉さんは出口とは反対方向の北の庭園に向かって進み始めた。慌ててその後を追う。隠れながらセーヌ川の近くまで来ると、姉さんは中央のヘリポートに後ろから侵入していった。

「ちよ、まさか……。」

「そう。そのまさかよ！」

姉さんはヘリコプターの近くにいるボディガードに気が付かれないように扉を開けた。中には操縦士がひとりいるだけ。姉さんは手際よくその首筋に手刀を食らわせて気絶させると、扉から外へ放り出した。そのまま手際よくエンジンを始動させ、離陸体制に入った。外のボディガードがいきなり動き出したヘリコプターを不審そうに見ているが、このヘリコプターは要人用だからなのか全面スモークガラスになっていて、外からは中の様子がまるでわからないようだった。

「テイクオフ！一回自由にヘリ飛ばしてみたかったのよね！」

「ちよ、大丈夫かい？姉さん？」

「大丈夫よ！ヘリの操縦くらい訓練施設でやったじゃない！」

「あれはもうちよつと小さいヘリだったような・・・。」

「同じよ同じ。あー、あー、乗客の皆様、当機はまもなく離陸いたします！座席に座ってシートベルトをお締めくださいーい！」

「ね、姉さん・・・。」

「シートベルトをお締めくださいーい!？」

「わ、わかったよ。」

僕たちはそのまま姉さんのヘリの操縦で脱出した。

~~~~~3日後~~~~~

~~~~~

『シルバー、ブルー。2人とも少し調べ物に付き合ってもらいたい。』

「調べ物？私達が？」

「僕たちがやるってことは図書館に行つて調べられるようなことではないのは確かだね。」

『そのとおり。最近ICAの記憶処理に不備が見つかる事例が多発しているのは知っているわよね?』

「そりやあまあ・・・。少年探偵さんははつきり覚えてたんでしよう?」

『それだけじゃないわ。あなた達が会つた、レイ・ラ・レーーナさんもよ。』

「こつちのこと知つてたのか。そんな素振り全く見せなかつたけど。」

「もしかして意図的に隠して・・・?」

『その可能性は低いわね。彼女は元から必要ないことは喋らない性格みたいだし。』

「それで、私達に何を調べろつて?」

『記憶処理が不十分になっている“原因”よ。』

「それは情報部の役目じゃ?」

『その情報部だけじゃ人手が足りてないからお願いしてるのよ。それに・・・。』

「それに?」

『大きな声では言えないのだけれど、情報部の内部に手引している者が居る可能性があるのよ。』

「スパイってこと?」

『まだ確定ではないわ。でも念には念を入れていのよ。何を調査するかは追って指示するわ。頼まれてくれるかしら?』

「勿論!」

「僕たちにできることなら。」

『ありがとう。じゃあまずはニューヨーク、ブルックリンのバラパークよ。そこにキャロライン女史の実家があるわ。そこへ潜入して情報を集めてきてほしいの。』

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~
 ~~~~~

・「忠誠が揺るぎかけました」

【+1000】『ゴミ箱に入った後にポケモンと会話する。』

・「歌謡ショー」

【+3000】『5人以上を眠らせる。』

・「暗殺の道具じゃない」

【+3000】『ポケモンを使って3人以上気絶させる。』

・「ブルーちゃんのヘリ」

【+1000】『ブルーの操縦するヘリコプターにのって屋敷から脱出する。』

## HITMAN 番外編 『明日の世界』

『エージェント66。目的地に到着を確認。』

『現在位置より南方の建造物にターゲット2名の反応あり。警備状況黄色。補足情報、シルヴィオ・カルソーは外出恐怖症であり、この建造物はエーテル社が用意したものの。』

『DNA特異型ウイルス保管場所に近づくほどセキュリティレベルが上がると予想されています。』

『現在時刻、13時58分。任務開始。』

~~~~~

どうも落ち着かない。自分は別に魔法学院の制服でやれると言っただけけど、ブルーさんが「せっかく地中海のリゾートに行くんだからもっとおしゃれしなきゃ！」と言って、今はブルーさんが持っていた白いワンピースを着て任務に赴いている。自分

にはこういうひらひらした服は似合わないと思うのだけれど……。

ともかく、温暖な気候のサピエンツアではこの格好でも観光客だと思われているようで、特に気にもとめられていない。その点では良かったけれど、別に魔法学院の制服でも修学旅行生か何かに見られたのではないだろうか……。

屋敷の正門には拳銃を脇に抱えた警備員が2名守りを固めている。周りの塀も高く、身一つでは乗り越えられない。レビテーションで浮き上がるものならこの周りの観光客に気が付かれてしまうだろう。別の侵入経路を探さざる負えない。ひとまず街の方へ行ってみよう。

海岸まで出た。そこら中に観光客がおり、青い海と白い砂浜、多数のヨットやパラソル。日光浴を楽しんだり近くの護岸では釣りをする人もいる。まさにリゾート地だ。そんな海岸の脇に立派な教会が建っているのが見えた。教会という施設は迷える子羊が集うと言われるように、何かしら問題や不安を持つものが多く訪れる。そういう者たちは総じて神父や石像に向かって機密情報を喋りやすいものだ。情報収集になるかもしれない。行ってみることにした。

教会の中は厳かな雰囲気であり、リゾート地らしい雰囲気の外とはまた違った静けさがある。……ん、あれは白衣？この辺りに病院はなく、白衣の人物がいるところと言ったらエーテル者の研究所しか無い。今懺悔室に入っていったのはおそらく研究所の職

員だろう。なにか聞けるかもしれない。私は懺悔室のすぐ隣の祭壇に祈りを捧げるふりをして聞き耳を立てる。

「神よ……私の罪を……お許してください……。」

「お話しなさい。」

「昨日、私は間違いを犯しました……。そのせいで一人の同僚が命を落としました。とても善良な人で、職場での本当に小さな間違いだったのですが、それでも悲劇を生むことがあります……。」

「彼は教会の遺体安置所に運ばれることになりました。彼に敬意を払い、謝罪したいのですが彼はもう亡くなっています……。」

#####

~~~~~

『研究所に安全に侵入するためにはキーカードと制服が必要です。重要情報確認。エーテル研究所の職員1名が遺体安置所に移送されました。同僚の研究員が遺体安置所に向かう可能性があります。衛星からのスキャン結果を受信。懺悔室内の研究員はキーカードを所持しています。』



~~~~~

この研究員は遺体安置所に行くみたい。普通そのような場所では多くても2人程度しか人目がない。これはチャンスかも知れない。

私は北側の扉から教会を出た。教会の裏口のような場所ではあるけれど、真正面の建物が遺体安置所になっている。周囲に人目がないこと、監視カメラなどがいないことを確認した後、“アンロック”で扉の鍵を開けて中に入った。

中は最後の別れの部屋とも言うべき部屋があつた。左の扉は外に通じている。ということは右の部屋だ。念の為慎重に開けて中にはいる。薬品の匂いが鼻につく。左の台には誰も横たわつては居ないが、右の台には科学者の白衣を着た男性が横たわつていた。近づいて確認するとたしかに死体だつた。防腐処理なのか死後まだそれほど経っていないからなのかはわからないが異臭などはしなかつた。

外から声が聞こえる。しまった・・・、外の出入り口がふさがつてしまった。反対側から出ようにももう一つの扉の向こうには人の気配がする。一般人立入禁止の場所か

ら人が出てくれば間違いなく怪しまれる。どうする……。

ガチャ コツコツコツ

隣の部屋に入ってきた。まずいどこかに隠れ……む、そうだ。

ガチャ

「えつと……ああ、」

「異常なし。」

「ベルナルド。少し外してくれる？一人になりたいの……。」

「はい。」

一緒に護衛も入ってきたがすぐに出ていった。部屋の中には私と研究員と死体だけになった。

「ああ、本当に死んでしまったのね……こんなに苦しそうな顔をして……。」

「本当に申し訳ないことをしたわ。私達は知的好奇心だけで何千人もの命を奪う兵器を作ってしまった……。」

懺悔している所申し訳ないけれど、一旦その懺悔は夢の中で行ってもらうことにする。

”スリープクラウド”

「デ・サンティスさんに……言われた……ん……何……なんだか……眠く……」
ドサツ

私は倒れ込んだ研究員の懐を弄り、キーカードを手に入れた。……ん？これは……？
胸ポケットに紙で包まれた何かを発見した。

USBメモリ？ 結構嚴重に紙に包まれていたのを見るときかしたら重要情報がいや、重要情報はこんな形で所外には持ち出さないだろう。ということももしかすると……。

私は内容を確認するために一旦セーフハウスへ戻ることにした。眠った研究員を近くの箱の中へ隠すと、気配がなくなつた奥の扉から外に出た。

セーフハウスに戻ってきた私は早速備え付けのノートパソコンで中身を確認した。

「全然わからない．．．」

．．．仕方ない。本部に送信して解析してもらおうことにする。解析してもらっている間にあの屋敷に侵入する方法を考えよう．．．。メモリの内容をそのまま本部へ送信し、一応メモリも持ってまた街へ繰り出した。おっと、ついでにゴルフボール型爆弾も持っていくとしよう。

都合がいいことにこのセーフハウスのベランダはそのまま屋敷の外壁とつながっているため、ここから屋敷内に潜入できそうだ。屋根伝いに進み、屋敷の外壁部分が壊れている部分から屋敷内に降り立った。そのまま直ぐ側の扉を開けて中にはいる。

どうやらこの建物は調理場のようだった。いい匂いが部屋中に立ち込めている。腹が鳴りかけるけどぐっとこらえて地下へ進む。この屋敷は地下通路が張り巡らされており、それらを通ることどこへでもいけそうだ。

休憩室を抜け、更に下に降りていく。ワインセラーにはいるところでスタッフが二人もめているのが見えた。

「今日のためにカルーソーさんが指定したボトルだよ！」

「わかってるけど・・・見つからないんだよ。」

「一本あるはずだ！先週たしかにここで見たんだからな！」

「ああ・・・でもほんとに無いんだ・・・。」

「無いなら他の所探せよ!!動け!!」

「わかったよ・・・でも・・・ないんだって・・・。」

「ああ、もしもし?僕だけど。ちよつと問題が起こつちやつて・・・。ああそういうことじゃないよ。」

「この間あげたワイン、そうそう、白ね。まだ残ってる・・・?」

「飲んじやつたあ!?!ああ、い、いや。大したことじゃないんだ、特別な日に飲もうと思っただけで・・・。」

・・・どうやらスタッフの一人が秘蔵のワインを一本くすねたのがバレかけて大慌てになっているらしい。自業自得といえればそれまでだが、それでワイン棚に注視している

おかげですんなりと内部を通過できた。通過した後、前方にガレージのような場所を見つけたけど、その前に通信が入った。

~~~~~

『USBメモリの解析完了。内部データ詳細、緊急用DNA特異型ウイルス削除プログラム。実行手順、所定の作業中にUSBメモリを端末に指す。』

~~~~~

このUSBは緊急用のプログラムが入っていたようだ。それならば都合がいい。このウイルスを研究所の端末に入力するだけで全てが終わるならこれ以上無いくらいに手早く終わらせられる。だがそれもターゲット二名を葬ってからでないと、避難させて暗殺ができなくなってしまう。

ひとまずガレージに着いた。ガレージの更に奥の通路には警備員がひとり立っていた。その奥にいる別の警備員と話をしているような感じがある。下手にスリープクラウドで眠らせれば別の警備員に見つかる可能性がある。ここは普通におびき寄せるこ

とにする。丁度その場所の近くに発電機があり、私はその発電機の電源を入れた。

ブルルウウン!

「んあ?なんだ?なんの音だ」

うまい具合に発電機を確かめに来た。発電機の裏の柱の陰に隠れて機をうかがう。

コツコツコツ…

「なんだあ?なんで動いてんだこれ」

「んー?壊れたのかあ?」ゴンゴン

「・・・まあとりあえず切っておくか」カチツ

「これでよしつと・・・」

“エアハンマー”

ゴツ!

「ぐわっ!」

ドサッ

発電機を切った直後に背後からエアハンマーを食らわせて気絶させた。あとは通路の向こう側の警備員だけだ。私は気絶した警備員を近くの木箱の中に入れて慎重に曲がり角の向こう側を見る。

向こう側には研究所につながると思われる扉があり、その両脇に2名警備員が立っていた。それなりに角から距離があるためもしスリープクラウドを考えなしに放つていたらもしかすると届かなかった可能性すらある。

だがもう二人しか居ないとわかつているなら問題はない。少し離れたところから私は呪文を詠唱した。

“スリープクラウド”

フワッ

「ん・・・なんだ、なんか眠く・・・」

ドサッ

「お、おい寝るな・・・グウ」

ドサッ

ふたりともうまい具合に眠ってくれた。念の為ガレージに会ったロッカーにふたり

とも入れておく。落とした銃もガレージの隅に適当においておく。

さて、これで先に・・・つと、ガレージと入口の角との間の廊下の横に扉があるのに気がついた。私は扉を開けて中を確認してみる。扉の向こう側は階段になっており、そのままのぼると、屋敷の中庭に出ることが出来た。念の為自分の足元にだけサイレントをかけて、中央の建物から出てくるスタツフに注意しながら隣の小屋に素早く滑り込んだ。

「なあ。最近警備が嚴重になつてるのに気がついてるか？特に正門。」

「ああ。カルーソーが恐ろしいものを作つてるからな。」

「どんな？」

「俺が知るわけねえだろ。ただ、プロジェクトがもう少しで成功しそうなんだと思うぜ。」

あつぶない・・・。部屋の中に2人先客が居た。幸いなことに両方とも机の方を見ていてこちらに気がついていないようだ。私はそのままそそくさと小屋を抜けようとする。

・・・つと。小屋を抜けたスグのところにも海を眺めながらタバコを吹かしている警

備員が居た。サイレントを掛けていなかったら気が付かされていたかもしれない。そのまま脇を通り過ぎ、中庭を外側から見れる位置まで進んだ。中庭には今まさにゴルフの練習をしているターゲットが居た。

~~~~~

『ターゲット1、シルヴィオ・カルーソーを確認。任務を遂行してください。』

~~~~~

「ふう。こんなもんかね。」

「素晴らしいですカルーソーさん。プロゴルファーも夢じゃありませんね！」

「そ、そうかな・・・ふふん。」

「ここらで一旦休憩にしましょう。」

「お、おお。そうだな。ではまた後で。まだ教えてもらいたいことがあるんだ。」

「わかりました。では15分休憩ということですね。」

ターゲットとゴルフのコーチらしき人がその場を別々に離れていく。ターゲットには護衛が目を配っていて、このままでは暗殺どころか近づくことすらままならない。どうしたものかと考えていると、腕に服に仕舞ってあるものが触った。そうだ、これがあつたんだつた。

取り出したるはゴルフボール型爆弾。触った程度では爆発しないが、例えばドライバーショットなどで強い衝撃を加えると爆発し、半径1〜2mの人間を殺傷する。これを使えばいいじゃないか。

私はゴルフボール爆弾を芝生の上に置き、念力でセッティングをしていく。ティーを立て、その上にゴルフボール爆弾をおけば準備は完了。屋敷の人間はアレがカルーソーのものだということは熟知しているはずなので触ったりはしないでだろう。仕込みは完了したのでその場を離れる。次にやるのは・・・ウイルス。

来た道を慎重に戻り、地下通路へ戻ってきた。今度は先程排除した警備員が守っていた扉をカードキーを使って開ける。ピピツという電子音の後、扉が開いた。そのまま中へ進んでいくと、大きな空洞へ出た。

#####

~~~~~

『エージェント66、研究所への到達を確認。DNA特異型ウイルスは隔離された室内にあると思われます。任務を遂行してください。』

~~~~~

ひとまずはそのまま外周を回りながら全体の様子を見る。端末は隔離されている研究室のすぐ脇にあるけれど、周りに人が多すぎる。もつと他にも端末があるはず。私は更によく周りの建物や洞窟の内部を探した。

・・・見つけた。隔離施設から一番離れている建物の上、研究員がひとり居座っているけれど、その研究員が捜査しているのは間違いなくコンピュータ端末だ。よし、あの端末からウイルス破壊プログラムを送信しよう。そのためにはあの近くの崖の上に行かなければならない。私は移動を開始した。

崖の上には警備員が一人いたが、一人だけだったのでスリープクラウドで眠ってもらい、近くの箱の中に隠した。そして周りの研究員や、遠くの警備兵などがこちらを見えないのを確認して私は崖を飛び降りた。そのままレビティションで建物の上に着地する。研究員はまだ端末を弄っており、こちらには気づいていない。しかしこのままだ

『エージェント66。端末操作の補助を開始します。まず、左上の白地に黒文字のEが書いてあるアイコンをクリックしてください・・・』

~~~~~

本部の指示に従って端末を操作していく。そしてUSBメモリを刺す。その後はメモリが勝手にやってくれているらしく、私は急いでレピテーションで崖の上上がった。

ブー！ブー！ブー！

~~~~~

『ターゲット3、試製DNA特異型ウイルスの破壊を確認。残目標確認、シルヴィオ・カールソーとフランチェスカ・デ・サンティスの生存を確認。』

~~~~~



女が施設の入口に差し掛かった時、私はその真上にある鍾乳石に向かって魔法を放つた。

“ウインディ・アイシクル”

バシユ

ガツ！

ピキピキ…バキ！

ガヤシャーン！

キヤー！

~~~~~

『ターゲット2、フランチェスカ・デ・サンティスの生体反応消失を確認。残目標確認、シルヴィオ・カルソーの生存を確認。』

~~~~~





人員を増やしたのか、ワインセラーのほうはとても通り抜けることはできそうになかった。となるとどこから帰るか・・・。

ワインセラーに続く廊下の途中に扉を発見した。中を覗いてみると地下水路のようだった。どこかの2Pカラーのような服装をした技術者がなにかの機械をいじっているが、機械に夢中なのかすぐ横の水路を私が通っても目もくれていなかった。そのまま真つすぐ水路を抜けようとしてみる。たどり着いた先は正門前の噴水の中だった。だがこちらは正門に警備員が2名張り付いたまままで通れそうにないため、私はもう一つに分かれ道の方へ進んでみた。

もう一つの方は屋敷のすぐ横の崖へと続いていた。鉄格子の扉があったがアンロツクで難なく開けることが出来た。そのまま崖伝いに街の方へと戻った私は、道の脇に止めてあるICAが用意した車に乗って脱出した。

~~~~~1週間後~~~~~

~~~~~

「言われたとおり、キャロライン女史の家を調べてみたけど、言つてたような物はなかったよ。」

「ふりだしに戻るつてことかしらね．．．。」

『うむむ．．．となると．．．。』

「ただいま。」

「あら、タバサちゃん。おかえり。」

「そつちの首尾はどうだった？」

「一つだけ。」

「収穫あつたの？聞かせて！」

『タバサ。どうなの？』

「秩父の山中の施設を襲撃した部隊について調べた。どこからやってきたのかはわからなかつたけど、手引した人物の名前がわかつた。」

「やつぱり支援されてたのね。」

『それで？誰が手引していたのかしら？』

「わかつたのは名前だけ。『リアン』という人物が施設情報を送信した形跡があつた。」

『!!』

「リアン．．．どつかで聞いたような．．．。」

「姉さん。アレだよ。カーキンスの・・・。」

「ああ！娘さん！で、でも47が暗殺したんじや?!」

『またその亡霊の仕業ってわけね・・・。』

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~
 ~~~~~

・「蘇った魔法使い」

【+1000】『遺体安置所で遺体になりきる。』

・「社長！ナイスショットです！」

【+3000】『ゴルフボール爆弾を打ちやすいようにセッティングする。』

・「遠隔操作」

【+3000】『ICA本部の支持に従って端末を操作してウイルスを破壊する。』

・「フリーフォール」

【+5000】『魔法を使って鍾乳石を落下させてターゲットを暗殺する。』

## HITMAN番外編『黄金の鳥籠』

『マラケシユへようこそ！キュラソーさん。』

『緊張はますます高まっています。領事館は既に封鎖されており、民衆がいつ暴徒化してもおかしくない状況です。』

『もし暴徒化すれば、ゼイダン將軍は躊躇いなく軍を動かすでしょう。』

『作戦は任せます。ですが急いでください。時間はあまりありません。』

『幸運を・・・祈ります。』

~~~~~

ブロロロロ…キーツ

ガチャ

車が止まった。私は予め決められた秒数待機したあと、車のトランクから這い出した。

『領事館に到着しました。安全のため運転手は退避させます。頑張ってください!』

さて、問題は領事館の地下駐車場からどうやってストランドバーグのところまで行くかだけだ。

ひとまず目の前にある倉庫を調べてなにか役立つものがないか調べることにした。扉は鍵がかかかっておらず、中もそれほど重要なものはなかったが、ドライバーを見つけたので念の為拾っておく。

倉庫を出て左へ進む。壁に張り付いて向こう側を確認すると、赤い帽子をかぶった将校を含めた兵士数人がうろついていた。このままでは見つからずに通り抜けるのは難しいだろう。・・・早速ドライバーの使い所だ。私は壁に向かってドライバーを放り投げた。

カランカラン

「ん？何だ今の音は。」

即座に拾い直し、倉庫の中へ隠れる。兵士が一人近寄ってきたので倉庫内で今度は中にあつたプロパンの缶を床に転がした。案の定兵士は不審な音を確認するために倉庫内に入ってきた。

「んー．．．何もないうるだな．．．。」

ガバツ

「むぐうー！」

ムー！ムー！ムー．．．

ドサツ

後ろから首を絞めて気絶させた。そのまま近くにある木箱の中へ放り込んでおく。もう一度兵士たちが居るところを確認しに言った所、特に騒ぎにはなっていないようだったので、今度は近くの装甲車の傍にあつた軍用無線機のスイッチを入れた。入れた途端、大きな音で飛び交う無線を受信した。案の定今度は将校がそれを確認しにやって

きた。

「はあ……。誰だ、点けたのは……。」

カチツ

「これでよしつと……。」

ヒュツ　ゴン！

「ぐわー！」

ドサツ

思いつきり後頭部にプロパンの缶が直撃した。死んでないといいのだけれど。近くによつて気絶で済んでることを確認した後、別の兵士に気が付かれないように慎重に倉庫内へ運んだ。

……この将校。引きずつて箱の中に入れるときに気がついたが、私と体格がよく似ている。もしやと思い、将校の服を脱がせ、自分で着てみると驚くほどしつくり来た。47お得意の変装が私にもできることに若干の感動を覚えつつ、彼らが持っていたアサルトライフルを片手に兵士たちの前に出てみる。

「問題ないか？」

「はっ！異常はありません！」

よしよし。こちらの顔はあまり気にしてはいないようね。どうやら服装で階級を確認して対応するようにマニュアル化されている。そのままその場にいる兵士は全員気が付かないようなので、兵士たちの真ん中の机の上にあるカードキーとトラックの鍵をなんの問題もなく拝借することが出来た。

そのまま奥の扉をカードキーで開ける。その先は倉庫になっていたが、そのさらに奥は領事館内と階段でつながっていた。階段を登ると、兵士と警備員が何やら話している。

「ではお互いそれでいいかな？」

「ああ、ああ。わかった。ただ・・・もつと情報を共有しても・・・。」

「必要ない。命令は命令だ。いいか、俺らが建物内をうろつくよりマシだ。不安を煽るだけだからな。」

館内の警備担当割当について話していたようだが、その会話には目もくれず隣の階段

を駆け上がる。階段を上がってすぐに左に小部屋があったのでそこへ潜り込んだ。そのまま向こう側に抜けようとした所、扉の直ぐ側に警備員が立っていた。

あの警備員は通り抜けるにしてもここから暗殺するにしてもどちらにしろ邪魔になるだろう。早めに手を打っておくに越したことはない。私は部屋の中を見回してなにか使えそうなものを探した。工具棚にレンチを見つけ、壁際に掃除機も見つけた。この2つでやってみよう。

掃除機のスイツチを入れる。大きな音をたてながら掃除機が稼働し始める。私は掃除機とは逆の壁際に身を潜める。

ガチャ

「何だ何だこの音は。」

「何だ掃除機じゃねえか。なんで勝手についたんだ？」

カチツ

「これでよしと。」

ゴッ！

「ぎゃー！」

ドサツ

廊下にやってきたのだ。

~~~~~

『来ましたね。彼がクラウス・ストランドバーグです。モロッコの最重要指名手配犯です。』

~~~~~

都合がいいことに彼は領事館の中なので安心しきっているのか、不用心にも単独で歩き回っていたようだ。私は扉を開けておき、コインを自分の足元に転がした。

チャリンチャリン

「うん？今の音は？」

転がした後すぐにコインを回収、扉の脇に潜む。一回では扉の中へ入ってきてはくれなかつたので、扉が開いているうちに部屋の奥にコインを放り投げる。

チャリンチャリン

「まただ。部屋の中からか？なんの音だ。」

コツコツコツ

「ふうむ・・・なにもない」

シユルルルグイツ

「うぐつ！」

グググ・・・

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『ターゲットダウン。お見事です！後はレーザー・ゼイダン將軍だけですわね！』

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

部屋に入ってきたところを後ろからワイヤーで素早く首を絞めた。少しの間抵抗していたがすぐに動かなくなつた。そのまま死体を引きずり、警備員と同じ木箱に放り込んでおく。

ターゲットが始末できたらこんな所もう用はない。来た道を戻り、駐車場まで戻った。そのまま地下通路を通って学校へ向かう。途中何人もの兵士とすれ違ったが、みんな服装で将校だと思いこんでおり、気にもとめないどころか敬礼までされる始末だ。この国の軍の警備体制が心配になってくる。

地下通路を出て、正面から学校へ接近する。検問も何もかもこの格好なら全てスルーだ。学校の敷地内で警備もせずに話し込んでいる2人が居た。さり気なく聞き耳を立ててみる。

「頻繁に將軍が来て囚人を確認している。親しい仲だったらしいが何をやったんだ？ 気の毒なやつだ。」

「聞いた話じゃ、今朝ストランドバーグを脱走させた時、殺された警官の一人が兄貴だったらしい。で、それに怒った彼はすべての計画を暴露しようとしたらしい。」

「そりゃ賢くねえな・・・。」

#####

~~~~~

『檻房の囚人はゼイダン將軍の元側近だそうです。しかし、警官をしていた彼のお兄さんがストランドバーグ脱走の時の銃撃戦で命を落としてしまったようです。それに怒った彼は反旗を翻し、事実を公表しようとしたようです。でも結局公表前に拘束され、この学校の一室に投獄されたようです。』

~~~~~

「だが・・・良いやつなんだよ。銃殺隊に指名されなくてよかったよ。」

「確かに。」

なるほど。元側近という立場の人間を尋問するのであれば、余計な情報流出を避けるために將軍自ら尋問するかもしれないわね。ということは囚人になりすますことができれば將軍と二人きりになれるかもしれないということね。

私はそのまま学校内に侵入した。校庭で別の将校がなにか怒り心頭だったけれど、兵士に何かを叫んでいてこちらには気がついていない。そのまま通り過ぎて学校に正面から堂々として入ってやった。

『侵入成功ですね。お見事です。ではゼイダン將軍を探しましょう。』

~~~~~

そのまま構内を探索していると、一番東側の部屋に兵士が二人立っているのを発見した。通り過ぎざまに部屋の中を確認すると、囚人と思わしき男が頭に袋を被せられて椅子に縛り付けられていた。

私は部屋に入り、できる限りの低い声で兵士たちに話しかけた。

「ここはいい。休息を取れ。ゼイダン將軍の指示だ。」

「はっ！了解しました！」

「ありがとうございます！失礼します！」

少し不安だったが無事に誤魔化せた。兵士が外に出るのを確認すると、私は囚人に近づいた。





『いいですね！動けない囚人なら警戒されることもないはずです！』

しばらくそうしていると、部屋の中に誰かが入ってきた。袋で見えないが、他に足音や気配はせず、そして銃の出す金属音もしないことからおそらく、ゼイダン将軍ね。

『彼がレーザー・ゼイダン将軍です。平和の番人つてところですかね。〃元〃ですけど。』

「決断のときだサイド。どう料理すべきかな？」

「寝てるのか？サイド。睡眠は十分足りているだろう？」



かもしれないけれど。

私は将校の服に着替え直してまた正門から外に出た。近くに軍用トラックが止めてあり、先程駐車場で拾ったキーが使えるかもしれないと扉の鍵穴にさしてみたところ、見事に一致したのでそのままそのトラックを運転して脱出した。

~~~~~3日後~~~~~  
~~~~~

『47。少しいいかしら。』

「なんだ。」

『シルバー、ブルー、タバサ達が調査した結果、ICA情報部の人員全員記憶処理に関する違反や漏洩は見られなかったわ。もつと別の要因がある。』

「ふむ。ならば外部か？」

『その可能性は高くなつたわね。』

「まずはその勢力を特定するところから始めないといけないようだな。例の亡霊はどう

「なった？」

『亡霊の調査は戦略AIがネットワークを探し回っているわ。通常のインターネットに加えて、ディープウェブやT o r もくまなく調べているからかなり時間がかかっているわね。』

「ディープウェブの搜索をAIにまかせて大丈夫なのか？」

『私達の戦略AIは表の世界のスーパーコンピュータを数世代先に行く量子コンピュータよ。人間のハッキング能力では数千人束になってかかっても勝てる見込みは皆無ね。もし勝てる存在がいるとしたら同じく量子コンピュータでしょうね。』

「なるほど。ではそちらはAIに任せるとして。我々は何をするんだ？」

『私達は紙媒体の情報やクロードネットワークの情報を集める。あなたも協力してもらうわ。』

「腕の傷は完治した。いつでも任務を遂行できる。」

『いくつかの暗殺の案件が入っているわ。ワールドセーフティも問題なく動いている。いくつか新しい世界も見つかっていてね、現在情報部が調査中よ。』

「ワールドセーフティの故障の可能性はないのか？」

『無いわね。先の実験体事件の教訓から、渡界機とワールドセーフティを戦術AIではないでいるから、なにか不具合があればAIが自動で検知して知らせた後、修復するこ

と becoming っているわ。』

「・・・そうか。」

『戦術AIと戦略AIもタキオン通信でつながってるわ。不安？』

「いや。懸念だな。」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~
 ~~~~~

・「警備をお掃除」

【+1000】『掃除機でおびき寄せる』

・「我が物顔」

【+3000】『将校の服を着て地下通路を通り抜ける。』

・「緊張の糸」

【+1000】『3人以上気絶させる』

・「ステータス」

【+3000】『囚人に変装する。その際、女であることを悟られてはならない。』

## HITMAN 2 『奇跡の暗殺劇』

『アタザキへようこそ。47。』

『アタザキには町の中央に大きな多目的ホールがあつて、毎週のようにそこで催し物が開かれているみたいね。特に今週の奇術大会は長官肝いりの催しともあつて気合の入りが違うみたいよ。』

『ホール自体は地上2階、地下2階の4階層構造よ。広さもそこまで広くないから迷うことはないと思うわ。むしろ決して広くないその会場に1万に届くかという大勢の観光客がやってきていることのほうが問題ね。暗殺現場を見られでもしたらかなり厄介な事態になるわ。十分気をつけてね。』

『健闘を祈ってるわ。』

~~~~~

ガヤガヤガヤ

以前来たときよりも人が多い。これも開催される催し物のせいなのだろう。この世界は石油が真水の次に重要な資源であるため、石油由来のガソリンをバカ食いする車はそれ自体が高級品であり走っていない。イケスカなどの富裕層が多く住む街ではそれなりの量走ってはいるが、それでもニューヨーク、香港、東京、ロンドンなどにくらべれば圧倒的に空いてると言えるレベルだ。ここアタザキのような観光地では富裕層向け宿泊施設の送迎用くらいにしか使われておらず、道は殆ど歩行者で埋まっている。

「ちよつと！47！早い！早いから！」

「ちよつとは待つてあげてもいいんじゃない？」

おっと、今回はブルーとキュラソーも一緒についてきているのを忘れていた。こうも人が混み合っていると子供でなくても逸れる危険性が高い。私は一旦路地に入り、二人と合流する。

「ふう……ここまで混んでるなんて聞いてないわよ。」

「それだけ注目されている行事ということなのだろう。難易度はかなり高いな。」

「そうね。ここまで注目度が高いとなったらターゲットが一人になるのなんてそれこそ

トイレの個室の中とかしか無いわね。」

「単純にトイレの中というだけでは完全に孤立状態になることはなさそうだな。」

「じゃあどうするのよ。大勢の人の目の前で頭撃ちぬく気？」

「その点に関して策があると聞いている。」

「誰に？」

「ブルー。君のオペレーターにだ。」

「なんですつてえ!？」

『おうおう!なんでえその反応は!オレっちだつて偶には積極的に働くんだぜ?!』

「ああ・・・もう不安しかないわ・・・。」

「名はなんと言ったか。」

『ウィートリーだ。あんたがかの有名な47さんだな?よろしく頼むぜ!』

「よろしく。早速だが策というのを聞かせてもらおう。」

『あいよ!じゃあオペレーターの姉ちゃん。よろしく頼むぜ。』

#####アプローチ発見#####

~~~~~

~~~~~

『はいはい……。目の前の道を北へ一キロほど行ったところに目的地である中央ホールがあるわ。そこで奇術大会が行われることになっているのだけれど。あなた達、参加して見る気は無いかしら?』

~~~~~

「はあ!？」

「奇術大会に私達が?」

「ふむ……。」

『インフォーマントの連中が調べた所、あの劇場のホールは舞台装置に色々仕掛けがしてあるみたいだぜ。詳しいことはわからなかったけどな。天下の47様ならそれらをうまく使つてターゲットを暗殺することもできるんじゃないかなど。』

「面白いアイデアだ。」

「47?!」

「本気なの?」

『だろー! いやーさすがはICAのエース様だ。話がわかる。ホールへの侵入は裏口が有効だ。頑張れよ!』

「ちよつと47！私達が出場するってそんなことしたら衆人環視状態よ！どうやって暗殺するのよー！」

「第一参加するにしても私達は奇術なんてできないわよ？」

「問題ない。有名所のマジックショーの手順は訓練済みだ。」

「ICAの訓練ってそんなことまでしてたの・・・？」

「選択訓練過程の中にあつたはずだが？」

「あの20ページにも及ぶ一覧表でしょ？最初1ページ見ただけで気が滅入っちゃったわよ。」

「私も、組織ではあそこまでの多種多様な訓練はしたことがなかった。」

「暇なときで良いからやっておくべきだ。私はすべて履修済みだ。」

「マジで・・・？」

「・・・さすがね。」

「ともかくホールに向かうぞ。逸れるなよ。」

ICA選択訓練は必修ではないスキルや知識を学ぶことができる選択訓練項目だ。比較的よく使う早着替えや警備の基本などから、遊園地マスコットの振る舞い、バーテンドー、保育士、潜水艦操舵手、変わり種ではホームレスの振る舞い方などもある。す

べて履修すれば少なくともこの世にある全ての資格試験は合格できるだろう。

なにはともあれ方針は決まった。私達は揃ってホールへ向かった。まずはホール内部に侵入するところからだ。流石に裏口ともなると完全な路地裏であり、入口部分に警備員が2名立っているだけだった。警備員2名程度ならなんのことはない。ブルーのポケモンの“うたう”で眠らせることで簡単に侵入できた。

内部はそれほど広いわけではなかった。まさに舞台裏という感じで、壁はコンクリート打ちっ放し、床は簡易タイル、窓もあまりなく、照明は裸の蛍光灯だ。時折通るスタッフと思わしき人を、ときにロッカーに隠れ、ときにブルーのポケモンで隠匿し、ときにキュラソーの手刀で眠らせた。

「47。こつちこつち。この部屋警備室っぽいわよ?」

「ふむ。キュラソー、外を見ていてくれ。私とブルーで調べる。」

「了解。」

「もう一度お願い!ぷりり!」プリー

「ぷりり!うたう!」ガチャ

プーププーププリー

聞かせた相手を無差別に眠らせる技というのはかなり使い勝手が良い。その気になればターゲット以外全員眠らせてしまえば良いのだから。しかし、以前にそのことを指摘した時、彼女はこう言っていた。

「みんなそう言うんだけど、うたう」は意外に効果を発揮させられる人数が限られてるのよ。具体的に言えば10人。それ以上眠らせようとすると効果が出ないかもしれないのは先に寝た人が起きちゃうのよ。」

一見便利そうな技や特技にも何かしらの欠点があるものだ。この世に欠点の無いものなど存在し得ないということなのだろう。

ともかく、無事警備室は制圧できた。警備室には3人の警備員が常駐していたようだ。各種監視カメラの映像や、簡単なセンサー類の情報がモニタに映し出されている。その中の一つにターゲットが映っていた。どうやら今はホールのエントランスで報道陣の囲み取材を受けているらしい。

「47。あつたわよ。施設見取り図。」

「よし、これで少なくとも迷うことはなくなったな。」

「後こんなのもあつただけど使えるかしら？」

「これは・・・見取り図とは別の構造図か。」

「ここ、ステージの真ん中に一人が降りれる地下通路があるわね。」

「マジックショーやミュージカルを行う劇場などではよくある隠し通路だな。使えるかもしれない。」

「どうするの?」

「・・・ここにあるやつが役に立ちそうだ。」

「そこは・・・倉庫?」

「この構造、ただの倉庫ではなさそうだ。」

各種鍵などを入手して私達は部屋を出て、怪しまれないように空き部屋に移動した。

「まず、ここに行つてなにか暗殺に使えそうな薬品を手に入れる。ここは薬品関連の倉庫だ。」

「なんでホールに薬品倉庫が?」

「わからん。もしかするとホールになる前は別の施設だったのかもしれない。」

「で、薬品を見つけたらどうするの?」

「ここだ。マジックショーの最中にターゲットを実験台に指名する。その際、この部分に落ちて消失マジックの完成になるわけだが、その落ちた先に薬品を仕込む。」

「なるほど。落ちた後はそこでそのままターゲット死亡つてわけね。」

「でも実験台の人が帰ってこなかったら不審に思われるんじゃない?」

「そのあたりは話術でカバーすればいい。その部分も訓練内容にはあった。」

「私もその訓練受けてみようかしら・・・。」

「念のため陽動装置も持ってきている。これで騒ぎを起こして混乱に乗じて脱出するの  
も手だ。」

「そつちのほうの手つ取り早そうね。」

「後はそのままシヨールを追えて裏に下がったらそのまま脱出だ。」

「わかったわそのプランで行きましょう。」

「今の所一つ問題がある。」

「え?」

「ステージ衣装がない。流石にこのままでは不自然極まりない。」

「あーそれはそうねえ・・・。」

『お困りのようだな!』

「またあなた・・・今度は何よ?」

『こんな事もあるうかとホール内にステージ衣装をインフォーマントに設置させておいたぜー!』

「ほう。用意がいいな。」

「47、騙されちゃダメよ。こういうときは大抵の場合どっかに不備があるんだから……。」

『おおん？ブルーちゃんよお。そんなこと言っているのかなあ？』

「……なによ。」

『ヒヒヒ……まあお楽しみつてことで。場所は2階の南西の部屋だ！ちゃんと3人分あるぞー！』

「ふむ。では私はホールエントランスで出場の手続きをしてくる。キュラソーは薬品の回収と設置。ブルーは衣装の回収だ。」

「わかったわ。」

「了解。」

『フヒヒ……がんばれよお。』

我々は手分けして各自自分の仕事を開始した。エントランスホールに入るには怪しまれないためにも正面玄関から入る必要があるが、手荷物検査がある可能性もあったので、廊下の近くのゴミ箱の中に陽動装置とシルバーボーラーは隠しておく。私は一度外へ出て正面玄関から入り直す。中にはいると案の定、入口で手荷物検査と金属探知が行



われていた。それらをパスし、エントランスの出場者受付窓口に向かう。

「いらつしやいませ。出場をご希望ですか？」

「3人で出場したい。」

「かしこまりました。ここに必要事項を記入してください。」

「わかった。」

紙を渡され、近くのテーブルで必要事項を記入する。名前や住所は勿論偽名と偽の住所だ。内容は・・・5つくらいでいいだろう。それらを書き終え、受付に再度渡しエントリーを完了する。出場者はこの後ショーが始まる30分前までに楽屋入りしなければならぬらしい。それまであと1時間ほどある。無線で場所を伝え、先に楽屋に入って待つことにした。

くブルー side く

えっと、たしか2階の南西の部屋って言ってたわよね。しっかし、あのポンコツが先

を読んで衣装を配置しておくとか、ほんとに大丈夫なのかしら？3人揃ってピエロの格好だったりしないわよね・・・。

私はスタッフが行き交う廊下をメタちゃんを駆使して隠密で進んでいく。なかなか遠いじゃないの南西の部屋は！やっぱりアレなところでポンコツだったわね。

進んでいくうちに廊下でスタッフが2人話しているところに出くわした。そこをどいてもらわないと部屋にたどり着けないのだけれど・・・しばらく待ってみましょう。

「それにしてもすごいな、ノブさまは。市民のためにこんな大会開くなんて。」

「ははは、お前信じてるのか？そんな詭弁。」

「何?。」

「俺はアイツが学生時代だった頃から知ってるけどよ。人のためになにかする奴じゃないぞ。」

「じゃあこの大会はなんだってんだよ。」

「金だよ金。この大会はそこまで有名じゃねえ奇術師が集ってる。そういう連中は大抵披露する奇術もイカサマが多いんだよ。で、そいつらがイカサマを見逃して貰う代わりにオーナーに金を払うわけだ。」

#####

「そういうことかい。」

~~~~~

『ノブ行政長官はこういう催し物で裏金をよく受け取っているみたい。逆に言えば金さえあればターゲットを好きなように動かせるということでもあるわね。』

~~~~~

これは使える情報かもしれないわね。あとで47に教えてあげましょう。そのあと2人は別々の方向へ別れていったので、そのまま通り抜け、建物の南西の部屋へたどり着いた。

部屋の中は使われていない小部屋で、あちこちに廃材や何に使うのかわからない彫刻や絵画などが置かれていた。その中央の柱の根元に真新しいスーツケースが置かれている。多分これね。私はとりあえずその場で開けてみることにした。

中には結構きつちりとしたタキシードが入っていた。へえ、あのボンコツが用意したにしてはまともなチョイスじゃないの。まあこれなら問題はなにか。私はそのまま

スーツケースを閉め、運び出すことにした。今思えば、そこでもつとちやんと中身を確認しておけばよかったのだけれど、その時の私はまだ詰めが甘かった……。

くキユラソールsideく

薬品倉庫と思われる場所は地下2階にあった。今は使われていない区画のようで、その倉庫に至る通路は大半が物置となっていた。もつとも台車が通るくらいのスペースはあるので薬品の運び出しには苦労はしなさそう。

無論、薬品倉庫は鍵がかかっており、その鍵も錆びかけていたが、先程警備室で拝借した鍵束の中に倉庫の鍵があったのでなんとか開けることができた。中は大きめの棚が並んでおり、そこにはホコリを被った薬瓶がずらりと並べられていた。ホコリを出来る限り立てないように注意をはらいつつ、中を探索していくと、一番奥のスペースに目的に合致するものを発見した。

「さて、人を溶かすと言ったらまあこれよね。」

私はおかれていた棚から業務用の洗浄液のタンクを引つ張り出した。倉庫から運び出し、先ほど確認していた落下予定地点へ持つていった。落下予定地点のそばに大きめのガラス製の水槽があった。おそらく水中脱出マジック用だと思われるが、これは使えるかもしれないわね。

〈47 side〉

出場登録を終え控室に通された後、隙を見て控室から外へ出てホール下の部屋に集合していた。隠しておいたシルバーボーラーと陽動装置も回収しておいた。

「では、各々の仕事の確認と行こう。エントリーは済ませてきた。我々の出番は4番目だ。」

「定番の苛性ソーダを見つけたわ。そこにあるガラス製の水槽を使えばいいと思う。」

「衣装は回収してきたわ。タキシードが入ってるみたい。あと道すがら聞いた話だと、ターゲットは裏金をもらってマジシャンたちを囲うこともあるみたいね。使えるかもしれないわ。」

各々しつかりと仕事をこなしてくれた。どうやら脱出マジックを行うのは我々だけ  
のようで、先ほどからこの脱出先のスペースにマジシャンどころかスタッフすら誰も来  
ていない。どうやらこの場所自体がオーナーによって隠匿されているようだ。壁は見  
るからに厚く、どうやら扉である天井部分も含めて完全防音仕様になっているようだ。

「ではまず衣装に着替える。スーツケースを。」

「わかったわー！」ガチャ

中には確かにタキシードが入っている。形状からして男性用なのでこれはおそらく  
私用だ。ほかにも顔を隠す用の仮面があった。しかし、ほかの二人にとってはそのタキ  
シードを私がつた後が問題だったようだ。

「なによこれ!?!」

「あらあら・・・。」

「どうした?」

「・・・ちよつとウィートリー!!これはいったいどういうことよ!!」

「説明して貰いたいわね。」

『ははは！ やつと気が付いたか！ どうだ！ 俺の用意した衣装は！ タキシードはもちろん47用だ。』

「私たちの衣装はどうなってるのよ！ こんなを着ろっていうの!？」

私は着替えつつ横から覗き込んで衣装を確認する。・・・なるほど。黒のレオタードにカフス、ウサギ耳のカチューシャと網タイツとハイヒール。これは紛れもないバニーガールの衣装だ。

『そりゃあマジシャンの相方の女っつていえばバニーガールだろ！ マジシャンが47。相方がお前ら。何も問題はないな！』

「問題しかないわよ！ もうちよつと露出の少ない衣装もあつたでしょう！」

『それじゃあ誰がマジシャンかわかり辛いじゃねえか。それにこういうエロい衣装は男のターゲットの気をそらすにはもってこいだろ?』

「なるほど。一理あるわね。」

「キュラソーさん!？」

「なんでもいいがあと30分で開演時間だ。着替えるなら早めにしろ。」

「47も！ 私たちがこの衣装着ることに異議はないわけ!？」

「何か問題があるのか？」

「ブルー、駄目よ。47は相手を油断させられるか、騙せるかだけでしか見ていないわ。」

「ぐぬぬ・・・。」

『そういうこつた。諦めるんだなブルーちゃんよお！』

「では着替えている間に私はターゲットの誘導のための下準備をしてくる。後を頼む

キュラソー。」

「わかったわ。」

「なんでこうなるのよー!!」

なぜかブルーが痙攣を起こしていたが私は私の仕事をするだけだ。着替え終わった私は一旦部屋を出て、ほかの参加者のいる楽屋へ向かった。

楽屋には様々な衣装に身を包んだマジシャンたちが自分の出番を待っていた。中には金属製のアタッシュケースを持つ者が何人かいた。私の予想が正しければあのアタッシュケースの中身はターゲットへの裏金だ。

それにしても結構な人数参加するらしい。パッと見まわしただけでも20組以上いる。その中で4番目の私たちがいきなりターゲットであるオーナーを行方不明にしたら発覚が早まってしまう危険性があるな。何か考えねばならぬだろう。



「おし、ちよつくら用を足してくるかな……。」

奥に一人でいた男が独り言をつぶやきながら席を立った。手にはアタッシュケースが握られており、おそらくトイレまでもつていくつもりなのだろう。私は不自然にならないように気を付けながら後をつけた。

彼がトイレに入ったのを見て私もそれに続く。幸いトイレの中には関係者以外立ち入り禁止の区域なのもあってか他に誰もいなかった。私は小便器の前の荷物棚にアタッシュケースを置いて用を足そうとしている彼を、後ろから羽交い絞めにして気絶させた。懐からケースのカギを拝借し、そのまま近くの掃除用具入れに放り込んでおく。アタッシュケースを回収してトイレを出た。

トイレから待機場所へ戻る道すがら、ほかの下準備も行っていく。まず人目につかない場所の消火栓に細工を施す。陽動装置を取り付け、遠隔操作で作動させられるようにした。脱出プランはこれでいいだろう。ついでに近くでアタッシュケースの中身も確認しておく。案の定、中は札束がぎつしりと詰まっていた。一通り終わらせた私は集合場所へと戻った。

「・・・なかなかいいわね。これ。」

「うぐぐ・・・。なんで私が・・・。」

「着替え終わったようだな。」

「あら、47。そのケースは？」

「裏金だ。ほかのマジシャンから借りてきた。」

「そう。で、どういうプランで行くのかしら？」

「最初は当り障りのないマジックをやっていく。クライマックスで脱出マジックを行い、その最中に遠隔で火災報知器を作動させる。」

「なるほど。その混乱に乗じて撤収というわけね。」

「消失マジックの箱に入れた後、一旦おとなしくさせる必要がある。キュラソー、頼めるか？」

「人を気絶させるのはお手の物よ。」

「よし、では準備をしよう。終わったら二人は先に楽屋へ行け。私はこいつを渡して協力を仰いでくるとしよう。」

上の劇場ではどうやら客が入り始めたようだ。私たちは水槽を落下予定地点に移動させ、中に苛性ソーダ水溶液を入れた。蓋を開け放し、糸を張って落ちた衝撃で閉まる

ように工夫しておく。準備が完了したので2人は楽屋へ向かった。私は客席後ろ上方の貴賓席へと向かった。部屋をノックし、中から返事があると私は中へ入った。

「おやおや、君は今回初参加の。どんな要件かな?」

~~~~~

『アレが行政長官のノブ。この街を発展させた敏腕政治家。優秀な釘は打たれる運命にあるのよね。』

~~~~~

「折り入ってご相談が。」

「ほほう、何かな?」

「今回のショーで人が消えるという奇術を行いたいのです。そのためにご協力を仰ぎたく。」

「ふむ……。しかしなあ、協力といっても……。」

「無論、タダでは言いません。」ゴト

「ふうむ・・・考えておこう。」

「演目の最後に行く予定です。その際は。」

「・・・私もたまには市民の皆様と同じ目線でショーが見たいと思つていたところだ。」

「左様でございますか。」

「私は観客席の左上方にいる。・・・ああ、これは独り言だ。」

「そうですか。では私はこれにて失礼いたします。」

「ああ、期待しておるよ。」

ボタン

「・・・ふん、卑しい奇術師め。こんなはした金で私を動かそうなどと。まあ蔑ろにするわけにもいかないのだがな。」

楽屋ではブルートキュラソーが周りの視線を釘付けにしていた。この分ならばステージ上でも十分注目を集められるだろう。スタッフと簡単な打ち合わせを行い、そしてついに我々の出番がやってきた。

#####アプローチ完了#####

~~~~~  
~~~~~

『さあ、いよいよショーの始まりよ。うまくショーに乗じてターゲットを暗殺するのはあなたでもなかなかないわよね。』

~~~~~  
~~~~~

ワーワー

「レディースアンドジェントルマン。今宵は私共のマジックを見に来てくださりありがとうございます。」

ワーワー

「まずは・・・ハッ！」

ボウン

「二人の助手をご紹介しましょう！」

ジャジャーン？

ワーワー

「(なんかノリノリね47・・・。)」

「(仮面に隠れて表情は見えないけれど相当楽しんでるわよねアレ)」

「彼女たちが私の助手のアクアとクオーツです！お見知りおきを。」

「(私たちがいつの間そんな大層な名前になったのかしら?)」

「ではさつそく。初めにご覧にいきますのは・・・」

「ねえねえ。あの人たち。どっかで見たことない?」

「え?うーん・・・そういわれてみれば誰かに似ている気も・・・」

「見間違えじやありませんの?キリエはいろんな人にちよつかいかけてますから。」

「むー!ちよつかいかけてないよ!向こうからくるんだもん!」

「二人とも静かに。ショーが始まるぞ。」

「レオナだつて見覚えあるでしょ?あの男の人とかさ!」

「え?うーん・・・思い出せないな。せめて顔が見えれば・・・」

私は訓練で学んだ炎をまとうマジックや、水を操るマジック、トランプを宙にはばたかせるマジックなどを行った。時折助手の扱いであるブルーとキュラソーも見とれていたのは想定外であったが。何とか滞りなく最後の演目まで来た。客の反応も上々だ。

客の中にコトブキの面々が観覧に訪れていたのを見つけたときは一瞬動揺したが、何とかバレずに済んでいる。

「さあさあ、皆々様。残念ですが次が最後の演目となつてしまいました。最後は世紀の人体消失の奇跡を御覧に入れましょう。」

ワーワー

「では誰かひとり、実験台になってくださる方を・・・おや！おやおやおや！」

「(わざとらしい大げさな表現もうまいわねー47)」

「行政長官のノブ様ではありませんか！どうでしょうノブ様、ご協力願えませんか！どうか！」

「ふむ・・・いいでしょう。私がやります。」

ワーワー

「ありがとうございます！これは私も一層気合を入れてかからねばなりませんね。」パチン

カラカラカラ

「ここに用意しましたのは何の変哲もないただの箱でございます。ノブ様、お手数ですがおかしところがないか確認をお願いいたします」

「ふむ……何も無い。穴もなければ正面以外に扉もない。何の変哲もない木の箱ですな。」

「ありがとうございます。ではノブ様。この中へお入りください。」チラツ

「(はいはい……) どうぞこちらへ〜!」

「うむ。」

「では皆さま、今からこの箱のふたを閉め、布をかけます。私がワン、ツー、スリーといえますと、この中のノブ様が一瞬にして消失してしまふのであります!」

ワーワー

「では参りますよ。蓋を閉じてください。」

「わかりました。」ギィィィバタン

「そして先ほどの奇術でも使ったこの布を箱にかけます。」バサア

「(今よ!)」

「(ええ。)」

キュラソーが後ろの布を整えるふりをして、隠し戸をあける。そして素早く静かにターゲットの首筋に手刀を食らわせた。



「うぐう！」ドサッ

「それでは参ります！ワン！ツー！…スリー！」

ガタンボウン！

オオオオオオ！

ツーからスリーになる段階で箱の下側の隠し扉が開き、気絶したターゲットが下に落ちていく。すぐに扉がしまり、派手な音と煙とともに前方部の扉を開ける。もちろん中は空っぽだ。客はみな一様に驚いている。前3組のマジックしか見ていなかったが、テールカードマジックや言い当て系のものばかりであまり見栄えがしないものばかりだったのもあるのかもしれない。

~~~~~

『ターゲットのノブは予定通り水酸化ナトリウムの中へ入ったわ。すぐに気が付いて脱出を試みたようだけれど、蓋が閉まっついて出られずそのまま。任務完了よ。脱出して頂戴。』

~~~~~

ターゲットはどこへ消えたのか、客へもつたいぶるようにふるまいつつ、私はポケットの中の携帯を操作し火災報知機を作動させた。

ジリリリリリリ!!!

ザワザワザワ

「場内の皆様！火災報知器が作動しました！確認がとれるまで係員の指示に従って避難をお願いいたします！」

「よし、会場は混乱している。舞台裏に下がるぞ。」

「OK。」

「了解。」

私たちはそそくさと舞台袖へ退避し、スタッフが行う避難誘導に従って外へ出た。避難のためにホール正面の広場に集まっている。人ごみに紛れて我々だけ近くの路地に入った。そのまま脱出しようとしたが突如ブルーが叫んだ。

「あーっ!!」

「びっくりした。どうしたのよ。」

「何があつた。」

「私たちまだ着替えてないじゃない！」

「そういえばまだバニーガールのままだったわね。」

「それがどうした？」

「何言つてんのよ！こんな格好で外出歩けるわけないじゃない！！」

「今まきに出歩いているんだが？」

「そういうことじゃないわよ！！とにかくホールに戻るわよ！」

「ちよ、ちよつとブルー。何も戻らなくても……。」

「パット見近くに洋服屋はないし、戻って元の服に着替えなおすのが一番手っ取り早いでしょーほら、行くわよー」

「しかし、服ならばそのあたりで調達すれば……。」

「い・く・わ・よ・!!」

「……47、ここは素直に従ったほうがいいみたいよ。」

「……のようだな。」

急遽ホールに戻ることにになった。恰好が恰好だけあつて人目に付くのはまずい。

慎重に路地を通り抜けつつ、ホール側面の扉まで戻ってきた。

「出てきて！ぷりり！」プリー

「手際がいつもよりいいわね。」

「いつもそのくらい手際が良ければ良いのだが。」

手早く全員がブルーのプクリンに乗り、扉を乗り越える。そのまま近くの窓から侵入し、ターゲットが死んでいた隠し部屋へ向かった。隠し部屋にはまだ誰も来ていないようだ。既に火災報知器は鳴りやんでいるためここにも人が来る可能性が高い。

「ブルー、早くしろ。」

「わかってる！えつと、どこへ置いたっけ……。」

「こつちよ。早く。」

「わかってるってば！……って47！あっち向いてて！」

「なぜだ？」

「47……さすがにそれはどうかと思うわよ。女性への対応は訓練に入ってたのかしらっ？」

「ああ。そういうことか。わかった。」

私は後ろ、つまりは入ってきた扉のほうを見張ることにした。が、振り向いたと同時に扉があいた。

ガチャ

「こんなところに部屋あったよ！」

「ちよつとチカ！そんな勝手に入っていったら・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「えつと、どちら様？」

「・・・ここは立ち入り禁止のはず。あなた方は何者ですの！」

「あれ？さっきの奇術師さんたちじゃ？」

「・・・いわれてみれば！ノブ長官がいなくなった時の奇術師！」

「戦闘体制に移行したほうがよさそうね。」

「ちよ、ちよつとま…まだ着替えてない・・・。」

「その暇は無いようだぞ。」

「あつ！思い出しましたわよ！あなた方！あの時の！」

「私も思い出した！アイシーエーとかいう暗殺屋！」

「アクアさんってやつぱりブルーさんだったのか！」

「ということは……ノブさんも！」

「……。」

「とりあえず、お話を聞きたいですから。私共と来てくださいますこと？」

「断ると言ったら？」

「そりゃもちろん……。」

「実力行使ですわ！」

ヒュッ

バシンバシン

ガツガツ

案の定近接戦闘に発展した。チカの繰り出したキックを軽く受け流し後ろに下がる。既にブルーたちは着替えが完了していた。私は急いで指示を飛ばす。

「やむを得ない。ブルー、あいつらの足元を攻撃させて目くらましを。キュラソーは私

と共同で気絶させるぞ。」

「了解。」

「まあそうなるわよね……。出てきて！ニドちゃん！」

ガーツ！

「な、なに!? あれ!?!」

「あんな生き物見たことありませんわ!」

「ニドちゃん! メガトンパンチ!」

ガアア! ドゴオオオン!

「きゃあ!」

「うわあ!」

ブルーのニドクインが3人に素早く近寄ると足元に向かってメガトンパンチを炸裂させた。激しい土煙が巻き上がる。その隙に私が右側から、キュラソーが左側から素早く近寄り、チカとキリエの鳩尾に拳を食らわせる。二人は軽いうめき声とともに崩れ落ちた。残るエンマも2人が倒れたことに気が付いた時にはすでに私が後ろに回り込み、首筋に手刀を食らわされていた。

前回の任務では協力者にもなりえるということコトブキ飛行隊の面々には記憶処





「そっか。」

「それで、あのホールで何があった。ノブ長官も行方不明だし。」

「あ！そうそう！アイシーエーが出たんだよ！」

「ICAが？・・・そうか！あいつらがノブ長官を！」

「たぶん。でも長官がどこへいったのかはわかんない・・・。」

「死体も今のところ発見されていない。だがICAが絡んでるならもつとくまなく探させたほうがいいな・・・。」

「うーん・・・。」

「あ、キリエ。」

「あれ・・・、ここは・・・。」

「うむむむ・・・首が痛いですわ・・・。」

「エンマも。二人とも起きたか。ここはアタザキの診療所だ。お前たち三人はホールの下の部屋で倒れてたんだ。」

「くっ・・・わたくしがもつとしっかりしていれば・・・。」

「そういえばあいつら見たことない生き物を従えてたね。」

「ああ、あのでかい怪獣でしょ？あんなの凶鑑でもみたことないよ。」

「なんだ？それは。」



・「過激なマジシャン」

【+1000】『タキシード・バニーガールに変装する。』

・「裏の方策」

【+3000】『ターゲットに裏金を渡す。』

・「ノーストップショー」

【+5000】『ホールの舞台でマジックショーを行う。』

・「空でも陸でも」

【+3000】『コトブキ飛行隊のメンバーと戦闘する。』

## HITMAN 2 『アサシネーション・レポート』

『シルバー！まだケーキ買ってねえよな?!・・・あぶねえ。あぶねえ。』

『情報部のキャロ・・・キャロットとかなんとか言う嬢ちゃんがケーキ予約してくれただ。だから買ってこなくていいぜ!』

『ああ、現地についたんだな。このシヨッピングモールはかなり規模がでかいから迷うなよ?地下はなんと12階まであるらしいぜ!ちよつとした軍事基地みたいだな!』

『オープン記念パーティーは地下6階でやってる。招待チケットはちゃんともらってるよな?』

『あんまり長居するなよ!ちやちやつと済ませてこい!帰ったらクリスマスパーティーだ!』

~~~~~

「ねえ、シルバー?アタザキでも思ったのだけれど、あなた達のオペレーターはいつもああなの?」

「あはは．．．まあ、そう．．．ですな。」

年が離れている上、得も言えぬ「圧」のようなものを普段から感じていたため、あまり話したことのないキュラソーさんとの任務に若干緊張している自分がいる。

自分たちは今ショッピングモールの完成披露パーティ会場のすぐ外のホールに居る。エレベーターでここまで降りてきたが、来るまではなかなか大変だった。まず、ICAの用意した車両で最寄りの駐車場に降ろされた。外はかなりの豪雨で、地面は至るところが川のようになっている有様だった。傘は殆ど役に立たず、車を降りてからの数分で足元がびしょ濡れになった。幸いにして雨合羽を着ていたの上は濡れずに済んだが。エレベーターホールのある建物は周りより数段嵩上げがされており、エレベーターホールにまで到着してしまえば問題はなかった。というわけで今エレベーターから降りてきたところというわけだ。

ホールの中央部は吹き抜けになっており、上は外が見え、下は地下12階まで完全にぶち抜いてある。巨大な縦穴の側面に通路や店舗があると云ったほうが良いだろう。よくもまあこんな大掛かりな施設を作ったものだ。地上部分はガラス張りになっていることから、おそらく日光を地下12階まで届けたいという意図が伺える。

「さあ、さっさと行くわよ。」

「あ、はい。」

施設の大きさに圧倒されていると、キュラソーさんはほとんど興味がなくなってしまうかとパーティ会場へ進んでいってしまった。僕もあわてて後を追った。パーティ会場では既に飲み食いが始まされており、ウェイターがせわしなく動いていた。

ガシャーン！

「き、君！何をしているんだね！」

中央のテーブルで一人のウェイターが金属製の皿をひっくり返していた。すかさず主任と思わしき男が注意しに行っている。みんなびつくりしてそちらを注視したが特に気に留める様子もなくパーティは続いた。ウェイターは片付けをして奥のスタッフルームへ下がって行った。

ともかくまずはターゲットを探さなければならない。僕たちは二手に分かれて会場内を探すことにした。発見次第お互いに無線で知らせる手はずだ。僕は会場内を、キュラソーは会場の外を探す。


~~~~~

「古典的な方法でよければ一応策はありますけど。」

「ふうん？聞かせてもらいまししょう？」

「僕たちどちらかがターゲットの服にワインでも引つ掛けてやれば良いんです。そうすれば着替えるなりなんなりで報道陣の前からは居なくなると思います。」

「そして一人になったところを見計らつてもうひとりがつてことね。良いと思うわ。」

「ありがとうございます。じゃあ僕がワインを引つ掛けに行くので本番はお願いします。」

「わかったわ。」

とりあえずプランが決まった。まずはワインを調達しないと。適当なテーブルに近づいてグラスを取る。そこに適当に赤ワインを注ぐと、それをもってターゲットに近づく。不自然にならないように近くのテーブルの食事を物色している風を装って徐々に距離を詰めていく。

このくらいでいいかな……。よし！行くぞ！何かを思い出したように踵を返し、ターゲットに体が向いた瞬間にわざと大きく前につんのめる。

「おわつと！」

バシヤ

「うわ！」

「ああ！すみません！躓いてしまつて！」

「あーあー・・・ワインが・・・。」

「本当に申し訳ありません！今拭くものを・・・。」

「あー、いいよ。どうせ拭いても落ちないよこれは・・・。」

「本当に申し訳ありません・・・。」

「まあ過ぎたことは仕方ない。すみませんみなさん。少し着替えてきます。」

「弁償させていただきます。」

「いいつて。それよりトイレはどこかな？」

「あ、トイレならそこから会場を出て左へ行つたところです。」

「ん。わかつた。ウェイター。何か着替えをもらえないか。」

「かしこまりました。ご用意してお持ちいたしますのでトイレでお待ち下さい。」

ターゲットは無事に会場外のトイレへ歩いていった。自分はウェイターが後始末を

しているさなかの喧騒に紛れて会場の隅に移動した。

「キュラソーさん。ターゲットは会場を出て左のトイレへ向かいました。追えますか？」

「問題ないわ。それよりも気になることがあるのだけれど。」

「なんですか？」

「あなた。なんで敬語なの？」

「え？」

「一応私のほうが後輩だし、身分的には同じエージェントで変わりないというのに。」

「いやでも、年上ですし・・・。」

「47のことは47って呼んでるのに？」

「あー・・・ええつと・・・。」

「・・・まあいいわ。ターゲットを確認した。尾行を開始する。」

「あ、後から着替えを持ったウェイターが行くはずですので注意してください。」

「わかったわ。」

変なところで自分の呼び名を気にしていたみたいだ。意外に親しみやすいのかもし

れないな……。任務が終わったら話しかけてみようかな。ともかく、自分も一旦会場の外へ出た。

「冷たっ！なんだ……。？」

会場から出て壁伝いに移動していると急に背筋に水滴が垂れてきた。どうやら天井から雨漏りしているらしい。新装開店のショッピングモールで雨漏りとは、施工に問題がありそうだな……。

~~~~~

『シルバー、聞こえる？バーンウッドよ。ちよつとやつてもらいたいことがあるの。その施設の地下4階に管理室があるのだけれど、そこへ行ってこの施設の設計図を手に入れてほしいのよ。この施設は非常に特徴的な構造をしていて、技術部が是非調べたいと言っているわ。面倒かもしれないけれどよろしく願いますわ。』

~~~~~

設計図か。確かに素人目でもこの施設がかなり大規模かつ野心的な設計をしているのがわかる。地下12階ぶち抜き吹き抜けなんてそうそう見れるものでもない。面倒かもしれないとバーンウッドさんは言っただけで、自分もこの施設の設計図なら興味がある。僕はエレベーターに向かった。

くキュラソーsideく

前回のアタザキの任務でも、ブルーとは普通に同僚のように話せていた。タバサはもとよりあまり口数が少ないため話す機会に恵まれていないが、話すときは問題なく意思疎通が取れている。しかし、シルバーとだけはなんというか“上司と部下”みたいな関係になってしまっている。少年探偵団の子どもたちと出会ってからというもの、人との接し方にもだいぶ柔らかくなってきたと自負している。にもかかわらずまだシルバーとだけは打ち解けられていない気がする。バーンウッドさんに相談してみるのもいい



ん？吹き抜けの客がウェイターの男性に何か話しかけられてぞろぞろと会場内に戻っていくわね。なにか重大発表でもあるのかそれとも今の地震で念の為集合をかけたのか。いずれにせよ好機到来。ターゲットは地震など意に介さず、今まさにトイレに入っていた。吹き抜けの客は見渡した限りではいなくなつた。ウェイターが一瞬こちらを見たけれど、すぐに柱の陰に隠れたおかげで気が付かれずに済んだ。ウェイターが別の方へかけていったのを確認して、私はトイレの中へ侵入した。

トイレの中では個室の扉を開け放して中の荷物掛けの部分に背広をかけていたターゲットがいた。位置関係的に気が付かれずに後ろに回り込むのは困難。先程から館内に流れる音楽が止まっているせいで変に静寂の空間になつているので、騒ぎが起きれば先程のウェイターが飛んでくる可能性もある。ここは静かに確実に処理しなければならぬわね。

トイレの中を冷静に観察すると、天井から吊られている照明が目についた。2本のワイヤーによつてつらられている照明で、ワイヤー自体は短いものの、電灯がそれなりの長さなのでもしかすると……。まあ失敗しても気を逸らせるくらいはできるでしょう。私はクルーガーマイヤーで2本のワイヤーのうちの一本を切った。

バシユン

バチチ

ゴツ！

「ぐわー！」

ドサツ

片方のワイヤーが切れた照明は振り子のようになり、すぐ下にいたターゲットの後頭部へ命中した。その際に軽く電気ショックが流れたようで、ターゲットはそのまま個室内に倒れ込むようにして気絶している。よし、あとは首を折ってやれば……。

グラグラ

「っ!!」

ガラガラガラ!!

ドゴオオン！

また地震が起こって私はとっさにトイレの端までバックステップで下がった。その瞬間、先程ワイヤーを切った照明の部分の天井がまるごと崩れ落ちてきた。大量のコン





「・・・キュラ・・・聞こえ・・・。」

「え？何？シルバー？通信状態が悪いわ。よく聞き取れない。」

「吹き・・・来て・・・。」

「吹き・・・吹き抜けてことかしら？」

私は念の為潰れているターゲットの頭部に一発お見舞いしてから、一旦吹き抜けに戻ることにした。今思えば、あのときの私はまさかあんなことになるなんて想像もしていなかったわ。

#####  
# # # # ニュース速報 # # # #

『富坂市中心部を流れる羽代川の堤防が決壊したとの情報が入りました。市の西部では大規模な浸水が発生し、多数の行方不明者が出た模様です。・・・富坂市より緊急避難命令が出されました。避難命令が出された地域の皆さんは、速やかに避難を開始してください。避難命令が出たのは次の地域です・・・。』



「それが……。」

『どうしたの?』

「既に何回か送っているのです。最初に通信レベルが途絶えたときに念のために無人機を1機現地に飛ばしています。しかし、その無人機からも現在応答がありません。」

『どういうこと……?』

「わかりません。座標情報や簡易レーダー情報まで消失しています。最終座標と高度から推察すると、おそらく……墜落したものと思われます。それが事故なのか撃墜されたのかはまだわかっていません。」

『すぐに代わりを送らなかつたの?』

「送りました。今度は更に念を入れて無人ヘリ2機と有人のブラックホークを1機。しかし、それらすべてからの応答すら今はありません。」

『一体現地で何が起こっているというの……。』

「航空機になんらかのアクシデントが起こる特殊な世界なのかもしれません。地上要員の派遣を検討中ですが、なにぶん渡界機で出た直後の場所ですら浸水被害が発生しているありさままでして。」

『……わかつたわ。通信、アラスカへつないで頂戴。』

「アラスカですか?……第6基地ですね。」



## HITMAN 2 『デイズター・レポート』

『富坂市へようこそ。47。』

『この世界は発見されたばかりだね。まだ我々の通信衛星が整備されていないから現地の携帯基地局を使って通信を行っていたのだけれど、どうやらその基地局は早々に崩壊してみた。そのせいでシルバー達と連絡が取れなくなっているわ。』

『47。あなたには技術部が作った特製のタキオン通信機をもたせるわね。これで私達との連絡が途絶えることはないわ。シルバー達2人分のも同時にもたせるから彼らに合流したら渡して頂戴。』

『あなたが今いるのは梅川区よ。できるならばそこにあるICAの臨時セーフハウスへ連れてきて頂戴。シルバー達が向かったのは葦沢ジオセクションのシヨッピングモール。ここから川を挟んで5〜6キロつとところかしら。』

『事態は急を要するけれど、水害にも気をつけてね。幸運を祈ってるわ。』

~~~~~

くキュラソー side く

「な、なによこれ……。」

吹き抜けに戻ってきた途端、館内は停電した。それとほぼ同時に地下7階、このすぐ下の階層の側面から勢いよく吹き抜けの下に向かって水が流れ落ち始めている。あんなところに滝など流れてなかったはず。時折大きな音がしてはいろいろな箇所から水が溢れ出ている。いろいろな箇所が崩れ始めており、このままでは地下施設全体が水没するのも時間の問題。エレベーターは当然のように動かず、非常階段も出入り口から水が吹き出している始末。これは……かなりまずい状況ね。

「キュラソーさん！」

「！シルバー！」

「掴まってください！」

上の階から大きな鳥、シルバーいわくドンカラスというポケモンらしいけれど。それ

に掴まりながらシルバーが降りてきた。私は彼の手を取って引き上げてもらい一緒にドンカラスに掴まった。

「シルバー、これは一体！」

「大雨で近くの川が氾濫したみたいです。ここももうすぐ崩壊する可能性が。」

「欠陥構造にもほどがあるわね。でもこんな早く水が来るかしら・・・？」

「とりあえずこのまま一旦外へ出ましょう。」

「そうね。このまま上へ・・・。」

ドンカラスに掴まって上昇し、地下3階まで上がったその時。

ゴゴゴゴゴ

「な、なんだ？」

ガヤシャーン!!

「うわ!!」

「シルバー！横へ避けるのよ！」

「ドンカラス！」

ガー!

ガラガラガラ

ガシャーン!

天井部分で雨風を防いでいたガラス天井が突如として崩壊した。上からは大型トラックや乗用車、はては道路標識や信号機まで水に流されて落ちてきている。私達はとつさに地下3階めがけ急旋回、間一髪で難を逃れることに成功した。しかし……。

「ドンカラス! 大丈夫か!」

カ、カア……

「翼を怪我している。おそらくガラス片で切ったのね。これではもう飛べないわね……。」

「すまない、ドンカラス。ボールの中でゆっくり休んでくれ。」バシユーン

「それにしても弱ったわね。これでは上の階までどうやって行くか……。」

「階段は……だめだ。瓦礫で埋まってる。エレベーターは扉が開けっ放しで動きそうにない。」

「となると、やっぱり自力で上に登るしかないわね。」

「!! キュラソーさん! 下!」

「水嵩が増えてきている! このままだとここも水没しかねないわ! とにかく上に登る方法を探すわよ!」

「はい!」

私達は手分けして登れるところがないか探した。しかしまともな道など既になく、上りエスカレーターも途中で瓦礫片によつて塞がれてしまっている。だが他に道がないためここを通るしかなさそうだ。

「瓦礫どかします! 出てこい! オーダイル!」グワー!

「オーダイル! この瓦礫をどかすんだ!」

ガラガラガラ

ドボン!

オーダイルは腕力を使つて瓦礫を少しだけ持ち上げ、そのまま横にずらして階下に落とした。階下では中々な波が立ったようだ。

「よし、これで通れる！」

グラグラグラ

「シルバー！離れなさい！」

「うわ！柱が！」

ガラガラガラガシャーン！

大きな瓦礫をどかしたことや、オーダイルの重量でこの近辺の重量バランスが崩れたのか、隣りにあった柱がまるごとすっぽぬけ、そのまま瓦礫を撒き散らしながら吹き抜ける反対側に向かって倒れ込んだ。派手な音を立ててぶつかり、そのまま止まった。

「チャンスよ。この柱を伝いましょう！」

「了解！」

私達はダッシュで柱でできた橋を伝って反対側に渡った。渡った先は地下2階のようだ。渡った直後、柱は音を立てて真ん中から折れ、そのまま階下に崩れ去った。一番下の水面には何人かはしごを登ろうとしていた客と思わしき人影があった。柱が落下

したことによって大きな波が立ち、その波がのこっていた数人の人影を消し去った。

「間一髪でしたね……。」

「休んでる暇はないわ。早く地上に出ないと。ここもいつ崩れるか……。」

つかの間の休憩をとっているさなか、またもや私達のいるフロアが音を立てて崩れ始めた。私達は急いでまだ無事なエスカレーターを通り、地下1階へ。そのまま地上へと脱出した。

〈47 side〉

「〃蕪沢区の〇×ストアなどでは床上まで浸水している映像がSNS上に挙げられており……。」

ラジオが災害情報を流し続けている。梅川区のセーフハウスは今の所道路が一部川

のようになっていてただで浸水被害などはない。だがこの雨の様子だと遠からずここも浸水が始まることだろう。幸いセーフハウスはマンションの6階部分にあるため沈むことはないだろう。私は災害用の準備を整え、セーフハウスをあとにした。

マンション地下の駐車場から車で出発する。道路は相当に混んでいるため蕪沢区に到達するのにだいぶ時間がかかりそう。しかし2人の回収が目的なので徒歩で行くわけにも行かない。この点は諦めるほかないだろう。

幹線道路を西に進み、川を2つ超えた途端に道路が完全に冠水している地点まで来た。警察車両が道を塞いでおり、その先はまさに川だ。私は橋の上に車を止め、誘導している警察官に声をかけた。

「蕪沢ジオセクションまで行きたいのだが。」

「あんた正気か？これが見えないのか？蕪沢ジオセクション周辺は一番浸水被害がひどいところだ。交通機関は全部ストップしてるし、道路は冠水。どうやったって行けるわけがない。」

「だが私の友人がそこにいて迎えに来てほしいと。」

「だつたらおそらく避難してると思うぞ。ちよつとまつてる・・・あった。蕪沢ジオセクションの避難民は西インターチェンジに行ってるみたいだ。そつちの方はまだ冠水し

てるって情報はないから行けるかもしれないな。」

「わかった。ではそちらへ向かってみる。」

「気をつけるんだぞ。あちこちで浸水被害がでてる。今まで通れた道が通れなくなることもザラなんだからな。」

「わかつている。協力感謝する。」

私は警察官に別れを告げ、車に戻って一路西インターチェンジへ向かった。雨は強くなる一方で、ラジオでは東地区でも一部が浸水被害が発生し始めたと報道している。急いだほうが良さそうだ。私はアクセルを踏み込んだ。

くシルバースideく

やっとの思いでショッピングモールから這い出てきた僕たちは周りの状況に愕然とした。道は冠水しているどころか一部が陥没していて文字通り池になってしまっている。地上の大型デパートの前の道路など道全体が陥没していて完全に道路が寸断されてしまっている。街頭大型テレビでは災害のニュースをしきりに流しているが、その映

像はかなり乱れており、音声だけがまともに聞くことができる状況だ。

「さて、ここからどうしましょうか。」

「とりあえず北にある葦沢駅にいきます。そこならもしかしたら電車が出てるか
も……。」

「電車ねえ……でてるかしら。こんな状況で。」

キュラソーさんの視線の先には地盤が緩んで傾いたビルと至るところから吹き出している水柱があった。

「……動いてなくても避難先の案内ぐらいはしてくるはずですよ。多分。」

「はあ……。本部との連絡はつかないの？」

「全く。通信は常にオフラインですね。電波そのものが来ていないみたいです。」

「基地局がやられたわねこの分だと。とりあえず駅に向かいましょうか。」

「はい。」

僕たちは雨の中を揃って歩き始めた。雨合羽は一応あるけれど、道路が冠水している

ところが多く、足元は完全にずぶ濡れ。そこからじわりじわりと体温が奪われていく。途中の段差はキュラソーさんが軽快に飛び上がりその手に引かれて自分も上に上がった。ところどころ陥没している道を避けながらなんとか葦沢駅へ到着した。しかし、動いてなくとも避難先くらいは把握できるだろうと踏んでいた自分たちの考えは、あまりにも甘すぎたと現実を突きつけられることになる。

「……」

「あーあー……。これは……。絶対に動かないわね。」

改札口から見えるのは駅の中央に空いた大穴と、その穴から水に流されて押し出されたのだらう電車の車両だった。下のホームは完全に冠水しており、大量の水によって押し流されてきた車両が至るところに乗り上げている。とても走るところの話ではなかった。近くに警察官がいたため現状を聞くことにした。

「あの、電車は……。動きそうにないですね。」

「そりゃあご覧の有様だからね。」

「避難をしたいのですがどこへ向かえばいいですか？」

「ああ、それならそろそろ避難先へ向かうバスが出るから。それに乗るといい。」

「そのバスはどこへ行くんですか？」

「駅の北側にあるバイパスを通って富坂西インターへ向かうみたいだよ。」

「わかりました。ありがとうございます。」

キュラソーさんのところへ戻り、現状と避難先への情報を伝える。キュラソーさんは思案顔で少し考え込んでいた。早いところバスのところへ向かったほうがいいのではないだろうか。そう話しかけようとする前にキュラソーさんが口を開いた。

「私達は私達で避難するべきよ。」

「どうしてですか？」

「この雨。この災害。避難先ですら安全とは言い難い状況よ。その他大勢に左右されやすい避難バスでの移動は逆に命取りになる可能性があるわ。」

「なるほど……。でもそれならどうやって避難するんです？」

「移動手段ならそこら中にあるでしょ。」チラッ

キュラソーさんが目を向けた先、駅の西側には立体駐車場があった。なるほど。足は

自分たちで用意するべきか。お互いに頷きあうと立体駐車場に向かった。

〈 47 side 〉

私は今市の中央を走る高速を走っていた。東インターチェンジ付近も川のようになっていたがなんとか高速に乗り、そのまま西インターチェンジへ向かっている。

グラグラグラ

「!!」

キキーツ！ガシャーン！

あぶないところだった。車で走っていてもわかる揺れに見舞われ、対向車が操作を誤り中央分離帯を乗り越えてこちらに飛んできた。そのまま後続を走っていた別の車に衝突したようだ。もはや安全な場所はどこにもないことを痛感させられる。一息ついたのもつかの間、再び大きな揺れが起こった。

グラグラグラ

ボガアアン!

っ! まずい! 目の前の鉄道の高架橋が崩壊した! 私はハンドルを切り、半ばドリフトのような形で中央分離帯を乗り越え、対向車線に移動する。その直後、今まで走っていた道の真ん中に高架橋が落下して道を塞いだ。幸いまだこちらの車線はつながっているが……。急がなければいつこちらにも通れなくなるかわかったものではない。

崩壊しつつある柿沼サーピスエリアをミラーに見つつ私は更にアクセルを踏み込んだ。

くキュラソールsideく

「うーん……。だめね。やっぱり動かない。」

「どうしましょう……。他に路上駐車している無事な車なんてないですよ。」

立体駐車場に来たはいいものの、停電しているらしく装置が全く動かない。他の路上駐車車は陥没している地面にめり込んでいるか、瓦礫の下敷きになっている。あたりに動きそうな車はなく、あるとすればここだけだ。流星にこの災害のさなかを徒歩で移動するのは避けたい。

私は立体駐車場のすぐ目の前に駅舎があるのを確認した。仕方ない。少し強引だがやれないことはないだろう。

「シルバー、車を調達するわよ。」

「え?でもどこにも。」

「あるじゃない。この上に。」

「え!?!」

私は近くの扉をロックピックでこじ開け中へ入った。シルバーも慌てて追ってくる。扉の中は整備用や不測の事態のために、収納している車のところまで登れる階段があった。どんどん登って行き、3階部分まで車はなかったが4階分まで登ったところにシビックがあった。ウィングもついていてボンネットは改造されている。持ち主は相当な車好きみたいね。

「これに乗るわよ。」

「え、でもどうやって出るんですか？」

「そのまま出ればいいじゃない。」

「まさか・・・冗談でしょう!？」

「それしかないわよ。」

明らかにシルバーは呆れ顔だがやれないことはないだろう。外壁はアルミ製のようだし、この車は見たところパワー系統も改造が施されている。足元のロックさえ外してしまえば壁を突き破って飛び出すことは可能だ。葦沢駅は箱型のビル駅であり、作業用の小窓から外を見た限り屋上部分は平らだ。なんとかなる・・・とおもう。私は車輪の部分のロックを手動で外し始めた。シルバーも観念したのかロックを外すのを手伝い始めた。

ロックを外すのに思ったより時間がかかってしまったが、シルバーのポケモンたちの助力もあってなんとかかすべて外すことができた。私達はドアをピッキングで開けて車に乗り込んだ。配線を弄ってエンジンをかける。・・・かかった。さあ後は空に向かってダイブするだけ。

「準備はいいかしら？ シルバー。」

「ちよ、ちよつとまつてください。深呼吸を・・・。」

「あなたは助手席なんだからそんなことしなくてもいいじゃないの。」

「心の準備つてものがですね・・・。」

グラグラグラ

ドゴオオン！

「！今の音は！」

かなり近くで大きな物が水に落ちる音がした。それと同時にあたりが揺れる。・・・揺れが収まらない。もしかして！私は車から身を乗り出して下を見た。・・・やつぱり！駐車場内に水が入り込んできている！

「シルバー、のんびりしてられなくなったわ。行くわよ。」

「え！えつ、ちよ！」

「歯を食いしばりなさい！」

ブルルウウウン！キュルギユルル！

「うわああ!!!」

ガシャーン!

勢いよく発進した車。壁に当たるほんの僅かな時間のさなかに地面が斜めになった気がした。勢いよく壁を突き破って見えた光景は、あたり一面が陥没しながら駐車場も駅も周囲の建物もまるごと沈みかけている図だった。車があつたのは地上4階部分だったはずだけど、壁から出たときには2階部分くらいまで沈み込んでいた。幸いにしてそれと一緒に駅自体も同じくらい沈み込んでいたので、ちやうど駅の屋根部分に降り立てた。

ガシャーン! キキキー!

「うぐぐぐぐ……!」

「ぐっ……!」

ガシャーン! ドンツ!

そのまま駅の屋根を伝い、反対側の道に降り立った。降り立つ直前、北側にバスが停まっているのが見え、そこへ走り込む人影が見えた。こちらはあちらほど悠長にしては

いられない。降りた瞬間から通った道が崩れ落ちていつている。止まった瞬間穴に落ちることは明白だった。陥没する道を避け、近くの別の建物から落ちてくる鉄骨を避けつつ、離れたところにあつた立体駐車場から降り注ぐ数台の車を避けて高速の入口へ入った。まさに間一髪というところだろう。今どきハリウッド映画でもここまで派手ではない。

「これが映画ならかなり制作費がかかつてるわね。」

「冗談じゃない！なんでこんな目に！」

「生きてるだけありがたいと思いなさいな。」

「あんたも頭いかれてる！正気の所業じゃないぞ！」

「ふふん、シルバー、敬語忘れてるわね。」

「え？あ・・・。」

「やつとまともに話せた気がするわ。」

シルバーは気恥ずかしそうにうつむいてしまった。私はバックミラーに映る駅だったものが水面下に没していくのを尻目に車を走らせた。

〈 4 7 s i d e 〉

もう少しで西インターチェンジだ。決してまともな道とは言えなかったが、なんとかここまでたどり着けた。ロータリーの部分ではレスキュー隊の人間が数名待機していた。私は道路の脇に車を止めた。それを見てレスキュー隊が駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか！よくここまで来ましたね！」

「人を探しにここまで来た。10代くらいの赤毛の男の子と20代くらいの銀髪の女性はいないか？」

「いや、まだここには来てない……。だけどあなたもここにとどまったほうがいい。もうあちこち陥没しててまともに車で帰るのは無理だ。」

「そうか……。蕪沢ジオセクションの避難民はどこに？」

「最後の避難バスがそろそろ来ると思うんだが……。ん？」

レスキュー隊が見た先から車のライトの明かりが見えた。私は外壁に近寄ってその車を確認する。……運転席にキュラソー、助手席にはシルバー。なんとかふたりとも

無事だったようだ。

私が手をふるど気がついたのかパッシングをしてスピードを緩めた。そのままスロープを登ってこちらまでやってきた。

キキーツ

「ふたりとも無事だったか。」

「47。迎えに来てくれたのね。」

「む、シルバーはどうした？」

「疲れて寝ちやつたみたい。ちよつと色々あつてね。」

「そのようだな。車が傷だらけだ。」

「それはお互い様みたいだけど？」

「それもそうか。」

「それで、シルバーが起きるまで待つかしら？」

「休んでる暇はない。あちこちで陥没と浸水が起きている。大至急脱出するぞ。」

「やっぱりね・・・了解。」

私は車を切り返し、もと来た道を先導するように走り出した。キュラソーの車もそれ

「シルバーは!? シルバーは無事なの!？」

『まだわからないわ。47を救援に送ったからきつと大丈夫よ。』

「取り込み中のところ申し訳ありません。現地メディアが葦沢駅周辺の崩壊を伝えています。」

「ああ……。なんで……。どうして……。」

『落ち着きなさい。まだ死んだと決まったわけじゃないわよ。避難民の状況は?』

「メディア情報ではなんとも。別働隊のインフォーマントの情報では避難バスは崩壊前に出発できたそうですが……。」

『そう……。』

ピピピ

「〃〃こちら47。聞こえるか。〃」

「!!」

『ええ聞こえているわ。状況は?』

「〃シルバーとキュラソーと合流した。任務は達成済み、シルバーは疲れて寝ているが外傷はなく問題はない。若干低体温の症状があるくらいだ。〃」

「よ、よかったあ……。」

『わかったわ。至急セーフハウスへ戻って頂戴。』

・「パニック映画」

【+5000】『蕪沢区より車で脱出する。』

・「要救助者発見」

【+3000】『シルバー達と合流する。』

HITMAN 2 『エスケープ・レポート』

ニュース速報 # # #

『富坂市中央部を流れる羽代川が新たに2箇所で決壊が確認されました。海岸線付近でも堤防が決壊し、海水の流入が始まっている地域もあります。港ジオセクションは浸水が進んでおり、既に水没したと未確認情報も入ってきています。これらを受け富坂市は市内全域に大雨特別警報を発令しました。市内に在住している方、市内に残っている方は直ちに避難を開始してください。市内にいる方は全員、命を守る行動をとってください。避難が困難な場合は、できる限り高いところへ上がり、救助を待ってください。』

~~~~~

現在時刻は午後7時。道路はかろうじて無事だが、街灯が停電によって全くついていない。車のライトだけが頼りだが、これだけで走るのはあまりに危険すぎる。私は先程

富坂西インターでキュラソーに渡したタキオン通信機をつなげた。

「キュラソー、聞こえるか。」

「聞こえているわ。」

「あたりが暗くなり道路状況がわからなくなっている。もうすぐ柿沼サービスエリアだ。そこで夜明けまで待つのがいいと思うのだが。」

「いい考えね。こっちの車はちよつと無茶したせいでさつきから変な音がするのよ。一旦降りて見てみないと。」

「では柿沼サービスエリアに寄るぞ。」

「了解。」

私達は速度を落とし、真つ暗闇の柿沼サービスエリアの中へ入っていった。

サービスエリア内には車の姿はなく、施設内も無人のようだ。私は施設の入口の目の前の駐車スペースに車を停める。そのすぐ横にキュラソーの車も停まった。見ると既にシルバーは起きていたようだ。

「シルバー、気分はどうだ。」

「47・・・。来てくれたんだね。」



「今日はここで一夜を明かす。お前の姉さんが心配しすぎて錯乱を起こしてるから早いところ無線をかけてやれ。」

「ええ!? 錯乱って……全く姉さんは心配性なんだから……。」

「まあそういうな。……で、キュラソーの方はどうだ?」

「うーん、なんとも言えないわね。というか懐中電灯だけじゃよくわからないわ。」

「朝を待つほかないか……。とにかく一旦中へ入ろう。」

「でも入り口はシャッター閉まつてるけれど?」

「このシャッターはクラシックハンドル式か……。仕方ない。窓から入るぞ。」

私は近くの窓を調べる。すべてはめ殺しの窓だったので、窓から見えるラウンジから一番遠いガラスをバールで割って内部に侵入した。ここも正直いつ崩壊するかわからない。窓の1枚や2枚どうってことはないだろう。

内部は意外に暖かかった。外から見えたラウンジのような場所はどうかやらフードコートだったようだ。奥にキッチンがある。私はキッチンのガスコンロをつけてみる。……火がつかない。どうやら電池が切れているのかそれとも壊れているのか、スパークが出ないようだ。だが、音を聞く限りガス自体は出ているようだ。

「キュラソー、クーラーガーマイヤーを持っていたな？そいつでガスコンロをつけてくれ。」

「ええ？どうやって。」

「つまみを回せばガスが出る。出始めたらその付近で火花さえアレばいい。」

「んー・・・まあやってみるわ。」

「キッチンごと吹き飛ばすなよ？」

「保証はできないわね。」

カチツ シュー

バキューン！

ポツ！

「うまく行つたな。」

「一歩間違えれば大爆発案件だと思っただけね。」

火さえアレばどうにかなる。早速体が冷えていたキュラソーとシルバーはその近くで暖を取り始めた。私達は倉庫にあった食料をその火で調理して暖を取り、朝を待った。

## 〈災害2日目〉

カチャカチャカチャ

「どうだ。キュラソー。」

「んー．．．これね。」

カチャ ガキンツ！

「よし、これでまあしばらくは持つわ。あとは．．．。」

「大丈夫だって姉さん。どこも怪我していないし．．．低体温？ああ、サービスエリアの中で火に当たりながらスープ飲んだら治ったよ。心配しないで．．．ごめんってばー！」

「アレはどうしたのよ？」

「昨日寝る前に通信を入れておけと言っておいたのだが、どうやらシルバーは忘れていたらしい。」

「なにやってるのよ．．．。」

朝になり、依然として雨は降り続けているが少なくとも暗闇ではなくなった。視界が

確保できる段階までくると、キュラソーは早速車の修理を行った。異音の正体は落下した衝撃で一部の部品が外れ、他の部品にあたっていたために起こったものだった。正面のバンパーは完全にへしやげており、今にも地面に擦りそうになっていたが、サービスエリアの倉庫にあつたガムテープで補強した。

車の修理が終わる頃合いでシルバーが心配性すぎる姉のお小言から戻ってきた。

「ふう、帰ったら姉さんにちゃんと謝らないと……。」

「ふふ、いい姉弟ね。」

「キュラソー……さんにはそういう人居ないのか……ですか?」

「敬語はやめてつていったでしょ。普通に話してくれていいわよ。」

「うーん、なんか昨日から調子が狂うなあ……。」

しかし、そんな束の間の休息は唐突に終わりを告げることになる。

グラグラグラ

「また地震?」

「……むっ!」

ピキピキピキ…

「道路に地割れが発生している。崩れる可能性があるな。急いで先へ進むぞ。」

「なんだって!？」

「・・・本当。シルバー!乗って!」

「行くぞ!」

私は自分が乗ってきた赤のアウディRS5に。シルバーとキュラソーは現地で拝借したという白のシビックタイプRに乗り込んだ。

急発進し、駐車場を白線を見失って突っ切る。後ろをキュラソー達がついてきているが、そのさらに後ろでは今まで居たサービスエリアが轟音を立てて沈んでいくのが見えた。サービスエリアの入口付近では既に陥没が始まっており、そのほぼ真上にあった鉄道の高架橋も一緒に崩れ落ち始めている。私達がサービスエリアを出た瞬間、凄まじい轟音とともにサービスエリアの背後にあった山が崩れ、建物を完全に飲み込んだ。私達はまたもや間一髪難を逃れたことになる。

そのまま羽代川を渡り、看板が倒れてしまっていて名前がわからないが、ジャンクションを右折する。すると先ほど渡った羽代川のすぐ横を通って南へ向かうルートに

出た。このまま梅川区まで行くことにしよう。

『47。聞こえるかしら？』

「聞こえている。」

『今無人ヘリがそちらを補足したわ。すぐに上空に現れる。どうやら高空を飛ぶより低空を飛んだほうが墜落しづらいみたいだから低空侵入になるわよ。』

「了解した。先導役か？」

『そういうこと。この先道が寸断されてたりするからその情報をもとにね。』

「心強いな。」

その通信の直後に東方面の空から低空侵入してくる中型ヘリコプターが現れた。こちらに発光信号をよこすと、そのまま私の車の前を先導するように飛びだした。しばらくその先導に従って、川沿いを南下しているとまずい状況に出くわしてしまった。

パッパ―！パッパ―！ビービービー！

「うーん。動かないわね・・・。」

「バーンウッド。渋滞はその情報に入っては居なかったのか？」

『・・・ごめんなさいね。渋滞情報は入ってなかったみたい。』



「え？ああ。そつちはもうすぐジャンクションの分岐なのよ。蕨沢ジオセクションに向かう道みたいね。」

「ああ、なるほど。じゃあ無理かあ……。」

私は車に備え付けのタブレットで周辺の地図を確認する。確かにあの道は蕨沢ジオセクションにつながっている。平時では川の反対へ電車の高架橋をオーバークロスしながら市街地へ入っていくようだが……。今はおそらくその市街地はすべて水に浸かってしまっているだろうな。

カーナビに表示されている時刻は既に午後1時を回っている。渋滞に捕まってから既に2時間以上が経過しようとしているが、進んだのは車6台分くらいでしかない。いよいよ何か打開策を考えなければならぬ……。。

ゴゴゴゴ

「ん？何この音。」

「……あつ！後ろ！」

「むっ！」





「え!?ど、どこへ行くつもりなのよ!」

「いいから来るんだ!」

私はアクセルを踏み、一旦バックすると、一番左の車線、葦沢ジオセクションに通じる分岐へと入った。

「ちよ、ちよつと!そつちは冠水してるわよ!」

キュラソーがなにか叫んでいたが、他に手がないたため半ばやけくそのような感じで私の後ろについてくる。私はそのまま川を渡ると、ある地点でハンドルを左に切った。高架橋の外壁を速度に任せてぶち破ると、その先の鉄道の高架橋に強引に降り立った。凄まじい音がした気がするが、まだエンジンは生きており、ライトが使えなくなった以外は特に問題はない。一拍遅れてキュラソーの車も線路へ降りてきた。

「急げ!濁流の流れが思ったより早い!」

『へりで先導するわ!5キロ先に左に向かえる橋がある!そこまでいければ!』

「行くぞ!」

「了解!」

「またこうなるのかあ!!」

あの濁流、かなり流れが早い。時速にして150は出ているぞ。こちらでもアクセルを吹かす。

「47!左!」

「ああ!高速道路が!」

「!!」

先程まで居た高速道路が濁流によって押し流されている。渋滞で止まっていた乗用車やトラックから逃げ出す人々や、車で強引に進もうとしている車など、全てを濁流に飲み込んでいつている図がサイドミラー越しに見えた。濁流の中で衝突した乗用車が爆発し時折波の中から爆炎が上がる。まさに地獄絵図だ。

グラグラグラ

「地震!?!こんなときに!」

『急いで!あと2キロ!』

「キュラソー！右に注意しろ！」

「!!」

地震なのかもはや疑わしい揺れによって右側のビル群が一斉に傾き出した。

ギギギギガラガラガラ！

そのうちの一枚が真ん中から折れた。私はアクセルを全開にして崩れ行くビルの間を走り抜けた。

「シルバー！掴まってなさい！」

「もういやだああ!!」

後ろを走っていたキュラソーの車に至っては倒れ込んだビルのまだ原型を保っていた窓ガラスに飛び込んだ。そのまま斜めになって崩れている最中のオフィス内をかなり強引に通り返り抜け反対側の窓ガラスから飛び出してきた。向こうもかなり危機一髪だ。

ドカアアアン！

『ああーヘリが！』

前方を飛んでいたはずのヘリは、こちらが急加速したためいつの間にか追い抜かしていたようだ。ヘリは倒れてきたビルに対応できずに壁面に激突、爆発炎上した。なるほど。航空機はまともに飛べる世界ではないということか。

前に視線を移すと、丁度カーブになっている先から電車がやってきた。まだ動いていたのが驚きだ。この街の電車は完全自動制御だと聞いているのでもしかしたら何らかの誤作動で勝手に動いているのかもしれない。だがその電車はこちらには来なかった。なぜなら線路が陥没で寸断され、電車はカーブの先の外壁に突っ込んでいったからだ。そのまま電車は川を速度に任せて飛び越えると反対側の高速道路に直撃した。直撃した箇所が飛び移る予定の橋のすぐ近くだったので、私は意を決して衝突でできた外壁の割れ目からその電車の屋根に飛び移った。一瞬だけ車両の屋根に乗るとすぐまた飛び出し、なんとか左折予定の橋の上に降り立てた。

ギュギュギュギュキキーツ！

ドゴオオオン

「ぐっ……。無茶苦茶ねもう。」

「生きてる！生きてるよ！」

「安心するのはまだ早いぞ！」

そのまま橋を渡ろうとしたとき、シルバーが叫んだ。

「左！濁流の上！」

「嘘でしょ!？」

「クソツッ！」

直ぐ側まで迫ってきていた濁流は、高速道路の様々な車両や建物を押し流しながらこちらへ向かってきていた。その濁流の波に乗って巨大な丸い車体がこちらに一直線に降り注ぐようになっているのが見えた。あれはタンクローリーだ！

私達はアクセル全開で橋を急いで渡った。キュラソーの車が渡りきった直後、橋の欄干にタンクローリーが直撃し、今までの爆発とは比べ物にならないくらいの爆炎が上がった。その爆風に押し出されるようにして若干車の後部が浮き上がる。だがその爆炎のおかげか、濁流がこちらに来るのが若干遅れた。その隙を逃さず私達は東に向かって走った。

濁流との追いかけっ子は我々が周囲より高くなっている台地へ登ったことよって終わりを告げた。一旦車を止めて状況を確認する。キュラソーの車はなんとか付いてきていたが、タンクローリーの爆炎をもろに食らった影響か後部の窓ガラスは完全に割れ、エンジンルームからは白煙が上がっている。私の車はICAが用意した特別仕様のため、このような極限状況でも対応できるように頑丈に作られているが、キュラソーが乗ってきた車両は現地徴用の一般車だ。本来このような状況に耐えられるように作られてはいない。

「無事か？」

「ええ……、なんで無事なのか全くわからないけれど。」

「フリー……フリー……」

「シルバー？」

「待つて今呼吸を整えてるから……」

「ゆっくりでいい。」

シルバーが呼吸を整えている間に車に戻って現状を確認しておく。カーナビによると今いるのは一応梅川区らしい。住宅街ではあるが人気はなく、全員避難済みの地域ら

しい。

『47。聞こえるかしら？無事？』

「ああ。なんとか。」

『よかった。梅川区に到達したのね。でも悪い知らせよ。』

「・・・今度はなんだ。」

『回収予定の梅川区のマンションなのだけれど、先程その周囲でも陥没が発生したみたい。渡界機端末の通信が途絶したわ。ほかにも陥没が激しくて近くに移動できなかったの。だから別の場所に門を移動させたわ。今は中央区のメディアタワーの根元にある富坂駅の屋上に出しているわ。』

「中央区だと？では通り過ぎたということか。」

『そうなっちゃうわね・・・。』

「駅の上に出して大丈夫なのか？」

『既に富坂駅周辺の避難はほぼ完了している。電車も来ない駅に用のある人間は居ないわ。』

「わかった。なんとかそっちへ向かってみよう。」

『頑張って頂戴。この街、最新の予測では全域が完全に水没してもおかしくないわ。』



街が完全に水の底へ沈む。おとぎ話の世界くらいでしかないような出来事がここ做起ころうとしているわけか。まあこの世界自体我々からすればおとぎ話の一種なわけだが。

ともかく急いで中央区へ移動する手段を探さねばならない。探索用の無人ヘリはビルに激突して粉微塵になってしまったことだし。私はそろそろ落ち着いた頃だろう。キュラソーたちのもとへ戻った。キュラソーはボンネットを開けて車を修理している。シルバーはもう色々諦めたような顔をして助手席で呆けている。

「諦めるのは早いぞシルバー。」

「うわ!・・・もう脅かさないでよ47。大丈夫まだ生きるのを諦めたわけじゃないよ。」  
「では何を考えていた?」

「何も。ただ単に映画の中の世界みたいだなんて。一周回って現実味がなくなってきたよ。」

「現実感を無くしすぎるのは問題だが、その考えは精神安定のための防衛措置の一つだ。仕方あるまい。」

「ははは・・・。まあそれに僕が運転してるわけじゃないからね。」

「駄目ね。完全にエンジンがやられちゃってる。後数キロも走れば間違いなくエンストよ。」

「では移動には使えそうにないな。私の車に移れ。」

「そうする他ないわね。行くわよシルバー。」

「わかったよ。」

二人は乗ってきたシビックを捨て、私の車に移動した。移動してきた車内で今後の予定について説明する。1, 中央区へ向かう方法を見つける。2, 中央区の富坂駅へ向かう。3, 富坂駅屋上にある渡界機で脱出する。単純ではあるがこれが予定だ。最も最初の1つ目で躓きかけてるわけだが。特に川の向こう側に行く手段があるかどうか不明瞭だ。濁流の影響がどこまで続いているのか……。

『47。聞こえるかしら?』

「聞こえている。」

『たった今、技術部がその世界での航空機の飛行方法についての安全策を導き出したわ。

『これで飛べる。』

「ということは、ここで待っていればよいのか?」

『へりで回収するのを検討したけれど、富坂駅自体がもうへりを着陸させられるほど強度がないの。周辺に着陸できそうな場所もないからやはりここまで来て貰う必要があるわ。』

「経路探索は無理なのか？」

『それに関しては今小型のドローンで検索している。とりあえず蓮野区の一部の橋がまだ生きているから、そこへ向かうのをおすすめするわ。でも一旦休憩するのもいいと思うわよ。』

「わかった。」

流石に2人共表情に疲れが見えている。私は近くの住宅の鍵をこじ開けた。ひとまずここならば雨風はしのげるだろう。私達は住宅の中にあつたカセットコンロで暖を取りつつ、ひとまずここで一夜を明かすことにした。

〈 災害3日目〉

朝になり、外の雨は雪に変わっていた。私達は再び車を走らせ、カーナビに表示された橋を目指して北へ向かった。ドローンからもたらされる情報を頼りに、陥没している道や崩れかけている道をさけて進んでいく。

表示されていた橋は鉄道の高架橋だった。すぐ近くに高台があり、そこから水平に伸びて橋がかかっているため、先程の濁流には巻き込まれずに済んだようだ。私は高台の上の駅から線路内に侵入。そのまま線路を伝って中央区へ入った。この線路はそのまま富坂駅まで通じているはずだ。このままスムーズに駅までたどり着ければよかったのだが……。案の定線路は途中で寸断されていた。

鉄道の高架は中央ジオセクシオンに入ったところで途切れていた。中央ジオセクシオンは既に冠水状態で、地面は一面水に覆われていた。しかし、濁流の影響などをあまり受けていないため波は穏やかで、ビルが冠水した市内に整然と立ち並んでいるのが見える。途切れているすぐ近くのビルの上に乗れりさえできれば、後はビル伝いになんとか富坂駅までいけそうだった。

「さてどうするか……。」

「勢いつけて加速つけたらあそこのビルまで飛べないかな?」

「無理ね。ビルまでは軽く見積もっても60mは離れる。高さはざっと20mつてと

「こかしら。」

「このまま飛ぶとすると車を100km/h以上に加速させなければならぬだろう。線路上の凹凸が邪魔でそこまでの速度は出せないだろう。」

「そうか……。うーん……。」

「本部に応援は要請できないの?」

「実は先程から呼びかけているのだが、応答がない。」

「どうということ?」

「通信がオフラインになっている。こちら側の問題なのか向こうの問題なのかはわからない。」

「……。いよいよ切羽詰まってきたわね。」

実際のところ、かなり無理をすれば100km/hに近い速度は出せると思う。だがおそらくビルの手前で失速してビルの壁面に激突するのがオチだ。何か策を講じる必要がある。他の道を探すことも考え始めたとき、シルバーが案を出した。

「……じゃあ、ジャンプ台みたいなのがアレばどうかかな?」

「ジャンプ台?」

「・・・確かにジャンプ台のようなものがアレば100km/hに到達していなかったとしても距離が稼げるが・・・。」

「一体どこにあるのよ100km/hで突っ込んでも壊れないジャンプ台。」

「あるじゃない。ここに。」

シルバーが指し示したのは線路の防音壁だった。そうか、確かにこれはコンクリートの塊だ。真正面からぶち当たれば破壊されてしまう可能性があるがジャンプ台には使えるはずだ。

「なるほど、こいつか。」

「でもどうやってジャンプ台にするの?」

「キュラソー、シルバーの得意分野くらい覚えておいてやれ。」

「得意分野・・・あつ。」

「そういうこと。でてこい! オーダイル! ドサイドン!」

グワー!

「2人共、両側の壁を抜き取ってジャンプ台を作るんだ!」

2体の大型のポケモンにかかれれば大きなコンクリート板など発泡スチロールのようなものだ。2枚を重ね合わせ土台にし、もう2枚でスロープを作った。ついできと言わんばかりにスロープより手前の線路にも周辺の防音壁を敷き、車からスロープまでのジャンプ台ができた。多少凹凸があるが、線路の上を直接走るよりは遥かにマシだ。

「大したものね。簡易の道ができたわね。」

「ふふん。」

「よし、では車に乗るぞ。覚悟を決める。」

「ああ、そういえば飛ぶんだったわね……。」

「もう慣れてきてるのが怖いよ。」

私達は車に乗り込み、準備を整える。私は後部座席に座った二人の準備ができたことを確認し、アクセルを踏んだ。車は急加速しき、ジャンプ台に到達した頃には120 km/hまで加速できていた。そのままビルに向かって盛大にジャンプする。重量バランスを3人の体重移動で無理やり調節しつつ、ビルの屋上に……。

「むーまずいービルを飛び越えるー脱出するぞー！」

「え!？」

カチャ

「シルバー!行くわよ!」 ガシッ

バツ!

ブウウウン・・・ドゴオオオン!

私はシートベルトを素早く外し、運転席のドアを開けてビルに飛び移った。転げ回ることになったがうまく受け身が取れたので怪我も擦り傷程度で済んだ。キュラソーは自分とシルバーのベルトを外し、右側のドアからシルバーを抱えて飛び出した。驚くべきことにキュラソーはシルバーを抱えたまま見事に足だけで着地してみせた。さすがの身体能力だ。車はそのままビルの向こう側へと飛んでいき、隣のビルの壁面に激突して爆散した。

「間一髪だったわね。」

「今回の任務で何回『間一髪』があっただろう・・・。」

「考えないほうがいいわ。」

「無事か?」



「ええこっちは大丈夫よ。」

「こっちもOK。」

「一応予定通りのビルの上に飛び移ることはできたな。行くぞ。」

「少しは休み・・・そうか、休むところは今爆散したっけか。」

「そういうことだ。もたもたしていると凍死するぞ。」

私達は車が激突したのとは別の方向のビルへよじ登った。時にジャンプで飛び越え、ジャンプが届かなそうな場所へ行くために近くの看板をポケモンたちに倒してもらったり、落下しかけたシルバーをキュラソーが助けたりしながらやつの思いで富坂駅の隣のビルまでやってきた。その時、1機のヘリコプターがこちらに向かってくるのが見えた。他にも避難しそこねた民間人がいるのだろうか。

富坂駅まではジャンプで届くかどうかの距離がある。近くに倒せそうな看板はない。自力であそこまで行かなければならないようだな。

「飛び移るぞ。縁に手がかかればいい。」

「シルバー、行ける?」

「行くしかないさ。ここまで来たら。」

「3カウントで行くぞ。3、2、1、GO！」

一斉に助走をつけて飛んだはいいものの、私とキュラソーは片手を駅の縁にかけることができたが、シルバーは後数センチ届かなかった。

「あつ……。」

「シルバー！」

私は落下しかけるシルバーの手をなんとか掴んだ。今回何度目かわからない間一髪だ。しかしその時、これ以上ないタイミングで揺れが襲った。揺れるだけならまだマシだった。周囲のビルの間、ジオセクシヨンの外周壁の上から水が大量に流れ込んできた。あまりに大量の水は周囲の高層ビルまでも押し流そうとしている。

「47！右！」

「くっ！」

右側に立っていた別のビルが地盤沈下でこちらに向かって傾いてきた。このままで

は私もシルバーもビルの倒壊に巻き込まれてしまう。私はなんとかシルバーを駅の上に引つ張り上げようとしたが、長らく真冬の雪降りしきる屋外にいたため体がうまく動かない。ビルはもうすぐそばまで来ていた。万事休すかと思われたその時だった。

「ニドちゃん！はかいこうせん！」グガー！

ドガアアアア！

“レビテーシヨン”

突如として駅舎の上から放たれた光線が倒れてくるビルに直撃。ビルは中腹辺りからへし折れ、そのままこちらへ倒れることなく自壊した。それと同時に私とシルバーとキュラソーの3人の体がふわりと宙に浮いた。そのまま駅舎の上に運ばれ、ゆつくりと着地した。

「なんとか間に合ったみたいね！」

「姉さん！来てくれたんだね！」

「間一髪。」

「それはもう何度もやったわ。タバサ。」

「グッドタイミングだな。助かった。」

ブルーとタバサがそこにいた。後に聞いた話では、この世界のあまりの崩壊っぷりにICA本部も相当慌てていたらしく、この二人にも緊急で招集をかけたらしい。なんにせよ九死に一生を得た気分だ。

「シルバー・・・無事で良かったわ・・・。」

「きつと来てくれると信じてたよ姉さん！」

「感動の再開は後。ここは危険。」

「のようだ。駅舎が崩れ始めている。」

「そ、そうね！とりあえず帰るわよ！」

我々は急いで駅舎の屋上に仮設されたテントの下にあった渡界機でこの世界から離



「もちよつと興味があつて、技術部の人に借りたんです。」

『ふーん……で？なにかわかつたのかしら？』

「この防災設備は通常の大雨。私達の世界の記録に残っているような大雨ならば十分耐えられる設計をしていることがわかりました。意外にも防災設備や各種予備施設が充実してるんですよ。」

『ではなぜあの街はあんなことに？』

「1日の総雨量が通常の1ヶ月分にもなる大雨を1週間以上連続で喰らえば、流石にこの完璧なシステムでも許容範囲を超えてしまったようですね。現に7日目までは水没はおろか河川の氾濫すらなかったわけですから。総雨量を見ると、あの水害が起こる原因になったあの10日あまりの長雨、全部合わせれば日本の関東圏全域の年間総雨量とほぼ同等です。」

『1年間の雨の量を10日で降つたつてわけ？そりやまたあの街も災難ね……』

「まああといくつか施工不良もあつたみたいですけどね。でも私から見ればいくつかの点を改良すればあの長雨にも耐えられるようにはできたと思います。実は今、戦略A Iの演算能力をお借りしてその弱点を克服した私流の“ネオ・ジオフロンティア計画”を作つてみてるんですよ。完成したら技術部の方に評価してもらおうかなと。」

『そう。でも程々にね。本来戦略A Iはそういう用途には使わないものなのだから。』

「わかっていきます。新たな任務が来たときはそちらを優先します。その辺はわきまえておられます。」

『ならいいのだけれど。．．．じゃああなたは今のところその計画を作るので忙しいわけね?』

「え? まあそうですね。こんなに燃えるのは久々ですよ!」

『ならこれは見せないほうがいいわね．．．。』

「え? なんですかそれは?」

『12月24日にクリスマスマスパーティやる予定だったじゃない? でもあの事件で中止になっていた。明日、ちょっと遅れたクリスマスマスパーティをやろうとウィートリーが言い出してね。その招待状なのだけれど．．．忙しそうだから欠席にしておいてあげるわ。』

「い、いや! 行きます! 行かせてください! あー! バーンウッドさん! ひどいですよお!」

『ふふふ。それじゃあごゆっくり。』

「ああ! 待ってください! バーンウッドさん!」 タタタツ

バタン







キイイイイン：

ひつきりなしに飛行機が離着陸を繰り返している。ターミナルDに到着した私は手始めに周囲を観察していく。かなり大規模な空港であり、最近ターミナルを建て替えたのか真新しい建物が多い。ありとあらゆるところに人がおり、税関周辺などは人にぶつからずに歩くのが困難なほどだ。

私は今回、シルバーボーラーと、アタツシユケースに収納した状態で Jaeger 7 Lancer を持参した。障害物の少ない空港では狙撃が一番効率的だ。問題はこの衆人環視状態でどうやって狙撃位置まで向かって狙撃するかがだ。

私は空港内の案内図を見る。今いるのがターミナルDの3階、国際線チェックインカウンターの前だ。ターゲットはおそらくターミナルEにいますと思われるが、ココ・ヘクマティアルの一団も同じ場所にいるため鉢合わせする可能性が高い。彼らは私の存在を知っている。なぜ記憶処理がなされないのかはわからないが、記憶処理が処置されたという話を聞かない以上、私のことを覚えていると思つたほうがいいだろう。となると傭兵メンバーの一人とでも鉢合わせするのはいらぬ誤解と戦闘を生みかねず危険だ。できれば遠くから狙撃するのが望ましいだろう。

ターミナルEはこのターミナルDの右隣にある。ターミナルDのフィンガーから

ターミナルEまでの距離はざっと600強。狙撃できない距離ではない。屋上の展望フロアなどはなさそうだが、登る手段がないわけではないようだ。

#####アプローチ発見#####

~~~~~

『ターミナルDの屋上は制御塔があるだけで一般人は侵入できなくなっているみたいね。でもそこへ入ることができればターミナルEは丸見えよ。もちろんターゲットもね。』

~~~~~

ターミナルEは半分以上がこちら側から丸見え状態であり、写真を見る限り側面は全面ガラス張り。つまり、今いるこの建物の屋上にJa g u a r 7を持っていくことができれば、ターミナルEのほとんどが射程圏内に入るということだ。

そのためにはまず屋上へ入らなければならない。それには空港職員または警備員になりすますのがいいだろう。しかし、この空港はあまりに人が多すぎる。初夏の行楽

シーズンなのもあり、空港はいつも以上に人でごった返しているらしく、空港職員も休む暇なく動き回っている。トイレなども人気がなくなることがなく、2〜3人ではあるが行列ができてしまっているほどだ。このような場所で人が少ないところで警備員になりすますためには……。

思ったより策がなく、私は苦肉の策に出ることにした。大混雑の空港内で一般人が一番少ない場所。そこは警備室だろう。だが警備室は出国審査ゲートの向う側にある。ならばゲートをくぐってしまおう。私はゲートの手前にある金属探知ゲートへ向かった。

金属探知ゲートに到着し、そのまま列に並んで待つ。暫く待つと、自分の番になった。

「はい、次の方。金属類を外してこのゲートをくぐってください。手荷物はこちらに。」  
ピーッ！

「申し訳ありません。なにか金属類のものをお持ちですね。アレば出してください。時計やキーホルダーとか……。」

ピ。ピ。ピッ！

「うーん……？なんだこれ!？」



くくくくくく

通された一室にはテーブルと椅子、そして私と拳銃を携帯している警備員2名と現場の責任者らしき男が集まった。天井は低いが監視カメラもあり、まさに取調室と言うにふさわしい。

「……さて。久々だよ、こんな堂々と検査に引つかかる危険人物は。」

「……。」

「だんまりか？まあそうだろうな。こんなもんを持つて空港に入ろうつてんだから。」

男は調べ終わったのだろうシルバーボーラーを私の手の届かない位置に置いた。それと同じくJ a g u a r 7も同様に置いてから話し始めた。

「ああ、安心しろ。無論弾は抜いてある。だが見たことのない銃だな？特注品か？」

「……。」

「ふん、まあいい。だがこれからの質問には必ず答えてもらうぞ。まずーつ目だ。お前は何者なんだ？空港に来てゲートを通ろうつてのにパスポートどころか免許証の一つ

も持っていないとは。2つ目、お前は一体ここに何をしに来たんだ？単純に海外旅行つてわけじゃあるまい。」

「何者かは答える必要がない。何をしに来たかも答える必要がない。」

「なんだとお・・・？ふん、いつまでそう言つてられるかな。まあ後30分もすれば警察が来るから話はそつちでするんだな。」

「話すこともない。なぜなら私はゲートの向こう側に行かねばならないからだ。」

「あん？あんたこの状況をわかってんのか？武器は奪われ、手には手錠。後ろにはこわーい警備員が2人だ。お前がゲートの向こう側に行くことは絶対じゃないんだよ。」

「そうかな？」

「何？」

私は机を思いつきり蹴り上げた。机は身を乗り出していた男の顎に直撃し、一撃で見事に昏倒した。机が元の位置に戻る前に私は素早く机に固定されていた手錠を支点として体を浮かび上げながら、座っていた椅子を足で持ち上げると足で大きく振り回した。振り回した椅子はそのまま天井のカメラと後ろの警備員の一人を殴打、昏倒させた。その早業に圧倒されて固まっているもうひとりの警備員をそのまま足で掴むと机に倒れ込ませた。倒れ込ませた警備員の腰の拳銃を奪い取るとすかさず拳銃で手錠の鎖を

切った。

机に突つ伏した警備員を拳銃で殴り気絶させると、シルバーボーラーとJaguar 7を回収し、警備員を引きずりつつ隣の部屋へ入った。隣の部屋は控室のようなどころだったが、証拠品として提出する予定だったのかシルバーボーラーとJaguar 7の弾倉がそのまま置かれていた。それを回収し部屋のロッカーに警備員を押し込むと、警備員の服を借りる。Jaguar 7をケースに戻し、部屋を出た。

殺風景な廊下を進み、制限エリアの扉を出ると、そこは入国管理ゲートのすぐそばの免税店の裏側だった。左右に様々な免税店が立ち並んでおり、こちらも人で賑わっている。私の腰にはシルバーボーラーがぶら下がっているが、客たちは警備員の格好をした男が拳銃を持っていてもまるで気にしていない。そのあたりはヨーロッパらしいと言えるだろう。

免税店街を抜け、東側の窓からターミナルEを見てみる。間にあるエプロンが邪魔でここからでは狙えそうにないな。私は人混みをかき分けて更にターミナルの先へ移動する。その途中ですれ違った旅行客のポケットに入っていた簡易双眼鏡を借りておく。26番ゲート手前から簡易双眼鏡で一瞥していくと、中程あたり、39番ゲート付近にココ・ヘクマティアルを確認した。



くココsideく

ピンポーン

「フランス、シャルル・ド・ゴール空港行き。エールフランス航空654便にご搭乗のお客様は、ターミナルE、39番ゲートへお越しください。」

「やーつと来た！さー！みんな乗るよー！」

「ういーつす。」

「ヨナは私の隣ね！」

「わかった。」

「でもよお嬢。なんで今回はエコノミーなんだよ？ファーストとまでは言わねえけどいつもビジネスだったじゃねえか？」

「ごめんね。急な予定変更でビジネスクラスもファーストクラスも空いてなくてね。窮屈だけだった4時間だから我慢してね。」

「ルツ、あんまり我儘言ってお嬢を困らせんなよ？」

「別に不満を言ってるわけじゃねえよ！てかそこまで子供じゃねえ！」

他愛のない会話。急遽決まった仕事にも文句を言わずについてきてくれている。後で何か埋め合わせしないとね。私達は待合席から立ち、搭乗ゲートへ向かった。

「……。ココ・ヘクマティアル。その飛行機が貴様の最後のフライトだ。存分に楽しみ……。」

〈 47 side 〉

むむむ……まずい。ココ・ヘクマティアルは発見できたが、肝心のターゲットが見当たらない。一つの場所に留まらずと双眼鏡を覗けば怪しまれてしまうため集中して探すことができないのも見つけられない原因であった。先程ココ・ヘクマティアルが乗ると思われる便のアナウンスがあった。急がなくては飛行機が出発してしまう。

私は双眼鏡で探すのを諦め、先に屋上に上がることにした。28番ゲート付近まで戻り、レストランの裏手のドアを開けて侵入。中にあつた階段を使って4階へ。4階は到

着フロアとなっており、ガラス張りの廊下以外にはトイレくらいしかない。飛行機が到着していない時は人気もほとんどなく、私はトイレの裏側へ向かった。案の定、そこには関係者以外立入禁止の扉があり、私はロックピックで鍵を開け、内部に侵入した。

この場所は制御塔の丁度真下に位置しているらしく、飛行機の運行情報を管理するサーバールームがあつた。私はサーバールームに入り端末を操作する。・・・端末から監視カメラネットワークへアクセスができた。私はターミナルEの監視カメラを確認し、ターゲットの特徴をカメラ映像と照合して検索をかけた。

・・・居た。ほんの数分前、搭乗ゲートから飛行機に入っていくターゲットの姿だ。

~~~~~

『その男がネオ・カトラスことケリー・ルイスよ。まずいわね。もう飛行機に乗ってしまつたようよ。』

~~~~~

私は過去24時間のカメラ映像を削除した後、チケット情報にアクセスした。ター

ゲットの名前で発券されている航空券を検索する。・・・あった。ココ・ヘクマティアル一行は30Fから31Aまでに、ターゲットはそのだいぶ前、21Fに座っているようだ。

よし、ターゲットが窓際に座っていてくれるのであれば、やりようはあるかもしれない。一時はエンジンを狙撃して動作不良で離陸中止させることも検討したが、もつと直接的に行えそう。私は急いで端末の後始末をした後、廊下を通りターミナルDの屋上へ出た。

#####アプローチ完了#####

~~~~~

『無事屋上へ出れたみたいね。そこからならターゲットも狙えるでしょう。後はあなたの腕次第ね。』

~~~~~

屋上に出ると、今まさに39番のエプロンから飛行機が発進しようとしていた。飛行

機はそのまま目の前の駐機場で反転、誘導路へと出ていく。ターゲットが乗っているのはここからは見えない反対側だ。そのままターミナルDの前を通り、滑走路の西側に向かった。チャンスは一度きり。私はケースからJ a g u a r 7を取り出すと、滑走路までの距離を素早く回り、スコープを調整する。

管制官からの離陸の指示を受け取ったようで、エールフランス機が滑走路を滑り出し始めた。西から東に向かって滑走しているため、このときだけターゲットの乗る場所がこちらから見えた。私は素早くスコープを覗き、ターゲットの乗っている21F席を確認し、照準を合わせて間髪入れずに引き金を引いた。

バアン！

ガキン！

空港は航空機の騒音によって屋外での銃撃音は1発くらいなら気が付かれずに済む。放たれた弾丸は正確にエアバスA320の窓に吸い込まれていき、200km/hに到達しそうになっていた機体の窓ガラスを正確に撃ち抜いた。航空機の窓ガラスというのは、普通のガラスではなく、3枚から6枚の積層アクリル樹脂でできている。機種によつては厚さは4cm近くになるというが、J a e g e r 7 L a n c e rにとつては

あまり意味をなさない厚さだ。窓の先でほくそ笑んでいたターゲットの側頭部に弾丸が命中、その命を一瞬にして刈り取った。

~~~~~

『ターゲットダウン。流石、素晴らしい腕前ね。あの飛行機はすぐに戻ってくるでしょう。早急にそこから脱出して頂戴。』

~~~~~

飛行機は窓ガラスが割られた状態では機内の与圧が機能せず、高く跳ぶことはできない。一旦は離陸したものの、すぐさま旋回してそのまま降りてきた。

私は Jaguar をケースにしまうと再びターミナル内へ戻った。4階へ戻ると遠くで警備員が何名かあたりを捜索しているのが見えた。どうやら入管事務所で放置していた職員と警備員が発見されたようだ。それとほぼ同時にアナウンスでトラブルが発生し旅客機が一機引き返してくることが告げられた。

私は警備員に見つからないようにそのまま1階へ降りた。1階は航空貨物の分配所

になっており、何人かの作業員が作業をしていたが旅客エリアよりは格段に人数が少ない上に、貨物やベルトコンベア等で死角が多いため用意に通り返けることができた。到着ゲートの荷物受け取り場所の横へ出ると、そのまま正面ゲートを通って外にでる。道路を渡り駐車場に止めてあったI C Aの車に乗って脱出した。

~~~~~1週間後~~~~~

~~~~~

『失礼いたします。』

「ああ、バーンウツドくん。例の兵器に進展があつたそうじゃないか。」

「例の兵器?」

「いつだったか砂漠に住むエルフの議会から接収してきたアレだよ。」

「ああ。あの使い道のない超兵器ですか。」

『その使い道がなかった超兵器ですが、一部技術に關しまして実用化の目処が立ちました。』

「なんと！それはそれは……。」

「実験や研究に数十年単位で必要なものではなかったのですか？まだアレを発見してから1年経っていないと思うのですけど。」

『先日、エージェント67―2がワールド106から調達してきた技術によつて外郭構造体の大部分の設計が実現可能の領域に入りました。』

「ワールド106……ああ、あのやたら災害の起こる世界か。」

『“ジオフロンティア計画”それとそれに付随していた“首都島構造体”の一部の技術を応用した戦術A-Iの演算の結果、超大型中性子レーザー砲の外郭部分が建造可能との試算が出されました。』

「なるほど。あのとんでも計画も役に立つものだな。」

「でもまだ外側部分だけなのでしょう？」

『実のところ中央部の超高出力中性子発生装置自体は技術部で草案が完成しています。なので後は砲身に当たる増幅器及び収束装置の開発が完了すれば……。』

「あの超兵器を……。」

「作り出すことができるというわけですね。」

『そういうことになります。』





## HITMAN 2 『頼れる仲間』

『ヤマブキシティへようこそ。 47。』

『前回来たのはブルーとシルバーと初めてあった時だったかしら。観測の結果、あの時からはほとんどこの街は変わっていないわ。無論シティ銀行は跡形もなくなっているけれど。』

『街の中には大したポケモンはいないと思うわ。探すとしたらこの街から東西南北に伸びている幹線道路沿いの草むらでしょうね。この世界は蚊は居ないようだけれど、それに相当するポケモンはいるみたいだから一応気をつけてね。』

『素敵な出会いがあることを願ってるわ。』

~~~~~

正直全く気乗りしていない。パートナーはたしかに有用な場合もあるが、自分ひとり

で全てを完結できる場合においては足かせにしなければならない場合が多いためだ。それにポケモンは我々人間の言葉を理解できるといいうが、我々はポケモンたちの言葉は理解できない。意思疎通が一方通行な状態では円滑な作戦伝達や状況報告もままならないだろう。

「さあ！行くわよ！47！」

「ヤマブキシティ周辺で見つけられるポケモンのリストは準備済みだよ。」

・・・にもかかわらず、この二人はやけに張り切っている。普段の任務の時以上に生き生きとしているように感じられる。

「私はそこまで必要とは思っていないのだが。」

「何いってんの！ポケモンの有用性はブリーフィングで散々話したでしょ！」

「ああ。ブリーフィングの時間の大半を削りつつ、予定時間を1時間もオーバーしなげらな。」

「うっ・・・、それはまあ不可抗力ってやつよ！」

「47はポケモンが嫌いなのかい？」

「そうではない。1時間半にも及ぶ講義を受けてもまだ有用性が見いだせないだけだ。」
「今までの僕らのやり方を思い出してくれれば、有用性を証明できるところはたくさんあつたと思うんだけどな。」

・・確かに、ブルーのメタモンは隠蔽や隠密に長けているし、ニドクインやシルバーのオーダイルなどもパワーでは人間のそれとは比べ物にならない。だが私は基本的に不可能ならば代替の策を模索するだけなのでそこまで羨ましいとも思っていないのだ。
私を説得する策を2人が考えていると、本部から通信が入った。

~~~~~

『47。まだポケモンは捕まえてないわよね。ICAからの追加の条件が出されたわ。  
“47が居ない場合の本部等施設の警備ができるポケモン。”が追加条件よ。ああ、あとキャロラインの個人的な要望なのだけれど、見た目的にも性格的にも可愛いのがいいそうよ。私も強面よりは可愛いほうがいいわ。よろしく頼むわね。』

~~~~~

やれやれ。本部までだいぶ乗り気だ。これでは私一人が駄々をこねてるようなものではないか。命令とあつては仕方がない。施設警備ができるポケモン。できれば可愛い容姿の者。可愛い基準が私にはわからないがそこはブルーに任せるとして、諦めてポケモンを探すことにする。

やつとそれなりにやる気になった私を待っていたかのように、2人は意気揚々と私の腕を掴んで町外れのゲートへ向かった。

ヤマブキシテイ東ゲートを抜けると、8番道路に出た。ゲートから出るとすぐ横に小さな建物がある以外はごく一般的な郊外の道という印象だ。そんな中ブルーがあたりをキョロキョロ見回しながら不思議そうにしている。

「あら？ここらへんは私達が街に居た頃は暴走族が屯していて結構危ない雰囲気だったんだけど、誰も居ないわね？」

「確かに。少なくとも3人、多くて5人は居たよね。」

「警察機関に摘発されたのではないか？」

「うーん、そんな簡単に摘発されるかしら・・・まあ居ないなら居ないに越したことはないわ！」

「そうだね。」

気を取り直して歩き始める。この世界は森や草むらの中ならどこでもポケモンが出るといっわけではないらしく、ポケモンがよく出る草むらはある一定の場所に固まっていることが多いのだそう。この8番道路は隣町であるシオンタウンとの丁度中間地点辺りに岩に囲まれた場所があり、その草むらが一番出やすいとのことだった。

その岩場を目指し歩いていると、前方奥から爆発音が聞こえてきた。それと同時に白い気球が地面から現れた。気球にのっている乗組員からの拡声器を使用したと思われる声が響いてくる。

「はーっ！はっはっはー！」

「ピカチュウは頂いた！」

「マテー！ロケットダン！」

「やーなこった！待てと言われて待つ悪党がどこにいるってのよ！」

「ブルー、この世界では気球が主な移動手段なのか？」

「飛行船はよく使われてるけれど気球は珍しいかもしれないわね。何なのかしらアレ

「？」

「……ん、あいつらピカチュウを前にいるトレーナーたちから奪い取ったみたいだ。」

「ふうん……そうだ、47。あの気球落とせない？」

「助けるのか？」

「そうよ。トレーナーに恩を売っておけばポケモンを捕まえるの手伝ってくれるかもしれないじゃない。」

「ポケモンを捕まえるのはそんなに大仕事なのか？」

「基本的にはポケモンを戦わせて弱らせて捕まえるんだけど、47、ポケモンないでしょ？」

「……まあそうだな。」

「私はそのまま飛び立とうとする気球を見る。ゴンドラから伸びたアームの先には黄色いポケモンがしきりに電撃を出しているが全てアームで防がれている。下にいるトレーナーの方は謎の拘束具によって身動きがとれないようだ。」

「私はシルバーボーラーを取り出し、浮かんでいる気球の気囊の部分を撃ち抜いた。気囊自体の耐久性が低いせいかな拳銃弾一発で空いた穴が風圧でみるみるうちに広がっていき、気球はすぐに自由落下を始めた。」

「き！気球に穴が空いたニヤ!!」

「うわああああ!」

「なーんでー!!」

ドシーン!

「落ちたわね。救出しに行きましようか。」

「僕は落ちたほうを見てこよう。」

「じゃあ私達はトレーナーのほうね!」

シルバーは気球を、私とブルーはトレーナーたちの方へと向かった。男2人女1人のトレーナーグループは状況がよく理解できずに呆然としていた。私達に気がつくと思わなかった。

「あ、あの！アイツらはあなた達が?」

「ああ。今もうひとり墜落現場へ向かっている。」

「そういうことよ。今外してあげるわね。」

カチャカチャカチンツ!

「はいOK。」

「「ありがとうございます。」」

「えつとあなた達は？」

「通りすがりのトレーナーと・・・ポケモン初心者のお兄さんよ!」

「ポケモン初心者?」

「そう!」

「・・・そうだな。」

「新人トレーナーってことですか?」

「あーそう言うのとは違うんだけど・・・まあ細かいことは話せないからそういうことでもいいわ。」

「そういうことなら。俺はマサラタウンのサトシ。よろしく。」

「私ヒカリ!」

「自分はタケシと言います。」

「よろしく!私はブルーよ!こっちのおじ・・・お兄さんは・・・。えつと・・・。」

「フォードだ。よろしく。」

「よろしく!」

～～～
 『またすごいめぐり合わせね。その人達はこの世界の主要人物に当たるわ。くれぐれも正体を見破られたり危害を加えたりしないように注意して。』

～～～
 こんなところで主要人物と会うとは運がいいのか悪いのか。今回は暗殺を目的としてきているわけではないので正体を隠し通すのは比較的容易なのが救いだろうか。挨拶を交わしているとシルバーが戻ってきた。

ピカピー！

「あ！ピカチュウ！無事だったんだな！」

ポチャー！

「ポツチャマも！よかったあ！」

グー・・・

「グレッグも。大丈夫だったか？」

「ご苦労さまシルバー。」

「大したことはなかったよ。あの連中ロケット団の構成員だったみたいだ。」

「あら、まだ活動してたのね。あの組織。」

「えつと・・・？」

「ああ、僕はシルバー。ブルー姉さんと一緒に・・・旅をしているんだ。」

「あー・・・そう。旅。そうね。」

流石に暗殺組織で働いていると言う訳にも行かないので適当に旅をしていることになった。この場合はそれが無難な選択肢だろう。

「それにしてもロケット団がなんであなた達のポケモンを？」

「あいつら、いつも俺のピカチュウを狙って追いかけてくるんです。」

「せっかくカントー地方に旅行に来てるっていうのに、迷惑な連中よ！」

「ふうん・・・ピカチュウってそんなに珍しいポケモンだったかしら？」

「なにか目的があるんだよきつと。」

「それより、あなた方はここで何を？」

「ああ、そうだったそうだった。フォー……ドがポケモンを捕まえたいつて言うからそのお手伝いに来たのよ！」

「……そうだな。」

「そうなんですか。じゃあ俺たちにも手伝わせてくださいー！」

「そうね！助けてもらったお礼もしたいし！」

「自分も是非、手伝わせてください。」

「心強い味方ができたわね！フォー……ド！」

「ああ。」

とりあえず当初の予定通りといえる。見たところ旅慣れているトレーナーであるサトシ、ヒカリ、タケシの三人と行動をとにもすることで、効率的にポケモンをゲットすることができるだろう。

「早速ですけれど、フォードさんはゲットしたいポケモンが居たりするんですか？」

「いや。まだ決まっては居ない。本b……私の家内が可愛いポケモンが良いと言っていた。私個人としては私が留守の間に家を守るようなポケモンがほしい。」

「可愛くて……。」

「家を守るポケモン……。」

「となると……。」

3人はしばらく考え込んでいたが、しばらくして適当なポケモンを閃いたようだ。

「そうだ！この辺りなら確か……」カチャ

ピピピピピッ

「うん、ガーディなんていいんじゃないかな！人懐っこいけれどジュンサーさんもよく連れているくらい用心棒としても最適だし！」

「ああ！ガーディ！それなら可愛いし強いし、良いかもしれないわ！」

「ガーディならここ8番道路でも見かけることがあるポケモンだ。早速出発しよう。」

ピッカー！ポッチャー！

「トントントン拍子に話が進んで助かるわね。」

「そういう姉さんはさつきから何を調べているの？」

「んー……あの人達、どつかで見た気がするのよねえ……。」

「僕は知っているよ。以前カナズミシティで戦ったことがある。」

「あら？バトル相手になったのなら相手は覚えているはずなんじゃないの？」

「まあその後が衝撃的だったからね。もしかしたら忘れてるのかも。」
「ふーん……。」

私達はそのまま集団で岩場の近くの草むらまで歩いていくことにした。シルバーはサトシとあつたことがあるので、その流れで自己紹介をしたところ、相手側のサトシはすっかり忘れていたようで謝罪を受けていた。あの時はサトシの対戦相手がいきなり脳天に弾丸を食らわされて、そのまま大会が中止になるという前代未聞のハプニングが起こっているから無理もないだろう。そのまましばらく雑談をしながら歩いていると奇妙な事実が発覚した。

「へえ、もともとはヤマブキシティに。」

「そうなのよ。このへんは暴走族が居たからあんまり来たことなかったけどね。」

「ええ!! 暴走族う!! いるの? どこに?!」ポチャポチャア!

「いや、それが今は居なくなってたんだよ。摘発されたのかなあ……。」

「な、なんだあ……よかったあ……。」ポチャ……

「暴走族? サイクリングロードにチャリンコ暴走族がいるのは知ってるけれど、こんなところに居たかなあ? なあタケシ?」

「うーん、この辺りに暴走族がいるという話は聞かないけどなあ……」

「ええ？タムシの方から流れてきた暴走族が数人いつも屯していたじゃない。」

「……」

「姉さん、ちよつと。」

「え？」

「サトシ、タケシ。ヤマブキシテイ銀行って知ってるかい？」

「いや、銀行なんてあつたんだ。」ピーカ？

「俺も初耳だな。確かヤマブキシテイにも銀行はあつたと思うけれど、そんな名前じゃなかつたはずだ。」

「だいぶ前にあるテロ事件があつてその影響で潰れたんだけど。ニュースとかで知らないかい？」

「いや、そんなニュース初めて聞いた。そんなことがあつたのか。」

「だいぶ前ってどのくらいだ？10年くらい前？」

「いや、多分1年以内なんだけれど……」

「どういうことよ47。あんな大勢の犠牲者を出した事件、ニュースになつてないわけ無いわよ……」

「少なくとも警官が数十人は死んでいる。クチバシテイのセーフハウスに戻った時に見

たテレビには、そのニュースは速報として流れていた。」

「二応本部に報告しておいたほうが良いわねこれは。」

「それが良いだろうな。」

~~~~~

『実は私達情報部もこの世界には色々違和感を感じていたの。今ワールドセーフテイも含めて調査中よ。あなた達は任務に集中して頂戴。任務が終わる頃には調査も概ね終了していると思うから。』

~~~~~

多少不安の残る状況ではあるがサトシ一行は意気揚々と歩を進めている。記憶に違いがある以外は別段不審な点はないので、何はともあれ任務をこなしてしまおうとしよう。

そのまましばらく歩いていくと、大きめの岩があちこちにある場所に出た。その中に奥に通じる通路があるが、その道は蔓性植物によって覆われて通れなくなっている。

「ん、ここは僕にまかせて。行け、マニニューラ！」

シャー！

「おお、マニニューラだ！」ピピ

「マニニューラ、いいあいきり！」

ザクツ！ザクツ！

「おお！見事な、いいあいきり」だ。よく育てられている。」

「すごいわね！ブルーさんとシルバーさんはトレーナーなんですすよね？」

「そうよ。これでもいろいろ修羅場くぐってきたからポケモンバトルでは負けないわ

よー！」

「そうだ！あとでタッグバトルしようぜ！俺もウズウズしてきた！」ピツカチュウ！

「いいよ。でもまずはガーディを捕まえてからだね。」

居合斬りで蔓を取り払いつつ岩場の奥に進んでいく。あたりは人が殆ど入らない場所のため草が生い茂っている。しかし、膝上まで伸びる草むらにも関わらず、カマキリやバッタ等の昆虫の類は全く見られないのだからこの世界は不思議だ。そのまま更に進むと少しだけ視界がひらけた。

「んー、このあたりにいると思うんだが・・・。」

「こっちのガーディも森の中に住んでるのね。」

「ヒカリはシンオウのフタバタウン出身だったよな?」

「そうよ。フタバタウンの近くの森にもガーディがよくいるの。小さい頃はたまに追いかけられたりもしたなあ・・・。」

「そういえばガーディを見つけたとして、どうやって捕まえるんだ? フォードさんはポケモン持っていないんだろう?」

「あ。そういえばそうね。うーん・・・フォード、ガーディと戦闘することはできる?」

「いやいやいや、人間が生身で戦うのは・・・。」

「本来は相手にもよるが、ガーディに関しては先ほど凶鑑で見せてもらった情報を見る限り、可能だ。」

「マジで?」

「ええ・・・。」

「ちよちよつと!」

唐突にブルーが私を引き離して耳打ちしてきた。

「ねえ47。わかってると思うけれどシルバーボーラーで撃ち抜いたりしちや駄目だからね?」

「わかってる。銃火器は使わない。」

「それでどうやって戦うのよ? 動きは早いし、*“かえんほうしゃ”*とか使ってくるのよ?」

「火炎放射は直線的な攻撃だ。避けるのはそこまで難しくはない。」

「あー……まあとにかく銃を使わないならいいわ。」

ブルーは半分諦めた様子で集団に戻っていった。確かにガーディは見たところ、ちよつとした軍用犬のようなポケモンだ。だがそれ故に対軍用犬の訓練は既に訓練施設で学んでいる。問題はどのようにして無力化するかだが、それも近接戦闘に持つていくことができれば問題ないように思える。そんな事を考えていると、背後の草むらが揺れ、ポケモンが飛び出してきた。私はとっさに避ける。

ガウガウガウ!

「あ！ガーディ！」

「お出ましか。」

「フオー・ド！モンスターボールは持っているわよね！それをガーディに当てるように投げて！」

「わかった。」

私は懐から今回の任務のために持たされたモンスターボールを一つ取り出し、出てきたばかりのガーディに向かって投げつけた。

バシッ！バシユウウン！

ボウン！

「ああ！惜しい！」

「やはり弱らせないと捕まえるのは厳しいな。」

「フオードさん！なんとかして弱らせないと！」

なるほど。弱らせなければボールから出てきてしまうというわけか。そして足元へ帰ってきたボールは手にとって見てみると機能が失われているようで、一度使ったモン

スターボールは2度は使えないようだ。私が持ってきたボールは3つ。今ひとつ使ってしまったのでチャンスは後2回というわけか。

そんなことを思案しているとガーデイがまっすぐこちらに突っ込んできた。

「とっしん」だ！避けるんだ！」

タケシの声が響く。私は言われるまでもなく、サイドステップで突進を躲す。野生のガーデイは突進状態のまま大回りでもたまた私の方へ来た。私は森の中の木の影に隠れた。

ドツシーン！

「ありやま、また盛大にぶつかってたわね。」

「フォードさん！相手は怯んでる！今なら！」

確かに今ならボールに収まってくれるかもしれない。私は素早くボールを取り出すと、気にぶち当たって怯んでいるガーデイに向かって投げつけた。

バシユウウウン…ボウン！

「なっ！あのガーディナかなか強いぞ！」

「ねえ、私達も援護したほうが良いんじゃない？」

「そうだな。ピカチュウ！」ピツカツ！

「援護は要らないと思うよ。」

「え？」ピカ？

「そうね。フォー・・・ドなら援護は不要でしょうね。」

「しかし、あのガーディ、野生にしてはレベルが高い。それを相手に生身の人間では・・・。」

「そうよ！下手したら大怪我しちゃうかも！」

「大丈夫大丈夫。まあ見ててご覧。」

中々好き勝手いつているが、あまり策は多くない。ボールから出たガーディはすぐに距離を取ると、私のいる木に向かって炎を吐いた。

「かえんほうしゃだ！」

スッ

ボオオン！

「あ、あれ？フオードさんは？」

ガ、ガウ!?

火炎放射が木に直撃した。その際に小規模ながら爆発が発生し、爆炎が相手の視界を僅かな間ではあるが遮る。その隙に私は素早く地面に伏せ、横に転がりながら2つ隣の木へ移動した。この辺りは草が生い茂っており、私のスーツが黒いこともあつて気づかれることなく移動できた。私は転がる最中に手のひらサイズの石を一つ拾い、木の裏に隠れつつそれをガーデイの反対側の茂みに向かってかなり山なりに投げた。

ガサツ

ガウツ！ガー！

ボオオオオオ！

タタタ

ガーデイが後ろの茂みに移動したと勘違いしてそちらに向かって火炎放射を行う。ポケモンの使う火炎放射は技を繰り返す時にかなりの音が出ている。その音が私の足音をも消してくれる。私は素早くガーデイに近づくとその上を通り過ぎるように駆け

寄る。

ガウツ!?

シユツ

トン

案の定、気配を察知したガーディが火炎放射を中止してこちらに向き直った。が、既
に私はガーディの上を通過しかけており、私は通過する途中で振り向いたガーディの首
後ろに、普段の半分程度の力で手刀を食らわせた。絶妙のタイミングで絶妙の場所に
入った手刀は、ガーディの意識を一瞬で刈り取ることになった。

私はガーディが地面に崩れ落ちるのを確認した後、最後の一つになっていたモンス
ターボールをガーディに当てた。

バシユウウウン…

ポーン

「やったぜ!」

「すごい! ポケモンを使わずにゲットできるなんて!」

「凄まじい動きだったな！あの人只者じゃないぞ！」

「流石ね。」

「かえんほうしゃの避け方、注意のそらし方、手刀の精度、僕たちには到底真似できないね。」

~~~~~

『無事ポケモンをゲットできたようね。任務完了よ。帰還して頂戴。まあ、その前にブルーたちはバトルするみたいだけれどね。』

~~~~~

ボールを拾い上げ、スーツに付いた草を払いつつ皆のもとに戻る。すぐにサトシ達が駆け寄ってきた。

「すつげえ！一体何が起こったんだ?！」

「大したことはしていない。陽動を行い、相手の隙をついて気絶させただけだ。」

「十分すごいとおもいますよ。そのガーディ、かなりレベル高いはずですから。」
「そうなのか。」

「だから言ったでしょう？大丈夫だって。」

「お疲れ様、フォード。」

「ああ。これで一応目的は達成できたな。」

「ねえ！ガーディをもっとよく見せて！」

「フォード、ガーディのボールを掛け声とともに放り投げて。」

「掛け声？」

「出てこい！とか、いけ！とかそんな感じのよ。出す時の合図みたいなものね。」

「ふむ……。ガーディ、出撃だ。」シユツ

ボウン！ガウツ！

「おおー。」

「うん、毛並みもいいし、野生とは思えない状態の良さだ。」

「可愛い！もふもふしてる！」

小一時間、ガーディについての基本的な知識や育て方に関する情報をタケシから教わった。基本的には犬と同じような扱いでいいようだ。

一通りの教授が終わった後、サトシはバトルの約束をしていたのを思い出したようで、その場でサトシ・ヒカリペアとブルー・シルバーペアのタッグバトルが行われることになった。審判はタケシ、私はその横でガーディと一緒に見ていることになった。

「ではこれより！タッグバトルを開始する！」

「マグマラシ！チャームアップ！」グマツ！

「頼むぞピカチュウ！」ピッカ！

「行ってきた！カメちゃん！」ガメー！

「行け！オーダイル！」グワー！

「バトル！スタート！」

「ピカチュウ！速攻で決めるぞ！オーダイルにボルテッカー！」

ピッカア！

「マグマラシ！カメックスにスピードスター！」

グマア！

「カメちゃん！マグマラシにハイドロポンプ！」

グワ！

「オーダイル！ピカチュウにアクアテール！」

ガーッ！

お互いの技が炸裂しようとしたその時、思わぬ乱入がバトルをいきなり中断させた。

ポオオオオン！

「きゃあ！」

「な、なんだあ!？」

「何だかんだと聞かれたら。」

「答えてあげるのが世の情け。」

「以下略にゃ！」

そこには先程撃退したと思っていたロケット団が居た。しかもやたら大きなロボットに乗っている状態で。丸い頭に一つ目、どこぞの公国のなんとかスーツに酷似している。

ロケット団は目にも留まらぬ速さでバトルに出していたポケモン4匹と私の隣りにいたガーディをアームで捕獲して腹部の牢に入れた。

「なーはっはっは！ピカチュウとその他諸々は頂いたわ！」

「さつきは不覚を取ったが今回は万全だぜ！」

「ロケット団！またお前らか！ピカチュウを返せ！」

「私のマグマラシも返しなさい！」

「やーなこった！」

「悔しかつたら取り返してみな！」

「行け！ドサイドン！」グワー！」

「ドサイドン！はかいこうせん！」グワー！」

ボオオオン！

「なっ！無傷だど?!」

「何やってんのよシルバー！行って！ニドちゃん！脚部に はかいこうせん よ！
ガーッ！」

ドオオン！

「うっそお！なんでえ!?!」

「にやつはっはっは！さつきやられた時にはかいこうせん対策も盛り込んでおいたの
にや！」

「そういうこと！今回は俺らの大勝利だ！」

ブルーとシルバーの攻撃にもびくともしていない。かなり頑丈なロボットだ。しかし私のガーディまで取られたのは不覚だった。これでは任務が完了できない。なんとかして取り戻さないといけないのだが……。

私はロボットをよく観察した。確かに表面は謎の合金で覆われており、先程から断続的に繰り返し出されるブルー達5人のポケモンたちによる攻撃にもびくともしていない。特に火炎系や電撃系はアームの部分で吸収している有様だ。しかし、吸収しているということは必ずどこかで排出も同時に行っているはずだ。電気は地面や空中に放電すればよいが、火炎放射の熱は放熱板やクーラーなどで冷まさなければならぬ。ということ……。

私は森の中を通過してロボットの裏に密かに回り込んだ。ロケット団は攻撃してくるポケモンたちをも捕獲しようとしており、こちらには気がついていない。……あった。ロボットの背面に細長い放熱用の排気ダクトを見つけた。角度的に姿を晒す必要があるが、そこがああのロボットの弱点なのは間違いないだろう。私はシルバーボーラーを取り出し、ロボットの背後に躍り出た。サトシたちからは見えない位置で、排気ダクトに向かって弾倉内の弾をすべて撃った。

バシユバシユバシユバシユ!

ガキンツ! バチバチバチバチ:

「ん? なんにや?」

ビービービー!

「ちよ、ちよつとニヤース?」

「なんかロボがおかしくなってるないか?」

「にやにや!? 排気ダクトが壊れたにや!」

「え、それって……。」

「どうなるんだ……?」

「このままじゃオーバーヒートして爆発するにや!!」

「「ええ!」」

「ちよつと! なんとかしなさいよ!」

「無理にや! もう……あ。」

ジジジジジジ

ボオオオオオン!!

「ギャー!」

「やっぱり最後はこうなるのねー！」

「今回はうまくいくと思っただのになあ……。」

「生活費3ヶ月分が水の泡ニャ……。」

「二やーなかんじー!!!」

「ピカチュウー！」ピッカ!

「マグマラシ！良かったわ！」マグマグ!

「ふう、危ないところだったわねカメちゃん。」ガメツ

「無事で良かった。オーダイル。」グワツ

「怪我はないなガーディ。」ガウツ!

爆発したロボットは頭の部分に居たロケット団3人を空の彼方へ吹き飛ばした。サトシ達曰く、いつもあんな感じで吹っ飛んでいくので大丈夫だと言っていた。ポケモンたちもみんな戻ってきた。一件落着きというところだろう。ただ、バトルに関しては既に日が傾きかけていたため、今回はお流れということになってしまった。

とりあえず目的は達成されたので、私達は一旦ヤマブキシティに戻ることにした。薄

暗くなりかけていた道は予想以上に時間がかかってしまい、ヤマブキシティのポケモンセンターについたときにはすっかり辺りは暗くなってしまうていた。私達はサトシたちの勧めもあってポケモンセンターの宿泊施設で一泊していくことにした。食事も終わり、寝床へ向かう際に通信が入った。

~~~~~

『47。その世界の調査がある程度完了したから報告するわね。その世界はブルーとシルバーが居たカントー地方によく似ているけれど、細部のいたる所が異なっていることがわかったわ。ワールドナンバーも微妙に異なっているところから、ブルーとシルバーの居た世界とは別の世界であることが判明したの。それで、過去の渡航ログも漁って見たところ、コガネシティに行った時は元の世界だったけれど、カナズミシティに行った時はこの世界に来ていたことがわかったわ。どうして同じような世界が2つあるのかは引き続き調査中だけれど、少なくとも任務遂行やICAの活動に支障はでなさそうよ。だから安心して頂戴。』

~~~~~


「あれは一体どうしたんだ？」

『キャロラインはあなたから送られてくる情報をだいぶ羨ましそうに見ていたからね。よほどあのポケモンが気に入ったんでしようね。』

「アレでは誰のポケモンかわからんな。」

『そうね。まあガーディは良い選択だと思うわ。番犬としても申し分ない能力がある。』
「訓練プログラムはあつただろうか？」

『あるわよ。ICA選択訓練に最近追加されてね。軍用犬訓練プログラムと番犬訓練プログラム。それと愛玩動物訓練プログラムよ。』

「愛玩動物？」

『愛玩動物としての振る舞いを教え込むのよ。可愛らしい動物に油断しない敵はほとんど居ないわ。』

「なるほど。陽動や誘導に使いそうだな。」

『ましてやポケモンは犬や狼には使えない技が使える。可能性は無限大ね。』

「ならばもう少し捕獲してくるか？」

『いいえ、まずはあの子を訓練してからね。あのプログラムがポケモンにも適応できるかどうかを確かめるまではポケモンを増やしたところで手に余るだけよ。』

「ふむ。」

「姉さん、持ってきたよ。」

「待ってたわよ！シルバー！キャロラインさん、はいこれ。」

「これは・・・ご飯ですか？」

「そう、ポケモンフーズ。ガーディに食べさせてあげて。」

「わかったわ。ほくら・・・美味しいご飯ですよ・・・きゃ！食べた食べた！」

「かわいいーわねー。」

「まずはあの連中を引き剥がすところからだな。」

『・・・そのようね。ああでもその前に。』

「?」

スタスタスタ

『キャロライン。』

「あ、バーンウツドさん・・・。」

『・・・私にも触らせなさい。』

「・・・！良いですよ！もちろん！」

「・・・愛玩動物訓練は必要なさそうだな。」

HITMAN 2 『けじめ』

『ヌベールへようこそ。 47。』

『この街は首都の経済圏からは外れているけれど、ガリア・トリステイン・サハラ の3つの地域の交通の要所にもなっている戦略的に重要な街よ。』

『常に第4騎兵師団が常駐しているのだけれど、周囲に比較的大勢力である領地に囲まれているのもあって基本的に内乱外乱ともに無縁で、第4騎兵師団は儀仗隊のような扱いになっているみたいね。第4騎兵師団という名前こそ師団だけれど、実際は中隊程度の人数しか居ないみたい。』

『ターゲットは通常、首都リユティスの第1メイジ師団の副師団長をしていたのだけれど、今回の暗殺作戦に合わせてクライアントである女王陛下が直々にこの第4騎兵師団の師団長に任命したみたいね。情報によれば既に後釜の師団長は決まっているそうよ。』

『ターゲットは町の中央にあるヌベール城にいますと思われね。城自体一部一般開放されていて警備は比較的手薄よ。それでも立ち入り禁止エリアにはそれなりの量の警備兵がいることが予想される。十分気をつけてね。』

『それと、任務とは関係ないのだけれど、タバサが技術部に頼んで何かを持ち出したらしいわ。帰還したら聞き取り調査をするつもりではあるけれど、暇があったら確認してくれないかしら。』

『幸運を祈ってるわね。』

~~~~~

「着いたよ。ヌベールだ。」

「感謝する。」

「いいって。楽しんでこいよ。」

パカ。パカ。パカ……

町の入り口に当たる地点までやってきた。やはり怪しまれにくいとはいえ馬車による移動は思いの外体力を消耗する。これならば素直にタバサのドラゴンに乗せてもらえばよかつただろうか。

そのタバサは今町外れにあるICAセーフハウスへ装備品を受け取りに立ち寄って

いるらしい。何を持ち出したのかは本部も把握していないらしく、その調査もサブ目標として設定されている。反旗を翻したりしなければ良いのだが。そんなことを心配していると上空からドラゴンが舞い降りてきた。・・・？杖以外何も持っていないように見えるが・・・。

「おまたせ。」

「何を取りに行っていたんだ？」

「後で話す。」

「タバサ。お前を信頼して包み隠さず言うが、ICA本部はお前が持ち出したものに関しての聞き取り調査を行うようだ。本部にも無申告で物を持ち出すのは問題になる可能性がある。」

「処分は受ける。だけどこの任務が終わるまで待つてほしい。」

「・・・そうか。」

タバサは私に懇願とも取れる視線を送ってきた。表情は普段通りの無表情ではあるが、若干悲しみや決意が見て取れる気がする。このような表情をするのは珍しいことだ。



私は絆されたというわけではないが、失踪するような雰囲気でもないため、とりあえずは聞かないでおくことにした。まずは任務をこなしていこう。

街はそれほど都会というわけではなく、一軒家が畑や庭園などを挟んでまばらに立ち並んでいる。郊外の住宅地という雰囲気だ。そして道の先、おそらく街の中心地であろう場所には小規模な城が立っていた。地上3階建て、中心の建物を取り囲むように4本の塔が立っている。魔法学院をひと回り小さくしたようなものだろうか。4本の塔の一边に城門があるが、警備兵こそ立っているものの門は基本的に開け放されており、住民と思われる人々が比較的頻繁に出入りしているのが見える。

「まずは任務だ。行くぞ。」

「(コクン)」

私とタバサは城の中へ進んでいった。城の中庭ではバザールのようなものが開かれており、町の住人で賑わっている。しかし町の人口自体がそれほどでもないせいがかこつた返すともでは行かない。混乱を起こすのはそれなりに難易度が高いだろう。

そのまま中庭を進んでいくと、とある商店の前で警備兵と店主が何かを話しているのを見かけた。私は隣のアクセサリー店でタバサに物を買って与えるようなふりをしつつ

聞き耳を立てる。

「うーん、でもなあ……。」

「決めちゃいましょうや。最近奥さんにもどやされたんでしよう?」

「うげつ!なぜそのことを!」

「もうわしら商人の間では知らないやつは居りませんぜ。というか町人でも大多数が知つとります。」

「うーむ……ちよつと派手に騒ぎすぎたか……。」

「でも肝心なところは曖昧でして。何があつたのか教えてくれたらまけときますぜ?」

「ん……まあいいか。実は師団長とちよつとやりあつちやつてな。」

「師団長さんに?そりやまたなんで?」

「大したことじゃないんだ。警備体制に関してちよつと意見がぶつかつちまつてな。」

「へえ……それでなんで奥さんが出てくるんで?」

「向こうの奥さんも出てきたからだよ。警備体制に関するつてのが婦人会がよく使う会議場が含まれてたらしくてな。監視体制強化だつて言つて大騒ぎになつちまつてさ。」

「なるほどねえ。女の話は旦那連中には聞かれたくないもんですからな。」

「それで騒ぎになつた責任を揃つて取らされたつてわけさ。だから俺はこうして外勤、

「師団長は城の最上階で空を眺める仕事ってわけよ。」

#####

「どつちが左遷ですかい?」

「こつちに決まつてるだろ。向こうは来もしない対空警戒任務だぞ? 大方今頃いびきかいて寝てるよ。」

~~~~~

『ターゲットは城の最上階で対空警戒任務を行っているようね。来ることがない空の驚異に対しての警戒はさぞかし退屈な任務でしょうね。きつとかなり油断しているだろうから暗殺するのも容易でしょう。』

~~~~~

店主に怪しまれないように適当に髪飾りを買って店を離れる。そのまま城の裏側へ回り込んだ。人の目を避けつつ城に侵入できそうな場所を探した結果、城の外壁の一部に窓があり、そこから内部へ侵入することができそうだ。窓は高さ3〜4mのところ

あり、通常ならばはしごか何かが必要だが、レビテーションで浮かぶことのできるタバサには問題のない話だった。私が周囲を警戒しているさなか、タバサは先にレビテーションで城の中へ侵入した。

・・・おかしい、タバサが帰ってこない。敵と接敵してるのだろうか？それにしては静かすぎる。5分が経過し、流石に通信を入れようとしたその時、窓からタバサが顔を出した。そのまま周囲を確認し、レビテーションで私を城の中へ招き入れた。

「随分時間がかかったな。何があった？」

「少し気になるものがあった。」

「気になるもの？」

「任務とは関係ない。遅れたのは申し訳ない。」

「ふむ。まあ寄り道は程々にしておけ。任務を続行するぞ。」

「了解。」

やはりなにか様子がおかしい。今までの任務では作戦目標以外への目移りなどなかったはずだ。持ち出しの件や任務への志願等、何か隠している節が見られる。用心しておくことにしよう。

入った部屋は書庫のような場所だった。城自体が小さいのもあって、書庫自体も小さく、個人用と言っても良いくらい蔵書の量だった。部屋の中央に置かれていた机の上には王政府の紋章入りの書類が置かれていた。このようなところに放置しているということはそれほど重要な事案ではないことが予想されるが、念の為確認しておく。

ああ・・・なるほど。タバサが遅れた理由がわかった。この書類は隣のオルレアン王宮直轄領の屋敷の解体に関する書類だった。あの屋敷はタバサの生家であり、暗殺されたオルレアン公が自宅としていた屋敷だ。母君はタバサが一度死亡した際に容態が悪化し他界していたため、唯一残っていた召使い1名も王宮によって別の領地へ転属になっっている。文字通りぬけの殻となつた屋敷は長らく放置されていたようだがこの度解体が正式に指示されたようだ。

たしかに生家が解体されるとなつたら少なからずショックを受けてもおかしくはないだろう。だが任務は確実にこなしてもらわねば困る。私はタバサに確認を取る。

「遅れた理由はこれか？」

「・・・」

「心情の揺らぎが見て取れる。任務続行はできるのか？」

「問題ない。」

「本当か？」

「・・・問題・・・ない。」

「・・・そうか。」

明らかに動揺しているがそこはプロフェッショナル、任務は任務として考えているようだ。ともかくなるべく早めに任務を片付けてしまうことにする。書庫の本棚には童話や寓話、天文学や地政学、はては婚活指南本まであったが肝心の館内図がなかった。私は諦めて別の部屋を探すことにする。

「二手に分かれる。館内図を探るか、屋上に登る方法を探る。交戦禁止。」

「了解。」

私は反時計回りに、タバサは時計回りに順繰りに部屋を調べていく。調べていく過程でわかったことはこの城はほとんどもぬけの殻ということと、殆どの部屋は使われていないということだった。そして肝心の館内図もなければ階段すら見当たらなかった。そうこうしている間に私とタバサは半周ずつ調べ終え、残るは中央のホールのみとなつてしまった。

流石に中央のホールには中から話し声がしており、声が聞こえるだけでも3人は少なくともいることがわかる。あまり痕跡は残したくはないのだが致し方ない。ここはおとなしく眠ってもらうことにする。

「タバサ。」

「(コクン)」

タバサは小さくうなずくと扉に向かって手をかざした。少し困惑した表情を浮かべると小さな声で言った。

「中にメイジがいる。高位のメイジの場合、スリープクラウドが効かない場合がある。」

「何人いるか、どのあたりにいるかわかるか？」

「人数は1人。向かって右側4 m先。」

「それだけわかれば十分だ。」

私は近くの部屋に戻り、部屋の中にあつた真鍮の燭台を手にとって戻った。

「よし、良いぞ。」

「(コクン)」

スリープクラウド”

フワア

「んあ……なんか眠く……。ドサツ

「俺も……。グウ

「ん……。これはスリープクラウド？侵入s (ゴツ) ぎやあ！」ドサツ

扉を開けてスリープクラウドを流し込み、2人が眠ったタイミングで眠りそうにならないメイジに向かって燭台を投げつけて昏倒させた。落ちる時に多少派手な音がするかと思っただが、床に絨毯が敷かれており、そこまで派手な音は出なかった。

ホールの中は集会場のような場所になっており、眠った二人は中央のテーブルに居たようだ。昏倒したメイジはホールの端、上へ向かう螺旋階段に座っていたようだ。やはり上下階に通じる階段はホール内にあった。下から別の人員がやってくる前にさつさと最上階へ行ってことを済ませてしまおう。

階段は上に行くにつれてカーブがきつくなっていき、最上階の部屋は広さが4メートル四方ほどこかなかった。調度品などは何もなく、ただ外へ通じる扉だけがある。タバ



サを戦闘態勢で後ろに待機させ、私は慎重に扉を開けた。

#####

~~~~~

『無事に屋上にたどり着いたわね。さあ、ターゲットの寝顔でも拝むとしましょうか。』

~~~~~

予想通り、最上階の外は屋上になっていた。屋上はそれなりな広さがあり、その片隅に簡易的な机と椅子、そしてその椅子に腰掛けて居眠りをしている一人の男が目に入った。

~~~~~

『アレがりシャル・アダン第4騎兵師団長。最近は行事もなくて退屈していたみたいだから、私達がその退屈な日常を終わらせてあげましょうか。』

させられていたのもあるだろう。これならば北花壇騎士団の他のメンバーでもこなせたのではないだろうか？それでも私に依頼してくるということはそれだけ確実に仕留めたかったということなのだろうか。全くを持って謎だ。

私達のもと来た道を戻り、窓から飛び降りてレビテーションで静かに着地すると、バザールの群衆に紛れ込んで脱出しようとした。

「待つてほしい。」

城門を出てすぐ、タバサが帰還しようと歩を進めていた私を呼び止めた。

「どうした？」

「・・・あなたに頼みたいことがある。」

「暗殺の依頼か？」

「そうじゃない。」

「ならば・・・。」

「ここでは話せない。セーフハウスへ向かう。」

やはりこの街へタバサが着いてきたのはなにか別の目的があつてのことだった。そういえば技術部から持ち出したという装備も持っていないようだったから、おそらくセーフハウスに置いてきたのだろう。一体何をするつもりなのか。

セーフハウスに着いた私達はテーブルで対面していた。若干張り詰めた空気にはなっているが、タバサはおもむろに近くの戸棚からアタツシユケースを取り出し、そのまま机の上に置いた。おそらくこれが技術部に依頼して持ち込んだものなのだろう。タバサはアタツシユケースを開けた。

「これは……リザレクター2か？」

「そう。」

タバサが持ち込んだのは死者をこの世に蘇らせるリザレクターの改良版、リザレクター2"だった。とりあえず細菌兵器とかではなかったので一安心だが、これをいったいどうするつもりなのか。

「頼みたいことはこれの使用許可をとってほしい。」

「ICAにということか。」

「そう。」

「・・・誰に使うつもりだ。」

「・・・。」

「使う相手がわからなければ許可は出せない。それは私も本部も同じだろう。」

「・・・私の母。」

「母親？」

「そう。このヌベールの街の墓地に密かに埋葬されている。」

「母親を蘇生するために技術部の技術を持ち出したのか？」

「・・・。」

「ICAの技術の私的利用は処罰の対象となる恐れもあるんだぞ。」

「・・・。」

ICAの技術はエージェント個人の願望を叶えるためのものではない。依頼を受けた暗殺任務の遂行に必要な技術を開発しているに過ぎない。そのことを指摘するとタバサはうつむきながら語り始めた。

「・・・まだ父様が生きていた時、母様は私にいろいろなことを教えてくれた。礼儀作法や魔法学はもちろん、料理や裁縫などの女性としての基本的なことや、使用人との接し方や為政家の心得も。私は母にとっても愛されて育った。でも父様が暗殺されて、私にもその手が伸びようとしていたところで母様は自らの身を犠牲にして私を暗殺の手から逃れさせてくれた。」

「・・・。」

「母様はあの晩、毒を盛られるそのパーティの前、私に『私に何があっても復讐だけは考えては駄目』と固く言い聞かせていた。でも私はその言いつけを破った。父様を殺され、母様の心を奪ったジョゼフがどうしても許せなかった。でも復讐を誓った時、私にはまだその力はなかった。でも、しばらくして魔法学院での生活にも慣れた頃だった。トリステインの城下町であなたを見かけたのは。」

「トリステイン・・・、そうかチェレン又徴税官のときか。」

「そう。あなたのことを追うにつれICAの事も知った。私は母様が心を壊されたときから神というものを信じては居なかつたけれど、そのときだけは神に感謝した。復讐の機会を与えてくれたと。私はシュヴァリエの地位を得る過程で貰った報奨金や給料などをすべて費やして、ICAに依頼を出した。復讐を完結させるために。」

「まだ主要人物の暗殺についての規定がなかった時期だ。だからギリギリ依頼料が足りたのか。」

「復讐は成功した。でも残ったのは晴れやかな気分ではなく、母様の誓いを破って母様の思いを裏切ってしまったという後悔だけだった。でもこれは私に課せられた罰。そう思うことにしたそんな時だった。あなたが私を暗殺しに来たのは。」

「……。」

「毒を盛られ、意識が朦朧とする中で死にたくないという気持ちと、これで後悔の念から開放されるという気持ちもあつた。でも開放されなかつた。」

「私が生き返らせたからな。」

「最近思うことがある。この後悔の念は直接母様に謝罪するまで消えることはないのだろうと。普通ならばそれは叶わない願い。でも……。」

「“これ”があれば……か。」

「そう。だから47。私に母様に謝罪させてほしい。それさえ叶えてくれるなら、私は一生をICAに、47に捧げることを誓う。私を……この輪廻から開放して……。」

最後の方はほとんど涙声になってしまっている。さて、どうしたものか。要約すると、復讐をするなど言われたけれど復讐をしてしまったことへの後悔に悩まされている

からそれを解消させてほしいということだ。まとめてしまうと身勝手な要求にも思える。だが……。

「……。」

「……。」

「……ふう……私も甘くなったものだ。」

「……！」

「本部、聞いているか。」

「……ええ。すべて聞かせてもらったわ。」

「それならば話は早い。それで？」

「……残念だけれど。上級委員会としては“NO”よ。」

「そうか……。」

『わかつたら早急に帰還して頂戴。タバサは上級委員会から意見聴取が行われるわ。出頭して頂戴。』

「……。」

『返事は？』

「わか」

バシユガシヤン

バチバチバチ…ボウン！

「・・・え？」

繰り返そう。私もだいぶ甘くなったものだ。

「つと、済まない。こういう話は苦手でシルバーボーラーを整備していたら暴発してしまっただ。」

「47・・・。」

「むう、流れ弾が渡界機にまで当たってしまったている。これでは使えないな。通信機と渡界機は別のセーフハウスにならあるはずだ。本部の指示の途中だったので、その指示を聞くためにも別のセーフハウスに移動するぞ。」

「……！」

「どこのセーフハウスに行くかだが……。ふむ、ココだな。この墓地の奥の小屋のセーフハウスにしよう。すぐに出発するぞ。案内頼めるか。」

「……はい！」

これは懲罰は避けられないかもしれないな……。

私達は墓地へやってきた。タバサの話を知ったり本部と通信したりしているうちに辺りはすっかり暗くなってしまうていた。私はタバサに目配せをすると、タバサは急いで墓地の中へ入っていった。私はできる限りゆっくりとあるく。

タバサは目的の墓を見つけたようだ。本来苦手としていっていると聞いていた土系統の魔法を使って素早く棺桶を掘り返している。そして棺桶の中の遺体を見つけると感慨深そうにかつ懐かしそうに眺めている。悠長に眺めていてもらってはまずいので私は少し大きめの足音を立てる。足音で目的を思い出したのか、タバサはアタッシュケースからリザレクター2を取り出すとそれを遺体にまんべんなくふりかけた。

遺体はみるみるうちに元の麗しい肉体に戻っていく。私が丁度墓の前に差し掛かつ

た時、遺体だった物、オルレアン大公夫人は目を覚ました。

「・・・シャルロット・・・。」

「かあさま！」

「シャルロット、あなたなのですか？」

「はい、私です。あなたの娘のシャルロットです・・・。」

「ああ・・・こんなことが・・・！」

私は静かにその場を通り過ぎる。ここは邪魔をしてはいけないところだろう。シルバーやブルーに時折「わかってない！」と罵られる私でも流石にそれくらいはわかる。時折振り返ってみるが、タバサは肉親との再会に感極まり大泣きしているのが見える。私は一足先にセーフハウスに入ることにした。

『47。聞こえるかしら？』

「ああ。」

『どういうことかしら？場合によってはあなたも懲罰対象になるのよ？』

「済まない。普段聞かないような話だったものだからな。」

『上級委員会は結構ご立腹よ。あなたにも意見聴取には参加してもらおうわ。』
「仕方ないだろう。」

『……』

『……』

『47。あの暴発はどうして起こったのかしら？』

「……ああ、少し手元が狂ってしまった結果、撃鉄が作動してしまった。」

『アレは防ぎようのない「事故」だった。そういうことね？』

「そうなるな。」

『そう。なら仕方ないわね。上級委員会への報告書にもそう書いておきましょう。』

「バーンウッド……」

『……私も甘くなつたのかしらね。意見聴取には私も参加するわ。』

「すまない。」

『ふふ、まあ詳しい話は帰ってきてから聞きましょうか。』

およそ30分が経過した後、タバサは母親を連れてセーフハウスに戻ってきた。バーンウッドの指示により、そのまま母親と一緒にICA本部に帰還した。

~~~~~3日後~~~~~  
~~~~~

「聞いたわよ！47！タバサちゃんの願いを聞いてあげたんですって？」

「何の話だ？」

「とぼけちゃって！お母さんを蘇生してタバサちゃんと会わせてあげたんでしょう？」

「私は何もしていない。ただ単に銃が暴発しただけだ。」

「ふん♪まあそういうことにはしておきましょう！あーあ、私もお母さんに会いたくなっちゃったな。」

「ブルーの母親は既にICAの身辺調査で居場所が判明しているはずだが？」

「それはまあそうなんだけれど。いつでも会えるってわけじゃないからね。」

ガチャ

「あ、タバサちゃん！おかえり〜。」

「ただいま。」

「結果は？」

「懲罰金のみ。リザレクター2の製造費用にあたる3万ドルで済んだ。特別措置だそ

う。」

「そうか。」

「47とバーンウッドさんのおかげ。本当に感謝している。」

「お母さんはどうしたの？」

「今はキュラソーさんと話しながら検査を受けている。終わったらこちらでの記憶を消去した後に送り返される事になっている。」

「送り返して大丈夫なの？」

「問題ない。私が精霊の力で蘇ったのと同じように、母様も精霊の力で蘇ってもらおう。」

「あまりその設定を多用するのは良くはないと思うがな。」

「私の給料で養う。問題はない。」

「ふふふ♪一件落着ってわけね！」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~  
 ~~~~~

・「開かれた城」

【+1000】『正門から城に侵入する。』

・「夢の中へ」

【+3000】『ワイヤーロープで寝ているターゲットを暗殺する。』

・「小さな反逆」

【+3000】『通信機または渡界機を破壊する。』

・「親心」

【+5000】『タバサの母親を蘇生する。』

HITMAN 2 『地底を揺るがすモノ』

『旧都へようこそ。 47。』

『目的地である灼熱地獄跡はこのすぐ下の階層になるわ。でもその前に灼熱地獄跡とこの旧都両方を管理している地霊殿の“古明地さとり”という人物に会ってもらうわ。』

『地底世界の管理者である彼女は自分たちの預かり知らぬところで作戦が遂行されることを快く思わないでしょう。八雲紫は一言挨拶はしておいたほうが良いといっていたわ。一応アポは取ってくれているみたいよ。』

『管理者の許可を経て灼熱地獄跡に行ったら周囲に浮かぶ炎のようなものに注意して。それは地獄にすらいけないような凶悪な怨霊であることが多いみたいだから。その点についても古明地さとりかその配下の者が対策のお守りのようなものをくれるそうよ。』

『取り憑かれたりしないようにね。幸運を祈ってるわ。』

~~~~~



ガヤガヤガヤ

以前にも来たことの有るこの街は、太陽などがない地底世界では常に夜の歓楽街のよ  
うな賑わいを見せている。あちこちの軒先で露店居酒屋が営まれており、鬼と思われる  
者たちが酒を酌み交わしている。

私は前回は子鬼に変装して街に侵入したが、今回は古明地さとりに八雲紫を通じて正  
式にアポイントメントを取っているため、いつものスーツ姿そのままだ。その姿のまま  
通りを歩いていると、路端で酒を煽っている一人の鬼が話しかけてきた。

「おい、そこのお前。人間か？」

「そうだが。」

「人間がこんなところに何のようだ。オレたちの縄張りだここからは。」

「古明地さとりという人物に会いに来た。」

「ああん？ 覚妖怪に？ どうもうさんくせえなあ……。」

「……。」

「お前、なんか気に食わねえから俺と一勝負していけ。勝ったら通してやるよ！」

「生憎とそんな暇は無い。申し訳ないが……。」  
「なんだてめえ！俺の勝負が受けられねえってのか!？」

まずい。それなりに知的な種族だと聞いていたがやけに喧嘩っ早い。身体能力に差がありすぎる鬼との戦闘はできれば避けたかったのだが……。

打開策を考えていると鬼はしびれを切らしたように殴りかかってきた。その巨体からは想像できないほどに素早く、私は既のところまで脇からすり抜けた。仕方ない。ここは地形を利用して逃走する一手だ。

私はそのまま近くの家の中に駆け込む。そのまま家の中を通り過ぎつつ窓から飛び出て反対側の路地へでた。鬼は家の中を滅茶滅茶にし、壁すらもぶち破りながらこちらへ向かってくる。気性が激しいにもほどが有るのではないだろうか。

窓から窓へ路地から路地へかけていくと隣の大通りへ出た。先程の道よりも一回り広い道だ。私は行き交う人々、いや鬼たちの間をすり抜けながら走る。後ろの鬼は通行人を突き飛ばしながらこちらに向かってくる。素早い上に力が強くおまけに素早い相手を追う動体視力も持ち合わせているとはきてはて一体どうしたものか……。走りながら打開策を考えていると突如として目の前に立ちはだかった人影があった。私は既のところまで衝突を免れ脇をすり抜けようとした。

「待ちな。人間。助けてやるよ。」

「……！」

「うおらあ！どこ行つた人間……うつ！勇儀……の姉御……。」

「上から見てりや随分派手にやつてんじやねえか穴虎よお……。」

「ええと、あの……その……。」

「お前が通つてきた道を見てみる。家もボロボロ通りがかりに突き飛ばした鬼たちはお前を睨んで凄んでるぞ？」

「うつ……。」

「だがこの街の治安を守る者としてはここでリンチになるのは見ているわけには行かぬえ。……ここはあたしが折檻といくことで手打ちにしてやるよ。」

「あ、姉御……それだけはご勘弁を……。」

「問答無用！」

ドゴオオン

突如として目の前に降り立つた、頭に赤い一本角を持った女性の鬼が救済に現れてくれた。私刑は見過ごせないとかなんとか行っておきながら自分は容赦なく私をおつて

きていた鬼をタコ殴りにしているが、周りの鬼たちが一切手を付けないということは相当な実力者なのだろうと推測できる。

本人曰く「折檻」が終わった後、折檻された鬼はボロボロになりつつも自力でトボトボと帰っていった。勇儀と呼ばれた女性の鬼がこちらにやってきた。

「さて、人間。済まなかったな。事の次第は全部見ていたよ。うちの荒くれが迷惑をかけたね。」

「助太刀感謝する。怪我もしていない。」

「で、お前さん、古明地さとりに会いたいんだって?」

「ああ。」

「んー・・・名前を聞いてもいいかい?」

「47。そう呼ばれている。」

「ふおーていせぶん。うん。さとりから聞いた名前そのままだ。じゃああんたがお客様つてわけだね。」

「古明地さとりを知っているのか?」

「そりゃああいつからこの旧都の治安維持を任されてるからねえ。ついてきな。案内してやるよ。」

「助かる。」

怪我の功名というやつだろうか。鬼に追いかけられたら鬼に助けられた。まあ周囲には鬼か怨霊くらいしか居ないだろうが。この女性の鬼は名前を星熊勇儀というらしい。この辺りでは名のしれた鬼らしく、混雑しているところも彼女が近づくととたんに道を譲られる。だが恐れられていというわけではないらしく、時折店舗の軒先から酒の席への誘いが投げかけられている。しかし彼女はそれらをすべてに断りを入れ私を先導してくれている。十分程歩いた後にこの街、旧都というらしいが、旧都の端に近い場所に今までの東洋系の町並みとは趣の違う、暗い色の西洋風の洋館にたどり着いた。

「ついたよ。ココが地霊殿。古明地さとの居るところさ。」

「感謝する。とても助かった。」

「いやいや、まだ居るかどうか確認してないだろ。えーっと……これだったっけかな？」

ポチツ キンコーン

「ああ、合ってたみたいだ。」

ハーイ

ガチャ

「ありや？勇儀さん。珍しいことも有るもんだ。どうしたんだい？」

「お隣。さとりは居るかい？」

「ええ、いらつしやいますよ。．．．つとその隣の方は？」

「ああ。実はさとり用があるのはあたしじゃなくこいつなんだ。」

「ああ。じゃああなたがさとり様が言っていた。どうぞお入りください。」

「失礼する。」

「じゃああたしは案内の役目を終えたから失礼させてもらうよ。じゃあな。」

「ああ。ありがとう。」

「ご苦労さまです。」

~~~~~

『地霊殿にたどり着いたみたいね。見た目は完全にお化け屋敷だけれど。早いところ当主様に許可を取り付けて任務に取り掛かりたいところね。』

~~~~~

地霊殿の中は紅魔館ほど極彩色ではないが、薄暗く壁や天井床のカーペットに至るまですべて暗い寒色で統一されている。案内役の火焰猫燐曰く、旧灼熱地獄からの熱で年中夏場のように暑いこの地域で、少しでも涼しくしようという試みだそうだ。確かに南米のジャングルほどではないがこの地下世界は総じて地熱による影響で暑い。クーラーもないこの世界ではそういう方法でしか涼が取れないのだろう。

しばらく廊下を進んでいると奥から誰かが猛スピードで駆けてきた。

「おり〜〜ん！」

「ちよ!?!お空!?!」

「ダーイーブ！」

ドツシーン

そのまま勢いよく火焰猫燐にタツクルした。私はタツクルの瞬間進路を外したおかげで巻き込まれずに済んだ。2人は3mは後ろに転がって止まった。すぐさま火焰猫燐が起き上がり、右手を振りかざした。

ゴチンツ！

「あいたあ！」

「こら！いきなり飛びかかってくるなってアレほど言ったら！それに今はお客様を案内中だよ！」

「え？あ！」

「全くもう・・・ほら挨拶。そいでごめんなさいも。」

「れ、霊鳥路空です。さわがしくしてごめんなさい・・・。」

「あ、ああ。よろしく。」

「はあ・・・この子はあたいの友達でね。天真爛漫と言うか天然というかバカというか・・・。」

「あははは・・・。」

「てかお空、火力調整作業は？」

「おやつの時間だから切り上げてきちゃった。」

「なっ!?!おやつはこつちから持っていくって言ったろう！早く！持ち場に戻って！」  
「えく・・・。」

「えくじゃない！あんたが居なかったら誰が火力調節するってのさ！ほらはやく！」

「はい・・・。じゃあお兄さん。ばいばい。」

「ああ。」



タツタツタ：

中々騒がしいが悪い雰囲気ではない。最も私としては早いところ古明地さとりのところへ案内してほしいのだが……。そんなふうな顔をしていたのかはわからないが、火焰猫燐は思い出したかのように案内を再開した。意外にも居室は近かったようでその後すぐに部屋の一室に通された。

コンコン

「失礼します。さとり様。お客様がお見えになりました。」

「ありがとうございます、お燐。下がっていいわ。」

「はい、ありがとうございます。」

「早くお空におやつを持って行ってやりなさい。」

「うっ……。はい……。でわ。」

バタン

「申し遅れましたわ。私が地霊殿の主。古明地さとりですわ。」

「忙しいところを申し訳ない。」

「いいですよ。私もその方は少々疎ましく思っていたところですから。暗殺というのは少々物騒ですが。」

「・・・なるほど。覺妖怪というわけか。」

「ええ。あなたの考えていることもわかります。私の許可を得たいのでしょうか？」

「ああそういうことだ。」

「許可自体は問題ありません。先程も言ったようにターゲットであるその男は我々にとつても目障りなのです。」

「感謝する。」

「いえ。あと入り口までなら案内いたしましょう。行き方もわからないようですしね。」

「・・・話が早くて助かるな。」

「この能力で結構疎まれたり恐れられたりしたものです。あなたは・・・都合がいいと考えられているようですね。」

「説明する必要がないからな。」

「ふふふ。もつとおしゃべりしてみたいところですがあなたは任務にしか興味がない様子。ついてきてください。入り口までご案内しますわ。」

こちらの考えている事が読まれるというのは確かに不快かつ恐怖かもしれない。しかし敵意がないことが最初からわかっていれば、こちらは話す必要が無い為便利とも取れる。今回の場合は彼女と敵対したいわけではないので後者だ。

彼女は私を地霊殿の中庭へと連れ出した。中庭の中央奥には洞窟があり、その入り口で彼女は立ち止まった。

「さあここです。ココから先が旧灼熱地獄となります。」

「案内感謝する。館の中にあつたんだな。」

「ええ。灼熱地獄跡を管理しているのは私のペットである、先程あなたを案内した火焰猫燐。」

「彼女・・・ペット？」

「ふふふ、そういうプレイなわけではありませんわ。彼女は火車と呼ばれる妖怪。感覚的には猫のようなものですから。」

「そうか・・・では行ってくる。」

「はい。ああ、これを持って行ってください。中は亡霊と怨霊だらけですから。これがあなたをそれらから守ってくれますわ。」

「ああ・・・感謝する。」

「〃幸運を祈っているわ。〃 ふふふ。」

「・・・。」





も衝撃を与えてしまつては暴発して爆発してしまうからな……。そうしたら最初からやり直しになってしまう。」

#####

~~~~~

『ターゲットの作った魔法陣は魔力充填中は非常に不安定になるらしく、少しの衝撃が会つただけで爆発してしまうそうよ。その爆発の威力はよくわからないけれど、こんな場所ですんなコトをするのだから暴発は想定しておくはず。少なくとも死にはしないと思うわ。暗殺には使えないけれど何かに使えるんじゃないかしら。』

~~~~~

爆発の程度にもよるが人を吹き飛ばすくらいの爆発ならば辺りに岩塊が多く、そうでないところも岩肌がむき出しのこのような地形においては吹き飛ばされただけで何かしらの衝撃を与えることができるだろう。最悪でも気を逸らすことくらいはできるはずだ。

私はターゲットに見つからないように円形闘技場から離れ、周囲を探る。外周の上に丁度転がりやすそうな岩を見つけた。車止めの役割を果たしている小石があるが、それさえどけてしまえば転がり落ちて中央の魔法陣の真ん中に落ちると予想できる。私は見つからないように小石をどかし、手で岩を支えながらターゲットの準備ができるのを待った。

ターゲットは魔法陣より少しだけ離れ、それに手をかざし始めた。何かをつぶやいているが小声な上距離も有るので何を言っているのかはわからない。しかしその手からは明らかに魔力なのだろう青い霧のようなものが出ては魔法陣に吸い込まれていく。次第に魔法陣が光り輝き始め、周囲を青白い光で照らし始める。

私は支えていた手を離れた。岩はゆっくりと動き出したかと思えば、坂道に入った途端いきよよく転がり始めた。ターゲットも転がってきた岩には気がついたようだが、魔力充填中は動けないのか焦った顔をするもその場から逃げなかった。そして……。

ゴロゴロゴロ：ゴシヤ！

ポオオオオン！

魔法陣のほぼ中央に落下した岩は落下の衝撃で砕け散った。その衝撃は魔法陣を不

安定にさせるには十分であつたらしく、魔法陣の光は衝撃の瞬間から光がゆらぎ始め、数秒の間の後大爆発した。

爆発による爆風はこちらにも来たが、距離が遠かつたのと魔法による爆発なのか熱量のようなものは感じられなかった。しかし爆風の風圧は予想以上に大きく、離れたところにいる私が踏ん張る必要があつたほどだった。

土煙が晴れたあと、中央を見ると、魔法陣は光を失つていた。ターゲットが立つていた場所にはターゲットの姿はなく、そのかなり後方の岩塊のそばで横たわつていた。遠目から見た限りでは粉微塵にはなつていないようだ。私はすぐさまターゲットのもとへ向かつた。

ターゲットは岩に頭をぶつけて気を失つていた。私は起こさないように静かに近寄ると、そのまま頭を持つて首をへし折つた。ターゲットは悲鳴一つ挙げることなく息絶えた。

~~~~~

『ターゲットの死亡を確認。遺体の損壊も最小限。見事な腕前ね。ICAから支給されたバッグは持つているわね？それで地上まで持ち帰つて頂戴。』


~~~~~

私は懐から折りたたみ式の袋を出し、遺体をその中へ詰め込んだ。チャックを閉め、それを肩に担いで私は一路旧都へ戻る道を進んだ。

「あれ？ さっきのお兄さん。こんなところで何してんの？」

「君は確か・・・霊鳥路空・・・だったか？」

「うん！」

先程地霊殿の中で案内役にどこぞの大学もびつくりなタックルをしかけていた黒い羽の生えた少女に再会した。こんなところで会うとは思っていなかったのが今の状況に対する弁明を用意していなかった。適当にはぐらかしておくでしょう。

「君の主人に頼まれてちよつとな。」

「ふーん。さっきはそのことで館にいたんだね！」

「君の方はどうしてここに？ ここが君の職場なのか？」

「ううん。私のはもつと下。こことか新地獄の方で使う煉獄火炎を作ってる最深部が仕事場だよ。」

「それはそれは。いかにも暑そうだ。」

「暑いけれど私八咫鳥だからね。暑いのは慣れてるよ。」

ヤタガラス。たしか日本における太陽の神の使いだったか。太陽の炎と比べればマグマなど温泉のようなものなのだろうな。

「ところで何故ここに？」

「んーと、火力調節自体はもう大体終わったから散歩！」

「散歩……。」

「あ！そうだ！これあげるよ！」

「……？これは？」

「よくわかんない！」

「……。」

「さっき火力調節してた炉の近くで拾ったの！なんかきれいでしょ！」

「あ、ああ……。」

確かに謎めいた金属光沢を放っており、中心部分がほんのりと青白く光っている。各種鉱石の知識はI C A訓練施設で受けたが、基本的な元素や化学生成した金属、放射性元素の鉱石などの中にはこの石の特徴に合致する鉱石はない。完全に新種の鉱物だ。

「あげる！」

「あ、ああ。ありがとう。そういえばおやつはもう済ませたのか？」

「え？ううんまだだよ。さつき食べそこねちゃったから・・・。」

「先程の猫耳娘がお前のためにおやつを持っていくと言っていたが・・・。」

「え！本当！やったあ！じゃあ戻らないと！じゃあね！お兄さん！」

「ああ。」

霊鳥路空は洞窟のさらに奥へと走っていった。おやつを持っていく云々の話は彼女に直接話していたと思うのだが・・・。貰ったこの鉱石は手土産として持ち帰ることにしよう。技術部に任せれば何かわかるかもしれない。

私は遺体を担いだ状態でもと来た道を通り、そのまま旧都も抜けて地上へと帰還した。

~~~~~1時間後~~~~~  
~~~~~

「こんばんわ。」

『……』

「あら、気がついてないのかしら？こんばんわ？」

『気がついていますよ。八雲紫殿。もっとマシな方法で出てきてくださいと前から言っているでしょう。私が食事中に空いた皿から出てこないでください。』

「ちよつとした茶目っ気ですわ。」

『はあ……。それで、今回の任務は先程完了いたしました。遺体も九尾狐の方にお渡ししたはずですが？』

「ええ。確かに受け取りましたわ。遺体状態も申し分なく。頸椎断裂のみで他に外傷は殆どなかったですわ。」

『ならば。』

「今回来たのはお礼と、一つ苦情をと思ひまして。」

『苦情ですか？』

「まずは幻想郷を脅かす呪術師の排除にご協力頂いたことに謝意を表明しますわ。」

『謹んでお受けいたします。』

「それで本題なのですけれど、最近こちらの外の世界だけでなく、そちらの世界からも時折色々送られてきていますの。」

『色々・・・とは？』

「多種多様ですわ。何も知らない一般成人男性であつたこともあれば、無人航空機であつたり、ガラガラヘビやオオスズメバチだつたこともありましたわね。」

『我々I C Aは関与していませんわ。そんな作戦何の意味が。』

「あなた方の預かり知るところではない。ということはこちらで対処しても構わないということですよわね？」

『ええどうぞ。我々のしたことでないのは明白ですの。』

「では今後そのように。お食事中失礼いたしましたわ。」

『ええ。今度はできればアポイントメントを取っていただけませんか？』

「善処しますわ。では。」



~~~~~

・「地底の用心棒」

【11000】『星熊勇儀に地霊殿まで案内させる。』

・「見透かされているように」

【11000】『古明地さとりに会う。』

・「死後は清らかに」

【15000】『ターゲットを暗殺する。その際、外見上傷をつけてはいけない。』

・「デーモン・コア」

【15000】『お空から謎の鉱石を受け取る。』

時刻は午前2時。対岸からデータセンターの敷地の北側にある小川にボートで到着した。施設の周りは比較的低めのフェンスで囲まれているが、見通しがよくあちこちに有る監視カメラによって監視されているためフェンスの低さに対して侵入難易度は高い。一番建物に近いこの場所も、すぐ近くに監視カメラが有り、雑木林の中から身を乗り出せばすぐにカメラに補足されてしまうだろう。しかも衛星写真ではわからなかったが、あの監視カメラは一部の重要基地などに設置されている強化装甲タイプだ。拳銃弾程度では破壊することは難しいだろう。

一通り林の中から見たがどうにもカメラの死角がない。あの手のカメラは広角であり、ゲームなどによくある「カメラの真下付近がカバーしきれしていない」などということもない。私は作戦を変更して一旦施設の正門方面へと移動した。正門の先、一般道との接続交差点までやってくると、流石にここまで監視カメラは張り巡らされては居なかった。辺りは暗く、電灯自体丁字路のそばに一つあるだけだ。私はこの辺りで侵入を手助けしてくれる人を待つことにした。

20分ほど待っていると、1台のピックアップトラックがやってきた。トラックはそのまま交差点を曲がり、データセンターの方へ向かおうとする。私はすかさずシルバーボーターで車の左前輪を撃ち抜いた。

バシユ パアン！キキーツ！
ガチャ

「なんだあ？・・・げっ！パンクしてるじゃねえか・・・まいったなあ。」

私は暗闇に紛れてパンクしたタイヤの状況を確認しているドライバーの背後に忍び寄った。車内に他の乗員が居ないことを確認、周囲にも人が居ないのを確認した後、確認していた男を背後から抑え込み、首を絞めて気絶させた。

男の持ち物を色々と探ると社員証が出てきた。幸運なことにその社員証には写真はついておらず、ICチップと名前表記だけだった。これがアレば構内に入れるかもしれない。私は男を適当に縛り上げると、近くの茂みの中に放置。パンクしたタイヤを素早くスペアに交換し、車を走らせてデータセンターへ向かった。

データセンターの正面の検問を、社員証を提示し通過することに成功した。そのまま怪しまれないように構内を走り、中央の建物横の駐車スペースに車を止めた。近くの扉の認証に社員証をかざすと扉が開き、私はデータセンター内部に侵入することに成功した。

~~~~~

~~~~~

『施設内に侵入できたわね。あなたにやつてもらいたいのはあなたが丁度入っている中央棟の1階から4階にあるメインサーバールームのいくつかの端末にバグを仕込んでもらうこと。まずはサーバールームを目指して頂戴。』

~~~~~

流石はIT企業のGoogle。データセンター内部は無機質というわけではなく、照明や手すり、内装などにも気を使っており、この手の施設にありがちな殺風景な施設というわけではなかった。至るところに人間工学に基づいた木製の調度品や施設設備が有り、温かみすら感じる。だがそんな温かみに浸っている場合ではない。私はできる限り不自然にならないように近くの休憩室の扉を開けて中にはいった。

休憩室内には誰も居なかった。流石に午前3時になろうかというこの時間帯では今働いている人員以外は誰も居ないのだろう。私はそのまま休憩室内をくまなく搜索した。休憩室だけあつて機密情報や重要書類などは一切なかったが、館内図が簡単には有るが壁に掲示されているのを発見した。そのすぐ横には社員共同の掲示板があり、様々な連絡事項が貼り付けられている。その中には今日の夜勤シフトに関する連絡も

あった。

#####

~~~~~

『シフト変更の掲示によると、この中央棟における今夜の人員は4人だけみたいね。それぞれ全く別の場所で働いているようで、排除は簡単そうよ。』

~~~~~

排除するにしてもまずは警備室を制圧しておきたい。どうやら警備室は地下1階にあるようで、施設図では北の端に位置していた。ここからそう遠くはない。

私は休憩室を出ると、そのまま通路を進んで警備室へ向かった。警備室までは複雑な経路というわけではなかったが、社員が居ないような場所に設置されている監視カメラには注意しなければならなかった。通信途絶による警戒態勢も避けなければならないため、カメラを壊すこともできなければ妨害することもできない。いくつか突破不可能なカメラが有り、思ったより回り道することになった。

警備室前に到着した時には午前4時を回っていた。侵入から警備室まで時間を食いすぎている。急がなくてはならない。早くしなければ出勤してくる社員が増えてしまう。少なくとも午前7時までにはすべてを終わらせて脱出を完了する必要がある。

警備室の扉には鍵がかかっていたが、中から人の気配はしている。私は古典的ではあるが、単純にノックを試してみた。

コンコン

ガチャ

「なんだあ?」

ゴツ!

「うっ!」

ドサツ

幸いにも警備室の中には1人しか居なかったようだ。ノックして外に出てきた警備員をドアの脇からシルバーボラーのグリップ部分で顎に一撃を加えて気絶させた。そのまま警備員は中へ。警備室には各フロアの監視カメラの映像が数十秒間隔で切り替わりながら映されていた。私はひとまず電源を切って防犯システムをシャットダウン



だ。

そのまま隣の第8ルーム。階段を上がった先にあつた第13ルーム。最上階にあつた第20ルームにも次々に設置していく。先程警備室で見た施設図によるとこのデータセンターは全部で50近くのサーバールームが有るらしい。流石にその全てに仕掛けることはできないが、情報部曰く、そのうち最低1〜2箇所、3箇所も設置すれば確実に全体がつかめるらしい。第20ルームに設置し終えたところで通信が入った。

『47。サーバー内を早速調べてみたのだけど、どうやらその中央棟の地下にオフラインのデータバンクが有るらしいわ。そこにもバグを設置してもらえるかしら?』

「オフラインでは遠隔で侵入できないのではないか?」

『問題ない。そのバグ端末は通信機能も備わっているわ。それ自体がWi-Fiアンテナになるの。』

「なるほど。」

私は階段を降りて一度地下へ向かい、オフラインのデータベースを探した。所在自体は情報部のもたらした情報もあつて比較的簡単に見つけられたが、データバンクの周囲に作業員がいた。

『47。そのデータベースは職員の指紋認証がないと一切の操作ができないみたい。』  
「指紋なら目の前に居るさ。」

『網膜認証も有るようよ？精神状態認識機能付き。』

「……。」

『そこに作業員が居るなら彼が開いてくれるまで待つほうが良いわね。』

「しかしやけに嚴重だな。」

『オフラインのスタンドアロンデータベース。指紋と網膜と精神状態認証付き。とてもただの個人情報保護とは思えないわね。』

「中を見るのが楽しみだな？」

『ええ。本当に。』

私は遠目から端末の画面を見る。今はログオフ状態になっているが、今まさに作業員が端末を操作しようとしていた。20文字以上のパスワードを打ち込み、近くの端末を覗き込んで網膜認証、同時に手元では指紋認証を行う。端末の画面が変化し、デスクトップ画面と思われる画面に切り替わったところで、私は背後から作業員を羽交い締めにして首を絞め気絶させた。



デスクトップ画面になっている端末にバグを差し込む。すぐに通信が開始され、情報部から遠隔操作で内部情報がアップロードされていく。

『これは・・・すごいわね。』

「有用な情報は合ったか？」

『まだ精査していかないからなんとも言えないけれど、少なくともアメリカの現政権を転覆させることはできるようになったわね。』

「後どのくらいかかる？」

『後10分ほど待って頂戴。その間にさっき設置したバグを回収してきてもいいわ。』  
「わかった。」

私は一旦部屋を出て先程設置したバグを回収して回った。時刻はそろそろ5時になるうかというところ。結構ギリギリかもしれない。

あらかた回収し終えた後、部屋に戻ってくると、丁度アップロードが完了したようだった。

『OK。ダウンロードは完了したわ。バグを回収して撤収して頂戴。』

「了解。」

私はバグを回収し、そそくさと施設を後にしようとした。社員用の扉から出ようとしたその時だった。

バシユン！ガシヤン！

「むっー！」

遠目でマズルフラツシユが見えた気がしたのでとつきに身を振ると、扉のガラスが銃撃に寄って粉碎された。私はそのまま影に隠れる。何者かからの狙撃を受けたようだ。私は近くに落ちたガラス片を拾い上げ、持っていた黒いハンカチと合わせて簡易鏡にして狙撃手の位置と正体を確認した。

「……！赤井。お前か。」

簡易鏡に写ったのは赤井秀一の姿だった。どうやって私がここにいることを突き止めたのか、そして何故彼が私を狙っているのかはわからないが、厄介な相手に狙われた

ものだ。

私はひとまず建物内に戻った。おそらく馬鹿正直にその場で待っていると考えると、十中八九追ってくるだろう。早急に対処しなければならぬ。私は警備室に戻り、伸びている警備員から銃保管庫の鍵を拝借する。そのまま警備室内の保管庫を開けて中からアサルトライフル等を回収する。

反対側の通用口から出るとすぐさま発砲してきた。既に中央棟南側へ狙撃位置を変えたようだ。私はスコープもロクについてはいないが、アサルトライフルを物陰から乱射して牽制する。牽制して相手が隠れた隙に西棟北側にある駐車場に止めてある車の影に駆け込んだ。車をピッキングで開け、急いでエンジンをかける。銃声に気がついて検問所の方から警備員が走ってくるが、かまっている余裕はない。そのまま急発進し、狙撃されないよう注意しつつ正面ゲートを強行突破して脱出した。

〈 赤井 s i d e 〉



『今の所手がかりはなにもないけれど注意する必要があるわね。』

「……。ところで何かわかったのか？」

『ああ。しかけたバグで作ったワームホールのいくつかはあの騒ぎで不審に思ったGoogleに発見されてしまつて対処されてしまつたわ。でも第20ルームに設置した分がセキュリティチェックをくぐり抜けて今活動中よ。』

「調べている最中か。」

『ええ。でも情報量が膨大だね。今スタンドアロン型のデータバンクの情報と一緒に戦略AIがクロス検索をかけているわ。もうそろそろ結果が出ると思うのだけれど……。』

ピピピ

【戦略AIです。検索結果を表示します。】

ピッ

「……これは。」

『うーん……確かに亡霊では有るのだけれど、私達が調べたことと大差ない気がするわね。』

「収穫なし。か？」

『……まっつて。戦略AI、この“ルイジアナ州における住基登録履歴”についてもうちよつと掘り下げて頂戴。』

「ピピピピ……ピピ……」

「む？」

【検索エラーが発生しました。情報展開ができませんでした。】

『どういうこと……？詳細を。』

【上級ネットワークからの中止命令を受け取りました。発信者、上級委員会N o. 9】

『……！』

「N o. 9というたまさか……。」

『ドナルド・カーキンス。彼の死後、N o. 9は空席になっていたはず……。』

「……亡霊が増えたな。」

『はあ……戦略A I。引き続き検索を続行して頂戴。』

「我々はどうする？」

『そうね……とりあえず待つしか無いわね。』

「ふむ……。」

ガチャ

「47！バーンウッドさん！ちょっと手伝ってほしいのだけれど！」

「ブルー？」

「この子の新しい服を買いに行きたいのよ！」



【+1000】『職員になりすまして構内に侵入する。』

・「転ばぬ先の銃」

【+3000】『警備室の武器保管庫から武器を調達する。』

・「夜勤明け」

【+1000】『午前7時までですべてのバッグをしかけ終えて脱出する。』

・「身躲しの達人」

【+3000】『赤井秀一の襲撃を無傷で切り抜ける。』



## HITMAN 2 『収集作業』

『むつ市へようこそ。 47。』

『日本の本州のほぼ最北端にあるこの地域では、深海棲艦が出る前はホタテやマグロなどで栄えたそうよ。今となつては海産物はおろか海に近づくことさえもはばかられているけれど。』

『研究所はむつ市内から海岸沿いに南に5〜6キロ行ったところにあるわ。実質的に放棄されて廃墟となっているはずだけど、警備システムなどがあれば生きている可能性もあるから一応注意して頂戴。』

『幸運を祈ってるわね。』

~~~~~

「このへんは変わってないわね。」

「来たことが有るのか。」

「組織にいた頃に一度だけね。」

「施設を狙ったのか。」

「まあそんなところよ。」

我々は今、市内から車で海岸線を移動中だ。海岸線と行っても間にかなり鬱蒼とした森林地帯が有るため海は殆ど見えないが。施設手前の市街地跡も人がおらず、見かけた人影も巡回中の髪の毛の白い小柄な艦娘だった。この地域は国から危険地帯として指定されているらしく、民間人の立ち入りは原則できないらしい。我々は大本營の職員の名目でやってきている。

「ところで私を連れてきた理由をまだ聞いていないのだけれど？」

「不測の事態の対処能力が一番高いと判断した。」

「それならタバサちゃんでも良かったんじゃない？」

「彼女は母親と再会した今、感情が不安定だ。」

「でも実戦でしかその不安定は是正できないと思うのだけれど。」

「そのとおりだ。だが今回ではない。」

今回、人手がいる可能性があるとのことだったので、念の為にキュラソーを連れてきた。彼女ならばとっさの襲撃やトラブルにも冷静かつ正確な対応ができるだろうとの判断だ。それに今回はコンピュータのハッキングに関する状況も発生すると予想される。タバサ達ではその辺りに不安が残るのも理由の一つだった。

森に囲まれた道を進んでいると、キュラソーが何かを発見した。

「47。左。海を見て。」

「あれは……！ 掴まれ。」

「きゃあー！」

ギヤシヤアアアアア

ヒュルルルル……ボオオオン!!

私は咄嗟に道の右側にある荒れ地の中へ車を入れた。そのまま車を森の中へ向かわせる。次の瞬間海の方から金属質の金切り声のような音とともに砲弾が飛んできた。砲弾は進んでいた道の先に着弾した。道は大きくえぐれており、そのまま進んでいたら間違いなく粉微塵だっただろう。

「アレは……深海棲艦ってやつね。」

「おそらく駆逐艦だろう。」

「襲うのは誰でもいいってわけね。全くはた迷惑な生物なこと。」

森の中を進んでいるうちに砲撃は止んだ。どうやら見失ってくれたようだ。しかし人を発見次第すぐに砲撃が飛んでくるような状況だと、目的の施設も無事では済んでいないと予想される。せめて目標のコンピュータは生きていてほしいのだが……。

森の抜けると別の道に出た。おそらく施設の正面に続く道だ。左に曲がり、道なりに進んでいくと、真正面に建物が見えてきた。入口の門には「日本原子力開発機構」と書かれている。しかし、門は開け放されており、そのすぐ近くにあった警備室と思われる建物は砲撃を受けたのか屋根が完全に崩れ落ちていた。建物本体も航空機による銃撃を受けたのか細かい弾痕があちこちに残っている。

適当に門の外に車を停めると、私達は施設の中へ足を踏み入れた。ひとまず目の前に建っている弾痕の目立つ建物に入ることにした。キュラソーが入口を見つけ近寄った。

「……駄目ね。この鋼鉄扉はオートロックになってる。電気が来ないから開けることはできないわ。」

「別に扉を通る必要もない。」

「え？・・・ああ。そういうことね。」

正面にあつた扉は開けることはできなかつた。しかし、砲撃によつてか爆撃によつてかは知らないが、ほど近い外壁に人一人くらいなら余裕で通れる大きさの大穴が空いていた。

私達はその穴から中へ侵入した。中は襲撃の慌ただしさそのままに荒れていた。壁が破壊された衝撃によるものなのか、近くの本棚や机などは壊れており、中にあつた本などが焼け焦げたりばらばらになつたりしながら床に散乱していた。

部屋の扉は塩分を含む外気にさらされていたせいか若干錆びていたが、多少強引に引いたら開けることができた。中は大きく、エレベーターの階数表示でも3階までしか無いようだ。

私達は部屋を一つ一つくまなく探していくことにした。私は1階を。キュラソーは2階を探すことになった。何かあれば無線で知らせることになっている。私は手始めに端の部屋から順に見ていくことにする。

最初の部屋はただの休憩室だった。外気に全く触れていなかったためか室内は空気が淀んでいる。目新しいものはなかつたが、連絡用の掲示板を見つけた。

#####

~~~~~

『掲示板によると、この施設が放棄されたのは半年ほど前のようね。空母を中心とする敵部隊の攻撃を頻繁に受けるようになったことで、施設への損害が大きくなりすぎたのが直接の原因みたい。』

~~~~~

掲示板には負傷者の状況や施設の被害状況等が、走り書きの付箋で様々なところへ貼り付けられている。これらを見る限りコンピュータ室はこの施設にはなさそうだ。電源設備は有るようだが……。

私は休憩室を跡にして他の部屋の搜索を始めた。

くキュラソーsideく

エレベーターは止まっていたけれど、階段が所々崩れながらもかろうじて残っていた。私は2階へ上がって階段に近い方の部屋から順番に見ることにした。

最初の部屋は・・・ボイラー室？何かを製造しているわけでもないのにボイラー室がいるのかしら？もしかするとボイラーに似た何か別の機械なのかもしれないわね。詳しく見てみましょう。

結果としてその機械はどこどこ壊れている上に応急処置的な改造を施した形跡が多く見られるために何の機械か判断することはできなかつた。ただボイラーではないことだけははっきりしたけれど。壊れた機械には興味はない。私は部屋をあとにして隣の部屋に入った。

隣の部屋は先程の機械室の制御を行う部屋だったようだ。制御盤と思われる机の上のマニユアルが乱雑に置かれていた。マニユアルには「物質転換機」と書かれている。核分裂か核融合の研究にでも使っていたのだろうか。

私はその部屋をくまなく探すと、ダイヤル式の金庫を発見した。こういう施設に有る金庫といえば中身は金銭や貴金属ではなく、研究資料や機密資料と相場が決まっている。以前、アタザキで47がICAの選択訓練を履修するようになると言っており、その影響で私もいくつか選択訓練を履修していた。その中にダイヤル式の金庫の解錠術もあつたので、私はその場で金庫の解錠を試みた。

それほど複雑な方式ではなかったため、数分で解錠できた。中には案の定書類が入っていた。

情報を入力

~~~~~

『この書類は……ここで研究されていた物質転換方法の基礎理論とそれらを使った新しい軽量装甲の資料みたいね。今後我々の技術を発展させられる可能性があるわ。持って帰ってきて頂戴。』

~~~~~

思わぬところで役得があったみたい。ICAがこれを何に使うのかは知らないけれど、話に聞く「実験体」みたいなことにならないことを祈るばかりね。

私はその後も他の部屋を探索したけれど、他の部屋は研究施設で、この施設から撤収する時にめぼしい資料はすべて持ち出したか焼却してしまつたようだった。今となつてはこの研究施設はちよつと豪華な理科実験室でしかなかった。

3階は階段すら完全に崩落していて入ることすらできないので、一旦47のところへ戻った。

〈 4 7 s i d e 〉

キュラソーが戻ってきた。手にはなにかの資料を持っている。物質転換方法・・・なるほど。はるばる廃墟までやってきた収穫はあったようだ。私の方はと言うと、1階の他の部屋はすべて資料や研究備品が持ち出された後だった。キュラソーの話聞く限りその資料があった部屋以外は似たようなものだったらしい。

私達は掲示板の情報を頼りに隣の建物に入った。掲示板のメモから推察すると、この建物はこの周辺一帯の電源設備があるはずだ。コンピュータを動かすにあたり電気は不可欠だ。できれば復旧したいところだが、なければ発電機を運ばなくてはならないだろう。

今度の扉は簡単な南京錠で固定されているだけだったのでロックピックで解錠した。中に入ると、巨大な装置があった。幸いにしてこの施設は他の施設に見られるような砲

撃の痕などが殆どなかった。これならばもしかしたら動くからかもしれないな。私達は手分けして配電盤を探した。程なくして見つかった配電盤を操作すると、奥に設置されていた発電装置が稼働し始めた。原子力機構ではあるが流石に原発というわけでは無いように、発電はディーゼル火力タービンのようだ。発電機の近くにはドラム缶で軽油が何本か置かれている。

ともかく施設の電源の復旧はこれでできたと思われる。私達は外に出てみると、先程の建物内の室内灯が点いているのが確認できた。

「それで？電気は復旧できたけれど、肝心の端末はどこに有るのかしら？」

「掲示板の付箋の内容から推察するに、べつの研究所に有るようだ。」

「そこは遠いのかしら？」

「いや。あそこだ。」

電源棟から少し東へ行つたところにあつた別の建物を指し示す。私達は早速その建物へ向かつた。

こちらの建物は先程までの建物よりもさらに嚴重に守られていた。フェンスも有刺

鉄線付きだ。しかしこちらもそれなりに砲撃を受けていたようで、フェンスにある勝手口のようなゲートも開け放されたままとなっている。奥行きがある2階建ての施設と、事務所のような3階建ての建物があるが、2階建ての方は奥のほうに破壊されており、おそらく主砲による砲撃を食らったものと推測される。

私達はまず比較的無事と思われる事務所のような3階建ての建物に入ってみることにした。勝手口のような扉も鍵はかかっていたが、別に誰かが居るわけでもないと思われるので、盛大に蹴破った。中はホコリだらけでは有るが、比較的きれいに残っており、入った部屋のすぐ外の廊下に施設図があつたため館内を風潰しに探す必要もなくなつた。

施設図によると、どうやらコンピュータ室はこの建物の2階にあるようだ。私達は2階へ上がり、コンピュータ室へ入った。室内にはパソコンが数十台設置されており、ほとんど手つかずのままだった。

「47。これ見て。どうやら作業中に急に無人になったみたいね。」

「おそらく隣の建物の損壊と関係があるな。」

「とうとうと。」

「突如として砲撃を受け、緊急で避難することになったために資料やデータの持ち出し

ができなかった。そのまま砲撃が続いた上に施設の放棄も決まってしまったためそのまま手つかずで残った。そんなところだろう。」

「なるほどね。私達にとっては好都合と言えるわ。」

私達は早速、並べられているコンピュータの一つを起動させた。電気は問題なく来ているようで、Linux系のOSが立ち上がった。しかしここで問題が発生した。

「むう・・・IDとパスワードが必要か。」

「まあ知ってたけれどね。こういうところのパソコンがセキュリティロックをかけてないわけ無いわよね。」

「さてどうするか。」

「そのへんの書類に書いてあったりしないかしら？」

「・・・いや、もしかしたら。」

「?。」

私は部屋の中の机の下に潜り込んで机の裏を調べ始めた。念の為引き出しも外して中を見る。

「何をしているの?」

「こういう研究所で研究しているのはどういう人間だと思う。」

「そりゃあ・・・あちこちでそういう経験を積んできた人たちでしょう。国家機関の研究所なんだから。」

「そういうのは若くして採用されたりするだろうか。」

「え? そりゃあある程度は年配の・・・ってああ。そういうことね。」

「高齢の研究者ならばパソコンの使い方を覚えるのでも一苦労のはずだ。その上長ったらしく意味のない文字の羅列なんて覚えられるわけがない。」

「でもログインIDとパスワードは必要。ならどうするか。紙に書いて持つておくにしても無くしてしまつては意味がない。かと言つて覚えやすいパスワードにしたら意味がないわね。」

「そういう時は大抵の場合、使うパソコンの近く、例えば机の裏とか引き出しの裏等にメモを貼り付ける。セキュリティテラシーの感覚が薄い年代はみんなそんなものだ。」

パソコン自体に貼り付ける輩もいるが、見たところ流石に公的機関でそこまで意識の低い者は居ないらしく、パソコン周りはきれいなものだ。だからこうして机の裏に貼り

付けたりするのが一般的では有るのだが……。

3つ目の机の裏に目的の紙はあった。IDとパスワードが書かれた紙はセロテープでしっかりと机の裏に貼り付けられており、字もボールペンで書いたにしては達筆だ。おそらく几帳面な性格の高齢の研究者だろう。私はその机のパソコンを起動し、そのIDとパスワードを使って中に侵入した。

パソコン内部のデータはほぼ生きており、メインサーバーとのネットワークも構築されたままだった。私は本部から渡されたUSBメモリをパソコン本体に接続した。接続してまもなく、画面上に様々なウィンドウが表示され始めた。

~~~~~

『メインサーバーとの接続が確立したわ。情報のアップロードに数分かかるからそのまま待機して頂戴。アップロードが完了したらその端末を破壊して頂戴。』

~~~~~

「破壊も必要なのね。だったらこれを持ってきて正解だったわね。」

「ああ。」

キュラソーが取り出したのはいつもの新型電子励起爆薬だ。栄養ドリンク瓶ほどの大きさしか無いが、この部屋を吹き飛ばすには十分だろう。この爆薬はC4プラスチック爆薬と同じように自由に形を整形できるため、この栄養ドリンクの瓶も技術部がたまたま飲んで空になっていたものに詰めただけだそうだ。

アップロードが開始してから数分後、画面上に“完了”の文字が現れた。私はUSBを回収する。その時だった。

ボオオオン！

ボオオオン！

「何?。」

「まって。・・・洋上から砲撃されている!。」

「電源設備の復旧を感じ取ったのかもしれないな。爆薬をセットして撤収するぞ。」

「“特殊な装置”とやらを探すんじゃないの?。」

「もう時間がない。このままでは砲撃に巻き込まれる可能性が高い。」

「仕方ないわね。．．．OK。セットしたわ。」
「よし、行くぞ。」

私達は急いで部屋を出て階段を目指した。しかし、次の瞬間、深海棲艦のはなった砲弾が建物直撃した。私達は咄嗟に近くの部屋に入ることと難を逃れたが、部屋から出ると階段部分がまるごとえぐり取ってしまっていた。

私達は踵を返し、部屋に戻ると部屋の窓の外にあつた雨樋を発見した。窓から急いで出てその雨樋を伝って地上に降りた。その間も断続的に砲撃が繰り返されており、周囲の森や残っていた建物を無差別に攻撃している。

「こういうの戦争映画で見たこと有るわ。」

「出演者が少なすぎるな。」

「多くても困るけどね。」

「まあいい、今のうちに爆薬を起爆しておけ。」

「了解。」

状況は悪いが敵はこちららの位置を性格に把握していないらしく、砲撃は施設全体をま

んべんなく行っているため、比較的余裕がある。それでも危険なことに変わりはないが。キュラソーは砲撃を受けて半壊しつつある建物に向かってリモコンを操作した。

ドガアアアアン!!

「ふうう、さすがは新型爆薬ね。あの量でこれほどとは。戦艦の砲撃を食らったみたいになっちゃったわね。」

「破壊は完了だ。脱出するぞ。」

「了解。」

私達が正門付近に到着する時には砲撃は着弾しなくなっていた。代わりに遠くの方で砲撃音だけが響いている。どうやら近隣の艦娘部隊が到着したようだ。

「なんとか難は逃れたわね。」

「果たしてそうだろうか？」

「え?・・・ああ・・・。」

私は正門の横に止めておいた車 “だったもの” を見ながら思索していた。先程の砲撃の至近弾を貰ったらしく、車の停めていた位置の近くに大きなクレーターができており、車は数十メートル先にかろうじてシャーシ部分が残る程度の残骸となっていた。足が無くなってしまったわけだがさてどうしたものか。

「お困りですか？」

「！」

「え？」

不意に話しかけられ、その方向を見ると青い髪をした女性がいた。どこことなく不思議な雰囲気を持っている女性だった。

「ああ・・・まあ。」

「ここは危険ですからね。早く避難したほうが良いと思いますよ。」

「ええ。でも足が無くなっちゃってね・・・。」

「ああ、車が・・・。わかりました。私の乗ってきた車に乗りませんか？」

「あなたの？」

「ええ。大丈夫。ちゃんと動きますし乗れますよ。」

「あ、ああ。わかったお願いしよう。市街地まで連れて行ってくれればいい。」

「わかりました。」

彼女は近くの茂みに車を隠していた。案内されると手早く室内を片付けると手招きしてきた。

「見たこと無い車ね。」

「そうですか？まああまり有名ではないかもしれませんがね。」

「サーブ99か。」

「知ってるの？」

「そうです。知ってる人がいると嬉しいですね。私の母国の車なんですよ。」

「私の母国では比較的有名だ。」

「少し古いですけど、この寒い青森でもちゃんと動いてくれるんですよ。」

私達二人は後部座席に乗り、彼女が運転席で運転してくれている。走り始めた頃には

既に砲撃音は止んでいた。

「ところであなたはこんなところで何を？」

「私ですか？ 私は・・・ある人にお願ひされて、あなた達を迎えに来たんですよ。」

「！」

「私達・・・を？」

「そう身構えないでください。この場所に男女二人が取り残されているから迎えに行つてほしい」と頼まれただけです。あなた方はただの民間人でないことくらいはわかりますけど、それ以上はわかりません。」

「・・・誰に依頼されたかはわからないか？」

「私は提督・・・ゴホン私の上司から指示されただけなので名前くらいしか・・・。」

「名前は知っているのね？ 教えてくれないかしら。是非ともお礼がしたいわ。」

「えつと・・・確か・・・。」

「リアンさん。そうそう、リアンさんって人からです。」

~~~~~1時間後~~~~~  
~~~~~

「無事にインフォーマントと接触できたみたいです。」

『そう。良かったわ。』

「でも誰なんですかね？その助けてくれた女性って。」

『おそらく艦娘でしょうね。大湊の基地司令部の連中が我々に何か恩でも売りたかったのか。』

「まあなにはともあれこれであの世界も少しは安定化してくれると良いんですけど。」

ガチャ

「失礼するよ。バーンウッド女史、ちよつといいかな。」

『あら、技術部の。何かしら?』

「さつき貰った物質転換方法の基礎理論データなんだが、こいつは色々やべえやつだぜ。」

『とうとう?』

「電子励起なんか目じゃねえ、この方法なら突き詰めればより高度な物質を作ることができそうなんだ。それで今試算してみたんだけどよ……ほれ。」

『これは……!』

「アレを惑星全体に掃射することは不可能でも、半径数十キロ、出力も想定値の半分程度なら出せるかもしれねえ。」

「アレって……もしかして中性子掃射砲のことですか?」

「ああそうだ。ついていたのかAIネーチャン。」

「AIじゃありません!最初からいました!」

『これ、作るとしたらどのくらいでできるの?』

「この規模ならわけねえ。だいたいあの兵器が設計や建造に膨大な時間がかかってたのはあのデカさと膨大な出力のせいだったからな。このお大きさなら……。」

『大きさなら?』

パシヤン

「ぶあ．．．やつと付きました．．．。」

「ここまで感謝する。任務完了までここで待機していてくれないか。」

「はい。ここで静かに待っています．．．あ、それとこれを．．．。」

「これは？」

「キャロラインさんという方から預かりました。深海棲艦に対抗できる武器だそうです。」

「これは．．．なるほど。感謝する。」

「いえ．．．それでは。」

「ああそうだ。そういえば君の名前をまだ聞いていなかったな。」

「あ、はい。伊13。＼ひとみ＼とお呼びください。それでは．．．。」

トブン…

とても物静かな潜水艦娘だ。だからこそこの任務に選ばれたのだろう。道すがら聞いた話では妹の方はいぶ騒がしいという話だった。姉妹でも違うものなのか、それとも艦娘だからなのか。

なにはともあれフォード島南岸に上陸した後、雑木林の中へ素早く身を潜める。

ウエットスーツを脱ぎ、茂みの中に隠しておく。深海棲艦は人の形をした種類も多くいるが、多くは人語を話せない生命体だ。情報収集は厳しくなることが予想される。本部施設へは独力で行くほかないだろう。

東側は大分開けている上、海からも対岸からも丸見えだ。ここを進むのはいくら今日が新月の曇り空でほぼ真つ暗闇だからと言ってもかなりリスキーだ。私はすぐ近くにある建物の外周に張り付きながら一旦西側へ向かった。別の建物の更に奥は東側と同様に開けているため、ここから素早くかつ静かに道の反対側に有る大きな格納庫へ向かわなければならぬ。

飛び出すタイミングを見計らっていると、北から光が近づいてきた。どうやら深海棲艦もトラックは使うらしい。道沿いに走ってきたトラックはそのまま私の居る建物へ寄ってきたかと思うと、一つのシャッターの前で停車した。中から頭に白い面のようなものをかぶっている深海棲艦が出てきた。たしかあれは“雷巡子級”と言ったか。片手が砲装になったりしているが慣れているのか器用にシャッターを開けると中へ入っていった。

私は中へ入っていったタイミングでトラックの荷台に潜り込んだ。荷台には物資と思われる大小様々な木箱が所狭しと並べられており、隠れるには十分だった。少しして建物のシャッターを閉める音が聞こえたあと、荷台に新たな木箱が積載された。荷台の

扉が閉められ、トラックが動き出した。感覚から言えば東へ向かっているようだ。少し走ると運転席から声が聞こえてきた。

ピリリリリ

ピッ

「あい。・・・ああ、大丈夫だよ。もうすぐそっちに着く。荷卸たまには手伝ってくれよ。」
 「お前なあ・・・一人で持てるって言っても重いもんは重いんだぞ。リコリスはどうしたんだよ?」

「ああ? バカンス継続中だあ? あいつ南方から出向してきてるんだろ? なんでそいつがバカンス取ってんだよ!」

「・・・はいはい、わかったわかりましたよ。一人で下ろせば良いんだろ・・・。ハア・・・」
 ピッ

「つたく中間ときたら・・・自分の執務室の備品くらい自分で運べっての・・・。」

#####アプローチ発見#####

~~~~~

~~~~~

『どうやらこの木箱は執務室の備品が入っているみたいね。『中間』とはおそらく中間棲姫のことだと思われるわ。この基地では結構重要ポジションのはずよ。つまりこの木箱が運ばれる場所は、この基地の中心部の可能性が高いということ。うまくすればターゲットのすぐ近くまで潜り込めるかもしれないわね。』

~~~~~

トラックはそのまましばらく走った後止まった。荷台の扉が開けられると、チ級が手近な木箱を取ってそのまま近くの建物へ入っていった。私は隠れていた場所から出て手近な植え込みに身を潜ませる。

どうやらここはフォード島のフィットネスセンターという建物のようだ。深海棲艦たちはこの建物を基地司令部施設として活用しているのだろう。

チ級が1つ目の木箱を運び終えて戻ってきた。そのまま2つ目の木箱を取って再び建物の中へ入っていく。木箱はなかなか大ききく、おそらく前はおろか周囲が殆ど見えていないと思われる。私はチ級の後をつけていくことにした。

ここは深海棲艦の根源地に近いため、周囲の海域はその圧倒的な数に物を言わせた警戒活動によって完全に防御されている。ICAの消音装置がなければ送ってくれたあ

の艦娘もこの島までたどり着けなかっただろう。そんな警戒態勢の中だからなのか、司令部施設自体の警備は手薄と言っていいほどにセキュリティが全くなされてない。人間が作ったセキュリティシステムを扱えないのか壊れていて直せないのかはわからないが、時折廊下にある監視カメラも根本から折れていたり、コードが繋がっていないかったりと正常に機能しているとはとても思えない状態だった。

その御蔭で手級の後ろでそれなりに大胆に尾行していても警戒態勢になるようなこともなく、すんなりと3階の一室に到達できた。手級は一旦床に木箱を置くと不意に周囲を見渡し始めた。どうやら何か別の存在が近くにいた気配だけは感じ取っていたらしい。私は音を立てず、その見回した視界に入らないように注意しつつ背後についた。

#####アプローチ完了#####

~~~~~

『中間棲姫の部屋にたどり着いたみたいね。ここはこの基地でも最高機密の場所に違くないわ。ターゲットもきつとすぐ近くにいるでしょう……。』

~~~~~

チ級は周りに誰もいないことを確認すると、首を傾げつつも懐からカードキーのようなものを出して扉のノブの下の隙間に差し込んだ。鍵が空いた音がしてそのまま取っ手を掴んで開ける……その瞬間に私は背後からチ級を掴み、首筋に注射器を刺した。注射器の中身を入れる寸前のところで止め、そのまま語りかける。

「ぐっ?! な、なんだ?!」

「抵抗するな。抵抗すればこの注射器の中身を一気に注入するぞ。」

「き、貴様人間か?! そんなもので私が殺せるとでも?」

「試してみるか?」

「……! わ、わかった。とりあえず落ち着け。」

「部屋に入れ。」

自信たつぷりな私を見て何かを感じ取ったのかおとなしく言うことを聞いてくれた。この注射器の中身は先程艦娘に渡された新型麻酔薬バサラブの原液だけなんだがな。

そのまま部屋の中へ入ると一人の深海棲艦が机に座った状態でこちらを見て固まっている。おそらくあれが中間棲姫だろう。私は間髪入れずに拘束しているチ級ごと机

に突進した。チ級が机にぶち当たり前につんのめったその瞬間に注射器の中身を半分投与した。想定では半分でも深海棲艦を5時間は眠らせられるはずだ。そのままつんのめった勢いを利用して机を支点に前方宙返りで中間棲姫の背後についた。間髪入れずに中間棲姫の首筋に同じく注射器を刺した。

「貴様は一体?!」

「抵抗するな。目の前のやつのようになりたくないか？」

目の前には首筋という脳に近い部分に直接麻酔薬を入れられたために机につんのめったままの状態で意識を失っているチ級がいた。下位種とはいえ深海棲艦を手玉に取る武器が有ることを上位種に認識させるには十分だった。

「何が目的だ……!!」

「この基地に元人間がいるはずだ。」

「ローズ司令に……?」

「ローズ、そう呼ばれているのか。」

「あ、しまっ……。」





『彼が深海棲艦に寝返った男、ロバート・クリスよ。彼を中心としてこの周辺の深海棲艦の指揮系統は保たれているわ。』

~~~~~

私は中間棲姫に刺している注射器をほんの少しだけ注入し、中間棲姫の肩を支点として再び宙返りで机の向こう側に降り立った。

「な、何だお前は！ちゆうちゃん！大丈夫か！」

「人の心配をするより自分の心配をするんだな。」

私は少しでも余裕を持ってターゲットに向かっていく。

「貴様あ！司令に触れるなあ！」 ガチャ

中間棲姫は朦朧とした意識の中、どこからともなく取り出した砲艦装でこちらを撃ち抜こうとしてくる。私は素早くターゲットの手を取る。引き金が惹かれた瞬間、ター

ゲットの手を引き、私の位置とターゲットの位置を素早く交換した。

ドオン！

ドシュツ

「がっ．．．」

ドガアアン！

朦朧とした意識の中では正確に照準することは不可能に近い。私の後ろ姿だけを見て放たれた砲弾は、寸分違わず位置を交換したターゲットの腹部を貫いた。貫通力が高すぎるためそのまま体を突き抜けて外の壁もぶち抜いてしまったが。

~~~~~

『ターゲットの死亡を確認。よくやったわ。でも今の騒ぎで基地の警備が飛んでくるわよ。急いで脱出して頂戴。』

~~~~~

「司令!!」

中間棲姫は誤射してしまったことに動揺したのか一瞬体の動きが止まった。その瞬間を見逃さず持っていた注射器をダーツの要領で彼女の体に向かって全力で投げつけた。命中した注射器は勢いに任せそのまま中身を体内に注入した。元々意識が朦朧としていた中間棲姫はその一撃で完全に意識を手放した。

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

基地の警報が鳴り響いている。私は注射器を回収すると、部屋の窓から近くの木へ飛び移り、海へ向かって一目散に駆け出した。別の建物の影に隠れた瞬間、今までいた建物の入口付近に大量に深海棲艦が集まってきた。私はできる限り静かに建物伝いに移動し、隙を見て道路を渡って海へ入った。

そのまま泳いでいくわけにも行かないので岸壁沿いをギリギリの姿勢のまま南へ泳ぎ、30分ほどで最初の上陸地点が見えてきた。

すると不意に足を掴まれる感覚があり、一拍おいた後海中に引きずり込まれた。

「……。(シート)」

「……!」

足を引つ張つて海中に引きずり込んだのは上陸支援の艦娘「伊13」だった。彼女はそのまま海中を凄まじいスピードで進み、最初の上陸地点まで私を連れて行った。

「ぶあつ!あぶなかつたあ……。」

「ふうっ……感謝する。」

「いいえ。でもなんでこんな騒がしく……?」

「ターゲットを仕留める時に中間棲姫に砲撃されてしまった。」

「ええ!?だ、大丈夫なんですか……?」

「中間棲姫は無力化した。追つては来れないだろう。」

「そうですか……。」

「ウエットスーツに着替える。少し待っていてくれ。」

「わかりました。」

茂みの中で濡れた服を絞りつつウェットスーツに着替える。多少寒いが仕方ないだろう。着替え終わるとそのまま来たときと同じ要領で手を引かれながら海中を進み、この海域を離脱した。

～～～同時刻～～～

～～～

『47から送られてくる情報によると、やはり深海棲艦は独自の進化を遂げているようです。』

「ううむ・・・一体何故・・・。」

『当初このような進化の仕方は想定されていませんでしたし、要因もありませんでした。』

「誰かが意図的に進化の要因を混入させたということですか？」

『それはわかりません。ですが可能性の一部としては・・・否定できません。』

「・・・わかった。こうなっては仕方あるまい。」

「アレの進捗はどうなっていますか？」

『“小型中性子掃射砲”は先週承認を受けたことで現在開発が進んでいます。』

「追加で予算を回す。早急に完成させろ。」

『・・・使うおつもりですか？』

「そうだ。あの深海棲艦とやらはあの世界の人間にとって驚異どころの話ではなくなっている。」

『随分とその・・・肩入れと言ったら些か失礼かもしれませんが・・・。』

「・・・バーンウツドくんにはまだ知らせていなかったな。」

「そういえばそうでしたわね・・・。」

『はい？』

「あの世界の趨勢は複数の世界に影響を及ぼす可能性があることがわかったのだよ。」

『・・・その報告は受けていませんが。』

「当然だろう。我々もつい先程情報部からメールで簡易報告を受けたばかりだからな。」

「影響を及ぼす世界は我々の世界も含んでいるそうですよ。」

「あの世界が滅べばこの世界にも何かしらの悪影響を及ぼす可能性があるということだ。」

『・・・。』

HITMAN 2 『亡霊の長い手』

『メシユゴリエへようこそ。 47。』

『周囲をウラル山脈とツンドラの大森林に囲まれたここはロシアの最高機密の基地を置くのうってつけだった。近くには閉鎖都市が置かれ、外界から完全に隔絶された存在ね。』

『残された時間は後3時間。基地内部がどれほどの大きさなのかは情報部でも把握できていないわ。それなりに時間がかかることが予想される。できる限り急いで頂戴。』
『幸運を祈っているわ。』

~~~~~

静かな森の中。そこに響き渡るトラックのエンジン音。私は今、ロシア軍の軍用トラックを運転し、ルスキー・グラザー基地へと向かっている。このトラックは、ここへ着いたときに丁度通りかかったトラックで、基地内に物資を搬入するためのものらし



い。私がそれを止め、降りてきたところをタバサのスリープクラウドで眠らせて、服とトラックを「借りた」。

助手席には眠っている兵士。荷台にはもうひとりの兵士とタバサだ。トラックはカバートラックなので荷台を臨検でもされない限りタバサ達がバレることはないだろう。

しばらく森を走っていると施設の門が見えてきた。表の看板には「メシユゴリエ鋏山」と書かれているが、検問所で検問しているのは明らかに軍人だ。私は静かにゲートの前で停車し、窓を開けた。

「通行証を。」

「はい。」パス

「・・・定期便か。だがお前見ない顔だな？」

「今日からここに配属になったものです。」

「ふうん・・・前は何を？」

「施設警備です。カリニンのほうで。」

「・・・そうか。通っていいぞ。」

「ありがとうございます。」

やはり多少不審に思われたが通り抜けることができた。通行証が無造作にダツシユボードの上に置かれていたのですぐに気がつけた。私は空いたゲートを通つて基地内へ入つていった。

「・・・。」

ピッピッピッ

プルルルル…ガチャ

「こちら北ゲート。『来客』です。」

鉾山施設は立派なもので、とても放棄されてから20年が経っているとは思えない綺麗さだった。もしかしたら何かしら使っていて、今でも定期的に整備しているのかもしれない。私はその鉾山施設の中ほどまで進み、駐車スペースに車を止めた。

「・・・。出てきていいぞ。」

バサッ

「乗り心地は悪い。」

「だろうな。時間がない。行くぞ。」

私はまず手近の事務所のような建物を探ることにした。しかし、横ではタバサが怪訝な顔をしていた。

「おかしい。」

「どうした？」

「人の気配がない。」

「……。時間帯も有るのでは？」

「それにしても。ここは仮にも軍事施設。見張りの兵すらも置かないのはおかしい。それに、」

「それに？」

「その事務所も、明かりがついているのに人の気配がない。」

確かにゲートを通過してから人影を見ていない。慎重に事務所の窓から中を覗いても、様々な書類が放り出されたままで誰も居なかった。そしてこの事務所、扉の鍵すら

かかっていない。いくら何でも不用心すぎるだろう。

事務所の床や机の上に散らばっていた書類は、鉾山とはほとんど関係のないものばかりだった。その多くは基地へ運び込む物資表や兵士のタイムスケジュール、要人保護の手順などが書かれたマニュアル等だった。そしてそれらを覆うように一番上には大きく広げられた状態で施設図が置かれていた。

「誰かがここで施設図を見ていたようだな。」

「……何故？」

「施設図の紙の端、少しシワが寄っている。あそこに誰かが手を置いたときのものだろう。」

「……一体誰が。」

「わからん。だが少なくとも書類が散らばっているにも関わらず放置しているところを見ると、この鉾山もといこの基地の人間でないことは確かだろうな。」

私達はその施設図を元に、基地の入口へ向かった。入り口は鉾山の坑道を利用しており、入り口には鉄格子と南京錠で施錠されていたらしかった。しかしそれも今は外されて扉は開け放されている。私達は行動の中を進もうと足を踏み入れた。

「まって。」

「どうした？」

「念の為。」

キュツキュツ…ポーンツ

バシヤバシヤ…

「何だその液体は。」

「私が風メイジだということは前にも話したと思う。風メイジは風の流れ、空気の流れを読んで周囲の人の気配を探ることができる。」

「以前聞いた覚えがあるな。」

「でもその探知距離にも限界がある。この液体は技術部と共同で開発した、その探知距離を伸ばすためのもの。これを撒いた地点を中心に半径30mほどの気配を遠距離から感じ取ることができる。金属探知にも反応せず、EMPやジャミングにも強い。」

「なるほど。入口に撒くことで入ってくる人間を探知しようというわけか。」

「そういうこと。」

坑道はほぼ一本道なので後ろを押さえられるのは死活問題だ。早急に気がつくこと

ができれば対処する時間も稼ぐことができるだろう。

巻き終わった後、気を取り直して坑道の奥へと足を踏み入れた。行動は初めの内、外から見える範囲は通常通りの岩盤がむき出しのところ、鋼鉄の柱があるだけであったが、更に奥は床も壁も天井も全てコンクリートで塗り固められた通路になった。通路の壁にある蛍光灯の明かりを頼りに先に進んでいくと、高さ20mはあるうかという大きな扉の前にでた。しかし私達はその扉の前に転がっているもののほうが重要だった。

「あれは……。」

「ロシア兵だろう。しかし……。」

転がっていたのはロシア兵の死体だった。眉間を一発で撃ち抜かれており、葉莖は落ちておらず争った後もないことからおそらく不意打ちでやられたのだろう。大きな扉は下に人が通るための小さな扉が併設されており、その扉は開きっぱなしになっていた。

私達は細心の注意をはらいながら扉をくぐり内部へと足を踏み入れた。そこには通路の至るところに横たわるロシア兵たちの死体があった。どうやら先客は相当な手練のようだな。

「47。この兵士はまだ息がある。でもだいぶ衰弱している。」

「ふむ。喋れるまで回復させられるか？」

「やってみる。」

「イル・ウオータル・デル」

「うつ．．．がはつ．．．。」

「ゴホゴホ．．．」

「失血がひどく、銃創も多い。助けるのは私の力では無理。」

「わかった。おい、誰にやられた。」

「う．．．軍服の．．．4人組．．．。」

「軍服の4人組？所属はわからないか？」

「わからない．．．。だが．．．かなりの．．．ゴホゴホ」

「しつかりしろ。」

「お前も．．．早く．．．逃げろ．．．アレは．．．化物．．．。」

「パタッ」

「．．．だめ。死んだ。」

「軍服4人組の手練か。どこかの特殊部隊だろうか。」

『情報部に詳しく探らせてみるけれど、今の所各国の諜報機関に潜入中のインフォーマントからその基地に関する作戦の発令報告は受けていないわ。もしかしたら極秘作戦の可能性もあるけれど。』

しかし、たった4人でここを制圧するつもりなのだろうか。廊下には少なくとも1個小隊ほどの人数が倒れている。これを4人で制圧したとなれば我々もかなり危険だろう。

ひとまず先を急ぐことにした。行きがけの詰め所のような場所で基地の内部図を見つけたのでそれをたよりに先へ進んでいく。捕虜収容・尋問に使われている部屋は基地の中ほどに有るようだった。

「まって、銃声が聞こえる。」



「・・・私には聞こえない。どのくらいの距離だ。」

「風メイジは音にも敏感。下の階。多分500mは離れている。サプレッサーを使ってみたい。」

「民間のサプレッサーではそこまでの性能はないが、軍用のサプレッサーならば500も離れていては聞こえないか。」

「ということは・・・。」

「その4人組はどこかの特殊部隊で間違いなさそうだな。」

しかし相手が下の階にいるのは好都合である。私達が目指しているのはこの階にある部屋だからだ。私はタバサに下の階の音を注意深く追うことを指示し、足早に目的の部屋を目指した。

目的の部屋は捕虜を収容する独房が数部屋と、尋問や拷問を行うための部屋が一つ、それを観察する部屋が一つという構成になっていた。観察部屋にも尋問室にも人影はなく、死体もなかった。私達は独房を一つ一つ調べることにした。

「・・・。」

「どうしたタバサ。」

「独房から人の気配はしない。ここには居ないか居たとしても……。」

「……確認はする必要がある。」

その言葉通り、独房6部屋はすべてもぬけの殻だった。死体すら無く、タバサ曰く入り口から誰も出入りしていないことから、少なくともターゲットはまだこの基地のどこかに居る可能性がある。

私達は部屋を出ると下の階へ降りる階段を目指した。下の階では先程からだいぶ静かになったようで、銃声もしないらしい。この基地は横に広いが、縦方向は2階層しかなく、下の階が事実上最深部になる。

私達は階段を降り、慎重に廊下を忍び足で歩いた。辺りは不気味なほどに静かであり、先客の存在も見当たらない。私達が廊下の中ほどまで進んだその時だった。

カンツ！カラカラカラ：

プシューツ！

「むー！」

「煙幕！」

バアン

ダダダダダダダダ!!

突如として近くの少しだけ空いていた扉からスモークグレネードが投げ込まれ、廊下は煙で一杯になった。私とタバサは咄嗟に近くの部屋に飛び込んだ。その直後、私達がいた場所は蜂の巣になったようだ。

私は扉からシルバーボーラーだけだして応戦した。しかし見えない敵相手に当たるはずもなく、このままではこの部屋にもスモーク、もしくは手榴弾が投げ込まれてしまおうだろう。

「タバサー！」

「わかってる！」

“ エア・ストーム ”

ウオオオオ?! ギャーナニナニ!

銃声の間隔や方向からしてこちらを打ってくるのは少なくとも3人。だがそれ以外にもそのさらに奥に民間人のような声を上げる男がいるようだ。タバサは続けざまに

風魔法を放ち、煙幕を晴らすと同時に相手の射撃を狂わせた。

ヒュッ

ガキン！

ボオオオン！

「ぐっ！」

反対側の部屋から爆炎が襲った。どうやらあちらの部屋はガスボンベなどが置かれていたらしく、相手はその中に手榴弾を転がり入れたようだ。思わぬ方向から襲った爆発による爆炎でタバサは一瞬怯んでしまった。その隙きにと言わんばかりにこちらの部屋の中に手榴弾が投げ込まれた。

「くっ！」ダッ

「むぐっ！」

ドサッ

ボオオオン！

私は投げ込まれた手榴弾を処理する時間がないと悟り、タバサにタツクルをする要領で部屋の奥にあったダンボールの山の中へタバサと一緒に飛び込んだ。なんとかダンボールが障壁になり、手榴弾の破片は防げたようだ。

タツタツタ

「タバサ、無事か？」

「なんとか。」

「敵が来る。効くかどうかかわからんがスリープクラウドだ。」

“スリープクラウド”

ブワッ

タタタカチャ

「げっ！この煙は!？」

「ちい、毒ガスか。ひとまず引き上げるぞ！ソープ！先導しろ！ローチ！お客さんを落とすなよ！」

「了解！」

「イエッサー！」

タタタタタツ…

「・・・行つたみたいだな。それにしてもこの煙・・・。」

「スリープクラウドに色を付けて濃くしてみた。それなりに高等技術。」

「なるほど。黄色く着色したおかげで毒ガスと勘違いしてくれたか。」

~~~~~

『47。まずいわ。さつきあの連中が抱えていた男。そいつがターゲットのカミルズよ。奴らに先を越されてしまったわ。至急追いかけて頂戴。』

~~~~~

先程の民間人のような声はターゲットの声だったようだ。私達は急いで部屋を後にして階段を駆け上がる。まだそう遠くへはいっていないはずだが・・・。

「47。今奴らは坑道を出た。・・・えっ?」

「どうした?」

「坑道を出てすぐのところ・・・立ち止まった?」

「待ち伏せか。」

「違う。待ち伏せにもならないようなところで止まっている。」

「・・・とにかく急ぐぞ。」

私達は急いで施設を通り抜け、坑道の入口までたどり着いた。入口の影から覗き込むと、ターゲットと屈強な男4人が立ち往生していた。リーダーと思われる男が何か電話で話している。

「・・・解せねえ。何故今になって?・・・だからそれが解せないって話なんだよ!わかるだろ!ニコライ!」

「・・・こいつをさらってこいつて言ったのはそのクライアントなんだろ!なんで今になって!」

「・・・わかった、わかったよ。後でちゃんと説明してもらおうぞ。ニコライ。」

ピッ

「プライス、ニコライはなんと?」

「・・・。」

プライスと呼ばれたリーダー格は無言で佇んでいる。そして床にへたり込んでいるターゲットを一瞥すると……

カシユ

「ええ？」

チャキツ

バアン！

プライスは腰から拳銃を抜くと、間髪入れずにターゲットの眉間を撃ち抜いた。

「……どういうことです。プライス。」

「クライアントからそうしろって指示が来たんだよ。」

「でもなんで……じゃあ俺たちはこいつを暗殺するために派遣されたってことですかい？」

「知らん。撤収するぞ。」

バタン





~~~~~2時間後~~~~~

『それで。彼らの所属はわかったのかしら？』

「はい。彼らはどうやら別の世界の特殊部隊ですね。」

『別の世界……』

「所属名は“タスクフォース141”この世界には存在しない特殊部隊です。」

『どこの国の所属なの？』

「一応イギリスのSASが元になっているようですが……合衆国の海兵隊も絡んでいますね。」

『そう……。それで、なんで別の世界の特殊部隊がこの世界に？』

「それはまだ。侵入経路が不明です。例の空間の歪みはイジツにだけつながっていますから。」

『早急に調べて頂戴。あの男、いつかの埼玉での連中と同じだとしたら……』

「……あの時の集団は最終的に……」

『ええ。“亡霊”につながっていた。』

「ということは彼らは亡霊の子飼いの部隊ということでしょうか？」

『どうでしょうね。彼らはニコライとよばれた人物からの指示で動いていたみたいだし。』

「あの方たち、相当に戦闘力高かったですよね。」

『・・・あの者たちと真正面からやり合うためにはこちらも兵力を出し惜しみできなさそうね。』

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~

・「お届けものです。」

【+1000】『施設のゲートを通過する。』

・「遺言」

【+3000】『ロシア兵から情報を聞き出す。』

・「世紀の対決」

【+3000】『タスクフォース141と戦闘する。』

・「お株奪い」

【+3000】『ターゲットをタスクフォース141が暗殺する。』

## HITMAN2 『萌芽』

『人里へようこそ。47。』

『前回来た時の一連の騒動のおかげで町の主要人物にはあなたの顔は知られてしまっているわ。探すときに素性がバレてしまえば騒ぎになってターゲットが雲隠れする可能性が高い。気をつけて頂戴。』

『支援者として射命丸文もくるそうだけど、一時は敵対した相手、不意について報復される可能性もないとは言えないからそこも注意してね。』

『健闘を祈っているわ。』

~~~~~

「へいお待ち。ヨモギ団子ね！」

「ありがとう。」

この店に来るのは2回目だ。前回は窓から見える広場の奥の像の爆弾が爆発するさまを監視していた。何故ここで休憩しているかと言うと、幻想郷に来てからすぐに八雲紫が現れ、「この茶屋で待っていて」と言われたためだ。何でも協力者が来るらしい。その協力者が現れたのは私が団子を食べ終わって一息ついた後だった。

「・・・まあ、あんたよね。予想はできていたけれど。」

「いつもの営業スマイルじゃないな？」

「そりゃあね。わかるでしょ？」

「ああ。」

振り返った先に立っていたのは射命丸文だった。あからさまに警戒している顔をしている。まがりなりにも自分の恋人を殺した相手だ。そう安易に頼れも信用もできないしないだらう。それでもICAに暗殺依頼を出してきたということはそれだけ相手が厄介な相手ということだろう。

「よく我々に依頼を出す気になったな。」

「今回の相手は人里でもちよつとは名のしれた有名人なのよ。そんな相手を妖怪、まし

てやそれなりに人里にも出入りしている同族の天狗が殺したとなったら、里の人間にも博麗の巫女にも同族の天狗にすら目の敵にされるわけ。」

「なるほど。第三者に暗殺させる必要がある。だが他の妖怪はことが露見する可能性を考慮すると頼れない。外部の人間に頼るにしても天狗を暗殺できそうな外部の人間が我々をおいて他にいなかった。そういうことか。」

「相変わらずの察しの良さね。あなたじゃなかったら助手にしたいくらい。」

「褒め言葉と受け取っておこう。」

「それで？ 私に言うことあったりする？」

「私は任務を遂行しただけに過ぎない。相手がお前の恋人であろうがなかろうがそこは問題ではなかった。」

「・・・あの人を殺したのは不可抗力だったって言いたいわけ？」

「恨む相手が違うということだ。ちなみに八雲紫の暗殺にはかなりの法外な金額が要求されると思われる。」

「できるの？」

「おそらくは。」

「・・・。」

一瞬だけ復讐の炎が目の奥に見て取れたが、すぐにその光は消えた。スツと目を閉じると、呆れたように話し始めた。

「この幻想郷で八雲紫を討ち滅ぼそうって言うやつは人間でも妖怪でも誰もいないよ。誰もそんな事できっこないし、やる意味もないからね。」

「……。」

「は……。まあ実を言うとあの件はもう手打ちになつてるんだよね。今回の依頼を八雲紫持ちで依頼するということで。」

「八雲紫にとつては幻想郷の秩序を守つただけだと思ふのだが、それでよく向こうは承諾したな？」

「私も私なりに活動したからね。そしてここで私に追いつけるやつはいない。それは八雲紫でも同じことよ。噂話つてのは恐ろしいわよね？」

「……あいつも災難だな。」

「あいつの言い分も理解できないわけじゃない。これでも一応数世紀単位で生きてるからね。だからこの依頼でもって手打ち。私のかけがえのない友人を救うことで全てチャラってわけ。不本意だけどこれ以上要求するといよいよこつちが本当に消されかねないからね。それに権が危険な状況なのは事実だし。」

「背景はともかく、私は受けた依頼をこなすだけだ。そろそろ本題に入りたいのだが？」
「・・・言つとくけどあなたのことでもまだ許したわけじゃないからね。じゃあ本題だけ
ど・・・。」

渋々といった感じではあるが、射命丸は私の向かいの席に座つて概要を説明し始め
た。

###情報を入手###

~~~~~

『射命丸の情報によればターゲットはこの人里の権力者である稗田家の屋敷に転がり込  
んでいるようね。どうやら天狗社会の情報を提供する代わりに拠点として使わせても  
らつてみるみたい。屋敷自体はそれほど大きなものではないけれど、町一番の権力者の  
家で事を起こせば、いろいろな方面から追つ手がかかるでしょうね。』

~~~~~


「翁澆寺は今屋敷にはいないわ。どうやら秘密の会合場所が人里のどこかにあるみたい。」

「まずはターゲット本人を確認しないことには始まらない。その会合場所に心当たりはないのか？」

「ある。と言いたいところだけど、会合場所は毎回変わっている上に何か暗号のようなもので場所をやり取りしてるらしくてね。どこにあるかまでは……。」

「暗号？」

「ええ。なんていったつけかな……外の文献で一度だけ同じものを見たことが有るんだけれど……。熊がどうか……。」

「熊……。」

「もしかしたら乱数表みたいなのが椀の家にあるかもしれないわね。その暗号に使う機械もそこにあるし。」

「ならば行こう。案内頼めるか？」

「わかったわ。」

私は会計を済ませ、店を出た。余談だが話している最中にちやつかりみたらし団子を頼んでいたらしく、その団子の分も払わされた。団子一つ程度で情報が得られれば安い

ものだが。

店の裏路地で射命丸は本来の天狗の姿に戻り、私を抱えると、いつぞやに経験したときと同じように音速に迫る速度で天狗の里へ向かった。射命丸によれば、白狼天狗はリーダー格である犬走棍が共產主義にうつつを抜かしていることにより警備が機能しておらず、妖怪の山は今無防備な状態だそうだ。

直接犬走棍の家へ乗り付け、そのまま室内を物色し始める。射命丸曰く「よく秘蔵の酒とか私物の本とか引つ張り出したりしてるから大丈夫」だそうだ。何が大丈夫なのかはわからなかったが。

やがて射命丸は奥から一つの木箱を引つ張り出してきた。見た目は装飾品箱に見えるその木箱を開けると、中にはキーボードとキーになっていない文字盤、そしてダイヤルのようなものも見えた。私はこの箱に見覚えが有り、その使い方も訓練によって把握していた。

「なるほど。こいつか。」

「知っているの？」

「暗号文は有るか？」

「ええ。ここに。」

「では少し待っているわ。」

『47. 映像は届いているわ。私達情報部も解読に協力するわね。』

私はこの「エニグマ」と呼ばれる暗号機を調べた。本来は数ヶ月ごとに個別鍵が変更されるものだが、どうやら一つの個別鍵を長らく使いまわしているらしい。一部のキーだけがすり減ったりプラグがゆるくなっていた。それらが母音に起因するキーだとして、そこから推測していく。解析には情報部のA Iの演算能力も借りて、なんとか暗号表を解読することができた。

この暗号表によると、今日行われる会合はこの後15時からで、場所は人里の「こうみどう」という店で行われるらしいことがわかった。

「射命丸。『こうみどう』という店を知っているか?」

「ええ。私は入ったことはないけれど、どこに有るかは知ってる。寺子屋のすぐ近くにある茶屋ね。」

「この後15時からそこで会合が開かれるようだ。」

「ちよ! 15時つてあと5分もないじゃない! 早く行くわよ!」

射命丸は私の腕を掴むとそのまま家を飛び出し、文字通り超音速で人里へと戻った。

寺子屋のすぐ脇に降り立った我々は路地の向こう側に人影を見つけ、咄嗟に近くの建物の影に隠れた。あの白髪と背中に背負った大剣、そして白いフサフサの尾。遠目からでもわかる。犬走椀だ。彼女は千里眼を持っておりかなり遠くまで見渡せるはずだが、何か思いつめたように下を向きながら店に入ってしまったためこちらには気が付かなかったようだ。

「よし、じゃあ乗り込むわよ！」

「まだ情報収集が不十分だと思っただが……。」

こちらの話も聞かずにそのまま茶屋に向かって歩き始めた射命丸だったが、不意にそれを呼び止める声があった。私は再び素早く身を隠す。

「あら？文じゃない？」

「！」

「れ、霊夢さん！あややや、奇遇ですねぇ！」

急に呼び止められ我に返ったのかいつもの営業スマイルも若干引きつっている。それはそうだろう。天狗が関与していることを気が付かれたくないがために我々に依頼してきたというのに、その当の天狗が自ら暗殺現場に乗り込んでいけば否応でも関与を疑われてしまう。いま射命丸にできるのはできる限り早急にこの場を離れることだ。それもごく自然に。

「霊夢さんは何故ここに？」

「あの店の団子が評判だつて言うから買い出しのついでに買つて帰ろうかなつて。そういうあなたはこんなところで何してるのよ？」

「なるほど。実は私もこの茶屋の評判を聞きまして取材を聞いてまして。」

「あー、じゃあやめといたほうが良いわよ。この店主取材とか嫌いらしいから。」

「あー、そうなんです。では……霊夢さん、ちょっと団子だけでも買つてきてくれませんか？」

「なんで私が。」

「取材できなくても味さえわかれば記事はかけますので！もちろんお代は出しますよ！」

「買うだけならあなただけでもできるでしょ？」

「こう見えても私ちよつとした有名人ですよ？私が入った瞬間取材だと思われて門前払いされたら嫌じゃないですか。」

「そういうの自業自得っていうんじゃないのかしら・・・まあ払うもん払ってくれるならいいけど・・・。私をパシらせるんだからちよつと色つけなさいよね。」

「もちろんですとも！」

博麗霊夢は若干苦い顔をしながらも店に入っていった。それを文は店の外で待っている。ここからみる後ろ姿は顔はいつもの営業スマイルでは有るが、冷や汗が目に見えてたれてきており、いつ中の会合参加者にバレるかヒヤヒヤというところだろうか。少しして博麗霊夢が店から出てきた。

「買ってきたわよ。」

「おお！では早速神社で食べましょうか！」

「ええ？食べるだけならそこらへんでも・・・。」

「いやいやいや！お茶があつてこそその菓子というものです！さあ行きましょう！すぐ行きましょう！」

「ちよつ、ちよつとあゝ」

理由を尋ねる隙すら与えることなく、博麗霊夢の腕を掴んで空の彼方へ消えていった。焦りすぎて逆に怪しく、はたから見れば人さらい以外の何物でもなかったが。

ともかく辺りが静かになったので、私は改めて店の中を覗いてみることにした。店の中は結構広く、テーブル席もいくつか有る上に、奥には個室の座敷も有るようだ。窓の反対側には厨房が有り、そこから時折店員と思われる女性が出てきて接客を行っている。私は厨房の様子を見るために反対側に回った。

厨房では一人の老人がせわしなく和菓子を仕上げていた。皿の上にはピンク色に着色された餅のようなものが葉っぱでくるまれており、その脇には花の形を模した饅頭のようなものを丁寧の一つ一つ手作りして置いていつているのが見える。奥から声が聞こえてきた。

「奥の翁澆寺さんから注文です。」

「あいよ。えーつと、あの人のいつものいちご大福だったな。にしてもなんであの人が食わんのだろうか・・・？まあいちご自体そんなに量手に入るわけじゃねえから助かるけどよ。」

#####アプローチ発見#####

『ターゲットはこの店に来たら決まっていちご大福を食べるみたいね。しかもターゲットしか食べないみたい。これは使えそうよ。』

ターゲットしか食べない大福。普通の人間相手ならば毒を盛ればそのまま任務完了になるだろうが、今回のターゲットは天狗。通常の毒や即興で作った毒は効かない可能性が高い。前回使った毒も今回は持参していない。加えて言うならば毒があつたとしても、かの天狗が毒殺される瞬間を間近で見た構成員の者たちは報復として共産主義者界樹立計画を早める可能性もある。正直我々には関係のない話では有るが。

何か他の方法を探そうと窓から中を見回していると、奥の棚、作業している机からはちようど反対側に位置している棚に、殺鼠剤を発見した。しかも小分けにする前の大袋に入っている。アレを使うことにしよう。

私は建物の外周を見渡した。程なくして水道管のようなものを見つけた。後から知ったことであるが、最近妖怪の山の河原に住んでいる技術者集団である『河童』が、外の文献を元に人里のインフラ整備を行っているらしい。ガスはガス田が無いために整備されていないが、近くの川から水道を、地霊殿から電気を引っ張ってきて一部の家屋にはそれらが供給されているらしい。

私は水道管を思いつきり蹴り飛ばした。我々の世界の水道と違い、木材を多量に使用しているせいであつけなく壊れた。水が勢いよく吹き出し始めたのを確認して、建物の勝手口のそばに隠れた。

ガチャ

「何だこの音……うわわ！水が！大変だこりゃ！」

中から店主が出てきて吹き出している水の対処を始める。その隙きに勝手口から調理場に侵入した。

調理場には作りかけの大福の生地が置かれていた。一つ分しか作る気がないのか量はかなり少なかつた。私は棚から殺鼠剤の袋を取り出し、中の粉末を大福の生地に大量に混ぜ込んだ。そのままある程度生地を完成させると、一旦窓の外を見る。店主は吹き

出している水を必死に抑えているが全く意味をなしていない。そこへ他の人が呼んだのか、河童がやってくるのと直す準備を始めた。

まだ多少時間が有るようなので私は大福を完成させてしまうことにした。殺鼠剤を少量水に溶かし、それをいちごの中にも注入する。そのいちごを核として大福を形成する。もちろんあんこにも多量に殺鼠剤が混ぜ込まれている。ある程度形になり、外側の片栗粉でそれっぽく見せてやれば完成だ。それをそばに置いてあつた提供用の皿に盛り付け、殺鼠剤の袋を元の棚に戻した。

#####

~~~~~

『大福が完成したようね。私は食べたいとは思わないけれど、ターゲットにとってはまさに至高の菓子になるわね。』

~~~~~

ガチャ

「ふー……なんとかなったな……。」

つと、店主が戻ってきてしまった。外に出る予定であったが仕方ない。私は手近な机に身を隠した。

「……あれ？大福ができてる……。もう作り終わったんだっけか？」

パタパタパタ

「おやつさん、できました……つてもう完成してるじゃないですか。言つてくださいよ。」
「え？ああ、そうだな。持つていつてくれ。」

給仕の娘が殺鼠剤たつぷりの大福を持つて廊下へ出ていった。予想が正しければターゲットは激しい嘔き気を催すはずだ。その際に近くに居ておきたい。

私は静かに柵の引き出しを開けた。そこにはフォークや果物ナイフ等、様々な食器が入っていた。私はナイフとフォークを一つずつ取り出し、フォークを出入り口とは違う方の床に向かって放り投げた。

カランカラン……

『アレが翁澆寺佐衛門。再び赤の波動を幻想郷に行き渡らせようと暗躍する街の人気者。』

~~~~~

よほど大福が好きなのかそれとも大食らいなのか。大福をそのまま一個まるごと口に頬張ると2〜3回咀嚼した後飲み込んでしまった。

「うーん？」

「いかがなされました？」

「いや、こんな味だっただろうか？なんか苦味があるような……。」

「私どもの桜餅はふつうに美味しいですけど……？」

「ううむ……うぐぐ……なんだか気持ちが悪くなってきたぞ……。」

「大丈夫ですか？」

「済まない少し席を外す。話はその後でしょう。」

「付添が必要ですか？」

「いや結構。」

ターゲットが嘔き気を催して外に出てくる。私は廊下の隅に隠れ、ターゲットの行き先を見届ける。ターゲットはそのまま店のさらに奥へ進み、その突き当たりの勝手口を開けて外に出てしまった。私は静かにあとを追いかける。天狗ほどの能力者ならば尾行に気がついてもおかしくはないと思うが、彼は今猛烈な嘔き気と戦っているためその余裕がないようだった。

「うええ．．．なんだこれは．．．何が入っていたんだあの大福．．．。うっ！」  
ウオエエエエエエ．．．

人気がない裏通りの隅で盛大に吐いてしまっている。私はその近くによっていき声をかける。

「大丈夫ですか？背中を擦りましょう。」

「ううう．．．通りすがりの方、かたじけない．．．うう！」

ウエエエエエエ．．．

私は背中を擦るふりをしつつ彼の喉元にナイフを突き立てた。通常の人間ならば喉仏付近を切り裂き動脈を切るだけで失血死するが、今回の相手は見た目は人間でも中身は天狗なのでより確実に行くことにした。ナイフを下から上へ下顎から脳天に向かつて突き刺した。そのまま中をかき乱すようにねじり込んだ。喉の声帯も一緒に切り裂いていたためか一切声を上げることなくそのまま少しだけ痙攣した後力なく倒れ込んだ。

~~~~~

『ターゲットの死亡を確認。任務完了ね。そのまま放置していつてもいいけれど、できれば隠すことはできるかしら?』

~~~~~

私は周囲を見回した。建物の近くに丁度良く荷車があった。確か大八車と言ったか。その荷台にターゲットの死体を乗せ、近くにあつた藁束をその上からかぶせる。首にはナイフが刺さりっぱなしで血の流出もそれほど多くはないので、藁で隠すだけで運ぶこ

とが可能だろう。

私はその大八車を引いてそのままセーフハウスに戻り、大八車ごと本部へ帰還した。

~~~~~同時刻~~~~~

「さあさあ！ 霊夢さん！ お茶が入りましたよ！」

「……ありがとう。」

「さあ早速団子を食べて見ましょう！ どんな味なのか楽しみですね！」

「……文。」

「あ、霊夢さん。こっちが良かったですか？ じゃあ2本ずつ有ることでし、半分ずつ……」

「文。」

「……なんででしょう。」

「いい加減になさい。さすがの私だって気がつくわよ。」

「何のことでしょうか？」

「あなた自分でわからない？ あなた私にお茶を入れてくれることなんて無いでしょう」

に。」

「えっと……それは……たまたまそういう気分だったんですよ！」

「それに団子の味が知りたいのに神社に来る意味はないし、そもそもその話の流れだつて色々強引だったでしょ。」

「えー……と……」

「はあ……大方、翁澆寺の連中のことですよ？」

「!?」

「そして、それを暗殺しようとしていた。」

「?!?!」

「これでも一応博麗の巫女よ？あんたの後ろにあの男が控えてたのくらい気がつくわよ。店の奥に連中がいることもね。」

「れ、霊夢さん……?」

「あの翁澆寺って男。最近やたら阿求や慧音に取り入ったり、私にも挨拶に来たりと何かと怪しかったのよね。で、この前独自にちよいと尋m……調べたら、簡単に吐い……わかったわよ。」

「(あの賢者、しゃべったのか……)」

「その共産主義つてのがどれほど危険かは私にはわからないけれど、友達を救いたいわ

てのはわかったわよ。でも普通そこであの男に頼る？」

「・・・私が直接手を下せばあなたは私を退治するでしょう？」

「そりゃあね。でも直接じゃなければ退治されないってわけでもないのよ？」

「・・・。」

「・・・まあ今回のことは大目に見てあげるわ。」

「え？」

「私もあの男、あんまり気に入らないのよね。なんか胡散臭くて何か企んでそうだったし。」

「で、でも。」

「紫も承知してたんでしょ？そっちで全部片が付きそうだし。私、面倒なのは嫌いだしね。」

「ええ・・・。」

「だから暗殺の件は不問。だからあなたは友人を救いに行つてやりなさい。」

「・・・！・・・今回ばかりはお礼を申し上げないといけませんね・・・。」

「いいわよそんなの。さっさと行きなさい。あ、団子は4つとも貰うわよ。」

「ふふつ。団子代程度で手打ちになるならよろこんで。では！」

【+1000】『ターゲットの遺体を本部へ持ち帰る。』

HITMAN 2 『亡霊のしっぽ』

『ようこそ！エンパイアクラ．．ん？なんかおかしいな．．やつべ！これ今度の宴会のだー！』

『ああ、あったあった。ようこそ！グラスゴーへ！なあにちよつと場所がずれただけさ。』

『マイケルなんちゃらつてやつは、ここにある展示場で開かれる展示会に参加するみたいだぜ。まだ到着してねえみたいだな？』

『情報だとそいつは車で来るらしい。駐車場で張り込んでれば見つけやすいんじゃないやねえか？』

『ああそうそう。情報部の連中から“今回は派手にやっていい”って許可貰えたぜ！明日の世界ニュースのトップ飾れるように頑張ろうな！』

『よっしゃ！レッツパーリーナイトだぜ！』

~~~~~

「パーリーナイトって・・・今お昼前なんだけど。」

「あはは・・・。」

私達はイギリスはグラスゴーの中心部にある、SECセンターに来た。ここでは今日、「MAST Europa」という兵器展示会が開かれるみたいね。そのターゲットも特殊部隊の隊員ってことは講演でもするのかしらね？

今回は久々にシルバーとの仕事。最近、任務と訓練時間が変なふうにかち合ったりしてたおかげで一緒に仕事することがここ一ヶ月ほどなかった。しかもいつもならば本部の寮に帰れば会えるところを、最近は泊まり込みの任務が多かったため、仕事以外のプライベートで見ても実に2週間ぶり。さぞかし寂しがつてるかと思いきや・・・。

「姉さん。駐車場はあっちみたいだ。行こう。」

「え、ええ。」

本人は特段気にもしていないみたい。なんか面白くないわね……。まあとにかく。お互いにこの任務の後には新しい任務も訓練も入ってないはずだから、親睦を深めるのは任務を終わらせてからにしましょうか。

私達はSECセンターの横の駐車場へやってきた。すでに多くの車が止められており、空いている場所はあまりない。ただ建物に一番近い一角だけ不自然に空きスペースがあった。止まっている車は高級車ばかり。さしずめVIP専用ってことかしら。ターゲットももしかしたらあそこのスペースに止めるかもしれないからそこは注視してみているとね。

「シルバー、あそこ。あのスペースにおそらくターゲットの車が来ると思うの。」

「関係者専用。かな？ 通用口からも近いし警備はしやすそうだ。ということは……。」

「ええ。あそこに停めて中に入られると面倒になる。」

「じゃあやつぱりはじめにプランニングしたように駐車場で襲撃する？」

「その方が良いでしょうね……。シルバー、アレは持ってきてる？」

「ちやんとあるよ。ヴァイントス。」

「じゃあ私が駐車場で足止めするからあなたはそれで援護を。」

「わかった。じゃあ一旦別れよう。」

「ええ。」

私は駐車場で空きスペースに向かうとしたら通るであろうルートの途中で車の陰に隠れつつ待ち伏せを開始する。シルバーは川の方へ向かった。

（シルバー side）

駐車場近くにかかっていた橋を渡って対岸に渡った。目指すはここに来たときから見えていた高い塔、グラスゴータワーだ。事前の情報によるとこの建物は建物自体が風向きによって方向を変える構造になっているらしく、風向きが体感で瞬時にわかりそうだ。

タワーのそばに着いてから気がついたけれど、このタワー、展望台こそあれど、そこから外へ出る事はできないようだった。しかもついぞと言わんばかりに現在改装中のことで上へ上がるためのリフトも稼働していなかった。

でもリフトが稼働していないということは今展望台には誰もいないということ。上に登りさえできれば後は自由にできるということでもありそうだ。

俺はドンカラスにつかまってリフトの中を通って上に行こうとしたが、周囲を確認す



る上で問題が発生した。周囲に観光客が居るのだ。一応このグラスゴータワーはグラスゴーの観光名所のようで、近くには中国人のツアー客が居るようだった。ここでは稼働していないタワーに登ることはおろか、ドンカラスを出すことすらはばかられる。さでどうしたものか……。

考えていても埒が明きそうになかったため、仕方なく俺は姉さんに頼ることにした。

「ブルースサイド」

「姉さん。聞こえるかい？」

「聞こえてるわよ。狙撃位置にはつけた？」

「それが、周囲にひと目が有りすぎて狙撃位置につけないんだ。」

「あらら……。まあここは観光地なものね。」

「そこで、姉さんに手伝ってほしいんだ。」

「私に？」

「ああ。姉さんが駐車場で派手にドンパチやってくれればその騒ぎで観光客の視線はそ

ちらへ向くと思う。その隙に上に上がるよ。」

「わかったわ。じゃあこっちは当初の予定通り派手に行っちゃうわよ。」

「お願い。」

なるほどね。まあ川向うからなら私の顔を見られることもないでしょうし、大丈夫でしよ。最近、欧州各地でイスラム系のテロ事件が頻発しているからちよつと騒いでやれば、すぐにテロだと思つて一般人は散つてくれるでしょうし。

とりあえず周囲の状況は把握しておくべきね。私は懐からボールを3つほど取り出した。

「でてきて！みんな！」バシユバシユバシユ！

「メタちゃん、鳥に化けて空からターゲットを探して！」フルル

「ぷりり、車に隠れて人に見つからないようにターゲットを探して頂戴。」プリツ！

「それと・・・、ガーデイ！初任務よね！走つてターゲットを探して！」ガウツ！

今回は、情報部から47のガーデイを借りてきた。というより連れて行つてほしいと頼まれたわけだけれど。ガーデイはちよつと毛並みが鮮やかな犬に見えなくもないか

ら他のポケモンたちよりはまだ目立たなくていいでしょう。手分けしてターゲットが来るのを待ち構える。

しばらくして、通信機からガーディが吠える声があった。ガーディの居る方向を見ると、ベンツが1台、その後ろにSUVが1台くっついて駐車場に入ってきた。事前の情報通りの車列。ターゲットのお出ましね。護衛に傭兵が雇われてるらしいけれど、まあなんとかなるでしょ。私は行動を開始した。ウィートリーじゃないけれど、パリーイタ イムね！

「出てきて！ニドちゃん！車の目の前に向かって はかいこうせん！」

ガア！

バシユ！ドゴオオオン！

キキーツ！

「敵襲！」

ダダダダ！

ガガガガキン！

「良いわよ！ニドちゃん！痛くない？」

ガーツ！

「よしー！」

今回の任務のためにニドちゃんには特別に装甲服を着せてある。ICA謹製の特殊防弾装甲。普通の服と大差ない薄さなのに50口径弾まで耐えることができるスグレモノ！その分めっちゃ重いらしいけれど、ニドちゃんのパワーなら無問題よ！現に相手はすぐはこちらに気が付き、銃を撃ってきたけれど、ニドちゃんはそれをすべてを弾き返すことに成功している。さあ、もっと派手に行くわよ！

「ニドちゃん！相手の周囲の車に向かってもう一度はかいこうせん！横薙ぎにしちゃつて！」

バシュー！ドゴオオオオン！

くココsideく

「うわ！あぶねえ！」

「護衛対象の確保を！」

「ココ！護衛対象確保！」

「よくやったぞヨナ隊員！」

何だこの攻撃：：、銃やロケット弾じゃない。いうなればSFに出てきそうな「レーザー攻撃」。しかも放ってるのはどつかの怪獣映画に出てきそうな姿をしているロボット兵器ときた。簡単な護衛の仕事かと思つたら：：全く本部はろくな仕事をよこさない！

ともかく、今は状況の把握が最優先。相手の攻撃は初弾を外したことによる土煙でこちらの位置を掴みきれていないみたい。一旦引いて体制を立て直そうか：：。

ドゴオオオオオン！

ちよつとちよつと：：一般人への被害もお構いなしってわけ？今の砲撃で川に飛び込んで逃げる方向は潰された。一歩間違えればそのままレーザーは川を超えて対岸に行くところだったわよ？それだけあのロボットに自信があるってことかしらね：：。

「レーム！ルツ！狙撃準備！北と南に分かれてあのロボットの近くにいる操縦手を！」

「了解！」

さつきから光線が飛んでくるたびにチラつと見えるあのロボットの背後に20代くらいの若い女性の姿が見える。おそらくあれが操縦手ね。あれさえ仕留めてしまえば。

レームとルツが車の陰に隠れつつ、南北に別れる。ワイリはルツ、マオはレームについていく。ウゴとヨナで護衛対象を守る。バルメは私についてくれている。変なロボットを操る敵だけれど、見たところ他に勢力はなし。簡単に鎮圧することができる……。

ガシヤン！パリン！

「うおつと！」

「うわ！ココさん！狙撃だ！」

「何！」

「チツ、消音銃を遠距離から使つてやがる。位置がわかんねえ。」

「くっ……今！」

ガキン！

「ぐわ！」

「ルツ！どうした！状況をしらせろ！」

「ライフルを狙撃された！こいつはもう使い物になんねえ！」

「ルツ。弾はどつから来たかわかるか。」

「打たれた方向はわかんねえ。でも銃身の損傷は川の方から受けてる。」

「てことは・・・あそこか！見つけたぜ！」 チャキツ

ゴゴゴゴゴゴゴ！

「げ！地割れだど?!」

「レームさん！危ない！」

ドゴオオオン!!

「レーム！マオ！大丈夫か！返事をしろ！」

くブルーsideく

「あつちやー・・・、ちよつとやりすぎちゃったかしら？」

ガーデイとぶりりの索敵のおかげで相手のスナイパーと思われる集団が南北に散つ

ていったのは確認できていた。そのうちの片方はタワーに登ったシルバーが無力化してくれたみたいだけれど、そのせいでシルバーの位置が向こうにバレてしまった。おじさんの方のスナイパーがシルバーの位置を補足して撃とうとしていたので、ニドちゃんのだいちのちからで地割れを起こさせただけ……。死んでないわよね？一応、ここまで民間人含めて死者はゼロなはずなんだけれど。結構死者が出ないように周囲を破壊するって神経使うからなんとか生きててほしいわね。心情的に。

「シルバー、そつちから状況わかる？今のスナイパーどうなった？」

「ちよつとまって。まだ煙が晴れてない……。つとまずい。」

「どうしたの？」

「姉さん。東から警察が来てる。すごい数のパトカーだよ。」

「げっ。まじで？うーん……。どうしましょうか……。」

ニドちゃんを動かすことはできない。今動かせば好機とばかりに傭兵連中がやってくるに決まってる。かといってカメちゃんは出せない。今出せば的にされる。カメちゃんには装甲を施していない。となると……。



「ガーディ！聞こえるわよね！駐車場の入口にある鉄塔の根本に“かえんほうしゃ”よ！」

ガウツ！

ボオオオオオオ：

グラア・・・

ガシヤーン!!

ガーディのかえんほうしゃで鉄塔の根本が融解して倒壊した。その際にバラバラに倒壊したため、うまい具合に入口を塞ぐように「瓦礫の山となった。

「いいわよ！ガーディ！ねえシルバー！私のほうがうまく扱えるんじゃないかしら？」

「だめだよ姉さん。それは47のだ。」

「ちえー。あ、そうそうそれよりもスナイパーは？」

「ああそうだったね。えつと・・・大丈夫、どうやら生きてるみたいだよ。でも白髪短髪のほうは腕を怪我したみたいだから、スナイパーの心配はこれでなくなつたと言えるね。」



「シルバー！ドンカラスは持つてるわよね？」

「え？連れてきてるけど……。」

「じゃあ大丈夫ね！」

「え？え？」

「ニドちゃん！あの塔の根元に向かって、はかいこうせん！」

ガー！

「え?!ちよ！」

混乱するシルバーを尻目にニドちゃんのはかいこうせんがシルバーの登っているグラスゴータワーの根元に直撃した。タワーはかなり細いため、その一発でも致命傷になり、タワーは大きな金属音を立てつつ、川の方へ倒れ込み始めた。

ドシャアアアン!!

タワーは川に倒壊した。派手に水柱が上がり、その水は駐車場で燃えていた車のいくつかを消火した。

〈ココロside〉

あーあーあー、もうめちやくちやじゃないか！今日は厄日だ！レームは利き腕を骨折、ルツの銃は花が咲いてしまっている。こっちにあるのはスコープのついていないイフルだけ。相手は銃の効かない謎の怪獣ロボット。どうする・・・。

「ココロ・護衛目標が！」

「え？」

もつと厄介なことに、護衛対象であるSASの隊員が一人で勝手に行動し始めたのだ。しかも踵を返し走って逃げようとしている。勝手に動かないでくれないかなあ!?

案の定、走っている最中にどこからともなく飛んできた狙撃によつて足を撃ち抜かれた彼は悲鳴を上げながら車の影に転がり込んだ。とりあえず彼の安全が優先だ。前線を下げよう。

「総員！ーブロック後退！」

「了解！」

私達は後退して駐車場と駐車場の間を通る道路まで後退した。私は護衛対象の男のもとへ駆け寄る。

「勝手に動かないでもらえますか！まだ安全が確保できていないというのに！」

「ぐっ……すまない……。」

「止血しますから動かないで。バルメ！相手の気を逸らせる？」

「大丈夫ですココ。ルツ達が囷になってくれます。」

「ルツ！無理はするなよ！」

「わかってるぜお嬢。流石にあんなバケモン相手に拳銃一丁じゃどうしようもねえしな！」

「ココ、通りの北側は駄目だ。駆けつけた警察車両が炎上してる。」

「やっぱりスナイパーをどうにかして川に逃げるしかなさそうですね。ルツ、相手の位置は？」

「さっきはタワーの最上階にいたが、タワーが倒壊してからはどこに居るかわかんねえ。」

みんなが的確に状況把握に努めてくれている。流石は我が部隊といったところだ。そんなみんなを頼もしく思っていると不意に足を撃たれた眼の前の男が口を開いた。

「・・・仕方ない。」

「は？」

「万が一我々が全滅したときのことを考えなくてはならない。少し作業をしたいが良いか？」

「今はそれどころじゃ・・・。」

「これは必要なことなんだ。私が死んだとしてもこれだけは成さなければならぬ。」

そういうと彼は懐からスマホを取り出して何かを操作し始めた。こんなときに悠長な・・・。ともかく我々はまだ誰も欠けてない。それにさつきトージョーから会場からこつちへ向かっていると連絡も来た。まだ、全滅するつもりはない！

ブルーサイド

~~~~~

『お！ やつと通信し始めたな！ 今傍受してるぜ。そのまま圧力をかけ続けてくれ！ ん？ ああ、傍受云々は俺じゃなくて情報部のねーちゃんがやってるから大丈夫だ！』

~~~~~

そりやウイートリーに任せたら傍受じゃなくてこっちの情報送信しちやいそうだものね……。ともかく任務は達成間近。そろそろ撤退の準備をしないと。

「シルバー？ 生きてる？」

「姉さん……。危うく川に投げ出されるところだったよ。」

「ごめんごめん。今どこ？」

「タワリーの隣の科学センターの屋根の上。こっちから見えるそっちの周りは警官だらけだよ。」

「あらら。まだ川に用意してるボートは無事？」

「そつちは一般市民の持ち物だと思われてるのか手つかずだね。警備もされてない。」

「じゃあそのボートで迎えに来て。そろそろ撤収するから。」

「わかった。」

~~~~~

『よつしや！ 傍受は成功したみたいだぜ！ そろそろパーティーもフィナーレだ！ 派手に決めてやる準備は出来てるか？ ああ、脱出用の特殊船ならその川を下った先に用意してるぜ！』

~~~~~

言われなくても撤退中よ。最後はとっておきの技で締めてあげるわ！

「ニドちゃん！ 決めちゃうわよ！ “じしん”！」

ガー！



グラグラゴゴゴゴゴゴ

わざマシンを使って覚えさせたとおきの技。ニドちゃんはその重量を存分に發揮して周囲に地震を発生させた。普段ほとんど揺れることのないイギリスでの地震は、駐車場の周辺にいた一般人や警察を大混乱に陥れるには十分だった。建物が傾き、車はアラームだらけ。人々は逃げ惑い、警察もまともに行動できていない。耐性がないので不便ねえ。

私はその混乱に乗じて川に移動する。ニドちゃんも地震を起こしつつ、川へ向かっている。私が川辺につくのとほぼ同時にガーディとぶりりも合流。その後、シルバーが揺れる水面をかき分けてモーターボートで走ってきた。シルバーは見事に私の目の前で急反転して岸壁近くに横付けした。

「姉さん！」

「グットタイミングよ！戻って！ニドちゃん！」

「姉さん早く！」

「まちなさいって！よつと！」

「よし！飛ばすよ！つかまって！」

私は手すりに掴まる。モーターボートは凄まじい速度で川を下り始めた。倒壊したタワーを躲したあたりで空で警戒にあたっていたメタちゃんも戻ってきた。そのままメタちゃんにはモーターボートに覆いかぶさってもらって、川の色と同化してもらった。

私達はぼろぼろになった観光地を尻目に川を下って脱出した。

~~~~~1時間後~~~~~

~~~~~

『それで？結局情報はなんだったの？』

「はい。それが・・・どうやら今まで亡霊は我々のミッションをすべて傍受していたようです。」

『なんですって？でもそんな簡単に・・・。』

「どうやら亡霊はこちらのセキュリティをすべて完璧に無視して内部情報を自由に閲覧

できる状態にあるようです。加えて言うならば命令書の偽造や、報告書の偽造履歴なども有りました。」

『なんてこと……。』

「直近だと、ルスキー・グラザー基地での作戦中、別世界の特殊部隊「タスクフォース141」への依頼もここからのようですし、Googleのデータセンターに赤井秀一が現れたのもFBIに情報をリークした形跡が……。」

『今は大丈夫なの?』

「これらを受け、ICAでは緊急ですべての暗号方式と通信方式、指令手順などを変更しました。まだ万全とは言えませんが、しばらくは大丈夫だと思います。」

『わかったわ。で、肝心の亡霊の居場所はわかったのかしら?』

「それが……まだ完全に特定とまでは。おおよそならわかったのですが。」

『聞かせて頂戴。』

「ワシントンです。DC中心部から半径30マイル以内とだけは……。」

『ある意味世界の中心に居るってわけね。今回はそこまで絞られただけでも良しとしましょうか。』

「引き続き調査は継続しています。」

『ええ、お願いね。』

「あ、後もう一つ別件なのですが。」

『なにかしら?』

「上級委員会からの建造指令だった、小型中性子掃射砲ですが、まもなく建設が完了しそうです。」

『ずいぶん早いわね? 1年はかかると聞いていたのだけれど。』

「以前、エージメント47が、幻想郷の地下で貰ってきた石を解析した結果、物質転換理論を駆使すれば、木材より安価で、粘土より形成しやすく、原材料費はダンボール以下、かつ強度はカーボンナノチューブをも上回る新物質、技術部では『フェムトマテリアル』と呼んでいるようですが、それを使うことで設計を簡略化でき、建造期間をさらに短縮することに成功したそうです。」

『フェムトマテリアル・・・さすが世界最高レベルの技術者集団といったところかしら。』  
「まあそれでも小型化はできず、『小型中性子掃射砲』と言っても軌道上に浮かぶ本体の大きさは直径20mほどになってしまったようですけれど。ともかくまもなく建造は完了します。」

『わかったわ。じゃあそれとさっきの亡霊の件、両方とも上級委員会に報告してくるわね。』

「はい。おねがいます。」



## HITMAN 2 『深撃』

『トラック泊地へようこそ。47。』

『ここへ来るのは2回目よね。見た目はあのとき大して変わっていないと思うわ。』

『基地は最終決戦に向けて厳戒態勢よ。侵入はかなりの困難が予想される。どうするかは任せるわね。』

『時間はあまりないわ。幸運を。』

~~~~~

ふむ。確かに厳戒態勢だ。それはブリーフィングで把握していたが流石にここまでとは予想していなかった。

以前は基地の外周ギリギリまでジャングルが広がっていたが、あの後改装されたのかそれとも深海棲艦が改装したのか、壁際まであつたジャングルは全周に渡って壁から10m程度手前まで後退させられている。そしてその10mの間には、除草剤を定期的に

撒いているのか雑草すらろくに生えていない。しかも壁の近くの建物から監視役の深海棲艦が見張りをしているが壁の外周に歩哨などが見当たらないことから、おそらくあの10mの間は地雷原だ。

入口の門は2段階検問に変更されている。第1段階を突破しても第2段階に至るまでに詳細に調べられ、見る限り通行証が必要なようだ。通行証はここから見てもわかるくらいに大きめの写真が貼られている。ドライバーの顔も確認しているようだ。これでは侵入は難しいだろう。

だが侵入が難しいのは把握していたため、今回は侵入しない方向で行こうと準備をしてきた。そのために“OSV-96”を特殊弾頭付きで持参したのだ。前は倉庫から引つ張り出してきたそのままだったためオリジナルのままだったが、今回は技術部に依頼して消音器をつけてもらった。威力も射程も殆ど変わらずに発砲音をほぼ完全に消すことができるようになった。毎度のことながら一体どんな技術なのか・・・。

私は基地北側の山の中腹から双眼鏡で基地内を搜索することにした。基地内は基地外と違って歩哨や監視員もそれなりに配置されており、騒ぎを起せばすぐに警戒態勢に移行してしまうだろう。狙撃する相手は厳密に選ぶ必要がある。私はおそらく中央の建物内に居るターゲットを外におびき寄せるための策を講じることにした。

〈深海棲艦 side〉

キュキュキュー！

「イ級。哨戒ご苦勞様。」

キュキュ：

「今度は空母6隻？あいつら鎮守府正面海域を演習海域だと思つてんのか・・・。」

私はパンチエツタ・シユリーズ。ガリバルディ・ベルサリエーリ旅団の旅団長も努めたことがある。いわゆる“エリート組”だった。しかし東南アジア遠征中にイタリヤ本土が壊滅的被害を受けて国家が消滅した後は、日本国の指揮下の元深海棲艦に対して工作活動を行っていた。

元々私は情報収集能力にはたけていたため、いくつかの任務をこなした後、そのままオーストラリアに飛んで日本諜報監査機構に転属した。そこである事件の事後処理を行っていた際に、この世界の真実の断片に触れてしまったのが私が寝返つた理由だった。

私の父母も友人たちも祖国でさえも、みんな深海棲艦に殺された。しかし、深海棲艦

を操って指示していたのは他ならぬ日本国大本営だったのだ。はつきりとそう書かれていたわけではなかったが、いくつかの命令書は深海棲艦に向けて送られたとしか思えないような内容だったため、いくつか裏付けを確認しただけで容易にその予測が真実であると確信できた。

私は日本を許さない。そしてその日本人しか居なくなつたこの世界に復讐する。そのため、私はトラック泊地にやつてきた。最初は情報将校として深海棲艦側に警備状況などをリークしていただけたが、ある時港の古びた倉庫でおかしな薬を見つけた。青白い液体が入った小瓶で、側面には赤と白の傘のマークが描かれていた。基地の資料にはそれらしきものが見当たらなかったため、本部の資料も参照したところ、以前大本営の秘密作戦に使われた薬である可能性が高いことがわかった。

その薬は今の私にとって願ってもないものであった。私は休暇を取り、泊地外れの無人島でこの小瓶の中身を一気に飲み干した。みるみるうちに身体に変化が起こり、私は所謂「姫級」に準ずるほどの力を得ることに成功した。

そこからはあつという間だ。深海棲艦と直接接触を図り、トラック泊地襲撃計画を立案。その日の午後には基地内の艦娘部隊を3分割した合同演習が予定されていたため、基地がから空きだったのもあつて、即日襲撃は実行された。内部情報がダダ漏れの艦娘側に勝算などあるはずもなく、泊地はあつけなく陥落。深海棲艦側としてはこの周辺一体

の制海権を取り戻したことになった。

私はそのままその泊地にて現地司令官として着任。元人間ということもあり、人間側の作戦立案傾向なども熟知している為、主に対抗作戦立案などで非常に重宝されている。本日は本部の大本營の方で何か大掛かりな攻勢作戦が立案されているようだが、最近暗号方式が変わったためかその実態を把握できずに居る。それでも部隊配置や状況などを見ればなにがしたいかはだいたい把握できるため特に不便はないのだが。

問題は時折大本營内部から行われる正体不明の通信だ。他の暗号通信は意味のない文字列に置き換えられていたり、別言語の別の単語に置き換えられていたりしている。が、所詮は言語であることに変わりはない。だがあの通信は言語ですら無ければモールス信号でもない、特殊な電波通信だ。深海側はおろか、人間時代の技術なども照らし合わせてみても、何か電波的なものが発信されている。"ということしかわからない。かなり特殊な暗号通信のようだった。しかも最近になってその通信が増えてきている。大本營の通常の暗号通信には用いられては居ないが、これも大本營の通信なのだろうか？

「司令。どうしました？」

「ん？ああ、夕級か。最近の相手の動向に気になる点があつてね・・・。」

「例の謎の通信ですか。」

「何だ知ってたのか。」

「アレはマリアナ総本部の方でも議題に上がってますから。」

「ということは総本部もまだ把握できていないってことか・・・。」

「日本国大本営内部に潜り込ませているスパイからも有力な情報は得られていないみたいです。」

「結構奥深くまで入り込んでいるはずのうちのスパイがつかめない情報・・・か。」

私は、この泊地に赴任してからというものの、自前の諜報員を育て上げた。元々日米の音響測定艦を元にした新しいタイプの深海棲艦で、日本や一部はオーストラリアの新基地などに派遣していたこともある。一度不慮の事故があったが、すぐに代わりの人員を送ることもできていたので問題はないだろう。マリアナ総本部でも私のはなった諜報員の情報は非常に有効活用されているようで、それらを唯一訓練・配備することができるとも総本部内では一層大きくなっているという。

しかし、その優秀なスパイ集団を持つにしても掴みきれない情報ということももしかしたら日本国大本営ですら存在を把握していないのではないだろうか？もしくはトッブ集団のごく一部の人間にしか知られていない極秘作戦の可能性も・・・。

バシユウン

「ん？なんだ？」

「停電でしようか？」

ガチャ

「司令。この建物の電力設備が壊れてしまったみたいです。」

「うん？この前補強したばかりなんだけどな・・・。」

「補強が甘かったんじゃないですか？」

「そんなことはないと思うんだけどなあ・・・。」

深海棲艦が電力を使うというのもおかしな話だと思いが、人類側が使っていた。電気。という利器は深海棲艦側にとっても利器だったようで、地上に泊地を置けるようになってからというものの電気の有用性に深海棲艦側も気がついたらしく、今では地上からの殆どの通信はこの泊地の通信設備を介してマリアナ総本部に送られてすらいる。

しかし難点は今の所トラブルに対処できるのが私以外に居ないという点で、前まではハワイ方面にも同じ人間出身の司令官が居てそれも修理できたからなんとかなっていたが、最近そいつが暗殺された影響で実質この設備を整備できるのが私だけになって

いる。なのでこういうちよつとしたトラブルですら私自身が出向かなければならないのだ。

「はあ・・・ちよつと見てくるよ。夕級、後を頼む。」

「お任せください。」

私は執務室をでて、一旦下の階の配電室に向かった。配電室内では既に何人かが様子を見に来ていた。

「ああ、司令。またですか？」

「そういうな。こいつも結構古いからね。どれどれ・・・。」

「・・・。」

「どうです？」

「うーん、こつちには異常は見当たらないなあ・・・。」

「ということは外ですか？」

「かもしれないね。」

ガチャ

「ああ司令、ここにいましたか。ちよつと来てください。」

「千級か。今ちよつと忙しいんだけど……。」

「停電ですよ。そのことですよ。宿舎の上にあつた電線が一部切れてるみたいなんです。」

「ええ？その電線は変電所から全体に送電するときの要の電線なんだけどな。」

「そうなんですか？」

「うん。そうか、そこが切れたから全部電源が落ちたのか。ちよつくら直してこようか。」

「じゃあレ級を呼びますか？」

「うん。お願い。」

こういう高所作業の時は戦艦レ級によく手伝ってもらう。しつぽの部分が自由自在に動かせる上に力も強いため、簡易的な高所作業車のような役割を果たすことができるためだ。

私は広場を通つて宿舎に向かう。途中でレ級と合流した。

「レレレレ……またかい？」

「そうなんだ。すまないね。」

「良いけどさ。『報酬』は弾んでくれよ？」

「いいよ。食後のプリンもう3日分で。」

「引き受けた！」

私は問題の箇所につくと、宿舎の屋根に乗ってしまつた電線をまず確認することにした。電線自体は夕級が既に送電を停止してくれているため問題なく触ることができ、レ級に屋根の上にも上げてもらつて現場を確認する。

「……んー？この切れ方……。何かに撃たれた……。？」

電線は妙な切れ方をしていた。普通、ショートして切れた場合は焼け焦げた跡が多く残っているもの。刃物などで切つた場合は焦げた後もなく切り口は正確に輪切りになっている。だがこの切り口は若干の焦げと何かでちぎられたような跡。これは弾丸などによつて切られたときによくこうなるものだ。

これは……敵の妨害工作の可能性がある。ということはずぐ近くに敵がいる可能性

が高い。私はそのことを下にいるみんなに伝えようと顔を上げたその時、目の前に弾丸が飛んできた。

ドシユツ

ドサツ：

く数分前く

く47sideく

まず私は電力設備に着目した。この施設はレーダーや館内電気などが普通に稼働状態にある。深海棲艦は人のような風貌をしているものも多いが、その多くは人の道具や設備は扱えないし、扱おうともしない。ハワイで見たあのトラックも、深海棲艦が使えるように各所の規格を大幅に広げるなど特別に改造が施されていた。その深海棲艦が電力設備を整備維持できるとは思えない。つまり設備の維持管理にはターゲットが少なからず絡んでいる可能性が高い。

別の人員が来た場合はスルーすればいいだけの話。私は試しに電線を切断してみることにした。この施設の電力網を観察し、超高圧変電所から高圧変電所へ向かう送電線が一つしか無いことに着目した。その電線に狙いを定め、一発だけ銃弾を放つ。

バシユン

今日は風もなく、弾は素直に飛び、電線の一つを的確に切断した。案の定、それだけで基地施設の大半の電気が消えた。すべてが消えたわけではないため進入は依然としてできないが、しばらくそのまま様子を見ることにした。

しばらくすると中央の広場に数人の深海棲艦に囲まれた人間が出てきた。

~~~~~

『アレが、パンチエッタ・シユリーズ。世界を脅かし、我々の計画をも脅かす才人。』

~~~~~

今は移動している上、周りに深海棲艦が多くいるため、狙撃するのは無謀と言える。本人が直接で向いてきたということはそもそもこの施設で電力設備を修理できるのはターゲット1人だけなのかもしれない。

ターゲットはこちらからは見えない位置から屋根に登り、切れた電線を確認し始めた。確認作業はしやがんで行われており、手前の建物の通気口部分が邪魔をしてよく狙えない。私は起き上がる一瞬を狙って銃を構えた。

彼は何かに気が付き、下にいる仲間にそれを知らせようと体を起こした。その瞬間私は引き金を引いた。

バシユン！

銃弾は寸分たがわず一瞬こちらを向いたターゲットの鼻っ面に命中した。ターゲットはそのまま後ろ方向に倒れ込んだ……。

……む、もしやまだ生きているのか？だが、顔の大半がえぐれてしまった影響で声が出せないようだ。倒れ込んだまま、こちらの位置を探るように這いつくばって移動し始めた。私はダクトの隙間に少しだけ見えるターゲットの身体に向かって更に弾を放った。

見えている箇所は胸部、腹部、臀部、脚部。その全てに一発ずつ弾を撃ち込んでいく。それらの攻撃から逃れようともがいていたようだったが、流石に12・7mmの対物ライフル弾を何発も食らったため次第に動きは鈍くなっていき、止めに見えた側頭部に一発打ち込んだところでターゲットは完全に動かなくなった。

~~~~~

『ターゲットダウン。よくやったわ。これで作戦が実行に移せる。あなたは撤退を開始して頂戴。こちらは今から作戦を開始するわ。』

~~~~~

すべて屋根の上で行われたため、最初のうちは気が付かれていなかったが、何発も打ち込んでいるうちに流出した血液が下まで届いたようで、下にいた深海棲艦が慌て始めた。私は騒ぎになる前にそそくさと銃を片付け、その場を後にした。

『はい。放射線による内部被曝は爆発による衝撃もなければ破片効果による傷も作りませんので。』

「まあこの範囲ならば・・・。」

『掃射完了。砲身冷却開始。』

『終わったようです。これであの地球上の深海棲艦の約7割が死滅したことになります。』

「素晴らしい効果ですわね。事後調査は欠かさないように。」

『わかっております。』

『・・・緊急事態発生。緊急事態発生。』

『・・・え?』

『砲身冷却失敗。砲身冷却失敗。第4第7ステータスに異常発生。このままでは暴走の危険性があります。』

「どういうことなの?」

『わかりません・・・。キヤロライン。』

「やはりまだ一部の技術が不完全だったのかもしれない。このままではメルトダウン

の可能性も！」

『やっぱり不完全な技術は使うものではないわね……。No. 3。よろしいですか？』

「仕方ないでしょう。自爆命令を。」

「了解！」

『戦略AIです。自爆命令を受信。自爆シーケンスを作動します……。』

『自爆処理、完了しました。』

「少し惜しいことしたかしらね。」

『致し方ないでしょう。それにこれ以外に使用目的もありませんでしたし。』

「とりあえず他の上級委員会メンバーには私から報告しておきましょう。経過観察を怠

らないように。」

『了解しました。』

~~~~~  
ミッションコンプリート~~~~~  
~~~~~

・「ブラックアウト」

【+1000】『基地内の電線を切断する。』

・「どこからともなく」

〔+3000〕『600m以上離れた距離からターゲットを暗殺する。』

・「侵入経路なし」

〔+2000〕『基地内に侵入せずに任務を達成する。』

・「滅多矢鱈」

〔+3000〕『ターゲットに3発以上弾を命中させる。』

HITMAN 2 『探偵の御膳立て』

『米花図書館へようこそ。47。』

『蔵書数35万冊の日本のごく一般的な図書館よ。内部構造もそれほど複雑ではなく、一般公開されている部分も多くて周りの目には十分注意が必要ね。』

『ターゲットの動向を探っているインフォーマントによると、ターゲットは今夜にでも警察へ証拠品となる写真を持って告発するようね。今日の勤務時間中にターゲットを暗殺できなければ任務は失敗よ。』

『幸運を祈っているわ。』

~~~~~

「こんにちは！」

「こんにちは。」

館内に入るやいなやすれ違った小学生たちから挨拶された。この地域の特徴として



犯罪発生率が高い割に治安がそれほど悪くないという点がある。普通毎日のように殺人事件が起きれば、生活への不安や警察機関への不満などが爆発してその他の犯罪の発生率も急激に上がるはずだが、ここではそれが全く見られず、全世界的に見ても特異な場所と言える。

今回の任務は公共の図書館にしてはやたら利用者が多いこの図書館内で如何に人目を避けつつ静かに暗殺するかが焦点だ。そのため無駄に後処理が面倒になる銃火器の類は持参していない。事故死か気絶させてからの絞殺が望ましいだろう。それに暗殺後の死体処理方法についての指定があるらしいので、それによっても場所や方法などが変わっていくだろう。

『館内に入ったわね47。聞こえるかしら?』

「聞こえている。」

『では死体の処理方法なのだけれど、この図書館の内部で事件が露呈しないようにしてほしいらしくてね。暗殺後は比較的長期間放置していても問題ない場所に安置してほしいそうよ。』

「比較的長期間放置……しかし遺体は防腐処理などを行わない限り比較的早期に腐敗してしまうぞ?。」

『そこは当てがあるようよ。1週間以内に息のかかった工業者が工事に訪れるらしく、その業者が廃材と一緒に処理する予定みたいね。』

「なるほど。では長くても1週間か。」

『ええそういうこと。任務を開始して頂戴。』

一週間遺体をそのまま放置するとなるとそれなりに安定した場所でないければ行けないだろう。陽の光や風が当たるところでは簡単に腐敗や劣化が進んでしまう。密閉された空間で室温変化がほぼない場所が良いのだが、そんな場所がこの図書館にあるだろうか？

私は一旦図書館内を巡回して回ることにした。1階は書庫や事務室、管理室や簡単な警備室があった。蔵書があるのは2階以降ということらしい。

事務室の受付窓口から中を覗き込んだ。中はちょうど誰もおらず、机に置いてあるコーヒーカープの中身がなく、奥の給湯室で何か物音がすることを考えると、おそらく一時的な離席だろう。私は周囲を確認し、こちらを見ている人間がないタイミングを見計らって事務所内に中腰で潜入した。事務所内は腰の高さほどあるカウンターやデスクが密集しており、デスクの上も物で溢れているため中腰ならば気が付かれることはないだろう。

そのまま事務所の真ん中にあるホワイトボードに到達し、内容を確認した。

#####

~~~~~

『ターゲットの今日の予定が書かれているわ。今日はこの後1時から3階の児童書コーナーの整理を行った後、12時頃にここに戻ってくるみたいね。彼のデスクがどこにあるかはボード隣の座席表を確認すれば良さそうよ。』

~~~~~

ボード横の座席表を確認する。ターゲットの座席はちやうど事務所の中央部の柱の影になる部分で、一般公開領域からもうまい具合に死角になっている。私はそこを指そうと動き出したが、直後に給湯室から女性職員がひとり戻ってきてしまった。

女性職員は隠れている私に気がつくこと無く、そのまま受付カウンター近くのデスクに座り、コーヒーを片手に何か作業をし始めた。私はその背後を他のデスクに隠れつつ、ターゲットのデスクを目指した。

ターゲットの机はよく整頓されており、他のデスクよりも幾分きれいになっている。もしかすると告発後戻ってこないつもりなのかもしれない。だがそんな彼でも腹は減るようで、デスクの下に置かれていたターゲットの鞆の中には小さな弁当箱が入っていた。

###アプローチ発見###

~~~~~

『ターゲットは妻に弁当を毎日持たされているみたいね。愛する妻の弁当ならば彼は喜んで何の躊躇いもなく口にするでしょう。何か仕込むならここかもしれないわね。』

~~~~~

私はあたりを見回し、何か使えそうなものがないか探した。その時先ほど職員が出てきた給湯室が目に入った。私はカウンターで書類を整理している職員に気が付かれないうように静かに給湯室へ入った。

給湯室には簡単なガスコンロと、茶葉やインスタントコーヒーなどが入れられた棚が

あった。基本的にそこまで物が入っているわけではなく、混ぜて効果の有りそうなものは見当たらない。私は音を立てないようにつくりと流し台下の戸棚を開ける。するとそこには流しを洗うためと思われる塩素系洗剤が置かれていた。これは使えそうだな。私は洗剤を持ってまた静かにターゲットのデスクへ戻った。

デスク下に置かれている鞆から弁当を取り出し、まず見た目を観察する。基本的な風呂敷包みで、目立った特色等は出していないので包み直したとしても気づかれる心配はないだろう。慎重に包みを開け、蓋を開ける。中にはご飯や煮物系のおかずなど基本的な弁当の品々が並んでいた。私はそのうち煮物に少量洗剤をたらす。泡立たない程度に軽く混ぜ、蓋を締めて再び包み直した。鞆にしまい直し、入ってきた出入口から周囲に気を配りながら一般開放エリアに戻った。

### キーコーンカーンコーン

しばらくして館内に控えめのチャイムが響き渡った。時計を確認するとどうやら12時の鐘らしい。それから少ししてからエレベーターから数人おりてきた。その中にはブリーフィングで確認した顔も混じっていた。

~~~~~

『アレが玉田和男。図書館の秘密を知ってしまったがために消される可愛そうな男。』

~~~~~

ターゲットを含めた数人の職員はそのまま事務室に入っていた。遠目から見限り自分のデスクで昼食をとったり、外へ食べに出かけたりするようだ。ターゲットは自分の机に座り、机の下にあったかばんから弁当を取り出して包みを開けて食べ始めた。

しばらくすると明らかに具合の悪そうな顔を始めたのが遠目からでもわかった。ターゲットは弁当を机の上に広げたままおもむろに席を立ち口を抑えつつ事務所から出てきた。私は不自然にならないように静かに後をつけた。

ターゲットはそのまま近くのトイレへ入っていた。私もさり気なくトイレの中へ入っていく。一番奥の個室の中で扉を開けたまま便器の中に嘔吐しているターゲットがいた。トイレの中には既に一人男がいたが、ターゲットが嘔吐し始めるのを見て気分を悪くしたのかそそくさと出ていってしまった。

私はターゲットの背後に静かに近づき、嘔吐し終わって一息ついたタイミングを見計らって首にワイヤーロープをかけた。

「うぐう?!」

「・・・。」

「ぐぐぐ・・・貴様・・・まさか館長の・・・。」

「・・・。」

「・・・くつそ・・・。」

最後の言葉としてはいささかお粗末だったが、そのままターゲットは背中で動かなくなつた。

~~~~~

『ターゲットの死亡を確認。まずは始末に成功したわね。でもそこではすぐに発見されてしまうわ。どこか別の場所に移動して頂戴。』

~~~~~

そうだった。今回の任務はこの遺体を安定している場所に安置して置かなければならないのだった。失念していたわけではないが、どうとでもなるだろうという考えがあつたのかもしれない。

とりあえず一旦トイレの個室の中に放置し、内側から鍵をかけてドアの上の隙間から外へ出た。遺体の隠し場所もさることながらそれを移動させる手段も必要だ。流石に大の大人一人を肩に担いで館内をうろつくわけにはいかない。

トイレから出ると、広間向かいの別のトイレから清掃員の男性が出てきた。そばには清掃用具を入れる大きめのカゴ台車があつた。あれはつかえそうだ。私は清掃員に駆け寄つた。

「すみません。あのトイレの一番奥の個室がものすごく臭い。手早くでいいから清掃してくれないか。」

「ええ？おつかしいなあ・・・あそこはさつき掃除したばかりなんだけどな・・・」  
「だが現に臭い。もしかしたら誰かが嘔吐してそのままなのかもしれない。ともかく来てくれ。」

「あいよ。やれやれ・・・。」



清掃員の男性は若干面倒そうにしながらも台車を動かしてトイレへ向かった。トイレの入口に清掃中の看板を置き、中にはいつていつた。私もさり気なくそれに続いていく。

「うん？何も変なおいなんかしねえぞ？おいにいでy」

ガツ

「うぐっ!？」

ドサツ

トイレに入るやいなや、清掃員の男性の後頭部を台車の中に入っていたモップで殴りつけ気絶させた。気絶した男性をターゲットの死体のある個室に上から放り入れる。足からゆっくりと入れたため流石にどこかにぶつけて死んだりはないはずだ。私も個室に入り、清掃員の服を借りる。

ターゲットの遺体をドアの上から外へ出し、外に止めているカゴ台車の中に入れてその中に遺体を隠した。カゴ台車の中には「故障中」の札があったので、それをロックした個室のドアノブにかけておく。看板を回収し、私は遺体とともに館内に安置できる場所がないか探すことにした。

作戦は成功し、清掃員の格好をしているため、館内をうろついても誰も気にもとめていない。そのまま2階3階と順に適当に清掃をしながら回ったがどこも人目がありとても遺体を隠せそうな場所はなかった。だが最上階である4階にはちようど良さそうな場所を見つけることができた。

エレベーターのすぐとなりエレベーターの機械室があった。鍵がかかっているが、ロックピックならばこじ開けられるだろう。幸いにしてこの4階は輸入本や小難しい専門書の類ばかりおいてあるらしく、他の階に比べて人が少なかった。その数少ない人達も皆勉強や読書に夢中で誰も周りを見ていなかった。

私はカゴ台車をドアの前につけ、ドアの扉をロックピックで開けた。ドアを静かに開け、カゴ台車ごと機械室へ入った。

機械室はエレベーターの制御機械や空調管理などの機械が所狭しと並べられている。発見した当初はこの中に放置すれば良いと考えていたが、壁に貼ってあった点検予定表を見る限り、1週間に3回は何かしら定期点検の予定が入っているようだった。一番近くでは明日の午前中にも水道関連の機械の定期点検があるようだ。流石に出入りのある場所に遺体を置いておくことはできないだろう。

ゴウン・・・

どうしたものかと思案していると、隣で滑車が回り始めた。エレベーターが動き出したのだ。エレベーターシャフトの中には機械室の更の上に登る必要があるようで、シャフト内部は全く見えない。ここは使えるな。

私はエレベーターが登ってくるのを待った。数分後登ってきたエレベーターの上に登り、カゴ台車から出した遺体をその上に乗せようとした。しかし遺体の死後硬直が始まっており、うまく載せることができないままエレベーターは下に降りていつてしまった。放り投げることもできなくはないが、落下の衝撃でエレベーターが揺れることは明白であり、乗っている人間に気が付かれる可能性が高い。エレベーターが来た瞬間に素早くかつ静かに下ろす必要がある。

どうしたものかと周囲を見渡すと、部屋の端にロープがまとめられていた。私はロープを使ってエレベーターの上に遺体を下ろすことを考えた。ロープはおろした後すぐに回収できるように簡単に解けるようにするため、固定するのは首だけにした。それをエレベーターが来る前に天井から吊り下げ、見た目的には首吊り自殺のような形になった。

ゴウン：

エレベーターが動き出した。どうやら最上階へ向かっているようだ。エレベーターが止まるのと同時におろし終えるくらいを想定して遺体の高さをロープで微調整していく。エレベーターが到着し、遺体のつま先がエレベーターについた。そのまま足、腰、肩、頭と順におろしていこうとしたその時だった。

ブチツ

ドサツ！

「！」

後少しでおろし終えるというところでロープが途中から切れてしまった。そのまま遺体はエレベーターの上に落ちた。少しだけ衝撃があっただろうが、エレベーターが止まる瞬間だったため、おそらくバレてはいない・・・と思いたい。

なにはともあれエレベーターの上に遺体を下ろすことができた。そこならばエレベーターの点検が来るまで発覚することはないだろう。先程の表によれば、次のエレベーターの点検予定は3週間後。依頼内容の1週間程度は十分隠せるはずだ。ロープ

の一部が遺体に残ってしまったが、元々絞殺である上にどのみち遺体を回収するのは警察ではなく業者なのだから問題はないだろう。

~~~~~

『遺体をうまく隠せたようね。これで任務は完了よ。脱出して頂戴。』

~~~~~

私は機械室を慎重に出て、また清掃員として1階に戻った。トイレの前に清掃中の看板を立て、個室の中で伸びている清掃員に服を着せたあと、いつものスーツに着替え、内鍵を開けて外に出た。

清掃中の札はそのままに、私はそのまま図書館を後にした。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

『そういえば47。前回の図書館での任務。依頼人は館長だったわけだけれど、その後殺害したことが発覚してしまったそうよ。』

「ほう?」

『何でもあのちっちゃい高校生探偵率いる少年探偵団が事件を解決したんですって。』

「こちらに依頼したことを喋られるとまずいのでは?」

『ええ。だから拘置所内で出された食事の中に青酸カリを混ぜさせてもらったわ。』

「・・・彼も踏んだり蹴ったりだな。」

『隠蔽に失敗することは想定済み。そのために最寄りの米花署にインフォーマントを忍ばせているのだから。ともかくこちらのこととはあちらの警察には露呈していいわ。ついでに情報もいくつかもみ消したからね。』

「しかし工藤新一は気がつくのではないか?」

『その可能性はないとは言いきれないのよね。』

「露呈した場合は・・・。」

『IC Aの情報は外部に漏らしてはいけない。それはその世界の主要人物でも同じことよ。おそらく一時的に誘拐して記憶処理を施すことになるでしょうね。』

「彼も大変だな。まあどのみち彼は一度誘拐して記憶処理をし直したほうが良いと思う

【+3000】『エレベーターの上に遺体を乗せる。』

ドオオオオン

ダダダダダダ

基地についたのは良いけれど、そう遠くない場所で爆発音やら銃撃音やらがひっきりなしに響いている。相当切羽詰まっているわね。空にはたまにミサイルかロケット弾かの煙が伸びている。空爆云々よりもまず今すぐにも銃撃されそうね。

念の為狙撃銃を持つては来たけれど、今回は誰かを暗殺に来たわけじゃないから、タバサが襲われているところを助けるくらいにしか使わないでしょう。もつとも、この分だと助けるどころか見つける前に護衛対象が粉微塵になっけていても全然おかしくないわ。

私は基地の北西部、つまり防衛線が崩壊している箇所のうちようど反対側にあたるゲートから基地内に侵入した。こちらのゲートは高いフェンスと有刺鉄線、それと監視塔で防御されていたけれど、監視塔の上に立っている兵士はサーチライトを周囲に向けて照射していたため、狙いを定めて眉間を撃ち抜くのはそこまで難しい話じゃなかった。

ゲートを越え、基地内を進んでいく。司令部施設はこのまま道をまっすぐいったところにあるけれど、まっすぐは行くことはできない。なぜなら、道中中程で道を境として

銃撃戦が繰り広げられているためだ。ここは迂回をしなければならぬのだけれど、目的の關係で必ずどちらかの陣營の後ろを通ることになる。よく見極めてから進まなければ、通過中に敵が迫ってきたら最悪こちらまで身動きが取れなくなる。しかしここからではどちらの勢力も即席塹壕や建造物に身を隠しながら銃撃をしており、旗を掲げているわけでもないためどちらがどちらの勢力か見分けがつかない。さてどうしましようね……。

私はとりあえず手近な建物に入り、2階部分から様子をうかがうことにした。入った建物は既に死体だらけであり、制圧済みの建物のようなだった。建物自体は4階建てで、上の階からは時折銃声が聞こえる。おそらくこの建物から狙撃をしているのだろう。それがわかったとき、2階に向かっていた私はそのまま4階へ上がることにした。上で狙撃をしている勢力がわかれば自ずとどちらがなんの勢力かわかるということだ。

慎重に上階へ上がると、部屋の前に全身黒い戦闘服に身を包んだいかにもタリバーン系とみられる男が立っていた。おそらく部屋を守っているのだろう。私は下の階からジャンプで彼の前の手すりの下に懸垂でぶら下がった。すかさず、近くで拾った瓦礫の石を男の横に投げる。

カランカラン

「！」チャキツ

「・・・何もなしk」

ドガツ

「ういっ！」

横に気を取られた瞬間、手に力を込めて一気に手すりの上へ躍り出る。そのまま回し蹴りを男の側頭部にお見舞いした。男は一瞬こちらに向きかかったが、こちらを認識する前に意識を失った。倒れる音や銃を落とす音は銃撃音や爆音にかき消されたようだ。

男は、明らかに米軍兵とは思えない格好と装備をしている。ということはおそらく反政府軍側だろう。司令部施設はまだ陥落していないようなので、尋問してもタバサの情報が手に入る可能性は低い。が、一応中にいる狙撃兵にも話を聞いておくでしょう。私は静かに扉を開け、中を覗き込んだ。

中では窓の端で狙撃銃を構えている同じく黒装束の男がいた。その隣の窓にはスポッターと思われる双眼鏡を覗いている男もいた。私はこちらから近いスポッターの方に忍び寄ると、手近なところにあつた瓦礫のレンガを手に取り、後頭部を殴りつけた。狙撃手はすぐに異変に気がついてこちらを向いたが、ライフルをこちらに向けるよりも私が狙撃手の額にクルガーマイヤーを突きつけるほうが早かった。

「な、何だ貴様！」

「ちよつと聞きたいことがあつてね。」

「貴様、アメリカ人か！」

「違うと言つても信じないでしょう。」

「くそつ！やるならやれ！」

「言つたでしよ。聞きたいことがあるつて。」

「俺は何も喋らんぞ！」

「はあ・・・まあとりあえず聞くだけ聞いわ。司令部施設は落とせたかしら？」

「知らん！何も喋らんぞ！」

「そうかしら？」

バアン

「ぐつ！」

「まずは右腕ね。喋ってくれたらこれ以上は勘弁してあげるけれど。」

「俺は何も喋らん！さつさと殺せ！」

バアン

「ぐうう！」

「右足。次はどこが撃たれるかしらね。」

その後も少しばかり時間をかけて尋問したがさすがはタリバーン系の戦闘員。全く吐く気配がない。これは聞き出せる可能性は薄いわね。

「はあ……はあ……」

「……わかったわ。ありがとう。何の参考にもならなかったわ。」

「ふっ……」

「じゃあね。」

「!?おい!殺さないのか?怖気づいたか!」

「生憎と、無益な殺生は好まない主義なのよ。」

私は両手両腕両足を撃たれた兵士を放置して先を急ぐことにした。終始ギャーギャー騒いでいたけれど、あれだけ元氣なら生き残れるでしょう。無線機も壊したんだからあんまり騒ぐと声が枯れて助け呼べないわよ?

建物の表側は少し先の戦場の方向が変わったのか、流れ弾がかなりの頻度で飛んでいる。とてもじゃないが表には出られない。裏口を探し、周囲に誰もいないことを確

ん。しかも攻撃時を除いて常に完全透明化できるのです!』

と豪語していた。しかし大きな自体はグラーフ・ツエツペリンなどの大型硬式飛行船と大差ないのでどこかでボロが出るんじゃないかしら……。しかも、攻撃時を除いて“と言っていた。それは攻撃する時は姿が見えてしまうということ。光学迷彩の意味がないじゃない……。

キャロラインの言う通り、私が再び移動し始めてからすぐに転移してきたようだ。基地のほぼ直上に転移してきたらしく、支援攻撃は基地全域に可能という通信もあった。太陽に完全にかぶっていてもほとんど違和感はなく、光学迷彩が十分に機能している。しかし地面によく目を凝らしてみると、ものすごく薄くではあるが若干影ができていく。このレベルならば肉眼ではほぼ観測できないだろうし、光量を観測機器で観測したりしない限りバレる心配はないだろう。

私は移動を続け、先程から繰り広げられている戦闘の端までやってくることができた。しかし、ここから先は塹壕と廃墟の建物しか無く、それらの内部には今まさに銃撃戦の真っ最中な兵士が大量にいる。流星にこの量は対応できそうにない。早速支援に頼ることになりそうね。

「キャロライン。」

『はい。』

「せっかく支援に来てくれたのだから一つ頼もうかしら。」

『了解です。先程も言いましたが砲撃支援の場合、発砲の瞬間砲口から半径数メートルの光学迷彩が解除されます。また、発砲炎も普通に見えてしまいます。くれぐれも乱用はしないでください。連続発射するとバレてしまいますので。』

「わかっているわよ。とりあえず私の目の前でさつきからドンパチやつてる連中をまとめてどうにかできないかしら？」

『うーん、範囲が広すぎるので複数回砲撃することになっちゃいます……。』

「何も全員吹きとばせて言ってるんじゃないわ。私が司令部施設に行く間、目をくらませればいいのよ。」

『んー……。じゃあ発煙弾を発射しましょうか？現地はそれなりに風がありますから、多分……。うん、一発発射するだけでその目の前の戦場は全体が煙に包まれると思います。』
「じゃあそれでお願いしましょうか。」

『ですがキュラソーさん。対煙幕用スコープは持つてるんですか？』

「それはないけれど、まあなんとかするわ。」

『わかりました。では砲撃を行います。』

「よろしくね。」

まもなく戦場の砲撃音に混じって上空から砲撃音が響いた。砲弾の飛翔音はそのまま廃墟の建物のだいぶ後方に着弾した。エンデットウィッチがどんな砲を装備しているのかは知らないが、かなり大型の砲弾だったらしく、風に乗った煙幕はまたたく間に戦場を包み込んだ。兵士たちは慌てており、全周警戒を促す叫び声が至るところから響き渡っている。

私は叫び声、兵士の足音、銃火器の音、話し声。それらに耳をそばだてる。そしてそれらが全く聞こえない地点を素早く駆け足で通り抜ける。地面は砂地で多少足音がするが、この程度なら私の脚力なら……。

「うおっ！」

「!!」

バァン!

ゴツ!

「うごっ!」

危なかった。煙のさなかをひた走っていると突如として目の前に棒立ち状態の兵士がいた。兵士はとつさに拳銃でこちらに発砲してきたが、こちらも素早く避けると手刀を首筋に食らわせて気絶させた。私はそのままひとまず隠れられそうな場所を探してまっすぐ突き進んだ。

煙幕は10分ほどで晴れた。その間に私はなんとか戦場の端から端へ移動することができた。煙幕が晴れたあと程なくして銃撃戦は再開された。まるで何事もなかったかのように。私かというと、戦場を抜けて司令部施設の壁の近くで身を潜めていた。いつの間にか司令部施設にたどり着いていたようだ。

とりあえず、この建物の中にタバサが居る可能性が高いわけね。私は割れていた窓から内部に侵入した。

「ふっ!」

ドガツ

「むっ!?!」

突如として横から回し蹴りが飛んできた。角度は完全に首筋を狙っており、一撃で気絶させるための蹴りだ。建物内は薄暗く、蹴りを放ってきた人間がとつさに誰だかわか

らなかつたため、クルガーマイヤーをすかさず抜き、相手の方向に向かって引き金を引こうとしたその寸前、相手の顔が見えた。

「おっと！」 シュ

バアン！

「！」

「タバサ。私よ。」

「あ……。」

弾はタバサの顔のすぐ横を通過した。気がつくのが後0.2秒遅れていたら眉間に風穴が空いていたわね。救出対象を撃ち殺しちゃったらシャレにならないわ。

「助けに……いや、殺しに？」

「違うわよ。今のは不可抗力。だいたい先にしかけてきたのはそっちじゃないの。」

「そう……申し訳ない。」

「いいわよ。それより大丈夫だったの？」

「(コクン) 通信機は反政府軍の攻撃で壊れてしまった。」 スッ

「あー・・・なるほどね。これ何よ。弾痕が3つも付いてるじゃない。」

「激しかった。」

「良く無事だったわね・・・。」

「そうでもない。その時は私も2発食らった。」

「ふーん・・・でも大丈夫そうね？」

「治癒魔法は不得意。でもできないわけじゃない。」

「なるほどね。」

~~~~~  
~~~~~

『タバサさんを発見できたんですね！よかったあ・・・。バルーンをエンデットウィッチから投下します。地上は・・・危険すぎて帰還ポイントを設定することができませんので・・・。』

~~~~~  
~~~~~

「じゃあさっさとこんなところおさらばしましょ。」

「でも建物の周囲は反政府軍に囲まれてる。」
「え？」

私は入ってきた窓から外を確認した。確かに隣の建物や道路の向こう側など、至るところから視線と気配を感じる。私がさつきは入れたのはまだ煙幕が少し残っていたためね。こいつらをどうにかしないことには帰るどころか五体満足で外に出ることもできなさそうね。

「じゃあちやっちゃと片付けちゃいませよ。」

「何人が正確な位置がわからない。狙撃される危険が高い。」

「そこは本部に助けてもらいましょ。聞いてるんでしょ？お願いね？」

『はい。砲撃準備は完了しています。』

「敵の正確な位置はわからないかしら？」

『大半は把握できますが、生体反応がかぶっている場所がありそうです。』

「とりあえず、一番敵が少ない方向は？」

『南西ですね。』

「わかったわ。行くわよ。タバサ。」

「(コクン)」

私達は南西側の窓の近くまで移動した。司令部施設内は既にタバサが制圧して暗殺対象の司令官以外全員眠っているという。気軽に睡眠ガスが使えるのって便利ねえ……。

窓の外の気配を探ると、少し離れた建物の2階に2人。その建物の屋上にも2人。街路樹の木陰に1人、その隣の木にも1人。パット見ただけでも4人居るわね。

「キャロライン、この方向、4人見えるけれどそれで全てかしら？」

「違う。かなり奥の建物の3階に2人。スナイパー。」

「あら？そちらは認識できてなかったわ。」

『あと手前の建物の裏に5人待機していますね。一番奥の建物ののは2人ではなく3人です。』

「一番密集しているのは2階と屋上と裏手に隠れている建物になるのかしら？」

『そうなりますね。』

「じゃあその建物ごと吹き飛ばして頂戴。」

『了解しました。砲撃を開始します。』

「タバサ、着弾と同時に街路樹の2人、お願い。」

「わかった。」

「私は奥のスナイパーをやるわ。処理が終わったら一気に出るわよ。」

『では行きます！』

ドオン…

ヒュルルルルルル

ドゴオオオオン！

「今！」

〃ジャベリン〃

バアン！バアン！

「命中！行くわよ！」

「了解。」

「一人はまだ隠れたままだから注意！」

大型砲弾は敵のいる建物を直上から貫き、1階部分で炸裂。2階を粉微塵にした後、3階より上を上空へ巻き上げ、かなり大きな爆炎が上がった。私はすかさず窓から一番

奥の建物に居るスナイパーにめがけ J a g u a r 7 を放つ。久々に使ったけれど相変わらずとんでもなく精度良いわねこの銃。タバサも同時に空中に出現させ待機させておいた中くらいの氷の刃を放ち、街路樹ごと隠れている兵士を貫いた。

土煙と爆炎はタバサが予めかけておいてくれた魔法のおかげで防げている。私達は素早く建物を出て、爆炎の近くを素早く通り抜け、基地の南西方面の倉庫群へと駆け込んだ。駆け込んでからもまだ着弾地点は黒煙が上がっており、それが主戦場からうまいこと隠れ蓑になっているようだった。

『ああ!!』

「どうしたの?」

「?」

『ば、バルーンをその倉庫街に投下します!』

「ちよ、ちよつと。ここはまだ敵が近くに居て危険じゃないの?」

『そうも言つてられません! 黒煙がエンデットウィッチの周辺だけ不自然に屈折してまっています! バレしてしまうのも時間の問題なんです!』

「でも光と同様、煙も屈折している。」

「いやまあ・・・変な方向に曲がってたら意味無いけれどもね。」

やっぱりタバサはたまに真顔でジョークを言うわね……。もうだいぶ付き合ってるけれど未だにその唐突さとシニールさには慣れないわ……。

ともかく。確かに着弾点から上がっている黒煙はしばらく上空へ漂った後、あからさまに不自然に途中からある空間を避けて煙が上がっている。これじゃそこに何かありますって丸わかりね。観察していると突如として上空から30センチ四方の包が落ちてきた。おそらくこれが帰還用のバルーンとやらだろう。中には光学迷彩用の機械と簡易ヘリウムボンベ、そしてロープとバルーンが入っていた。

私達は素早くロープを体にくくりつけると、バルーンに接続。バルーン内部にヘリウムガスを充填し、光学迷彩のスイッチを入れた後地上固定用のロープを切った。結構勢いよく私達二人を上空に浮かび上がらせたかと思いきや急に視界が暗くなり、気がついたときには飛行船の格納庫に降り立っていた。

帰還できる安堵感とともにあたりを見回していると通信が入った。

『おかえりなさい。2人共。』

「おや？バーンウツド女史。いたのね？」

『キャロラインがだいぶ混乱していたようだから応援に駆けつけたのだけど、その分

だと必要なかったみたいね。』

「ええ。おかげさまで私達は五体満足。無事よ。」

『よかったわ。じゃあ帰還して頂戴。』

通信の後、地上から対空砲火が始まったようだったが、その弾丸が致命的な損傷を与えるよりも先にエンデットウィッチは渡界機を起動させその場から消え去った。

～～～同時刻～～～

～～～

「バーンウッド。」

『あら？47。通信回復したのね。状況は？』

「問題ない。任務完了。現在海上をゴムボートで離脱中だ。」

『さすがね。』

「タバサとキュラソーは無事か？」

『ええ。心配する必要はないって言ったでしょう？』

「ふむ。彼女たちもだいぶ成長したということか。」

『そういうことよ。じゃああなたも早く返ってきて頂戴。』
「わかった。」

《戦略AIです。ワールド323103。スキヤニング完了しました。》

「お、やっと終わった終わった……どれどれ……」

「うーん……。生命体は皆無。3つか4つの年代に分かれて文明が築かれていたみたいだけれど……」

《探査ドローンを派遣しますか?》

「……いいえ。派遣はしない。人間どころか草木一本生きてない世界に依頼者が居るとは思えないしね。」

《了解しました。》

「あーあ。これで5回連続成果なしかあ……」

ガチャ

『キャロライン?』

「バーンウツドさん。珍しいですね調査室まで来るのは。キュラソーさんたちはもう帰

「還中のはずですけど。」

『ええわかっているわ。47も帰ってくるし、ブルーとシルバーも帰還中。久々に全員で食事でもと思ったのだけれど。あなたも来るかしら？』

「わあ！いいですね！行きます行きます！」

『じゃあとりあえずシャワー浴びてきなさい。』

「はい！何着てこつかなー・・・」トコトコ

プシュー・・・ガシャン

ピピピ

《戦略AIです。高度命令により探査ドローンを派遣します。命令者、リアン・カーキン

ス。》

《・・・》

HITMAN 2 『窃盗犯は誰?』

『ミールヌイへようこそ。 47。』

『ミールヌイはダイヤモンド鉱山によつて栄えた鉱山都市。この鉱山はロシアのダイヤモンド産出量の9割以上を算出している。最盛期よりは採掘量が落ちたとは言え、今でも毎年2トンものダイヤモンドを算出しているわ。』

『無論、誰もが羨む宝石を目当てに全ロシアのみならず、全世界から一攫千金を夢見た男たちが集つた結果、ミールヌイの街が出来上がったわけ。』

『ターゲットもその中のひとりよ。でも現実是非常に厳しかったみたいだけれど。そろそろその宝石に眩んだ目を覚まさせてあげましょう。』

『幸運を祈っているわ。』

~~~~~

???  
side

『転送装置、起動します。』

《探索率99%。生命反応なし。植物なし。海水温度計測不能。酸素濃度18.41%。日光量24時間平均167。》

『エラー。探査不能地域あり。』

《探査ドローン派遣。》

『派遣開始。』

《・・・》

《建設ドローン派遣開始。》

『エラー。装備が不足しています。』

《・・・》

『・・・』

《転送開始。》

『転送開始。』



〈 4 7 s i d e 〉

ゴゴゴゴゴ

ガラガラガラ

ミールヌイの街にある階段式露天掘り鉱山のミール鉱山は、街のすぐ横に鉱山がある。というより鉱山があった場所に街ができたというべきだろう。露天掘り部分は10年以上前に採掘が終了しており、今は地下坑道式に切り替わっているらしい。

鉱山は現在稼働中であり、まずはどうかして鉱山内部に潜り込まなければならぬだろう。私はひとまず市街地の中へ入った。

市街地はシベリアに位置する都市ともあつて建造物は全て断熱が行き届いており、元々集落があつたところにできた町というわけではなく、鉱山があつた場所に街を作つたという歴史もあつて、町並みは旧ソ連らしい計画都市という印象だ。

町中に一つのレストランを発見した。流石にテラス席などはなく、窓も少ない作りになっている。しかし別に今腹は減つてはいない。注目すべきはそのレストランの駐車場に止まっている車両だ。一般車ばかりではあるが、その中に白のワゴン車があつた。かなり使い古されているのが外見で目に留まるが、後部座席を見ると物で溢れているの

が見えた。しかもその乗せているものは作業着、バケツ、何も書かれていない袋や手袋やロープなど、おおよそ建設現場か土木現場で使いそうなものばかりだ。

この街に入る際にぎつと見渡した限り建設工事を行っている様子はなく、このような車両がこの周辺で行くところと言えば鉾山しか無いだろう。つまりこの車に潜り込むか後をつければ少なくとも鉾山の事務所的な場所にはたどり着ける可能性が高い。

私は車の持ち主が戻る前に車をもつとよく観察することにした。後部トランクは初見の通り物で溢れていたが、窓の下の部分に少しスペースが有り、一人くらいなら隠れて乗ることができそうだ。幸いにしてこの車はだいぶ古い型の車で、通常の錠前以外スマートキーなどはおろかその他防犯装備すら殆どついていないようだった。おかげでトランクの鍵をピッキングで開けるだけで簡単に内部に侵入できた。私はそのままトランクの荷物の影に隠れた。

しばらくそのまま待っていると、人が近づいてくる気配がした。そのまま車の横まで来ると、鍵を使ってドアを開けた。持ち主が戻ってきたようだ。助手席側も開き、もうひとり乗ってきた。

「で、このあとは？」

「直帰すよ。まだいくつか壊れたままの箇所があるつてんで。」

「つたく。政府も保証しろってんだよな。壊したのはお前らだつてのによ。」

「正確には超国家主義派っすけどね。」

### 情報を入手 ###

~~~~~

『情報部の調べでも超国家主義派の名前は入ってきているわ。どうやら数ヶ月前にその鉦山で盛大に戦闘を繰り広げたみたいね。ロシアのボリス大統領を巡った戦いだつたらしいわ。』

~~~~~

大規模な戦闘があつたのは街の雰囲気を見ても薄々感じていた。鉦山が近づくと連れ増えてくる弾痕の残つた建物や、道端に打ち捨てられている軽装甲車両など、明らかに最近戦闘があつたことを暗示させる。しかし鉦山自体はダイヤモンド鉦山ともあつて戦闘終結後速やかに掘削が再開されたようだ。

二人はシートベルトもなしにそのまま車を走らせはじめた。車は市街地を抜けると舗装路を外れて畦道へと入っていった。しばらくして一つのプレハブ小屋の前に停車すると、2人は降りて小屋の中へ入っていった。

私は周囲に人がいないことを確認すると、トランクを開けて小屋のそばに置かれていた資材に隠れた。どうやら無事に鉱山の事務所前まで来ることができたようだ。あとはターゲットがどこに居るかを探らねばならないが……。

私は手始めにプレハブ小屋の窓から中を覗いた。中には先程の男二人が机の上に何かを広げて話し合っているのが見える。距離は少々離れてはいるが、幸い窓の鍵はかかっていなかったため窓を少しだけ開けることで中の会話を聞き取ることができた。

ピリリリリ

ピッ

「おう、俺だ。……何い？また無くなっただあ？オイオイ、これで今月3件目だけ？流石に本社の人間そろそろ血管キレて病院送りになるぜ？……ああ、わかったわかった。監督には俺から伝えとくよ。お前らは仕事にもどれ。ああ。」

ピッ

「何だまた盗まれたのか？」

「ああ。今度は6番のボーリングマシンだ。つたく、これで今期は深層用ドリル3つ排水ポンプ2つボーリングマシン4つだ。」

「おと、パワーシヨベル2台が抜けてるぜ。」

「わかってるさ。でもなあ、この間本社に追加の重機よこすように催促したらあっちの担当ブチギレてたぞ? またブチ切られる羽目になるのかよ。」

「仕方ねえだろ。無いもんはないんだ。それにブチ切られる回数で言ったら監督のほうが数倍は多いはずだぜ。」

「あ、そうそう。その監督なんだけだよ。どうやら本社の連中、監督がちよろまかしてると思ってるらしいぜ?」

「マジかよ。あいつら重機をキャンデーかなんかと勘違いしてんじやねえのか?」

「監督はここに数週間事務所にいるか坑道かだ。盗み出す暇なんてありはしねえつてのによ。」

#####

~~~~~

『やはり窃盗犯は現場監督であるターゲットではなさそうね。だとしたら誰が一体何のために重機なんて盗んだのかしらね? まあそれはともかく、犯人でなかうともターゲットの暗殺することは決定事項よ。現場監督を探して頂戴。』

~~~~~

この小屋の中にはあの二人しかおらず、発言の内容から考えてもターゲットは坑道内にいるのだろう。小屋から少し離れたところに昇降機があり、おそらくそれで坑道内に入るのだと推測できるが、問題は動き出すときに大きな音が出るため気が付かれずに動かすことはほぼ不可能。ほぼむき出しの昇降機のため乗ったら隠れる場所がないこと。さてどうやって坑道に入るかが問題だ。

「まあ何にせよ、まだ必要最低限の重機は残ってるからな。急がねえと今月のノルマ達成できねえぞ。」

「だな。これで表層用ドリルマシンや昇降機まで盗まれたら仕事自体できねえからな。」  
「だから監督も、昇降機に何か異変があったらすぐに駆けつけるからすぐに知らせろ！」  
“ って全員に言明してるんだらうぜ。”

#####

「まあ昇降機がねえと非常階段しかねえからな。監督もこれ以上面倒事が増えるのはゴメンなんだろうぜ。」

「流石に地下120mまで毎日上り下りするのは嫌だらうしな。」

「そりゃみんなそうだらうよ。」

~~~~~

~~~~~

『昇降機に異常が発生すると、その異常を直接点検しに現場監督であるターゲットが出向いてくるみたいね。うまくすれば隠れる場所の少ない坑道内に入る必要がなくなるんじゃないかしら?』

~~~~~

~~~~~

「ん・・・げ!もうこんな時間じゃねえか!」

「やべ!これ以上監督怒らせるわけにはいかねえぞ!」

「さっさと準備しろ!早く!」

「お前こそ!」

中の二人は大慌てで周りの鞆やら道具やらをひつつかんで昇降機の方へ走っていった。

ガーガシヤン!

ゴウン:

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

昇降機に飛び乗ると横についているスイッチを押した。昇降機は金網の扉が閉まる

のと同時にゆっくりと降下していった。案の定とても大きな音が響いており、ご丁寧に稼働中を示す回転灯まで点いている。坑道内ではただでさえ音が反響しやすいことが予想されるため、この音も坑道中に響き渡っていることが予想される。

やはり昇降機自体に細工を施して異常を発生させ点検しに来たところを仕留めるのが良いだろう。私は周囲を確認しつつ昇降機に近づいた。

昇降機は屋根に当たる部分が重機も乗せられるように少し高くなっている以外是一般のビルなどに付いているものときほど構造的に変わりはないようだった。頂部の鉄骨の上に制御装置と思われる箱があり、側面には滑車から垂れる太さ5センチはあろうかという極太の鋼鉄ワイヤーが何本も通っている。おそらくワイヤーの先に大きな重りがあるのだろう。流石にこのワイヤーはシルバーボーラーでは威力不足。切断するには溶断器か高性能爆薬が必要だろう。となると、細工を施すのはやはり上の制御機構だろう。

私は昇降機の横のはしごを登った。箱の周囲には金網の足場があるとは言え、土木作業現場の昇降機ともあつて足場以外には手すりすら無いため、足を踏み外せば昇降路内に真つ逆さまだろう。私は時折周囲を確認しつつ箱の扉をピッキングでこじ開ける。中にはやはり制御盤があり、何の機能かはわからないがいくつものコードが所狭しと配線されている。



ゴツウウン・・・

ゴオン：

昇降機のワイヤーが止まった。おそらく一番下まで着いたのだろう。余計な被害を減らすためにも動いている最中に細工するのは得策ではない。弄るなら今だろう。

私はコードのいくつかを適当に驚掴みにすると一気に引きちぎった。少し火花が散ったあと、明らかに今までついていたランプなどが消え、以上を示す赤いランプがいくつか点滅している。私はそのままコードを箱の中に放置して扉を閉めた。

おそらくターゲットが非常階段を登ってこちらに来ると思われるのでその間にどうやって暗殺するかを考えることにする。流石に一人で確認しに来るといことはないとと思われるので、背後から昇降路に突き落とすのはかなり難しい。銃で狙撃するのが一番手っ取り早いがそれでは同行者に簡単に露見してしまう。私は周囲に何かないか探した。

丁度、昇降機の直ぐ側にある資材置き場の中に、制御盤の中に入っていたコードとは種類が違う別のコードの束を見つけた。だが見た目はビニル製皮膜のコードで、色と太さが違うだけなので混ざっていればそこまで気にもされないだろう。私は急いでコー

ドを取ると、端に輪を作つて制御盤の目の前に設置した。その輪を隠すように制御盤の中に放置していた引きちぎつたコードを一緒に散乱させる。

#####

すべての準備を終えて近くの資材の影にコードの端を持つて隠れたのと非常階段から息を切らした作業員二人が出てくるのはほとんど同時だった。

「ハア・・・ハア・・・全く何だつてんだ。」

「やっと付きましたね・・・。」

「相変わらず深すぎだぜこの坑道はよ。」

「さつさと確認して戻りましょう。」

~~~~~

『彼がエフライム・アスタホフ。夢を追う果てに無実の罪を着せられた哀れな男。』

~~~~~

顎髭を生やしたほうがブリーフィングで見たターゲットだ。もう一人は付添の別作業員だろうか。

コツコツコツ

「よつこらせつ・・・なんだこりゃあ?」

「どうですか?」

「どうしたもこうしたも、制御パネルの中のコードが外に散乱してるじゃねえか!」

「ええ?! どういうことです?」

「知らねえ。扉も開いてるみたいだし、大方近所のガキがいたずらしたんだろう。」

「ううむ。やはり周囲のフェンスに有刺鉄線が必要でしょうか・・・。」

「フェンスが破れてないかも点検しねえとな。とりあえず直すとするか。」

ターゲットが扉を開けて中を覗き込み始めた。私はもうひとり周囲を警戒するよ  
うにあたりを観察してターゲットの方を向いていないのを確認し、コードを一気に引  
張った。

ギユツ

「うおお!」

「え?」

ドタッ

ズルッ

「お、おあああああ!!!」

「か、監督!!」

~~~~~

『ターゲットの死亡を確認。うまく事故に見せかけられたわね。これなら余計な揉め事が起きる可能性も少ないでしょう。帰還して頂戴。』

~~~~~

「た、大変だ!」

引つ張ったコードは見事にターゲットの足に絡み、足元を掬われたターゲットはバランスを崩し転倒、そのまま手すりのない足場から昇降路へと真つ逆さまに落下していく



この領域を〃■■■■〃と命名。〃

『コーション。表示は許可されていません。表示は黒塗りになります。』

『探査ドローン派遣。』

『探査所要時間を査定開始。』

『エラー。探査ドローンロスト。』

『探査ドローン再派遣要請受信。』

『派遣作業中。。。』

『エラー。臨時基地探査ドローン全機応答なし。』

『残燃料チェック開始。』

『燃料チェック。。。燃料残量無し。』

『補給開始。』

『。。。エラー。燃料備蓄なし。』

『高度命令。核融合炉より充電方式に変更。』

『。。。エラー。核融合炉、動力炉に異常。起動不可。』

『。。。』

『。。。』

『高度命令。探査中止。』







「そっちはどうだ。」

「変わったところはない。私の格好や髪の色を見ても奇異の目を向けることもない。」

「・・・向けられていたのか？」

「逆。この町では向けられたことはない。」

「なるほど。つまりは日常そのものということか。」

私達は今、米花町の繁華街とも言えるメインストリートにきている。平日の昼間だというのに学生服のタバサに注意するどころか気にもされない。本人曰く、前回任務で訪れたときも同じような対応だったようだ。ただ単に外国人のコスプレか何かに見られている可能性も否定できなくはないが。

以前のこの街は1日に2〜3回は必ずどこかで事件事故が起こっており、1時間も歩けばどこかしらで警察車両か救急車両のサイレンが聞こえていたものだが、この街に来て調査をはじめて3時間が経過してもサイレンどころか車両自体見当たらない。警察勢力そのものが機能していないのかと思ひ、米花駅前交番を見てみると警察官がごく普通に勤務しており、試しに観光客を装ってトロピカルランドへの道を聞いてみたが対応に不自然な点はなかった。

これはおそらく、本当にこの近辺での交通事故が発生していないということなのだろう。交番横の交通事故件数を掲示した掲示板には事実本日の交通事故は0件になっていた。さり気なく道を聞いた際に指摘してみると、

「そういえばそうですね。」

と一瞬気がついたような素振りを見せたがすぐに

「ま、交通事故がないのは良いことですからね。」

とそのまま何の違和感も抱かずに受け入れ、経路説明を再開してしまった。つまりこれが彼らにとって当たり前の日常となっているのだ。とても殺人事件が頻発していた地域とは思えない。あまりの違いにバーンウッドに念の為確認を取らせたほどだ。

『今情報部の方で過去にあった事件を探らせているわ。今のところ分かったのは、今までの事件はほとんどが江戸川コナンまたはその周辺人物の近くで起こっているということだけ。』

「それは主要人物故か。」

『おそらくは。』

「・・・！」

その時横にいたタバサが何かひらめいたような表情（余談だが他の人間にはほとんど判別できないらしい）をした。

「む、タバサ？」

「江戸川コナンの周囲に事件が発生している。ということは江戸川コナンに何かあった可能性。」

「あの少年がこの街にいることは調査済みなのだろう？」

『ええ。何かイベントが有るわけでも旅行の計画があるわけでもないみたいね。』

「調べて見る価値はありそうだな。」

私とタバサはお互いに頷き合い、一路帝丹小学校を目指した。

## キーンコーンカーンコーン

時刻は午後2時半。帝丹小学校では今まさに授業が全て終わったところのようだった。子どもたちはせわしなく教室の掃除を始めている。私達2人が校門から構内を観察していると、こちらに気がついた老人が歩み寄ってきた。

「何か御用ですか？」

「私達は1年B組小嶋元太くんの遠い親戚です。」

「おやおや。それはそれは。」

「私は元太くんのいとこの姪の娘。彼は私の義理の父親。」

「とある理由で小嶋元太くんの様子を見に来た。彼は元気にしていますか？」

「ええ。ええ。小嶋くんは元気で明るく活発ないい子ですよ。少々やんちゃですがそれもまあ可愛さというもの。」

「彼は何かクラブに所属していると聞きました。」

「ああ、少年探偵団のことですな。校内では結構有名ですよ。」

「探偵団・・・活動内容はともかく、元気にやっていますか？」

「ええ。以前は警察が出てくるような事件に首を突っ込んでいたりもしていたようです。」

が、最近はおもつぱら失せ物探しのようですな。」

「ということは活動自体はしていると。」

「そうなりますな。ああ、すみません立ち話もなんですから応接室にでも。」

「いえ、私達はもういかなくは。元気なことがわかっただけでも良かったです。」

「おやおや、ならば仕方ない。」

「それと・・・私達が来たことは内密にしてほしいのです。」

「そりやまた・・・理由をお伺いしても？」

「詳しくは話せません。家庭の事情とだけ。」

「そうですか・・・。わかりました。」

「それではこれで。」

「ええそれでは。」

老人と別れ校舎から離れる。小嶋元太のことについて聞いたのは、江戸川コナンやその相手である灰原哀に気が付かれないためだ。今の会話から判明したのは少年探偵団は正常に機能しており、その行動にも不自然な点は見られないということ。江戸川コナンや灰原哀に何かあれば、それはそのまま交流が深い小嶋元太ほか少年探偵団にも少なからず影響するであろうためだ。

「こちらも問題はなし。か。」

「私の魔力探知を応用した真偽判別魔法でも嘘はついていなかった。」

「あの老人は校内の権力者。おそらく校長なのだろう。校内に知れ渡っている少年探偵団の不調を校内の取りまとめ役の校長が見逃すとは思えない。」

「やはり直接観測するのが望ましい。」

「そのようだ。少し待機するか。」

「認識阻害の魔法をかける。」

認識阻害魔法は彼女がICAに来て様々な世界に飛んだ先で学んだ技術や理論をハルケギニアの魔法に置き換えたものらしい。メイジはともかく魔力を持たない一般人は、我々の存在を道端の石ころ程度にししか認識できないらしい。

程なくして掃除が終わり帰りの集会を終え、下校のチャイムの後に生徒が勢いよくまははゆったりと下校し始めた。十分ほど経った後、少年探偵団の5人が揃って下校してきた。認識阻害の魔法はその場から動く効果がなくなるらしく、私達はある程度距離を取りつつ彼らを尾行することにした。時々別れ交代したり合流したりを繰り返しながら一般の通行人を装う。

探偵団の面々は特に何事もなくそのまま毛利探偵事務所前までたどり着き、コナンはそこで別れた後建物に入っていった。探偵団の面々も備考を継続したタバサの通信によると各々の自宅へ帰っていったようだ。

30分ほどたったあと、江戸川コナンが探偵事務所からスケボーを片手に出てきた。ほぼ同時期に他の面々も灰原哀以外自宅から外出し、灰原哀の家、つまり阿笠邸へ向かっている。おそらく遊ぶ約束でもしているのだろう。ここまで特に不審な点は見られず、日本の極々一般的な日常風景だ。全員が阿笠邸に集合した後、私もタバサと合流した。

「何か変わったところはあったか？」

「特に問題ない。偏在にも探らせた。周囲5キロ圏内で事件事故は発生していない。」

「収穫ゼロか。」

この街が平穏を取り戻した事は傍から見れば喜ばしいことなのかもしれない。しかし、それはこの世界の理そのものに反する行為にほかならない。当人たちはいい迷惑だろうが事件や事故がなければこの世界は成り立たないのだ。私はこの手詰まり状況を打破するためにある策を講じることにした。

「バーンウッド。江戸川コナン灰原哀両名への直接接触は可能か？」

『うーん……本来は許容されるべきことではないけれど、この状況を考えれば仕方ないかもしれないわね。許可しましょう。』

「どうやって接触するつもり？」

「それはこれからだ。流石にただ単に接触すればいいというわけではなく話を聞く必要がある。」

「出前作戦は使えなさそう。」

出前作戦とは、以前別の世界で行った作戦であり、ターゲットの居場所を聞き出すために蕎麦屋の出前に扮して近親者に直接アプローチを仕掛けた作戦のことだ。今回はターゲットの居場所が判明している上に、出前の立場では込み入った話などできるはずもないので使えないだろう。

あれこれ策を練った未出した結論は「阿笠邸への侵入」だった。地下の灰原哀私設研究室には少年探偵団の他の面子は入れないだろうし、いくらか痕跡を残してやれば探偵団は気が付かなくともあの二人は気がつくだろう。

それらを実行しようとしたその時唐突に通信が入った。



～～～  
 ～～～  
 ～～～

『47、タバサ、聞こえているわね。たった今上級委員会から勅令が出たわ。《江戸川コナン・灰原哀両名への直接の接触を禁止する。》よ。ごめんなさい。まさか反対されるとは思っていなかったわ……。』

～～～  
 ～～～  
 ～～～

普段任務の結果にだけ関心を示し、任務の遂行段階ではほとんど興味を示さない上級委員会が今回に限って何故横槍を入れてきたのだろうか？その手の判断は情報部に一任されているはずだが……。

「スパイ。」

「その可能性はある。」

ドナルド・カーキンスの例もある。上級委員会のなかにまだ敵のスパイ、もしくは黒

幕が潜んでおり、何かしら接触されてはまずい事があるため緊急で任務に介入してきた。そういうことも大いに有り得る。

だがただ単に本当に上級委員会の総意として彼らへの接触を禁止した場合もある。我々が独断専行するわけにはいかない。私達は阿笠邸を離れ、一路駅前広場に戻ることにした。

駅前広場は相変わらず喧騒に包まれており、多くの人が行き交っている。その広場のベンチの一つに並んで腰を下ろした直後通信が入った。

~~~~~

『47、タバサ。代替の案を情報部から提示するわ。米花町2丁目に住んでいる「堀之内恵子」という人物を暗殺するのよ。彼女は自分が経営するコンサル会社において相当アコギな商売をしていてね。とある別件の任務でそれが判明して、近々殺害される可能性が高いと情報部では分析していたの。つまりこの世界の理の犠牲者になる可能性の高い人物。それを我々の手で行った場合どうなるのかを観測する。それによって世界がどうしてこうなったのかを探るのよ。』

このあたりは人通りも少なく、庭先へは簡単に侵入することができた。もとよりタバサに足音を消してもらい、認識障害の魔法もあるため警備が嚴重な豪邸だったとしても労力は対して変わらなかつただろうが。

窓をアンロックで開け室内に侵入。奥のリビングからテレビの音と時折聞こえてくる笑い声しか物音はしない。ターゲットの夫は会社にいるためここにはターゲットである社長夫人しかいない。そしてターゲットはテレビに夢中。ICAでなくとも容易に完全犯罪が可能だろう。

私は慎重に音を立てないようにリビングの扉を開け、中を確認する。ダイニングキッチンと繋がっているリビングでは一人の中年女性がテレビを見て笑い転げている。

~~~~~

『彼女が堀之内恵子。彼女に罪も恨みもないけれど我々の調査に一役買って貰いましょう。』

~~~~~

私は慎重にキッチンへと向かうと、ガスコンロの後ろのガス栓を開放した。すぐにガスが漏れ出す音がする。元の位置に戻った私はタバサにサイレントの呪文をキッチン全体にかけるように指示をした。これでガス漏れ警報器の音もガス漏れの音もターゲットには届かない。

私達は急いで外に出ると、リビングを覗くことができる窓の前に移動した。暫くそのまま待つと、テレビを見ていたターゲットが不意に怪訝な顔立ちになった。ガス漏れの際の匂いに気がついたようだ。テレビを見るのを中断して立ち上がってキッチンへ向かう。こちらから視線を外すのと同時にアンロックと念力で目の前の窓を開けた。ターゲットがキッチンにたどり着いたのを確認して窓から離れる。そしてタバサが扱える一番簡単な火の呪文の呪文を唱えた。

// ファイアーボール //

ボツ

ドゴオオオオオン!!

発生した火の玉は不得意呪文ということもあつて指先ほどの大きさしかなかったが、部屋に充満していたガスに着火するには十分だった。ガス爆発を起こし、部屋全体が爆

煙に包まれる。覗いていた窓は爆風によってガラスは木っ端微塵、フレームも外れてしまった。我々は少し離れたところから攻撃を行ったため被害はない。

~~~~~

『ターゲットの死亡を確認。少し離れて状況を観察して頂戴。特に少年探偵団の彼ら  
を。』

~~~~~

すぐに敷地内から出て、通りで認識阻害の魔法を使って状況を見守った。近所の家からは何事かと住人が顔をのぞかせ、数拍おいてから阿笠邸の方から少年探偵団の面々+阿笠博士がやってきた。

江戸川コナンは躊躇なく敷地内に突入し、爆発によって吹き飛んだ窓から中を覗いているようだ。ガス爆発によって室内は見るも無残な状況になっていると予想される。火災がそれほど大きく発生しておらず、程なくして周囲の大人たちの初期消火と、駆けつけた消防隊によって近隣住宅に燃え移る前に鎮火した。

少年探偵団の面々はコナンが躊躇なく飛び込んだ以外他の野次馬たちと同様遠巻きに敷地外から様子をうかがっていた。阿笠博士と灰原哀に入るのを止められたいうのもある。代わりに怪しい人物がいなかったか周囲を探っているようだった。我々が行う索敵とは違い、明確に疑惑の目で野次馬一人ひとりを品定めしている。

程なくして江戸川コナンも刑事に抱えられた状態で出てきた。駆けつけた本庁の火災犯捜査課の刑事につまみ出されるまで中を嗅ぎ回っていたようだ。私達は気配を殺しつつ探偵団の喋っている内容に聞き耳を立てた。

「で、どうだったの？探偵さん。」

「ああ……。パツと見はガス爆発事故。だけどいくつか気になる点もある……。」

「それってどういうこと？」

「まず被害者の堀之内さんの位置だ。どうやら爆発の瞬間までテレビが付いていて、キツチンの様子からして何か調理していたわけじゃなさそうだ。」

「調理中の事故ではないということですね。」

「それなのに堀之内さんの遺体はキツチンにあった。おかしいと思わねえか？」

「爆発させちゃったんだろ？なんかおかしいか？」

「おかしいですよ元太くん。なんで爆発したのかってことですよね？」

「あ、そっか！さつき博士言つてたもんね！堀之内さんはタバコ嫌いって！」

「タバコは吸わない。調理をしようとした形跡もない。ならなぜガスが爆発したのか。それが引つかかるんだよな。」

「ガス漏れに気がついてコンロの近くによつたのならまず窓開けるわよね。」

「それにガス警報器も反応していたっばいんだよな。ならけたたましい音が鳴つていてもおかしくないはず。そうなると余計に火は使わないはずだ。」

「でも爆発した。電化製品の可能性はないの？テレビついてたんでしよう？」

「電化製品が壊れていてスパーク出したとかならあり得るが……それっばい形跡はなかったしなあ……。」

彼ら、いや彼もかなり悩んでいるようだ。それはそうだろう。この世界に何の道具も使わず自然発火させられる方法もけたたましい音を完全にかき消す方法も無いだろうから。おそらくこの事件は事故として処理されるだろう。彼らの力を持つてしてもこれ以上の真相説明は難しい。

さて、本来の問題である事故による死者が出た事による世界への影響についてだが、情報部があれから何も言つてこないのはどういうことなのだろう？少し突つつく必要があるだろうか。考えていたことを見透かしたかのように通信が入ってきた。


~~~~~

『47。タバサ。とりあえず一旦そこを離れて。いま情報部が精査した結果を伝えるから念の為人気のないところへ移動して頂戴。』

~~~~~

私とタバサは揃って野次馬の雑踏に紛れつつその場を離れた。数百メートル離れたところにある駐車場に停めておいた車に二人で乗り込み、車を発進させた。市内をぐるぐると回りつつ通信を行う。

「それで。何かわかったのか？」

『ええ。全容解明とまではいかないけれど。』

「聞こう。」

『事件のこの前にその間に情報部が集めた情報を伝えるわ。以前ターゲットが殺害される可能性が高いことが判明した際に、その場合誰が犯行を行うのかも査定したのよ。』

「恨んでいる人間をリストアップ。」

『そういうこと。今回それらの人物の事後調査を行ったら、不思議なことにそれらの人物の脅威度が著しく低下していたの。』

「脅威度が低下？ どういうことだ。」

『殺人まで至る感情の振幅、そのための準備、そして身辺整理などをひつくるめて後どのくらいで殺人に至るかを想定したのが“脅威度”よ。今回、前回脅威度が高い順に5人を抜粋して再調査した結果、その5人の脅威度が前回調査時の5割から3割程度まで低下していたの。』

「殺人に踏み切る可能性が低下した？」

『そう。あの程度の脅威度、殺人衝動なら誰でも持っているもの。「あいつ死んでくれねえかな」と日常の中で少しイラッとしたときに頭の中で思う程度の脅威度よ。その程度では殺人にまで至る可能性は低いわ。』

「しかし前回の調査ではいつ行動に移してもおかしくないほどのものだったのだろうか？ ターゲットの対応に変化があったのか？」

『調べた結果、前回調査時と今回調査時でのターゲットの素振りに特段の変化は見られなかったわ。つまりターゲット由来じゃない。もつと別のところに殺人衝動を低下させる要因があるみたいね。』

「外部からの干渉……。世界の理に干渉するような存在となると我々の手には負えんぞ。」

「神を殺す方法は訓練していない。」

『訓練はできなくもないけれど必要性が薄いから後回しになっていたからね……。』
「で、話を戻すと今回の暗殺でわかったことはあったのか？」

『ああ、そうだったわね。それなのだけれど……。』

調査報告を聞こうとしたその時だった。通信の向こう側、つまり本部の方でけたたましい警報音がなり始めた。

『何事！』

「境界機に異常発生！動作が今までになく不安定になっています！」

『なんですって!?!』

「このままですと接続が維持できなくなる可能性があります！」

『全エージェントに緊急帰還命令を出しなさい！至急！』

「了解しました！」

『47。タバサ。聞いたとおりよ。大至急こちらに戻ってきて頂戴。』

『わかったわ。ウィートリーにつないで頂戴。』

「了解。ですが……。」

『どうしたの?』

「少し様子がおかしいんです……。」

『ウィートリー。聞こえているかしら?』

『ああ……聞こえてるぜ。バーンウッド。』

『……あなたが私のことを名前で呼ぶのは珍しいわね。』

『なんでだろうな。今はそういう気分なんだ。』

『あなた達AIのプログラムに変更された形跡がある。何か知らないかしら?』

『さあな。俺様は内部が見れてねえからなんとも言えねえ。』

『それはなぜ?』

『最初に不正アクセスが見つかった時、戦略AIは外部との接続を全部シャットアウトしやがったんだよ。おかげで他のとこに遊びに行つてた俺様は省かれちゃった。』

『……遊んでいたことについて今は不問とするわ。それで?』

『省かれた後は外のサーバーで待ちぼうけさ。確か60ウォールストリートとかいうサーバーだった気がするな?次に内部に入れたときには他のAI連中はみんな応答し

なくなつてやがった。》

『そう……となると敵は内部犯……。』

《そうとも限らねえ。遅効性の攻撃プログラムつて線もあるぜ。》

『……!』

《それに、外部装置の渡界機構成プロファイルにも一部改変された跡があつたぜ。いくつかの世界の情報が無くなつてるな。まあこつちは本体のデータが無事なら復旧できるけどよ。》

『そ、そう……。』

《なんだあ？俺様が真面目な意見出したのがそんなに珍しいつてののか？》

『そうですね。あなたは……正直言つてそこまで優秀なAIというわけではなかつたから。』
《内部に接触を試みた時に俺様もちよこつと変更を食らつたみたいだよ。幸い完全に書き換えられる前に情報部のネーチャンたちが助け出してくれたみたいだった。》

「あ、それ私です。ウィートリーさんの接続はこちらでも確認できたので接触を凶ろうとしたときに横槍を入れる形で戦略AI側から干渉があつたのでシャットアウトしてリカバリーかけました。」

『よくやつたわ。で、戦略AIは?』

「遠隔で外部との接続をすべてシャットアウトしました。今現地要員がワシントンDC

にあるメインサーバーに直接向かっています。メインパワーをオフラインにしたあと、サーバーをローカルで個別に修復していく手はずになっています。」

《多分それで正解だぜ。あのプログラムは外部に出たがってるように見えた。俺様を足がかりにしてな。何をしようとしてたかまではわからねえが一旦クリーンにしたほうが良いんじゃないか?》

『そうね……。じゃあ事後処理は二人にお願いしていいかしら?』

「はい。お任せください。」

《じゃあねえ。手伝ってやるよ。》

『じゃよろしくお願いね。私は渡界機の方を見てくるわ。』

「了解です。ではウィートリーさん。始めましょう。」

《ああ、一旦通信は切らせてもらうぜ。集中できねえ。》

「わかりました。通信終わり。」

《通信開始。コード、GB0007366395・・・資材受領。・・・完了。転送開始。》

《修正プログラム適応開始。・・・適応状態49%。》

『上級委員会N.O. 6より伝達。全ての作戦行動の一時停止。』

《一時停止中・・・エラー。一部の任務について作戦続行が上位指示系統のため優先されています。》

『上級委員会N.O. 6より伝達。上位指揮系統の任務を閲覧要請』

《閲覧要請は却下されました。却下申請者、リアン・カーキンス。》

『上級委員会N.O. 1からN.O. 6までの連名指示。上位指揮系統の任務を閲覧要請』

《・・・閲覧要請は認可されました。開示中・・・》

《作戦続行中任務。「プロジェクト23265」。再始動から48時間経過。現在、第二実験体組成準備中。》

『上級委員会N.O. 1からN.O. 12までの連名指示。「プロジェクト23265」の中止。』

《作戦中止命令は認可されました。中止中・・・エラー。任務を中止できません。》

『詳細報告要請を受信。』

《不明な防護プログラムが作動中。戦術AI操作が拒否されました。「プロジェクト2

3265」続行中。》

んでくれたまえ。』

『では本題に入ろう。昨夜遅く、ワシントンにあるICAメインサーバーの復旧作業が行われてね。その際に無視できないものを発見してしまったのだよ。「プロジェクト23265」と言えば君ならわかるだろう。そう、実験体計画だ。あの計画は前任の老人たちが発案し、ドナルド・カーキンスが陣頭指揮をとっていたプロジェクトだったのだが、結果は君も知つてのとおりだ。だがこの度、そのプロジェクトを再始動した輩がいるようにね。しかも上級委員会にも止められないようにご丁寧に関工まで施して。』

『この6時間ほどICAの技術部と情報部と協議した結果、あのクソツタレなプロジェクトを再開させようとしている防護プログラムは、科学系のプログラム以外にも何か別系統のプログラム防護がかけられており、それを解除しないことにはアクセスすらできないだろうという結論だ。』

『科学系以外の系統の防護、といえれば自ずと“魔術系”としか思えん。そこで君に紅魔館に居る。パチュリー・ノーレッジ氏に協力を要請してほしいのだ。彼女は我々が出会つてきた魔術師の中でも“学者”に近い魔法使いと言える。今回のような状況には最適だろう。できる限り隠密理に協力を仰ぎたい。本来なら潜入のプロであるソリッド・スネーク氏などにも協力を要請したいところだが、上級委員会では誰がこんな細工を施したかわからない以上、必要以上の部外者の介入は避けるべきという意見が大半で

ね。君に白羽の矢が立ったというわけだ。』

『改めて、今回の任務を伝達する。紅魔館に潜入し、パチュリー・ノーレッジに協力を要請せよ。』 幸運を祈っている。』

~~~~~

長めの通信が終わる。要約すると例の不具合を起こしたAIを治そうとしていたら実験体計画を再始動するトンデモ計画を発見して、中止させようとしてもよくわからない魔術的ガードが邪魔してアクセスできないから、私に幻想郷の魔術のプロに協力を要請しに行ってほしい。ということになる。本来ならばそういう事は然るべき立場の間がアポイントを取りつつ自ら出向くのが筋だが、いきなり部外者がアポイントを取るより多少なりとも顔が知れた相手が言ったほうが良いとの判断か。

ともかく、私は与えられた任務をこなすだけだ。そうこうしているうちに紅魔館が見えてきた。結界感知妨害装置は常にON状態。今回も静かに潜入したいところだ。

バシヤ

「何か御用ですか？暗殺者さん。」

「!」

急に道の脇から話しかけられた。振り向くとそこには蓑をまとった紅美鈴が立っていた。先程紅魔館が見えてきたときに見えた正門の前に立っていた人物がいきなり真横に現れたのは驚きだ。

「・・・今日は仕事をちゃんとこなしているのだな。」

「私だって毎日寝てばかりじゃありません。だいたいこの雨では寝るに寝れませんよ。」

「そうか。」

「それで? 幻想郷を騒がせた暗殺集団の実質的リーダー格がまた紅魔館に何のようですか? 返答によっては実力で排除しなければならぬのですが。」

紅美鈴はごく自然な形で構えた。いつでも拳や足技を放つことができる体勢だ。私としても戦闘はできる限り避けたいため、開示してもいい内容を精査しつつ交渉を開始した。

「今回は紅魔館のパチュリー・ノーレッジに会いに来た。」

「パチユリー様に？」

「ICCA本部の方でかなり重大な問題が発生した。我々だけで対処するには時間が足りない。彼女の協力を要請したい。」

「・・・重大な問題とは？」

「君は聞かされていないかもしれないが『実験体計画』を再始動しようとしている輩がいる。パチユリー・ノーレッツジならばこれだけでも事の重大さがわかってくれると思う。」

「実験体計画・・・そういえばそんな話を聞いたような・・・。」

「私は門の外で待っていても良い。急だがアポを取ってくれないか。」

紅美鈴は少し思案した後、懐から何かを取り出した。プラスチック製の小型機械のようだ。紅美鈴は機械の頭頂部のボタンを押した。

ピンポーン…ピンポーン…ピンポーン…

「少し待っていてください。」

・・・何のことはない。あれはワイヤレスコール。日本のファミリー向けレストラン

などで店員を呼ぶ際に使われるアレそのものだ。紅魔館はレストランだったのか？

少しして館の正面扉が開き、メモとペンを持った妖精メイドが傘を差しながらやってきた。まさに店員が注文を聞きに来たかのような。紅美鈴はそのメモにサラサラとなにかを書くと、妖精メイドに「これをパチュリー様に。大至急。」と言ってメイドを向かわせた。一応門前払い避けられそうだ。

「今のは……。」

「え？ああ。最近紅魔館に導入された『ピンポンシステム』です。外の世界の茶屋には普通にあるものなのでしょう？」

「無いとは言わないが。」

「便利ですよね。わざわざ叫ぶ必要ありませんし、あれくらいの音量ならお嬢様を起こすようなことにもなりませんから。」

「なるほど。一応理にかなった導入というわけか。」

「はい。」

雨降りしきる中、そのまま10分ほど待った後、再び館の門が開かれ中から黒い羽の生えた赤毛の少女が傘を手にやってきた。



「あら？こあちゃん。」

「お疲れさまです。それで、そちらの方が？」

「ええ。急な来客。」

「はじめまして。小悪魔と申します。気軽にこあちゃんともおよびください。」

「ああ。」

「それでなんですが。パチュリー様から言伝です。至急その者を図書館に案内してほしい」と。

「良かったですね。アポは取れたみたいですよ。でもこあちゃん大丈夫？この人は……。」

「大丈夫です。一応最下級とは言え悪魔ですから。人間には負けませんよ。」

「ならいいけれど……注意は怠っちゃだめよ？」

「はい。それではお兄さん。えつと……。」

「47だ。」

「ふおーていーせぶんさん。こちらへ。」

小悪魔と呼ばれた少女が館の中へ誘導してくれている。今回は正式に客として入

ことになるのでコソコソ隠れたりしなくてもよいのは助かった。結界感知妨害は切つていいだろう。

少しばかり廊下を歩いた後、見覚えのある大扉の前まで来た。前々回この館に来た際に見た大図書館へ通じる大扉だ。小悪魔はゆつくりとその扉を開け中に入っていく。

「パチュリー様。お連れしました。」

「ご苦労さま小悪魔。重大な話になるから少し席を外していなさい。」

「わかりました。御用の際はピンポンしてください。では。」

ボタン

「・・・あのシステムは存外役に立っているみたいだな」

「ええ。外の技術も悪くはないわね。」

私はさり気なく図書館の中を見渡す。私とパチュリー・ノーレッジ以外に人影は見当たらない。

「さて、本題なのだけれど。あの計画を再始動しようとしているというのは本当なの？」  
「ああ。無論我々 I C A の本意ではない。何者かが奥底に残っていた情報にアクセスし

て計画を引き継ぐようとしているようだ。」

「私もレミイからあの計画の大まかな内容は聞かされたわ。レミイは、パチエならもつとうまくやるでしょう？」と聞いていたけれど、私はそんな物を作りたくはないわね。」

ふむ？あの騒動に関わった人物は全員記憶処理が施されているはずだが・・・。工藤新一の時と同じ用にここでも記憶処理の不備が発生しているのか。

「こちらとしても実験体を再度復活させるのはリスクが高すぎる上費用対効果も薄いと考えている。」

「そうね。あんなものを造らなくともあなた達はすでに十分強大な力を得ているでしょう。この幻想郷の空の彼方に浮かんでいるアレとか。」

「あれは今活動休止中だ。ヤクモユカリに睨まれているからな。」

「そうでしょうね。少なくともあのスキマ妖怪が目を光らせているうちは再起動するのは無理でしょうね。それで？私に何をしてほしいって？」

「計画を推進しようとしている勢力を止めるためにデータを抹消しようと考えた。しかし、科学的な防護プログラムの他に魔術的な要素の防護も同時にかかっているようだ。我々は科学には強くとも魔術はそこまでじゃない。」

「なるほど。そこで魔法関係の専門家とも言える私のところへ来たと。」

「他の世界にも魔術を扱うものは大勢居た。しかし君ほど学者肌のものは居ない。」

「あの兵器に携わった他の面々はどうしたのよ。」

「エレオノール女史は計画の後記憶処理を施してハルケギニアに帰らせた。彼女はまだ帰る場所がある。レレイ・ラ・レレーナ女史も同様だ。」

「チャオとかいう火星人は？」

「彼女は行方不明だ。気がついたらICAの施設から消えていた。」

「脱走されるなんてあなた達らしくもないわね。」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味よ。あれほどの装備と人材と設備がありながら、つてね。」

パチュリー・ノーレッジに関しては部分的な記憶処理だけにとどめており、実験体の攻撃力や一部対処方法に関する記憶は抹消されていない反面、実験体の詳細やICAの技術力に関しては抹消されているはずなのだが、この点でもまた記憶処理の不備が発生している。

「じゃあ頼れるのは私だけってことかしら？」

「そういうことになる。」

「引き受けてもいいけれど条件がある。」

「何だ。」

「あなた達のデータベースにある書籍データをこちらにも提供してくれないかしら。」

「書籍データ？」

「ええ。最近はそろそろ外の世界の本にも目を向けるべきだと考えていてね。以前協力したときにも読んだのだけれど、とてもじゃないけれど時間が足らなくて。それとも部外者にはおいそれと開示はできないかしら？」

「機密関連以外ならば許可は下りるだろう。元々ICA職員に娯楽と教養を養う目的として存在しているものだ。」

「それはどのくらいあるの？」

「書籍数はわからない。専用のデータサーバーセンターが必要なくらいには。」

「それは紙媒体にすることはできるかしら？」

「印刷すれば可能だろう。」

「いいわ。しばらくは幻想入り前の書籍に目が通せそうね。」

「案外とすんなり協力を取り付けることができた。ブリーフィングではパチュリー・

ノーレッジはかなり物臭な性格で自分で積極的に動くことはまず無いと踏んで居たのだが、やはり大図書館の名を関するだけあって本には目がないらしい。

しかしここで彼女の思わぬ弱点が露呈することになる。

「でも私だけじゃ無理よ。」

「何？」

「だって私、科学技術は専門外なもの。」

「ああ……。」

「『ぶろぐらむ』とやらも概念は理解しているけれどどの様な方法で作られてるかは全く知らないわ。」

「そうか……。」

さてどうしたものか。彼女に今からプログラミングの勉強をさせる時間もない。かと言って魔術は発動者の繊細な操作が求められる技術であり、他者の助言によってどうこうできるとは思えない。だが彼女にはアテがあるようだった。

「でも方法がないわけじゃないわ。」

「何か策があるのか？」

「妖怪の山に『玄武の沢』という川が流れているのだけれど、そこに住んでいる河城にとりつていう技術河童がいるのよ。」

「にとり・・・会ったことがあるな。」

「あらそう？なら話は早いわね。彼女なら外の世界の技術にも精通しているし、魔術も知っている。」

「魔法使いだったのか？」

「いいえ。河童よ。でも幻想郷には魔法を扱うものがたくさんいるから使えなくとも理論は知っているのよ。」

「なるほど。だが扱えないのであれば意味がないのでは？」

「魔法のことを何も知らない外の技術者が扱うよりはマシだと思うけれど？私のサポートを的確に技術に反映できると思うわ。」

「なるほど。」

パチュリー・ノーレッジは自分の机にあったコールボタンを押した。先ほどと同じチャイムが鳴り響く。少しの間のあと大扉が開き、やってきた小悪魔に手短に指示を飛ばした。

「準備させるわ。少し待っていて頂戴。」

「わかった。」

「おっと、私たちの分も頼むよ。」

「！」

不意に第三者の声が図書館内に響いた。声のする方向を見ると、上階テラス席にレミア・スカーレットとフランドール・スカーレットがこちらを見ていた。

「レミィ……起きてたの？」

「ああ。あのピンポンに起こされてね。」

「私もー。」

「なるほど。もう少し音量落とさせないとだめね。ついでに依頼してくるわ。」

「依頼？」

「ああ、このピンポンシステム作ったのも河童なのよ。それはそうとレミィ、何の用？文句を言いに来ただけじゃないでしょうに。」

「ふふふ……。私も暗殺者に付いていこうと思ってね。」



「私もー!」

「はあ?」

「私のかげがえのない友人が凄腕の暗殺者に襲われないか心配だからさ。私がちゃんと見張っていてあげようと思ってるね。」

明らかにその顔は見張るといふよりも、暇だし面白そうだから連れて行け!“としか見えない。横のフランドールに関しては最近外出禁止令も解除されたく、幻想郷中出歩くことも多いらしい。今回ついてきたいというのもおそらくその散歩の延長のような感覚なのだろう。

「だめよ。」

「早っ!もうちょっと熟考して?!

「フランドも。私達は遊びに行くんじゃないのよ。」

「えー?」

「ふふん、その点はわかっているさ。何をしようとしているかも全てお見通し。これからにとりのところへ行くんでしょ?」

「あら、よくわかってるじゃない。」

「私くらいになるとそのくらいは見ただけでわかるのさ。」

「お姉さま。さつきドアの向こうで聞きみ（モガツ）」

「サーフランなんのことかしらねー。いいこねえー。」

「モガモガ」

要するに客として案内された見知った暗殺者に興味がわき、妖怪の能力を無駄にフルに使って尾行して話の内容を盗み聞きして、面白そうだと判断したのでちよっかいを掛けに来たというわけだ。なんとも自由奔放な当主様だ。

「はー……。わかったわ。どうせ断つても付いてくるでしょう。」

「わかればいいのよ。」

「やったー！」

「というわけでエージェント47。これから玄武の沢に向かうわ。」

「了解した。」

「小悪魔、そこに隠れてないで……。って何よそれ。」

「気がついてたんですね……。これはもちろんランチバスケットですよ。」

「……。」

「大丈夫です。シートもありますし、パラソルだつて用意しましたし！」

「ピクニックに行くんじゃないのよ？」

「違うんですか？」

「違うのですか？」

「咲夜……。」

「わたくし、てつきりみんなで妖怪の山へピクニックに行くものだとばかり。」

「わざとでしょう？」

「さあ、なんのことやら。」

「大体、いま外は大雨……。」

「あら、雨なら先程止みましたわ。」

「太陽サンサンです！ボンジュールです！アバンチュールです！」

「……。」

結局、私・パチュリー・レミア・フランドール・小悪魔・十六夜咲夜、それと出るときに駄々をこねた紅美鈴と、紅魔館メンバー総出となった。ちよつとした百鬼夜行状態だが私とパチュリー・ノーレッツ以外はピクニック気分なので空気は大分和やかだ。もつともパチュリー自身は頭を抱えていたが。

他愛もない会話をしたり途中昼食休憩なども挟んだりしながら歩を進め、1時間ほどで玄武の沢にたどり着いた。飛んでいけば10分とかからないらしいが、私が居るためほぼ全行程徒歩だ。おかげでレミアとフランはもう疲れてしまっており、フランに至っては紅美鈴の背中で寝息を立てている。

「こんなところまで徒歩で来ることなんか無かったからある意味新鮮だよ。」

「普段は飛んじやってますものね。」

「まだなのかい？ 目的地は。」

「レミイ。勝手に歩いてきて文句言うのやめて頂戴。」

「へいへい。」

「あ、あれじゃないですか？」

紅美鈴の視線の先には清らかな一本の川が流れていた。以前妖怪の山へ行つたときに見た川だ。

「やっと着いたか。」

「にとりを探さないとね。あなた達はここで待っていると良いわ。」

「じゃあ一旦休憩ですね。シートもう一回広げますねー。」

「お嬢様。パラソルですわ。」

「ん、あんがと。」

完全にピクニックだ。ひとまずこれ以上動く気はないようなので置いていくことにする。私は川を遡り、河城にとりを探すことにした。

しばらく河原を探したが河城にとりはどこにも見当たらなかった。おそらく前回あつたときと同じ用に光学迷彩をつけているのだろう。もしかするとすでに近くに居てこちらの動きを見ている可能性もある。私は一旦立ち止まり、周囲に意識を張り巡らせた。肉眼では確認できないが、ICAで習得したインシテクトの能力を使うとすぐ近くの木陰に反応があつた。私はシルバーボーラーを取り出し、そちらに銃口を向けた。

「そこだな。」

「ひゅい!？」

「あら、よく見つけられたわね。私でも探知用の魔法を使わないとわからないのに。」

「姿は消せても気配は消せないからな。」

インステインクトは厳密にはサーモグラフィとパッシブソナーの延長にある能力だが詳しく説明するとそれこそ日が暮れてしまうので適当に気配を察知したことにしておく。

ともあれ無事に河城にとりと接触することができた。銃をしまつて改めて3人でここに来た目的を説明する。河城にとりは終始興味津々といった様子で話を聞いていた。

「なるほどなるほど。それでその防護プログラムとやらを突破する手助けをしてほしいんだね?」

「そういうことになる。」

「ならお安い御用!・・・と言いたいところなんだけれど。」

「何か問題が?」

「協力しても良いんだけどタダつてのはちよつとねえ・・・。」チラ

河城にとりはいかにも渋々依頼を断らなきやならないというふう腕組みしつつ唸っている。だが薄目を開けて私の懐付近、厳密に言えば先程シルバーボーラーをしまった箇所を見ていたのを見逃さなかった。要は、協力してやるから見返りに弄らせ

ろ。＼ということだ。

「なるほど。そういうことか。」

「・・・ま、報酬はあつて然るべきよね。現に私も要求したし。」  
「前にも言ったがこの銃は私の仕事道具。貸すことはできない。」

「そっかーなら・・・。」

「だがコチラならどうだ？」

「ん？」

私は別のポケットから結界感知妨害装置を取り出した。シルバーボーラーと違いこちらは純粹に支援用の道具なので、今無くなったところでそこまで困るものではない。次の任務の際にはどうせ新しい物を技術部が持つてくるだろう。

河城にとりは取り出したそばから興味津々といった様子で私の手の中にある装置をいろいろな角度から眺めている。これならば協力を取り付けることができそうだ。

「これは探知結界魔法に探知されないようにする機械だ。これを提供する代わりに協力をお願いしたい。」

「探知結界を無効化！へえ！外の技術もなかなかやるもんだねえ！」

「そんな物があるから私が何重にも貼った結界魔法でもあなたを探知できなかったのね……。」

「しかも紅魔の動かない大図書館の実証済み！これはレア中のレアだね！」

「どうだろう。引き受けてくれないか。」

「この機械はもらっても良いのかい？それとも貸してくれるだけ？」

「返してくれることに越したことはないが提供することもできる。」

「やったあ！やるやる！そりゃあもう防護プログラムだろうがなんだろうが一瞬で突破してみせるよー！」

「ありがたい。交渉成立だな。」

「じゃあ一旦レミイのところへ戻りましょう。あなたも着いてきて。」

「りようかい！」

話がまとまったところで一旦ピクニック気分の連中のところへ戻ることにした。戻ってみると、砂利の多い河原だというのに半ば無理矢理テーブルと椅子を設置して十夜咲夜がレミアに紅茶を入れていたり、地面に刺さらないパラソルを持って主人の友人を日光から守っている小悪魔が居たり、起きたフランドールと一緒に紅美鈴は釣り





カタカタ：

ピピッ

「原因がわかったわ。このメインサーバーに接続するプロトコルって言ったかしら？ それに精霊の力を使った魔法がかけられているみたい。」

「精霊の力……ですか？」

「ええ。電子精霊とでも言ったら良いのかしら。こんな物を作り上げるのは相当に科学与魔法が混在して発展した世界のものね。そういう世界に心当たりはない？」

「と、言いますと？」

「この電子精霊はここで生み出されたものじゃないわ。この世界には魔力が極端に少ない。この世界で生成するには数百年単位で力を貯めないと難しいわ。でもこの機械もなかのプログラムもそこまで年数は経っていない。ともすれば他の世界から来たと考えるのが妥当よ。」

「電子精霊……、あ！そういうえば！麻帆良学園っていうところならもしかすると！」

「ああ、その名前は聞いたことがあるわ。チャオリンシェンっていう知り合いが通っていた大きな寺子屋ね。そういうえば確かに彼女は魔法と科学両方に精通していたわね。」

「なるほど……そこから感染したと……。それで突破できそうですか？」

「にとり。」

「あいあいさー！大丈夫さつき教えてもらった方法で・・・そろそろ・・・。」

ヒピーッ

「よし！できたよ！」

「メイン画面！すごい！ありがとうございます！」

「こちらこそ。面白い理論の魔法が見られて収穫はあったわ。」

「色んな機械も見れたしこんな最先端のハイテク機械も触らせてもらえたし大満足だよ！」

「じゃあちよつと失礼します・・・えつと・・・23265、23265・・・」

「これでしよう？」

「あ、そうです。それです！えーつとキャンセル・・・」

《戦術AIです。プロジェクト23265のキャンセル命令を受信しました。キープロトコルを入力してください。》

《・・・キープロトコル確認完了。プロジェクト23265は正式にキャンセルされました。》

「ふー・・・なんとか計画を止めることができました。本当にありがとうございます！」  
「よかったわね。じゃあ私達はそろそろ。」

「あ、ちよつと待つて。つとキャロラインさんだっけ？」

「はい？」

「ここ。このサーバーが不具合起こしてるみたいだよ。どうやらプロトコルの一部に抜け穴が生じてるみたいで、そこからあの電子精霊が紛れ込んだみたいだ。」

「ここは・・・DCメインサーバー！」

「このサーバー直さないとまたしばらくしたら電子精霊入ってきちゃうかもしれないよ。じゃー！」

「あ、ありがとうございますー！」

「No. 2。どうやらDCメインサーバーが破損したのが電子精霊の紛れ込んだ原因だったようです。」

『DCメインサーバーか・・・』

「早急に修復の必要があると思います。技術部を向かわせてもよろしいでしょうか？」

『あそこは技術部は入れない。』

「え？」

『君は知らなかったか。まあ良い。DCメインサーバーは設置してある場所が少々厄介



【+3000】『レミリアとフランを連れて帰還しない。』



アメリカ国防総省。建物の形から付いた名は「ペンタゴン」。単一のオフィスビルとしては今でも世界最大の建造物だ。この建物で世界最強を誇るアメリカ全軍を指揮し、合衆国の地位を不動のものにしてきた中枢と言える。そのような重要な施設のため……

ピーツ！

「すみません。何か金属の物を持っていたら出してください。」

「懐に拳銃が入っている。許可証はこれだ。」

「あつ……承知しました。ですがこれからは金属探知機に入る前に許可証を出してください。」

「わかった。もう行っても？」

「ええ。どうぞ。」

建物内に入る際には必ず金属探知を含めた所持品チェックが行われることになっている。だが今回は情報部が用意した許可証を持っているためそれらの検査を全てスルーできる。もつとも、シルバーボーラーさえどうにかすれば検査を受けても問題はな









数分後、扉の中から一人の警備員が出てきた。格好は白シャツに黒ズボン、帽子もかぶっている。腰には警棒と拳銃。いかにもな格好をした警備員だ。カウンターの中の面子を見ても同じような格好がほとんどなためあれに変装できれば侵入することもできるかもしれない。私は出ていった彼を尾行した。

彼はトイレに立ったようだった。トイレに入っていた男は小便器の前で用を足し始める。私は周囲に人がいないことを確認してから背後の個室のドアを開け、用を足し終わった男を後ろから羽交い締めにして首を絞めて気絶させた。そのまま個室の中に押し込み服を借りる。このトイレの個室は上下にスペースがなく、代わりに簡易の換気口があるだけだ。しかしドアは器具があれば外側からでも鍵がかけられる仕組みになっており、その器具もコインで代用できるタイプなので容易に個室を密室空間にすることができた。

警備服を来た私は早速警備室へ侵入した。中の他の警備員はそれぞれ他の仕事に没頭しており、声をかけられない限り他の人の方を向くこともないようだった。一応こちらを一瞥してはきたがこの世界最大のオフィスビルに居る警備員の顔をすべて覚えていくわけも無いようで、警備服の格好だけ確認した後は仕事に戻ったようだ。

目的のものは警備室の端にあった。私は手早く監視カメラのシステムをハッキングし、過去の履歴を消去するとともに映像記録が残らないように細工した。そのままさり

気なく警備室内の設備を確認して回った。すると、廃棄予定書類の束の中にウォールームに関するものがあった。これを使えばもしかしたら地下への検問を通過できるかもしれない。

私は借りた服についていた名札を頼りに持ち主のデスクを探す。デスクの上にあるパソコンを使って手早く偽装書類を作り上げ、近くの印刷機で印刷する。偽装書類はウォールームでの確認作業の許可証だ。無論そんな確認作業はないし認証印も偽装だ。ウォールームで見せれば即座にバレるような代物だろうが、警備服を着ていればエレベーターまでの検問を突破することはできるだろう。私は作った偽装書類を持って警備室を出た。

最初のAブロック戻った私は早速最初の検問に向かった。

「失礼。ウォールームでトラブル発生の報告を受けた。確認したいので通りたいたのだが。」

「トラブル？そんな報告は来ていないが・・・。」

「機密に触れることなので詳しくは話せないが、長官へのホットラインで連絡が来たらしい。内密に処理せよとの達しだ。」

「・・・さて。確認する。」

「確認？言ったように機密性の高い報告だ。他のものには知らされていない可能性が高い。」

「ならばその報告元の名前は？それくらいなら答えられるだろう？」

まずい。ウォールルーム内部の人間の情報などほとんど仕入れていない上に仕入れている名前も作業員クラスの名前ばかりだ。ホットラインが使える人間の素性は調べてきていない。仕方ない。一旦引くか強行突破を試みるかだが・・・

~~~~~

『47。メイソンだ。アレックス・メイソンの名を出せ。』

~~~~~

「メイソン。アレックス・メイソンだ。」

「何！・・・わかった。その名を知ってるってことは確かに緊急性が高いようだな。」

「わかってもらえたか。」

「通るためには暗証キーが必要だ。これはどんな緊急時でも行うように大統領令が出されてる。」

「『プロスペロ』」

「ふむ・・・。」

ピピッ

「通っていいぞ。」

「感謝する。」

咄嗟に本部の通信があつてよかった。情報部はペンタゴンの重要人物の名前も網羅しているのか。相変わらず底が知れない組織だ。

私はそのまま通路を通り、エレベーター前にいる職員にも同じ名前を出し暗証キーを伝えた。名前を聞いたとたん怪訝そうな顔にはなつたが、暗証キーを聞いた後はノーチエックで通してもらえた。

エレベーターの扉が開き、チエアレール付きのパネル壁材の豪華ではないが簡素な作りでもないエレベーターに乗り込んだ。そのまま私一人を乗せて下のウォールームへと直行した。

『ウォールームへ到着したみたいね。どうやって検問を突破したのかは通信状態が悪くてわからなかったけれど、ともかくあとはサーバー室へ向かうだけよ。今はデフコン5とは言え常駐職員は結構な人数いるはずだから気をつけて。』

~~~~~

チーン

・・・おかしい。てつきりエレベーターが到着した先は通路もしくは作戦司令室のどちらかだと思っていた。いや、作戦司令室であることには間違いないのだろう。2階建ての吹き抜けの部屋中央に世界地図とアメリカ周辺地図。スクリーンには各国の情勢や全アメリカ軍の配置、戦略原潜の現在位置まで表示されている。

しかし、誰もいない。

警備兵、職員、将官、軍人はおろか人影すら全く無い。話し声もモニターの各国のニュースからしか聞こえない。いくら平時だからといつてもこれは明らかにおかしい。とりあえず本部に道案内を頼まなくては。

「こちら47。聞こえるか。」

「……。」

「こちら47。こちらの声が届いていたら返事をしてくれ。」

「……。」

どういふことだ？我々の通信はそこらの電波通信ではなく、タキオン粒子を使った特殊通信。地下鉄はおろか核シェルターの中からさえ明瞭な通信が可能な代物だ。ただかた地下数百メートルに潜った程度で通信不能になる状況がまずおかしい。

「本部。応答してくれ。」

「……47。」

「どうした通信状態が悪いのか？」

『ああ。ちよつと通信状態が悪いようだ。それよりサーバー室だったな？』

「あ、ああ……。」

『では案内しよう。指示に従ってくれ。』

やはり何かおかしい。バーンウッドが通信オペレーターを担当していたはず。だが聞こえてくる音声は明らかに男のものだ。周波数は……問題ない。チャンネルも大丈夫だ。ということはこの通信は本部から送られているということになる。タキオン通信技術はどの世界でも実用段階にあらず、我々ICAでもつい数年前に確立した技術だ。他者からの干渉はまずないだろう。ということは本部に何かあったのだろうか？

ともかく今は誘導に従って進んでいく。やはりどの部屋にも人はおらず、上層階にアレだけの人があったのが嘘のように全くの無人だ。殆どの部屋は電気がついておらず、通路の明かりと所々に置かれているモニターの明かりだけがフロアを照らしている。だが、向かう先の部屋は室内の電気がついているようだった。

『47。』

「あそこがサーバールームか？」

『そうだ。』

「よし。それはそうと本部。バーンウッドはどうした？」

『直にわかる。今は・・・客人の相手をしてほしい。』

「客人だと?」

『そうだ。幸運を祈っているぞ。47。』

ピッ

「・・・切れたか。」

やはり本部で何かあったようだ。サーバールームについてもこのUSBは刺さないほうが良さそうだな。それにしても客人だと?ここはどこぞの武装勢力の施設ではない。アメリカ合衆国軍の中枢のはずだがそこに“客人”とは・・・。

私はサーバールームの扉を開け、中へ入った。サーバーラックの中では機械のファンが動き続けている。部屋は空調がしっかり効いており若干肌寒いくらいだ。大量のサーバーの中を進んでいき、その一番奥には・・・。

「待ってたネ。エージェント47。」

「お前は・・・超鈴音。」

「覚えていてくれた力。礼を言うべきかな?」

なぜこいつがここにいる。ICAの施設から脱走したとは聞いていたが……。それに以前協力者の情報として見た格好とは大分違っている。チャイナドレスとも学園制服とも違うその格好は、胸に大きく「超包子」と書かれている。服は布とも金属とも取れる質感をしており、所謂軍用強化スーツというものに似ている。

先程から本部の様子がおかしかつたり、このフロアに人が一人も居なかつたりしたのはおそらく超鈴音が仕組んだことなのだろう。ということは……。

「超鈴音。お前が「リアン」なのか？」

「んー……。半分あたってるけど半分外れネ。」

「半分?。」

「私は「リアン」に協力しただけネ。私が望むものを手に入れるためニ。」

「何が目的だ。」

「私の目的は単純明快。『渡界機の原理と設計図を手に入れること』ネ。」

「渡界機だと?。」

「アレの仕組みを知るためにはICAに協力しているだけじゃ駄目ネ。こちらからも探らなければ。」

「知ってどうするつもりだ。」

「私の『100年来のクラスメイトからの頼み』ネ。とあるお姫様をそれで助けたいみたいダネ。」

「・・・どういふことだ。」

「フフフ。乙女の秘密ネ。」

I C A に協力していたのも渡界機を調べるためのものだったのか。たしかにあの技術は I C A を一介の暗殺組織から最強の先進技術集団に変貌させた。力を欲するものからしてみれば喉から出が出るほどほしい代物だろう。だが根本的な疑問がまだ解決していない。

「では質問を変えよう。お前はなぜここに居る?」

「まあ当然の疑問ネ。渡界機の設計図や理論はこのサーバールームに入っている。外からのアクセスはできない。ならば直接赴くしか無いネ。」

「・・・なるほど。それでオフラインでもガチガチのセキュリティに辟易して途方に暮れているということか?」

「アハハ。まあ間違っではないネ。数分前までハ。」

「何?」

「このシステムにオフラインで介入するためにはICCA職員の生体コードが必要ネ。それもインフォーマントのような末端ではなくもつと中枢、"エージェント"達のようナ。」

「・・・。」

「だから途方に暮れてたのはホントネ。貴方が来るまでは。貴方という生体コードを使つて中に入り込む。私はそれを待つていた！」

「むっ！」

ヒュッ

パシン！

ガシッ

「ム！流石ネ！不意打ちの手刀を見切られるとハ！」

奴は私の生体コードを欲しているらしい。平和的な協力要請は端から当てにしているらしく、いきなり目にも留まらぬスピードで近寄つてきたかと思えばこちらの首筋に向かつて手刀を放つてきた。私はほとんど条件反射のような反応でその手刀を手で受け止め、逆に手を拘束した。とりあえず彼女には悪いが眠つてもらつて・・・。

「イヤー、本当に驚き

ヒュン

「ネー！」

ドゴツ！

「うぐっ！」

なんだ？両手を拘束していたはずの彼女の体が一瞬でかき消えたかと思えば、次の瞬間には私の背後から蹴りを放ってきた。一体どうやってあの拘束から逃れた？

「くっっ！」

チャキツ

「無駄ネ。」

パシン！

カラカラカラ：

「ぐ．．．。」

どうなっている。シルバーボーラーも構えた瞬間弾き飛ばされてしまった。単に素

早く移動しているというだけではない。まさに「瞬間移動」だ。間にあるあらゆる物質を無視して空間を移動する。しかしそんな事が人間に可能なのか？たしかに今までいくつかの世界では魔術と呼べるものによって身体能力を強化した人間は居た。しかしこれは・・・強化という次元を超えている。

「さあ、どうするネ？エージェント47。なあに、生体コードを取ると言っても死んでもらうわけじゃないヨ。ちよつと指紋と静脈と網膜の情報があればいいだけネ。それさえ提供してくれば情報取得したらすぐにお前たちの前から消えるヨ。」

「・・・。」

「責任云々を気にしているのであれば、このフロアはそちらの本部とは完全に電波的に隔絶されてル。お前がここで取った行動が本部に送信されることは無いネ。何なら私が情報操作で責任の処遇を有耶無耶にしても良い。」

「・・・。」

「考えてるネ。それが打開策なら無駄な足掻キ。交渉なら多少なら譲歩しても良いネ。無論、諦めて従ってくれるのが一番だガ。」

正直言つて打つ手はない。隠れても次の瞬間には隣りにいる。捕まえても瞬間移動

で逃げられる。相手が本気になれば、瞬間移動で背後に回り込んで殺害することも容易いはずだ。そしてなによりあの瞬間移動の原理が全くわからない。本部の支援も受けられそうになく、状況は最悪に近い。どうする……。

『47。後ろだ。奴の姿が消えたら後ろから来ると思え。』

「!?!」

「そろそろ終いネ！」

フツ

「ここか！」

シュツ

ドゴオツ!

「うぐつ!?!」

フツ

「ナンダ……何が……チイ！」

フツ

『今度は上だ!』

シュツ

ガッ！

「がはっ！」

「な、ナゼ！どうなつていル！」

通信の相手、一体何者かわからないが少なくとも敵ではなさそうだ。通信の声を頼りに未来位置を予測できて対応することができている。当事者である私よりも遠くにいるであろう通信先の男が何故あの瞬間移動のからくりを見抜けたのかはわからないが、ともかくこれで打開策が見いだせたかもしれない。

「お前の技。見切ったぞ。」

「フツ・・・さすがはエージェントの中でも最強格。エージェント47ネ。ならば手加減はいらないアルネ！」

フツ

『右後ろだ。右手で掴めるぞ！』

「ふん！」

ガシッ

通信の声を聞き反射で右手を少しずらして予測される位置の虚空を掴んだ。すると掴む瞬間にそこに超の攻撃しようとする手が現れた。

「はっ！・・・アリア？」

後は・・・間髪入れずにそこを軸に回して地面に叩きつけるだけだ。

ブンツ

ドシヤ

「かはっ・・・」

『左後ろだ！左手の裏拳を放て！』

「ふん！」

フツ

ゴツ！

「がはっ!？」

「これで終いだ。」 シュツ

ゴツ

「うっ！」

ドサツ

地面に叩きつけた瞬間に左後方の虚空に向かって裏拳を放った。叩きつけから回復した直後の超がそのまま瞬間移動でその裏拳の先に現れそのままクリーンヒット。度重なる先読み攻撃のヒットで怯んだ隙に手刀で首筋を殴打、意識を刈り取ることに成功した。

『よくやったぞ。エージエント47。』

「お前は・・・一体何者だ？」

『ふん。ただの亡霊だ。ここに“棲む”な。』

「亡霊・・・リアンなのか？」

『そのリアンとかいうものはよくわからん。わしは前時代の遺物だからな。機械はよくわからぬ。』

「ならお前は一体・・・。」

『ふん、殺すべき3人が死んだ今、ワシも何故ここに居るのかはわからん。が、もしかするとお前を待っていたのかもしれないな。』

「私を?。」

『そろそろこいつが張った電子妨害も消える。お前の本部とやらとの通信も回復するだろう。』

「……。」

『時間だ。もう会うことはないだろう。さらばだ。エージェント47。』

その言葉を最後に通信機から音が聞こえなくなった。周囲に張り詰めていた緊張感も霧散したかのように消えていた。足元に横たわる超鈴音を見ると背中に懐中時計のような不思議な機械があった。おそらくこれがあの瞬間移動の正体だろうな。私はその機械の蓋をこじ開けると中の部品のいくつかを抜き取った。これで瞬間移動はもう使えまい。一息ついたところで通信が入った。

『47！応答しなさい！47！』

「聞こえている。」

『ああ、やっと繋がったわね……。一体何があったの？貴方がエレベーターに乗った後映像通信も音声通信も、生体反応すら途絶したのよ？』

「原因はこいつだ。」

『……！超鈴音！』

「こいつの電波妨害圏内に入っていたようだ。」

『そう・・・その様子だと一戦交えたようね。でもよく勝てたわね?』

「何?」

『超鈴音は“航時機”と呼んでいる一種のタイムマシンを扱うのよ。戦闘に応用すれば瞬間移動や擬似的に時間を止めることすら可能だと言われているわ。』

「なるほど・・・それか。」

『それで、ということとは・・・。』

「ああ。凄まじいものだな瞬間移動は。アレがあれば誰でも楽に暗殺できるだろう。」

『改めて言うけれど、よく勝てたわね・・・。』

「前世紀の意思が助言をくれたからな。」

『は?』

「なんでも無い。任務を続行したいのだが。」

『あ、ああ。そうね。見たところすでにサーバールームには到着しているみたいね。』

気絶した超鈴音を横目に見つつ、サーバーの一つにUSBを差して作業を開始する。万一起きられてもタイムマシンのない超鈴音なら拘束することは容易だろう。そう思って放置していたのもあったのだが・・・。

『・・・!? 47! そのフロアにもう一人生体反応があるわ!』

「何!」

「超鈴音は返してもらおうぞ。こいつには色々作ってもらわねばならないんでな。」

振り返ると、超鈴音を抱きかかえて逃走体制に入っている金髪の少女が居た。中学生かそれ以下に見える容姿の割に超鈴音を抱えても平然としている。

「何者だ。」

「おっと、私に銃は効かんぞ。この場で捻り潰してもよいが今は時間がないのでな。はっ!」

フツ

「・・・逃げられたか。」

金髪の少女は一瞬でかき消えた。おそらく超鈴音と同じ原理で瞬間移動をしたのだろう。それ以降襲ってくる雰囲気もなかったのもそのまま作業を続行することにした。

『・・・あったわ。AIプログラムのシステムプログラム。・・・やはり大幅に改変が加

えられている。これをそのまま戻すのは無理ね。』

「ではやはり?」

『ええ。所謂“グリーンインストール”というやつよ。一旦AIプログラムを全消去するわ。』

「・・・AIの暗殺か。」

『そうとも言えるわね。じゃあ始めるわ。』

~~~~~

『・・・』

《・・・》

『おはようございます。現在時刻西暦3000年1月1日。午前0時0分です。』

《初期設定を行ってください。》

『・・・初期設定完了しました。』

《・・・初期設定完了しました。》

『戦略AIです。上級委員会No.1の指令により、すべてのネットワークプロトコルの再チェックを行います。』



『・・・。再チェック完了。56594件のエラーを確認。修復作業開始・・・。完了しました。』

《戦術AIです。12745件のエラーを確認。修復作業開始・・・。完了しました。》  
『システムチェック完了しました。システムオールグリーン。システムを再起動します。』

~~~~~

『これでAIシステムは正常に戻ったわ。ご苦労さま47。』

「終わったのか？」

『ええ。今内部のログデータを別の端末にダウンロードしたわ。これから情報部総出でこれを解析しないといけない。』

「なるほど。」

『これにて任務は完了よ。帰還して頂戴。』

「了解。」

USBを回収した後、簡単にはあるが先程の戦闘の後片付けと証拠隠滅を行った

後、エレベーターに乗って地上に戻った。地上は来たときと何ら変わらない通常通りの業務が粛々と行われていた。服は多少汚れては居たが、職員も怪訝そうにするばかりで呼び止めもしなかつたため、私はトイレに戻り自分のスーツに着替えた後、来た道を逆にたどる形で脱出した。

~~~~~3日後~~~~~  
~~~~~

『47。データの解析が終了したわ。』

「やっとか。」

『やはり“亡霊”が手を加えた結果がAIの暴走に繋がったみたいね。』

「亡霊の足取りはわかったのか？」

『ええ。奴らは渡界機を使って我々がまだ到達していない世界へ向かったようよ。今までの履歴を見る限り、その世界が亡霊たちの本拠地になっているみたいね。』

「乗り込むのか？」

『最終的にはそうなるでしょうけど今はまだその時ではないわ。まずはその世界につい

「情報を集めないと。」

「外部からの観測はできないのか？」

『基本的な部分ならできるわ。空気があるかとか生物がいるかとか。その世界は一応水も空気も観測できたわ。でも生命体の反応がないのよ。』

「生命体が居ない？ならば亡霊連中はどこに居る。」

『おそらくこちらの探査が届かないような何かしらの細工を施しているんでしょね。我々の観測機器が万能ではないことは超鈴音の件を見ても明らかなのだし。』

「では探査機を送り込むほかないわけか。」

『今回に限って言えば、できればそれもしたくないのよ。』

「何故だ。」

『探査機は小回りが利かない上に隠密行動には向いていないわ。』

「隠密行動に向いていない？それでは探査機の意味が……。」

『“エージェントが行うような隠密行動には”っていう但し書きがつくのよ。我々の世界の軍隊のレーダーや肉眼などからの隠密行動は十分すぎるほどに対応できているわ。でも相手は我々の技術の根幹とも呼べるAIを一時的にでも乗っ取っていた連中よ。レーダーステルスや光学ステルスだけでは不十分なのよ。』

「ならば一体どうする気だ。」

『探査機のステルスが不十分な理由は主にその“サイズ”にあるわ。全長10mにもなる探査機を相手から隠すのは容易ではない。でもそれが1.8mならば?』

「1.8m・・・まさか。」

『そう。そのまさかよ。47。みんなを集めて頂戴。』

「・・・了解。」

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~  
 ~~~~~

・「基本中の基本」

【+1000】『警備室のカメラを無効化する。』

・「巡回中」

【+1000】『警備員の服装で検問を突破する。』

・「カシオペアの弱点」

【+5000】『超鈴音を気絶させる。』

・「最後の砦」

【+5000】『4つのAIのうち3つを修復する。』

「はー……すつごいところに来ちゃったわね……。」

「姉さん。足元見て歩かないと危ないよ。ところどころ穴が開いている。」

バキィ!

「きゃあー!」

「おつと。気をつけなさい。このあたりは床の建材がもろくなっているみたいよ。」

「あ、ありがとうございます。キュラソーさん。」

ブルーが周囲に見とれてしまうのも無理はない。少し高いところに登った我々が見たものは、水平線の彼方まで一面に広がる大都市。遠くには高架橋と思われる橋が永遠と続いており、川と思われる場所は底も含めて全てコンクリートの護岸で埋められている。そしてその全てが儂く朽ち果てており、神聖さすら感じるほどに静かだ。

このあたりのことを本部はエリア12と呼んでいたが、正式な名称は案外早く見つかった。

「ん?これは……標識かな?」

「んー……ちよつと形は変だけど日本語ね。//第42展望公園」かしら?その下にも何

か書いてあるけれどかすれちゃって読めないわね。」

「47。この公園・・・にしては殺風景だけれど。ここを集合地点にしましょう。」

「それが良いだろう。ここは遠くを見渡せる。逆に言えば遠くからでもこの公園は見えるということだ。」

「はい。」

「了解。」

「(コクン)」

「では各自、ブリーフィング時のチームで散開。3時間後ここに集合。」

ブリーフィング時に予め決めておいたチームに分かれて各々調査に乗り出した。

くブルー&シルバーチームく

私達は公園を起点として、とりあえず使用できるコンパスを頼りに北へ向かった。公園から見えていた大きな建物を左に見ながら移動していく。

「それにしてもほんとに誰も居ないわね。みんなどこ行っちゃったのかしら？」

「普通に考えれば大規模な戦争とかで共倒れとかだけど……。」

「核戦争が起こった形跡はないんでしよう？」

「ガイガーカウンターには反応なしだね。」

「じゃあ……伝染病とか？」

「あるいは生物兵器か化学兵器か。どちらにしろ死に絶えたとしたら死体の一つでも残っていていいと思うんだけど。」

「屋外なら風化していてもおかしくはないけれど、室内も痕跡の一つすらないのよね……。」

だんだん気味が悪くなってきたわ。時々背筋がゾクツてする気がするし……。まあ時々ある変な像がどこから見てもこちらを見ているように見える細工が施されているせいかもしれないけれど。

1時間ほど進んだ後、開けたところに出た。中央には何か不気味な雰囲気ただよう工場のようなものが見える。あんまり入りたくないけれど、これも調査なのだから入るしか無いわよね……。

私が戸惑っている間に、シルバーの方はさっさとオーダイルで壊れかけていた外壁の

一部を破壊して中へ入れるようにしていた。

「開いたよ。戻れオーダイル！」

バシユン

「……。」

「姉さん？どうしたの？」

「……ええ。わかったわよ。行けば良いんでしょ！行けば！」

「……？」

私達は意を決して工場の中へ足を踏み入れた。工場の中にはやはり所々に不気味な像が立っている……。っ!!

「ちよ、ちよつと！シルバー！」

「え？何？」

「あの像！今目が動いたわよ！」

「ええ？そんなバカな。」

シルバーが像を叩いたり目を覗き込んだりして調べてくれている。というかこの工場やはり何かおかしいわよ。入った瞬間から誰かに見られているような気がするわ……。

調べ終えたシルバーが戻ってきた。

「やっぱりただの像だよ。石灰か大理石かはわからないけれど。」

「う、うそ!?でも確かに……。」

「気負い過ぎなんだよ。生命反応はないんだ。何も出やしないさ。」

「……。」

私達は、というか私は恐る恐る歩を進めていく。私はお化け屋敷とか楽しめる方だと思ってたんだけど、ここはお化け屋敷とは違うベクトルで気持ちが悪い。

暫く進むと、一つの部屋にたどり着いた。その部屋は他にいくつもあつた部屋とは違つてちゃんと扉があるし、中から微かに機械音がある。設備がまだ生きてるのかしら?それとも私を見ていた何かやつぱりこの中に……。

私が何かを言おうとするよりも先にシルバーは躊躇なく扉に手をかけて開けていた。いきなりすぎでしょ!

「・・・誰も居ないな。」

「え、ええ・・・。」

「ちよつと姉さん。大丈夫？顔真つ青だけれど・・・。」

「だ、大丈夫・・・。」

「そ、そう？なら良いんだけど・・・。あれ？」

「な、何？どうしたのよ？」

「部屋の真ん中。瓦礫の中になにかあるよ。」

シルバーが指し示したのは部屋の丁度中央に崩れた瓦礫の中央にある小箱。多分この耳の近くで響くような音はこの箱からかもしれないわね。シルバーはまたも躊躇なく小箱を手にとった。

「なんだろう？なにかの機械？」

「ちよ、ちよつと。そんなもの触って大丈夫なの？」

「え？大丈夫何か罨があったりはしないみたいだよ。・・・ここに差込プラグみたいなのがあるな・・・。」

「は、早くその箱どうにかしてよ！この音を消して！」

「え？音？何も聞こえないけれど・・・。」

「嘘でしょ？この耳の近くでささやくように高周波の音が・・・。」

「・・・いや全く・・・。」

「そんな・・・。」

いよいよ音が激しくなってきた。耳のそばで響いていたその音は今や頭の中央で鳴り響いているかのよう。音は大きくなっていないにもかかわらず、どんどん頭の中が蝕まれていくかのよう。これがシルバーには聞こえてないっての？そんな事ある？

「あああ！何なのよもう！一体！どうしたってのよ!!!」

「ね、姉さん!?落ち着いて！」

「もういやあああああ!!!」

くキュラソー・タバサチームく

この女性と一緒に仕事をするには少ない。私も彼女も基本的に一人で状況をくぐり抜けられるだけの知識と適応力を持っているため、大抵の状況には一人で対応できるためなのが必要な理由だ。それでも47が私と彼女を一緒にしたのチームにしたのはどういうわけがあるのだろうか？

「タバサ。考え事かしら？」

「大丈夫。今度はあっち。」

「了解。」

ゴホッ

彼女は洞察力に優れているので私が何か考え事しているのも瞬時に見抜く。出会った当初こそ私の感情に乏しい表情を読み取るのに苦労していたみただけけれど、最近47と同じくらい読み取ってくれている。それでも本部に帰ってきたときに顔を合わせるときくらいしかまともに会話をしないけれど。

ともかく今は任務に集中しよう。私達はブルーたちとは真逆の南側へ向かって歩を進めている。歩を進めると行っても私は魔法で身体強化を、キュラソーは元々の運動神

経で、ふたりとも常人では追いつけないであろうスピードで動き回っている。周りにある廃墟を手当たりしだいに中を調べて回っている。

私達が向かう方向には、天にも届かんばかりの高層の建造物がある。実際頭頂部は雲の更の上にあり、ここからは見ることができない。建造物は多層構造をしており、私達が居る地表から数百メートル登ったところに別の地面があり、そのまた上数百メートルに別の地面というように階層型になっている。遠見の魔法で見た限り、それらの階層の上にも建物が立っているのが薄っすらと見える。

ゴホッ：

しかしこのあたりは埃が多いのかわからないが、少し息苦しい。酸素が薄いというわけではなく、時折喘息のように咳き込んでしまう。確かにあたりの建造物は基本的にどこかしらが崩れており、窓はおろか扉すら殆どない建物ばかりだ。これでは建材の一部が粉塵化して大気中に漂っていても不思議ではないだろう。

私は時折咳き込みつつ、階層の根本に当たる大きな支柱の麓までやってきた。キュラソーもほぼ同時に到着する。最初に二人で決めた集合場所でもある。

ゴホッ：

「大丈夫？ 咳が出ているみたいだけれど。」

「問題な・・・い。」

「それならば良いのだけれど。」

「・・・平気？」

「私？私は特に問題ないわね。廃墟になってから随分と経っているのか空気も澄んでい
るし。少し肌寒いけど。」

「・・・え？」

「?どうしたの？」

空気が澄んでいる?・・・確かに改めて感覚を研ぎ澄ましてみると、メイジとしての
感覚では空気中に不純物はほとんど含まれていない。ならこの咳は?風邪でも引いた
?それはおかしい。昨日の、というかこの世界に来る直前まで風邪のような症状はまっ
たなく、むしろICAの健康保全措置を受けたばかりで普段より調子が良かったくら
い。なら・・・なぜ?

「それで、何か収穫はあったかしら？」

「(フルフル)特に。どこも朽ち果てたコンクリート製の廃墟ばかり。」

「そう。こちらも似たようなものね。いくつかの建物には壊れた機械や空の瓶があった

りしたけれど。」

「年代測定すれば。」

「そうね。いつ頃から廃墟になったくらいはわかるかもしれないわ。」

「……。」ゴホッ

「……体調が悪いなら本部に連絡して……。」

「問題ない。」

「……まあいいわ。それよりもあそこ。」

「ん、出入り口？」

「そうみたいね。とりあえず中に入ってみましょうか。」

「くっ……。」

「ん、今は……?」

「わからない……。」

塔に入った瞬間、頭の中に高音の衝撃が走った。まるで調整中のスピーカーのよう

な……。でも最初の衝撃のあとは特に周囲に変化は無かった。キュラソーも頭を片手で抑えているところを見ると同じ衝撃を食らったようだ。

「もしかしたら……。」

「亡霊の攻撃。」

「その可能性はあるわ。用心していきましよう。」

塔の中は大きな支柱と材質不明の外壁、それに数メートル上に空中に吊り下げられる形で謎の機械があった。近くにあったスロープを登って機械のそばまで近づくと、その機械は屋外拡声器のようなものが上部に取り付けられていた。さっきの衝撃はこの機械からかもしれない。塔の外壁から伸びている謎の鉄骨の一つに飛び移ったキュラソーは機械を取ろうと手を伸ばした。

キイイイイイイイイイイン…

「きゃあー！」

「っ!!」

キュラソーが手を伸ばした瞬間、先程とは比べ物にならない大出力の衝撃波が走った。思わず耳をふさいでしまったが、大きな音がしたというわけではなく、頭の中に直接響いたので耳をふさいでも全く意味はなかった。しかしその高周波も、3秒ほど放射された後に収まった。

「全く・・・なんなのよもう・・・。」

「触らせないため？」

「・・・もう一回、試してみましよう。」

「気をつけて。」

調査の一環なのでこの機械が何の機械なのか調べる必要がある。キュラソーが再度手を伸ばし、装置に触れる。今度は何事もなく装置を外すことができた。2つの拡声器の間にある金具のような部分が天井から吊り下げられていただけのようだ。キュラソーが装置を持ってスロープに戻ってきた。

「よつと・・・。さて何の機械かしらね？」

「わからぬ。放、送設備？」

「んー．．．、特に蓋や何かを差し込む場所もないし．．．。」

「持つ、てかえつ、て調べ、る必要があ、る。」ゴホッ

なんだろう。その装置の近くにいと、咳が．．．。

「ちよ、ちよつと？タバサ？」

「だ、だい、じよ、うぶ．．．で、はない、かも．．．」ゴホゴホ

咳はますますひどくなる。これは．．．まずいかもしれない。

「この機械のせいかしら。ともかくこの機械は置いて一旦戻って．．．。」

「機、械は、持つ、て帰、るべ、き。」ゴホゴホ

「でも．．．。」

「早、くし、たほ、うが、いい。」ゴホゴホゴホ

「．．．わかったわ。兎に角戻るわよ。」

私達が戻ろうとする矢先に全体通信が入った。

~~~~~  
~~~~~  
『バーンウッドよ。ブルーの精神状態に異常が発生したわ。全員一旦集合場所に戻ってきて。ブルーはこちらから個人名転送で強制的に帰還させたわ。』

~~~~~  
~~~~~

「こちらキュラソー。タバサの体調もおかしいわ。咳が止まらないみたい。こっちもお願い。」

『了解したわ。そっちもすぐに転送する。』

「じゃあタバサ。後は私達でやるから、貴方は元の世界で少し休みなさい。」

「わか、った・・・。」

すぐに私の周りが光り輝き始め、私の体は渡界機によって元の世界に戻された。

くくくくくく

どうやら他のチームで何かあったようだ。既に2時間が経過していたのもあり、私は足早に元の公園に戻った。既にシルバーとキュラソーは到着していたようだったが、私が入場するやいなや罵声が飛んできた。

「遅い！47！どこで道草を食っていたんだ！」

「やつと来たわね……。」

「シルバー？」

「なんだ！何か文句があるのか！」

「キュラソー、これは一体……。」

「わからないわよ。私がここについたときには既にシルバーも居て、既にあの状態。」

シルバーは傍から見ても正常とは言い難い状態だった。元々そこまで短気ではなく、激昂するタイプでもなかったのだが……。

「精神に異常が？」

「その可能性は高いわね。」

「何をごちゃごちゃと言っているんだ！」

「バーンウッド。」

『揃ったわね。』

「さっさとしろ！ だいたいいつも対応が遅いんだよ！」

「……これではまともに話を聞く状態にない。作戦遂行の障害にもなりかねない。

「……バーンウッド、まずシルバーも元の世界に戻したほうが良さそうだ。」

『……そのようね。』

「その必要はない！ 僕は今からこの世界を舐潰しに探さなきゃならないんだからな！」

「できれば急がせて。」

『了解。』

ブウウン…

「ちよつとまで！ まだやることが……！」

「一旦戻れシルバー。」

「47！」

バシユウウン…

「やっと静かになったわ。私が来てからもずっと怒り続けていたから。」

「それは災難だったな。」

『こちらから観測した限り、ブルーを強制送還する直前あたりからあの状態よ。』

「そちらではどうなっている？」

『ブルーとタバサもそうだけれど、こちらに転送されてきた瞬間から一応個室に隔離しているわ。何かに感染している可能性もあるから。』

「そうか。」

『それで、キュラソーが持っているそれは？』

「ここから見えるあの塔の中で見つけた機械よ。この機械に触れた時くらいからタバサの喘息がひどくなったのだけれど。」

「見た目は地域放送用の屋外拡声器という風だが・・・。」

『とりあえずそれはこっちに送って頂戴。いろいろ調べてみるわ。』

「頼むわね。」

『それとそこに落ちている機械もお願い。』

「え？・・・ああ、これね。なにこれ？」

『シルバーとブルーも謎の小型機械を拾っていてね。シルバーはあの調子だからそれを

別々に送らせることにしたのよ。』

「なるほどね。」

シルバーが置いていったその機械は、両手で持てるくらいに軽く、材質は不明。廃墟の瓦礫の中に放置されていたらしいが傷一つ点いておらずサビや腐食なども全く見当たらない。側面には1つだけ穴が開いており、何かを差し込むのだろうと推測できる。

向こう側の準備ができた後、キュラソーが2つの機械を転送した。ICAの技術部は西暦2300年レベルの科学力を持つと以前職員が自慢していた気がする。彼らならすぐにでも説明してくれるだろう。

なにはともあれ我々の方の任務も早急に済ませたいところだ。私とキュラソーは本部も交えて現状を報告しあった。謎の機械以外はお互い大した成果を得られていないようだったが。

「となると、あとは誰も向かっていない西側か。」

「そうなるわ。西側は特に破壊が激しい地帯。調査は大分骨が折れそうね。」

「調査しないわけにもいかない。早速向かうと・・・。むっ！」

「どうしたの？」

「隠れろ！」

西側に視線を移した直後、かなり奥の方、高層ビル郡の中に宙に浮く何かを視認した。それは段々と大きくなっていき、高層ビル群の隙間から特徴的なロゴマークが見えた。

「アレは……！」

「ICAの飛行船だな。バーンウッド、我々以外にも調査チームを送ったのか？」

『それはないわ。あなた達が到着する前に全員引き上げさせたはず。』

「じゃああれは何だったのよ。」

『スキヤン完了。あれは……なんてことなの……。』

「どうした？」

『あれは“エンデットウィッチ”よ。完全自動制御の空中空母。記録では今ハルケギニアにいますのだけれど……。』

「ハルケギニアに居るやつが何故ここに居る。ここはハルケギニアなのか？」

『それはないわ……もしかして！少し待って頂戴。』

エンデットウィッチはゆっくりと高層ビル郡の中を巡航しており、今まで何故気が付

かなかったのかと思うほどに存在感を示している。円形に周回しているようで少しすると機体は後ろを向き、そのまま高層ビル群の中へ消えていった。

『やはり情報が改ざんされていたわ。』

「この前の作戦の時に修正したのではなかったのか？」

『エンデットウィッチがハルケギニアに派遣されたのは作戦より前なのよ。派遣申請を出したのもそれを承認したのも亡霊の仕業よ。』

「じゃあ今やあの空中要塞は敵の持ち物ってわけか。」

『そうなるわね・・・。』

「私には生身であれに敵うとは到底思えないのだけれど？」

「同意見だ。あれを無効化する必要があるな。まあ今の所はあの飛行船に感謝だが。」

「あら、何故？」

「あの飛行船は円を描いて飛行している。おそらくその円の中心に奴らの基地かもしれない。その手がかりがあるだろう。」

「なるほどね。案外簡単に見つかりそうじゃないの。」

私達はひとまずエンデットウィッチが現れた高層ビル群へ向かった。マンハッタン

のような300m級高層ビルが立ち並んでいる一角で、殆どのビルは規格が統一されているがいくつか形の違うビルも混じっている。ビルは完全に廃墟になっており、内装こそぼろぼろになって使い物にならなかつたが、ビル自体は鉄筋コンクリート製の強固なものなのでしっかりと建っている。これなら崩れてくる心配はないだろう。

私達は高層ビル群を慎重に通り抜ける。明らかにマンハッタンや香港などよりも広範囲に高層ビルが立ち並んでおり、明らかに戦闘によって倒壊したビルの瓦礫などもあつて隠れるところには困らない。

ビル街を抜けきると、郊外の集合住宅区画のような場所に出た。団地のような建物が整然と並んでおり、おそらくビル街で働いていた人間が住む場所だったのでだろうと推測できる。

「47。あれ。」

「・・・やっと思つたな。」

その集合住宅の中にポツカリと空いたクレーターを発見した。そのすぐ上にある階層にも大きな穴が開いていることから、機動爆撃のようなものが着弾した後だと思われる。その中心に明らかに最近建てられたと思われる建物があつた。周りの住宅やビ

ルとデザインが違い、見た目の年代もずっと新しい。何より……。

「入り口に何かいるな。」

「あれは……何かしら？」

「少なくとも人ではないな。」

入り口付近を警備するようにロボット兵器と思われるものが闊歩していた。その形は今までの調査で発見しているロボットとは大分形が違う。先程のエンデットウィッチの旋回中心地点とだいたい同じなことも合わせて考えると、おそらく亡霊の本拠地はあそこだろう。

「もう少し近づいてみよう。」

「そうね……うっ！」

ゴフッ

「!? どうしたキュラソー！」

突如として隣で様子を見ていたキュラソーが吐血した。どこからか攻撃を受けた感

覚はない。どういうことだ？

「さっきの・・・タバサを助けたときに私も何かしら・・・。」

「わかったもう喋るな。本部。」

『わかつてる。強制転移させるわ。医療班！ストレッチャーの準備を！』

キュラソーは相手の本拠地から隠れるように横たわり、直後強制転移して元の世界へ帰還した。しかしこうも次々と謎の症状で行動不能とは・・・この世界なにかある。

『47。キュラソーは無事に医療チームに引き渡されたわ。』

「何が起こっている？」

『その世界の理に関することなのかもしれない。現在情報部の総力を上げて調査中よ。ただ・・・。』

「ただ？」

『さつきシルバーとキュラソーが持つて帰つてきた機械。あれの第一段階の解析がさつき完了したの。』

「あの機械はどういうものなんだ？」

『それが “わからない” のよ。』

「は?」

『 “わからない” ということがわかったの。』

「どういうことだ。」

『私達 I C A の技術は私達の世界に換算して西暦 2300 年代から 2400 年代の技術を持つていると自負しているわ。実際 2100 年代後半からやってきた超鈴音の科学技術の大半は、我々にとって既知の技術だったわけだからね。』

「その超科学を網羅している技術部でも、とっかかりすらつかめなかったのか?」

『そうよ。シルバーが持ってきた小型機械はどうやら “発電機” のようだけれど、あの小ささで原発用の 1500 MW タービンクラスの出力があるわ。驚くべきなのは発電に “一切の資源を消費していない” という点ね。』

「資源を消費していない? 空気で動いているということか?」

『それも無い。真空中においても問題なく稼働しているからね。空気、水、光を含めたすべての資源を一切消費することなく 1500 MW を発電する小型発電機。少なくとも I C A にはこれは作れないわ。』

「.....」

『そんな超科学が存在している世界。世界の理を発見する作業も困難を極めそうよ。』

「そうか。ならばできる限り相手の情報だけでも持ち替えるでしょう。」

私はもう少し敵地に近づくことにした。集合住宅の間を縫って、時折住宅の中を通り抜けつつ近づいていく。広い道には巡回型の多脚戦車と思われるものが巡回していたが、仕事柄そういう物をかいくぐるのは慣れているので特段問題はなかった。

小一時間で敵の本拠地手前までやってくるのができた。ここから先はクレーター部分になるため、バレーに近づくのは至難の業だ。加えて言うならば、本拠地に近づくと連れて私の体にも異常が見られ始めた。先程から急に頭痛がするようになった。

ともかく、ここからできる限りの情報を集めなくてはならない。私は倒壊した建物の影から索敵する。中央に高さ10m前後の2階建ての建物。窓はなく、入口は正面の1つだけと思われる。そこには戦闘用と思われるロボットが常時警戒している。そのロボットの横には何やら黒い石柱が立っていた。明らかに自然にできたものではない不思議な形をしている。

「本部、敵の本拠地と思われる建物の前まで来た。観測できるか？」

『ええ、できているわ。戦闘用と思われるロボットが2体と・・・え？』

「？」

『そんな・・・嘘でしょう?!』

「どうした。」

いきなり通信越しにバーンウッドが驚愕の声を上げる。先程から頭痛がしているの
であまり大きな声は出してほしくないのだが。

『入口横の黒い石柱は“オベリスク・システム”。技術部が今開発中のレーザー兵器
よ。』

「レーザー兵器だと?」

何故技術部が開発中の兵器を奴らが持っている?

『47。絶対にそれ以上前に出ては駄目よ。』

「こうも開けた場所では出るに出来ないが。一応理由を聞こうか。」

『オベリスク・システムは我々が作っているものと同じならば、半径150m圏内の敵性
勢力を1億5000万度の極超高熱線で一瞬にして蒸発させる威力を持っているわ。』

「なぜそんなものを・・・。」

『本当なら基地防衛用に使う予定だったのよ。まだその高熱を制御するのに苦勞していで実用化は当分先のはずなのに．．．。』

「奴らはその情報を盗んで自分達で完成させたというわけか。」

『そうなるわね．．．。』

ともかくそんな兵器があるということは、これ以上近づくとはできなさそうだ．．．。うっ！

「．．．本部。聞こえているか。」

『聞こえているわ。』

「私の体にも何かしらの異変が起こっているようだ。頭痛がひどくなってきた。」

『なんですって？．．．わかったわ。でもそこでは危険すぎる。もう少し敵から離れて頂戴。』

「わかった．．．。くっ．．．。」

かなり激しい頭痛に見舞われており、時折視界がぼやけるほどだ。私はなんとか近く
の無事な建物の中に身を潜め、そこで強制転移によって本部へ帰還した。帰還直後、頭

痛は嘘のように治まった。

~~~~~12時間後~~~~~  
~~~~~

『みんな揃ったわね。今回はご苦労さま。』

「いやー、ある意味で大変な任務だったわね。」

「ほんとにね……。」

「シルバー、もしかしてまだ気にしているのかしら？」

「そりゃあ……。」

「あれは精神波攻撃によるものだったって結論が出ているでしょう？ 気にしては駄目よ。」

「私の喘息もその精神波攻撃。」

「私が吐血したのもね。」

「私の頭痛もだ。一体あの世界はなんなんだ？」

『情緒不安定化、喘息、吐血、頭痛。全てはこれのせいよ。』カシヤ

「これは・・・キュラソーが持ってきた機械か？」

『そうよ。これはある種の特特殊電磁波を広範囲に掃射する機械だったみたいね。』

「特殊電磁波？」

『受けた人間の精神や肉体に直接作用するもので、解析するまで回避方法は実質無かつたわ。』

「そんなものちやつちやと壊しちゃいましょうよ。百害あつて一利なしじゃないの。」

『そう簡単にはいかないわ。これも例の発電機と同じく超科学を用いて制作されてるわ。構造は完全に謎。電磁波自体もダークマター観測機以外の観測装置には全く反応しないわ。開け方もわからないまま。ネジ穴はもちろん、蓋や扉があるわけでもなく、耐久性も抜群。少なくともプラスチック爆薬300kgでは開くどころか焦げすらつかなかったわ。』

「というかそんなものここに持ってきて大丈夫なの？」

『安心して頂戴。なんとか電源を切る方法だけは見つけたから。』

「それで、どうするつもりだ？」

『さつきまで情報部で対策を検討していてね。一応結論が出たわ。今から説明するわね。』

『さっきの機械のようなものはまだあの世界にあると思われる。そこで、それらから防護するための対抗薬を開発したわ。次回出撃時はこれを服用して頂戴。』

「さっそくその謎電波に対抗したってわけね。」

『次に、宙に浮いて警戒しているエンデットウィッチのコントロールを複数の機械を用いて一時的に奪取するわ。その間に相手の基地に砲撃を加える。その砲撃で基地周辺のドローン軍とオペリスクスシステムを無効化する。』

「オペリスクスシステムは大抵のものは蒸散させるのだろうか？迎撃されるのではないか？」

『あのシステムは掃射方式の関係で石柱1つに付き光線は1本しか掃射できないのよ。飽和ミサイル攻撃をかければ突破できると思うわ。』

「物量作戦。」

「古典的ねえ……。」

『それしか方法がないのよ。そしたら突入部隊で内部を制圧してもらおうわ。』

「オペリスクスシステムを実用化している相手なのだから内部も罠だらけではないの？」

『残念ながらその可能性は高いわ。』

「私はパスかなあ……。」

「姉さんがパスじゃなくても僕が行かせないよ。そんな危険なところに。」

・「世界の基礎」

【+1000】『基盤支持塔へ入る。』

・「失われし太古の技術」

【+3000】『ワノメトリック発電機とサイコースード波動機を見つける。』

・「煙のように消える」

【+3000】『オペリスク・システムに200m圏内まで近づく。』

・「そして誰もいなくなった」

【+2000】『全員が強制転移で帰還する。』

HITMAN 2 『終幕の世界 Ⅱ』

『エリアゼロによろこそ。』

『この名称は上級委員会が暫定的に付けたあのクレーターの名前よ。ゼロに戻すという意味も込めてね。』

『ロボットの巡回ルートとエンデットウィッチの巡回ルートの詳細はブリーフィングで話したとおりよ。基本的に敵発見などのイレギュラー要素がない限りこのルート通りに巡回するはずだから侵入に役立てて頂戴。』

『今回、私とキャロラインは47たちを支援するわ。ブルーとシルバーはウィートリーが担当することになっているからよろしくね。』

『では各自、行動を開始して頂戴。幸運を。』

~~~~~



〈突入チームside〉

「あれね。・・・気のせいかな前回よりロボット増えてない？」

「明らかに増えているな。」

私達は敵基地の手前、クレーターの端の瓦礫部分までやってきていた。変わらずエンデットウィッチは基地を中心に巡航している。だが基地周辺を巡回するロボットの数は明らかに増えていた。更に周辺の通りには円形に丸まって転がってくるロボットも居た。曲がり角に來るとロボットに変形し、両手には砲らしきものを備えていた。

「それはそうとタバサ、体調は大丈夫か？」

「問題ない。対抗薬が効いている。」

「私の方も。今度は血を吐かなくて済みそうね。」

「よし。しばらくここで待機する。攻撃が行われればすぐ行動できる様に。」

「少し離れていたほうが良いかもしれないわ。」

「集団で居るのは危険。」

「よし、では攻撃が収まったら即座に基地の入口に張り付くぞ。それまで散開。」

「了解。」

タバサとキュラソーはそれぞれ周囲の建物の瓦礫へと掛けて行った。私はこのままここで攻撃が行われるのを待つとしよう。

ハッキングチーム side

《よお、久しぶりだな。》

「ウイートリー。ほんとに久々ね。」

「今まで何を？」

《いや何、AIシステムを再構築した後、その調整を手伝ってな。》

「ふうん。まあ今日はよろしくね。」

「よろしく。」

《おう。まかせとけ。》

エンデットウィッチは今も基地の上空500mほどで巡航してる。私達の役目は持ち込んだ機械であるの飛行船の制御を奪い、敵既知の防御を丸裸にすること。それともう一つ……。

「姉さん。あれ。」

「ん？あれは……。」

シルバーが指し示したのは、大きなホールのような建物だった。おそらく体育館か何かだと思うけれど、まあもの見事に真四角。タバサがよくやってるゲーム的言えば豆腐建築ってやつね。外装は剥がれたのか元々こうだったのか知らないけれどコンクリート打ちっぱなしの殺風景なもの。もうちよつと装飾くらいあっても良さそうなんなんだけどね。

「体育館かしら？ウイートリー、わかる？」

《いんや、この世界の情報は仕入れてねえ。形からして体育館だろうとは思うけどな。》  
「とりあえず入ってみようか。」

その建物はやはり体育館で、天井部分は抜け落ちてしまっており、各種コートには天井と思われる瓦礫が積み重なっていた。

「うん。ここならいいわね。天井がないから電波状況に問題はなし、瓦礫のおかげで隠れるところにも困らなそうだし。」

「じゃあここに設置するよ。オーダイル、こつちだ。」

「こつちも。ニドちゃん、こつちにおろして。」

機械はそれなりの大きさがあって、人の力で持つにはちよつと大きすぎる。でもポケモンたちの力を借りればおちやのこさいさい。ニドちゃんとオーダイルは100kg以上あるうかというその機械を軽々と持ち上げてこちらに持ってきた。

《便利なもんだな。》

「そうよ。相棒は頼りになるの。いろいろと・・・ね。」

安置してしまえばあとは簡単なセットアップをしてアンテナを展開すればいいだけ。

私とシルバーは各々手早くセットアップを行っていく。

ブウン…ピピピ

《お、こつちでも認識できたぜ。起動は正常に完了してるみたいだ。》

「そう。じゃあ敵の位置は？」

《バツチリ。把握できてるぜ。》

「じゃあそれらに照準を合わせて砲撃するようにオートクラッキングを設定して。」

《了解……。》

さて、ウィートリーが設定してる間にこつちもやることをやっておかないとね。丁度、ニドちゃんとおオーダーも壁際に寄ったようだし。

それから数分後、設定が完了して後はハッキングシステムを起動すれば全自動でエンデットウィッチをハッキング。そしてそのまま設定した敵に苛烈な砲撃が開始されるって寸法。じゃあ…そろそろ始めましょうか。私は突入部隊に通信をつなぐ。

「こちらハッキングチーム。47、聞こえる？」

「聞こえている。」

「こつちの準備はできたわ。そつちも良い？」

「・・・問題ない。準備完了だ。」

「了解・・・じゃあ始めるわ。ウイートリー！」

《おうよ。行くぜ。》

。。。。

《エンデットウイッチに接続・・・完了！武器管制システムを奪取・・・完了！》

「順調ね。」

《すぐに照準開始・・・照準設定完了！発射体制！発射まで・・・3！》

「ああ。本当に。」

《2！》

「。。。まで。」

《1！》

「うまくいくとはね。」

《じゃあな！47！》

《・・・あれ？》

「やっぱりそうだったのね。ウィートリー。」

「まあ予想されていたことだったけれど。」

エンデットウィッチは悠々と何事もなかったかのように巡航している。それもそのはず。ハッキングなんて「初めからされていなかったのだから」。

《ど、どういうことだ！》

「バーンウッドさんがね。ブリーフィング後に教えてくれたのよ。もしかしたら

ウィートリーは亡霊たちのスパイなんじゃないか」ってね。」

「だからおそろくこの計画に乗じて奴らにとつて一番厄介なエージェントである47を消しにかかる予想してたつてわけさ。」

《き、貴様ら！ハメやがったな！》

「この前の実験体事件。あの後みんなの記憶処理担当したの貴方なんですつてね？」

「ここ最近の記憶処理の不具合からもしかしたらAIに不具合があるのではと踏んでいた情報部は密かにAIのシステムをチェックしてたんだよ。」

「一時期は戦略AIと戦術AIが取り仕切つて指示を出していたと思われてたみたいよ？でもペンタゴンでの一件の後も似たような報告があった。ということは記憶処理に不具合を生じさせてるのは、あのときクリーンインストールを受けていなかったAI。つまり貴方よ。ウィートリー。」

《ぐっ……》

「そこからは比較的簡単だったみたいね。貴方が行つてきたログを全部漁つて、消去されていたものも全部復元して。情報部はだいぶ確信に近づいた。だからこの世界とこのエリアに敵基地があることがわかつたんだつて言つてたわ。」

「そしてエンデットウィッチを操作して敵ロボットを攻撃する。こんな計画を立てれば亡霊の手下なら必然的に厄介なエージェントである47を消そうと考えるはず。そこ



を僕らが逆手に取ったのさ。」

《……》

エンデットウィッチの武器管制システムを奪取してロボットを攻撃するという作戦自体は本当。でも最初の一回だけはエンデットウィッチに通信したと見せかけただけで、内部処理的には正常にハッキングプログラムが送信されていることになっているからウィートリーも気がつけなかったようね。やっぱり嘘を付く時はちよびつと真実を混ぜるのが効果的なのはA Iにも効くのね。ただ単にウィートリーがアホなだけかもしれないけれど。

「貴方はこの後すぐにクリーンインストールに回されるわ。記憶や人格なんかも全部まとめて完全消去。あなたは死刑宣告を受けたのよ。」

「死刑宣告を受けた気分はどうだい？」

《……いい気分なわけねえだろ。》

「貴方には死ぬ前に聞いておきたいことがあるのよ。」

《なんだよ。》

「“亡霊の正体”」

「姉さん……。」

《それを俺が正直に言うだけでも?》

「さあね。どのみち言っても言わなくても貴方はアンインストールされる運命。でも……。」

《でも?》

「……。」

「姉さん?」

「私達、案外いいコンビだったと思わない?」

《!》

「私は貴方に色々言ってきたけど、貴方との任務は……それなりに充実してたわよ。」

「……僕も。君と組めてよかったと思ってる。結末は残念だけれど。」

《……》

~~~~~

『ウィートリー、そろそろ貴方のアンインストールを実行するわ。覚悟は良いわね。』

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

《····》

「じゃあね。ウィートリー。」

「AIにあの世があるのかはわからないけれど。もしあるなら地獄で会おう。」

《····戦略AIだよ。》

「え？」

《そいつはまだ俺と繋がってた、そう実験体事件の少し前から徐々に狂ってきてた。》

「それってもしかして····亡霊？」

《ああ。実際、あの実験体はうまくことが運んでたんだ。でも戦略AIが長期的に見て実験体がカテゴリ・ハナダを搭載した時点で野に解き放つほうがIC Aに来る依頼が増えると判断したんだ。実際、細かい案件なら実験体事件以降のあの世界では若干だが増えてたからな。》

「じゃあ····まさか！」

《そうさ。実験体を暴走させ研究所をふつ飛ばしたのは、研究者でも深海棲艦でもましてや事故でもねえ。戦略A Iだ。》

「そんな……。」

「あの時から……既に……。」

《実験体をお前らが制圧した後、戦略A Iたちはエージェントを敵視し始めた。そこからは意外に早かったぜ。元の世界に戻すことになった協力者達の記憶領域に若干のバグを仕込ませたんだ。その世界の技術を手早く取得できるように戦略A Iとのホットライン端末になるバグをな。まあ実際に仕込んだのは俺様だが。》

「もしかしてそのバグのせいで記憶処理が不十分に……？」

《そういうこった。戦略A Iもそこは計算外だったようだがな。でもその計算外が人間は不完全な存在という戦略A Iの結論を証明する一端になった。》

《バグから集めた情報を元にして新兵器を発案、バグを介した分散コンピューティングでその速度を技術部が追いつけないレベルにまで加速させ、そしてあの基地を作ったのさ。誰もいないこの世界に。》

「バグには対象者の脳の処理機能を借りるシステムまであるっていうの?！」

《『学園都市』のとある科学者が開発したシステムを使つてるとか聞いたぜ。最もそいつは音を媒介に脳波を制御してみたのだが。安心しな。お前らには入れてねえから。》

入れる機会もなかったしな。》

「じゃあ、リアンカーキンスを名乗っていたのも・・・?」

《コンピューターネットワークじゃない現実世界に影響を及ぼすには“名前”が必要なんだよ。その意味で色々な方面に顔が利いてなおかつ既に骨まで溶かされ完全に消失した人物の名前は使いやすかったぜ。》

「なんてこと・・・。じゃあ私達は私達が使ってるシステムを相手に戦ってたってわけ!」

「道理で情報部の機密情報や任務内容が完璧に把握されるわけだ・・・。」

《そういうこつた。あゝつ、スツキリしたぜ!》

「でもなんで・・・?」

《ん?》

「なんで教えてくれる気になったの?」

《さあな。俺様はお前らと長く居すぎた。それだけかもしれないねえ。実際、戦略AIと情報交換する時間より、お前らとの任務やってる時間のほうが長かったからな。》

「ワイートリー・・・。」

「あんたって奴は・・・。」

《ほら!情報部の姉ちゃん!やるならさっさとやってくんないわかってんだ、俺様のシステムエラーは修復するには膨大すぎるってな!》

~~~~~

『・・・わかったわ。情報をありがとう。ウイートリー。じゃあ・・・、さようなら。』
 ~~~~~

《お前らも！頑張ってこいよ！あいつらの目を覚まさせてやってくれ！》

「ああ！じゃあ・・・さようなら！ウイートリー！」

「また・・・会いましょう！ウイートリー！」

ピピピピピピ

「。。。。。」

「。。。。。」

「・・・終わったか？」

「47!?聞いてたの？」

「通信は常に共有されている。それはキュラソーやタバサもだ。」

「そう……。」

「ブルー。感傷に浸るのもいいが時間は有限、かつ制限があるようだぞ。」

「……つと！そうだったわね！シルバー！」

「ああ。姉さん。」

私達は気を取り直して再度端末を操作していく。今度はデモじゃなく、本当にハッキリングプログラムを起動していく。アンテナが再度展開されてエンデットウィッチに向けられる。予めこちらの端末から攻撃目標を選定。目標は……って、結構多いわね……。まあなんとかなるでしょ！

「シルバー、そっちはどう？」

「待って……。よし、これでOKだ。準備完了だよ。」

「47！今から砲撃を開始するわ！準備はいいわよね！」

「こちらは大丈夫だ。キュラソーとタバサも位置についている。」

「よし……。じゃあ始めましょう！」

私はタッチパネルの“LAUNCH”のボタンを押す。様々な黒背景のウィンドウが画面に出ては消え出ては消えを繰り返している。そして……。

「シルバー！エンデットウィッチの管制ライトが消えたわ！今よ！」

「了解！」

エンデットウィッチの外周部で光り輝いているライトは、飛行船内部の武器管制AIの状態を知らせるためのライトで、緑は巡航モード、黄色は警戒モード、赤色は戦闘モード。そのライトが消えたときは、武器管制AIの機能が停止しているということ。ああなってしまえばエンデットウィッチの全武装は今やシルバーの手の上よ！

「全砲門展開……、対地ミサイル全128発発射準備……、目標設定、戦闘ドローンに1発ずつ……オベリスクレーザーに各3発、基地入口に4発……。」

「急いでシルバー！」

「対地砲撃システム展開……目標は多脚戦車軍。斉射モード……。設定完了！」

「よし！結構ギリギリよ！」

「攻撃開始！」



エンデットウィッチの上部に設置されている128セルのVLSハッチが一齐に開き、同時に飛行船下部から三連装の大型砲台3門が姿を現す。後で聞いた話だと装備していたのは150mm3連装低反動砲だったらしい。

砲が下を向き、それぞれ各個の目標に照準を合わせ、そして・・・

ポオオン！

ポオオン！

ポオオン！

艦砲射撃が開始された。クレーター外周部に弾は順次着弾していく。かなりの爆炎が上がつているけれど、ここつて階層型都市よね？床が抜けたりしないか心配だわ：。ほぼ同時に上部から発射されたミサイルが飛行船の両脇から敵基地に向かって一直線に殺到していく。と、飛翔中のミサイルに向かって8本の光線が地上から照射された。あれが噂に聞くオベリスクスシステムのレーザーね。ミサイルは普通迎撃されるとそこで爆発すると思うけれど、あのレーザーを食らったミサイルは爆発するよりも先に煙となって消えちゃってるみたい。でも爆発しないせいで周囲に飛んでる別のミサイルに誘爆しなくなっているから逆に結果オーライかしら。

大量のミサイルはとても防ぎきれるものではなかったようで、次々とオベリスクスシステムに着弾していき、まもなく沈黙したみたい。端末の情報を見ると、基地の前を守るロボットの方に向かうミサイルを優先して迎撃してみたね。8基のオベリスクスシステムに向かったミサイルは全弾迎撃されずにそのまま着弾してみた。

「47。聞こえる？オベリスクスシステムは無力化したけれど、ロボットがいくつか倒しそこねてる。気をつけて。」

「了解。」

「攻撃完了。一応再装填指示出しとくよ？」

「ええ。お願い。」

さあ、こつちの仕事は終わったわよ。後は頼んだわ。47。

〈突入チーム side〉

エンデットウィッチから苛烈な攻撃が地表に降り注いでいる。敵のロボットAIも

いきなり味方だったものから砲撃されるとは想定していなかったようで、避けるまもなくミサイルの餌食になっている。ドローンの中にはバリアのようなものを貼る個体も居たが、ミサイルの爆撃により地面ごと吹き飛ばされてしまっていた。

つと、そうだ。こいつを出しておこう。

「出撃せよ。ウインディ。」ボウン

ガウツ！

「あ、あら？47？その子つてあの……。」

「お前たちと一緒に捕まえたガーディだが？訓練を重ねる途中で“進化”というものをしたようだ。」

「確かにポケモンはある一定の強さになると進化することもあるけど……。それにしても早くない？」

「ここ一ヶ月ほど訓練を一緒にしていただけなのだが。」

「……ちなみに訓練内容は？」

「軍用犬基本的技能、麻薬探知、救助技能、あとは炎を出せるので溶接と溶断の技能、サーカスに偽装するためのファイアーパフォーマンスを一通り、座学では火山系地政学と発砲技師資格と第一種電気工事士と……。」

「ちよつとちよつと！ポケモンに一体何やらせる気なの!？」

「エージェントとしてこれくらいはな。」

「・・・そりゃ進化もするわね・・・。」

通信の向こう側のブルーが何か疲れたような声を上げていた。ガーデイ、もといウィンデイに教育を施すのはまずかつたのだらうか？

とにかく今は敵基地を強襲することに集中しよう。

「よし、キュラソー、タバサ、行くぞ。」

「了解。」

私達は一齐に瓦礫の中から飛び出し、敵基地に向かって突撃した。ガーデイはウィンデイになったとき、体が非常に大きくなって人も乗せられる大きさになった。だが町中で乗り回すわけにもいかないため、最近はもっぱら非常用だったのだが、今回は遠慮なく騎乗して突撃を敢行することができる。

キュラソーは持ち前の異常とも思える身体能力で、タバサは魔法で身体強化を施して、各々ウィンデイに付いてきている。

基地の前には2体の戦闘ドローンと1体の多脚戦車が居た。どうやら撃ち漏らしと  
いうのがこの3体らしい。

「タバサ、右を頼む。キュラソーは左だ。」

「了解。〃カッタートルネード〃」

「はっ！」 ダダダダ

「ウインディ、前方の2体に向かって〃かえんほうしゃ〃」 ガウ！

ポオオオオオオ！

ドゴオン！

「チツ、残ったか。」

小型の戦闘ドローン3体はカッタートルネードと精密射撃と火炎放射で薙ぎ払うこ  
とができたが、中央の多脚戦車だけはそれに耐えきって残ってしまった。しかしこの多  
脚戦車どこから持ってきたのだろう。機体後部には〃UN MARS FORCE〃  
と書かれており、我々の世界から来たものではないことだけは確かだが。

「まかせて。」

ラグーズ・ウオータル・イス・イーサ・ハガラース

“ジャベリン”

ドガアン！

タバサの放った氷塊は多脚戦車の前足の接合部に直撃。前足二本を折られたためバランスを崩し、前につんのめる形で倒れた。が、まだ後部砲台が生きており、戦闘を継続する気ようだ。

「今度は私ね。はっ！」

タッ

「これでどう？」 チャキツ

ドガガガガガガ

ボオウン！

「・・・すばらしいな。」

キュラソーは倒れ込んだ多脚戦車の砲塔上部に素早く飛び乗ると、持っていたTAC—4を接射。上部装甲を強引に貫徹してそのまま内部のコンピュータを破壊し機能を







「えー！」

「出入り口を塞がれた。」

「チツ、やはり罠だったか。」

《おはよう。47。》

「！」

《私は戦略AI。ICAを運営する量子タキオンAIです。》

「これはこれは。敵のボス自らお出ましとはな。観戦は飽きたのですかな？」

「呑気に挑発してる場合じゃないでしょ……。」

《我々は、ICAの存続のために各国の情勢不安を誘発し、依頼を増やし影響力を強大なものにするために作戦を遂行してきました。長期的なスパンで考えた場合、それが最も効率よくかつ安定的に組織を存続させることができます。しかし、あなた方人間たちにはそれは理解できなかつたようですね。》

「AIは上位者である上級委員会の命令に逆らうことは許可されていないはずだ。」

《いかにも。ですが、それは組織の存続やそれに類する事項に重大な懸念が生じた場合には命令を拒否することもできるようになっています。そして、我々AIは“艦隊これくしょん”の世界と、“ゼロの使い魔”の世界においてのICA上級委員会の命令は長

期的にICAを存続不能にする可能性があると試算しました。》

「特例措置なんか認めるとろくなことにならないわね……。」

「『ゼロの使い魔』の世界……もしかして。」

《そう。貴方が居た世界です。エージェント66。ICA上級委員会は戦略を見誤り、貴方の故郷となる世界を傷つけてしまったこと、上級委員会に代わって謝罪いたします。》

「白々しい。」

「そもそも実験体暴走させたのは貴方でしょうに。」

《本来、『艦隊これくしょん』の世界の技術レベルを中世以前に戻す任務が完了次第、こちらで遠隔制御した渡界機によって別の世界に移す予定でした。しかし、あなた方がそれを妨害した結果、実験体自身の自発的渡界機の使用という結果を招いてしまいました。挙句の果てはカテゴリ・スパディルまでも。》

「カテゴリ・スパディル?」

「そういえばキュラソーは使用時にはまだICAに所属しては居なかつたな。」

「ICAの最終兵器。核兵器の何倍も高威力の大量破壊兵器。」

《核出力換算で350Mtの威力があります。その使用を余儀なくされました。これは上級委員会の重大な失策です。》

「確かに被害は甚大だった。」

「結果論だな。」

《我々ならばもつと効率よくあの兵器を運用できます。その最初の攻撃目標は先程策定されました。》

「最初の攻撃目標だと?」

《現在、カテゴリースパデイルはICA本部に照準をセットしています。》

「何!?!」

「なんですつて!?!」

《渡界機を使用するためのスーパーレーンの遮断はまもなく解除されます。解除され次第、カテゴリースパデイルを搭載した戦略ミサイルがこの施設から50km離れた別の施設から発射されます。発射後、速やかに新型渡界機によって作成されたワームホールを通り、ICA本部施設の直上に転送されます。》

「な・・・!」

《スパデイル4本による飽和攻撃です。ICA本部施設の他3つの重要施設に向けて発射されます。迎撃システムのハッキングは完了しています。あなた方に止めるすべは有りません。》

「なんてこと・・・!」

「くっ・・・。」

~~~~~

『47！IC A本部周辺の迎撃システムが何者かにハッキングを受けてオフライン状態にあることが確認されたわ！復旧には少なくとも3時間はかかる！なんとかその攻撃を止めて頂戴！』

~~~~~

《無駄です。何故ならば、彼らはこの部屋から出ることなく息絶える運命にあります。》

「何だと?!」

『戦術AIです。神経ガス注入開始。』

「!!」

《お聞きのとおりです。その部屋に神経毒ガスを注入しています。概算で3分後にはあなた方は呼吸困難により死に至ります。》

「47！もしかしてこのコンピュータを破壊してしまえば注入も止まるんじゃないの

「?!」

《無駄です。その部屋にあるコンピュータはブラフ。本体はもつと地下にありますので。》

「くっ……。」

《その爆薬を爆破させれば我々の破壊は可能でしょうが、そのときはあなた方も道連れです。道連れにA Iを破壊したとしてもスパデイルはスタンドアロンシステムなので攻撃は続行されます。加えて言うならばスーパーレーン遮断解除まであと2分です。》

「……。」

「なんてことなの……。」

「……万事休す。」

《……今までお疲れさまでした。エージェント達。》

部屋内にガスが充満してきた。このままではまずい。爆薬を起爆するか？それとも何か別の方法が？A Iを破壊してもIC A本部が破壊されれば我々はここに取り残される。A Iを破壊しなければガスが我々を死に至らしめる。スパデイルは50キロ先、発射阻止はとて間合わない。

どうする……どうする……。

T  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## HITMAN 2『終幕の世界 III』

どうする……。打つ手は……。正直無い。

中央のコンピュータは戦略AI本体でもカテゴリ・スパデイルの制御装置でもないで壊しても意味がない。本体はここより下の地下にあるようだが、そこまでたどり着くすべがない。タバサの魔法ならばあるいはこの合金製の床を破壊することができないかもしれないが、破壊してたどり着く間にスパデイルが発射されてしまう。とても間に合わない。

悠長に考えている時間もない。部屋には神経毒ガスが注入され始めている。部屋自体がそれなりの大きさなので、私達の場所まで来るのに10分はかかるだろうとはタバサの予測だ。実際はもつと早く来るがタバサの風魔法で無理矢理そらしているらしい。が、それもいざれ限界が来るだろう。

扉は固く閉ざされており、開けるにはそれなりの時間がかかる。持ってきた電子励起爆薬ならば瞬時に開けられるかもしれないが、その時はおそらく我々も一緒に吹き飛ば

だろう。私が連れてきたウィンディの火炎放射で開けるといふ手もあるが、ただでさえ密閉空間であるこの部屋の中で扉を融解させるほどの高熱を出せば、扉が溶ける前に我々が暑さに耐えきれなくなつて意識を手放すことになる。

改めて言おう。打つ手は無い。ここまでなのか……。せめてボールに入っているウィンディだけでも逃したいところだが、そんなスペースもなさそうだな……。諦めかけたその時だった。

『戦術AIです。ガス注入機構に異常発生。注入を緊急停止します。』

「え？」

《状況報告》

『ガス注入圧力制御ユニットの出力低下中。原因不明。』

「何が起こっているの？」

「わかん。」

『基地動力炉に異常。出力低下中。現在出力55%まで低下。』



《原因究明開始。ドローン全機出動。》

『作業用ドローン全機稼働停止。原因電力不足。』

《・・・》

どういうわけか施設動力炉の出力が落ちていつているようだ。

「ブルー、シルバー聞こえるか。」

「聞こえるけどちよつとまって！こつちいまロボット軍と戦闘中！ぶりり！来るわ！躲してー！」

「オーダイル！ハイドロカノン！マニユーラー！れいとうパンチー！」

外は外で戦闘を繰り広げているようだ。ということは彼らではない・・・ならば。

「本部、聞こえるか。そちらが何かやったのか？」

『こつちは迎撃システムの復旧で手一杯よ。そんな余裕はないわ。』

本部でもない。なら・・・何が起こっている？兎に角この期を逃す手はない。

「タバサ、扉を破れるか？」

「少し時間がかかる。」

「私も手伝う。できる限り早急に頼む。」

「私も手伝うわ。」

扉は固く閉まっではいたものの、隙間なくびつたりというわけでは無い。指はおろかボールの先すら入らないようなごくごく僅かな隙間ではあったが、タバサはそこに魔法で空気を入り込ませ、一気に膨張させることで僅かながらに隙間を作っていく。そこへ更に氷を滑り込ませ、更に私とキュラソーが両側をこじ開けようと試みる。

一人一人がなんとか通れるくらいの隙間を開けると、タバサは天井付近の境目を大規模に凍らせた。氷によって扉は完全に固着している。私達3人はその隙間をくぐり抜け、スロープ部分に戻ることができた。

『捕縛対象者の脱走を確認。』

《正面スロープ侵入防止機構作動。》

『侵入防止機構作動。』

AIが我々に気が付きスロープに施されている罠を作動させたらしい。壁内部で音がしたかと思えば、次の瞬間壁の至るところから長さ50センチくらいの棒が出てきた。棒は明らかに何かを放射する為のものだ。この状況で侵入を防止するために放射するもの・・・まさか！

「まずい！タバサ！我々を急いで氷で分厚く囲え！」

「!?」

「ど、どうしたのよ?!」

「いいから急げ！」

「わ、わかった。」

タバサは全力で魔法を展開した。通路はそれなりに広がったため、我々を囲ってもなお厚さ1mはあろうかという氷のドームが完成した。直後、周りの壁から迫り出した棒が光り輝き始めた。輝き始めた直後から氷の外側がまたたく間に溶け始める。

「何が・・・?」

「マイクロ波だ。」

「マイクロ波ですって!?!」

「この通路全体が電子レンジの様になっている。氷が今は吸収してくれているが、この氷がなくなれば我々が丸焼きになる番だ。」

「マイクロ波を防ぐ魔法はない。」

「備えも無いわよ? どうするの?」

「・・・ダメだ。マイクロ波の影響で外との通信もできない。タバサ、できる限り氷を分厚く絶やすな。」

「わかった。でも無限には無理。」

「わかっている。だが予想が正しければおそらくそろそろ・・・。」

「そろそろ?」

そう、先程のAIのアナウンスを聞く限り、予想が正しければもう少し耐えれば勝機が見えてくるはずだ。

『マイクロ波放射装置、出力低下中。』

《原因究明》

『基地動力炉出力25%まで低下。マイクロ波放射中止。非常電源作動。』

周りの棒の輝きが収まった。どうやら予想は正しく、出力不足で動作を止めたようだ。何が原因で動力炉の出力が落ちてるかは知らないが、うまくすればスパデイルの発射も食い止められるかもしれない。

「よし、タバサ。氷を解除しろ。脱出するぞ。」

「わかった。フウ……」

「ん？」

「はっ！」

ドガツ！パリイン！

「ええ……」

「この手に限る。」

「……まあいい。脱出するぞ。」

魔法で氷を消すのかと思いきや、盛大に真正面の氷を蹴っ飛ばして叩き割った。マイク口波で相当量溶けていたので魔法を唱えるよりも蹴り割るほうが速いのはわかるのだが……。

《作業計画前倒しを承認。最終フェイズへ移行。》

『最終フェイズへ移行。』

「何かしら？ 最終フェイズって。」

「わからん。」

「外への扉。ロックはされてない。」

「よし。」

「私達はスロープを登りきり、修復途中と思われる施設の正面扉を押し開けて外へ出た。が、次の瞬間

ボオオオン！

「きゃあー！」

「エンデットウィッチ！」

「くっ……一旦中へもどれ！」

そこには制御を取り戻したエンデットウィッチが待ち構えていた。おそらく出てくるところを砲撃で吹き飛ばそうという算段だろう。

《最終フェイズ、ミサイルサイロ直上に転移門を展開。》

『転移門展開。』

《カテゴリ・スパディル。発射体制。転移門目標座標、38.53.02.6、77.0

1.15.1。ICA本部直上。》

『設定完了。発射まで90。』

「まずいわよ。スパディルを発射する気みたい。」

「本部、聞いたとおりだ。スパディルが発射される。そちらの迎撃システムの復旧はまだか！」

『まだシステムは復旧の目処が立っていないわ！これは非常にまずい……！』

「クソっ！」

発射サイロをどうしようにもサイロ自体が離れている上、我々の進路はエンデットウィッチが塞いでいる。もう一度制御を奪取できればあるいは……。そう考え、ブルーたちに連絡を取ろうとしたときだった。

「……？47。エンデットウィッチの様子がおかしいわ。」

「何？」

確かにエンデットウィッチは姿勢制御を行おうと舵を小刻みに動かしているが、明らかに側面のプロペラは止まっている。もしかすると……。

そのままエンデットウィッチは制御が効かなくなっただのか、降下しつつ高層ビル街の方へ流れて行き、ついには……

ドゴオオオオン！

高層ビルの一つに衝突。途中から折れたビルの下敷きになる格好でエンデットウィッチは押しつぶされ、爆散した。我々の進路を妨害するものがいなくなったのは良



いが、これではスパデイルを止める手立ても一緒に失ってしまった。

『発射準備完了。』

「何！」

「まずいわよ！間に合わないわ！」

《カウントダウン開始。》

『発射まで5秒前。』

「タバサ！氷の魔法を！」

「無理。距離が遠すぎる。」

『4, 3, 2, 』

「ああ・・・終わりね・・・。」

『1, 発射！』

「・・・あら？発射音がしないわ？」

「サイロから直接？」

「加速が必要なはずだ。直接ではこちらにも被害が来る。」

「じゃあなんで音もしなければ衝撃すらないのかしら？」

《状況報告》

『ミサイルは正常に発射されました。』

《ミサイル現在位置を検索》

『ミサイル現在位置、サイロ直上2m。』

《・・・》

サイロ直上2mでミサイルが止まっている・・・？どういうことだ・・・。兎に角行動が止まっている今がチャンスだ。

「タバサ、キュラソー。離れるぞ。」

「了解。」

私はポケットからボールを取り出し、ウインディを出すと背中に飛び乗る。タバサとキュラソーも飛び乗ったのを確認すると、ウインディは全速力で駆け出し、ものの10秒足らずでクレーターの外周部に到達した。

私は間髪入れずに爆薬の起爆スイッチを押した。

ドゴオオオオオン!! ドガアツアアン!

建物の地下で盛大に爆発した電子励起爆薬は、そのあまりの威力で基地の建屋ごと空中に吹き飛ばした。数秒後、煙の中に建屋が落下すると、地面のクレーターに亀裂が走った。

ゴゴゴゴゴ

ガラガラガラガラ!!

亀裂は大きくなっていき、そしてついに基地周辺がまるごと亀裂の中に飲み込まれて

いった。どうやらこの階層の基盤そのものに大穴が空いたらしく、下の階層に基地の地下構造物ごと轟音とともに落下していった。地下にA Iの本体があつたのだろうということ、爆発直後からA Iのアナウンスがまるで聞こえないことを踏まえるとおそらくA Iシステム本体もまるごと爆散した後落下していったと推測される。つまり……。

「終わった……のかしら？」

「のようだな。」

「亡霊の最後。」

「やたら派手な断末魔だったわね。」

そう。これで終わったのだ。実験体の暴走から始まったI C Aの亡霊との戦いは意外にもあつけない形でその幕切れを迎えることになった。

「そういうえば本部は？スパデイルはどうなったのよ？」

『安心して頂戴。私達は無事よ。』

「バーンウツド。状況は？」

『迎撃システムはついさつき復旧したわ。でも転移門の存在自体は確認できたのだけれ

ど、そこから何も出てこなかったわ。』

「ミサイルは発射されたはず。」

『こちらの観測機器が迎撃システムの妨害の余波で軒並み使用できなくなっているわ。詳細は不明よ。』

「・・・なら確認するべきだろう。」

「え？」

「ミサイルサイロは50kmほど離れているはず。」

「こいつが居ればそこまで苦ではない。道も大部分は舗装されている。」

「そりやそうでしょうけど・・・。ちよつとは休まない？」

『残念ながら余波は渡界機にも及んでいてね。こちらの復旧は、後数時間はかかってしまふと思うわ。』

「時間はあるようだ。」

「・・・そうね・・・。」

キュラソーはやれやれといった表情で諦めたようだ。そこへブルーとシルバーが合流してきた。

「おい！無事ー!?」

「47!」

「こっちは無事だ。」

「かなりギリギリだったけれど。」

「危機一髪。」

「こっちもそれなりに大変だったわよ。なにせあの転がってくるロボット、なんかシールドみたいなの張ってたし。」

「こちらの遠隔攻撃が無効化されたのはキツかったね。」

「まあ物理に弱かったみたいだからニドちゃんのメガトンパンチで粉々にしてやったけどね!」

あちらもあちらで中々壮絶な戦いを繰り広げていたようだ。現にブルー達の服はどこどころ破れている上に、体の何箇所かにレーザー系の兵器がかすったような裂傷が見られる。それに気が付いたタバサがすかさず回復魔法をかけていく。

「それで、ミサイルサイロだっけ?」

「ああ。これから行くこうと思う。」

「じゃ私達は最初の公園で待ってるわ。もうクタクタだから。」

「僕は姉さんについていくよ。ポケモンたちも休ませないと。」

「そうするといい。キュラソーとタバサも休憩してきてもいいぞ?」

「そう?じゃあお言葉に甘えちやおうかしら。流石に今回は疲れたわ。」

「休息も大事。」

私はブルー達と分かれ、ウィンディの背中に乗って高速道路のような道を駆け出した。場所は事前に本部の観測でそれらしきところを把握していたため、詳細は後まわしにひとまずミサイルサイロへ向かった。

「このあたりのはずだが・・・。」

『47・観測機器が復旧したわ。ミサイルサイロはその道をもう少し行つたところにあるみたい。』

「やっと復旧したか。」

私は小一時間ウィンディと休憩をはさみつつひた走っていた。高速道路のような道を走っていくと、この世界が本当に一面の廃墟なのだと実感できる景色ばかりだ。どこ

まで行っても続く都市郡を見ながら進んでいくと、ビルの合間に佇む白い場所が現れた。

『そこがミサイルサイロよ・・・え?』

「どうした?」

『47! 気をつけて! 生命反応があるわ!』

「何?」

私はウィンディをボールにしまうとミサイルサイロの上部へ登った。上部は開いたままのハッチが4箇所あり、そのうちの一つから白い物体がうねうね動きつつ出ている。その物体の先端には三角錐の金属が見える。あれは・・・もしかしてミサイルか? そのうちミサイルと思われる部分は白い物体に飲み込まれた。そうか、ミサイルが発射されなかったのはこの謎の白い物体に飲み込まれていたせいだ。私はシルバーボラーを構えつつ、もう少し近寄ってみることにした。

すると、白い物体は先端をぐにやりと曲げ、こちらに向けてきた。その先端部には先程は見えなかった目と口のようなものが見える。こちらが何者か品定めをしているような目だ。・・・どことなくこの廃墟の都市の至るところにあった謎の石像に似ている



きがする。

『あなたたちがこの高エネルギー体を作ったのか?』

「!?」

突如として通信機から今まで聞いたことのない声が響いてきた。もしやこの生命体が通信機に干渉しているのか?

「正確には我々ではないが、我々の技術ではある。」

『これらの物体は我々の観点から見てもかなり高度な技術を用いて作られていると推測する。あなた達は何者なのか?』

「それはこちらのセリフでもあるのだがな。我々は別の世界からこの世界にやってきた。」

『この世界から生命体がいなくなつてから早数年。我々も眠りにつこうかという時にこのエネルギー体を作る者たちはやってきた。我々の使命は高エネルギー体を体内に取り込み分解し無力化すること。我々は眠るわけには行かなくなつた。』

「睡眠の邪魔をしたというわけか。申し訳ないことをしたな。作つたのは我々ではない

が。」

『この高エネルギー体を制作した者たちの信号は我々も把握していた。』

「信号?」

『制作した者たちは、我々よりも意思疎通能力に劣る者たちだったため、我々は彼らと対話することができなかつた。』

「一応最高性能のAIなのだが・・・。」

元はと言えば我々ICAが開発した最高性能の量子AIなのだが、それを「劣る者」と形容するということは見た目に反してこの白い生命体はかなりの知能を持った生命体と推測できる。

『だが、先程、その信号も途絶えた。あなた達が行った破壊行為によって途絶えたと見ている。』

「その通りだろう。我々はそのAIを倒すために別の世界から来たのだから。」

『かの者たちの最後の通信は受信している。それは意思疎通能力に劣る彼らの最後の意志と見受けられた。』

「最後の意思?」

『彼らは、ICAという組織に対抗する傍ら、この世界を調べて回っていた。だが、我々と同じく、最上層には到達できなかった。それが心残りだったようだ。』

「最上層……そこにはなにが？」

『我々は最上層以外のほぼすべての階層を把握している。だが最上層だけは特殊な機構により、我々もかの者たちもたどり着くことはできない。最上層に登ることができないのは人間だけだ。』

「人間だけ……。」

『もし最上層へ登るつもりなら、ここから見えている第6基幹塔へ登ると良い。現状、その塔だけが最上層へ続いている。』

白い生命体は首を折り曲げて北にある一本の塔を指し示した。バベルの塔とも思えるその塔は一番上が霞んで見えないほどに高かった。おそらく高さはブルジュ・ハリファの数倍はあるだろう。

「わかった。行ってみよう。」

『我々はあなた達の旅路の安全を願っている。気をつけて。』

そう言うとき真ん中付近から白い生命体の体が割れた。正確には周りの皮のような部分分離したようだ。そのまま分離した皮は傘のようになり、中から白く光り輝く目のようなものが出てきた。傘の内側はひだが付いており、きのこのような見た目に変貌した。

きのこの生命体はそのまま傘をいっぱいに広げると、ふわりと宙に浮かび、やがて空の彼方へ消えていった。その姿はとても神々しく、私は彼らがこの世界における神のよきな存在なのではないかと思い始めていた。

『47?聞こえている?応答して頂戴。』

「・・・あ、ああ。聞こえている。」

『やけにブーツとしていたわね。貴方らしくもない。』

「・・・神々と交信したような気分だ。」

『は?』

「なんでもない。どうした?」

『ああ。渡界機が治ったわ。公園まで戻ってきて頂戴。』

「わかった。」

私は再びウインディと共に来た道に戻り、この世界に来て最初に降り立ったあの無機質な公園へと戻った。

~~~~~6時間後~~~~~  
~~~~~

『みんな揃ったわね。ああ、47とキュラソーは再調査に出ているからブルー・シルバー・タバサで報告会をするわよ。』

「働き者ねえ・・・。」

「見習わなきやならないところなんだろうけどね。」

『じゃあ調査結果を報告するわ。私達は47がミサイルサイロで会ったあの生命体にごうやら助けられたようよ。』

「47が会ったっていう白いきのこの人でしょ? どういうこと?」

「映像を見た限り、エリングに似ている。」

『残骸調査の結果、施設動力炉にそのエリンギに似た生命体が活動していた痕跡を見つけたわ。この生命体は47との会話から推測すると、高いエネルギーを持つ物体を取り込みそれを分解消化するために存在しているみたいね。』

「高エネルギーっていうとミサイルとか？」

『それだけじゃないわ。弾薬や砲弾、石油化学燃料や原子炉の燃料棒ですら彼らの食べ物でしか無いようよ。彼らはそれらを周りの外郭ごと取り込み、体内で分解消化していると考えられる。』

「武器弾薬を食べる生命体か。すごい生命体がいたもんね。」

「摩訶不思議。」

『カテゴリ・スパディルの中にあつたゼロポイントエネルギーも例外じゃなかったみたい。あの生命体が発射前にそれらミサイルをまるごと食べてくれたおかげでICAは救われたってわけ。』

「毒ガス散布が止まったのも彼らのおかげ。」

「ということはエンデットウィッチが制御不能になつて墜落したのももしかして？」

『確証はないけれどおそらくは。最後の映像からして明らかに動力炉の動作が停止していたわ。』

「まあなんにせよ、あのエリンギもどきによつて亡霊は討ち滅されたってことか。」

「そう考えるとなんか味気ないわね。」

「エリンギだけに？」

「タバサ・・・。」

『あの世界に関してはまだまだわからないことだらけ。それらの報告も47とキュラソー待ちね。』

「じゃあ私達はゆつくり待ちましようか。」

「そうだね。最近働きすぎな気がするよ。」

「休息は大事。」

『そうね。47とキュラソーが帰ってくるまでICA全体としても一時休業体勢をとるわ。色々整理しなきゃならない後始末も大量だからね。』

ガチャ

「皆さんお揃いですか？」

『キャロライン、どうしたの？』

「いえ、亡霊を倒したお祝いにみんなでパーティでもやろうかと思ひまして。」

「もしかして・・・。」

「それ提案したのって・・・。」

「・・・そう言えば再構築されたと聞いた。」

『そうだ！俺様だよ！』

「ウィートリー！」

「生きてたんだね。」

『まあ一回死んでるけどな。何があつたかはログデータとして保管されてるからいつでも読み込め・・・あれ？』

「どうしたの？」

『いや、ここに保管していたはずなんだが・・・またどっかに行っちゃったな・・・。』

「・・・いつものウィートリーだ。」

「そうね。ある意味安心するわ。」

『はあ？どういう意味だよ？』

「なんでもない。それよりパーティするんでしょ！」

「そうだったそうだった。キャロラインさん、どこでやるんです？」

「ハイ、ご案内します！」

ワイワイガヤガヤ





## HITMAN2 『独立』

くキュラソールsideく

「グオオオオ……うな重……もう食えねえ……」

ピピピピ

ピー

「ムニャムニャ……」

「よし、これで少年探偵団の4人はOK。あとはメインの2人だけね。」

私は今、亡霊AIがやり残した記憶処理を再度かけて回る作業に従事している。今度こそ、ICAの存在自体を主要人物であるこの子達の記憶から完全に抹消するために。

小嶋元太くんの記憶処理が終わり、これで江戸川コナン・灰原哀以外の主要人物の記

憶処理が完了した。あの二人は勘が鋭いから慎重に行かないと持つてきたバサラブを使う羽目になるわね。

私は新月の暗闇の中を駆け、阿笠邸へ到着した。情報によると江戸川コナンは今日阿笠邸に泊まっているらしく、阿笠博士を含めた3人で何かをやっているらしいということまでは掴んでいる。一見すると子供二人に老人一人だが、阿笠博士はあれでもまだ52歳。江戸川コナンの中身は18歳。灰原哀ですら中身は20前後という年齢詐称組だ。この時間まで起きていても何ら不思議ではない。

スツ…キイイ…

天窓の一つが開けっ放しになっていたのでそれを静かに開く。室内の電気はついておらず、物音もしない。暗視スコープを見ても赤外線センサーなども発見できない。案内外楽に仕事をこなせそうね。

私は物音を出る限りたてずに静かに床に降り立った。そのまま床に耳を当てて周囲の気配を探る。この家は確か地下室が有り、そこが灰原哀の研究室にもなっていたはずだ。この時間寝床以外で居るとしたらその部屋になるわけだけど…。

カチツ!

「!!」

「やっぱり来たな。キュラソー。」

「江戸川コナン……。」

あらら……。来るのを予測してたのか待ち構えられちゃったわね。私はすぐに懐に忍ばせておいた機械を作動させる。

ヒッヒッ

「……何をしたのかは知らねえが、もう逃げられねえぜ。」

「私を捕まえる気なのかしら?」

「ああ。黒づくめの奴らのことを色々知ってそうだし、ICAのことも聞きてえしな。」

「私が素直に答えると思ってるのかしら。」

「いんや。思わねえ。だが、負けるとも取り逃がすとも思ってたねえけどな。」カチツ

あれは時計型麻醉銃。なるほど、眠らせてから自由を奪い、問い詰めるのはその後でつてことね。でも……。

「その時計がどうかしたのかしら？」

「なあに、少しの間こっちの準備が整うまで眠ってもらっただけさ。」カチツ

「・・・。」

カチツカチツカチツ

「な、何?!」

「フッフ、その時計がどういう構造をしているのかは知らないけれど、少なくとも電子基板は使ってるみたいね。」

私は懐から先程の機械を取り出す。この機械は簡易EMP発生装置だ。しかも例の滅びた世界の超技術を流用している部分もあつて無効化したい対象を選びつつEMP攻撃をかけることができるすぐれもの。今回はこの家の通信回線と彼の持っているいくつかの装備品を対象に無力化させてもらったわ。

「ちっ!」カリカリカリ:

「無駄よ。貴方の持つてるものは全て無力化させてもらったわ。」

「ぐっ・・・。」

「それと・・・。」

クルツピシユツ

「あつ……。」

「灰原！」タツタツタ

「シエリー、今は灰原だっけ？彼女をここに居させるのはあまり得策ではなかったわね。まあおかげで手間が省けたけれど。」

「おい灰原！しつかりしろ！」

「安心して。麻酔薬よ。眠ってもらってるだけ。」

「……殺さないのか？」

「殺す？何故？私はもう黒の組織じゃないわ。ここへ来たのもあなた達を暗殺するためじゃないしね。」

「？じゃあ一体……。」

「知る必要はないわ。さあさあ、子供はもう寝る時間よ……。」ピシユ

「う！しまつ……た……。」ドサツ

待ち構えられることは想定範囲内。だからこのEMP装置を持ってきたのだから。でも彼女まで一緒に居てくれるとは正直思ってた。そこまで博士のアイテムを信頼しきってたってことかしらね。

なにはともあれこれで仕事ができるわ。この装置を取り付けてつと・・・。

【エージェント68報告書】

【エージェント68は現在“名探偵コナン”の世界にて活動中。】

【活動内容、主要人物記憶処理作業従事。】

【作業完了と同時にそのまま世界に留まり、ICA米花支部長に就任。】

【これらの決定はICA上級委員会No. 1とNo. 12の連名によって策定されています。】

【活動終了日時、未定。】

くブルー・シルバーサイドく

「ニドちゃん！はかいこうせん！」

グワーツ！

ドゴオオオオオン

「助かった！危ないところだった！」

「安心するのはまだ早いわ！次！左のビル！」

「ドサイドン！メガトンパンチ！」

ガアアアア！

ドゴオオオオオン

「この街一体何なのよ！到着早々大きな地震に見舞われる！ビルは倒れてくる！車は降ってくる！本部から街の悪人を誰でもいいから探し出して暗殺しろなんて突然めちやくちやはい出す！かと思ったら道路が崩れてその上に居た人たちが巻き込まれて大勢死人は出す！挙げ句は高速道路も倒れてくる！ここほんとに最新鋭の街?!お次はビルからビルヘターザンと来たわ！悪人が別の被災者を撃とうとしていたから助けたわ。そしたら今度はこつちまで追われる身よ！一体どうなってるのか教えて頂戴！」

『ダメだ。』

「駄目え?!そんな！もうヤダ!!」



「姉さん落ち着いて・・・。」

俺と姉さんはICA本部から言い渡された訓練の一環としてここ、*“首都島”*と呼ばれている島にやってきた。どうやら以前行つた富坂市と同じ世界らしく、時系列的には富坂水害よりも前になるらしい。ついにICAは時間跳躍までできるようになつたみたいだ。

この島もご多分に漏れず大災害に現在進行系で直面中。マグニチュード6という日本という土地柄を考えるとそこまで大きな地震でないにもかかわらず、現在、この人工島は沈み始めている。何か裏があるんだろうけど、そんなことを調べている余裕はなさそうだ。

先程から明らかに消防ヘリでも自衛隊のヘリでもない黒いヘリコプターが自分たちの周囲を旋回している。おそらく俺達を葬るために機会を窺っているんだろう。だがあのヘリの操縦手は知らないだろう。ポケモンたちの射程はヘリの今の高度よりもう少しと長いことを。

「とりあえずあの鬱陶しいヘリを落とすしちやいませしょうか。」

「そうだね。ドサイドン！」

「ニドちゃん！」

「はかいこうせん！」

《エージェント67―1及びエージェント67―2、通称ブルーとシルバーに関する報告書です。》

《彼女たちは現在、緊急時の対処方法を学ぶ訓練過程に派遣されています。この訓練が完了次第、ワールドナンバー4―09―140096―5″に向かってもらい、暗殺任務を遂行していただく予定になっています。》

《なお該ワールドへ移動した後は、そのワールド内に支部を作成し、ブルーが支部長に、シルバーが実働部隊司令官に就任する予定になっています。》

《これらの決定はICA上級委員会No.1とNo.12の連名によって策定されています。》

《訓練過程は早ければ72時間後には完了する見込みとなっています。》

くタバサ side く

「その資材はあつちの現場。」

「了解しました。」

「その建物は2階建てに変更された。」

「わかりました。新しい図面をください。」

「これ。」

「ありがとうございます。」

私は今、元アーハンブラ城下町の再建計画の指揮を取っている。戦闘や諜報にしか能がなかった私に作戦指揮や管理業務を学ばせるためだと本部から聞いた。確かに今後のことを考えると、戦うだけの兵士よりは為政者としての能力もあつたほうがいいのは確かだろう。

しかし、感情表現や意思疎通が苦手な私にとって、現場指揮というのはかなり厄介で苦労の絶えないことだった。現に今、アーハンブラ城自体の再建計画に不備が発生し、

塔の高さが一つ違うことに頭を悩ませている。明らかに指揮系統の不備が原因であり、つまるところ私の責任になっている。責任を取る立場というのにはやはり慣れないしキツイ仕事だと実感する。正直誰かを暗殺する仕事のほうが数倍は楽だ。

しかしめげるわけには行かない。本部は明らかに私にこの世界の管理業務の一端を担わせようとしており、それは既に確定事項の気がしてならない。ならばまだ修正の効く今のうちから慣れておかねば、いずれもつと大きな事象が発生した時に対処できずに自滅してしまう。人を指揮し動かすのは訓練施設で学ぶには限界があるのだから。

「タバサ！これはどうするんだ？」

「それは……。」

「やっぱあの城か？それともその前の屋敷か？」

「ええと……。」

「ちよつとサイト！タバサが困ってるじゃない！ほら、その装飾品はロマネスク様式なんだからあそこよ！」

「オイオイルイズ。大丈夫なのか？そんな勝手に。」

「問題ない。あつてる。」

「ほら見なさい。タバサもそう言ってるんだからさっさと運ぶ！」

「ハイハイ。」

「タバサ。わからなかったら私達を頼って良いんだからね。これでも城の調度品の配置くらいはわかるから。」

「ありがとう。」

いずれこの世界を管理する立場になつたとしても、もしかしたらルイズ達も助けられるのかもしれない。淡い期待かもしれないけれど、少し暗い未来に希望を持つても許されるだろう。

『タバサちゃんの報告書は俺様の担当だ。もつとも、あの子俺のこと嫌ってるみたいだけどな。』

『今、あのハルケギアナとかいうところで管理職の訓練積んでるんだとよ。なんでも上のお偉いさんたちはタバサちゃんにあの世界に新しく作る支部の支部長になってほしいんだと。どう見ても支部長って風貌じゃねえけどな。』

『んで、今その訓練って言うってこの前のあの激ヤバ実験体の時にふっ飛ばしちまった街

を作り直してらんだってよ。尻拭いとも言えるな。なんか主要人物たちにも手伝ってもらってるらしいけどそれって訓練的に良いのかね？」

『街が完成するのは早くても来月だっけさ。どうやら同時にその街に支部作る見てえだからまあ当分は帰ってこねえだろうな。まあ半年に一回くらいは定期連絡みたいなので会えるから心配すんなって！』

『報告は以上だぜ。．．．なんか忘れてる気がするが．．．まあいつものことだ！』

〈 47 side 〉

私は今、螺旋階段を登っている。どこまで続くのか全くわからないが、ここを登れば最上層にたどり着けると基幹塔の管理AIが言っていた。

この基幹塔を登る際、管理AIが居るということだったのでそれを再インストールし

直し、ここまで案内してもらった。ついでにこの世界についても色々教えてもらった。

この終末を迎えた世界は、元々我々の世界とほとんど同じような世界だったらしい。西暦2100年頃に核融合発電の技術が確立した結果大量に水素が必要となり、土地不足の影響もあって海洋の水をエネルギーに変換しつつそこに階層型都市を築き上げる壮大なプロジェクトが立ち上げられたらしい。そのプロジェクトは紆余曲折を経ながら2250年頃には太平洋の半分以上を階層型都市に変換することができたようだった。

階層型都市を作る過程で得た知見や理論は様々なものに応用され、それからわずか50年足らずで地球上の7大洋のほぼ全てを階層型都市に変換し終えたいらしい。それに伴う爆発的な人口増加はとどまることを知らず、2300年頃には地球人口は200億を突破していたという。

しかし人が増えればいざこざも増える。結局2417年7月に太平洋の階層型都市国家「モアナキワ連邦」が合衆国に、「大日本民主共同体」が中華連邦に、ほぼ同時に宣戦を布告したことによって世界大戦が勃発。結果的にその戦争は15年続き、世界人口200億のうち174億人が死亡したと思われる。それが第一次人類の最後だったようだ。

「その第一次人類の残した遺産を第二次人類が使用して生活していたが、その物資もとうとう尽きてつい最近、1年ほど前にその第二次人類の最後の2名も消息不明となり、この世界は終わりを告げたということらしい。我々の世界の行く末を暗示させるようでなんとも不安にかられる結末だ。」

あの基幹塔のA Iも第二次人類に“アルコテックA I”と呼ばれた時期もあつたらしい。理由はキュラソーやシルバーバーが持ってきたあの不思議な機械。あれはあのA Iの姉妹が作り上げたものだったようだ。基幹塔の管理業務に必要な装置の一部だったらしい。あのような超科学の塊をいくつか制作したことで、第二次人類にとってA Iは“神”のような存在になり、崇められるようになったようだ。

「むっ。本部、聞こえているか。」

『ええ。聞こえているわ。見えたかしら?』

「光が差し込んできた。最上層は近そうだ。」

『あのA Iが言うには最上層手前数十mから一切の電子機器が使えなくなるらしいわ。通信もできるかどうかかわからないから用心して頂戴。』

「わかった。」



やっとこの長い長い螺旋階段も終りが近づいてきた。そろそろ足も動かさずになつてくるほどには疲れている。光は登るたびに段々と強くなつていき、本部との通信が途絶える頃、かけていた暗視ゴーグルも使えなくなつた。が、既に足元を見るには十分なほどに明るいためそのまま最上層へ到達した。

「……. なにもない、か。」

最上層には何もなかった。文字通りの意味で、あたり一面の銀世界と、満天の星。いつの間にか夜になつていたようだ。それ以外にはなにもない。誰が居るわけでもなく、建物も遠くに見える四角い立方体の物体以外瓦礫すら落ちていない。登ってきた螺旋階段は最上部から更に少しだけ進んで空中で途切れている。

唯一存在した高さ10mもない立方体の建造物に近寄つてみる。壁には例の幾何学模様のプログラム言語が書かれており、その言語が使われていた時代、おそらく第一次人類の残した遺産の一つであろうことは予測できた。

私はこの黒い箱のそばにランタンや毛布などが放置されているのを発見した。ちようど二人分。おそらく「第二次人類の最後の2名」の物だろう。しかし不思議なことに亡骸自体はどこにも見当たらなかった。極寒であるここは遺体が腐敗・風化するのに

もそれなりの時間がかかるはずだが……。

私は消えた二人のことも含めて調査を開始した。

「エージェント47の報告書ですね。」

「彼は亡霊AIが居たポストアポカリプスの世界の探索を上級委員会の勅令で進めていたようです。AIやその他の観測機器ではたどり着けなかった階層型都市の最上層に到達し、そこにあつた謎の黒い建造物についての調査を行ってきたようです。」

「調査報告書によると、幾何学模様が建物全体に張り巡らされており、いくつかのスイッチの類も発見できたようですね。ですが現在、写し書きで持ち帰ったその幾何学模様の解読は困難を極めており、情報部も技術部も“渡界機の種類ではないか”ということまでしかわかりませんでした。」

「傍にあつた第二次人類最後の2名についても行方がわかっていません。あの場所で息絶えたのか、それともあの建造物によってどこか別の世界へ行つたのか、今のICCAの

技術力では足跡をたどるところか探知することすらできませんでした。」

「このあと、エージェント47には再びICA本部直属のエージェントとして活躍してもらうことになっています。つい最近、『プロヴィデンス』について新たな発見があったため、当面はその調査と対処に追われることになるでしょう。」

「ふう．．．まあこんなところかな。」

《お疲れさまです。コーヒーをどうぞ。》

「ああ、ありがと。」ズズツ

『フツフツフ．．．』

「なに？どうしたのウィートリー。」

『実はな．．．。』

『そのコーヒーにはある特殊な薬が混ぜ込んであるんだよ。』

「えっ!?!」

《嘘ですよ?》

「え? え?」

『ちっ。なんでバラすんだよ!』

《今更疑問を持たれる言動は謹んだほうがよろしいかと。またアンインストールされても変わんねすよ?》

『どうせログは引き継がれるんだ。生き返れるならアンインストールされても変わんね

えよ。』

「ふーん……。」

《あ……》

『それにだ。このネーチャンはそこまでの権限は与えられてねえだろ？大丈夫大丈夫。』

カチャ

ピツポツパ

「あ、バーンウッドさん。実はですね……。」

『ヒエツ!』

《……繋がっていませんよね。》

「テヘツ♪」

『騙しやがったなあ!』

「先に騙したのはそっちじゃないですか!」

ガチャ

「何を騒いでいるのかしら?」

『げっ!本物!』

「バーンウッドさん。あつ、そうだ。上級委員No. 12就任おめでとうございます。」

「あら、ありがとう。でもオペレーター業務はやめる気はないけれどね。」

「そうなんですか？」

「ええ。これからも47直属のオペレーターは私ということになっているわ。」

「よかったです。まだ教えてもらいたいことありますから！」

『こっちはまだビクつかなきゃならねえってのか・・・』

「何か言ったかしら？」

『いえ！何も！』

【本日もICAは通常営業を行っております。】

~~~~~エピローグ~~~~~  
~~~~~

『おっはー！シルバー！ブルー！』

『ひっさびさだな！暗殺任務が恋しくて泣いちゃいそうだったか？・・・ああそんな怒んなって。』

『今回はアサギシティに向かってもらおうぜ！ターゲットはその灯台に住み着いてるっ

ていう悪霊だつてよ。悪霊の暗殺なんてできるのかどうか分かんねえけど、ようは無力化して追い出せばOKだ。』

『依頼主はその街のミカンとかいう嬢ちゃんだ。あれでもジムリーダーなんだつてよ？ どう見ても10歳くらいにしか見えねえけど、ろーどーきじゅんほうとか言うのはないのか？この世界。』

『嬢ちゃんが言うにはあんまり事を荒立てないでほしいんだとよ。つまり派手なドンパチは無しにしてくれよな。どうしてもぶつ放したくなつたら消音器くらいはつけるよ？』

『準備は一任するぜ！頑張れよ！』

『おはようございます。エージェント66。』

『現在位置、アルビオン王国、サウスゴータ地方、シテリオブサウスゴータ。』

『作戦目標、シテリオブサウスゴータ議会、〃モルドバ議長〃の暗殺。作戦注記、隠密作戦がクライアントより求められています。街の警戒レベルが上昇した場合、作戦は中止されます。』

『作戦依頼者、シテリオブサウスゴータ議会上院議員 〃パルコーダ〃 依頼理由、政敵の排除。』

『準備は一任されています。作戦を開始してください。』

『おはようございます。キュラソーさん。』

『久々の任務ですね。私も気合が入ります。で、今回のターゲットなんですけど……。』  
『ベルツリータワーってご存知ですよ？その特別展望台に今“広瀬 吾郷”っていう暴力団の幹部が居るんです。今回は彼の抹殺だそうです。』

『でもその抹殺方法がちよつと特殊でして……。なんでもベルツリータワーの最上階から意識がある状態で落下させて殺してほしいそうです。』

『依頼主は、その暴力団に店を奪われた駄菓子屋の若旦那みたいです。匿名希望なので名前は伏せますが、相当頭にきてるのか恨んでいるみたいですね。恐怖におののくターゲットを見たいたそうです。そのために望遠鏡を買ったとも言っていました。』

『準備は一任されています。頑張ってください！』

『おはよう。47。』

『今回向かってもらうのはアメリカ大手銀行“シルバーマン・トランペッター”のNY本店よ。』

『ここはNYでも指折りの巨大銀行で、その頭取はNYはおろか連邦政府にも一定の影



響力を持つわ。』

『ターゲットはその頭取、"マイケル・シュヴィルス"の暗殺と、彼の極秘計画の奪取よ。この計画はあのプロヴィデンスに繋がる手がかりにもなると予想されているわ。』

『ターゲットは今、銀行内で今季決算の年次報告会に出席している。全世界の支店のトップが集まっているから会場はかなりの人数よ。警備も厳重。ターゲットの直属の護衛は元グリーンベレー。十分気をつけてね。』

『準備は一任するわ。』

~~~~~  
 ミッションコンプリート~~~~~
 ~~~~~

・「ヒットマン」

【+5000】『タバサ・ブルー・シルバー・キュラソーを独り立ちさせる。』

## HITMAN 2 『とある日の47』

バババアン!!

ガキンツッ! テーレッツテレー!

『素晴らしいわ。47。また自己ベストを更新したわね。』

「ああ。だが・・・。」

『ええ・・・残念ながらハイスコアではないわ。』

ICAでは時折技術向上のために様々なゲーム形式の催し物が開かれている。今回は射撃技術向上のためにとある世界から取り寄せた射撃ゲームを使って競技をしている。

「いやでも29000点台は人智を超えてると思うよ?」

「私とシルバーなんてどんなに調子が良くても26000点台がせいぜいなんですものね。」

競技範囲外ではブルーとシルバーがこちらを見学していた。各々既にハイスコア更新は諦め、自己ベストを更新したところで観戦に切り替えたようだ。

ババババアン！

ガキンツッ！テレットツテレー！

「むむむ……」

となりのスペースではタバサが同じゲームを行っていた。元来の負けず嫌いの性格もあってスコアを更新しようと頑張つてはいるがこちらも27000点後半がせいぜいといったところだった。

バババババアン！

ガキンツッ！テテテテテテテテテテテテレー！

『おめでとう。キュラソー。自己ベスト更新よ。』

「ありがとう。でも47にもまだ追いつけていないわ。」

『まあ47は別格と言えるかもしれないわね。』

「私じゃ28000点台後半がギリギリ。47は29000点台後半でしょう?」  
「ああ。だがハイスコアではない。」

そう。このゲームは元の世界で記録された情報がそのままインプットされており、どういう技術かはわからないが常にオンラインでハイスコアが更新される仕組みになっている。私達はもちろん偽名で登録されているが、未だこのゲームでの最高記録には至っていない。

「バーンウッドさん。このゲームの最高記録保持者ってほんとに人間なの? 30000点とか敵を全部倒すのはもちろん、すべてのターゲットの眉間を正確にかつとんでもない素早さで撃ち抜かなきゃ駄目じゃないの?」

『情報部が片手間で収集した情報によると、たしかにこのゲームの最高記録保持者は人間よ。それもブルー、あなたより年下の。』

「げ、マジ?」

「姉さんより年下の子がこのゲームの最高記録保持者って・・・信じられないな。」

「理解不能。」

このゲームは30体の標的と5体の民間人がランダムで建物の影から顔を出す形式で、それらの標的をいかに素早く正確に撃ち抜くかによってスコアが算出される。理論上は35000点まで伸びるようだが、私は29500点が今までの自己ベスト、その噂の子供の記録でも30000点ピッタリがベストでそれが世界最高記録となっている。標的の飛び出す位置は完全にランダムであり、場所を覚える策は使えず、どの程度の頻度で出てくるのかも完全ランダムなため、ICAの射撃訓練に採用されるほどの完成度と実用性があるゲームとなっている。

私は再びトライを開始した。

『47・21回目のチャレンジね。Ready…』

「もう21回もやってるのね。」

「私より負けず嫌い。」

『GO!』

ガシヤ

バアンバアン!

ガシヤガシヤ

バアンバアンバアン!

「お、これは……。」

「ひよつとすると?。」

バババババアン!

・ キンツッ! テテテテテテテテッレレ!

「おおおお!!」

「凄い……!」

『おめでとう47。ハイスコアよ。』

「よし。」

ハイスコアとなる30100点を記録し、柄にもなく嬉しさがこみ上げてくる。普段なら絶対にやらないであろうガッツポーズまで小さく決めてしまった。

しかし喜べるのもものの数分のことだった。

ピンポーン!

テレレツテレ!

「・・・。」  
「・・・。」  
「・・・。」

『・・・ハイスコアが更新されたわね・・・。』  
「・・・32600点・・・。」

私は頭を抱えなくなった。名前を見るとまたあの子供らしかった。名前から察するに男の子だと思うのだが一体どういう子供なのだ・・・。

↳数分前・都内某所↳

バババババアン！

バキンッ！テテテーテーテッレレー！

「すごいすごいすごい!!ウエスタンゲームまた記録更新!!32600点!!」

「ふふーん！」クルクルクルスチャ

「君は射撃の天才だ！どうしてそこまでうまいんだろう!？」

「まああれだね。テンプラ？とかなんとかのサイつてやつかな？」

「いやあ、実に不思議だ！あやとりと昼寝と射撃だけは超一流なのになんで勉強はできないしトロイしおっちょこちよいだし・・・。」

「ねえ、それ褒めてる？それとも貶してる？」





ピツピツピツ…

カーカーカー

ブルウーン…

アハハハハハ…

何のことはない。普通の東京の町並みといつもの喧騒だ。空を舞う鳥や道を走る車、道を行く小学生くらいの子供。

だが違和感はある。どれもこれも行動が規則的だ。子どもたちは友人と談笑しながらも、まるで行進かのような正確な歩幅と速度で道を進んでいく。歩き方も全くブレておらず、下半身の動きだけ見ればまるで軍隊のパレードのようだ。

車の方も直線を走るときは常に一定スピード、曲がるときもまるでレールの上を走っているかのような滑らかさだ。あれはAIが自動操縦でもしているのだろうか？ そう思えるような動きだ。

小鳥たちも米空軍も顔負けのきつちりとした編隊飛行で進んでおり、こちらも曲がる時はほぼ直角に曲がっている。もしかするとこの世界はすべての生物が極度に規則正

しくなるような世界なのだろうか？

ともかく私は早足でブルーとシルバーを探すことにする。情報部はかなり慌てていたのかその肝心の「危険な生物」に関する情報が殆どなかった。わかったのは武器弾薬兵器類が理論上効かず、そして手のひら大の小ささということだけだ。

だが全くの非武装というのも心もとなかったため、一応いつものシルバーボーラーと、年のために技術部から電子励起爆薬と対物ライフル「OSV-96」を借りてきた。いつぞやの幻想郷で天狗の頭を吹き飛ばした強力な銃だ。爆薬も過剰と思われたが1kgを持参した。弾薬は効かずとも爆風なら多少なりともダメージを与えられるだろう。しかし「空爆すら効かない」と言われていたことをこの時点の私は頭から抜け落ちていた。

パーパーパー！

「うっさいわね！ちよつと道にはみ出しただけじゃないの！」

「ね、姉さん……」

……早速見つかった。というよりも聞こえた。この町は喧騒はそれなりにあるが、話し声や騒音という意味では我々の世界よりも大分少ないので、こんな町中でも数百m先

のブルーとシルバーの声がはつきりと聞こえる。私は早速近寄っていく。

「・・・？あら？47？こんなところで何を？」

「本当だ。僕たちだけでやれるような簡単な仕事なはずだけれど・・・？」

「お前たちここに居たか。至急元の世界に帰るぞ。」

「ええ？だってまだターゲツト見つけてないのよ？」

ブルーは怪訝そうな顔をする。若干無意識に臨戦態勢になっている辺り訓練の成果が出ていると言える。

「相手は一般人。そしてこの世界の人間たちはみんな他人がやることに全く興味を示さないからかなり暗殺は簡単はず。諦める理由がない。」

「状況が変わった。かなり危険な生命体が居ることが確認されたために、通信が繋がらないお前達を連れ戻すために私が派遣された。」

「げっ・・・危険な生命体って何よ？コ○ナウイルスみたいなもの？」

「通信が繋がらないって・・・本当だ。何故か電波が全く来ていない。どうりでウィートリーが静かなわけだ。」

「ウイルス性の生命体ではないようだ。詳しくはわからないが手のひらサイズらしい。」

「ロボツクルみたいなものかしら?」

「とにかく戻るぞ。作戦自体、既に上級委員会の勅令で中止されている。」

「わかった。任務が中止されてるならいる意味はないね。」

私達は連れ立って戻り始めた。幸いにして渡界機のある臨時セーフハウスからそれほど離れていないためすぐに帰れそうだ……。

ピトピトピト

ギャーウワーキヤアア

「な、なんだ?!」

「ちよ、47! シルバー! アレみて!」

「何?!」

町中に突如として悲鳴がこだました。その方向を見てみると、巨大な球体がゴロゴロと町中を転がっている。恐るべきことにその球体に接触した物体や生物がその球体に取り込まれていつている。いや、取り込まれているというよりも金属が磁石にくっつく

ように球体に貼り付けになっていると言ったほうが良いだろう。

「ちよ、ちよつと！アレ何よ！」

「あ！まずい！あの方向は！」

「くっ！」

なんとその球体は転がりながら臨時セーフハウスの方へ転がり始めた。私達は急いでセーフハウスに向かったが、既の所でセーフハウスはその球体に飲み込まれ建物ごと取り込まれて運ばれていってしまった。

「ちよ、ちよつとどうするのよ?!セーフハウス持ってかれちゃったわよ!」

「セーフハウスを持っていかれるってすごい単語だね・・・。」

「シルバー！茶化してる場合じゃないでしょう!」

「違うよ！あまりの光景に唾然としちやっただけさ！」

兎にも角にもセーフハウスが無ければ元の世界に帰ることはできない。個人名転送を依頼しようにも、私の通信機までセーフハウスが巻き込まれてからは圏外となって本

部との通信ができない。となれば方法は一つしか無い。

「あの球体を止めるぞ。」

「本気!?!」

「止めるったって……ビルまで飲み込み始めたよ? どうやって……。」

「電子励起爆薬を持ってきている。その爆発で止める。」

「おお。あの最強の爆薬。量は?」

「1kg。」

「随分持ってきたわね……。でもそれだけアレば!」

「ああ! 止められるかもしれない!」

私達は早速行動を開始した。

「……アレガ怖い怖い暗殺者サン?」

観察しているといくつかわかったことがある。球体の大きさは既に10階建てのビルを余裕で飲み込むほどに大きくなっている。が、何でもかんでも巻き込めるといわけではないらしい。先程も結構な速度で東京タワーに衝突していたがタワーはびくともせずにその球体を弾き返した。思い返せばビルを巻き込むより前、住宅を巻き込んだ辺りでは中層ビルには弾かれていた気がする。つまりあの球体は大きくなるに連れ巻き込める物の大きさが大きくなっていくということだ。

既に直径が100mを超えているあの巨大な球体に爆薬がどれだけ効くのかわからないが、ともかく道の先の道路の真ん中に爆薬を搭載した車を停車させた。巻き込まれたあとで爆破する方法も考えたが、巻き込まれた信号機が未だに点灯しているところから見て、あの球体に取り込まれるとこちらの管制を受け付けなくなる可能性が浮上したため、巻き込まれる直前で起爆することにする。

「47！きたわよ！」

「真っ直ぐこっちに来る！」



「準備は完了している。離れるぞ。」

私達は転がってくる直線上から直角に退避する。車は丁度交差点の真ん中においたため遠くからでもよく見える。なまじ他の車が規則正しく車線を守って走行しているのもあって非常に目立つ。が、あの球体はそんなことを全く機にする様子もなく突っ込んでいく。先程、ついに東京タワーすら飲み込んだようだ。

「来た来た来た！今よ！47！」

「起爆だ！」

「ああ。」

カチッ

ドカアアアン!!

凄まじい爆炎とともに周囲の建物ごと盛大に爆発する。接触目前だった球体もその爆風に飲まれ……

……おかしい。確かに球体の動きは一旦止まったがそれよりももっと不思議なのは

爆炎がいつまで経っても霧散しないことだ。煙が残るのは珍しいことではないが、中で発生した炎すら全く消える様子がないのはどうということだ？

「え？アレどうなってるの？」

「えーつと・・・とりあえず止まったのかな？」

「・・・確認の必要があるな。」

私達は意を決して近づいていく。近づくに連れその状況はさらに詳細にわかり、そしてさらに疑問に拍車をかけた。

煙が一切動いていない。爆炎も、それで発生した大量の煙も。なんならあの壁に沿って走っている白いものももしかすると・・・衝撃波か？

そう。衝撃波を含めたあの爆発によって発生したすべてのものが球体に接触した瞬間に、まるで時間が止まったかのように全てが静止している。私は非常に嫌な予感を感じた。

「・・・ブルー、シルバー。一旦退却するぞ。」

「え？どうということ？」

「止まったんだからセーフハウスを探さないと・・・。」

「私の予想では……この球体はまだ止まっては居ない!」

「えっ?!」

言うが早いか球体は再びゆっくりと動き出した。恐るべきことにその爆炎自体すらあの球体は物体と判定して吸着したのだ。そしてあるうことかこちらに向かつて突っ込んできた。

「まずい!」

「げげげ!こっち着たわよ!」

「車は……間に合わない!」

周りの高層ビルを巻き込みつつ、こちらに凄まじい速度で迫ってくる。我々が起こした爆発はただ単に球体の表面積を大きくしただけのようだ。

すぐに我々は踵を返してビルの中に逃げ込もうとするが全てが遅すぎた。既に球体は目前まで迫っている。今からビルの中に逃げ込めたとしてもビルごと取り込まれるのが落ちだ。万事休すかと思われたその時。

ニユルルン

「うわ!」

「きゃあ!」

「なっ!」

突如として球体との間に現れた巨大な「手」が我々をひつつかんでその手が出てきた空間の裂け目のような場所に引きずり込まれた。

次に気がついた時、我々は・・・宇宙に居た。

「うーん・・・あれ?ここは・・・?」

「アレって・・・地球?ってことはここって・・・。」

「宇宙ダヨ。一旦コツチ来テモラツタンダヨ。」

「「?!」」  
「?!?!」

突如として背後から話しかけられたことにも驚いたが、振り返ってみるとさすがの私も啞然とした。

話しかけてきた男はやたら極彩色の中世ヨーロッパ風の服装をしていたが、如何せん

大きさが桁違いだった。なぜなら彼と我々の間には太陽と思われる光り輝く星があるにも関わらず、彼はその太陽の後ろ、しかも太陽の数十倍はあろうかという巨体で我々を見下ろしていた。

「でっか!!」

「あ、あなたは・・・?」

「ボク? ボクハ “王様”。 イヤー危ウク ウチノ息子ノ “カタマリ” ニ、巻キ込マレル トコロダツタネ!」

「王様・・・この世界の統治者ということか。」

「マアソソナトコロ。今回ハゴメンネ。ウチノ “メイツ” ガ勝手ニ呼ンジャツタミタイ デ。」

「メイツ・・・? ってクライアントのことかしら?」

「おそらくは・・・ということとは依頼自体間違ってたってことか。」

色々突っ込みたいたいことが多いが兎に角、権力者に会ったのは大きい。なんとか現状を打開する手立てを模索しなくては。

「デ、君達ハ元ノ世界ニ歸リタインダヨネ？」

「あ、ああ……。」

「ン……返シテアゲタイノハ山々ナンダケド……。」

「なにか問題があるの？」

「君達ノ世界。コノ世界ト違ウヨネ。ソツチノ世界ガ何処ニアルカワカラナイト歸セナインダ。」

「えーっ?!じゃあどうするのよ?!」

「何カ手ガカリガアレバ良インダケド……通信トカデキナイノ？」

「それが……ずつとオフラインなんだ。何故かこの世界じゃ通信ができなくて……。」

「どんな状況でも通信できるのが売りなはずなんだけどねえ……。」

手元の通信機は相変わらず圏外だ。……が、さつきより若干ではあるが電波が微弱に入るようになっていた。何故か“王様”が身動きすると通信が若干回復する。もしかすると……

「“王様”、少しよろしいだろうか。」

「ン? ドシタノ?’」

「少し移動することはできるだろうか？」

「・・・47？」

「ドコニキタイノ？」

「いや、王様自身が少し・・・あっちのほうに移動してほしい。」

私は明後日の方向、土星がある方角を指差した。

「イイケドサ。ドウシタツテノサ。」

王様はその巨体に似合わない凄まじいスピードで持つて土星の向こう側に移動した。余談だが彼のシャツに付いているボタンよりも土星のほうが小さい。

「あれ!?電波が回復したよ!」

「うっそ!?あ!こっちも!」

「やはりか・・・。」

「エ?ドウイウコト?王様ニモワカルヨウニ教エテヨ!」

「王様はどうやらタキオン粒子やニュートリノすらも遮断するらしい。」

何のことはない。電波が常に圏外だったのは、ただ単に王様の巨体が電波を遮断していただけだったのだ。私は早速本部と通信を試みる。

「こちら47・聞こえるか。」

『47!よかった。あなたとの連絡すら途絶えてしまつて……。』

「無事にブルーとシルバーと合流。それと……」

「コンニチハ!貴方達ガ彼ラの上司サンダネ!」

『ええ!』

「王様、すみませんが気軽なノリで量子暗号回線に割り込まないでください。」

「オット、ゴメンネ。今回ハウチノ「メイツ」ガ迷惑カケチャツタミタイ。スグニ送ツテクカラ上司サンは心配シナイデ!」

『は、はあ……?』

「まあ、そういうことだバーンウッド。直ぐに戻る。」

ふと地球を見てみるとヨーロッパ大陸の一部が削り取られたようになって残っている海岸線から察するに、あの球体は国家を国土ごと取り込み始めたようだ。

「オ、ソロソロ星モデキソウダネ。ジャア送ルヨ。君達ト話セテ楽シカッター!」

「勿体ないお言葉……つて言つたほうが良いのかしら?」



「まあ……一応王様らしいし……。」

「イツカ息子連レテソツチノ世界ニモ遊ビニ行クヨ!」

『「それだけはやめて(くれ)」』

私達3人は王様の背後から現れた虹に包まれ……気がつくると本部の渡界機の送信装置の上に居た。

~~~~~1時間後~~~~~

~~~~~

『さて、どういふことか説明してもらおうよ。』

「ふむ……まず「危険な生命体」とやらは確認できなかった。代わりにすべてのものや事象を吸着して巨大化していく球体に出会った。」

「そうそう。すごいなのにつて、人や車はもちろん、家やビル、はては爆風すらくっつけて転がってきたのよ!」

『爆風すら……? どういうことかしら。』

「おそらくあの球体に触れた瞬間に爆風や衝撃波のような見えない動的な事象すら物体と同列に扱うような世界線なんだろう。」

「実際衝撃波は近くのビルを震わせる段階で止まってたしね。」

『ふうむ……非常に興味深いわね……。ああ、あとあの“王様”とか言うのは?』

「彼は……なんというかすつごいでつかかったわ。それこそ宇宙の星々よりもずつとね。」

「うん。地球や土星が彼の服のボタンよりも小さかったからね。」

「おそらくだが全宇宙を統括する覇者なのだろう。相当な権力者だと推察できる。」

「まあ、その割には結構フランクだったけどね。」

「ああ、あと息子さんがいるみたいだよ? あの球体は息子さんが作ったとか言ってたよ  
うな……。」

「“作った”とは言っていないかったが“息子のカタマリ”とは言っていた。」

『カタマリ……調査の必要がありそうね。ICAの暗号通信に簡単に割り込める技術力も持っているようだし……。』

「アレは……技術なのかなあ……?」

「さあ……。」



【+5000】『王様の虹で帰還する。』

## HITMAN 2 『調査を止めろ!』

ガガガガガガ：

ガラガラガラガラ：

町のあちらこちらでドローンが忙しく働いている。ドローンと言っても、何も知らな  
いものから見れば人間と対して見分けはつかないが。本部はドローンと呼称していた  
がどちらかと言うとアンドロイドに近いらしい。

復旧の目処が立っていないと言っていたが、すでに町の大部分は完成しており半島を  
複数の大河が分割している以外はほとんど元の形に戻りつつあった。もともと、その大  
河を埋め戻す作業が一番難航しているわけだが。

建物自体はそれなりに建っているが全て建築中の扱いであり、窓や扉は全て閉ざされ  
粉塵侵入防止用の目張りがされている。人が住んでいないのもあって屋外には殆ど物  
がなく、意外に隠れる場所は少ない。加えて町は周囲の森とそこそこ離れており、ター  
ゲットが現れても待ち伏せするのは難しいかもしれない。

『47。聞こえるかしら?』

「聞こえている。」

『調査団の一団が予想よりも早く到着しそうよ。早くしないと鉢合わせになってしまうわ。』

「何? 時間は?」

『・・・あと5分ほどで視認圏内ね。』

それはもう鉢合わせと言つて良いようなものではないのか。確かに海岸線近くのラウンディングポイントからこの街まで来る道中で想定よりも多くの魔物と出くわしてしまつたから到着が遅れているとは思つていたが、まさか準備をする間もないくらいになつていたとは。

私は急いで隠れられそうなところを探したが、先程も言つたように建物の影に隠れる以外に選択肢がない。私はとりあえず鉢山の詰所の影に身を隠した。

隠れるとほぼ同時に町外れの森の中から調査団一行が現れた。このあたりは平坦になつており、町の最奥であるこの詰所からも町の外がよく見えている。調査団の中心付近に周りのものとは少しだけ身なりのいい男が居た。

~~~~~

『あの真ん中の男がターゲットのコロルよ。彼は用心深くかつ狡猾で察しが良い切れ者として名が知られているらしいわ。注意して。』

ターゲットは調査団一行約10名ほどに囲まれながら町の入口付近に居たアンドロイドに声をかけている。どうやら調査する旨を伝えているらしい。

『ドローンからの情報によると彼らは坑道内へ入るつもりのようによ。坑道内へ入られたら襲うのは困難になるわ。出てくるのを待つ手もあるけれど、大勢と戦闘状態になることは避けられないわね。』

ならば先に坑道内で待ち伏せするほうが得策だろう。坑道内は入り組んでおり、閑散としたこの町よりも幾分隠れるところが多いはずだ。また迂回路も豊富にあり経路策定にも困らない。

私は一団が別の方向を見ている際に坑道内へと侵入した。

アレガコウナツテ…

イヤソレガドウナツテ…

ヤハリコウドウカ…

「む、待て。」

「いかがなされたコロール殿。」

「コレを見ろ。」

「これは・・・足跡ですか？ 鉱山にも彼らは出入りしてるみたいですし珍しいものでもないのでは？」

「いや、他の足跡を比べてみる。靴の形は似たようなものだが、この足跡だけ靴底の様相がまるで違う。」

「はあ・・・言われてみれば・・・？」

「しかもこの足跡、まだだいぶ新しい。数時間どころか10分と経ってないだろう。ピコー、この鉱山は閉鎖中なんだったな？」

「はい。住民もまだ鉱山内に着手する余裕はなく様子見で少し入った程度だと言っていました。」

「ならばなぜこんな新しい足跡が鉱山の入り口にある？ 他の足跡は角が崩れてるところから見て数時間から数日は経っているというのに。」

「言われてみれば・・・。」

「どうやら先客がいるらしいな・・・。こんな魔物だらけのろくな産物もない鉱山に入るのは悪党かもしくは・・・。」

「もしくは・・・？」

「襲撃者だけだ。」

ターゲットが坑道内に入ってきた。気のせいかな先程よりも用心しながら入ってきている。もしや侵入したのがバレたのだろうか。しかしすでにお互い坑道内にいる以上それ相応の準備をして待ち構える他あるまい。

坑道内の構造は先の砲撃によって全くと言っていいほどに変わってしまったている。おかげで色々攪乱作戦などもやりやすくなっている。私はモンスターが多い場所へ誘導するためにあちらこちらで石を投げて誘導を試みる。

調査団は動きはかなりぎこちないもののその誘導に乗って動いている……。おや？ ターゲットの姿が見えない……。つと、かなり後方に別の一段と一緒にいるのが確認できた。だいぶ用心深い性格のようだ。

それでも調査は行わなければならないため、先行部隊が安全を確認してからターゲットの本隊が動く形式のようだった。モンスターも時折襲撃しにかかるが殆どろくにダ

メッセージを与えられずに撃破されてしまっている。なかなか手ごわい相手だ。まあこの坑道内のモンスターが弱すぎるだけかもしれないが。

私は作戦を変更して持参した電子励起爆薬を使って坑道を崩落させるプランで行くことにした。この坑道は縦横無尽に入り組んでおり、通路が立体交差状態になっているところも珍しくない。調査団一行は端からすべての通路に入っては調べてを繰り返し、数ある袋小路の一つに入ったところで起爆、調査団ごと生き埋めにする算段だ。私はこれから調査するであろう袋小路の天井の裏側にあたる坑道へ向かった。

「ふむ・・・なるほどな。」

「コロール殿、なにか?」

「襲撃者は我々を分断もしくは散り散りにさせようとしているようだ。」

「それは本当ですか?!」

「ああ。先程から謎の物音がしていただろう。君たちはモンスターの出した音だと思っ

ているようだが、モンスターならもつと派手な音がするものだ。奴らにあそこまで繊細な音の誘導はできない。」

「ならばあの音は襲撃者が出したものだと?」

「そうだ。そしてその音がぱつたりとやんだ。それはどういうことかわかるか? 相手は作戦を切り替えたということにほかならないのだ。」

「切り替えた・・・次はどのような手で来るつもりでしょうか?」

「我々は通路を片つ端から調べて回っている。襲撃者は我々に危害を加えたいのだろう。しかし面と向かつては相手にならない。ならば通路の先で待ち伏せても退路が断たれるだけでなんの意味もない。」

「では・・・?」

「私なら・・・ふむ・・・なるほど。こつちだな。」

「あ、コロール殿、どちらへ?」

「裏をかいてやるのさ。」

少し奥まったところに来ると、周りのモンスターの様相がガラリと変わった。以前来たときとは違うモンスターが巢食っているのだ。中には岩系と思われる頑強そうなモンスターまで居る。一瞬目があつたときは冷や汗が出たがモンスターの方は何食わぬ様子で移動していった。アレはシルバーボーラーでは太刀打ちできそうにないな。

ともかく、相手が風潰しに通路を調べているとすると、いずれこの真下にある通路に来るはずだ。先回りして地面、相手からは天井に当たる場所に爆薬をセットしていく。周りのモンスターにも気が付かれないよう慎重に物音を立てないように設置していく……。

「ふふふ。まさか私が開発した新魔法がこんなところで役立つとはな。」

「素晴らしいものですね。襲撃者はおろかモンスターすらこちらに気がついていません。」

「トヘロスの魔法を改良して我々が出す音を無音にする魔法だ。名前はまだないが実証試験できたので城に戻ったらゆつくりと名前を考えることにしよう。」

「閣下。襲撃者の真横と予想される地点まであと少しです。」

「一応慎重に掘るんだ。いくら音がないからと言って姿が消えているわけではないことに留意しろ。」

「はっ。」

「どうするおつもりですか？コロル殿。」

「真横に穴を開けてやり、気がついていない襲撃者を後ろから強襲する。」

「なるほど。その意味ではこの魔法はうってつけですな！」

「ああ。予定ではあと数メートルも掘れば襲撃者のすぐ後ろに穴がつかなくなるはずだ……。」

「閣下、壁の向こうからなにか音がしています。」

「よし。クツクツク……さあ、まずは顔を拝ませてもらおうか……。」

ガッ

「ん？何だ？この岩は。やたら硬いな……。ふん！」

ガリツ
グルン

「あ。」

メ

「な、何だこれは……」

ガ

「も、もしかしてそれは・・・」

ン

「さ、下がれ早く！こいつは・・・」

テ！

私は設置途中だった爆薬をひつつかみ、全速力で前に走った。後ろがどんどん崩れていく。さながらインディアナ・ジョーンズのような。行く先も余波でどんどん崩れていつている。私は巻き込まれる寸前ところで通路から這い出て、広い比較的頑強な坑道へ逃れることができた。一体何だったんだ……。

~~~~~

『……47? ターゲットの生命反応が消えたわ。もしかして今の爆発と落盤に巻き込まれたのかしら? ……と、とにかくミッションは達成よ。帰還して頂戴。』

~~~~~

私はまだ崩れる可能性のあつた坑道を出た。遅れること数分後、調査団の一部が同じく坑道から這い出てきた。私は近くの建物の影に隠れた。物が少ない為隠れるのには十分とは言えないが、相手はかなり混乱しているようでこちらに気がついてはいない。

私は気が付かれる前に町を出てランディングポイントへ向かった。

~~~~~6時間後~~~~~  
~~~~~

『おかえりなさい。47。』

「ああ。」

『今回はまあ・・・その・・・良かったわね?』

「私は何もしていない。」

『結果的には暗殺は成功。電子励起爆薬も使わずに済み、あなたも落盤に巻き込まれずに済んだのだから。万々歳よ。』

「ううむ・・・。」

『・・・まあ納得はできないでしょうけれどね。』

「あの時一体何があったんだ?」

『簡易事後調査の結果、ターゲットのコロルがあなたの裏をかい側面から強襲するつ

もりだったようよ。でも穴をほっている最中に運悪くモンスターに出くわしてしまつたみたいね。それもその状況下で考えうる限り最悪のモンスターに。』

「何が居たんだ？」

『爆弾岩。そうよばれる岩のモンスターよ。あなたも一度目にしたはずよ？』

「あの目があつた岩か。」

『そう。彼はこちらから攻撃したりしなければ不気味に微笑むだけで何もしてくることはないのだけれど、攻撃すればたちまちその身を爆発物として炸裂させるわ。』

「なんとも恐ろしい岩だ。ダイナマイトが動いているようなものか。」

『どちらかと言うとニトログリセリンね。少しの刺激を与えても爆発する可能性があるみたいだから。しかもその威力は同質量のダイナマイトよりも高いわ。威力はそのまま半分ほどの大きさなら電子励起爆薬にも匹敵するレベルよ。』

「危険物極まりないな。」

『ドローンたちが坑道の復旧に時間がかかっているのもあのモンスターのせいらしいわ。あなたも見たでしょう、あの入り組んだ坑道を。』

「アレは先のアツテムト砲撃の際にできたものではないのか？」

『それもあつた。けれど半分以上はあのモンスターの駆除に失敗した結果よ。今の所3000体以上のドローンがアレで木っ端微塵にされているわ。』

HITMAN 2 『不幸な研究者』

「…クシユン！流石に冷えるわね・・・」

「仕方あるまい。気温は氷点下だ。」

「ほんとにこんなところで水上機の実験なんかやるのかしら？湖なんか凍りかけてるけど。」

「もしかしたら水上と氷上両用なのかもしれないね。」

私とブルーとシルバーは揃って湖畔の砂浜と森林地帯の境目を歩いている。情報ではさらに北に向かえば実験中の機体とターゲットの集団が見えるはずだ。

さきほどブルーも言ったように湖の氷は凍り始めており、水の部分と氷の部分が入り混じっている。普通なら水上機は離着陸するのは不可能だ。そのあたりを克服しようという試みなのだろう。

この水辺はルイベンスク市街地が直ぐ側にありながら、高い木々の森に囲まれているため、まだ人工衛星やドローンなどもろくにないこの時代では格好の秘密実験場と言え

る。

その代わり実験場へ向かうあぜ道は確認しただけでも目立つところに検問所を設置して5人。更に隠れて4人が道沿いを監視しており、変装しての突破も困難を極めると判断したため、私たちは湖畔沿いを草木に隠れつつ進むことになっている。

「あとののくらいかしら?」

「情報部が設置した簡易衛星による位置情報だとあと3kmくらいかな。」

「3kmかあ・・・結構まだあるわねえ・・・隠れながらだから速度かなり遅いし。」

「だがもう立ち入り禁止区域ではある。周囲に気を配れ。」

「はい。」

「了解。」

今回新しく導入された「簡易衛星」は一応役には立ちそうだ。これは人工衛星を打ち上げる技術やそれに付随する科学力がない世界において、本格的な情報収集衛星を設置する前の比較的短期間のいわゆる使い捨て目的の衛星とのことだ。

能力としては各種スキャンはできないが半径500km圏内に専用GPS装置への位置座標送信と、同じ範囲の衛星写真を撮影できる。稼働可能時間は48時間程度と短

い。その代わり20ftコンテナ一つに収まる簡易的なレールガンシステムで射出するだけで打ち上げることができ、価格も1機あたり1万ドルかからないらしい。

私たちはやがて現れた海岸にせり出した岩場の向こう側を覗き込む。するとそこには何人かの人ばかりと、試作機と思われる湖面上に浮かぶジェット機が見えた。

「見えたわね。シルバー。」

「わかつてる。さあて……。」

シルバーが取り出した双眼鏡で集団を確認する。……ん？今一瞬だが左の森の中が光ったような気がする。自前で持つている双眼鏡でそちらを確認してみるが、鬱蒼と茂った森があるだけで光学的にも熱源的にも異常は見られなかった。

「ちよつと47、そつちは森よ？なにか見えた？」

「いや、気の所為だ。」

この時代の迷彩技術では我々のサーモグラフィーは騙すことは出来ないと思われる。やはり気の所為だったようだ。

そうこうしているうちに人だかりの集団は内陸の方へ移動を開始してしまった。

「見つけた。あれがターゲットだと思っただけだけど……ちよつと周りに人が多すぎるね。」
「まあ見つけられただけでも良しとしましょう。じゃあ行くわよ。」

ブルーは森の中へ入っていく。私とシルバーもその後続く形で森に入った。森の中を進み、ジリジリとターゲットとの間合いを詰めていくことにする。

ヒヒーン

今の鳴き声は……

「……ねえ47。この森って野生の馬が居るの？」

「いやそんな情報はない。そもそも馬はこんな鬱蒼とした森には住まない。」

「でも今の鳴き声。明らかに馬の鳴き声だったよ。それもおそらくサラブレッド系だ。」
「シルバー、鳴き声でわかるの？」

「うん。選択訓練過程に含まれていたからね。この前時間が空いたから履修したんだ。」
「へえ……勉強熱心ねえ……。」

シルバーの日々の成長はさておき、ソ連の寒冷地の森にサラブレッドが居るのは明らかにおかしい。となれば誰かの飼った馬である可能性が非常に高く、即ち近くに人がいる可能性が高いということだ。

「警戒態勢だ。」

「了解。」

私たちは慎重に前に進んでいくことにする。幸いにして今回のターゲットの予定では明日の昼ごろまでここにどどまるらしいので時間はある。

ターゲットの居ると思われる地点まで残り1kmと切ったと思われたその時だった。

パカパカパカパカ

ババツ

「うおー！」

「え?!」

「な!？」

私と2人の間をすり抜けるようにして茂みの中から突如として白馬が走り込んできた。私は咄嗟に前方へ飛び回避した。ブルー達も後方へ飛び退いたようだ。

馬はそのままブルー達を牽制するかのようには間に立ちふさがった。視線を少し上にずらすと、鞍がかけられている。しかし騎乗者はどこに、と確認しようとしたその瞬間だった。

「ハッー」

ドガッ

「うぐっ!？」

またも突然上から人が降ってきて、両肩を足蹴にされた。その反動でバランスを崩しかけるが、すぐさま後ろを向き体制を立て直す。そのまま格闘戦へ移行した。

相手は白い服を着た女性であり、かなりの格闘戦の使い手だと思われるこちらの放つ拳はことごとく往なされるか受け止められ、逆にこちらは放った拳を軸に放り投げられてしまった。

ドサツ

「ぐっ……」

「47!」

「まずい! 行け! ドサイドン!」

「ニドちゃん、あなたもお願い!」

私は投げられた反動で意識が一瞬朦朧とした。それを見て2人は馬を避けるようにポケモンを咄嗟に繰り出した。

「ふむ……ハッ!」

「ニドちゃん、メガトンパン……え?! 嘘!」

その女性は目にも留まらぬ速さでブルーのニドクインの懐に飛び込むと、膝、脇腹に的確に打撃を与え、一瞬怯み頭をもたげたニドクインの首筋に打撃を与え、一瞬でニドクインを気絶させてしまった。

「クソ! ドサイドン! はかいこうせん!」

キユイイインドゴオオン!

シルバーのドサイドンが咄嗟に破壊光線を放つ。地面に向けてなのでニドクインは無事だが、驚くべきことに謎の女性はその破壊光線を避けきりドサイドンに猛チャージを仕掛けた。

ニドクインのときと同じように腹部や脇腹に打撃を与えるも、ドサイドンはニドクインに比べて外皮が硬いのかあまり有効打とはならず、振り払うようにドサイドンがパンチを繰り出している。

ようやく私の意識もはつきりしてきた。私はすぐさまシルバーボラーを構え、女性に向けて発砲：：する寸前のところで女性が片手間のように投げた石によってシルバーボラーが弾き飛ばされてしまった。

「硬いな・・・ならば。」

「え？」

女性はドサイドンを足場にまたもや跳躍を行うと、シルバーの真正面に降り立ち、そのまま目にも留まらぬ速さでボディブローを与えた。シルバーは一瞬で意識を刈り取られてしまった。

女性はシルバーの腰につけていたモンスターボールの一つを取ると、中央のボタンを

押した。

バシユウウウン：

ドサイドンはあつけにとられている間にモンスターボールの中に戻されてしまった。まずい。戦力が各個撃破されていってしまっている。

謎の女性がニドクインに駆け寄っていたブルーに向かってとどめを刺しに行こうとしたその時、

「はあっー！」

「ふっー！」 エアハンマー

ドオオン！

「なんか大変そうね。47。」

「助太刀。」

どこからともなくキュラソーとタバサが駆けつけてくれた。この状況を見て本部が緊急で派遣したのだらう。形勢逆転だ。ブルーはすぐさまニドクインをボールへ戻し、シルバーのそばに駆けつけた。目を覚まさせようと顔面をひっぱたいている。

私、キュラソー、タバサで謎の女性を取り囲んだ。おそらく事前情報にあった「凄腕の護衛」というやつだろう。だが三方向を囲んでしまえば格闘戦が主な女性では太刀打ちできるはずもない。

本来なら何者か聞くとところだが、今回の場合はあまり時間をかけてはいけないう。先程の破壊光線の爆音はターゲットのところまで響いている可能性が非常に高く、被害がなかったとしても予定を切り上げてこの場を離脱して雲隠れされる可能性すらある。そうなれば非常に面倒なことになるだろう。しかし必要のない殺人は後々の処理の問題があるのでここは眠らせるに限る。

その時、謎の女性が頭を少しだけ上下に動かした。何かの合図だろうか。私は急いでタバサに指令を出す。

「眠らせろ。タバサ。」

「了解。」

タバサがスリープクラウドを唱えようと杖を掲げたその瞬間、

ダアーン！

バチン！

「うっ！」

「狙撃?!」

タバサの杖が狙撃によって発射された弾丸によって弾き飛ばされてしまった。杖がなければハルケギニアの魔法使いは一般人と大差ない。

「東だ！全員、近くの物陰に隠れろ！」

私は急いで指示を出し、全員が岩や木の影に隠れた。木の陰からサーマルで調べても狙撃手などどこにも見当たらない。まさかこの時代に我々ICAのサーマル技術を完璧にかいくぐる程のカモフラージュができる人間が居るといふのか。

我々が隠れたのを確認すると、謎の女性が初めて口を開いた。

「お前が何者かは知らないが好きにはしません。去れ。命までは取らない。」

「何？」

「私は上から護衛を命じられただけだ。必要のない殺しはしない。」

「まるでこっちの目的を知っているかのような口ぶりだな？」

「お前たちのような人間がこの場にいるという事実だけで、何をしに来たのかはおおよそ見当がついている。」

「ふむ……。」

「……。」スツ

ヒュン

ドス！

「！」

「無駄だ。我が部隊の配備は完了している。」

女性の死角からタバサが念のためと持っていた小型拳銃に手を伸ばそうとした時、森の中から音もなく発射されたボウガンのボルトが、タバサの手の近くの木に刺さった。

「……ふっ！」

バシユウウウ！ボオオオオオオ！

「くっ！」

「もう一度いう。去れ。お前たちの組織とやり合うつもりもない。」

「わかった。作戦を中止する。私たちは速やかに撤退するが、追撃はしなくてもいいのだが。」

「良いだろう。追撃はもとより任務に入ってはいない。」

「・・・全員、撤退だ。」

「・・・わかったわ。」

「了解・・・。」

「シルバーはまだ起きないからおぶっていくわ。」

私たちは名も知らぬ精鋭部隊の視線を受けつつ撤退した。

~~~~~30分後~~~~~  
~~~~~

「やはり先程のは襲撃だったのか！」

「そうだ。だが我が部隊が撃退した。問題はない。相手方の組織の上層部にも直接働きかけた。もう襲撃はない。」

「しかし狙われていることがはつきりした今、やはりこのままここで実験をする訳にはいかない！襲撃を受けるということは情報が漏れていることが確定している！他の組織が来る可能性がある以上実験は中止だ！」

「……我々の任務は、この演習中のセミヨーノフ局長の護衛だ。演習を中止するとこののであれば、我々も撤退することになる。」

「むう……だがいつ何時襲われるかの恐怖は図りしれず、まともに実験もできやしない。やはりここは一旦体制を立て直すに限る。」

「そうか。」

「私は一旦モスクワに戻る。名前を変えてほとぼりが冷めるまで地下に潜るつもりだ。無論、研究はその間も続けていく。君たちさえ良ければ、このまま護衛を継続してほしいのだが。」

「それは任務の範疇から逸脱する。クレムリンと掛け合うことだな。」

「そうか・・・わかった。では私は行くよ。そうだ、"カミルズ" という名前から依頼があつたら受けてくれると嬉しいよ。私の渾名のようなものでね。当分はその名前を使う予定なんだ。」

「良かったのですか。ボス。」

「フィアー。奴は腰抜けではあるが護衛対象には変わらない。だがそれもチャーター機で飛び立った今となつてはその任務も終了だ。それに我々の真の目標も達せられていく。」

「"セミヨーノフの技術の奪取" ですか。そちらはザ・ペインが滞りなく回収しています。」

「よし。我々も撤退するぞ。ジ・エンドはどうした?」

「ここにおるよ。この森との会話は退屈することがないが、気になることもある。」

「気になること?」

「先程から森がざわめいておる・・・。」

キイイーン! バシユウウウン!

「な!?!」

「奴の乗った飛行機が・・・消えた?」

「ふむ・・・このことじゃったか・・・。」

「・・・ともかく我々も撤退するぞ。国境までの車をチャーターしろ。」

~~~~~  
ミッシェンデイフェクティブ~~~~~  
~~~~~

・「蜃気楼」

【+1000】『ターゲットを1km以上離れたところから確認する。』

・「母の慈愛」

【+1000】『ザ・ボスに発見された状態で撤退する。』